新潟県埋蔵文化財調査報告書　第193集

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXIX

谷地遺跡
八太郎遺跡
田屋道遺跡Ⅱ
宮の越遺跡Ⅱ

２０１０

新潟県教育委員会

財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXIX

谷地遺跡
八太郎遺跡
田屋道遺跡Ⅱ
宮の越遺跡Ⅱ

２０１０

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

日本海沿岸東北自動車道は、新潟市の新潟空港インターチェンジから日本海に沿って北上し、青森県に至る高規格幹線道路です。新潟県内では平成 21 年に村上市の荒川胎内インターチェンジまでが完成しています。

高速自動車道建設を取り巻く状況は厳しいものがありますが、平成 15 年末の国土開発幹線自動車道建設会議において、日本海沿岸東北自動車道の中条－朝日間は旧日本道路公団が有料道路として建設することとなりました。その後、公団の民営化により、平成 17 年 10 月に設立された東日本高速道路株式会社に引き継がれましたが、平成 18 年２月の国土開発幹線自動車道建設会議において、荒川－朝日間については国土交通省が新直轄道路として建設することになりました。

日本海沿岸東北自動車道は、地域内外の経済的な交流・連携を促すだけでなく、救急患者の搬送・災害時の緊急輸送等の「命の高速道」としての役割も期待されており、早期の開通が望まれます。

本書は、この日本海沿岸東北自動車道建設に先立って発掘調査を実施した「谷地遺跡」「八太郎遺跡」「田屋道遺跡」「宮の越遺跡」の報告書です。調査によって、谷地遺跡は縄文時代（前期）と、中世（14 ～ 15 世紀）の遺跡であることが分かりました。縄文時代の層からは土器や屋外の炉が多く見つかり、県内でも調査事例の少ないこの時期の様子を知る上で貴重な資料です。

八太郎遺跡では 13 世紀ころの水場遺構が見つかり、その中から祭祀に使用したと考えられる木製品が出土しました。田屋道遺跡と宮の越遺跡は平成 18 年度から調査を行い、田屋道遺跡では 12 世紀から 14 世紀ころの周囲を溝で囲んだ村落を確認し、宮の越遺跡では平安時代の須恵器や土師器が出土しました。

今回の発掘調査成果が、考古学研究者はもとより、地域の歴史を知り、学ぼうとする多くの方々に活用されることを願っております。

最後に、地元の方々や区長並びに村上市教育委員会には多大なご協力とご援助をいただきました。また、国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所並びに、羽越河川国道事務所、東日本高速道路株式会社新潟管理局村上工事事務所、荒川沿岸土地改良区、三面川沿岸土地改良区には、調査に際して格別のご配慮をいただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。

平成 22 年３月

新潟県教育委員会

教育長　武　藤　克　己

例　言

1　本書は、新潟県村上市天神岡字谷地ほかに所在する谷地遺跡、同じく村上市上助淵字八太郎 640 ほかに所在する八太郎遺跡、同じく村上市九日市字堂田 1459 ほかに所在する田屋道遺跡、同じく村上市新飯田字宮ノ越 14 ほかに所在する宮の越遺跡の発掘調査記録である。

2　この調査は日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所並びに羽越河川国道事務所から新潟県教育委員会（以下、「県教委」とする）が受託したものである。

3　発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」とする）に委託し、埋文事業団の指導・監督のもと株式会社シン技術コンサルが平成 19・20 年度に行った。発掘調査面積は延べ 9,738 ㎡である。

4　整理及び報告書作成に係る作業は、埋文事業団の指導のもと、株式会社シン技術コンサルが行った。

5　出土遺物及び記録類は、県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管している。遺物の註記記号は、遺跡名の前に調査年度を付し、谷地遺跡は「07 ヤチ」、八太郎遺跡は「07 八タロ」、田屋道遺跡は「07 タヤミ」・「08 タヤミ」、宮の越遺跡は「07 ミヤノ」とした。また出土地点・遺構名及び出土層位などを併記した。

6　発掘調査及び整理作業並びに報告書作成は、鈴木俊成（埋文事業団調査課課長代理）と木村雄司（同主任調査員）の指導・監督のもとに行った。

7　遺物のドット番号は包含層・各遺構でそれぞれ通し番号を付した。

8　本書で示す方位はすべて真北である。ただし、ここで言う「真北」は日本公共座標の X 軸方向を示す。なお、掲載した地図のうち、既成のものはその出典を記した。

9　引用・参考文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に掲載した。「第Ⅲ章４A 谷地遺跡（縄文時代）古環境と年代」・「第Ⅲ章６D 谷地遺跡（中世） 自然科学分析」・「第Ⅳ章４ 八太郎遺跡 自然科学分析」・「第Ⅴ章４ 田屋道遺跡Ⅱ 自然科学分析」・「第Ⅵ章４ 宮の越遺跡Ⅱ 自然科学分析」については、引用文献を第Ⅲ章４A 末にまとめて掲載した。また、「第Ⅲ章４B」と「第Ⅲ章４C」は文末に掲載した。

10　自然科学分析は、以下の機関に委託した。

谷地遺跡　屋外炉の考古地磁気分析……富山大学理工学研究部

谷地遺跡　地質解析……新潟大学災害復興科学センター

石質の鑑定……有限会社 考古石材研究所

そのほかの自然科学分析……パリノ・サーヴェイ株式会社

11　縄文土器については谷藤保彦（財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団）、齊藤　準（株式会社 帆苅組）、中・近世の陶磁器については水澤幸一（胎内市教育委員会）の各氏にご教示をいただいた。

12　本書の執筆は鈴木俊成（埋文事業団）、大島秀俊・藤田亮一・高階敏昭・北村　淳・伊比博和（株式会社シン技術コンサル）、酒井英男・菅頭明日香（富山大学理工学研究部）・秋山真好（株式会社 ノガミ）、高濱信行（新潟大学災害復興センター）、千葉博俊・伊藤良永・斉藤崇人・馬場健司・松元美由紀・高橋　敦・辻本裕也（パリノ・サーヴェイ株式会社）がこれにあたり、編集は鈴木の指導のもと北村が行った。本書の執筆分担は、自然科学分析を除き、以下のとおりである。

第Ⅰ章１…鈴木　第Ⅰ章２、第Ⅱ章、第Ⅲ章１・２・３B・５B・５C・５D、第Ⅵ章１・２・３・５…大島　第Ⅲ章３A・５A、第Ⅳ章１・２・３・５…伊比　第Ⅲ章６A・６B・６C・６E…高階　第Ⅴ章１・２・５…北村　第Ⅴ章３…藤田

13　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多くのご教示とご協力をいただいた。記して厚く御礼を申し上げる。（五十音順、敬称略）

甘粕　健　　小熊　博史　　金子　拓男　　小林　達雄　　関　雅之　　髙野　裕子　　高橋　與右衛門

田中　一穂　　田中　耕作　　田辺　早苗　　立木　宏明　　富樫　秀之　　長谷川　伸　　前山　精明

宮尾　亨

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調 査 経 過 …… 4

A　試掘確認調査 …… 4

1）谷 地 遺 跡 …… 4

2）八太郎遺跡 …… 5

3）田屋道遺跡 …… 5

4）宮の越遺跡 …… 7

B　本発掘調査 …… 7

1）谷 地 遺 跡 …… 7

2）八太郎遺跡 …… 9

3）田屋道遺跡Ⅱ …… 9

4）宮の越遺跡Ⅱ …… 10

C　調査・整理体制 …… 11

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 14

1　地理的環境 …… 14

2　歴史的環境 …… 14

A　新潟県における縄文時代前期初頭から中葉の遺跡 …… 14

B　中世の歴史的環境 …… 16

C　谷地遺跡中世集落と大館跡 …… 18

第Ⅲ章　谷 地 遺 跡 …… 19

1　遺跡の概要 …… 19

A　概　　観 …… 19

B　グリッドの設定 …… 19

C　発掘調査の方法 …… 20

1）縄 文 時 代 …… 20

2）中　　世 …… 20

D　層　　序 …… 21

1）概　　要 …… 21

2）基 本 層 序 …… 21

E　記述の方法 …… 24

1）方　　針 …… 24

2）遺 構 番 号 …… 24

3）遺構の分類 …… 24

4）図　　版 …… 24

5）観 察 表 …… 25

2　遺 構 各 説（縄文時代） …… 26

A　概　　要 …… 26

B　南側調査区の遺構 …… 30

1） 土　　坑 …… 30
2） 性格不明遺構 …… 31
3） 遺 物 集 中 …… 32
4） ピ　ッ　ト …… 32
C　北側調査区の遺構 …… 33
1） 屋　外　炉 …… 33
a） Ⅷa 層の屋外炉…… 33　b） Ⅷb 層の屋外炉 …… 37　c） Ⅷb2 層の屋外炉…… 40
2） 土　　坑 …… 41
a） Ⅷa 層の土坑…… 42　b） Ⅷb 層の土坑 …… 44　c） Ⅷb2 層の土坑…… 49
3） 性格不明遺構 …… 50
4） 遺 物 集 中 …… 51
5） ピ　ッ　ト …… 51
a） Ⅷa 層のピット…… 51　b） Ⅷb 層のピット …… 51　c） Ⅷb2 層のピット…… 51
6） 旧　河　川 …… 51

3　遺 物 各 説（縄文時代） …… 52
A　土　　器 …… 52
1） 概要と記述の方法 …… 52
a） 観察表の記載…… 52
2） 分　　類 …… 53
a） 器種・器形分類…… 53　b） 文様の分類 …… 54
3） 南側調査区Ⅷ層出土の土器…… 56
4） 北側調査区出土の土器 …… 58
a） Ⅷa 層出土の土器… 58　b） Ⅷb 層出土の土器 … 59　c） Ⅷb2 層出土の土器…… 63
B　石　　器 …… 63
1） 概要と記述の方法 …… 63
a） 観　察　表…… 65　b） 分　　類 …… 66
2） 南側調査区の石器 …… 67
3） 北側調査区の石器 …… 68
a） Ⅷa 層関連の石器…… 68　b） Ⅷb・Ⅷb2 層関連の石器 …… 68

4　自然科学分析（縄文時代） …… 70
A　古環境と年代 …… 70
1） 分析目的と試料 …… 70
a） 古 環 境 …… 70　b） 遺構・遺物の年代 … 70　c） 遺構の用途・形態 …… 70
2） 分 析 方 法 …… 71
a） 放射性炭素年代測定…… 71　b） 珪 藻 分 析 …… 71
c） 花 粉 分 析…… 72　d） 植物珪酸体分析 …… 72
e） 灰 像 分 析…… 72　f） 種実・微細植物片分析 …… 73
g） 樹 種 同 定…… 73　h） 軟Ｘ線写真撮影 …… 73
3） 結果とまとめ …… 73
a） 放射性炭素年代測定…… 73　b） 珪 藻 分 析 …… 74
c） 花 粉 分 析…… 74　d） 植物珪酸体分析 …… 75
e） 灰 像 分 析…… 75　f） 種実・微細植物片分析 …… 77
g） 樹 種 同 定…… 77　h） 軟Ｘ線写真撮影 …… 78
B　谷地遺跡の屋外炉の考古地磁気分析 …… 84
1） は じ め に …… 84
2） 遺構の概要と試料採取 …… 84
3） 考古地磁気の研究 …… 85
4） 実 験 方 法 …… 85
a） 残留磁化と交流消磁実験…… 85

b) ザイダーベルト図法による消磁結果の解析…… 86
c) 熱消磁による熱履歴及びテリエ法実験…… 86
5) 実験結果と考察 …… 86
a) 残留磁化の方向…… 86　b) 加熱を受けた温度及び地磁気強度 … 88
6) ま と め …… 89
C 谷地遺跡の地質解析…… 91
1) 地質学的検討課題 …… 91
2) 調査・検討結果 …… 91
a) 遺跡成立前…… 91　b) 遺跡成立時 …… 92　c) 遺跡廃絶後 …… 92
3) 古地震による液状化 …… 92
a) 遺跡成立時前後…… 92　b) 遺跡廃絶後 …… 92

5 ま と め（縄文時代）…… 94
A 縄文時代前期初頭から中葉の土器について …… 94
1) 北側調査区遺構出土の土器について …… 94
2) 南側調査区出土の土器について …… 98
3) 谷地遺跡出土土器の変遷と他遺跡との比較…… 98
B 屋外炉について …… 106
C 北側調査区の検討…… 107
D 南側調査区の検討…… 112

6 中　　世…… 115
A 層　　序 …… 115
1) 概　　要 …… 115
2) 基本層序 …… 115
B 遺構各説 …… 115
1) 概　　要 …… 115
2) 掘立柱建物 …… 116
3) 井　　戸 …… 117
4) 土　　坑 …… 118
5) 溝 …… 120
6) ピ ッ ト …… 121
C 遺　　物 …… 122
1) 概　　要 …… 122
2) 各　　説 …… 122
a) 分類と記述の方法…122　b) 土器・陶磁器類 ……122　c) 金属製品 ……123
d) 石 製 品……123　e) 木 製 品 ……123
D 自然科学分析 …… 126
1) 分析目的と試料 …… 126
2) 結　　果 …… 126
a) 花粉分析……126　b) 植物珪酸体分析 ……127　c) 微細植物片分析 ……127
d) 樹種同定……127
3) ま と め …… 128
a) 古植生 ……128　b) 植物利用 ……128
E ま と め …… 130
1) 谷地遺跡の中世集落の様相と大館跡との関係…… 130
2) 遺　　物 …… 133

第Ⅳ章　八太郎遺跡 …… 135
1　遺跡の概要 …… 135
A　概　　観 …… 135
B　グリッドの設定 …… 135
C　発掘調査の方法 …… 136
D　層　　序 …… 137
1）概　　要 …… 137
2）基本層序 …… 137
2　遺構各説 …… 137
A　遺構の概要 …… 137
B　水場遺構 …… 137
C　杭 …… 141
D　ピット …… 142
E　自然流路 …… 142
3　遺　　物 …… 143
A　概　　要 …… 143
B　各　　説 …… 143
1）分類と記述の方法 …… 143
2）土器・陶磁器類 …… 143
3）石製品 …… 144
4）木製品 …… 144
5）銭　　貨 …… 146
4　自然科学分析 …… 147
A　分析目的と試料 …… 147
B　八太郎遺跡の水場遺構と周辺環境について …… 147
1）結果とまとめ …… 147
a）放射性炭素年代測定 …… 147
b）珪藻分析 …… 147
c）花粉分析 …… 149
d）植物珪酸体分析 …… 150
e）種実遺体分析 …… 151
f）周辺の環境 …… 151
g）植物利用 …… 152
h）木製品 …… 152
5　ま　と　め …… 154
第Ⅴ章　田屋道遺跡Ⅱ …… 158
1　遺跡の概要 …… 158
A　概　　観 …… 158
B　グリッドの設定 …… 158
C　発掘調査の方法 …… 159
D　層　　序 …… 159
1）概　　要 …… 159
2）基本層序 …… 159
3）田屋道遺跡におけるⅤ層（黒色土層）の年代と環境 …… 161
2　遺　　構 …… 161
A　記述の方法 …… 161
B　遺構の分類 …… 162
1）堆積状況の分類 …… 162

C　遺構各説 …… 162
1）概　　要 …… 162
2）掘立柱建物 …… 162
3）ピット列 …… 163
4）井　　戸 …… 164
5）土　　坑 …… 164
6）溝 …… 166
7）性格不明遺構 …… 170
8）ピ　ッ　ト …… 171
9）杭 …… 172

3　遺　　物 …… 172
A　概　　要 …… 172
B　各　　説 …… 172
1）分類と記述の方法 …… 172
2）土器・陶磁器 …… 173
3）木　製　品 …… 174
4）円礫・焼礫 …… 176

4　自然科学分析 …… 177
A　分析目的と試料 …… 177
B　田屋道遺跡・窪田遺跡・宮の越遺跡の土層分析について …… 177
1）結果とまとめ …… 177
a）放射性炭素年代測定 …… 177　b）花粉分析 …… 178
c）植物珪酸体分析 …… 179　d）微粒炭量 …… 179
C　遺構及び遺物の分析 …… 179
1）分析方法 …… 179
a）寄生虫卵・花粉分析 …… 179　b）微細物分析 …… 180
2）結果とまとめ …… 180
a）放射性炭素年代測定 …… 180　b）寄生虫卵・花粉分析 …… 181
c）灰像分析 …… 182　d）植物珪酸体分析 …… 182
e）微細物分析 …… 182　f）柱穴・井戸跡埋積物についての検討 … 182
g）樹種同定 …… 184

5　ま　と　め …… 188
A　田屋道遺跡で検出した遺構について …… 188
1）掘立柱建物 …… 188
2）井　　戸 …… 192
3）溝 …… 194
B　田屋道遺跡における中世集落の概要 …… 194

第VI章　宮の越遺跡 II …… 197

1　遺跡の概要 …… 197
A　概　　観 …… 197
B　グリッドの設定 …… 197
C　発掘調査の方法 …… 198
D　層　　序 …… 198
1）基本層序 …… 198

2　遺構各説 …… 199

A　概　　要 …… 199
B　杭 …… 199

3　遺　　物 …… 200
A　概要と記述の方法 …… 200
B　各　　説 …… 200
1）須　恵　器 …… 200
2）土　師　器 …… 201
3）被　熱　礫 …… 201
4）木　製　品 …… 201

4　自然科学分析 …… 202
A　分析目的と試料 …… 202
B　結果とまとめ …… 202

5　ま　と　め …… 203

《要　　約》 …… 206

《引用・参考文献》 …… 208

《観　察　表》 …… 213
谷地遺跡（縄文時代）遺構観察表 …… 213
谷地遺跡（縄文時代）遺物観察表 …… 219
谷地遺跡（中世）遺構観察表 …… 227
谷地遺跡（中世）遺物観察表 …… 229
八太郎遺跡遺構観察表 …… 230
八太郎遺跡遺物観察表 …… 230
田屋道遺跡Ⅱ遺構観察表 …… 233
田屋道遺跡Ⅱ遺物観察表 …… 240
宮の越遺跡Ⅱ遺構観察表 …… 242
宮の越遺跡Ⅱ遺物観察表 …… 242

挿図目次

第 1 図　日本海沿岸東北自動車道の路線と調査遺跡の位置 …… 2
第 2 図　谷地遺跡・八太郎遺跡の調査位置 …… 3
第 3 図　田屋道遺跡・宮の越遺跡の調査位置 …… 4
第 4 図　谷地遺跡試掘確認調査のトレンチ位置と本発掘調査の範囲 …… 5
第 5 図　八太郎遺跡・田屋道遺跡・宮の越遺跡試掘確認調査のトレンチ位置と本発掘調査の範囲 …… 6
第 6 図　新潟県内の縄文時代前期初頭から中葉の主要遺跡 …… 15
第 7 図　周辺遺跡（古代から中世）分布図 …… 17
第 8 図　谷地遺跡グリッド設定図 …… 19
第 9 図　谷地遺跡（縄文時代）基本層序① …… 22
第 10 図　谷地遺跡（縄文時代）基本層序② …… 23
第 11 図　遺構の平面形状の分類 …… 25
第 12 図　遺構の断面形状の分類 …… 25
第 13 図　遺構覆土の堆積状況の分類 …… 25
第 14 図　層位ごとの屋外炉の規模 …… 26
第 15 図　層位ごとの土坑の規模 …… 27
第 16 図　Ⅷｂ層の土坑の長軸方向と位置 …… 28
第 17 図　土坑内遺物出土状況 …… 28
第 18 図　土坑内遺物出土位置図 …… 29
第 19 図　土坑土層堆積状況 …… 29
第 20 図　土層断面及び遺物出土状況図 …… 30
第 21 図　北側調査区Ⅷａ層の遺構全体図 …… 34
第 22 図　北側調査区Ⅷｂ層の遺構全体図 …… 35
第 23 図　北側調査区Ⅷｂ2 層の遺構全体図 …… 36
第 24 図　土器の部位名称 …… 53
第 25 図　器形分類図 …… 53

第 26 図　谷地遺跡の石器組成…… 64
第 27 図　狐森 B 遺跡・山口遺跡の石器組成 …… 64
第 28 図　大角地遺跡・二軒茶屋遺跡の石器組成… 64
第 29 図　磨石類長幅分布図…… 65
第 30 図　剝片石器・礫石器における石質割合…… 65
第 31 図　花粉化石群集の層位分布…… 75
第 32 図　花粉化石…… 75
第 33 図　植物珪酸体含量の層位分布…… 76
第 34 図　植物珪酸体・灰像分析プレパラート内の状況…… 76
第 35 図　種実遺体…… 76
第 36 図　木材・炭化材…… 77
第 37 図　軟 X 線透過写真（F195） …… 78
第 38 図　軟 X 線透過写真（F401） …… 79
第 39 図　試料採取遺構…… 84
第 40 図　遺構と試料採取の様子…… 84
第 41 図　考古地磁気年代推定法…… 85
第 42 図　ザイダーベルト図の概念図…… 86
第 43 図　交流消磁実験の結果例…… 87
第 44 図　F165 の消磁後の磁化・平均の方向とシュミットネット図への投影…… 87
第 45 図　F167・195 の消磁後の磁化・平均方向とシュミットネット図への投影…… 88
第 46 図　熱消磁に伴う磁化方向の変化…… 88
第 47 図　テリエ法実験の結果…… 88
第 48 図　テリエ法で得た地磁気強度と過去 8,000 年間の地磁気強度変化との対比… 89
第 49 図　東壁セクション模式概念断面図…… 91
第 50 図　Ⅷb2 層の遺構出土土器とその分布 …… 94
第 51 図　Ⅷb 層の遺構出土土器とその分布 …… 95
第 52 図　Ⅷa 層の遺構出土土器とその分布 …… 97
第 53 図　出土土器と分布…… 100・101
第 54 図　谷地遺跡における土器の変遷と県内類似資料…… 102・103
第 55 図　窪みを持つ屋外炉の平面形態分類図…… 106
第 56 図　SK446 出土土器（4）被熱状況 …… 107
第 57 図　層位別遺構分布…… 108
第 58 図　土器別遺構分布…… 109
第 59 図　北側調査区出土の石器…… 111
第 60 図　遺構出土石器…… 112
第 61 図　住居の可能性がある性格不明遺構…… 112
第 62 図　谷地遺跡（中世）基本層序…… 116
第 63 図　花粉化石群集…… 126
第 64 図　花粉化石…… 127
第 65 図　植物珪酸体含量…… 127
第 66 図　植物珪酸体・灰像分析プレパラート内の状況…… 127
第 67 図　種実遺体…… 128
第 68 図　木材・炭化材（1） …… 129
第 69 図　木材・炭化材（2） …… 129
第 70 図　木材・炭化材（3） …… 129
第 71 図　屋敷地区画想定図…… 131
第 72 図　八太郎遺跡グリッド設定図…… 135
第 73 図　八太郎遺跡基本層序①…… 138
第 74 図　八太郎遺跡基本層序②…… 139
第 75 図　水場遺構（SX1）構造模式図…… 140
第 76 図　主要珪藻化石群集…… 149
第 77 図　珪藻化石…… 149
第 78 図　花粉化石群集…… 150
第 79 図　花粉化石…… 150
第 80 図　植物珪酸体含量…… 150
第 81 図　植物珪酸体…… 150
第 82 図　種実遺体…… 151
第 83 図　木材…… 153
第 84 図　水場遺構構築状況図…… 155
第 85 図　木組み施設を有する水場遺構の例…… 156
第 86 図　石川県西川島遺跡群白山橋遺跡の祭祀遺物埋納遺構…… 157
第 87 図　田屋道遺跡グリッド設定図…… 158
第 88 図　田屋道遺跡Ⅱ基本層序…… 160
第 89 図　黒色土層の標高…… 161
第 90 図　花粉化石群集…… 178
第 91 図　花粉化石…… 178
第 92 図　植物珪酸体含量…… 179
第 93 図　植物珪酸体…… 179
第 94 図　花粉化石…… 181
第 95 図　花粉化石群集…… 181
第 96 図　植物珪酸体…… 182
第 97 図　植物珪酸体含量…… 182
第 98 図　種実遺体…… 183
第 99 図　木材（1） …… 186
第 100 図　木材（2） …… 186
第 101 図　木材（3） …… 186
第 102 図　木材（4） …… 186
第 103 図　平成 18 年度調査の掘立柱建物グループ模式図…… 188
第 104 図　平成 18 年度調査の掘立柱建物の検討 … 189
第 105 図　区画内部の掘立柱建物の構造…… 190
第 106 図　A・B グループの掘立柱建物の配置 …… 191
第 107 図　C グループの掘立柱建物の配置・掘立柱建物グループ模式図…… 192
第 108 図　柱根・礎盤（板）の暦年較正年代一覧… 192
第 109 図　井戸の覆土の状況…… 193
第 110 図　田屋道遺跡の集落変遷図…… 196
第 111 図　宮の越遺跡グリッド設定図…… 197
第 112 図　宮の越遺跡Ⅱ基本層序…… 199
第 113 図　宮の越遺跡遺物分布図…… 204

表 目 次

第 1 表　周辺の古代から中世の主な遺跡一覧…… 18
第 2 表　土坑長軸方向ごとの平面形数量…… 27
第 3 表　器種別石質数量一覧…… 65
第 4 表　放射性炭素年代測定結果…… 74
第 5 表　暦年較正結果…… 74
第 6 表　珪藻分析結果…… 74
第 7 表　花粉・微粒炭分析結果…… 75
第 8 表　植物珪酸体含量…… 76
第 9 表　種実・微細植物片分析結果…… 76
第 10 表　樹種同定結果…… 77
第 11 表　残留磁化の測定結果…… 87
第 12 表　層位ごとの土坑平面形別数量…… 107
第 13 表　花粉・微粒炭分析結果…… 126
第 14 表　植物珪酸体含量…… 127
第 15 表　微細植物片分析結果…… 128
第 16 表　樹種同定結果…… 128
第 17 表　放射性炭素年代測定結果…… 147
第 18 表　暦年較正結果…… 147
第 19 表　珪藻分析結果…… 148
第 20 表　花粉・微粒炭分析結果…… 149
第 21 表　植物珪酸体含量…… 150
第 22 表　種実遺体分析結果…… 151
第 23 表　樹種同定結果…… 152
第 24 表　遺構覆土の堆積状況の分類…… 162
第 25 表　放射性炭素年代測定結果…… 177
第 26 表　暦年較正結果…… 177
第 27 表　花粉・微粒炭分析結果…… 178
第 28 表　植物珪酸体含量…… 179
第 29 表　放射性炭素年代測定結果…… 180
第 30 表　暦年較正結果…… 180
第 31 表　寄生虫卵・花粉分析結果…… 181
第 32 表　灰像分析結果…… 182
第 33 表　植物珪酸体含量…… 182
第 34 表　微細物分析結果…… 183
第 35 表　樹種同定結果…… 185
第 36 表　建築材の遺構別樹種構成…… 185
第 37 表　集落内遺構相関図…… 195
第 38 表　放射性炭素年代測定結果…… 202
第 39 表　暦年較正結果…… 202

図 版 目 次

[図　面]

（谷地遺跡縄文時代）

図版 1　全体図（1/300）
図版 2　遺構分割図（1）（1/150）
図版 3　遺構分割図（2）（1/150）
図版 4　遺構分割図（3）（1/150）
図版 5　遺構分割図（4）（1/150）
（南側調査区）
図版 6　遺構個別図（1）SK446・479・578・611・680・845・1113・1116、SX258・458・511・1022
図版 7　遺構個別図（2）SX169
図版 8　遺構個別図（3）SX169（P13・18・19・49・51 ～ 53・56・57・59・60・63 ～ 65・70・72・77 ～ 79・121・124・126・127・132・133・139・141・158 ～ 164・171・174・187・271・272・282・283 ～ 285・290・294・295・300・1417 ～ 1429、F156）
図版 9　遺構個別図（4）遺物集中 384・385・442
図版 10　遺構個別図（5）P346・510・794・796・797・824・842・887 ～ 889・892・905・906・909・912・918・919・954・955・982・1103・1143・1356・1358・1444
（北側調査区）
図版 11　遺構個別図（6）[Ⅷa 層] F167・190 ～ 196・353・370
図版 12　遺構個別図（7）[Ⅷa 層] F377・401・402
[Ⅷb 層] F165・166・762・168・351・352・356 ～ 358
図版 13　遺構個別図（8）[Ⅷb 層] F359 ～ 361・391・403・410・765・766・775・854・856・860・864・

898・934・937・946
図版 14　遺構個別図（9）[Ⅷb 層] F1060・1068・1075・1151・1163・1165
[Ⅷb2 層] F876・939・942・947・1070・1171・1173・1309・1333
図版 15　遺構個別図（10）[Ⅷa 層] SK259・287 ～ 289・354・355・362・390
図版 16　遺構個別図（11）[Ⅷa 層] SK400・451・754 ～ 756・767・769・831・878・879　[Ⅷb 層] SK371
図版 17　遺構個別図（12）[Ⅷb 層] SK372・404 ～ 406・408・409・417・418・849・850
図版 18　遺構個別図（13）[Ⅷb 層] SK852・853・855・861・862・865・869・871・872
図版 19　遺構個別図（14）[Ⅷb 層] SK873・875・877・930・932・935・936
図版 20　遺構個別図（15）[Ⅷb 層] SK938・940・941・943・944・1085・1089・1168・1174・1176・1301・1404
図版 21　遺構個別図（16）[Ⅷb 層] SK1414
[Ⅷb2 層] SK1050・1052・1071・1090・1160・1322・1401・1402
図版 22　遺構個別図（17）[Ⅷb 層] SX347（P800・1094・1095・1097・1099・1150・1152 ～ 1158・1310 ～ 1313・1348・1316・1319・1320）
図版 23　遺構個別図（18）[Ⅷb 層] SX347（P1321・1324・1325・1340・1341・1343・1346・1347・1349、F945、遺物出土状況）
図版 24　遺構個別図（19）[Ⅷb2 層] SX857
図版 25　遺構個別図（20）[Ⅷb2 層] SX857（P846・848・867・874・1092・1093・1098・1178・1179 ～ 1184・1186 ～ 1194・1314・1332・1335・1408・1448 ～ 1467、F1468、遺物出土状況）
図版 26　遺構個別図（21）[Ⅷa 層] 遺物集中 314　[Ⅷb 層] 遺物集中 350
図版 27　遺構個別図（22）[Ⅷa 層 a 群ピット] P420 ～ 422・425・427・428・432・433
[Ⅷb 層 b 群ピット] P1054・1056・1057・1059・1065・1302
[Ⅷb2 層 c 群ピット] P1339・1399・1410 ～ 1413・1415・1432・1443
図版 28　遺構個別図（23）旧河川
（土器）
図版 29　遺物実測図（1）[南側調査区Ⅷ層] SK446・845、遺物集中 384・385・442、P348・892・909
図版 30　遺物実測図（2）[南側調査区Ⅷ層] 遺物集中 442、包含層
図版 31　遺物実測図（3）[北側調査区Ⅷa 層] SK259・287・288・354・355・390・400・451・754・756・767・769・831・879、包含層　[試掘] 6・7 トレンチ
図版 32　遺物実測図（4）[北側調査区Ⅷa 層] 遺物集中 314、包含層
[北側調査区Ⅷb 層] SK372・418・855
図版 33　遺物実測図（5）[北側調査区Ⅷb 層] SK852・873・875・936・941、P764、旧河川、包含層
図版 34　遺物実測図（6）[北側調査区Ⅷb 層] F166・356・361、SK371・404・405・408・409・417・849・850・853・869・872・938・943・1085・1174・1176・1301・1404・1414、SX347、遺物集中 350、旧河川、包含層
図版 35　遺物実測図（7）[北側調査区Ⅷb 層] 旧河川、包含層
[北側調査区Ⅷb2 層] SK1071・1090・1160、SX857
（石器）
図版 36　遺物実測図（8）[南側調査区Ⅷ層] 遺物集中 385・442、包含層
[北側調査区Ⅷa 層] F192・195、包含層
図版 37　遺物実測図（9）[北側調査区Ⅷa 層] F190、SK259・288・354・451、包含層
図版 38　遺物実測図（10）[北側調査区Ⅷb・Ⅷb2 層] F165、SK850・872・877、遺物集中 771、包含層
図版 39　遺物実測図（11）[北側調査区Ⅷb・Ⅷb2 層] SK850・855・877・932・1322、包含層
図版 40　遺物実測図（12）[北側調査区Ⅷb・Ⅷb2 層] F762、SK371・871・877・930、包含層
[試掘] 7 トレンチ
図版 41　遺物実測図（13）[北側調査区Ⅷb・Ⅷb2 層] F939、SK865・877・938・1402、SX857、包含層
[試掘] 29 トレンチ
図版 42　遺物実測図（14）[北側調査区Ⅷb・Ⅷb2 層] F358、SK938・940、包含層　[試掘] 29 トレンチ

（谷地遺跡中世）
図版 43　全体図（1/300）
図版 44　遺構分割図（１）(1/150)
図版 45　遺構分割図（２）(1/150)
図版 46　遺構分割図（３）(1/150)
図版 47　遺構分割図（４）(1/150)
図版 48　遺構個別図（１） SB1（P2023・2025 ～ 2028・2031・2032)、SE2001、P2010 ～ 2012
図版 49　遺構個別図（２） SE2016・2017・2030、SK2006・2008・2020・2045・2048・2064
図版 50　遺構個別図（３） SK2041・2053・2078 ～ 2080・2086・2093・2100・2107
図版 51　遺構個別図（４） SK2131・2134、SD2002 ～ 2005・2007・2013・2034・2042・2058
図版 52　遺構個別図（５） SD2056・2057、P2018・2022・2024・2033・2035・2038・2055・2059・2060・2124・2139・2144
図版 53　遺物実測図（１） [土器] SE2001・2016・2017、SK2041、SD2005・2042　[石製品] SE2001・2016、SK2041　[木製品] SE2001　[金属製品] SE2001　[銭貨] 試掘３トレンチ
図版 54　遺物実測図（２） [木製品] SE2001・2016
図版 55　遺物実測図（３） [木製品] SE2016

（八太郎遺跡）
図版 56　全体図（1/300）
図版 57　遺構個別図（１） SX1
図版 58　遺構個別図（２） SX1
図版 59　遺構個別図（３） SX1（遺物出土状況)、P2・48、杭３～９・20
図版 60　遺物実測図（１） [土器・陶磁器] SX1、包含層、表採、試掘４～６・11 トレンチ
図版 61　遺物実測図（２） [石製品] SX1、包含層、試掘１・11 トレンチ　[木製品] SX1
図版 62　遺物実測図（３） [木製品] SX1
図版 63　遺物実測図（４） [木製品] SX1
図版 64　遺物実測図（５） [木製品] SX1
図版 65　遺物実測図（６） [木製品] 杭３・４・６・８・９・20、包含層、SD1　[銭貨] 表採、試掘１トレンチ

（田屋道遺跡Ⅱ）
図版 66　全体図（1/500）
図版 67　遺構分割図（１）(1/250)
図版 68　遺構分割図（２）(1/250)
図版 69　遺構分割図（３）(1/250)
図版 70　遺構分割図（４）(1/250)
図版 71　遺構分割図（５）(1/250)
図版 72　遺構分割図（６）(1/250)
図版 73　遺構個別図（１） 18・19F・G グリッド付近掘立柱建物、ピット列１・２位置図
図版 74　遺構個別図（２） SB37 ～ 40・28、ピット列１・２断面図
図版 75　遺構個別図（３） SB37（P1038・1062 ～ 1073)、SB38（P1033・1049・1172)、SB39（P1026・1032・1050)、P1100
図版 76　遺構個別図（４） SB38（P1016・1018・1021・1030・1036・1041・1047・1059)、SB39（P1029・1037・1040・1042・1053)、ピット列１（P1013・1020・1031・1039)、ピット列２（P1078・1085)、P1046・1060
図版 77　遺構個別図（５） ピット列２（P1081・1083・1084)、SB40（P983・984・989・991・998・1001・1002・1005・1010・1012)、SB28（P222・224・1006)、P1082
図版 78　遺構個別図（６） SB41（P299・308・314・315・1086・1091・1161・1164）
図版 79　遺構個別図（７） SE1004・1090・1110
図版 80　遺構個別図（８） SK920・922・929・932・933・1014・1119・1121・1122・1141、SD1・2・1173
図版 81　遺構個別図（９） SD42・139・140・186・234・236・237・238・252・303・525・945

図版 82　遺構個別図（10）SD286・288・289・392・579・930・996・1120・1153
図版 83　遺構個別図（11）SD535・835・838・847・1093・1094・1170・1171、SX89・1092
図版 84　遺構個別図（12）SD673、SX1095・1108・1162、P901・902・944・946・953・954・958・973・985・987・988・1003
図版 85　遺構個別図（13）P1008・1028・1052・1054・1057・1058・1074・1080・1112・1131・1139・1140・1154・1167・1169、杭 934 ～ 942・1087・1158
図版 86　遺物実測図（１）[土器・陶磁器] SB37（P1038）、SE1004・1090・1110、SK1141、SD42・139・237・286・289・525・579・838・1171、SX1095、P1074、包含層
図版 87　遺物実測図（２）[土器・陶磁器] 包含層
[木製品] SB37（P1064・1068・1070 ～ 1072）、SB38（P1036）、SB39（P1026）
図版 88　遺物実測図（３）[木製品] SB39（P1040・1050・1053）、SB40（P991）、SB41（P1164）、ピット列 1（P1020・1039）、SE1004・1090
図版 89　遺物実測図（４）[木製品] SE1090・1110、SD2、SX1095、P901
図版 90　遺物実測図（５）[木製品] P902・985・1003・1057・1058・1131・1140・1154、杭 1087
[石製品] SK920、SX1095

（宮の越遺跡Ⅱ）

図版 91　全体図（1/300）、遺構個別図　杭 10 ～ 16
遺物実測図（１）[土器] 包含層
図版 92　遺物実測図（２）[土器] 包含層
図版 93　遺物実測図（３）[石器] 包含層　[木製品] 杭 10 ～ 16、包含層、試掘 2 トレンチ

[写真]

（谷地遺跡）

図版 94　調査区全景（１）縄文上位面・中世面 [航空写真]
図版 95　調査区全景（２）縄文下位面 [航空写真]
図版 96　調査区全景（３）壁セクション

（縄文時代）

図版 97　遺構（１）[南側調査区] SK446・845、SX169
図版 98　遺構（２）[南側調査区] 遺物集中 442　[北側調査区Ⅷａ層] F167・196
図版 99　遺構（３）[北側調査区Ⅷｂ層] F165・168　[北側調査区Ⅷb2 層] F942
図版 100　遺構（４）[北側調査区Ⅷb2 層] F947　[北側調査区Ⅷａ層] SK287 ～ 289・400
図版 101　遺構（５）[北側調査区Ⅷａ層] SK831　[北側調査区Ⅷｂ層] SK371・372
図版 102　遺構（６）[北側調査区Ⅷｂ層] SK372・404・849・850
図版 103　遺構（７）[北側調査区Ⅷｂ層] SK852・861・873・875
図版 104　遺構（８）[北側調査区Ⅷｂ層] SX347、F945、遺物集中 770・771・851
図版 105　遺構（９）[北側調査区Ⅷb2 層] SX857、F1468
図版 106　遺構（10）旧河川
図版 107　遺物（１）土器（１～ 25）
図版 108　遺物（２）土器（26 ～ 65）
図版 109　遺物（３）土器（66 ～ 95）
図版 110　遺物（４）土器（96 ～ 112）
図版 111　遺物（５）土器（113 ～ 139）
図版 112　遺物（６）土器（140 ～ 178）
図版 113　遺物（７）石器（179 ～ 209）
図版 114　遺物（８）石器（210 ～ 240）
図版 115　遺物（９）石器・石製品（241 ～ 273）
図版 116　遺物（10）石器（274 ～ 296・299）
図版 117　遺物（11）石器（297・298・300 ～ 319）

（中世）
図版 118　遺構（１） SB1（P2023）、SE2001
図版 119　遺構（２） SE2016・2017・2030
図版 120　遺構（３） SE2030、SK2041、SD2002 ～ 2004
図版 121　遺構（４） SD2005・2007・2013・2034・2042・2058
図版 122　遺物（１） 陶磁器（1 ～ 9）、金属製品（10・11）、銭貨（12）、石製品（13 ～ 15）、木製品（16 ～ 29）
図版 123　遺物（２） 木製品（30 ～ 46・52）、礫（47 ～ 50）、種子（51）

（八太郎遺跡）
図版 124　遺構（１） 調査区全景、調査区と周辺の地形、トレンチセクション
図版 125　遺構（２） SX1
図版 126　遺構（３） SX1、P2・48
図版 127　遺物（１） 土器・陶磁器（１～ 12）、石製品（13 ～ 18）、木製品（19 ～ 36）
図版 128　遺物（２） 木製品（37 ～ 78）
図版 129　遺物（３） 木製品（79 ～ 123）、銭貨（124 ～ 126）

（田屋道遺跡Ⅱ）
図版 130　調査区全景 [航空写真]
図版 131　壁セクション、SB37 ～ 39 検出状況
図版 132　遺構（１） SB37 ～ 39（P1064・1068・1053）、ピット列 1・2
図版 133　遺構（２） SB37 ～ 39（P1026・1070 ～ 1072・1172）
図版 134　遺構（３） SB38・39（P1029・1030・1032・1033・1036・1037・1040・1049・1050）
図版 135　遺構（４） SB40（P984・991・998・1002）、P999
図版 136　遺構（５） SB41（P1091・1164）
図版 137　遺構（６） ピット列 1・2（P1020・1039・1083）、SE1004
図版 138　遺構（７） SE1004・1090
図版 139　遺構（８） SE1110、SK920・1014・1141
図版 140　遺構（９） SD186・234・288・289・945
図版 141　遺構（10） SD236・237・286・288・289・303・535・1093・1173、壁セクション、21F グリッド溝群
図版 142　遺構（11） SD673・1094、SX89・1092・1095
図版 143　遺構（12） SX1095、SB28（P224）、P901・902・985・1057
図版 144　遺構（13） P1058・1131・1140・1154・1157、杭 1087・1158
図版 145　遺物（１） 土器・陶磁器（１～ 33）、木製品（34 ～ 38）
図版 146　遺物（２） 木製品（39 ～ 64）
図版 147　遺物（３） 木製品（65 ～ 82）
図版 148　遺物（４） 木製品（83 ～ 93）、石製品（94 ～ 96）

（宮の越遺跡Ⅱ）
図版 149　遺構（１） C 区Ⅲ層面終了状況、D 区終了状況、壁セクション、黒色土サンプル採取位置土層、
杭 10・11・12・13
図版 150　遺構（２） 杭 14・15・16、作業風景
遺物（１） 土器（１～ 14）
図版 151　遺物（２） 土器（15 ～ 22）、礫（23）、木製品（24 ～ 41）

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

法定路線名「日本海沿岸東北自動車道」（以下、「日沿道」とする）は、新潟市の新潟空港インターチェンジ（以下、「IC」とする）を起点に北上し、山形県、秋田県を経て青森市に至る高規格幹線道路である。また、新潟中央ジャンクション（以下、「JCT」とする）から秋田県河辺 JCT 間は営業路線名「日本海東北自動車道（日東道）」とも呼称される。新潟県側は新潟空港～荒川胎内 IC 間が平成 21 年に完成している。中条 IC 以北は平成元年及び平成 3 年に基本計画が決定され、本書で報告する遺跡が所在する中条～朝日 IC 間は、平成 10 年 4 月に施工命令が出された。これを契機に、日本道路公団（以下、「道路公団」とする）と新潟県教育委員会（以下、「県教委」とする）との間で、道路法線内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

中条～朝日 IC 間の埋蔵文化財の分布調査は、県教委から委託を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」とする）が平成 11 年度に実施し、道路法線上には 8 か所の周知遺跡と 27 か所の遺跡推定地が存在すること、これらについて試掘確認調査が必要であることを県教委に報告した。その後、試掘確認調査は平成 9 ～ 19 年にかけて実施し、その結果、本発掘調査対象面積は延べ約 600,000 ㎡と膨大なものとなった。本書に係る試掘確認調査は、谷地遺跡は平成 18 年に、田屋道遺跡・宮の越遺跡は平成 14 年、八太郎遺跡は平成 16 ～ 17 年にそれぞれ実施している。

平成 14 年 12 月 18 日の道路公団・県教委及び埋文事業団との協議で、日沿道早期開通のため、当面は暫定二車線分に調査範囲を限定することを決定した（以下、「限定協議」とする）。また、平成 15 年 10 月 1 日の道路公団・県教委及び埋文事業団との協議で、道路公団が示した平成 16 年度の調査要望は膨大で、工事工程から 17 年度以降もこの調査量が継続すると想定された。県教委と埋文事業団はこの要望に対応できるだけの調査体制を持ち合わせていないことから、平成 16 年度以降の日沿道建設に限って、埋文事業団職員の指導・監督のもと、民間調査機関に発掘調査を全面委託し、これに対応することとした。

その後、日沿道の事業は、道路公団の分割民営化に伴い、平成 17 年 10 月 1 日に設立された東日本高速道路株式会社（以下、「東日本高速道路」とする）に引き継がれた。また平成 18 年 2 月 7 日の国土開発幹線自動車道建設会議により、荒川胎内 IC 以南は東日本高速道路が「有料道路方式」で、荒川胎内 IC の北側は国土交通省（以下、「国交省」とする）が「新直轄方式」で整備することとなり、平成 14 年 12 月の限定協議内容も国交省に引継がれることを確認した。

平成 19 年度の本発掘調査か所は、平成 19 年 2 月 6 日の国交省、県教委、埋文事業団による協議で最終的に決定した。調査対象は旧荒川町に所在する桜林遺跡（中世）、旧神林村の西部遺跡（古代）・窪田遺跡（中世）・田屋道遺跡（中世）・宮の越遺跡（古代）・八太郎遺跡（中世）、旧村上市の高山東遺跡（縄文）・東興屋遺跡（縄文）・長割遺跡（縄文）・大館跡（中世）・谷地遺跡（縄文）の計 11 遺跡で、調査対象面積は延べ約 24,000 ㎡である。なお、本書に係る 4 遺跡のうち、田屋道遺跡は請願 IC 建設に伴う調査で、本線部分の調査は平成 18 年度に終了しており、宮の越遺跡も橋脚位置に限って平成 18 年度に調査終了したが［大島ほか 2008］、今回は橋脚位置変更に伴う追加調査である。

※国土地理院 5万分の1 地形図（村上・塩野町・小国・中条）を10万分の1にして使用　一部加筆

第１図　日本海沿岸東北自動車道の路線と調査遺跡の位置

※国土地理院 2万5千分の1 地形図（村上・越後門前）を使用　一部加筆

第２図　谷地遺跡・八太郎遺跡の調査位置

※国土地理院 2万5千分の1 地形図（村上）を使用　一部加筆

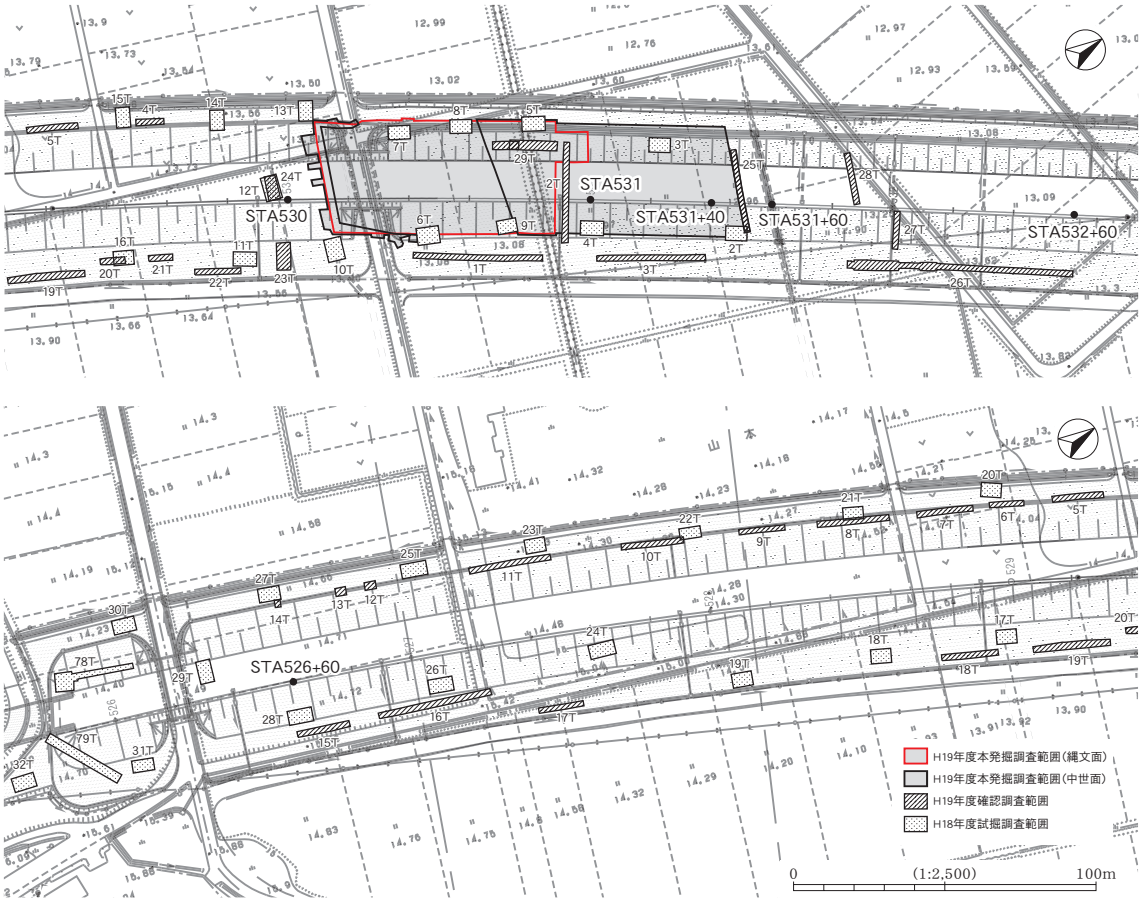
第３図　田屋道遺跡・宮の越遺跡の調査位置

2　調査経過

A　試掘確認調査

1）谷地遺跡

試掘確認調査は「周知遺跡５」として平成 18 年８月７～ 25 日、９月 11 ～ 21 日、９月 27 日～ 10 月 26 日に実施した。対象面積は 50,550 ㎡で、実質調査面積は 2,104 ㎡である。調査方法は対象地に試掘トレンチをほぼ 25m 間隔で任意に設定し、重機（バックホー）及び人力で徐々に掘り下げ、遺構・遺物の検出に努めた。その後、土層堆積状況、トレンチ位置、遺構・遺物の検出状況などを図面・写真等に記録した。掘削深度は３ｍをめどに行った。調査範囲での堆積土はⅠ～Ⅸ層に大別した。Ⅰ層はａ～ｄに細分し、Ⅰａ層は表土で茶褐色土層、Ⅰｂ層は黒褐色土層、Ⅰｃ層は黄褐色混じりの灰褐色土層、Ⅰｄ層は黄褐色混じりの灰色土層、Ⅱ層は明灰褐色～黄褐色粘土層、Ⅲ層は白灰～灰色粘土層、Ⅳ層は灰褐色粘土層、Ⅴ層は青灰色粘土層、Ⅵ層は青灰色シルト層、Ⅶ層は黄褐色粘土層、Ⅷ層は暗茶褐色粘土層、Ⅸ層は明茶褐色粘土層である。６トレンチのⅨ層面で縄文時代の遺構を検出し、６・７・10・12 トレンチのⅧ層で縄文時代の土器が出土したため、小字名から「谷地遺跡」として遺跡登録した。本発掘調査面積は、遺構・遺物を検出した地区を中心に 2,920 ㎡とした。



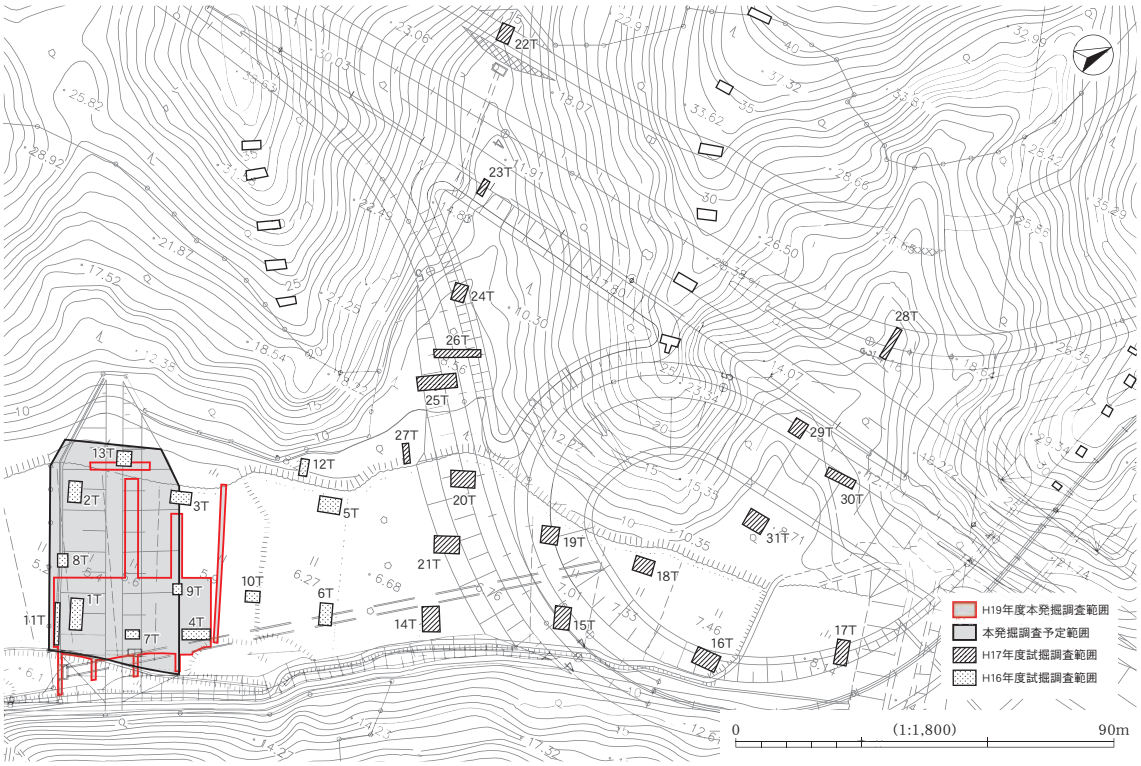
第４図　谷地遺跡試掘確認調査のトレンチ位置と本発掘調査の範囲

２）　八太郎遺跡

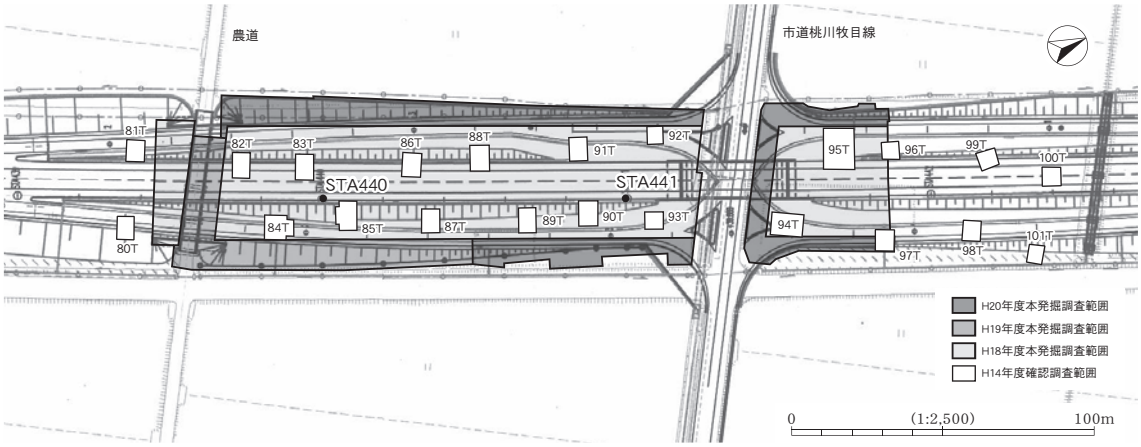
試掘調査は平成 16 年８月 30 日～９月 30 日と平成 17 年 10 月３日～ 12 月 12 日に実施した。調査範囲の堆積土はⅠ～ⅩⅤ層に分層した。Ⅰ層は表土で褐色粘質土層、Ⅱ層は褐色土層である。Ⅲ層は灰褐色粘土層で遺物包含層（中世）、Ⅳ層は暗青灰色粘土層で遺構検出面である。以下、Ⅴ層は暗褐色粘土層、Ⅵ層は黒褐色粘土層、Ⅶ層は暗褐色粘土層、Ⅷ層は暗青灰色粘土層、Ⅸ層は褐色粘土層、Ⅹ層は暗青灰色粘土層、ⅩⅠ層は褐色土層、ⅩⅡ層は暗青灰色粘土層、ⅩⅢ層は褐色粘土層、ⅩⅣ層は青灰色砂層、ⅩⅤ層は青灰色粘土層または黄褐色土層と続く。４トレンチのⅢ層から須恵器の甕・壺片が 20 点出土し、１トレンチでは柱根が残る柱穴を、11 トレンチでは土坑を検出したため、小字名から「八太郎遺跡」として遺跡登録した。本発掘調査面積は、遺構・遺物を検出した地区を中心に 1,530 ㎡とした。

３）　田屋道遺跡

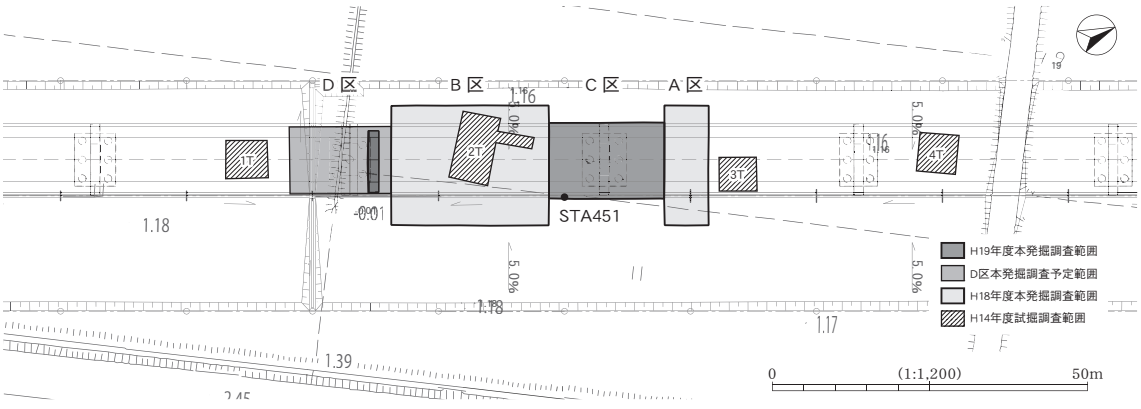
確認調査は「周知遺跡２」として平成 14 年６月 17 日～７月５日、８月 19 日～ 10 月 11 日に実施した。調査対象面積は約 98,690 ㎡である。調査範囲の堆積土はⅠ～XI層に分層した。Ⅰ層は現水田耕作土層、Ⅱ層は暗灰色粘土層、Ⅲ層は明灰色～明褐色粘土層、Ⅳ層は灰色～明褐色砂・シルト層、Ⅴ層は暗灰色～黒褐色粘土層、Ⅵ層は明褐色～褐色粘土層、Ⅶ層は灰色砂層、Ⅷ層は灰色～褐色粘土層、Ⅸ層は青灰色～灰白色粘土層、Ⅹ層は褐色粘土層と青灰色砂層の互層、XI層は灰色・青灰色砂層となっている。Ⅱ層は中世の遺物包含層であるが、現水田の床土となっている。水田耕作土下まで削平され、Ⅱ層が残っていない



八太郎遺跡



田屋道遺跡



宮の越遺跡

第５図　八太郎遺跡・田屋道遺跡・宮の越遺跡試掘確認調査のトレンチ位置と本発掘調査の範囲

トレンチもあった。Ⅲ層は、中世の遺構検出面である。検出した遺構は、82、84、94 トレンチで大型溝、91 トレンチでピット、95 トレンチではピットと井戸である。13 世紀中葉～ 14 世紀前半と考えられる白磁、青磁、珠洲焼などが出土したことから、この遺跡は中世前期の集落であり、近隣の牧目館跡の成立等を考える上で、重要な遺跡と判断した。この確認調査により、遺構・遺物を検出した 82 ～ 95 トレンチの範囲（STA439+40 ～ STA441+90）について本発掘調査が必要であることを県教委に報告した。

4）　宮の越遺跡

分布調査報告で「推定地２」として試掘調査の必要があると判断した。北西約 150m には周知の宮の越遺跡が存在する。調査は平成 14 年８月８・９・19 ～ 28 日に実施した。調査対象面積は 29,440 ㎡であるが、当該地では自動車道が高架になることから、国交省と協議して、試掘トレンチはその橋脚予定位置に設定した。調査区の堆積土は、Ⅰ～Ⅷ層に分層した。Ⅰ層が耕作土層、Ⅱ層が暗褐色粘土層、Ⅲ層が明褐色・明灰色砂層、Ⅳ層が暗灰色・暗青灰色シルト層、Ⅴ層が暗褐色粘土層、Ⅵ層が灰色・暗灰色砂層、Ⅶ層が暗灰色・暗青灰色砂層、Ⅷ層が灰色粗砂層である。遺構は２トレンチで土坑を１基検出した。土坑の時期は、同トレンチⅡ層出土の須恵器から古代と推測され、周知の宮の越遺跡と同時期であることから、遺跡が試掘調査か所まで伸びている可能性が考えられた。本発掘調査面積は橋脚部分 80 ㎡とした。

B　本発掘調査

1）　谷 地 遺 跡

現地調査は、平成 19 年６月１日～ 12 月７日に行った。表土除去は６月１～ 15 日の間で行い、それに合わせて、調査区外周に地下水及び雨水処理用の開渠を設け、これを利用して東、西、北の各壁で土層を記録した。また調査区中央の５ラインに幅１ｍの土層観察用のベルトを設けた。表土除去後、調査区中央部に礫が露出する河川の浸食地形を確認し、これを境に北側（以下、「北側調査区」とする）と南側（以下、「南側調査区」とする）の遺物包含層を含む堆積土の様相が大きく異なっていることが分かった。

南側調査区では、縄文時代前期の遺物包含層であるⅧ層が褐色を呈し、部分的に下層の礫層が露出していた。遺物は包含層上面で集中して出土する状況が見られ、礫層内からも出土することから、遺構の掘り込み面や礫層との関係を知るため、サブトレンチを設けて断面を観察した。その後、平面でも精査したがⅧ層中で遺構を検出することができなかった。Ⅷ層中での遺構検出作業後、下のⅨ層上面で再度、遺構検出を行った。この結果、ピット群、土坑、そして溝とピットで構成された住居の可能性がある性格不明遺構を検出した。

７月 10 日からは北側調査区にも調査の範囲を広げた。調査区の内容を知るために５Ｅ～７Ｃグリッドにかけてトレンチ調査を行ったところ、Ⅷ層が厚く分層可能であることと、遺物や焼土を伴う遺構の存在を確認した。北側調査区のⅧ層は南側に比べ粘性が強く腐植土の発達が見られないが、Ⅷ層を上からⅧａ層、Ⅷｂ層、Ⅷｂ2 層の３層に分けた。

トレンチ調査で確認した焼土を伴う遺構は、断面観察から掘り込みを伴うものがあり、炉跡（屋外炉）と考え調査した。屋外炉は分層したⅧ層のそれぞれの層から検出できた。屋外炉内の焼土は黒色を呈するものが多く、機能及び焼土の成因を探るため、軟Ｘ線透過写真と考古地磁気による分析を行った。

北側調査区では遺構覆土と遺構検出面の土壌の区別が不明瞭であったが、トレンチ調査を併用し断面観察を行いながら遺構の検出に努めた。その結果、屋外炉、土坑、そして溝やピットで構成された住居の可

能性がある性格不明遺構などを検出した。遺物は、遺構内から土器や石器が出土した。土器は縄文前期初頭から中葉にかけてのもので、新潟県における当該期の土器の動向を知る上で貴重な資料である。また、石器は棒状礫の縁辺部を使用した特殊磨石・縦形の石匙・篦状石器が多く出土した。

屋外炉や土坑などの遺構や遺物を調査区の北端でも検出したことから、遺跡が北側へ広がる可能性が高まった。そこで県教委と国交省の了承を得て、８月６・７日にこの部分の確認調査を行った。調査によって遺構・遺物の存在を確認したため、調査範囲を北側へ 500 ㎡拡張することになった。

南側調査区のⅧ層と、北側調査区のⅧａ層の調査が終了した９月 21 日に、ラジコンヘリによる空中撮影を行った。

９月 24 日、これまでの調査成果を公表するため現地説明会を行ったところ、199 人の参加者を得た。現地説明会の後、Ⅷｂ層中の遺構の調査を行うと同時に、９月 25 日～ 10 月５日までの期間で拡張区の表土除去掘削を行った。拡張区の調査は最初にトレンチを入れ地層を確認した。拡張区については、旧河川の氾濫による浸食でⅧａ層がほとんど残っていなかったことや、Ⅷb2 層で遺構及び遺物が確認できなかったことから、Ⅷｂ層の一面調査とした。拡張区の西側からは屋外炉、土坑を検出し、土器、石器が出土した。拡張区を含めると、谷地遺跡縄文面の調査面積は 2,670 ㎡となった。

拡張区を除くⅧb2 層までの調査は 11 月７日に終了し、11 月９日にラジコンヘリによる空中撮影を行った。

拡張区Ⅷｂ層の調査は 11 月 25 日に終了し、26 日に拡張区のラジコンヘリによる空中撮影を行った。県教委の調査終了確認は 11 月 21 日に得た。その後、本遺跡の土壌堆積構造について新潟大学災害復興科学センターの高濱信行氏の現地指導を得、12 月７日には調査現地を国交省に引渡し現地でのすべての作業を終了した。

谷地遺跡の中世面については、当初存在すら認識していなかった。きっかけは、縄文面調査の過程で、調査区西壁の精査中に珠洲焼の鉢が出土したことによる。その後、県教委の指示で壁面の再精査を行ったところ、井戸・溝・土坑を検出し、中世の生活面が存在することが明らかとなった。この結果を受け、県教委は国交省の了承を得て、埋文事業団に再度確認調査を行うよう指示した。調査期間は７月 11 日～８月８日である。この調査によって、STA526+60 ～ STA531+40 の約 480m に及ぶ範囲で遺構を検出した。県教委と埋文事業団は国交省に対し、この部分も調査対象とするよう要望したが、既に一部では本体盛土工事が進行しており、これを除いた工事未着手部分（STA530 ～ STA531+40）の 3,107 ㎡を新たに本発掘調査対象とすることとした。中世面の調査は現体制のほかに新しく調査班を組織し、８月 24 日から開始した。

遺跡は７ラインよりも北側の大区域（以下、「中世北側調査区」とする）と、縄文調査区の周辺にある南側の小区域（以下、「中世南側調査区」とする）に分かれる。中世南側調査区は、再度の確認調査で遺構検出段階まで終了していたが、中世北側調査区の表土除去作業は８月 24 日から開始し、９月 19 日に終了した。中世北側調査区の７～ 10 ライン部分は、縄文面の北側調査区の拡張区域に当たることから他地区に先行して調査を開始した。遺跡の概要を知るため、南北方向は遺跡中央部の D ラインにトレンチを設けた。また、東西方向は調査区北壁の向きに合わせ 10m ごとにトレンチを設け、土層断面や遺構及び遺物の検出状況を確認した。調査により方形の土坑、区画溝などを検出した。９月 21 日に、縄文面の空中撮影に合わせ、中世北側調査区の７～ 10 ライン部分も撮影した。

空中撮影後は、中世北側調査区のトレンチを 15 ラインまで伸ばし、遺構及び遺物の確認をした。この

結果、調査区北端に東西方向に伸びる溝があること、土坑やピットがあるものの遺構密度は薄いことが分かった。また、９月 27 日からは中世南側調査区の遺構調査を開始した。この区域では、井戸や掘立柱建物、そして区画溝を検出していたことから、居住域と想定できた。10 月 24 日までに遺構掘削を終了し、同日県教委の調査終了確認を得た。10 月 25 日にラジコンヘリによる空中撮影を行い、11 月６日までにすべての作業を終了し、翌 11 月７日に現地を国交省に引き渡した。

２）　八太郎遺跡

調査対象面積は 1,530 ㎡であるが、試掘調査結果から、遺構の分布に偏りが想定できた。そこで、全面調査の前に、試掘調査で遺構及び遺物を検出した試掘坑に合わせ南北方向に３本、東西方向に２本トレンチを設定し、遺構・遺物の分布やその量を把握することとした。調査は４月 19 日から開始した。この結果、遺構及び遺物は調査区東側に分布することが明らかになったので、この部分は面的調査とし、西側はトレンチ調査（東西方向に４本）として谷部の地形復元に主眼を置いた。面的調査とトレンチ調査の面積は合計 880 ㎡である。

表土除去作業は５月７～ 11 日に行った。表土除去作業終了後、５月 14 日から包含層掘削及び遺構検出作業を行った。その結果、小河川を堰き止め作業場とした水場遺構やピット、杭などを検出した。また、調査区内には多数の河川跡も検出され、水場遺構との関連や遺物の有無を確認するためトレンチ調査を随時行った。

６月５日には隣接する神納東小学校児童を対象とした遺跡見学会を開催し、６月 13 日には現地調査員が小学校へ出向き、児童の質問に答えた。

旧河川の対応関係及び水場遺構の構造を確認し、必要な記録をとった上で、６月 18 日に県教委による調査終了確認を得た。６月 20 日には、ローリングタワーを使用して全景写真を撮影し、翌６月 21 日に国交省に現場を引き渡した。

３）　田屋道遺跡Ⅱ

平成 14 年 12 月 18 日の限定協議により、調査面積を 8,180 ㎡に縮小し、平成 18 年度にこの部分の本発掘調査[大島ほか 2008]が終了した。平成 19 年度は、平成 18 年度に調査できなかった農道部分 446 ㎡と、新たに設置されることとなった IC の建設部分のうち建設作業エリア外の 620 ㎡（本線東側 STA440+50 以南）を合わせ、1,066 ㎡が本発掘調査の対象となった。平成 20 年度は建設工事の進捗状況に合わせ、残りの IC 部分（1,657 ㎡）と市道脇部分（115 ㎡）の合計 1,772 ㎡を調査した。

平成 19 年度調査は９月 26 日～ 10 月 30 日に行った。本線東側の調査区を南から北に向かって表土除去した。遺物包含層は土地改良に伴う削平で失われていたため、表土除去作業と並行して遺構検出を行った。

10 月９日から農道部分の遺構検出作業を行い、土坑、区画溝、ピットを検出したが、全体に遺構密度は希薄であった。遺構掘削作業は 10 月 24 日までにすべて終了した。

10 月 25 日にはラジコンヘリによる空中撮影を行った。区画溝と考えた SD2 の南側方向の伸びを確認するため、10 月 26 日に調査区の南側にある駐車場内にトレンチを設定したが、SD2 の伸びは確認できなかった。10 月 30 日に県教委の調査終了確認を得、同日、国交省に現場を引き渡した。

平成 20 年度は、工事工程の関係で平成 19 年度に調査を行えなかった IC 昇降路部分が主な調査対象地

である。道路建設工程との調整を図り、現地調査を春期と秋期に分けて行うことになった。

春期の調査は、４月 17 日～７月 23 日に行った。調査範囲は本線西側の IC 建設部分と、本線東側の STA440+50 以北の IC 建設部分で、調査面積は 1,657 ㎡である。

調査区が市道を挟み４地区に分かれ、市道の南側の本線西側 IC 建設部分から調査を行うこととした。４月 17 日から調査を開始し、土坑、区画溝、ピットを検出し、これを記録した後、６月４日に空中撮影を行った。

６月12日から本線東側の調査に入った。包含層は土地改良で撹拌されていた。調査によって掘立柱建物、井戸、土坑、性格不明遺構、区画溝、ピットを検出した。平成 18 年度調査で道路状遺構の可能性を指摘した SD286・289 については調査区の東側壁面を精査し検証を行った。６月 26 日から市道の北側の調査を開始し、区画溝、土坑、ピットを検出した。遺構と遺物の記録を行った後、７月９日に県教委の調査終了確認を得、７月 16 日にラジコンヘリによる空中撮影を行い、７月 23 日に国交省に現場を引き渡した。

８～９月にかけ、秋期に調査する市道脇の調査範囲について、村上市教育委員会と調整した結果、市道法面部分を含む 115 ㎡を調査することとなった。調査は 10 月９～ 30 日に行い、区画溝、土坑、ピットを検出し、これを調査した。10 月 17 日に県教委の調査終了確認を得、10 月 23 日に高所作業車による調査区全体撮影を行い、10 月 30 日に国交省に現場を引き渡した。

４）　宮の越遺跡Ⅱ

平成 18 年度調査では橋脚位置を中心に 611 ㎡を調査したが、その後、橋脚位置が変更され、この部分の調査を実施することとなった。調査対象面積は 350 ㎡で、これを橋脚で分け C・D 区と呼称したが、D 区の水路及び給水管の埋設部については、掘削が深く遺跡は壊されたと判断できたことから、調査対象から除外した。その結果、調査面積は C 区 226 ㎡と D 区 17 ㎡の合計 243 ㎡となった。

現地調査は４月２日～５月 11 日に行った。４月２～ 13 日の間でプレハブ建設・機材搬入・発掘区の測量・グリッド設定を行い、４月 14 日に重機で C 区の表土除去作業を行った。D 区については、水路及び埋設管があることから、人力で表土を除去した。４月 15 ～ 19 日の間で排水のための開渠掘削と土層の記録を行い、４月 19 日から包含層掘削と遺構検出作業を行った。C 区では杭を検出し、須恵器、土師器、木製品などの遺物が出土したが、D 区からは遺構及び遺物は確認できなかった。

遺構検出・掘削作業は４月27日に終了し、同日にローリングタワーで調査区の撮影をした。その後、遺構・遺物の記録を行い、４月 27 日に県教委の調査終了確認を得て、５月 11 日に国交省に現場を引き渡した。

C　調査・整理体制

試掘確認調査及び平成 19 ～ 20 年度の本発掘調査（谷地遺跡・八太郎遺跡・田屋道遺跡Ⅱ・宮の越遺跡Ⅱ）とその後の整理作業は、以下のような期日と体制で行った。

【試掘確認調査】

［田屋道・宮の越遺跡］

調査期間　　平成 14 年 6 月 17 日～ 7 月 5 日、8 月 19 日～ 10 月 11 日（田屋道遺跡）
　　平成 14 年 8 月 8 ・ 9 ・ 19 ～ 28 日（宮の越遺跡）
調査主体　　新潟県教育委員会
調　　査　　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　板屋越　麟一）
管　　理　　黒井　幸一　（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団専務理事・事務局長）
　　長谷川司郎　（　同　総務課長）
　　岡本　郁栄　（　同　調査課長）
庶　　務　　高野　正司　（　同　総務課班長）
調査指導　　寺﨑　裕助　（　同　公団担当調査課長代理）
調査担当　　澤田　　敦　（　同　調査課班長）
　　石川　智紀　（　同　調査課班長）
調査職員　　佐藤　優一　（　同　調査課主任調査員）
　　後藤　　孝　（　同　調査課主任調査員）
　　阿部　友晴　（　同　調査課文化財調査員）
　　片岡　千恵　（　同　調査課嘱託員）

［八太郎遺跡］

調査期間　　平成 16 年 8 月 30 日～ 9 月 30 日、平成 17 年 10 月 3 日～ 12 月 12 日
調査主体　　新潟県教育委員会
調　　査　　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　板屋越　麟一　平成 16 年度）
　　（理事長　武藤　克己　平成 17 年度）
管　　理　　黒井　幸一　（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団専務理事・事務局長　平成 16 年度）
　　波多　俊二　（　同　専務理事・事務局長　平成 17 年度）
　　長谷川二三夫（　同　総務課長）
　　藤巻　正信　（　同　調査課長）
庶　　務　　高野　正司　（　同　総務課班長　平成 16 年度）
　　長谷川　靖　（　同　総務課班長　平成 17 年度）
調査指導　　山本　　肇　（　同　試掘・確認調査担当課長代理　平成 16 年度）
　　寺﨑　裕助　（　同　試掘・確認調査担当課長代理　平成 17 年度）
調査担当　　滝沢　規朗　（　同　調査課班長）
調査職員　　片岡　千恵　（　同　調査課嘱託員　平成 16 年度）
　　齊藤　　準　（　同　調査課嘱託員　平成 17 年度）

［谷地遺跡］

調査期間　　平成 18 年 8 月 7 ～ 25 日、9 月 11 ～ 21 日、9 月 27 日～ 10 月 26 日、
　　平成 19 年 7 月 11 日～ 8 月 8 日
調査主体　　新潟県教育委員会
調　　査　　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　武藤　克己）
管　　理　　波多　俊二　（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団専務理事・事務局長）
　　斎藤　　栄　（　同　総務課長）
　　藤巻　正信　（　同　調査課長）
庶　　務　　長谷川　靖　（　同　総務課班長）
調査指導　　田海　義正　（　同　試掘・確認調査担当課長代理）
調査担当　　滝沢　規朗　（　同　調査課班長）

【19・20 年度本発掘調査・整理作業】

調査主体　　新潟県教育委員会
調　　査　　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　武藤　克己）
管　　理　　木村　正昭　（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団専務理事・事務局長）
　　斎藤　　栄　（　同　総務課長）
　　藤巻　正信　（　同　調査課長）
庶　　務　　長谷川　靖　（　同　総務課班長）
監　　督　　鈴木　俊成　（　同　日沿道担当課長代理）
　　木村　雄司　（　同　調査課主任調査員）

［宮の越遺跡］

調査期間　　平成 19 年 4 月 2 日～ 5 月 11 日
整理期間　　平成 19 年 12 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日
調査組織　　株式会社シン技術コンサル
現場代理人　小海　勝志　（文化財調査部主任技師）
調査担当　　大島　秀俊　（文化財調査部主任調査員）
調査補助員　東　　誠二　　高島　美記子　　河内　聖美

［八太郎遺跡］

調査期間　　平成 19 年 4 月 19 日～ 6 月 21 日
整理期間　　平成 19 年 12 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日
調査組織　　株式会社シン技術コンサル
現場代理人　小海　勝志　（文化財調査部主任技師）
調査担当　　大島　秀俊　（文化財調査部主任調査員）
調査職員　　北村　　淳　（文化財調査部調査員）
　　伊比　博和　（文化財調査部調査員）
調査補助員　東　　誠二　　高島　美記子　　河内　聖美

［谷地遺跡（縄文時代）］

調査期間　　平成 19 年 6 月 1 日～ 12 月 7 日
整理期間　　平成 19 年 12 月 8 日～平成 21 年 3 月 31 日
調査組織　　株式会社シン技術コンサル
現場代理人　小海　勝志　（文化財調査部主任技師）
調査担当　　大島　秀俊　（文化財調査部主任調査員）
調査職員　　北村　　淳　（文化財調査部調査員）
　　伊比　博和　（文化財調査部調査員）
調査補助員　東　　誠二　　高島　美記子　　河内　聖美

［谷地遺跡（中世）］

調査期間　　平成 19 年 8 月 24 日～ 11 月 7 日
整理期間　　平成 19 年 12 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日
調査組織　　株式会社シン技術コンサル
現場代理人　坂井　義章　（文化財調査部主任技師）
調査担当　　高階　敏昭　（文化財調査部主任調査員）
調査職員　　百瀬　正恒　（文化財調査部調査員）
　　建部　真也　（文化財調査部調査員）
調査補助員　志村　将直

［田屋道遺跡Ⅱ］

調査期間　　平成 19 年 9 月 26 日～ 10 月 30 日、
　　平成 20 年 4 月 17 日～ 7 月 23 日、10 月 9 ～ 30 日
整理期間　　平成 19 年 12 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日
調査組織　　株式会社シン技術コンサル
現場代理人　小海　勝志　（文化財調査部主任技師）
（平成 19 年度）
調査担当　　大島　秀俊　（文化財調査部主任調査員）
調査職員　　北村　　淳　（文化財調査部調査員）
　　伊比　博和　（文化財調査部調査員）
調査補助員　東　　誠二
（平成 20 年度）
調査担当　　北村　　淳　（文化財調査部主任調査員）
調査職員　　藤田　亮一　（文化財調査部調査員）
調査補助員　東　　誠二　　河内　聖美　　高島　美記子

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

谷地遺跡、八太郎遺跡、田屋道遺跡、宮の越遺跡が所在する村上市は、平成 20 年４月１日に１市（村上市）２町（荒川町、山北町）２村（神林村、朝日村）が合併し誕生した。面積は 1,174.24 ㎢ と新潟県の約１割を占め、北は日本国や旧出羽街道の堀切峠を挟み山形県鶴岡市と、南は乙大日川の一部を挟み胎内市と接する。西は海岸砂丘を経て日本海に面し、東は朴坂山、桃川峠で関川村と接する。

本報告の４遺跡は、北から谷地遺跡、八太郎遺跡、宮の越遺跡、田屋道遺跡の順に位置し、谷地遺跡は旧村上市域に、八太郎遺跡、宮の越遺跡、田屋道遺跡は旧神林村域にある。

谷地遺跡は、朝日山地に源を発し西流して日本海に注ぐ三面川が形成した沖積地に位置し、遺跡の標高は縄文時代面が約 11m、中世面が約 12.5m である。周囲には三面川の支流である門前川や山田川が流れ、これらの河川に沿うように河岸段丘や自然堤防がある。三面川左岸に連なる自然堤防上には山辺里・天神岡・四日市・古渡路などの集落があり、縄文時代から中世の遺跡もその周囲に点在している。

八太郎遺跡は、村上丘陵を流れる自然流路により侵食された解析谷の底面に位置する。遺跡の標高は約５m である。遺跡の南には東から西へ助淵川が流れ、石川に合流し岩船港で日本海に注いでいる。

宮の越遺跡は、新飯田集落の南東約 350m に位置し、標高は約 0.6m である。遺跡の北には笛吹川が、南には百川（桃川）が流れ、これらの河川に挟まれている。

石川・百川・助淵川・笛吹川などの河川が合流する辺りには、かつて「岩船潟」という潟湖があったが、現在では整備された水田となっている。

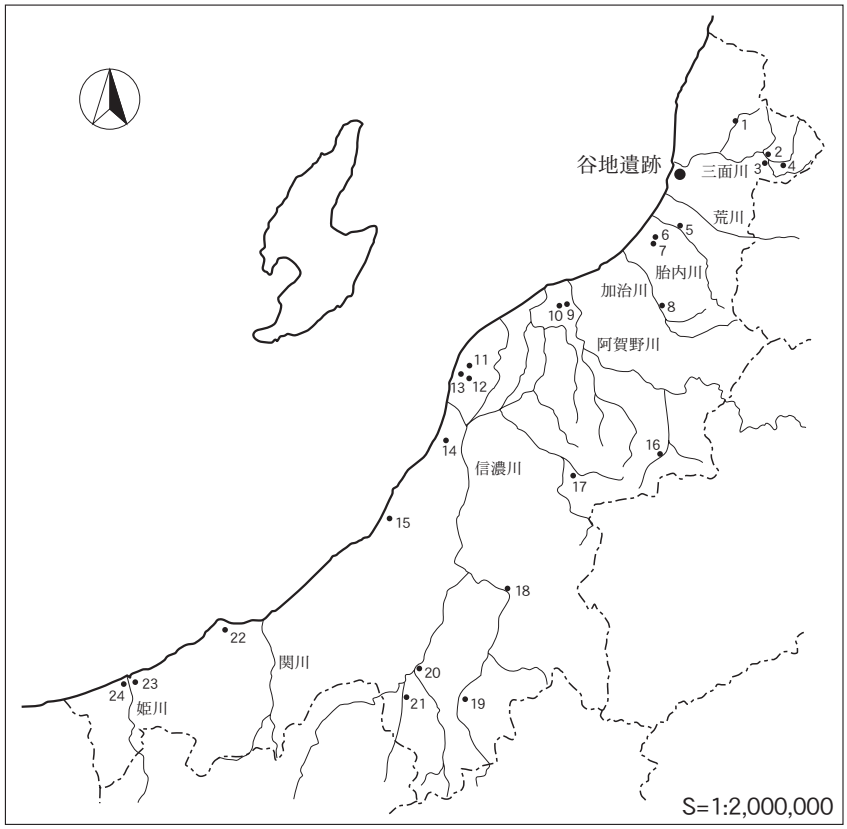
田屋道遺跡は牧目集落の北西約 200m に位置し、標高は１～ 1.5m である。平成 18 年度調査時の古環境分析などから、遺跡は小河川の氾濫による微高地に形成されたとされる。現在の牧目・九日市・南田中などの集落も水害を避け、居住しやすい河川の自然堤防上に位置していることから、田屋道遺跡の立地も同様な理由であろう。

2　歴史的環境

今回の調査では、谷地遺跡は縄文時代前期初頭から中葉と中世の、八太郎遺跡･田屋道遺跡では中世の、宮の越遺跡では古代の遺構・遺物を検出した。ここでは遺跡が立地した背景を検証するため、谷地遺跡に関係する県内の縄文時代前期初頭から中葉についての遺跡と旧村上市の中世の遺跡を概観したい。なお八太郎遺跡・田屋道遺跡・宮の越遺跡のある旧神林村の古代・中世の遺跡に関しては『田屋道遺跡Ⅰ・宮の越遺跡Ⅰ』［大島ほか 2008］を参照されたい。

A　新潟県における縄文時代前期初頭から中葉の遺跡

谷地遺跡では屋外炉や土坑を層位ごとに検出し、縄文時代前期初頭（花積下層式期）から中葉（根小屋式期［寺崎 1996］）までの土器や、棒状礫の縁辺部を使用した特殊磨石を含む石器が出土している。



№.	遺跡名	市町村名（2008年）
1	山口遺跡	村上市
2	下ゾリ遺跡	村上市
3	アチヤ平遺跡	村上市
4	黒渕遺跡	村上市
5	分谷地遺跡	胎内市
6	二軒茶屋遺跡	胎内市
7	升川遺跡	胎内市
8	狐森B遺跡	新発田市
9	笹山前遺跡	新潟市
10	砂崩遺跡	新潟市
11	布目遺跡	新潟市
12	新谷遺跡	新潟市
13	豊原遺跡	新潟市
14	大武遺跡	長岡市
15	大湊遺跡	柏崎市
16	室谷洞窟遺跡	阿賀町
17	長野遺跡	三条市
18	清水上遺跡	魚沼市
19	十二木遺跡	南魚沼市
20	干溝遺跡	十日町市
21	神山遺跡	津南町
22	東カナクソ谷遺跡	上越市
23	小出越遺跡	糸魚川市
24	大角地遺跡	糸魚川市

第６図　新潟県内の縄文時代前期初頭から中葉の主要遺跡

新潟県内の当該期の様相を見るため、縄文時代前期初頭から中葉の土器が出土した遺跡のうち、主要な遺跡の分布を第６図に示した。発掘調査の増加に伴い、平野から山間部まで、ほぼ県内の全域で確認されている。遺跡の立地について見ると、大きく砂丘列上の遺跡（笹山前遺跡（９）、砂崩遺跡（10）、布目遺跡（11）、新谷遺跡（12）、豊原遺跡（13）など）、河岸段丘上の遺跡（アチヤ平遺跡（３）、清水上遺跡（18）など）、台地・丘陵の縁辺部の遺跡（二軒茶屋遺跡（６）、小出越遺跡（23）、大角地遺跡（24）など）に分類できる。

谷地遺跡の時期は土器編年から大きく花積下層式期、布目式期（二ツ木式併行）、新谷・二軒茶屋期（関山式併行）、根小屋式期（黒浜式・有尾式併行）に分けられる。

花積下層式に相当する土器は、山口遺跡（１）、狐森Ｂ遺跡[1)]（８）、室谷洞窟遺跡（16）、干溝遺跡（20）、小出越遺跡（23）などで良好な資料が出土している。蕨手モチーフの撚糸側面圧痕文や非結束羽状縄文を主体とし、広域的な分布状況から新潟県下で花積下層式が一般化した時期［寺崎・石原 1999］とされる。

布目式期に相当する土器は、布目遺跡（11）、アチヤ平遺跡（３）、大武遺跡（14）などで出土している［寺崎・石原 1999］。布目遺跡からは、地文に短い結束羽状縄文やループ縄文が施文された土器が出土し、関東の花積下層式から二ツ木式の過渡的な段階に位置付けている［小熊 1994］。

新谷・二軒茶屋期に相当する土器は、新谷遺跡（12）、二軒茶屋遺跡（６）、長野遺跡（17）などで出土している［寺崎・石原 1999；齊藤 2006］。新谷遺跡では、住居の可能性がある焼土とピットを検出した。遺物は連続刺突文やコンパス文を特徴とする土器が出土し、関東地方の二ツ木式や関山式との関連を指摘している［前山 1994］。石器では磨製石斧が多量に出土し、礫の縁辺部を使用した磨石も出土している。

1）　調査報告書［田中ほか 2007］では、上川名式としている。

一方、二軒茶屋遺跡では、円形や溝状の土坑を検出した。石器は多量の砥石や石錘が出土し、土器は新谷遺跡ではあまり見られない爪形の刺突を持つものである。

根小屋式期［寺﨑 1996］に相当する土器は、清水上遺跡（18）、豊原遺跡（13）、十二木遺跡（19）などで出土している［寺﨑・石原 1999］。清水上遺跡では縄文時代前期中葉の集落（集落４）で出土した土器のうち、胎土に繊維の混入が少なく、器厚が薄く調整が丁寧で、器形や文様に独自性があるものについて「根小屋式土器」とし、北関東や長野県に分布する有尾式との関連性を述べている［寺﨑 1996］。

新潟県内の縄文時代前期初頭から中葉の土器が出土する遺跡は 60 か所を数えるとされるが、土器が層位的かつ遺構に伴う形で出土した例は少ない［齊藤 2006］。

B　中世の歴史的環境

鎌倉時代の初めに成立した「小泉荘」は、保安元（1120）年の「中右記」によると免田 30 町からなる中御門家の荘園であったとされる［荻野 1983］。その後、知行国である金剛心院領「小泉荘」成立の際に、藤原（中御門）宗能は、金剛心院の釈迦堂造営の管理者である藤原忠実と阿弥陀堂造営の管理者である藤原家成に近づき、免田の寄進と引き換えに金剛心院領「小泉荘」の預所職（あずかりどころ）となった。この免田と周囲の国衙領を加えた「小泉荘」は旧岩船郡のほぼ全域を含むものである［高橋 1999］。その後、小泉荘は旧神林村の有明付近を境に、北側の本来の免田 30 町を基礎とした本庄の部分と、南側と粟島を含めた「加え納めた」土地である加納に分かれ、国衙や領主の思惑により変遷を繰り返した［高橋 1999］。

鎌倉時代の初めに地頭となった秩父季長は、建永元（1206）年、嫡子の行長には本庄を、庶子の為長には加納の地を与えた。今回調査した中世の谷地遺跡はこの本庄側に位置する。

本庄を受け継いだ行長は小泉氏を名乗る。その後、中御門家に代わり小泉荘の領家となった一条家から地頭請所の廃止を求め幕府の裁判所に訴えられた。この事件により小泉氏は正応元（1288）年地頭請所を廃止され、本庄は幕府の直轄地である関東御領とされる。この時期、本庄の現地管理がどのように行われていたかは判然としない。鎌倉幕府崩壊に伴い小泉荘が建武政権に没収された折、小泉持永は本庄持永と名乗り、建武元（1334）年に新政府に対し蜂起している［高橋 1999］。このことから、幕府の直轄領である時も荘園に何らかの土着勢力が存在していたことは想定できる。

阿賀野川以北は阿賀北（揚北　あがきた）とよばれ、関東御家人の子孫が分家、独立しながら荘園を分割領有していた。その中には奥山荘の中条氏、築地氏、羽黒氏などがおり、現在でもその所領が字名として残るものが多い。荒川以北の小泉荘では加納を治めた色部氏、飯岡氏のほか、本庄の領域からは本庄氏、鮎川氏、小川氏などが出ている。各勢力の利害関係が複雑に絡み、この地域の支配を複雑なものにした。

室町時代になり越後は守護の上杉氏と、守護代の長尾氏により統治された。だが、両者は互いの勢力の伸張に伴い対立するようになる。守護代の長尾能景の死後、永正４（1507）年の永正の乱では、現職の守護である上杉房芳が新しい守護代の長尾為景に討たれ、動乱の中で為景が主となる。これに対し享禄４（1531）年、独立の気運が高い小泉荘では、本庄氏・鮎川氏・小川氏・色部氏がほかの国人の勢力を排するため団結する旨の起請文を取り交わした。だが、国人間では利害を抱えるものもあった。中条氏が伊達氏から養子を迎える件では、近隣の黒川氏や本庄氏は反対した。天文８（1539）年の動乱の際、本庄氏は一族の鮎川氏、小川氏に本庄城を奪われ、本庄房長は陣中にて急死する。天文 20（1551）年、房長の嫡子本庄繁長は叔父小川長資を切腹させ本庄城に入り、色部勝長の調停で鮎川清長と和睦している。

※国土地理院 5万分の1 地形図（村上・塩野町・小国・中条）を10万分の1にして使用　一部加筆

第７図　周辺遺跡（古代から中世）分布図

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	滝下	24	堂の下	47	内御堂B	70	館跡	93	衣田
2	猿沢城跡	25	三十刈	48	菅沼かなくそ沢製鉄跡	71	牧目館跡	94	正樹院屋敷
3	滝ノ前東	26	榎清水	49	引地	72	山王	95	長松
4	菅谷城跡	27	はげ	50	家の越	73	山の館	96	十日市
5	下渡山城跡	28	永田	51	宮の越	74	飯岡城跡	97	福田伝古銭出土地
6	下ムクラ	29	六百地	52	輪の内	75	石川	98	渡古屋敷
7	大葉沢城跡	30	七湊宮ノ前	53	上山田宮の前	76	堤下	99	古屋敷
8	谷地	31	道祖神塚	54	千作り	77	草田	100	長三郎山
9	下山	32	道印田	55	王塚	78	中沢	101	西部
10	坊ケ山石塔群	33	七湊屋敷添	56	雪車田	79	水下2	102	中部
11	大館跡	34	八太郎	57	堀下	80	水下1	103	道上
12	天神岡前田	35	上助淵前田	58	有明的場	81	水下4	104	道上東
13	御所館跡	36	前坪	59	南大平城跡	82	在ケ付	105	持体
14	山辺里	37	水口沢	60	元千眼寺跡	83	砂山Ⅳ	106	松沢屋敷添
15	塚の越	38	大場沢	61	高田	84	砂山Ⅲ	107	鯉池
16	松山上野	39	小堰	62	堂田	85	砂山Ⅱ	108	松沢館跡
17	村上城跡	40	フケ田	63	砂山Ⅶ	86	窪田	109	寺田
18	牛沢城跡	41	銅鉄	64	砂山Ⅵ	87	奉行松	110	下谷地東
19	七湊山崎	42	内御堂C	65	砂山Ⅴ	88	飯岡赤谷B	111	下谷地西
20	天王前	43	里本庄経塚	66	在ケ付Ⅱ	89	坂下	112	家ノ後
21	磐舟浦田山古墳群1号墳	44	内御堂	67	在ケ付Ⅲ	90	桃川館跡	113	平林町屋
22	竹の花	45	大木戸	68	松蔭東	91	黒田B	114	千眼寺跡
23	松木田	46	里本庄B	69	田屋道	92	黒田A	115	平林城跡

第１表　周辺の古代から中世の主な遺跡一覧

長尾為景の子、景虎は天文 17（1548）年、越後国主になる。後の上杉謙信である。本庄繁長はこの謙信の支配に対し武田と結び反抗するが、永禄 11（1568）年、謙信に攻められ息子を人質とすることで講和する。天正 6（1578）年の謙信の死に伴う御館の乱では本庄繁長は上杉景勝に味方し、以後景勝に仕える。天正 16（1588）年の庄内における戦いが、豊臣秀吉の私戦禁止令に触れ、本庄領は大国実頼が治めることになる。慶長 3（1598）年、秀吉の命で上杉景勝は会津へ国替えを命じられ、それに伴い本庄繁長も福島城へ移動した。

C　谷地遺跡中世集落と大館跡

谷地遺跡周辺の中世遺跡としては、門前川流域に大館跡（11）、御所館跡（13）がある。このうち大館跡［青木ほか 2008］は発掘調査を行った。調査によって、13 ～ 16 世紀の遺物が出土し、その中でも 15 世紀のものが主体であることが分かった。空堀と中央の土塁に規模の違いがあることから、館は 14 ～ 15 世紀にかけて存続したものの、空堀と外側の土塁については 14 ～ 15 世紀に、内側の大規模な土塁については 15 世紀以降に構築された可能性があることを指摘している［青木ほか 2008］。大館跡から北 600m に谷地遺跡が存在し、日沿道建設に関わる試掘調査で、小谷川以北からこの谷地遺跡の間に中世遺構が広がることを確認している。

谷地遺跡までの間は、検出遺構や出土遺物から 14 ～ 15 世紀の集落と考えられ、大館跡の活動期間とほぼ同じになる。大館跡は出土品から本庄氏との関連が想定されている［青木ほか 2008］。この想定が正しいとすれば、谷地遺跡までの間の中世集落の成立もまた本庄氏と強い関係にあったことがうかがえる。

第Ⅲ章　谷地遺跡

1　遺跡の概要

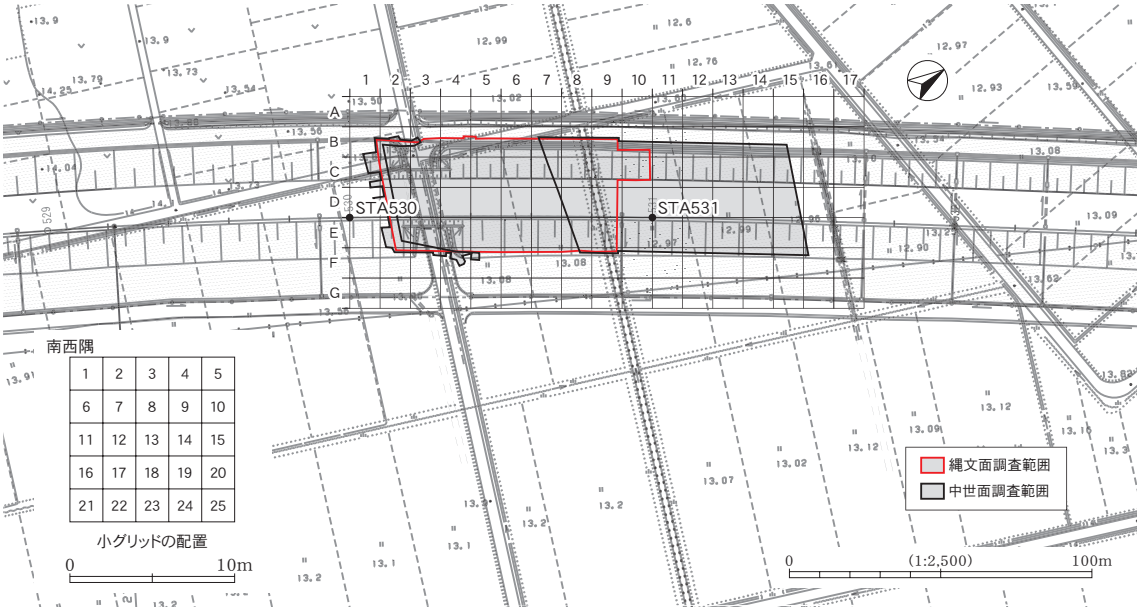
A　概　　観

本遺跡は、三面川の左岸に広がる標高 11 ～ 13m の低湿地部（三面川低地）に立地する。調査によって中世と縄文時代の集落を検出した。遺物包含層は中世がⅡ層、縄文時代がⅧ層で、調査面積は中世 3,107 ㎡、縄文時代 2,670 ㎡の延べ 5,777 ㎡である。遺跡の南側 1 ㎞には、山形県境の山地から西流し三面川に注ぐ門前川が流れ、北側には村上丘陵から流れ出る山田川が西流し、同じく三面川に合流している。遺跡の南西側にある村上市街地は標高 14m ほどの三面川の段丘上（村上段丘）にある。

調査区からは、中世面で掘立柱建物、井戸、土坑、溝などを検出し、遺物は珠洲焼・青磁・白磁などの陶磁器、下駄・槽・曲物・梳櫛などの木製品や建築部材、銭貨・鉄鍋などの金属製品、硯などの石製品が出土した。縄文面では土坑、屋外炉、性格不明遺構などを検出し、遺物は縄文前期の土器、石鏃・石錐・石匙・篦状石器・両極石器・不定形石器・磨製石斧・磨石類・石錘・石皿類・玉類（管玉）などの石器・石製品が出土した。

B　グリッドの設定（第８図）

グリッドの方向は、高速道路のセンター杭を基準として、道路の方向に一致させた。STA530（旧日本測地系　X = 248289.240、Y = 88463.158）と STA531（旧日本測地系　X = 248372.408、Y = 88518.685）とを結んだ線を南北方向の基準線として、10m 四方の方眼を組み、大グリッドとした。このため、グリッドの南北方向は真北から 33° 43′ 44″東偏している。なお調査区中央の 10D グリッドの座標は X = 248369.643、Y = 88504.815 である。



第８図　谷地遺跡グリッド設定図

大グリッドの名称は南西隅を基点とし、南北方向を算用数字、東西方向をアルファベットとして「10D」のように表示した。大グリッドをさらに２m 四方に 25 分割し、小グリッドを設定した。小グリッドは１～ 25 の算用数字で表し、南西隅が１で、北へ２・３・４・５、東へ６・11・16・21 の順で、北東隅を 25 とした。表記は大グリッドの後に付けて「10D15」のように呼称した。

C　発掘調査の方法

１）縄文時代

表土は盛土及び耕作土からなる。耕作土は水田または畑の耕作土を主体とする土で、畑作土は黒色土、水田耕作土は黒灰褐色粘質土である。Ⅱ層は黒色土及び黒褐色粘質土で中世の遺物包含層、Ⅲ層は中世遺構の検出面である。以下Ⅳ～Ⅶ層までは無遺物層であることから、Ⅶ層までを重機で掘削した。縄文時代前期の遺物包含層はⅧ層、遺構検出面はⅨ層上面で、それぞれ人力で、掘り下げと遺構検出を行った。

土層観察　土層観察は、調査区の外周囲に設けた開渠の壁面を利用して行った。また調査区の５ラインに土層観察用のベルトを設置し、これを記録した。さらに東壁の５～６ラインでⅨ層以下の堆積状況を知るため、約４m 深掘りし土層を観察記録した。

遺構検出　調査区の３C グリッドと６E グリッドを結ぶ線を境に、北側と南側では包含層の堆積状況が異なっていた。北側ではⅧ層が層厚 40 ㎝ほどあり、Ⅷａ層、Ⅷｂ層、Ⅷb2 層に分層が可能であったことから、おおむねⅧｂ層上面、Ⅷb2 層上面、Ⅸ層上面で遺構検出を行った。また、南側では層厚 20 ㎝ほどで分層できないことから、Ⅸ層上面で実施している。北側でも西側半分は色調での分層を明確にできなかった部分があったが、東側と層序の整合をとり、Ⅷａ層中の遺構、Ⅷｂ層中の遺構、Ⅷb2 層中の遺構に別けて調査した。

遺構調査　遺構の覆土を掘り下げる前に、外形を確認するため平面での精査を行った。また、重複関係を持つ遺構は新旧関係の確認に注意を払った。覆土の掘り下げは、遺構の片側半分ないし十字にベルトを残し、断層観察の後断面図を作成した。低湿地に立地する遺跡であることを考慮し、遺構の立ち上がりを確実なものにするため、サブトレンチを積極的に設定した。遺物が出土した遺構は、完掘段階で出土状況の写真撮影ができるように掘り進めた。完掘に際しては、遺構の覆土と周囲の土質との区別が付きにくいものがあるため、掘り足りないことがないように注意した。また、検出面で確認できなかった遺構を想定し、完掘後に人力で検出面から約 20 ㎝掘り下げ、遺構の把握に遺漏がないように努めた。

覆土中に炭化物を多く含む遺構では、一部ウォーターセパレーションによる微細遺物の抽出を行い、自然科学分析の試料にした。実測・計測関係では、遺構平面図作成、遺物の取り上げをトータルステーションで行い、土層断面図は手実測で作成した。また遺物出土状況図のような微細図の作成は、一部、効率化を図るため座標を設定した上で、デジタルカメラで撮影しイラストレーターを使用してパソコン上で図化作業を行った。

自然科学分析用試料の選択　年代測定や花粉分析など様々な自然科学分析を行う際には、分析者と現地で協議して試料を選択した。

２）中　　世

遺物包含層の存在しない範囲についてはⅢ層上面まで重機で掘削した。部分的に包含層（Ⅱ層）と考えられる黒色土が遺存する部分は、人力で掘削を行い遺物の検出に努めた。

土層観察　土層観察は、縄文調査区同様、調査区の外周囲に設けた開渠の壁面を利用して行った。また、11・13 ラインに土層観察用のベルトを設置し観察・記録を行った。また、試掘２・９・29 トレンチを掘り返し試掘データとの照合を行った。

遺構検出　遺構の検出はⅢ層上面で行った。遺構上面を覆うⅡ層土は 13B グリッドと 10E グリッドを結ぶ線で土質が異なる。北側は基本土層のⅡ a'・b' 層、南側はⅡ a・b 層である。Ⅲ層は 12 ラインよりも北で河川の影響を受けシルト土が砂質化している。

遺構調査・自然科学分析試料の選択　縄文時代の調査と同様の手法をとった。

D　層　　序

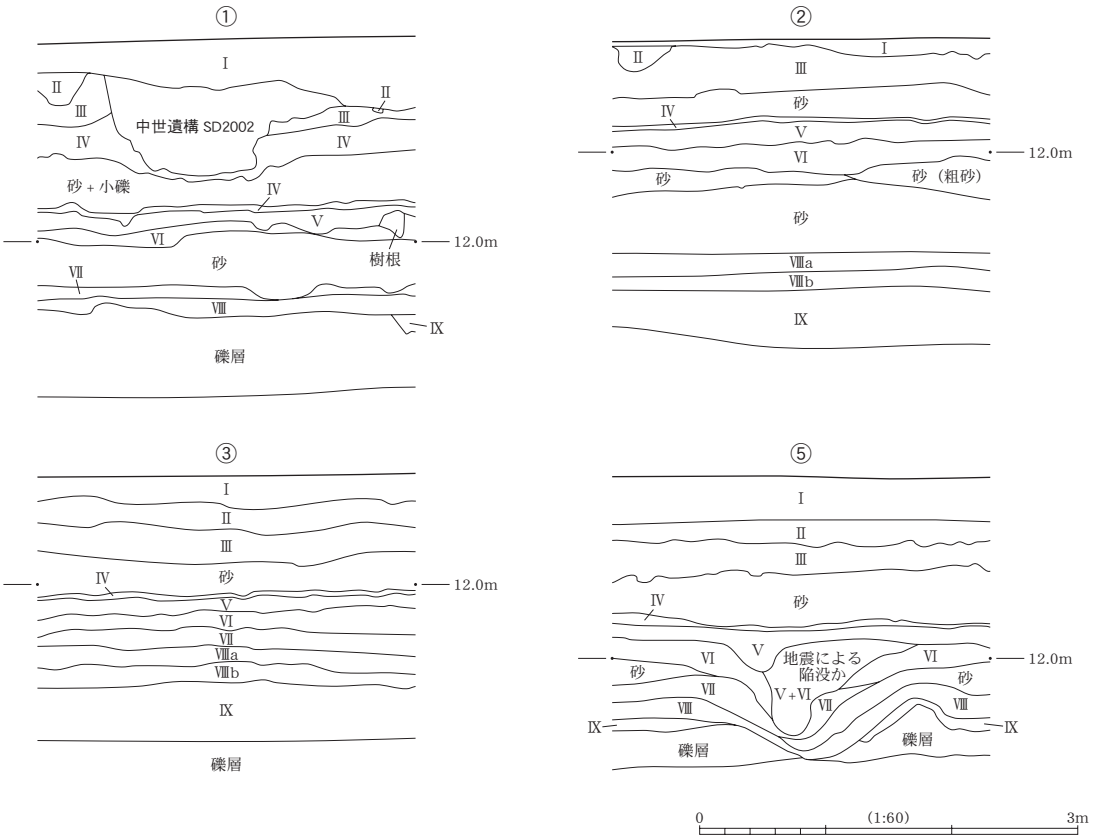
1）概　　要

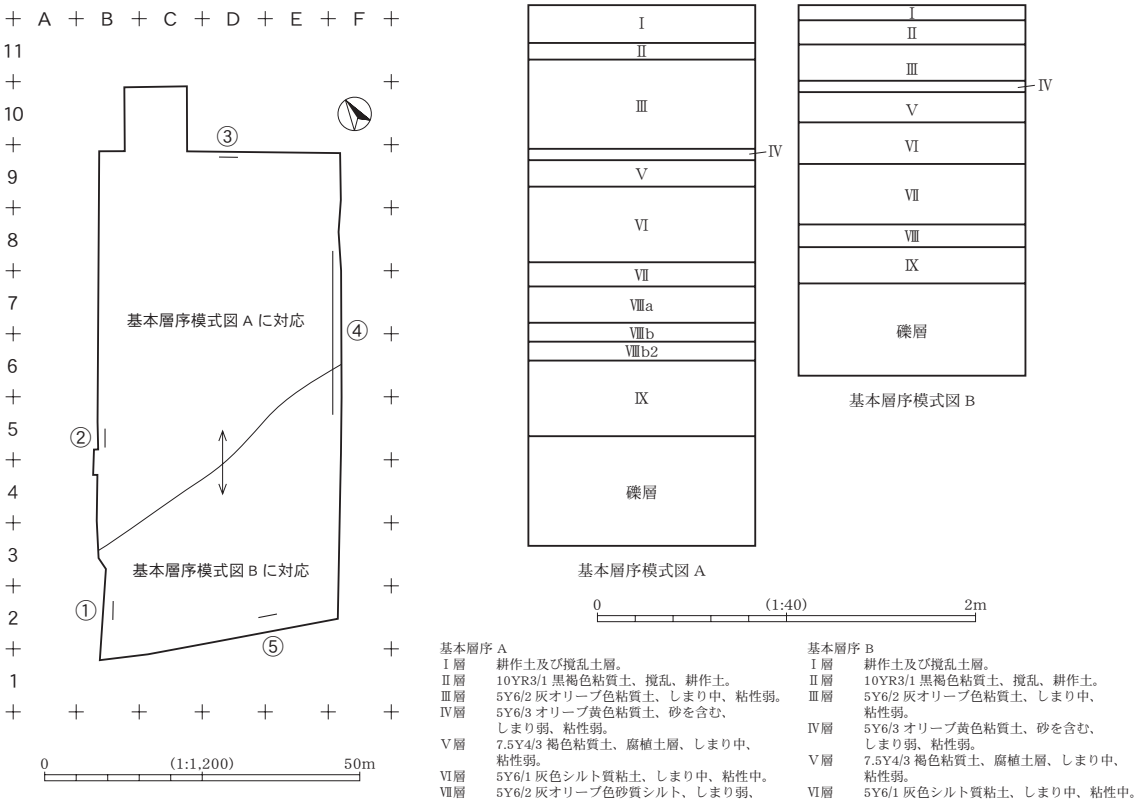
遺跡の層序は、試掘調査時のデータを参考にしながらⅠ～Ⅸ層に分層した。水田耕作土であるⅠ層は大部分が削り取られ、その部分が盛土になっている。Ⅱ層は中世の遺構検出面であるⅢ層との関係から相対的に中世の遺物包含層と考えられるが、遺物との関係を明確に把握できていない。中世遺構の調査では地点により微妙に土質が異なることから、これを a・a'・b・b' に細分した（第 62 図）。Ⅲ層は灰オリーブ色粘質土層で中世遺構の検出面となっている。南側が 20 ㎝程度、北側ではやや厚く 45 ㎝を測る部分がある。Ⅳ層は砂を含むオリーブ黄色粘質土で、概して薄い堆積層である。Ⅴ層は南側では褐色粘質土、北側ではやや色調が暗くなる。土壌化が進んだ土層であるが、遺物は出土しなかった。Ⅵ・Ⅶ層はそれぞれ灰色シルト質粘土層・灰オリーブ砂質シルト層である。Ⅷ層は縄文前期の遺物包含層で調査区の南側では腐植土を多く含みⅤ層と同じ褐色を呈する。土質は下位層の氾濫堆積土（シルト質土と粘土がブロック状に混じる）であるⅨ層がベースで、それに腐植分が浸透してできたものと考えられる。このⅧ層は北側で川の影響を受け土質が変化する。その後６E・６D・５D グリッド地区が湿地化したため、還元したと推測した。その西側の５～７C グリッドでは湿地化せず乾燥化が進み土質はボサボサした黄灰色の土壌に変化したと考えられる。７ラインにある旧河川流路より北側は、５～７C グリッドと同じく黄灰色の土壌で、その後河川の影響を受けて粘土化したものと考えられる。下位層のⅨ層についても前述の部分で同様の影響を受け土質を変えている。Ⅸ層下は礫層となっている。

2）基本層序（第９・10 図）

Ⅰ層は、10 ～ 20 ㎝の厚さを持つ耕作土及び撹乱土層である。調査区の南側は畑の耕作土、北側は水田耕作土である。調査区内は畑の耕作土・水田耕作土が削り取られ、代わりに礫混じりの砂質土を盛土していた。Ⅱ層は、黒褐色粘質土層または黒色土である。10 ～ 15 ㎝の層厚である。この層は耕作による撹乱で部分的にしか遺存していない。Ⅲ層は灰オリーブ色粘質土層で、20 ～ 50 ㎝の層厚を持ち、調査区の北側で厚く堆積している。Ⅳ層はオリーブ黄色の砂混じり粘質土で、層厚は薄く 10 ㎝前後である。Ⅴ層は砂質が強い褐色を呈する腐植土層で、層厚は約 15 ㎝である。この層は調査区の北側ではやや暗い色調に変化する。大館跡方向に設定した試掘トレンチでは、Ⅴ層が安定して連続していることが確認できた。大館跡の更に南にある長割遺跡の縄文後期の遺物包含層と同一層の可能性があるが、本遺跡では遺物は確認できない。Ⅵ層は灰色シルト質粘土層で、層厚は 25 ～ 40 ㎝である。調査区の北側に厚く堆積する。Ⅶ層は灰オリーブ色の砂質シルト層で、層厚は 15 ～ 30 ㎝である。南側でやや厚く堆積する。

Ⅷ層は遺物包含層と遺構検出面となっている。調査区の南側では褐色を呈する腐植土層で、層厚は約

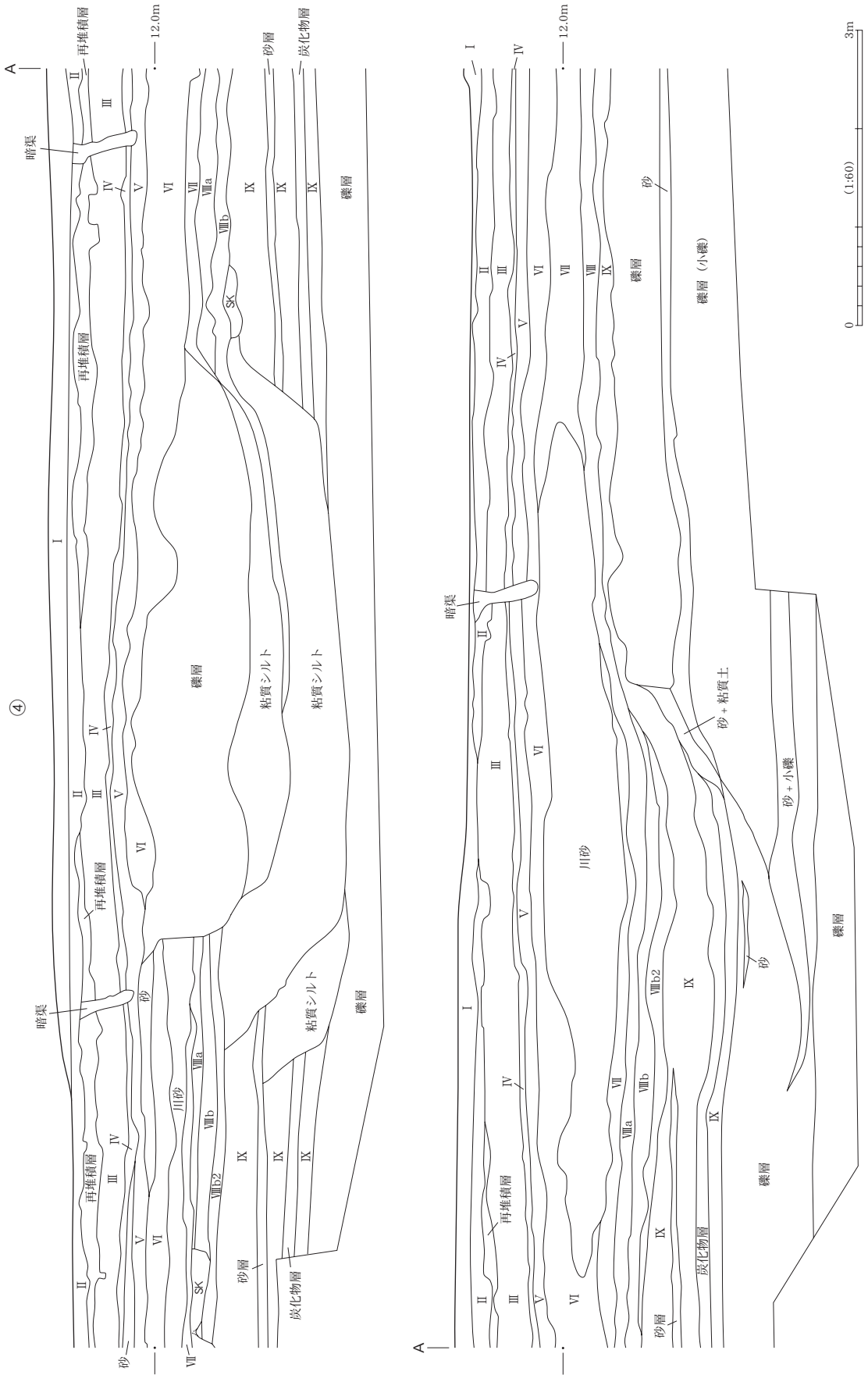




基本層序 A
- Ⅰ層　耕作土及び撹乱土層。
- Ⅱ層　10YR3/1 黒褐色粘質土、撹乱、耕作土。
- Ⅲ層　5Y6/2 灰オリーブ色粘質土、しまり中、粘性弱。
- Ⅳ層　5Y6/3 オリーブ黄色粘質土、砂を含む、しまり弱、粘性弱。
- Ⅴ層　7.5Y4/3 褐色粘質土、腐植土層、しまり中、粘性弱。
- Ⅵ層　5Y6/1 灰色シルト質粘土、しまり中、粘性中。
- Ⅶ層　5Y6/2 灰オリーブ色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。
- Ⅷa 層　5YR4/2 灰褐色粘質土、しまり弱、粘性中。
- Ⅷb 層　7.5YR5/1 褐灰色粘質土、しまり弱、粘性中。
- Ⅷb2 層　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土、しまり弱、粘性中。
- Ⅸ層　5Y6/1 灰色粘質土、しまり強、粘性中。

基本層序 B
- Ⅰ層　耕作土及び撹乱土層。
- Ⅱ層　10YR3/1 黒褐色粘質土、撹乱、耕作土。
- Ⅲ層　5Y6/2 灰オリーブ色粘質土、しまり中、粘性弱。
- Ⅳ層　5Y6/3 オリーブ黄色粘質土、砂を含む、しまり弱、粘性弱。
- Ⅴ層　7.5Y4/3 褐色粘質土、腐植土層、しまり中、粘性弱。
- Ⅵ層　5Y6/1 灰色シルト質粘土、しまり中、粘性中。
- Ⅶ層　5Y6/2 灰オリーブ色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。
- Ⅷ層　7.5Y4/3 褐色粘質土、腐植土層、しまり弱、粘性中。
- Ⅸ層　5Y6/1 灰色粘質土、しまり強、粘性中。

第９図　谷地遺跡（縄文時代）基本層序①



第 10 図　谷地遺跡（縄文時代）基本層序②

20 ㎝ある。北側では土質が変化し、色調も６E・６D・５D グリッドでは灰褐色のシルト質粘土層で、５～７C グリッドでは黄灰色のシルト質土、旧河川流路よりも北側では同色の粘質土になっている。層厚は 30 ～ 40 ㎝で、同層を色調・土質の違いでⅧa・Ⅷb・Ⅷb2 の３層に細分した。６E・６D・５D グリッドでのⅧa 層は灰褐色の粘質土でシルト分が強い。Ⅷb 層は褐灰色粘質土、Ⅷb2 層はオリーブ褐色を呈する粘質土である。５～ 7C グリッドでのⅧa 層は黄灰色のシルト質土でボサボサ感が強い。Ⅷb 層は黄灰色のシルト質土でⅧa 層よりやや暗い色調でしまりが強く、部分的に炭化物を含む。Ⅷb2 層はやはり黄灰色で粘性が強い。拡張区（７B ～８E ライン以北）でのⅧ層中にはⅧb2 層が確認できず、Ⅷa・Ⅷb の２層に分層した。この部分の土質は含水量が多く粘性が強い。

Ⅸ層は、南側では堆積が薄く 10 ㎝程度、東側、北側で厚く約 40 ㎝である。色調は灰色で、シルト質粘土と砂質シルトが細かくブロック状に混じる氾濫堆積土で、全体的にしまりが強い。北側調査区の６E・６D・５D グリッドと拡張部では粘土化している。Ⅸ層下は礫層で砂礫が薄く互層になっている。

E　記述の方法

１）方　　針

本報告書は、谷地遺跡（縄文･中世）、八太郎遺跡、田屋道遺跡Ⅱ、宮の越遺跡Ⅱを収めている。このため、まず全体にわたる記述の方針を示した上で、個々の遺跡における仕様については各章で説明を加えたい。

遺構の説明は、本文・観察表・図面図版・写真図版を用いて行う。遺構の概要を述べた後、重要度の高い遺構について個別にこれを図示し、説明を行った。なお本文中の遺構規模について、全長が不明なものは（　）に残存値を示した。

２）遺 構 番 号

遺構個々の名称は、遺構種別・番号の順に表記した遺構番号で表す。遺構種別は略称を用い、屋外炉を「F」、土坑を「SK」、性格不明遺構を「SX」、ピットを「P」、遺物が集中して出土した地点を「遺物集中」、掘立柱建物を「SB」、井戸を「SE」、溝を「SD」とした。番号は遺構の種別に関係なく検出順に通し番号とした。

なお、谷地遺跡中世遺構の番号は、縄文時代の遺構と区別するため 2000 番台から附番した。掘立柱建物については、遺構の通し番号と別に番号を付けた。

３）遺構の分類（第 11 ～ 13 図）

遺構の形状・断面形・覆土の堆積状況については［荒川・加藤 1999］を参考にした。

平面形は、円形、楕円形、長楕円形、隅丸方形、隅丸長方形、不整形の６種類に分類した。ただし性格不明遺構の平面形について、短い溝状を呈するものは短溝とした。断面形は、台形状、箱状、弧状、U 字状、V 字状、漏斗状、階段状の８種類に分類しその基準を示した。

遺構覆土の堆積状況は、A 単層、B レンズ状、C 水平、D 水平・レンズ状、D 斜位、F ブロックの６種類に分類した。

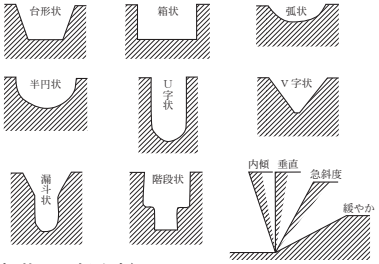
４）図　　版

遺構の図面図版は、全体図・分割図・個別図で構成している。また、土層断面図の色調は

円形	円形を基調とし、長軸が短軸の 1.2 倍未満のもの。
楕円形	円形を基調とし、長軸が短軸の 1.2 倍以上 1.5 倍未満のもの。
長楕円形	円形を基調とし、長軸が短軸の 1.5 倍以上のもの。
隅丸方形	隅丸方形を基調とし、長軸が短軸の 1.2 倍未満のもの。
隅丸長方形	隅丸方形を基調とし、長軸が短軸の 1.2 倍以上のもの。
不整形	凸凹で一定の平面形を持たないもの。ただし、おおよその形状がわかるものは、不整円形・不整楕円形・不整長楕円形・不整方形・不整長方形と呼ぶこともある。

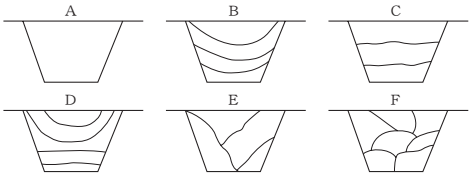
第 11 図　遺構の平面形状の分類（荒川・加藤 1999 から転載　一部改変）

台形状	底部に平坦面を持ち、緩やか～急斜度に立ち上がるもの。
箱状	底部に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
弧状	底部に平坦面を持たない弧状で、緩やかに立ち上がるもの。
半円状	底部に平坦面を持たない椀状で、急斜度に立ち上がるもの。
U字状	確認面の長軸よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
V字状	点的な底部を持ち、急傾斜に立ち上がるもの。
漏斗状	下部がU字状、上部がV字状の二段構造からなるもの。
階段状	階段状の立ち上がりを持つもの。広い中段（テラス）を持つものも含める。



第 12 図　遺構の断面形状の分類（荒川・加藤 1999 から転載　一部改変）

A	単層	覆土が均一とみなされるもの。
B	レンズ状	覆土が複数層、レンズ状に堆積するもの。
C	水平	覆土が複数層、水平に堆積するもの。
D	水平・レンズ	覆土が下位は水平に、上位はレンズ状に堆積するもの。
E	斜位	覆土が斜めに堆積するもの。
F	ブロック状	覆土がブロック状に堆積するもの。



第 13 図　遺構覆土の堆積状況の分類（荒川・加藤 1999 から転載　一部改変）

『新版　標準土色帖』［小山・竹原 2005］に基づいている。写真図版は、個別図にある遺構については掲載するように努めたが、すべてを網羅してはいない。各図版の掲載順は全体図→分割図→個別図とした。また、遺物の写真図版の配置は図面図版に合わせた。

個別図における出土遺物のうち、礫については遺構の性格を考える上で必要と判断したものについて掲載した。全体図は 1/300 の平面図ですべての遺構を表示した。分割図は縄文・中世ともに 1/150 の縮尺で作成した。個別図は、平面図・土層断面図・エレベーション図などで構成しており、掘立柱建物を 1/80 とした以外は、おおむね 1/40 の縮尺で作成した。

5）観　察　表

谷地遺跡（縄文時代）は報告書掲載分を、そのほかの遺跡はすべての遺構について種別ごとに掲載した。項目は、位置、形状、規模、覆土、出土遺物、重複関係などである。遺構の軸については長軸･短軸とした。規模・形状の項目で（　）付きで表した数値は残存値であり、本文の記載もこれに対応させた。計測できないものは空欄とした。なお、深さは検出面から底面までの最大値とした。ただし、屋外炉で底面の一部に窪みを有すものは、窪み部の深さを除いた。重複関係は「＜」、「＞」、「＝」、「？」の記号を用いて示した。「＜ F660」とは F660 より古く、「＞ F660」とは F660 より新しいことを示す。「＝ F660」は F660 と同時に存在していることを示す。「？ F660」は F660 と重複関係にあるが新旧は不明であることを示す。また、遺物観察表については土器・陶磁器類は（　）で推定値・残存値を、そのほかは（　）で残存値を示した。本書の観察表は上記の方法で記載したが、特例については遺跡ごとに基準を示した。

2　遺 構 各 説（縄文時代）

A　概　　要

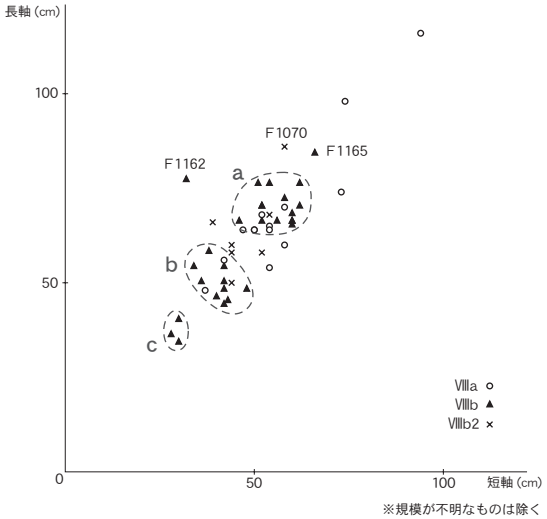
本遺跡で検出した遺構は、屋外炉66基(住居の可能性がある性格不明遺構に属すると考えられる炉3基を含む)、土坑 117 基、性格不明遺構 25 基（住居の可能性がある遺構3基を含む)、遺物集中8か所（住居の可能性がある性格不明遺構に属するもの3か所を含む)、ピット 1,241 基（住居の可能性がある性格不明遺構に属するピット 137 基を含む）である。遺構の検出状況はグリッドの 6E と 3C を結ぶライン上にある東西の谷地形を境にして様相が異なる。このため便宜的にこのラインの北側にある遺構を「北側調査区の遺構」、南側にある遺構を「南側調査区の遺構」と呼称し、分けて記述した。また、層序で記述したように北側と南側では遺物包含層の土質及び堆積状況が異なり、北側では遺構をⅧa・Ⅷb・Ⅷb2 の3層に分けて検出した。このことから北側の遺構は「Ⅷa 層中の遺構」・「Ⅷb 層中の遺構」・「Ⅷb2 層中の遺構」に分けて記述する。

南側ではピット、円形～楕円形を呈する小型土坑、溝状や住居の可能性がある性格不明遺構などがある。また、大部分のピットが南側調査区に集中していることも特徴的である。一方北側調査区では、屋外炉がⅧa・Ⅷb・Ⅷb2 の各層で検出できた。また土坑も長軸 1.5m を超える大型のものや、隅丸方形の平面形を持つものを検出し、住居と考えられる性格不明遺構も2基検出した。7F ～ 7B グリッドには、Ⅴ層直下からⅨ層下の礫層にまで浸食が達する河川が存在し、遺物包含層であるⅧb 層土が流れ込んでいることから、一時期遺跡と同時に存在した河川であることが分かっている。この河川よりも北側にも遺跡は広がるが、遺構密度は薄く、8C グリッド付近に土坑と屋外炉を数基検出したに留まった。

屋外炉

本遺跡で検出した屋外炉（住居の可能性がある性格不明遺構に属するものを除く）は 63 基で、すべて北側調査区で検出した。炉の構造は地床炉で、底面に円形の窪みがあるものとないものがある。層ごとの検出数は、Ⅷa 層が 17 基、Ⅷb 層が 36 基、Ⅷb2 層が 10 基である。炉の平面形は円形が 16 基、楕円形が 33 基、長楕円形が4基、隅丸長方形が3基、不整形及び形状不明が7基である。平面形における層位ごとの特徴は見られない。

炉の規模を層位ごとに見ると（第 14 図)、Ⅷa 層の炉については、長軸で 0.6 ～ 0.7m の間、短軸で 0.45 ～ 0.6m の間でまとまりがある。このほかに長短軸が 0.7 ～ 1 m を示す大型のものが2基と、長短軸 0.4 ～ 0.45m の小型のものがある。Ⅷb 層のものは、a ～ c の3つのまとまりがある。a は長軸が 0.65 ～ 0.8m の間、短軸が 0.45 ～ 0.65m の間、b は長軸が 0.45 ～ 0.6m の間、短軸が 0.4 ～ 0.5m の間、c は長軸が 0.35 ～ 0.45m の間、短軸が 0.3m にまとまる。Ⅷb 層の炉で、このグルーピングから外れるものが2基ある。ひとつ（F1162）は長軸値が a グループに属し、短軸が b グループに属する。もう1基（F1165）は、長軸が 0.86m でどのグルー

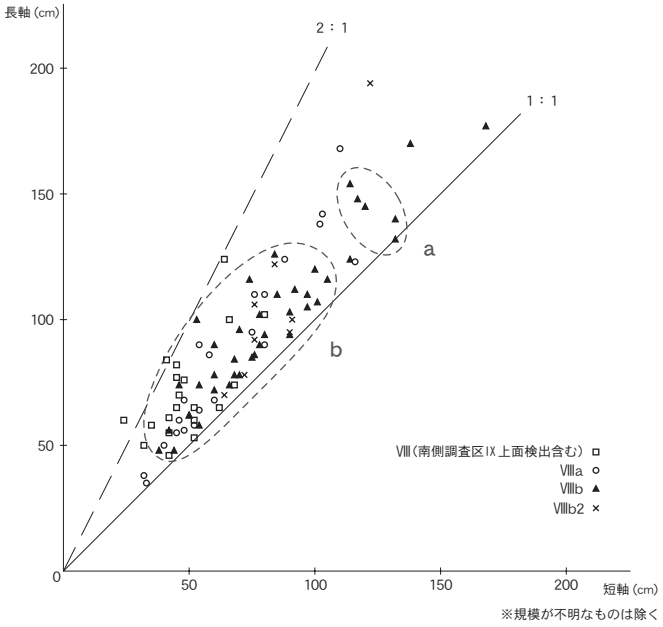


第 14 図　層位ごとの屋外炉の規模

プにも属さず、短軸はａグループに近い。Ⅷｂ層の炉については、その規模に３段階の差があった可能性がある。Ⅷb2 層の炉は、Ⅷｂ層のａ・ｂグループに重なる規模を持つ。１基だけ、これらのグループから外れるもの（F1070）があるが、長軸の規模は前述の F1165 に近い。

土坑

本遺跡で検出した土坑は 117 基で、層位ごとの内訳は南側調査区のⅧ層（Ⅸ層上面含む）から 23 基、北側調査区Ⅷａ層から 25 基、Ⅷｂ層から 58 基、Ⅷb2 層から 11 基である。土坑の平面形は円形・楕円形・長楕円形・隅丸方形・隅丸長方形などである。南側調査区では、方形を基調とする平面形を持つものはなく、長楕円形のものが多い。



第 15 図　層位ごとの土坑の規模

土坑の規模を層位ごとに見ると（第 15 図）、Ⅷ層検出の土坑については、軸のまとまりが長軸 0.5 ～ 0.8m、短軸 0.2 ～ 0.8m の範囲にある。Ⅷａ層検出の土坑については、長軸 0.5 ～ 0.7m、短軸 0.4 ～ 0.6m の範囲にまとまりがある。この範囲から外れる大型のものが長軸 0.9 ～ 1.7m、短軸 0.5 ～ 1.2m の範囲に 11 基存在する。Ⅷｂ層では、２単位（a･b）のまとまりがある。a は長軸 1.3 ～ 1.6m、短軸 1.1 ～ 1.3m の範囲にグルーピングできた。一方、b は長軸 0.5 ～ 1.3m、短軸 0.4 ～ 1.1m の範囲にわたる。Ⅷb2 層検出の土坑には２単位のまとまりがある。一つは長軸 0.7 ～ 0.8m、短軸 0.6 ～ 0.7m の範囲、もう一つは長軸 0.9 ～ 1.2m、短軸 0.7 ～ 0.9m の範囲である。土坑の規模は、層位ごとに数グループに分かれるが、長軸・短軸比を見ると、ほぼ一定している。このことから、土坑の平面規模についてはある程度規格性があることがうかがえる。

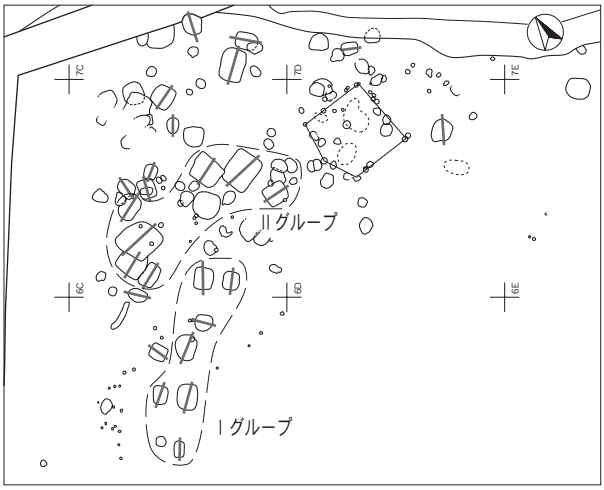
土坑の長軸方向を層位ごとに示した（第２表）。Ⅷａ層の土坑の長軸方向では、Ｎ０°～ 30°Ｅ・Ｗ近辺にまとまりがある。このことから、Ⅷａ層の土坑の長軸方向は比較的北方向を意識していると推測する。また、北側調査区から検出したⅧｂ層の土坑について、長軸方向と検出位置を見ると（第 16 図）、Ⅰグループは長軸が１m 程度、長軸方向が N31°Ｅ～ 60°Ｅの土坑が、Ⅱグループは長軸が 1.5m 程度、長軸方向

Ⅷ層（南側調査区Ⅸ層上面検出含む）			Ⅷa 層			Ⅷb 層			Ⅷb2 層		
方位	平面形・数量	計	方位	平面形・数量	計	方位	平面形・数量	計	方位	平面形・数量	計
N0 ～ 30° E	不整形 1	1	N0 ～ 30° E	長楕円形 1, 楕円形 2, 円形 3, 隅丸長方形 1	7	N0 ～ 30° E	長楕円形 1, 楕円形 2, 円形 1, 隅丸方形 1, 不整楕円形 2	7	N0 ～ 30° E	楕円形 1	1
N31° E ～ 60° E	長楕円形 3, 円形 2	5	N31° E ～ 60° E	隅丸方形 1	1	N31° E ～ 60° E	楕円形 2, 隅丸長方形 5, 隅丸方形 4	11	N31° E ～ 60° E	円形 1	1
N61° E ～ 90°	長楕円形 1, 楕円形 1, 円形 1	3	N61° E ～ 90°	隅丸方形 1, 円形 1	2	N61° E ～ 90°	長楕円形 1, 楕円形 2, 円形 1, 隅丸長方形 1, 隅丸方形 3	8	N61° E ～ 90°	楕円形 1, 隅丸長方形 1	2
N1° W ～ 30° W	長楕円形 1, 楕円形 1	2	N1° W ～ 30° W	楕円形 4, 隅丸長方形 1	5	N1° W ～ 30° W	楕円形 1, 隅丸長方形 1, 隅丸方形 1	3	N1° W ～ 30° W	楕円形 1	1
N31° W ～ 60° W	長楕円形 2, 楕円形 1, 円形 1	4	N31° W ～ 60° W	長楕円形 1, 楕円形 2	3	N31° W ～ 60° W	長楕円形 2, 楕円形 1, 円形 1, 隅丸長方形 2, 隅丸方形 1	7	N31° W ～ 60° W		0
N61° W ～ 89° W	長楕円形 2, 楕円形 1	3	N61° W ～ 89° W	長楕円形 1	1	N61° W ～ 89° W	隅丸方形 1	1	N61° W ～ 89° W	長楕円形 1	1

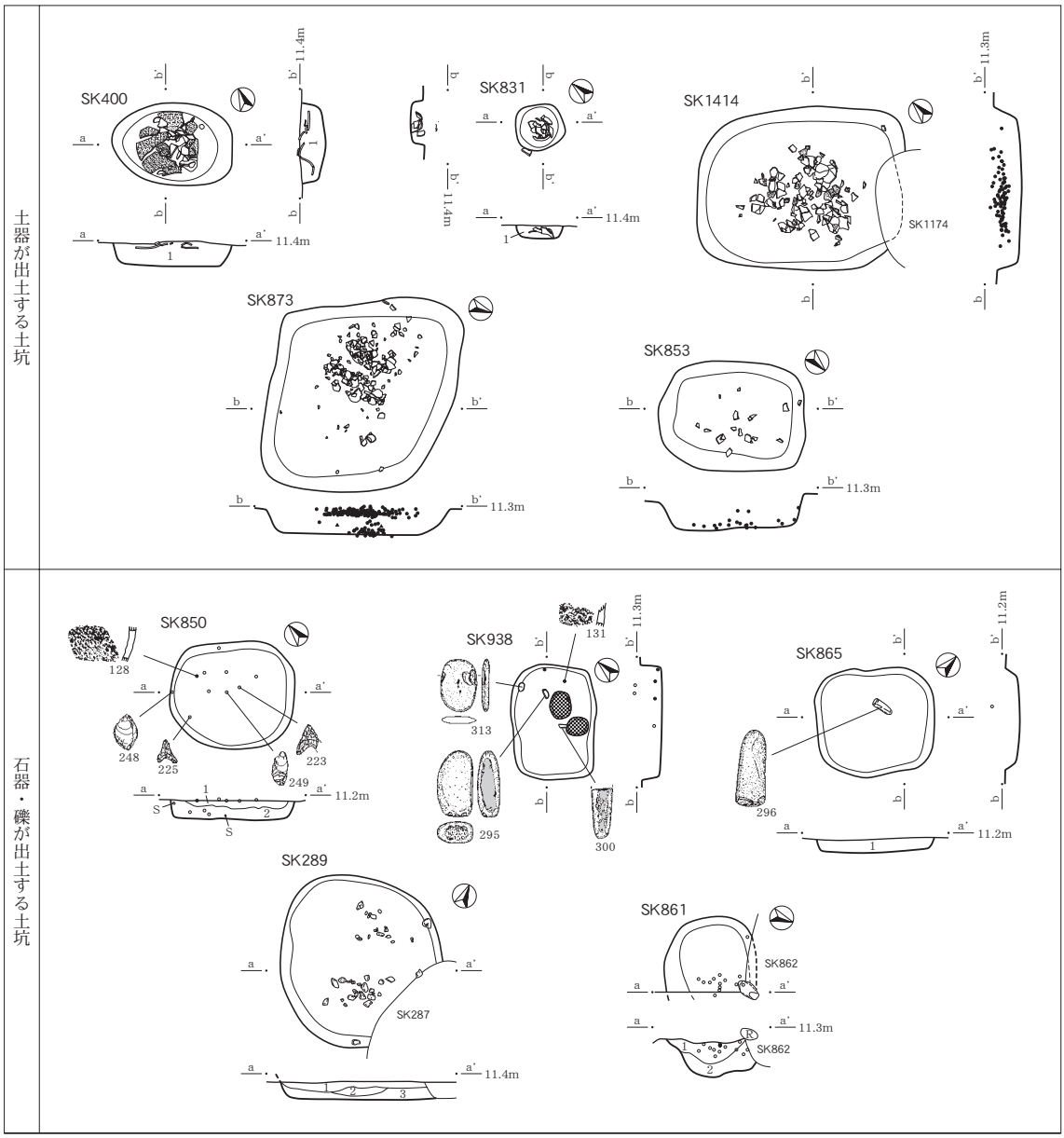
第２表　土坑長軸方向ごとの平面形数量

がN61° E～90°の土坑が主体をなす。規模と長軸方向でまとまりがあることから、何らかの規格や意図を持って土坑を構築した可能性がある。

土坑内の遺物出土状況（第17図）は、土器が出土するものと石器・礫が出土するものに分けられる。前者は、土器片が覆土中からある程度個体の形状を保って出土するもの(SK400)、土器底部を正位で土坑底面に置いたもの（SK831)、個体の形状を保たないが、覆土中からほぼ1個体分の土器片が出土するも



第16図　Ⅷb層の土坑の長軸方向と位置

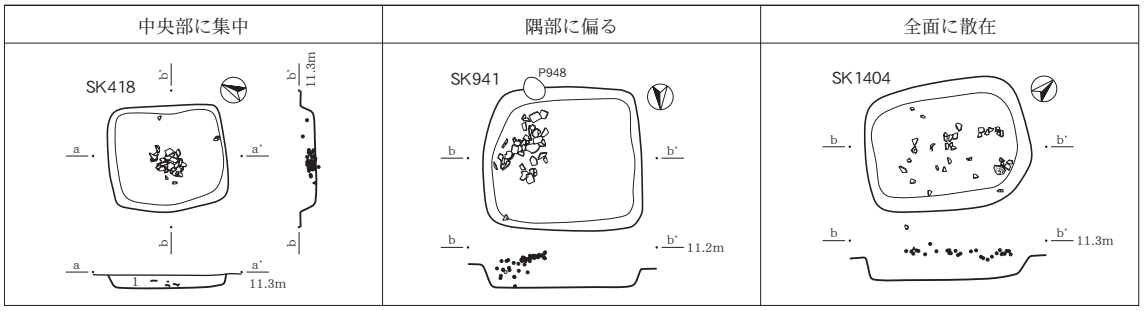


第17図　土坑内遺物出土状況

の（SK1414）、個体の形状を保たないが、覆土中から複数個体分出土するもの（SK873）、１個体分に満たない量が覆土中から出土するもの（SK853）などがある。

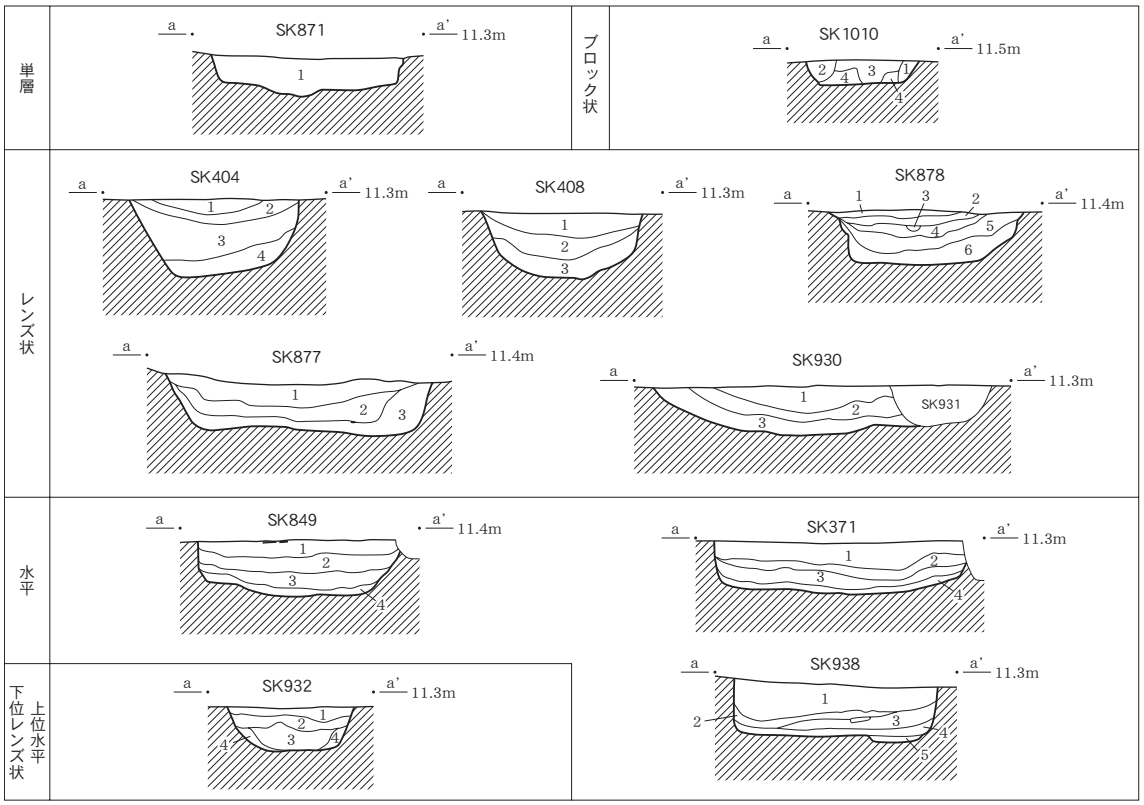
後者は、土器片と石器が出土するもの（SK850・938）、石器・礫が出土するもの（SK865）、覆土中に小礫を大量に含むもの（SK289）、覆土中に剝片・砕片を大量に含むもの（SK861）などがある。

土坑内における遺物の平面的な出土位置（第 18 図）は、中央部に集中して出土するもの（SK418）、隅に偏って出土するもの（SK941）、全面に散在するもの（SK1404）がある。



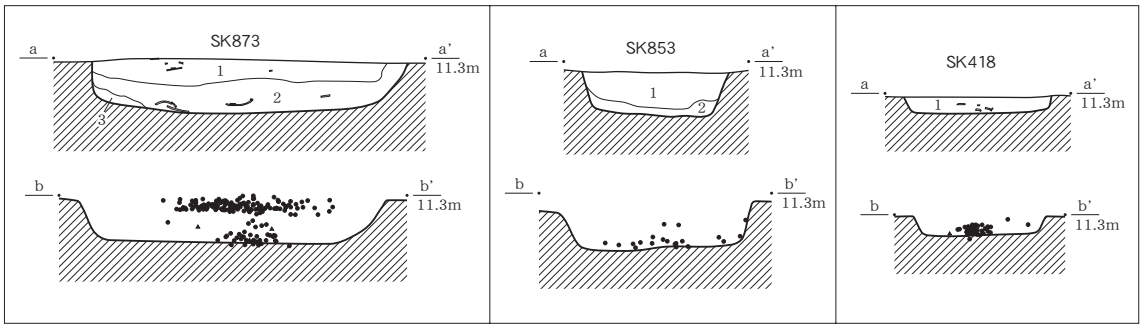
第 18 図　土坑内遺物出土位置図

土坑覆土の堆積状況を見ると（第 19 図）、単層のもの（SK871 ほか）71 基、ブロック状に堆積するもの（SK1010）１基、レンズ状に堆積するもの（SK287・289・362・372・404・406・408・446・752・850・852・855・859・861・862・872・875・877 ～ 879・890・930・941・1001・1051・1052・1053・1071・1113・1116・1137・1172・1214・1261・1361）35 基、水平堆積するもの（SK371・849・853・873・933・936・938・944・1175）９基、上位は水平堆積、下位はレンズ状堆積をするもの（SK932）１基である。このことから、分層された 45 基の堆積状況はそのほとんどがレンズ状堆積と水平堆積であると言える。



第 19 図　土坑土層堆積状況

遺物の垂直分布と土層断面図を比較すると（第 20 図）、SK873 は、土器が覆土の上層で水平に出土し、下位はブロック状である。接合の結果、３個体の土器（110・111・112）を復元した。SK853 では土坑底面に薄く堆積している第２層から土器が出土した。また、SK418 は土層は単層だが、遺物は土坑中央にかたまって出土している。通常、覆土が水平堆積やレンズ状堆積を示すものは自然堆積とされることが多いが、谷地遺跡の土坑の土層堆積状況と遺物の出土状況の関係を見ると、水平堆積・レンズ状堆積を示す土坑の覆土がすべて自然流入とするには疑問が残る。



第 20 図　土層断面及び遺物出土状況図

B　南側調査区の遺構

1）土　　坑

南側調査区で検出した土坑は 23 基である。形状は円形・楕円形・長楕円形などで深さは 10 ㎝前後のものが多い。遺物が出土したのは SK446 と SK845 の２基である。

SK446（図版３・６・97）

５E ８・９・13・14 グリッドに位置する。Ⅷ層上面で土器の広がりを確認、これにサブトレンチを設定して遺構の立ち上がりを土層断面で観察した。結果、北東側ではⅧ層中で 13 ㎝ほどの立ち上がりが確認できたが、南西側では確認できなかった。遺物の広がりと遺構の立ち上がりを確認できた部分から全体形は長楕円形と推測される。覆土は２層に分けた。Ⅷ層土が主体で１層はやや色調が暗い。規模は長軸は不明だが短軸は（1.08）m で、長軸方向は N80° E である。遺物は検出面に集中した。出土土器のうち深鉢（図版 29 - ４）と鉢（図版 29 - ５）の２個体を図示した。

SK479（図版２・６）

２C19 グリッドに位置する。Ⅷ層下位で検出した。平面形は卵形に近い長楕円形で、断面形は弧状である。覆土は単層でⅧ層土が均一に入る。規模は長軸 0.82m、短軸 0.45m、深さ 0.1m、長軸方向は N50° E である。

SK578（図版２・６）

３C12 グリッドに位置する。Ⅸ層上面で検出した。平面形は円形で、断面形は弧状である。覆土は単層である。Ⅷ層土が主体で、Ⅸ層土がこれに混じる。規模は長軸 0.53m、短軸 0.52m、深さ 0.05m である。

SK611（図版２・６）

３C ９・10 グリッドに位置する。Ⅸ層上面で検出した。遺構の北側で P612 と、南側で P610・613 と重複し P612・613 より新しく、P610 より古い。平面形は長楕円形で、断面形は弧状である。底面には凹凸がある。覆土は単層で、Ⅷ層土が主体である。規模は長軸 0.77m、短軸 0.45m、深さ 0.1m、長軸方向は N54° E である。

SK680（図版２・６）

２D15、３D11 グリッドに位置する。Ⅸ層上面で検出した。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。覆土は単層で、Ⅷ層土が主体である。規模は長軸 0.65m、短軸 0.52m、深さ 0.08m、長軸方向は N72° W である。

SK845（図版２・６・97）

２D ５、３D １グリッドに位置する。Ⅸ層上面で検出した。平面形は円形で、断面形は台形状である。礫層まで掘り込まれている関係で底面には凹凸がある。覆土は単層である。Ⅸ層土が主体でこれにⅧ層土が混じる。覆土の中位から底面にかけて口縁部から底部 1/4 個体ほどの深鉢（図版 29 - １）が折り重なるように出土した。規模は長軸 0.65m、短軸 0.62m、深さ 0.09m、長軸方向は N46° E である。

SK1113（図版２・６）

３D ２・３グリッドに位置する。Ⅸ層上面で検出した。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。底面は礫層まで掘り込まれている関係で凹凸がある。覆土は２層からなり、中央にはⅧ層土、その周囲にはⅧ層とⅨ層の混合土が堆積する。規模は長軸 0.55m、短軸 0.42m、深さ 0.11m、長軸方向は N48° W である。

SK1116（図版２・６）

３D ８・13 グリッドに位置する。Ⅸ層上面で検出した。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。覆土は２層に分けた。Ⅷ層土が主体だが下位層では色調がやや暗い。規模は長軸 0.65m、短軸 0.45m、深さ 0.09m、長軸方向は N7° W である。

２） 性格不明遺構

性格不明遺構には、溝状の遺構（SX185・199・258・368・511 ～ 513・526・568・725・738・793・838・902・1000・1022・1104・1105・1331・1337・1442）と溝とその周囲に展開するピット群からなる住居の可能性を考えられる遺構（SX169）、不整方形を呈し、覆土中に焼土を伴う遺構（SX458）がある。溝状遺構については、幅が 30 ㎝ほどのものが多く、長さに長短があり、湾曲していることに特徴がある。また、溝内面にピットを持つもの（SX1022）、段差を持つもの（SX258）、内部が平坦なもの（SX511）がある。溝状の遺構については、これらの特徴を持つ代表的なものについて述べる。

SX169（図版２・３・７・８・97）

４D・４E グリッドに位置する。Ⅸ層上面で検出した。遺構は北側を開放する U 字型の溝とその外周囲を楕円形に巡る小ピット群により構成される。仮に溝が楕円形に巡ると想定した場合、その範囲の長軸は 3.3m ほどと推測する。短軸は 2.2m、深さは 0.06m である。溝の外周囲を巡るピット群はおおむね小判形を形作っている（第 61 図）。東・北側のピット間隔は 0.65 ～ 0.75m、西・南側では１～ 1.2m になっている。南東側のピットは、P174 と P1419 の間がやや広く 1.1m を測る。また西側のピットは P141 と P284・285 の間が 1.6m と広くなっている。溝とピットで囲まれた内部には中央からやや北に寄って F156 として調査した掘り込みがある。単層で覆土はⅧ層土が主体である。焼土や炭化物が顕著ではなかったが、炉の可能性がある。ピット列の規模は、長軸が 5.6m、短軸は４m、長軸方向は N33° E である。

SX258（図版２・６）

３E12 グリッドに位置する。Ⅸ層上面で検出した。平面形は西側にやや内湾する短溝である。断面形は台形状である。底面には階段状の浅い段差がある。覆土は単層でⅧ層土が主体である。規模は長軸 0.73m、短軸 0.27m、深さ 0.1m、長軸方向は N75° W である。

SX458（図版３・６）

５D22・23、５E ２・３グリッドに位置する。Ⅷ層中で検出した。P1274 と重複し、これより新しい。平面形は不整方形で、断面形は浅い弧状である。底面は礫層面まで掘り込まれている関係で凹凸がある。覆土はⅧ層土が主体で、検出面では焼土と炭化物の範囲を検出した。東側の壁は撹乱のため壊されている。規模は長軸 2.45m、短軸（1.6）m、深さ 0.13m である。

SX511（図版２・６）

２C15 グリッドに位置する。Ⅸ層上面で検出した。平面形は北側に内湾する短溝で、断面形は台形状である。覆土は単層で、Ⅷ層土が主体的である。規模は長軸 0.73m、短軸 0.25m、深さ 0.07m、長軸方向は N90°である。

SX1022（図版２・６）

２E20・25、３E16・21 グリッドに位置する。Ⅸ層上面で検出した。平面形は北側に内湾する短溝で、断面形は台形状である。覆土は２層に分けた。上層はⅧ層土、下層はⅨ層土が主体的である。溝内には径 0.17m ほどの小ピットが２基ある。溝の規模は長軸 2.1m、短軸 0.3m、深さ 0.07m、長軸方向は N75° E である。

3） 遺物集中

南側調査区には遺物（土器）集中が３か所ある。遺物はいずれも遺構に伴うものではなく、遺物の下に掘り込みはない。ただし、遺物集中 384・385 の位置には多数のピットが分布することから、このピット群に伴う遺物の可能性がある。

遺物集中 384（図版２・９）

３D ７・８グリッドに位置する。Ⅷ層中で検出した。分布範囲は 1.4 × 1.2m である。出土した土器のうち、２点（図版 29 - ７・８）を図示した。

遺物集中 385（図版２・９）

３E ２・３・７・８グリッドに位置する。Ⅷ層中で検出した。分布範囲は 1.6 × 1.1m である。出土した遺物のうち、口縁部から胴部 1/4 個体ほどの深鉢（図版 29 - ９）、磨石類（図版 36 - 185）を図示した。

遺物集中 442（図版３・９・98）

４D ３～５・８・９・13 グリッドに位置する。Ⅷ層中で検出した。遺物は 3.6 × 3.2m の範囲に集中している。土器片が立った状態で出土したものがあり、礫が撹拌された様に出土した点も考慮すると河川の氾濫で遺物が動いたことが想定できる。出土した遺物のうち、土器片 13 点（図版 29・30 - 10 ～ 22）、磨石類２点（図版 36 - 182・187）を図示した。

4） ピ　ッ　ト（図版 10）

南側調査区で検出したピットは径 20 ㎝ほどの小型のもの、径 30 ㎝ほどの中型のもの、径 40 ㎝ほどの大型のものに分けた。数量的には小型ピットが多く、全体の約 80％を占める。ピットの断面形は小型に漏斗状・台形状が多く、中型に浅い箱型・弧状のものが多い。また中型・大型には断面形が階段状を呈するものがあり、柱穴の掘形の可能性もある。調査区内におけるピットの分布密度には濃淡がある。ピットについては、撚糸圧痕が付いた土器（図版 29 - ２）が出土した P909 と、同時期の土器（図版 29 - ３）が出土した P892 について図示するとともに、同時期の土器が出土した SK845 の位置を図版 10 に示した。そ

のほかに、形状・断面形について特徴的なピットについても図示した。

C　北側調査区の遺構

北側調査区ではⅧ層を３層に分層したことから、遺構の記述は検出層位ごとに行う。各層の遺構配置を第 21 ～ 23 図に示した。

1）屋　外　炉

浅く掘り込まれ、炭化物・焼土・灰が混じるものを屋外炉として認識した。中央に径 10 ㎝ほどの浅い窪みを持つものが多い。焼土は通常被熱により土壌中の鉄分が酸化して橙色を呈すが、本遺跡の場合は水の影響により黒色を呈すると見られるもの（以下、「黒色土」とする）が多数を占めていた。検出面の状況から、均一に黒色を呈するもの、一部赤色部分が見られるもの、炭化物が部分的に集中しているものがある。また何らかの理由で焼土が掘り込み部から除去された後、地山土と焼土・灰などの混合土で埋め戻されたと推測されるものもある。

a）Ⅷａ層の屋外炉

F167（図版４・11・98）

７C16 グリッドに位置する。SK938 と重複し、これより新しい。平面形は楕円形で、中央から東寄りに径 0.25m のにぶい赤褐色の焼土がある。断面形は浅い弧状で、底面の中央から東寄りに径 0.3m の被熱による硬化面がある。規模は長軸 0.7m、短軸 0.58m、深さ 0.06m である。炉の東側 0.4m の位置で磨石類（図版 37 - 205）が、北側に篦状石器（図版 37 - 200）が出土した。

F190（図版４・11）

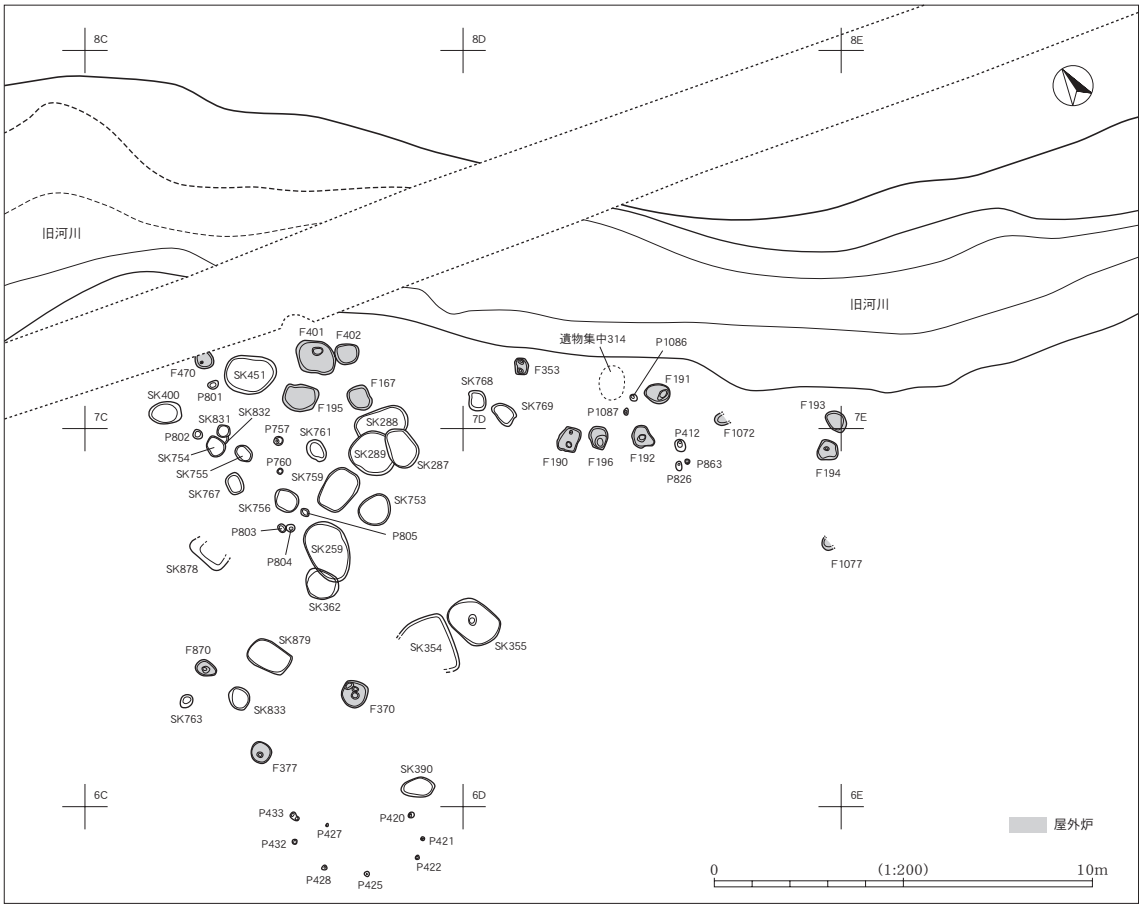
６D10、７D ６グリッドに位置する。SX347（P1099・1152・1153）と重複し、これより新しい。平面形は隅丸長方形で、南西側に焼土混じりの黄灰色シルトの部分が 0.18 × 0.12m の範囲で長楕円形にある。断面形は弧状で、底面の南西側には径 0.15m の浅い窪みがあり、この周囲が被熱により硬化している。規模は長軸 0.65m、短軸 0.54m、深さ 0.07m である。黒色土及びその周辺から土器片（図版 32 - 80・81）と石錘（図版 37 - 218）、炉から１m 北東の地点で磨石類（図版 37 - 216）が出土した。

F191（図版４・11）

７D11 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。南隅にわずかながら焼土がある。底面の南東側に 0.36 × 0.2m の長楕円形の窪みがある。窪みの東側に被熱による硬化面がある。規模は長軸 0.68m、短軸 0.52m、深さ 0.06m である。炉の東側に隣接して胴部から底部 1/4 個体ほどの深鉢（図版 32 - 80）が、また炉の北西 0.5m の所で磨石類（図版 37 - 206）が出土した。

F192（図版４・11）

６D15、７D11 グリッドに位置する。P1088 と重複し、これより新しい。平面形は不整楕円形で、断面形は弧状である。中央に黄灰色シルトと灰・焼土が混じった部分が径 0.2 × 0.15m の範囲であり、断面観察から底面にある 0.24 × 0.2m の浅い窪みの覆土と考えられる。窪み部分は被熱により硬化している。規模は長軸 0.64m、短軸 0.5m、深さ 0.05m である。炉の１m 南西側で磨石類（図版 37 - 207）、黒色土中から石錐（図版 36 - 193）が出土した。



第 21 図　北側調査区Ⅷａ層の遺構全体図

F193（図版４・11）

６D25、６E ５、７D21、７E １グリッドに位置する。SK1160 と重複し、これより新しい。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。底面に径 0.18m の被熱による硬化面がある。規模は長軸 0.64m、短軸 0.47m、深さ 0.06m である。

F194（図版４・11）

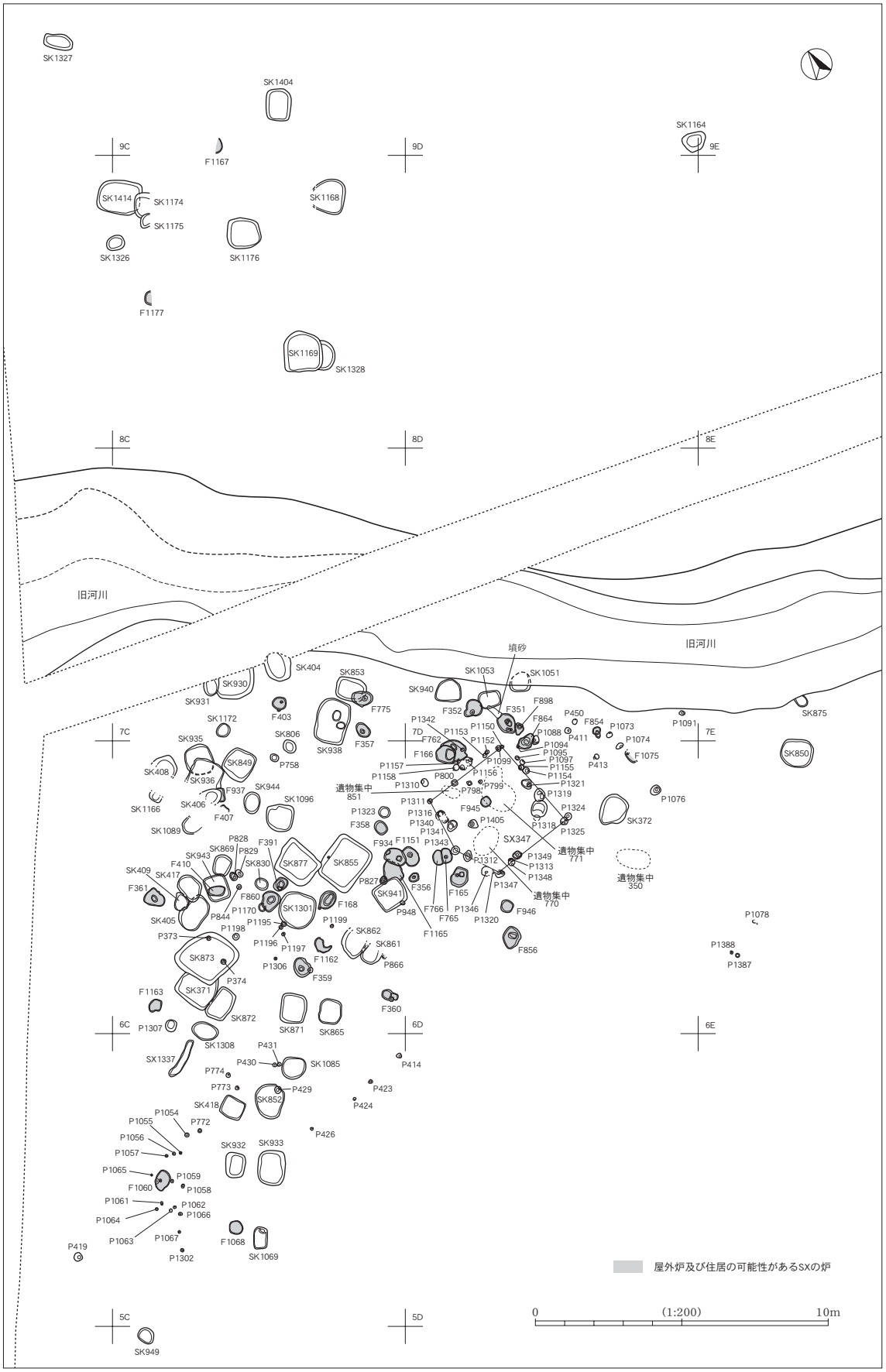
６D25 グリッドに位置する。SX857（溝部分、P1453）と重複し、これより新しい。平面形は不整円形、断面形は弧状である。底面には中央に 0.16 × 0.1m の窪みがあり、この窪みの北側には被熱による硬化面がある。規模は長軸 0.6m、短軸 0.58m、深さ 0.08m である。炉の西側 0.25m の所で磨石類（図版 37 - 204）、北側 1.6m ほどの所に土器片（図版 31 - 76・77）が出土した。

F195（図版４・11）

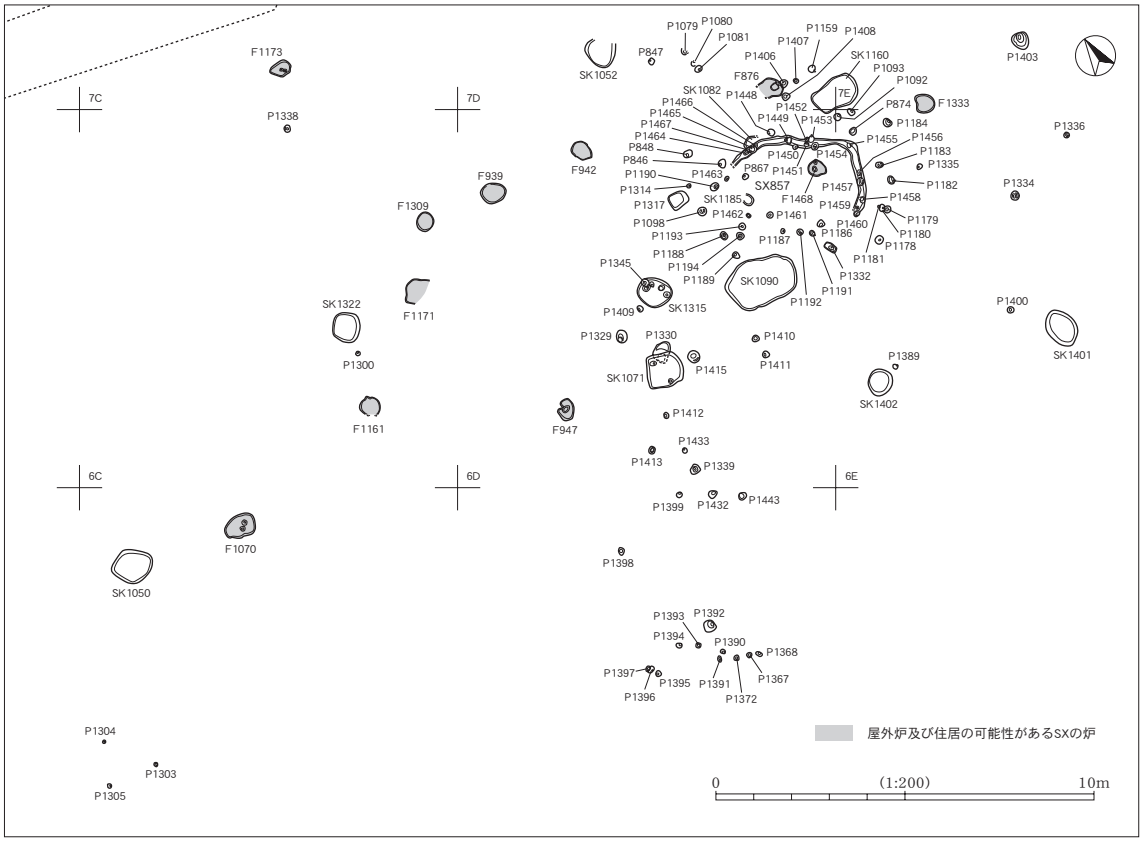
７C11・16 グリッドに位置する。F403・1173 と重複し、これらより新しい。平面形は不整楕円形で、断面形は弧状である。中央に 0.32 × 0.25m の範囲で焼土がある。底面には被熱による硬化面が 0.78 × 0.48m の範囲で広がっている。規模は長軸 0.98m、短軸 0.74m、深さ 0.06m である。炉の北西 1.1m と南西 0.6m の所に磨石類（図版 37 - 214・220）、炉内部から篦状石器（図版 36 - 199）が出土した。

F196（図版４・11・98）

６D10、７D ６グリッドに位置する。SX347（P1094・1150）、F864 と重複し、これらより新しい。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。南側には黒色土と地山土が撹拌された様な部分があり、この直下には 0.35 × 0.27m の楕円形の窪みがある。この窪みの北側は被熱により硬化している。規模は長軸 0.64m、



第 22 図　北側調査区Ⅷｂ層の遺構全体図



第 23 図　北側調査区Ⅷ b2 層の遺構全体図

短軸 0.5m、深さ 0.07m である。炉の南側 1 m の所に篦状石器（図版 36 - 198）と 0.8m の所に土器片（図版 31-78）、北側 1m ほどの所に石匙（図版 36-190）・石鏃（図版 36-188）・篦状石器（図版 36-195）、北東 0.4m の所に土器片（図版 31 - 79）が出土した。

F353（図版 4 ・ 11）

7D 1 グリッドに位置する。SK940 と重複し、これより新しい。平面形は隅丸長方形で、断面形は弧状である。灰や焼土が撹拌された様な部分が 2 か所あり、その直下は 0.18 × 0.14m の浅い窪みになっている。規模は長軸 0.48m、短軸 0.37m、深さ 0.04m である。

F370（図版 3 ・ 4 ・ 11）

6C17 グリッドに位置する。F1162 と重複し、これより新しい。平面形は円形で、断面形は弧状である。検出面には黒色土と地山土・炭化物が細いブロック状に混じった土が広がることから、埋め戻し土と判断した。底面には 0.25 × 0.19m、径 0.2m、径 0.15m の 3 個の円形や楕円形を呈する窪みがあり、これらの周囲は被熱により硬化している。規模は長軸 0.74m、短軸 0.73m、深さ 0.04m である。

F377（図版 3 ・ 4 ・ 12）

6C11 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は弧状である。底面には中央よりやや西に寄って径 0.18m の窪みがある。この窪みの西側が被熱により硬化している。規模は長軸 0.54m、短軸 0.54m、深さ 0.05m である。

F401（図版 4 ・ 12）

7C11 ・ 12 ・ 16 ・ 17 グリッドに位置する。SK404 と重複し、これより新しい。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。中央から北寄りに、0.43 × 0.3m の範囲で焼土が見られる。この直下には 0.28 × 0.2m

の窪みがあり、窪みの周囲には被熱による硬化面がある。規模は長軸 1.16m、短軸 0.94m、深さ 0.08m である。

F402（図版４・12）

７C16・17 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は弧状である。中央に 0.25 × 0.15m の範囲で焼土がある。底面には窪みはないが、中央に 0.28 × 0.1m の硬化面がある。規模は長軸 0.64m、短軸 0.54m、深さ 0.07m である。

b）　Ⅷｂ層の屋外炉

F165（図版３・４・12・99）

６D ３・８グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は弧状である。中央に 0.22 × 0.12m の範囲で焼土がある。底面の中央には 0.14 × 0.1m と径 0.16m の窪みが並んである。窪みの周囲には 0.35 × 0.3m の範囲で被熱による硬化面がある。規模は長軸 0.67m、短軸 0.6m、深さ 0.07m である。炉の南西側 0.8m の地点に剝片（図版 39 - 254）、1.2m の地点に二次加工のある剝片（図版 39 - 253）、使用痕のある剝片（図版 39 - 257）、北西側 0.7m の地点に磨石類（図版 41 - 294）が出土し、掘り込みは確認できなかったが、南側１m の所で埋納石器と考えられる石匙（図版 38 - 234）、石匙未成品（図版 38 - 235）、篦状石器（図版 39 - 239）、使用痕のある剝片（図版 39 - 255・256）が重なって出土した。また、炉の土壌水洗で石鏃（図版 38 - 224）を抽出した。

F166・762（図版４・12）

６D ５・10、７D １グリッドに位置する。F166 が F762 より新しい。F166 は平面形が円形で、断面形は弧状である。中央に 0.38 × 0.35m の焼土の範囲がある。底面の南東側には 0.4 × 0.36m の窪みがある。規模は長軸 0.68m、短軸 0.6m、深さ 0.04m である。覆土中から土器片（図版 34 - 146・147）が出土した。F762 はほかに P1157・1342 と重複し、P1157 より新しく、P1342 との関係は不明である。平面形が楕円形で、断面形は弧状である。検出面では黒色土・焼土・灰・炭化物が細かいブロック状に混じることから、埋め戻した土と判断した。底面のやや北寄りに 0.25 ×（0.15）m の長楕円形の窪みがある。規模は長軸 0.98m、短軸（0.72）m、深さ 0.06m である。覆土中から滑石製の管玉（図版 40 - 269）が出土した。

F168（図版３・４・12・99）

６C18 グリッドに位置する。SK1322 と重複し、これより新しい。平面形は長楕円形で、断面形は弧状である。黒色土の中央に焼土がある。底面には 0.5 × 0.26m の長楕円形を呈する窪みがある。規模は長軸 0.78m、短軸 0.51m、深さ 0.05m である。炉の南側に近接して剝片が出土した。

F351（図版４・12）

７D ６グリッドに位置する。F898 と重複し、これより新しい。平面形は楕円形で、北側は噴砂で一部壊されている。断面形は弧状である。底面の中央に 0.3 × 0.2m の長楕円形の窪みがあり、南西の隅には 0.15 × 0.1m と径 0.1m の窪みが２個並ぶ。中央の窪みは被熱のため南側が硬化している。規模は長軸 0.74m、短軸 0.58m、深さ 0.06m である。

F352（図版４・12）

７D ６グリッドに位置する。SK1053 と重複し、これより新しい。平面形は不整円形で、断面形は弧状である。黒色土の中央に 0.28 × 0.06m の範囲で焼土がある。底面の中央から西側に寄って、径 0.15m の円形の窪みがある。この窪みの東側は被熱により硬化している。規模は長軸 0.68m、短軸 0.6m、深さ

0.08m である。

F356（図版3・4・12）

6D 3グリッドに位置する。SK355 と重複し、これより古い。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。底面中央に 0.12 × 0.1m の楕円形の窪みがある。規模は長軸 0.36m、短軸 0.3m、深さ 0.08m である。炉西側の覆土中から土器片（図版 34 - 148）が出土した。

F357（図版4・12）

7C21 グリッドに位置する。SK288 と重複し、これより古い。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。黒色土に炭化物が集中する範囲がある。底面の中央から西に寄って 0.19 × 0.14m の窪みがあり、周囲が被熱により硬化している。規模は長軸 0.56m、短軸 0.42m、深さ 0.06m である。炉の西側に近接して土器片（図版 34 - 145）が出土した。

F358（図版4・12）

6C24 グリッドに位置する。F1309 と重複し、これより新しい。平面形は隅丸長方形で、断面形は弧状である。規模は長軸 0.48m、短軸 0.4m、深さ 0.08m である。炉の南東側 0.3m の地点で磨石類（図版 42 - 309）が出土した。

F359（図版3・4・13）

6C16･17 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。検出面の土は黒色土と焼土・炭化物がブロック状に細かく混じることから、埋め戻した土と判断した。底面の中央には 0.22 × 0.15m の楕円形の窪みがあり、周囲は被熱のため硬化している。また、南東隅にも径 0.16m の円形の窪みがある。規模は長軸 0.68m、短軸 0.56m、深さ 0.06m である。炉の南西側に近接して磨石類（図版 41 - 293）が出土した。

F360（図版3・4・13）

6C21 グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、断面形は浅い階段状である。底面は北側が一段低くなっている。西側には径 0.17m の円形の窪みがある。規模は長軸 0.56m、短軸 0.34m、深さ 0.06m である。

F361（図版3・4・13）

6C 3グリッドに位置する。平面形は不整円形で、断面形は弧状である。底面の中央に 0.27 × 0.17m の長楕円形の窪みがあり、その東側は被熱のため硬化している。規模は長軸 0.72m、短軸 0.62m、深さ 0.05m である。黒色土中から土器片（図版 34 - 149）が出土した。

F391（図版3・4・13）

6C13 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。底面の中央に 0.36 × 0.23m の長楕円形の窪みがある。この窪みの西側は、被熱のため硬化している。規模は長軸 0.52m、短軸 0.42m、深さ 0.1m である。

F403（図版4・13）

7C11 グリッドに位置する。F195・1173 と重複し、F1173 より新しく、F195 より古い。平面形は円形で、断面形は弧状である。底面の中央やや東寄りに、径 0.1m の窪みがあり、この東側が被熱により硬化している。規模は長軸 0.47m、短軸 0.43m、深さ 0.05m である。

F410（図版3・4・13）

6C 8グリッドに位置する。SK943 と重複し、これより新しい。平面形は長楕円形で、断面形は弧状

である。規模は長軸 0.6m、短軸 0.38m、深さ 0.1m である。

F765・766（図版３・４・13）

６D ３・４グリッドに位置する。F765 が F766 より新しい。F765 の平面形は楕円形で、断面形は弧状である。黒色土の中央に径 0.12m ほどの撹拌された様な土がある。底面中央に 0.14 × 0.1m の窪みがあり、この北側が被熱により硬化している。規模は長軸 0.52m、短軸 0.36m、深さ 0.06m である。F766 の平面形は楕円形で、断面形は弧状である。F765 と長軸方向は同じである。底面の中央に被熱による硬化面がある。規模は長軸 0.52m、短軸（0.3）m、深さ 0.05m である。

F775（図版４・13）

７C21 グリッドに位置する。SK853 と重複し、これより新しい。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。中央に黒色土・地山土・炭化物が撹拌された様な部分がある。底面の中央からやや東寄りに径 0.2m の円形の窪みがある。底面の南側半分に被熱による硬化面がある。規模は長軸 0.72m、短軸 0.52m、深さ 0.08m である。炉の北西側に隣接して使用痕のある剥片（図版 39 - 252）が、西側に土器片（図版 34 - 150）が出土した。

F854（図版４・13）

７D16 グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、断面形は弧状である。黒色土の中央に焼土と灰が混じった部分がある。底面の中央に 0.12 × 0.1m の楕円形の窪みがある。窪みの北側に被熱による硬化面がある。規模は長軸 0.38m、短軸 0.28m、深さ 0.06m である。

F856（図版３・４・13）

６D ７グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。底面の中央に 0.3 × 0.23m の楕円形の窪みがある。窪みの西側には被熱による硬化面がある。規模は長軸 0.78m、短軸 0.62m、深さ 0.15m である。覆土中から土器片が出土した。

F860（図版３・４・13）

６C13 グリッドに位置する。P1170 と重複し、これより新しい。平面形は不整楕円形で、断面形は弧状である。底面の中央に 0.34 × 0.22m の楕円形の窪みがあり、被熱により硬化している。規模は長軸 0.7m、短軸 0.6m、深さ 0.05m である。

F864（図版４・13）

６D10・15、７D ６・11 グリッドに位置する。F196、P1094 と重複し、F196 より古く、P1094 より新しい。平面形は不整楕円形で、断面形は弧状である。黒色土の中央に撹拌された様な土がピット状にある。底面には 0.32 × 0.27m の不整円形の窪みがあり、周囲は被熱のため硬化している。規模は長軸 0.68m、短軸 0.46m、深さ 0.05m である。

F898（図版４・13）

７D ６・11 グリッドに位置する。F351 と重複し、これより古い。平面形は不整楕円形で、断面形は弧状である。検出面では中央に撹拌された様な土が堆積し、この直下に径 0.15m の円形の窪みがある。規模は長軸 0.42m、短軸 0.3m、深さ 0.04m である。

F934（図版３・４・13）

６C23・24、６D ３・４グリッドに位置する。F1151・1165 と重複し、これらより新しい。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。黒色土に炭化物が集中する部分と焼土が集中する部分がある。底面の中央からやや南に寄って径 0.2m の円形の窪みがある。この窪みの北西側に被熱による硬化面がある。また、

北側隅に 0.2 × 0.15m の楕円形の窪みがある。規模は長軸 0.78m、短軸 0.54m、深さ 0.08m である。

F937（図版４・13）

６C ９・10 グリッドに位置する。SK406・936 と重複し、SK936 より新しく、SK406 より古い。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。底面は全体的に被熱により硬化している。規模は長軸 0.48m、短軸（0.1）m、深さ 0.06m である。

F946（図版３・４・13）

６D ８グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は弧状である。黒色土の中央に炭化物が集中する部分がある。底面の中央に径 0.15m の範囲で被熱による硬化面がある。規模は長軸 0.46m、短軸 0.42m、深さ 0.02m である。

F1060（図版３・14）

５C ３グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。底面の西側に 0.2 × 0.15m と径 0.1m の窪みがあり、中央部は被熱により硬化している。規模は長軸 0.72m、短軸 0.52m、深さ 0.08m である。

F1068（図版３・14）

５C ７・12 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は弧状である。黒色土の堆積は薄い。規模は長軸 0.5m、短軸 0.48m、深さ 0.06m である。

F1075（図版４・14）

６D20 グリッドに位置する。東側をトレンチで壊されている。SK1082 と重複し、これより新しい。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。黒色土の北隅に撹拌された様な土が径 0.12m の範囲で円形にある。この直下には窪みがある。規模は長軸 0.5m、短軸（0.14）m、深さ 0.08m である。

F1151（図版３・４・14）

６C23・24、６D ３・４グリッドに位置する。F934 と重複し、これより古い。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。底面の中央に径 0.17m の窪みがあり、この窪みから北側の面が被熱により硬化している。規模は長軸 0.68m、短軸 0.52m、深さ 0.08m である。

F1163（図版３・４・14）

６C １グリッドに位置する。平面形は不整円形で、断面形は弧状である。検出面では中央から東半は炭化物を多量に含み、北東の隅に撹拌された様な土がある。底面の中央に被熱により硬化した面がある。規模は長軸 0.5m、短軸 0.42m、深さ 0.06m である。

F1165（図版３・４・14）

６C23 グリッドに位置する。F934・1171、SK355・941、P827 と重複し、F1171 より新しく、F934、SK355・941、P827 より古い。平面形は不整楕円形で、断面形は弧状である。規模は長軸 0.86m、短軸 0.66m、深さ 0.07m である。

c）　Ⅷb2 層の屋外炉

F876（図版４・14）

７D16・21 グリッドに位置する。P1406 と重複するが新旧関係は不明である。炉の西側を縄文面北側調査区のトレンチで壊されている。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。黒色土には炭化物が集中する部分がある。底面の中央東寄りに、径 0.2m の円形の窪みがあり、被熱により硬化している。また、

東隅には 0.14 × 0.1m の楕円形の窪みがある。規模は長軸（0.5）m、短軸 0.58m、深さ 0.08m である。炉の北東側 0.2m の所で磨製石斧（図版 40 - 268）が出土した。

F939（図版４・14）

６D ４・５グリッドに位置する。SX347（P1311）と重複し、これより古い。黒色土の中央に粘土･焼土･灰が混ざり 0.2 × 0.14m の楕円形を呈する部分が２か所ある。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は長軸 0.68m、短軸 0.54m、深さ 0.06m である。炉の北西側 0.3m の所に磨石類（図版 41 - 285）が出土した。

F942（図版４・14・99）

６D10 グリッドに位置する。平面形は楕円形で､断面形は弧状である。黒色土の中央には 0.18 × 0.14m の焼土がブロック状に入る部分があり、その周辺には馬蹄状にⅨ層土・炭化物がブロック状に入る部分がある。底面の中央には被熱による硬化面がある。規模は長軸 0.58m、短軸 0.44m、深さ 0.08m である。

F947（図版３・４・14・100）

６D ６・７グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、断面形は弧状である。黒色土の中央に灰と粘土をブロック状に含む部分がある。底面の中央に 0.24 × 0.16m の窪みがあり、その南側と西側に被熱による硬化面がある。規模は長軸 0.6m、短軸 0.44m、深さ 0.08m である。

F1070（図版３・14）

５C10・15 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。黒色土には炭化物が集中する部分がある。底面には径 0.13m と径 0.15m の２個の窪みがある。この窪みの西側に被熱による硬化面がある。規模は長軸 0.86m、短軸 0.58m、深さ 0.07m である。

F1171（図版３・４・14）

６C23 グリッドに位置する。炉の南側で F1165、SK354・941、P827 と重複し、これらより古い。平面形は不明で、断面形は弧状である。規模は長軸（0.73）m、短軸（0.66）m、深さ 0.04m である。

F1173（図版４・14）

７C11 グリッドに位置する。F195・403 と重複し、これらより古い。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。黒色土の東半は炭化物を多量に含む部分がある。底面には径 0.1m の２個の窪みがある。窪みの北東側には被熱による硬化面がある。規模は長軸 0.6m、短軸 0.39m、深さ 0.08m である。

F1309（図版４・14）

６C24 グリッドに位置する。F358 と重複し、これより古い。平面形は円形で、断面形は弧状である。底面の中央に被熱による硬化面がある。規模は長軸 0.5m、短軸 0.44m、深さ 0.08m である。

F1333（図版４・14）

６E10、７E ６グリッドに位置する。平面形は不整円形で、断面形は弧状である。黒色土には１㎝ほどの礫・炭化物・焼土が混じる部分と炭化物が集中する部分がある。底面の南東側には被熱による硬化面がある。規模は長軸 0.58m、短軸 0.52m、深さ 0.08m である。

２） 土　　坑

北側調査区で検出した土坑は 94 基である。検出面の違いからⅧａ層・Ⅷｂ層・Ⅷｂ2 層の遺構に分けて記述した。土坑の平面形は円形・楕円形・隅丸方形に分けられる。出土遺物から、土器が主体的に出土した土坑（SK259・372・400・409・417・418・754・767・831・852・853・873・875・879・936・941・

943・1090・1160・1176・1301・1404・1414)、石器・礫・剥片が主体的に出土した土坑（SK861・865・877)、土器と石器（礫）が出土した土坑（SK287 ～ 289・354・371・451・849・850・855・872・938）に分けられる。土器が主体的に出土した土坑では、SK400 はほぼ 1 個体の土器がある程度形状が分かる状態で出土した。

a)　Ⅷａ層の土坑

SK259（図版 4 ・15）

6 C14・18・19 グリッドに位置する。SK362・877・1096 と重複し、SK877・1096 より新しく、SK362 との関係は不明である。平面形は長楕円形で、断面形は弧状である。覆土は褐灰色の砂質シルトで地山土よりやや暗い色調である。検出面で同一個体と推測する口縁部から胴下端部 1/4 個体ほどの深鉢（図版 31-59 ～ 61)、不定形石器（図版 37-202）が出土した。規模は長軸 1.68m、短軸 1.1m、深さ 0.11m、長軸方向は N10° E である。

SK287（図版 4 ・15・100）

6 D20・25 グリッドに位置する。SK288・289 と重複し、これらより新しい。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。覆土は 3 層に分けた。上層が炭化物を多く含む粘質土で、下層はシルト質土で礫を多量に含む。検出面及び覆土中に土器片（図版 31 - 68)、礫が出土した。規模は長軸 1.1m、短軸 0.8m、深さ 0.12m、長軸方向は N10° E である。

SK288（図版 4 ・15・100）

6 C20・25、7C16・21 グリッドに位置する。F357、SK287・289・938 と重複し、F357、SK938 より新しく、SK287・289 より古い。平面形は長楕円形で、断面形は弧状である。覆土は砂質シルトの単層で、覆土中から磨石類（図版 37-219）と土器片（図版 31-73）が出土した。規模は長軸 1.41m、短軸（0.68）m、深さ 0.09m、長軸方向は N78° W である。

SK289（図版 4 ・15・100）

6 C20・25 グリッドに位置する。SK287・288・938 と重複し、SK288・938 より新しく、SK287 より古い。平面形は円形で、断面形は弧状である。覆土は砂質土が主体で径 1 ～ 2 ㎝の礫を多量に含む。規模は長軸 1.23m、短軸 1.16m、深さ 0.13m である。

SK354（図版 3 ・ 4 ・15）

6C22・23 グリッドに位置する。F1171、SK941 と重複し、これらより新しい。平面形は隅丸方形で、断面形は台形状である。西側をトレンチで壊されている。覆土は炭化物を含む粘質シルトの単層である。覆土中から口縁部から胴部 1/4 個体ほどの深鉢（図版 31 - 62）と磨石類（図版 37 - 208・215)、剥片、礫が、土坑の北 0.2m の地点で箆状石器（図版 36-197）が出土した。規模は長軸 1.61m、短軸（0.88）m、深さ 0.3m である。

SK355（図版 3 ・ 4 ・15）

6 C23、6 D 3 グリッドに位置する。F356・1165、SK941 と重複し、これらより新しい。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。底面の中央に 0.3 × 0.2m の楕円形のピットがある。覆土は粘質土で炭化物を含む黄褐色土である。覆土内から土器片（図版 31 - 71）と剥片・砕片が出土した。規模は長軸 1.42m、短軸 1.03m、深さ 0.15m、長軸方向は N20° W である。

SK362（図版3・4・15）

6C13・14・18・19グリッドに位置する。SK259・877と重複し、SK877より新しく、SK259との関係は不明である。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。覆土は砂質シルトが主体で、3層に焼土がある。焼土範囲の平面形は不整楕円形で、規模は長軸0.65m、短軸0.48m、深さ0.05mである。覆土中から土器片、剥片が出土したが細片のため図示しなかった。規模は長軸0.95m、短軸0.75m、深さ0.15m、長軸方向はN21°Wである。

SK390（図版3・4・15）

6C21グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、断面形は台形状である。覆土は灰黄色のシルト質粘土で炭化物を含む。覆土の上面で土器底部が出土した（図版31-63）。規模は長軸0.9m、短軸0.54m、深さ0.2m、長軸方向はN60°Wである。

SK400（図版4・16・100）

7C1・6グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は台形状である。覆土は灰黄色の砂質シルトの単層で、覆土中から深鉢（図版31-66）の口縁部から胴部ほぼ1個体が口縁を下にして潰れて出土した。この土器の東側に円礫が1個出土した。規模は長軸0.86m、短軸0.58m、深さ0.18m、長軸方向はN40°Wである。

SK451（図版4・16）

7C6・11グリッドに位置する。SK930と重複し、これより新しい。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。覆土はにぶい黄色砂質シルトで炭化物を多量に含む。検出面で磨石類（図版37-210）、土器片（図版31-75）、礫が出土した。規模は長軸1.38m、短軸1.02m、深さ0.1m、長軸方向はN50°Wである。

SK754（図版4・16）

6C10グリッドに位置する。SK832・935・936と重複し、これらより新しい。平面形は円形で、断面形は台形状である。覆土はにぶい黄色砂質シルトで炭化物を含む。覆土上位から中位に土器片がまとまって出土した。このうち1点（図版31-69）を図示した。規模は長軸0.56m、短軸0.48m、深さ0.08m、長軸方向はN18°Eである。

SK755（図版4・16）

6C10・15グリッドに位置する。SK849と重複し、これより新しい。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。覆土はにぶい黄色砂質シルトで炭化物を含む。覆土中から土器片が出土したが細片のため図示していない。規模は長軸0.5m、短軸0.4m、深さ0.09m、長軸方向はN0°である。

SK756（図版4・16）

6C14・15グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は弧状である。覆土はにぶい黄色砂質シルトで炭化物を多量に含む。覆土上位から土器片（図版31-70）が出土した。規模は長軸0.68m、短軸0.6m、深さ0.06m、長軸方向はN0°である。

SK767（図版4・16）

6C10・15グリッドに位置する。SK849と重複し、これより新しい。平面形は隅丸長方形で、断面形は台形状である。覆土は灰黄色粘質シルトで炭化物を含む。西側の覆土中位から土器片が出土した。このうち1点（図版31-74）を図示した。規模は長軸0.55m、短軸0.45m、深さ0.12m、長軸方向はN20°Eである。

SK769（図版４・16）

７D １グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。覆土は灰黄色シルト質粘土である。浅黄色シルトを塊状に含む。覆土上位から土器片（図版 31 - 72）が出土した。規模は長軸 0.68m、短軸 0.48m、深さ 0.1m、長軸方向は N20° W である。

SK831（図版４・16・101）

６C10、７C ６グリッドに位置する。SK832 と重複し、これより新しい。平面形は円形で、断面形は弧状である。覆土はにぶい黄色砂質シルトで炭化物を含む。底面で鉢底部（図版 31 - 67）が正位置で出土した。規模は長軸 0.35m、短軸 0.33m、深さ 0.1m である。

SK878（図版４・16）

６C ９グリッドに位置する。SK1089 と重複し、これより新しい。東側はトレンチで壊されているため平面形は不明、断面形は台形状である。覆土は砂質シルトで炭化物を含み、レンズ状の堆積を示す。覆土中から土器細片、礫が出土した。規模は長軸 1.08m、短軸（0.42）m、深さ 0.3m である。

SK879（図版３・４・16）

６C12・13 グリッドに位置する。P1170 と重複し、これより新しい。平面形は隅丸長方形で、断面形は弧状である。覆土は上層が黄灰色粘質シルトで、中層で砂質となり、底面近くでは粘質のシルトとなる。南側の上層（１層）で土器片が出土した。このうち２点（図版 31 - 64・65）を図示した。規模は長軸 1.1m、短軸 0.76m、深さ 0.09m、長軸方向は N23° W である。

b）　Ⅷｂ層の土坑

SK371（図版３・４・16・101）

６C ６・７グリッドに位置する。SK872・873 と重複し、これらより古い。平面形は隅丸方形で、断面形は箱状である。覆土は上層（１層）が粘質シルト、中層から下層（２～４層）が砂質シルトで水平堆積である。覆土から土器片（図版 34 - 126）と磨石類（図版 40 - 277）が出土した。規模は長軸（0.88）m、短軸 1.3m、深さ 0.26m である。

SK372（図版４・17・101・102）

６D19・20 グリッドに位置する。SK1185、SX857（P1190・1463）と重複し、これらより新しい。平面形は不整楕円形で、断面形は箱状である。覆土は粘質シルトで、レンズ状の堆積を示す。覆土の上層から口縁部から胴部 1/4 個体ほどの深鉢（図版 32 - 99）と口縁部片（図版 32 - 100）が出土した。規模は長軸 1.12m、短軸 0.92m、深さ 0.26m、長軸方向は N30° E である。

SK404（図版４・17・102）

７C12・17 グリッドに位置する。F401 と重複し、これより古い。平面形は楕円形で、断面形は台形状である。覆土は砂質シルトで、検出面から帯状に流れ込む炭化物層（２層）がある。埋没過程で窪みに溜まったものと考えられる。覆土の下層から土器片（図版 34-129）、中層から礫が出土した。規模は長軸（1.06）m、短軸 0.9m、深さ 0.42m、長軸方向は N16° E である。

SK405（図版３・４・17）

６C ７・８グリッドに位置する。F870、SK409・417 と重複し、これらより古い。平面形は長楕円形で、断面形は箱状である。覆土は粘質シルトの単層である。覆土中から土器片（図版 34-124）が出土した。規模は長軸 1.26m、短軸 0.84m、深さ 0.2m、長軸方向は N66° E である。

SK406（図版４・17）

６C ９・10 グリッドに位置する。F937、SK936 と重複し、これらより新しい。平面形は楕円形で、断面形は台形状である。西側はトレンチで壊されている。覆土は上層（１層）が粘質シルト、中層から下層（２～４層）は砂質シルトで、レンズ状の堆積を示す。覆土中から土器の細片が出土したが、状態が悪く図示できなかった。規模は長軸（0.5）m、短軸 0.64m、深さ 0.28m である。

SK408（図版４・17）

６C ５・10 グリッドに位置する。ほぼ半分をトレンチで壊されているため平面形は不明である。断面形は半円状である。覆土は１・２層が砂質シルト、３層が粘質シルトでレンズ状の堆積を示す。覆土中から土器片（図版 34 - 133）と、礫が出土した。規模は長軸（0.5）m、短軸 0.89m、深さ 0.34m である。

SK409（図版３・４・17）

６C ８グリッドに位置する。SK405・417 と重複し、SK405 より新しく、SK417 より古い。平面形は不整楕円形で、断面形は箱状である。覆土は粘質シルトの単層である。検出面で土器片 1/4 個体ほどが出土し、このうち１点（図版 34 - 137）を図示した。規模は長軸 0.62m、短軸 0.5m、深さ 0.14m、長軸方向は N22° E である。

SK417（図版３・４・17）

６C ８グリッドに位置する。SK405・409 と重複し、これらより新しい。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。覆土は粘質シルトの単層である。覆土の上位で深鉢土器の胴部片 1/2 個体ほどが出土した。このうち１点（図版 34 - 138）を図示した。規模は長軸 0.96m、短軸 0.7m、深さ 0.13m、長軸方向は N0° である。

SK418（図版３・17）

５C ９・14 グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、断面形は弧状である。覆土はシルト質粘土の単層である。ほぼ中央に複数個体の深鉢の口縁部から底部片（図版 32-101 ～ 103）がまとまって出土した。規模は長軸 0.78m、短軸 0.7m、深さ 0.08m、長軸方向は N20° W である。

SK849（図版４・17・102）

６C10・15 グリッドに位置する。SK755・767 と重複し、これらより古い。平面形は隅丸方形で、断面形は台形状である。覆土は砂質シルトで微細な炭化物を含み、水平堆積を示す。覆土上面で土器片（図版 34 - 140）、礫が出土した。規模は長軸 1.07m、短軸 1.01m、深さ 0.3m、長軸方向は N68° E である。

SK850（図版４・17・102）

６E10、７E ６グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は箱状である。覆土はシルト質粘土が主体でレンズ状の堆積を示す。覆土中から石鏃（図版 38 - 223・225）、両極石器（図版 39 - 248・249）、土器片（図版 34-128）が出土した。規模は長軸 1.1m、短軸 0.97m、深さ 0.18m、長軸方向は N43° W である。

SK852（図版３・18・103）

５C14･15 グリッドに位置する。P429 と重複し、これより古い。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。覆土は粘質シルトとシルト質粘土からなり、レンズ状の堆積を示す。覆土上面に深鉢土器がほぼ１個体分（図版 33 - 108）まとまって出土したが、別個体の土器片（図版 33 - 109）も含んでいた。規模は長軸 1.2m、短軸 1m、深さ 0.16m、長軸方向は N34° E である。

SK853（図版４・18）

７C16・17・21・22 グリッドに位置する。F775 と重複し、これより古い。平面形は隅丸長方形で、

断面形は台形状である。覆土はシルト質砂で、２層が１層より粘性が強い。覆土２層から土器片（図版 34 - 130）が出土した。規模は長軸 1.02m、短軸 0.78m、深さ 0.22m、長軸方向は N46° W である。

SK855（図版３・４・18）

６C18・19・23・24 グリッドに位置する。SK877 と重複し、これより古い。平面形は隅丸長方形で、断面形は台形状である。覆土は上層（２層）が粘質シルト、下層（３・４層）は砂質シルトで、レンズ状堆積である。覆土中から文様の異なる深鉢土器の口縁から胴部片（図版 32-104 ～ 107）、二次加工のある剥片（図版 39 - 251）、礫が出土した。規模は長軸 1.7m、短軸 1.38m、深さ 0.38m、長軸方向は N81° E である。

SK861（図版３・４・18・103）

６C22 グリッドに位置する。SK862 と重複し、これより古い。東側を縄文面北側調査区のトレンチで壊されているため平面形は不明、断面形は台形状である。覆土は粘質シルトで、覆土中には珪藻質泥岩の砕片が多量に含まれる。規模は長軸（0.52）m、短軸（0.6）m、深さ 0.26m である。

SK862（図版３・４・18）

６C17・22 グリッドに位置する。SK861 と重複し、これより新しい。平面形は不明で、断面形は台形状である。覆土は粘質シルトで、細長い礫が立って出土した。規模は長軸（0.7）m、短軸 0.9m、深さ 0.22m である。

SK865（図版３・４・18）

６C16 グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、断面形は弧状である。覆土は粘質シルトで、覆土中から磨石類（図版 41 - 296）、礫が出土した。規模は長軸 0.85m、短軸 0.75m、深さ 0.1m、長軸方向は N41° E である。

SK869（図版３・４・18）

６C ８・９・13 グリッドに位置する。SK943 と重複するが新旧関係は不明である。平面形は隅丸方形で、断面形は台形状である。覆土は、灰黄色砂質シルトである。覆土中から土器片（図版 34-134）が出土した。規模は長軸 0.72m、短軸 0.6m、深さ 0.1m、長軸方向は N55° E である。

SK871（図版３・４・18）

６C11・16 グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、断面形は弧状である。覆土は、灰黄色砂質シルトで炭化物を含む。覆土中から磨石類（図版 40 - 275）が出土した。規模は長軸 1.03m、短軸 0.9m、深さ 0.2m、長軸方向は N33° E である。

SK872（図版３・４・18）

６C ６・11 グリッドに位置する。SK371 と重複し、これより新しい。平面形は隅丸長方形で、断面形は弧状である。覆土は上層（１層）が粘質シルト、下層（２・３層）が砂質シルトである。西側に噴砂痕がある。覆土中から土器片（図版 34-135）、石鏃（図版 38-221）、礫が出土した。規模は長軸 1.16m、短軸 0.74m、深さ 0.24m、長軸方向は N65° E である。

SK873（図版３・４・19・103）

６C ６・７・12 グリッドに位置する。SK371・763・833、P373・374 と重複し、SK371 より新しく、SK763・833 より古い。P373・374 との関係は不明である。平面形は隅丸方形で、断面形は弧状である。覆土は砂質シルトで、覆土上位からは深鉢土器の口縁（図版 33 - 112）が、下位からは深鉢土器の口縁から胴部（図版 33 - 110）と深鉢土器の底部（図版 33 - 111）が出土した。規模は長軸 1.77m、短軸 1.68m、深さ 0.3m、長軸方向は N81° E である。

SK875（図版４・19・103）

７E ６グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、断面形は弧状である。北側を旧河川に切られている。覆土は粘質シルトで、覆土上面を中心に口縁部から底部 1/4 個体ほどの深鉢（図版 33 - 113）が出土した。規模は長軸（0.4）m、短軸（0.36）m、深さ 0.1m、長軸方向は N0°である。

SK877（図版３・４・19）

６C13・14・18・19 グリッドに位置する。SK259・362・855 と重複し、SK855 より新しく、SK259･362 より古い。平面形は隅丸長方形で、断面形は台形状である。覆土は上層（１層）が粘質シルト、下層（２・３層）は砂質シルトでレンズ状の堆積をしている。覆土中から磨石類（図版 40 - 270、41 - 290）、篦状石器（図版 39-240）、石匙（図版 38-232）、土器片が出土した。規模は長軸 1.45m、短軸 1.2m、深さ 0.3m、長軸方向は N23° W である。

SK930（図版４・19）

７C ６・11・12 グリッドに位置する。SK451・931 と重複し、これらより古い。平面形は隅丸方形または隅丸長方形と見られるが、北側を開渠で壊され判然としない。断面形は弧状である。覆土は、灰白色砂質シルトで炭化物を含む。覆土上面で磨製石斧（図版 40 - 266）が出土した。規模は長軸（0.92）m、短軸（0.9）m、深さ 0.26m である。

SK932（図版３・19）

５C ８･13 グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、断面形は台形状である。覆土は、上層（１・２層）が暗灰黄色粘質シルト、中・下層（３・４層）が同色の砂質シルトである。覆土上層（１層）から篦状石器（図版 39 - 246）が出土した。規模は長軸 0.84m、短軸 0.68m、深さ 0.22m、長軸方向は N53° E である。

SK935（図版４・19）

６C10 グリッドに位置する。SK754・936、P802 と重複し、これらより古い。平面形は隅丸方形で、断面形は台形状である。覆土は、灰黄色砂質シルトで炭化物を含む。覆土上位に深鉢土器の胴部片がまとまって出土したが、脆弱で実測図示できなかった。規模は長軸（1.04）m、短軸 0.95m、深さ 0.18m である。

SK936（図版４・19）

６C10 グリッドに位置する。F937、SK406・754・935 と重複し、SK935 より新しく、F937、SK406・754 より古い。平面形は隅丸長方形と推測するが、遺構に切られていることと、トレンチによる破壊で詳細は不明である。断面形は弧状である。覆土は砂質シルトで炭化物を含む。遺構検出面で土器片がまとまって出土した。このうち口縁部から胴部 1/4 個体ほどの深鉢（図版 33 - 114）と土器片（図版 33 - 115・116）を図示した。規模は長軸（1.1）m、短軸 1.2m、深さ 0.14m である。

SK938（図版４・20）

６C20、７C16・21 グリッドに位置する。F167、SK288・289 と重複し、これらより古い。平面形は隅丸長方形で、断面形は箱状である。覆土は上層（１層）が砂質シルト、中層から下層（２～５層）が粘質シルトで炭化物を含む。底面に２か所窪みがあり焼土が入っている。覆土中から土器片（図版 34 - 131）、磨石類（図版 41-295･300）、石錘（図版 42-313）が出土した。規模は長軸 1.54m 、短軸 1.14m、深さ 0.3m、長軸方向は N50° E である。

SK940（図版４・20）

７D １・２グリッドに位置する。F353 と重複し、これより古い。平面形は不整円形で、断面形は弧状

である。覆土は灰色粘質シルトで炭化物を含む。覆土上面で石錘（図版 42 - 315）が出土した。規模は長軸 0.94m、短軸 0.8m、深さ 0.1m である。

SK941（図版 3 ・ 4 ・ 20）

6 C23、6 D 3 グリッドに位置する。F1165・1171、SK354・355、P827・948 と重複し、F1165・1171 より新しく、SK354・355、P827・948 より古い。平面形は隅丸方形で、断面形は箱状である。覆土は粘質シルトで炭化物を含む。南東隅の覆土上面（1 層）から土器片が出土し、これを図示（図版 33 - 117 ～ 121）した。規模は長軸 1.05m、短軸 0.97m、深さ 0.2m、長軸方向は N90°である。

SK943（図版 3 ・ 4 ・ 20）

6 C 8 ・ 13 グリッドに位置する。F410、SK869 と重複し、F410 より古く、SK869 との関係は不明である。平面形は隅丸方形で、断面形は台形状である。覆土はにぶい黄色砂質シルトである。底面に土器片がまとまって出土した。このうち 1 点（図版 34 - 127）を図示した。規模は長軸 0.9m、短軸 0.78m、深さ 0.16m、長軸方向は N18° E である。

SK944（図版 4 ・ 20）

6 C14・15 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は台形状である。覆土は上層が灰黄色粘質シルトで炭化物を含み、下層は灰黄色砂質シルトである。覆土上層に土器片が散在していたが、細片のため図示できなかった。規模は長軸 0.74m、短軸 0.54m、深さ 0.11m、長軸方向は N34° E である。

SK1085（図版 3 ・ 20）

5 C15・20 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は台形状である。覆土は灰黄色砂質シルトである。北西側隅部にまとまって土器片が出土した。このうち 1 点（図版 34 - 123）を図示した。規模は長軸 0.86m、短軸 0.76m、深さ 0.14m、長軸方向は N42° W である。

SK1089（図版 4 ・ 20）

6 C 9 グリッドに位置する。SK878 と重複し、これより古い。平面形は東側をトレンチで壊されているため判然としないが、楕円形と推測する。断面形は弧状である。覆土は灰白色粘質シルトである。覆土上面で土器の細片が出土した。規模は長軸（0.5）m、短軸（0.5）m、深さ 0.1m である。

SK1168（図版 5 ・ 20）

8 C19・20 グリッドに位置する。平面形は不整円形で、断面形は弧状である。覆土は灰白色粘質シルトである。覆土の上位から土器の細片が出土した。規模は長軸 1.2m、短軸 1.2m、深さ 0.18m である。

SK1174（図版 5 ・ 20）

8 C 4 ・ 5 グリッドに位置する。SK1175・1414 と重複し、SK1414 より新しく、SK1175 より古い。平面形は隅丸方形と推測するが南東側を試掘 29 トレンチで壊され判然としない。断面形は弧状である。覆土は灰白色粘質シルトで、覆土中位から土器片がまとまって出土した。このうち胴部片（図版 34 - 139）を図示した。規模は長軸（0.8）m、短軸（0.54）m、深さ 0.18m である。

SK1176（図版 5 ・ 20）

8 C 9 ・ 14 グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、断面形は弧状である。覆土は灰白色粘質シルトである。覆土上面で深鉢土器の口縁から胴部片がまとまって出土した。このうち口縁部片（図版 34 - 136）を図示した。規模は長軸 1.16m、短軸 1.05m、深さ 0.16m、長軸方向は N42° W である。

SK1301（図版 3 ・ 4 ・ 20）

6 C12・13・17・18 グリッドに位置する。SK1322、P1195 と重複し、SK1322 より新しく、P1195

より古い。平面形は円形で、断面形は台形状である。覆土は灰白色砂質シルトである。覆土上位から中位で土器片が出土し、このうち１点（図版 34-125）を図示した。規模は長軸 1.32m、短軸 1.32m、深さ 0.16m である。

SK1404（図版５・20）

９C11・12・16・17 グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、断面形は台形状である。覆土は灰黄色粘質シルトである。覆土上面で土器片が散在し、このうち口縁部片（図版 34 - 132）を図示した。規模は長軸 1.1m、短軸 0.85m、深さ 0.16m、長軸方向は N42° E である。

SK1414（図版５・21）

８B25、８C ４・５グリッドに位置する。南東側で SK1174 と重複し、これより古い。平面形は隅丸長方形で、断面形は台形状である。覆土は灰黄色粘質シルトである。覆土中位から土器片がまとまって出土し、これを復元した深鉢土器（図版 34-122）を図示した。規模は長軸 1.48m、短軸 1.17m、深さ 0.21m、長軸方向は N55° W である。

c）　Ⅷb2 層の土坑

SK1050（図版３・21）

５C ４・５グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、断面形は弧状である。覆土は灰黄色砂質シルトで、覆土中から土器細片、礫が出土した。規模は長軸 0.95m、短軸 0.9m、深さ 0.13m である。

SK1052（図版４・21）

７D ６・11 グリッドに位置する。SK1051 と重複し、これより古い。平面形は円形で、断面形は弧状である。覆土は上層が灰色粘質シルトで下層は黒褐色粘質シルトである。覆土中から剝片が出土した。規模は長軸 0.83m、短軸（0.59）m、深さ 0.13m である。

SK1071（図版３・４・21）

６D12 グリッドに位置する。北側で P1330 と重複し、これより新しい。平面形は隅丸方形で、断面形は台形状である。覆土は上層が暗オリーブ色粘質シルト、下層は青灰色粘質シルトでともに炭化物を含み、レンズ状の堆積である。底面北側に 0.2 × 0.12m の P1 と南側に 0.13 × 0.1m の P2 がある。覆土上面で深鉢土器の口縁部から胴部片（図版 35 - 173）が出土した。規模は長軸１m、短軸 0.91m、深さ 0.17m である。

SK1090（図版３・４・21）

６D18・19・23・24 グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、断面形は弧状である。覆土は青灰色粘質シルトで灰白色粘土と炭化物をブロック状に含む。中央の覆土上位に土器片がまとまって出土した。このうち１点（図版 35 - 174）を図示した。規模は長軸 1.94m、短軸 1.22m、深さ 0.16m、長軸方向は N74° W である。

SK1160（図版４・21）

６D25、７D21、７E １グリッドに位置する。F193 と重複し、これより古い。平面形は隅丸長方形で、断面形は弧状である。覆土は炭化物を含む暗灰黄色シルト質粘土の単層である。検出面で土器片が集中し、このうち４点(図版 35-175 ～ 178)を図示した。175 ～ 177 は同一個体の可能性がある。規模は長軸 1.22m、短軸 0.84m、深さ 0.12m、長軸方向は N90°である。

SK1322（図版3・4・21）

6C17・18グリッドに位置する。F168、SK1301と重複し、これらより古い。平面形は隅丸方形で、断面形は台形状である。覆土は炭化物を含む灰白色砂質シルトの単層である。覆土中から篦状石器（図版39 - 245）が出土した。規模は長軸0.78m、短軸（0.72）m、深さ0.2mである。

SK1401（図版3・4・21）

6E12・13・17・18グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。覆土は灰オリーブ色粘質シルトで炭化物を含む。覆土中からは土器片が出土したが細片のため図示していない。規模は長軸1.06m、短軸0.76m、深さ0.16m、長軸方向はN0°である。

SK1402（図版3・4・21）

6E 2グリッドに位置する。P1387・1388と重複し、これらより古い。平面形は円形で、断面形は弧状である。覆土は灰色粘質シルトの単層である。底面から磨石類（図版41 - 302）が出土した。規模は長軸0.7m、短軸0.64m、深さ0.1m、長軸方向はN50° Eである。

3）　性格不明遺構

北側調査区の性格不明遺構としては、SX347・857がある。SX347はピットの配列が方形を基調とすることと、炉を想定し得る焼土を検出したことから、またSX857はU字状の溝とピットの組み合わせが楕円形を呈し、配列内に炉を想定し得る焼土があることから、それぞれ住居の可能性を推定できる遺構とした。

SX347（図版3・4・22・23・104）

6Dグリッドに位置する。Ⅷb層上面での検出である。30基のピットがF945（炉）の周囲を巡る。ピットの規模が明確なものでは、長軸が0.08 ～ 0.15mのものが3基、0.16 ～ 0.25mのものが13基、0.26 ～ 0.35mのものが6基、0.36 ～ 0.45mのものが4基である。ピットの断面形は階段状、U字状、漏斗状、半円状のものがある。ピットの深さは0.08 ～ 0.3mである。遺構の規模は、東西方向の隅柱と想定したP1311とP1150の間が3.2m、南北方向の隅柱と想定したP1311とP1347の間が3.4mである。また、P1311とP1347を結ぶ線の中間から西へ約0.6m突出した位置にあるP1343と、東側の隅柱P1150とP1325を結ぶ線の中間に位置するP1321は相対しており、棟持ち柱と考えた。ピット列の内部中央からやや北に寄って、炉と考えられるF945がある。平面形は円形で、断面形は弧状である。炭化物の広がりの中に0.16 × 0.14mの範囲で焼土がある。炉の規模は、長軸0.38m、短軸0.35m、深さ0.04mである。炉の東側に遺物集中771、P800の南側に遺物集中851、P1312の東側に遺物集中770がある（図版23・104）。出土した遺物のうち、土器片4点（図版34 - 141 ～ 144）と石匙1点（図版38 - 230）を図示した。

SX857（図版4・24・25・105）

6D・E、7D・Eグリッドに位置する。Ⅷb2層上面での検出である。幅0.15 ～ 0.25m、深さ0.1mの溝がU字状にあり、溝内部には0.08 ～ 0.22mのピットがある。南・西側では溝を検出できなかったが、溝の延長線上にはピットが並ぶ。溝の外周には溝から0.7 ～ 1.4m離れて、0.2 ～ 0.3m、深さ0.1 ～ 0.3mのピットが巡っている。溝の内側は外側より0.05mほど低くなっている。中央よりやや東寄りに、炉と考えられる焼土（F1468）がある。検出面では、炭化物の広がりの中に径0.1mの範囲で灰と炭化物が混じる部分がある。この範囲は底部に達し窪みを作る。平面形は円形で、断面形は弧状である。規模は長軸0.48m、短軸0.46m、深さ0.05mである。底面には0.15 × 0.1m、深さ0.05mの窪みと径0.1m、深さ

0.06m の窪みがある。遺構と推測する範囲内から土器片、磨石類、礫が出土し、このうち土器片１点（図版 35 - 172）と磨石類１点（図版 41 - 292）を図示した。

４）遺物集中

北側調査区では、SX347 に伴うと考えられたもの以外で２か所の遺物集中を検出した。

遺物集中 314（図版４・26）

７D ６・11 グリッドに位置する。Ⅷａ層で検出した。下位には SK1052 があるが、検出面で遺構の掘り込みが確認できなかったことから、単に遺物集中として記載する。土器の分布範囲は 0.4 × 0.3m であるが、個体ごとにまとまって出土していない。実測可能な土器片２点（図版 32 - 82・83）を図示した。

遺物集中 350（図版３・４・26）

６D18・19・23・24 グリッドに位置する。Ⅷｂ層で検出した。分布範囲の南側は SK1090 の掘形範囲に重なるが、レベル差から別物と判断した。ただし、SX857 出土遺物と出土レベルが近似していることから、この遺構との関わりも考えられるが、接合関係はない。土器の分布範囲は１× 0.5m である。このうち口縁部から胴部の深鉢（図版 34 - 151）を図示した。

５）ピ　ッ　ト（図版３・４・27）

北側調査区においても幾つかのまとまりでピットを層位的に検出した。その特徴を層位ごとに記述する。

a）Ⅷａ層のピット

ａ群ピットは５C グリッドに位置する。ピット（P420 ～ 422・425・427・428・432・433）が長楕円形に並ぶが北側ではピットが検出できず、ピットの並びは輪にならない。

b）Ⅷｂ層のピット

ｂ群ピットは５C グリッドに位置する。F1060 の周囲に径 0.06 ～ 0.15m の小ピット（P1054 ～ 1067・1302）が集中している。配置に規則性は見られない。

c）Ⅷb2 層のピット

ｃ群ピットは５・６D グリッドに位置する。径 0.13 ～ 0.32m のピット（P1339・1399・1410 ～ 1413・1415・1432・1433・1443）が半円形に並ぶ。

６）旧　河　川（図版４・28・106）

調査区の７B ～ E グリッドにかけて、川幅約 3.5m で東西方向に流れる旧河川の流路を検出した。調査区東壁セクションでは、Ⅴ層下位層からその痕跡が確認できる。河川堆積物は上層が礫で、この礫層は南岸で遺物包含層のⅧａ層を浸食して堆積しているが、Ⅷｂ層は残っている。

北岸ではⅧｂ層まで削り取られており、遺跡の時期の川幅は判然としない。礫層を構成する礫の径は５㎝ほどのものもあり、一部、逆級化成層（層理）[1] が見られることなどから土石流などの急激な堆積

1）　単層内において、砕屑物が下底面から上に向かって粗粒化する成層状態［下中 1996］。

環境にあった可能性を考えたい。河川流路中のⅧｂ層は腐植分が浸透し青灰色を呈している。この層中からは土器（図版 33 - 113、34・35 - 152 ～ 158）が出土しており、セクションｂ - b' の土層では土器の出土層位が４層で、南側の遺構検出面の一つであるⅧｂ層から流れ込んで堆積した層であることを確認した。セクションｂ - b' の遺物出土層（４層）上面には、腐植土がシルト質粘土と互層に堆積し、同層中から木の葉や堅果類を検出したことから、Ⅷｂ層を生活面とする遺跡の時期の川は、流速の遅い河川であったことが推測できる。

3　遺 物 各 説（縄文時代）

A　土　　器

1）　概要と記述の方法

本発掘調査で出土した土器は、縄文時代前期初頭から中葉に位置付けられるもので、取り上げた破片総数は 2,325 点を数える。しかしながら、土壌の影響により土器の遺存状態は良好とは言えず、文様が風化しているものも少なくない。整理作業では、文様が判別可能な資料を極力抽出し、分類・観察・接合・復元を試みた。その結果、本書には 178 点を掲載し、文様が判明する資料についてはほぼ全個体数に近い資料を提示できたと言える。県内において当該期の土器群が層位的に、さらに遺構に伴いまとまって出土した例は非常に少なく、また編年的位置付けに不明確な部分が残る当該期の資料において、本遺跡出土土器と、その出土状況は非常に重要な位置にあると言える。また新資料の出土もあり、注目すべき土器群でもある。なお、出土土器の様相及び考察については第Ⅲ章５に示した。

資料の提示は、南側調査区（Ⅷ層）出土土器・北側調査区（Ⅷａ層）出土土器・北側調査区（Ⅷｂ・Ⅷb2 層）出土土器の順で、遺構出土･包含層出土資料について実測図･写真を掲載し、属性を観察表に記載した。本文の記載順についても同様である。

以下に記載方法を示し、詳細は本文で説明する。

a）　観察表の記載

観察表の項目は、次のとおりである。遺物 No. は実測図番号で、通し番号を付けた。本文中の番号、実測図番号、観察表遺物 No.、写真図版の遺物番号は一致する。出土地点は、小グリッドまで記入した。器種・部位・分類については以下に記す。器高・口径・体部最大径・底径は器形の外寸を計測し、㎝単位で記入した。欠損しているものについては図上復元できる資料についてはその数値を記入し、復元できない資料については残存部の計測値を（　）内に記入した。

胎土の分類については本遺跡出土土器の大半が繊維を含むものであるため、やや主観的であるがその含有量で大別した。

A 類　胎土中の繊維が極めて多いもの。断面に炭化した繊維痕が多量に確認できるもの。

B 類　胎土中に繊維を少量含むもの。A類ほどではないが、繊維痕が確認できるもの。

C 類　胎土中の繊維痕が極めて少ないもの。一見すると繊維を含まないように見えるもの。

繊維以外の混入物については別欄に記載した。その際略号を用いている。以下に記したものが胎土中に含まれていたもので、長石、角閃石、チャートは確認できなかった。

雲母…「雲」、石英…「石」、海綿状骨針…「骨」、砂粒（２㎜～ 0.2 ㎜の粗砂）…「砂」　含有量について

は極めて多いものには「◎」を付けている。

色調は外面の色調を『標準土色帖』［小山・竹原 2005］に基づいて記載した。

炭化物付着状況は、付着している場合は、内面・外面・内外面で記載し、付着していない場合は空欄とした。

2）分　　類

a）器種・器形分類（第 24・25 図）

本遺跡における器種構成は、深鉢が主体であり、これに鉢が少数加わるのみである。土器群には時期幅が認められるが、ここでは一括して分類する。少数ではあるが、復元資料の観察による深鉢形土器の全体器形の特徴として、口径に比し底径が非常に小さく、胴部の張り出しが弱く、底部がすぼまるという共通要素を有している。また大半が破片資料のため、今回の分類では深鉢形・鉢形合わせて、部位が明確で、かつ差異が認められる口縁部または底部形態を分類の対象とする。

口縁部形態

A 類　口縁部が有段となるもの。直線的に外傾するもの（A1 類）とやや内湾するもの（A2 類）がある。

B 類　頸部から直線的に外へ開いて立ち上がるもの。頸部からの開きが小さいもの（B1 類）と大きいもの（B2 類）がある。

C 類　内湾するもの。内湾しながら開いて立ち上がるもの（C1 類）と、頸部を持たず胴部から口縁部にかけて内湾して立ち上がるもの（C2 類）がある。

D 類　外反するもの。

口縁端部形態

a 類　内削ぎ状に整形されたもの。

b 類　平坦に面取りされたもの。

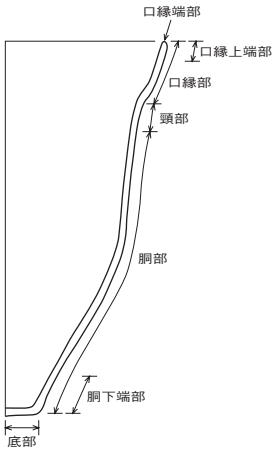
c 類　丸く整形されたもの。

d 類　先細りとなるもの。

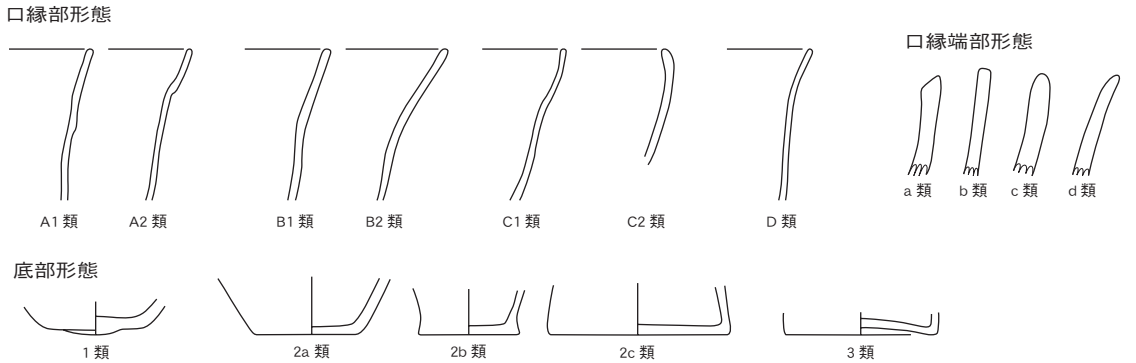
底部形態

1 類　若干の丸みを持ち自立しない丸底風平底のもの。

2 類　平底のもの。底面から直線的に開いて立ち上がるもの（2a 類）、底部が張り出し、屈曲して直線的に開いて立ち上がるもの（2b 類）、内傾して立ち上がるもの（2c 類）がある。



第 24 図　土器の部位名称



第 25 図　器形分類図

３類　上げ底のもの。底面から直線的に立ち上がる。

b）　文様の分類

地文以外の文様を有する土器、または特徴的な地文の縄文を有する土器を抽出し、おおまかな時期で群別を行い、各群において主文様、文様帯構成、地文、施文法の差異で分類した。群別の際には［寺崎 1999］を参考にし、第７回・10 回・19 回の縄文セミナー［縄文セミナーの会 1994・1997・2006］において提示された土器の文様要素のうち、本遺跡の出土土器で該当するものを抽出して類別した。

Ⅰ群土器　前期初頭に位置付けられる土器群

関東地方の花積下層式期に併行する段階である。

１類　内面に条痕文が薄く横位に施されるもの。外面には原体施文幅の広い非結束羽状縄文が横位施文される（109）。

２類　口縁部の主文様が撚糸側面圧痕により施され、モチーフ間に規則的に刺切文［谷藤 2006］が施されるもの（１～３）。体部には１類よりも原体の施文幅が狭い非結束羽状縄文が横位施文される。

Ⅱ群土器　前期前葉１段階に位置付けられる土器群

布目式土器に比定される土器群。関東地方の二ツ木式期に併行する段階である。

１類　口縁下に有段部もしくは胴部上位に微隆帯を持ち、口縁端部・上端部、有段部、微隆帯上にヒトの爪で施された可能性が高い、または形状が類似する「爪刺突」が施されるもの。

a 種　口縁端部・上端部に爪刺突が施され横「ハ」の字状を呈し、口縁下有段部に横位の爪刺突が施されるもの（99）。

b 種　胴部微隆帯上に横「ハ」の字の爪刺突が施されるもの（159）。

２類　地文に第１種結束羽状縄文が施されるもの。［小熊 1994］を参考に細分した。

a 種　結束部を強調したもので、原体両側末端部が細い撚紐で束縛された短い原体を用いている。原体の施文幅は１㎝ほどで極めて狭く、等間隔に横位施文される（175 ～ 177）。

b 種　結束された原体の片側一方と結束部だけを横位回転したもので、両翼の長さが不均一な片翼状となるもの。a 種に比し、原体施文幅が広く 1.5 ㎝ほどである（174）。

Ⅲ群土器　前期前葉２～３段階に位置付けられる土器群

いわゆる新谷段階とされる旧西蒲原郡巻町新谷遺跡Ⅱ～Ⅲ期［前山 1994］、旧北蒲原郡中条町二軒茶屋遺跡［水澤 2003］出土の土器群に相当する。関東地方の二ツ木式期後半から関山式期に併行する段階。

１類　口縁上端に刺突文が施されるもの。

a 種　口縁上端と頸部、もしくは胴部上位に爪刺突による文様帯を有するもの（９・62・103・158）。

b 種　頸部に平行沈線による波状文が施されるもの（113）。

c 種　頸部にコンパス文が施されるもの（108）。

d 種　頸部に無文帯を有するもの（４・12・160）。

e 種　口縁端部・上端部に刺突文が施される口縁部資料。a ～ d 種に含まれる可能性もある。

1　口縁端部と上端部に爪刺突が施されるもの（55）。

2　口縁上端部のみに爪刺突が施されるもの（11・132・172）。

3　D 字形爪形文が施されるもの（23）。半截・多截竹管状工具の背面による刺突である。

２類　刺突文により文様が描出されると考えられるもの。

a種　C字形爪形文により鋸歯状もしくは蕨手状のモチーフが描かれるもの（152）。

b種　篦状工具による刺突文により鋸歯状、もしくは蕨手状のモチーフが描かれるもの（107）。

3類　口縁部に連続した刺突文が3～4段施されるもの（帯状刺突列）［前山1994］（117・118）。D字形爪形文が連続して施文される。頸部にコンパス文を有するものがある（117）。

4類　頸部、または胴部の括れ部に連続した刺突文が3～4段施されるもの（帯状刺突列）。

a種　C字形爪形文が連続して施されるもの（16・18）。

b種　D字形爪形文が連続して施されるもの（7・13）。

c種　篦状工具による刺突文が施されるもの（64・145）。

5類　器面全体、もしくはかなり幅の広い部分に数段にわたり刺突文が施されるもの。刺突文の種類で細分した。

a種　C字形爪形文が施されるもの（17）。

b種　D字形爪形文が施されるもの（24～26・110）。

6類　底部資料。胴下端部に刺突文が施されるものが大半である。底面に同心円状、もしくは十字状モチーフが刺突文により施されるものがあり、その場合、刺突の種類は胴下端部のものと同じである。

a種　爪刺突が施されるもの（31・32・123・153・178）。

b種　C字形爪形文が施されるもの。

1　半截竹管状工具の湾曲する背面先端を用いたもの（19・20・29・30・102・119）。

2　半截竹管状工具の内面先端を用いたもの（83・111）。

c種　D字形爪形文が施されるもの（8・27）。

d種　篦状工具による刺突文が施されるもの。

1　刺突の間隔が開くもの（28・61・80）。

2　刺突の間隔が密接するもの（63・84）。

e種　ループ文の末端環部が施されるもの（85）。

7類　地文の縄文のみが施されるもの。

a種　非結束羽状縄文が施されるもの。

1　原体の施文幅が1㎝ほどと狭く等間隔に横位施文されるもの（76・86・106・151）。

2　原体の閉端部を強調し、施文幅が2㎝以上と広く横位施文されるもの（162）。

b種　斜縄文が施されるもの。

1　原体の施文幅が2㎝前後で等間隔に横位施文されるもの（56・125・163）。

2　原体の閉端部を強調して、施文幅が2㎝前後で等間隔に横位施文されるもの（10・34～37・81・87・105）。

3　複節斜縄文が施されるもの（122）。原体の施文幅は1㎝ほどと狭く、等間隔に横位施文される。

c種　結節回転文が施されるもの。

1　施文幅が1㎝に満たない極めて狭いもの（72・77・143・144・146・165）。

2　緩く結節した原体によるもので、施文幅が1.5㎝ほどのもの（15・39・58・128・157）。

d種　ループ文（末端環付）が施されるもの。

1　ループ文により文様が描出されると考えられるもの（114）。

原体の末端環部を強調し、幅狭等間隔に施されるもので、口縁部のループ文が右下がり、胴部上位が右上がりに施文され、菱状、もしくは入組鋸歯状のモチーフになると考えられるものである。

2　原体の末端環部のみを強調して横位施文したもので、施文幅は1㎝ほどと狭い（5・40～43・65・71・73～75・91～93・100・104・112・116・133・136・139・166・167）。

3　斜縄文部分も施されるもの。原体の施文幅は1～2㎝で、等間隔に横位施文されている（6・14・44～48・54・82・94～98・101・120・121・134・135・137・138・141・142・147～150・155・156・168～171・173）。

Ⅳ群土器　前期中葉に位置付けられる土器群

清水上遺跡［寺﨑1996］で提唱された根小屋式の段階である。北関東地方の有尾式、黒浜式期に併行すると考えられる。

1類　根小屋式に比定されるもの。

a種　点列状刺突文が施される鉢形土器。

1　半截竹管状工具の内面先端の角で細かい点状の刺突を連続して施すもの（124）。

2　細い棒状工具の先端で丁寧に細かい点状の刺突を連続して施すもの（67）。

b種　根小屋式の特徴である口縁上端部内面に1条の凹線が巡る深鉢形土器（66）。

2類　有尾式に比定されるもの（161）。波状口縁で、平行沈線による菱状文が施されると考えられる。

3類　大木2a式に比定されるもの（51～53）。単軸絡条体による網目状モチーフが施される。

Ⅴ群土器　時期・系統不明の土器

破片資料であり、上記の群に積極的に分類する根拠がないものである。

1類　地文の縄文以外の文様を有する土器。

平行沈線による文様が施されるもの（21・22）。

2類　地文の縄文のみが施されるもの。

a種　原体の施文幅が2～3㎝と広い斜縄文が横位に施文されるもの（49・50・57・59・60・68～70・78・79・88・89・115・126・127・154）。原体の端部は強調されない。

b種　斜縄文が縦位に施文されるもの（164）。

c種　反撚のもの（90）。

3類　縄の条のうち、一方が他方を縛って結節を作る原体を回転施文したもの［山内1979］（129～131）。綾絡状の結節回転文となる。

分類の表記

観察表には、器種・器形・文様の順で別々に記載した。器種は不明のものは空欄にした。器形は、例えば、深鉢で口縁部が内湾して開き（C1類）、口縁端部が内削ぎ状（a類）で、底部が平底の立ち上がりが外傾するもの（2a類）であれば、「C1a・2a」となる。頻雑であるが、大半が破片資料のため、部位を分けた分類とした。文様はⅣ群土器の1類a1種であれば「Ⅳ群1類a1種」と表記する。

3）　南側調査区Ⅷ層出土の土器（図版29～31・107・108 - 1～58）

SK845からは1の深鉢が出土した。口縁部に原体Rの撚糸側面圧痕による菱状モチーフ・渦巻文が描かれ、モチーフ間に刺切文が規則的に配される主文様を持つⅠ群2類である。文様帯は撚糸側面圧痕によ

り区画される。文様の状況から主文様は渦巻文を中心とする菱状モチーフが多段構成になると考えられる。また菱状モチーフの撚糸側面圧痕の一部が沈線でなぞられるという特徴を持つ。小破片による出土であったため器形の復元には至らなかったが、口縁部は内湾して直立し、胴部下半が膨らむ器形と考えられる。波状口縁となる可能性もある。胴部には非結束羽状縄文が横位に施文される。原体は０段多条であるが、節はそれほど密ではない。底面にも縄文が施文される。

P909 からは２の土器が出土した。原体Ｌの撚糸側面圧痕による渦巻文が施されたⅠ群２類である。P892 出土の３は非結束羽状縄文が施された胴部片で、胎土・調整から２と同一個体と考えられる。

SK446 からは４・５の土器が出土した。４は口縁上端に刺突が施され、頸部に無文帯を持つⅢ群１類 d 種の深鉢である。胴下端部にもＤ字形爪形文が施される。地文は原体閉端部が強調施文された斜縄文 RL である。口縁端部は内削ぎ状で、内湾する口縁形態である。共伴した５の土器は４単位の波状口縁の鉢である。地文の縄文のみの土器で末端環を強調したループ文 RL が施されるⅢ群７類 d2 種である。

６は P348 出土の土器片で、ループ文 RL が施されるⅢ群７類 d3 種である。

遺物集中 384 からは７・８の土器が出土した。Ｄ字形爪形文が連続する。７は胴部上位でⅢ群４類ｂ種、８は底面にも連続したＤ字形爪形文による同心円状モチーフが施されたⅢ群６類ｃ種である。

遺物集中 385 からは９の深鉢が出土した。口縁上端部と頸部に爪刺突による文様帯が施されたⅢ群１類ａ種である。地文には原体閉端部を強調した斜縄文 RL が幅狭で等間隔に横位施文される。内面調整では横位・斜位方向のケズリ痕が顕著に認められる。

遺物集中 442 からは 10 ～ 22 の土器が出土した。10 はⅢ群７類 b2 種の深鉢で、原体の閉端部を強調した斜縄文 RL が幅狭等間隔に横位施文される。口縁端部は平坦に整形され、口縁部は内湾しながら開く器形である。内面は横方向のナデが丁寧に施される。11 は口縁上端に爪刺突を持つⅢ群１類 e2 種の深鉢である。地文にはクリップ様となる結節回転文が施される。特殊な原体で正確に復元できなかったが、原体を緩く結節し更に撚ったものに近い原体を用いている。12 は上部に無文帯を有する胴部片で、地文には等間隔施文が意識されないループ文 RL が施されるⅢ群１類ｄ種である。13 は胴部の括れ部にＤ字形爪形文が施されるⅢ群４類ｂ種の深鉢で、地文には 12 と同様のループ文が施される。内面は横方向のナデが丁寧に施される。14 はループ文が施されたⅢ群７類 d3 種の胴部片である。15 は結節回転文が施されたⅢ群７類 c2 種の胴部片で、内面に横方向のケズリ痕が顕著に認められる。16 は頸部に連続したＣ字形爪形文が３段施されたⅢ群４類ａ種で、地文には原体閉端部を強調した斜縄文 RL が施される。17 は器面全面にＣ字形爪形文が施されるⅢ群５類ａ種の胴部片で、内面には斜位方向のケズリ痕が顕著に認められる。18 は 16 同様連続したＣ字形爪形文が施されるⅢ群４類ａ種である。19・20 はⅢ群６類 b1 種の底部片で、平底で底面には同心円状に刺突文が施される。21・22 は時期・系統とも不明な土器片である。平行沈線による文様が施され、胎土は明赤褐色でほかとは異なる。繊維の有無も判然とせず、時期が下る可能性も含むためⅤ群１類に分類した。

23 ～ 53 は包含層出土の土器である。23 はⅢ群１類 e3 種で、地文には閉端部を強調した斜縄文 RL が施される。24 ～ 26 はＤ字形爪形文が器面に広く施されるⅢ群５類ｂ種で、27 ～ 32 が胴下端から底部資料のⅢ群６類である。29・30・32 は平底で 29・30 の底面には刺突文が施される。31 は丸底風平底で、胴下端部には横位の「ハ」の字状爪刺突が施される。34 ～ 37 が原体の閉端部を強調した斜縄文が施されるⅢ群７類 b2 種、39 は結節回転文のⅢ群７類 c2 種、40 ～ 43 は末端環部を強調したループ文が施されるⅢ群７類 d2 種、44 ～ 48 は斜縄文部も施文されるループ文のⅢ群７類 d3 種、49・50 はⅤ群２類ａ

種、51 ～ 53 は絡条体による網目状モチーフが施されたⅣ群３類で、大木 2a 式と考えられる。

54 ～ 58 は試掘トレンチ出土（Ⅷ層）の土器である。54 はループ文の施されたⅢ群７類 d3 種の胴部片である。55・56 は口縁部片で、55 の口縁端部には横位の爪刺突が沈線状に連なり、上端部にも爪刺突が施される。Ⅲ群１類 e1 種である。地文には非結束羽状縄文が施されるが、原体の閉端部を強調した斜縄文により構成される。56 は先細りの端部に外反して開く口縁形態で、幅狭等間隔の斜縄文 RL が施されたⅢ群７類 b1 種である。57 は斜縄文のみのⅤ群２類 a 種である。58 は原体を緩く結んだ結節回転文が施されたⅢ群７類 c2 種である。

Ⅷ層出土土器の縄文について

本層位出土土器で地文の縄文が判別できた個体は 36 例である。主体となるものは原体 RL による斜縄文で 12 例あり全体の 34％を占め、ループ文が 14 例で 39％を占める。斜縄文では、原体閉端部を強調した幅狭等間隔の横位施文例が最も多く８例の 22％となる。ループ文では斜縄文部まで施されたⅢ群７類 d3 種タイプが 11 例で 31％となり最も多い。そのほかには原体を緩く結節した結節回転文が５例の 14％、非結束羽状縄文が３例の８％、網目状撚糸文が２例の６％となる。

４）　北側調査区出土の土器

a）　Ⅷａ層出土の土器（図版 31・32・108 ～ 110 - 59 ～ 98）

SK259 からは 59 ～ 61 の土器が出土した。59・60 は施文幅の広い斜縄文 RL が横位に施されるⅤ群２類 a 種の深鉢である。61 は篦状工具による刺突が施されたⅢ群６類 d1 種の胴下端部の破片である。篦状刺突文の内部には細かな浅い凹凸が認められる。

SK354 からは 62 が出土した。口縁端部と胴部中位に爪刺突が施されたⅢ群１類 a 種の深鉢である。地文は胴部中央のみループ文 RL が施され、それ以外の部位には結節回転文が幅狭で等間隔に横位施文される。

SK390 からは 63 が出土した。深鉢の底部と考えられる。形態は上げ底状となっている。胴下端部と底面には連続した篦状の工具による刺突文が施され、底面は同心円状と十字状のモチーフとなっている。篦状刺突の内部に細かな浅い凹凸が見られるⅢ群６類 d2 種である。

SK879 からは 64・65 が出土した。64 は深鉢の胴部片で篦状工具による刺突が横位に多段施文された帯状刺突列が施される。刺突列以下は無文となっている。篦状刺突の内部には細かな浅い凹凸が認められるⅢ群４類 c 種である。65 は末端環部のみのループ文が施されたⅢ群７類 d2 種である。ループ文の横位施文は多段で間隔は密である。

SK400 からは 66 の深鉢が出土した。口縁部が直線的に大きく外傾して開き、底部がすぼまる器形である。文様は地文の縄文のみで、斜縄文 RL が横位にほぼ等間隔で施文される。胴下端部のみ斜縄文 LR が施される。特筆すべきは口縁端部内面の凹線であり、横位に一指幅の凹線が巡る。この特徴は根小屋式の鉢に認められるものであるが､深鉢でこの特徴を有す点が特筆できる。内面の調整は丁寧で滑らかである。前期中葉Ⅳ群１類 b 種である。

SK831 からは 67 の鉢底部が出土した。細い棒状工具の先端による非常に細かく丁寧な点列状の刺突が施された、根小屋式に比定される土器である。底面は無文で穿孔がある。前期中葉Ⅳ群１類 a2 種である。

68 ～ 70 は原体の端部を意識しない施文幅の広い斜縄文が横位に施されたもので、68 は SK287、69 は SK754、70 は SK756 出土である。Ⅴ群２類 a 種である。

72はSK769出土の土器で、施文幅が極めて狭い結節回転文が横位に施文される。Ⅲ群7類c1種である。

71・73～75は末端環部を強調したループ文が横位に施文されたもので、71はSK355、73はSK288、74はSK767、75はSK451出土である。Ⅲ群7類d2種である。

F194の周囲からは76・77の土器が出土した。76は非結束羽状縄文が施される。非常に節が細かい0段多条の原体による施文幅の狭い斜縄文により構成される。Ⅲ群7類a1種である。77は施文幅が狭い結節回転文が横位に施文される。Ⅲ群7類c1種である。

F196の周囲からは78・79の土器が出土した。78は平行沈線文が施されたものであるが、原体Lの側面圧痕に見える部分もあり、判然としない。79は施文幅の広い斜縄文RLが横位に施されたものである。Ⅴ群2類a種である。

F190・191の周囲からは80・81の土器が出土した。80は地文にループ文（RL）、胴下端に篦状の工具による刺突が4段横位に施された深鉢で、ループ文は施文幅が1.5㎝で等間隔に横位施文される。底部は平底で、Ⅲ群6類d1種である。81は端部に結節を有する原体RLにより結節回転文と斜縄文が施された胴部片である。Ⅲ群7類b2種である。

遺物集中314からは82・83の土器が出土した。82は施文幅が1㎝ほどと狭いループ文（RL）が等間隔に横位施文される深鉢である。Ⅲ群7類d3種である。83は底部で、平底の底部が張り出す2b類の器形である。胴下端部には半截竹管状工具の先端内面を器面に鋭角に用いたC字形爪形が連続する。底面は無文で、Ⅲ群6類b2種である。胎土・調整から82・83は同一個体の可能性が高い。

屋外炉の周辺から出土した土器を除くと、包含層からは84～98の土器が出土した。84･85は底部片で、平底の2a類である。84は篦状工具による連続した細かい刺突で同心円状の文様が施される。Ⅲ群6類d2種である。85はループ文の末端環部のみが施されたもので、底面は無文である。Ⅲ群6類e種とした。86は非結束羽状縄文が施されたもので、節が非常に細かい0段多状の原体により施文幅が狭い横位施文で構成される。Ⅲ群7類a1種である。87～90は斜縄文が施されたもので、87は原体閉端部を強調して幅狭等間隔に斜縄文RLが横位施文されたⅢ群7類b2種である。88・89は原体の施文幅が広く、原体閉端部が意識されていない斜縄文RLが横位施文されたⅤ群2類a種である。90は反撚LLが横位施文されたⅤ群2類c種である。91～98はループ文が施された土器で、すべて原体はRLである。末端環部のみを強調施文するⅢ群7類d2種は91～93、斜縄文部分まで横位施文するⅢ群7類d3種は94～98である。91～93は末端環部の施文が上下で重複するほど密な横位施文となっている。95～97は胎土・調整・施文から同一個体の可能性が高い。98のループ文は等間隔の横位施文が意識されていない。

Ⅷa層出土土器の縄文について

本層位出土土器で地文が判別できたものは29例であり、主体的なものはループ文で13例あり全体の45%、斜縄文が10例あり全体の34%となる。ほかは非結束羽状縄文と結節回転文である。ループ文では末端環のみを施文するⅢ群7類d2種が24%で、斜縄文部まで施すd3種が21%とほぼ同じ比率を示す。斜縄文では施文幅の広いⅤ群2類a種が28%となり、そのほかが幅狭等間隔の横位施文である。

b)　Ⅷb層出土の土器（図版32～35・110～112 - 99～171）

SK372からは99と100の深鉢が出土した。99は口縁下に段部を有する土器で直線的に外傾して開くA1類器形である。口縁端部は平坦に整形されており、口縁上端部がやや厚い。文様は口縁端部と上端部にヒトの爪により施された可能性が高い爪刺突により横「ハ」の字の刺突文が施され、その直下に一指幅

の無文部を有する。口縁下の段部に下方から上方に向けて、爪の湾曲する側（外側）を器面に当て横位の爪刺突を施し段部を強調している。ほかは地文のみとなり、その地文は節が密な０段多条の RL と LR の原体による第１種結束羽状縄文である。結束部と RL 原体側の斜縄文のみを施した片翼状の施文となっている。また口縁部中央の１施文単位のみ、原体の両側末端部がほかの細い撚紐で縛られた短い原体による両翼状の結束羽状縄文が施文されるのが特徴的である。胎土は褐色を呈し、雲母の混入が多い。旧西蒲原郡巻町布目遺跡出土土器群に類似する特徴を持ち、布目式の古い様相を呈する土器でⅡ群１類ａ種である。100 はループ文の末端環部のみを施文したⅢ群７類 d2 種である。口縁端部は平坦に整形される。

SK418 からは 101 ～ 103 の土器が出土した。すべて深鉢片と考えられる。101 は胎土に繊維を多量に含み、整形・調整が非常に粗い。内面のケズリが顕著である。文様は地文のみでループ文（RL）が横位に施される。Ⅲ群７類 d3 種である。102 は平底の底部片である。胎土は 101 に非常に似ており、同一個体の可能性がある。胴下端と底面に半截竹管状工具の背面の先端角を用いたＣ字形の爪形文が施されたⅢ群６類 b1 種である。103 は胴部片と考えられる。爪刺突が施され、その下にループ文（RL）と考えられる圧痕が認められる。Ⅲ群１類ａ種である。

SK855 からは 104 ～ 107 の土器が出土した。104 はループ文（RL）の末端環部を強調して横位施文した深鉢であり、口縁端部は平坦に整形される。Ⅲ群７類 d2 種である。105 は原体Ｌによる無節の斜縄文が、原体閉端部を強調して等間隔に横位施文されたⅢ群７類 b2 種である。繊維束が非常に粗い原体を用いている。106 は非結束羽状縄文が横位に施文された胴部下半の土器片である。０段多条の節が非常に密な原体により、幅狭等間隔に施文される。Ⅲ群７類 a1 種である。107 は篦状工具による帯状刺突列が施され、破片下半の篦状刺突文は右上がりの斜位に施される。右下隅には円形竹管文が認められ、篦状刺突列による蕨手状文、鋸歯状文が施される。篦状刺突内部には細かな浅い凹凸が認められる。Ⅲ群２類ｂ種である。

SK852 からは 108・109 の土器が出土した。108 は SK852 と P764、また３Ｃ・３Ｄ・４Ｅグリッド出土土器片が接合した深鉢である。口縁部が内湾しながら開き、口縁下に若干の段を有する器形で、底部はすぼまる。丸底風の平底で自立しない。口縁上端部に竹管状工具側面で押圧したと考えられる刺突文が施され、頸部にはコンパス文が施される。胴下端部には半截竹管状工具背面の先端角を用いたＣ字形爪形が連続して施され、底面にも同じ施文手法により同心円状・十字状モチーフが描出される。地文には末端環部のみのループ文（RL）が横位に施文される。内面のケズリ痕は上半部に横位、下半部に斜位方向と顕著である。胎土・内面調整は南側調査区出土の９の土器に酷似する。Ⅲ群１類ｃ種である。109 の土器片は外面に幅の広い非結束羽状縄文が施され、内面には横位方向の条痕が認められる。羽状縄文と条痕の施文状況から早期末までは上がらないが本遺跡出土土器では最古段階のものと考えられる。108 とは共伴しているが時期に開きがあるため、何らかの要因による混入と考えたい。Ⅰ群１類である。

SK873 からは 110 ～ 112 の深鉢が出土した。110・111 が下層（２層）から、112 が上層（１層）から出土した。110 は波状口縁で口縁部が若干内湾しながら開く器形である。波状は４単位と考えられる。口縁端部にＣ字形の爪形が施され、口縁部から胴部上位の広い範囲にＤ字形の爪形が数段にわたり横位施文される。刺突文以下はループ文（RL）が横位施文される。Ⅲ群５類ｂ種である。111 は平底で底部が張り出す 2b 類である。胎土・調整は 110 と類似するが、110 の胴部下半の内面には炭化物が付着するのに対し、111 の内面には認められない点から同一個体とは積極的に言えない。111 は胴下端部に半截竹管状工具先端の内面を用いたＣ字形爪形が連続して施され、底面にも同じ施文手法により同心円状・十字状モチーフが描出される。地文には斜縄文（RL）が施されるが、ループ文の斜縄文部の可能性もある。Ⅲ群

6類b2種である。112は末端環部が強調されたループ文が横位施文された深鉢で、口縁端部は平坦に整形され口縁部は若干内湾しながら開く器形である。Ⅲ群7類d2種である。

SK875からは113の深鉢が出土した。旧河川4層出土土器が接合している。また胴下端部の土器片は接合していないが、胎土・調整・地文から同一個体と考えられる。口縁端部は内削ぎ状に丁寧に整形され、口縁部は直線的に開き、口縁下に若干の段を持つ器形で、胴部から底部は砲弾状で丸底になると考えられる。文様は口縁上端部に爪刺突が施され、底部にも逆「ハ」の字の爪刺突が施される。頸部には平行沈線による上下の文様帯区画線が施され、区画内には平行沈線により波状文、波状文頂部から垂下沈線文が描かれる。また、頸部文様帯の上区画の平行沈線が重複し、口縁上端の爪刺突直下にも横位の平行沈線が施されることから、口縁部の文様帯区画を意識していたことがうかがえる。しかし口縁部文様帯区画内は地文のみで、主文様が施されない点から、形骸化した区画の可能性がある。地文には結節回転文が横位に施文される。Ⅲ群1類b種である。

SK936からは114～116の土器が出土した。114は原体末端環部のみを強調したループ文（LR）が施された深鉢で、口縁部は一部しか遺存していないが、外反して開く器形で波状口縁になる可能性がある。特筆すべきは地文のループ文の施文で、口縁部のループ文は右下がり、胴部上位のループ文は右上がりに施文され､それ以下は横位に施文される。つまり口縁部から胴部上位にかけて地文のループ文により菱状、または鋸歯状などの文様が構成される可能性が高い土器と言える。Ⅲ群7類d1種である。116は底部付近の破片と考えられるが、地文が末端環部のみを施文したループ文（LR）であり、114と同一個体の可能性がある。Ⅲ群7類d2種である。115は施文幅の広い斜縄文（RL）が横位に施された胴部片で、Ⅴ群2類a種である。

SK941からは117～121の土器が出土した。117・118は口縁部にD字形爪形文による帯状刺突列が施されたⅢ群3類の深鉢である。117は直線的に開く口縁形態で、口縁端部は丸く整形される。頸部にコンパス文を持ち、地文には原体閉端部を強調した斜縄文（RL）が横位に施文される。118は口縁端部が内削ぎ状に整形され、内湾して開く口縁形態である。器面が風化しているため地文は不明である。119はC字形の爪形が施された胴下端部の破片である。Ⅲ群6類b1種である。120・121はループ文（RL）が施されたⅢ群7類d3種の深鉢で、胎土・調整・地文から同一個体と考えられる。120は口縁端部が内削ぎ状に整形され、口縁上端部は無文となっている。

SK1414からは122の深鉢が出土した。口縁端部は平坦に整形され、口縁部は直線的に立ち上がり、胴部下位から底部にかけて急にすぼまる器形である。文様は地文のみで、複節（LRL）の斜縄文が1㎝ほどの施文幅で等間隔に横位施文される。底面は無文である。Ⅲ群7類b3種である。

SK1085からは123の深鉢胴下端部の破片が出土した。爪刺突が施され、地文にはループ文の末端環部分のみが横位施文される。Ⅲ群6類a種である。

SK405からは124の鉢の胴部片が出土した。円形竹管文が横位に1列施文され、ほかは点列状［寺崎・石原1999］の刺突が横位に施される。上部の点列状刺突文は細い棒状工具により一列ずつ刺突が施されるが、円形竹管文以下の点列状刺突文は半截竹管状工具の先端内面の角を用いて、平行に細かい刺突が施される。そのため刺突が重複する部分が認められる。内面の調整は丁寧である。根小屋式に比定される鉢で前期中葉Ⅳ群1類a1種である。

125～127は斜縄文（RL）が施された深鉢胴部片である。125はSK1301出土で、原体の施文幅が狭く等間隔に横位施文されるⅢ群7類b1種である。126・127は施文幅が広いⅤ群2類a種である。126

は SK371、127 は SK943 出土である。

128 は SK850 出土の深鉢胴部片で、結節回転文が施されたⅢ群７類 c2 種である。胎土・調整・地文・炭化物の付着状況から SK875 出土の 113 と同一個体と考えられる。

129 ～ 132 は結節を有する原体 RL により結節回転文と斜縄文が施され、結節部の回転圧痕は綾絡状となる。129 ～ 131 は胎土が褐色を呈し、雲母・石英を多量に混入した特徴的なものであり、同一個体の可能性が高い。129 は SK404、130 は SK853、131 は SK938 出土、Ⅴ群３類である。132 は口縁上端部に爪刺突が施されたⅢ群１類 e2 種の口縁部片で、SK1404 出土である。

133 ～ 139 はループ文（RL）が施された土器片で、133・136・139 は末端環部を強調したループ文が施されたⅢ群７類 d2 種、それ以外は斜縄文部も施されたⅢ群７類 d3 種である。SK1176 出土の 136 は口縁端部が平坦に整形される。

SK849 出土の 140 は器面の風化が著しく詳細不明である。

SX347 からは 141・142 の細い原体によるループ文（RL）が横位施文されたⅢ群７類 d3 種の胴部片、143・144 の結節回転文が施されたⅢ群７類 c1 種の胴部片が出土した。143・144 は胎土が褐色で雲母を多量に含む特徴的なものである。

F357 の周囲からは 145 が出土した。篦状工具による刺突が多段に施されたⅢ群４類 c 種の胴部片である。

F166 からは 146・147 が出土した。146 は結節回転文が施されたⅢ群７類 c1 種で、特徴的な胎土の土器であり 143・144 と同一個体の可能性がある。147 は細い原体によるループ文（RL）が施されたⅢ群７類 d3 種の胴部片である。

148 ～ 150 はループ文（RL）が施されたⅢ群７類 d3 種の深鉢片である。148・149 は口縁部片で、口縁端部が平坦に整形される。148 は F356、149 は F361、150 は F775 の周辺から出土した。

遺物集中 350 からは 151 の深鉢が出土した。口縁部が内湾する器形で、口縁端部は丸く整形される。文様は地文のみで非結束羽状縄文が施される。口縁部から胴部上位までは原体の閉端部が強調され施文幅が非常に狭い斜縄文が等間隔で横位に施文される。また横位の羽状だけでなく、施文帯により異なる原体を用い縦位の波状を構成している。Ⅲ群７類 a1 種である。

152 ～ 158 は旧河川の４層から出土した土器である。152 は半截竹管状工具の先端による C 字形爪形文が横位・斜位に施された胴部片で、破片上部の刺突列は斜位に施され、鋸歯状文もしくは蕨手状文が描出される可能性がある。Ⅲ群２類 a 種である。153 は胴下端部の破片で、爪刺突が施される。Ⅲ群６類 a 種である。154 は施文幅の広い斜縄文が施された深鉢の胴部下位の破片である。Ⅴ群２類 a 種である。155･156 は細い原体によるループ文(RL)が施されたⅢ群７類 d3 種の深鉢片で､同一個体の可能性がある。155 は口縁端部が平坦に整形される。157 は結節回転文が施された深鉢である。口縁端部は平坦に整形され、口縁部が直線的に開く器形である。内面には指頭圧痕と横位方向のナデ調整が顕著に認められる。Ⅲ群７類 c2 種とした。158 は爪刺突が施された胴部片である。爪刺突列の上には１条の沈線が見られるが判然としない。Ⅲ群１類 a 種である。

屋外炉の周辺から出土した土器を除くと、包含層からは 159 ～ 171 の土器が出土した。159 は横位の微隆帯を持つ胴部片である。微隆帯上に横「ハ」の字の爪刺突が施され、布目式に比定される特徴を有している。器面の風化が著しく、地文は不明である。Ⅱ群１類 b 種である。160 は無文帯を持つ胴部上位の破片で、地文にはループ文（RL）が施される。Ⅲ群１類 d 種である。161 は波状口縁となる口縁部片で

ある。平行沈線が斜位に施されており、口縁部文様は菱状文になると予想される。有尾式に比定される可能性が高い土器で、前期中葉Ⅳ群２類に分類した。162 は非結束羽状縄文が施された口縁部片である。口縁端部は平坦に整形され、若干外反する器形である。地文の非結束羽状縄文は原体の閉端部を強調した施文幅の広い斜縄文で構成される。Ⅲ群７類 a2 種である。163 は原体の施文幅が狭い斜縄文（RL）が等間隔に横位施文された胴部片で、Ⅲ群７類 b1 種である。164 は縦位に斜縄文（LR）が施された胴部片で、Ⅴ群２類ｂ種である。165 は結節回転文が施された胴部片で、胎土中に雲母を多量に含む。Ⅲ群７類 c1 種である。166 ～ 171 はループ文（RL）が施された土器である。166・167 は末端環部を強調したⅢ群７類 d2 種である。167 は口縁部の小破片であるが､波状口縁になると考えられる。口縁上端部は無文となる。168 ～ 171 は斜縄文部も施されたループ文のⅢ群７類 d3 種である。細い原体によるループ文が幅狭等間隔に横位施文される。

Ⅷｂ層出土土器の縄文について

本層位で地文が判別できた個体は 46 例であり、主体となるものがループ文で 22 例あり、比率は 48％である。次いで斜縄文が 11 例で 24％、結節回転文が８例で 17％、そのほか非結束羽状縄文が４例で９％、第１種結束羽状縄文が布目式の１例である。ループ文は末端環のみを施すⅢ群７類 d2 種が 10 例で 22％、斜縄文部まで施すⅢ群７類 d3 種が 12 例で 26％となり、ほぼ同じ比率となる。斜縄文は幅狭等間隔で横位施文されたⅢ群７類 b1 種が４例の９％、うち１例が複節である。幅狭等間隔横位施文のもので原体の閉端部が強調されるⅢ群７類 b2 種が４例で９％、施文幅が広いⅤ群２類ａ種が３例で７％となる。結節回転文では施文幅が狭いものが５例の 11％、緩い結節のものが３例で７％となる。

c）　Ⅷb2 層出土の土器（図版 35・112 - 172 ～ 178）

SX857 の１層からは 172 の口縁部片が出土した。口縁上端部に爪刺突が施され、地文には原体閉端部を強調した斜縄文（LR）が横位施文される。口縁端部は内削ぎ状に整形される。Ⅲ群１類 e2 種である。

SK1071 からは 173 の深鉢が出土した。施文幅の狭いループ文（RL）が等間隔に横位施文されるⅢ群７類 d3 種である。口縁端部は平坦に整形され、口縁部は若干内湾しながら開く器形である。

SK1090 からは 174 の深鉢胴部片が出土した。地文のみの土器片で、片翼状の第１種結束羽状縄文が横位施文される。布目式に比定され、Ⅱ群２類ｂ種である。

SK1160 からは 175 ～ 178 の土器が出土した。175 ～ 177 は結束部を強調した施文幅の極めて狭い第１種結束羽状縄文が横位施文される。布目式に比定され、Ⅱ群２類ａ種である。178 は胴下端部の破片で、爪刺突が施されるほかは無文である。Ⅲ群６類ａ種である。胎土から 175 ～ 177 は同一個体の可能性もある。

Ⅷb2 層出土土器の縄文について

本層位では上述のように布目式の第１種結束羽状縄文が４例、斜縄文部まで施されたループ文が１例、原体閉端部が強調された斜縄文が１例となる。

B　石　　器

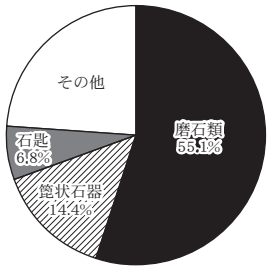
１）概要と記述の方法

出土した石器・石製品は試掘調査の分を含めて総数 133 点である。その内訳は、石鏃６点、石錐６点、石匙８点（未成品１点を含む）、篦状石器 17 点、両極石器４点、玉類１点、磨製石斧３点（破片数は７点、

うち５点が接合）、石錐５点、磨石類 65 点、不定形石器（使用痕のある剝片、二次加工のある剝片を含む）15 点、石皿類３点である。石器についてはすべて図示し、そのほかに剝片３点を図示した。

谷地遺跡の石器の組成は（第 26 図）、磨石類が全体の 55.1% を占めている。次いで篦状石器の 14.4%、石匙の 6.8% と続く。同時期の遺物が出土した狐森Ｂ遺跡［田中ほか 2007］、山口遺跡［玉木・高橋 1999］、大角地遺跡［加藤ほか 2006a］、二軒茶屋遺跡［水澤 2003］について主要な石器組成と比較すると（第 27・28 図）、いずれの遺跡も磨石類の比率が高いが、大角地遺跡・二軒茶屋遺跡は、石錐・石皿類の比率も高い（第 28 図）。一方、谷地遺跡・狐森Ｂ遺跡・山口遺跡では篦状石器や石匙の比率が高く（第 26・27 図）、石匙は縦型のものが多い。また、山口遺跡で出土した石匙には「松原型石匙」［秦 1991］が含まれている。谷地遺跡においても「松原型石匙」の定義に当てはまるものが出土しており、この点でも山口遺跡との類

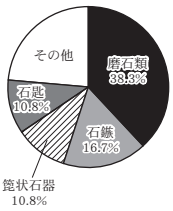
器　種	点数	割合(%)
石鏃	6	5.1
石錐	6	5.1
石匙	8	6.8
篦状石器	17	14.4
両極石器・楔形石器・ピエス	4	3.4
磨製石斧	3	2.5
磨石類（磨石・敲石）	65	55.1
石皿類（石皿・砥石・台石）	3	2.5
石錘	5	4.3
装飾具（玉類・耳飾り）	1	0.8
合計	118	100
不定形石器	15	



第 26 図　谷地遺跡の石器組成

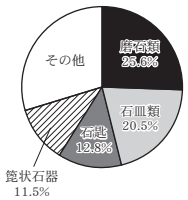
狐森B遺跡

器　種	点数	割合(%)
石鏃	37	16.7
石錐	15	6.7
石匙	24	10.8
石槍	8	3.6
篦状石器	24	10.8
打製石斧	11	4.9
磨製石斧	7	3.2
磨石類（磨石・敲石）	85	38.3
石皿類（石皿・砥石・台石）	9	4.1
石錘	2	0.9
合計	222	100
磨製石斧未成品	28	
不定形石器	250	



山口遺跡

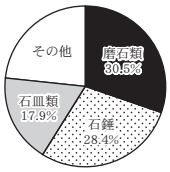
器　種	点数	割合(%)
石鏃	8	10.3
石錐	8	10.3
石匙	10	12.8
尖頭器	4	5.2
篦状石器	9	11.5
磨製石斧	3	3.8
磨石類（磨石・敲石）	20	25.6
石皿類（石皿・砥石・台石）	16	20.5
合計	78	100
石鏃未成品	16	
不定形石器	75	



第 27 図　狐森Ｂ遺跡・山口遺跡の石器組成

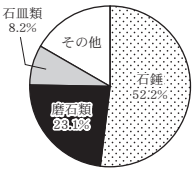
大角地遺跡

器　種	点数	割合(%)
石鏃	15	2.5
石錐	2	0.3
石匙	3	0.5
両極石器・楔形石器・ピエス	4	0.7
打製石斧	1	0.1
磨製石斧	10	1.7
磨石類（磨石・敲石）	183	30.5
石皿類（石皿・砥石・台石）	107	17.9
石錘	170	28.4
装飾具（玉類・耳飾り）	104	17.4
合計	599	100
石棒	1	
磨製石斧未成品	133	
不定形石器	78	



二軒茶屋遺跡

器　種	点数	割合(%)
石鏃	15	2.2
石錐	8	1.2
石匙	50	7.5
石槍	5	0.7
篦状石器	7	1.0
両極石器・楔形石器・ピエス	3	0.4
打製石斧	1	0.2
磨製石斧	18	2.7
小型磨製石斧	2	0.3
磨石類（磨石・敲石・凹石）	155以上	23.1
石皿類（石皿・砥石・台石）	55以上	8.2
石錘	350以上	52.2
装飾具（玉類・耳飾り）	2	0.3
合計	671	100
両面加工石器	36	
糸巻状石器	2	
磨製石斧未成品	77	
スクレーパー	13	
不定形石（RF・UF）	64	



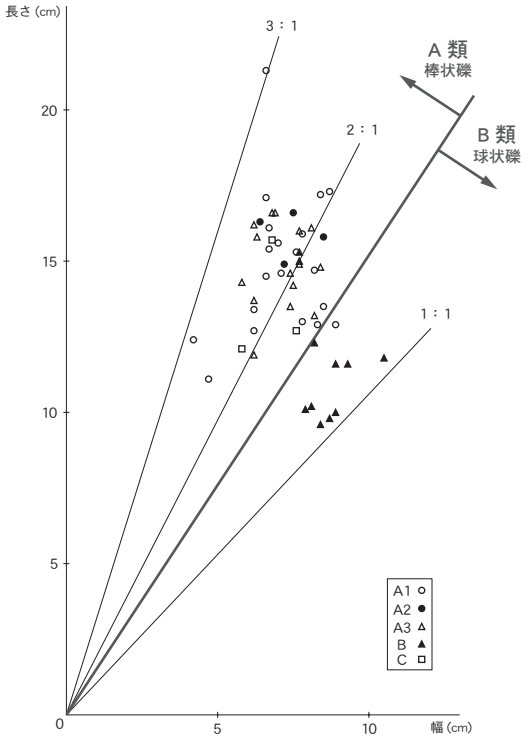
第 28 図　大角地遺跡・二軒茶屋遺跡の石器組成

似性がある。

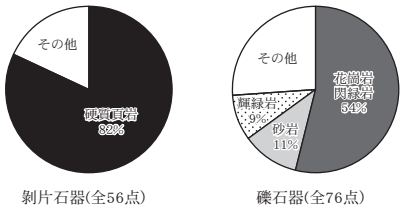
また谷地遺跡の磨石類は、長幅分布から（第 29 図）棒状礫を使用した A 類の磨石類が多いことが分かる。これは、いわゆる「特殊磨石」が多いことによる。特殊磨石は棒状礫の縁部に磨面があり、その磨面は縦長で幅が狭いことが特徴である。谷地遺跡と出土石器の組成が類似する狐森 B 遺跡、山口遺跡においても、磨石類における特殊磨石の比率が高い。

このように見てくると谷地遺跡、狐森 B 遺跡、山口遺跡では、「石匙は縦型のものが多い」「石錘が少なく特殊磨石が多く出土している」という共通項があると言える。

石質については、第 3 表の器種別石質数量によると、剥片石器 56 点のうち硬質頁岩のものが 46 点で 82％を占める。礫石器 76 点のうち花崗岩・閃緑岩が 41 点で 54％、次いで砂岩、輝緑岩の順になる。谷地遺跡で多く出土した磨石類における石質の割合は、花崗岩が 42%、閃緑岩が 15％、輝緑岩と砂岩が 11％になっている。出土した石器の組成が類似する狐森 B 遺跡の礫石器の石質の割合は、花崗岩が 67.3％を占め、次いで安山岩類・輝緑岩の 26.7％となっている。狐森 B 遺跡の石材供給源は加治川水系と報告されている。加治川水系には谷地遺跡では見られない片麻岩系の石材がありこれが磨石に一部利用されているが、主体的に選択されているのは両遺跡ともに花崗岩類である。



第 29 図　磨石類長幅分布図



第 30 図　剥片石器・礫石器における石質割合

器種＼石質	花崗岩	閃緑岩	はんれい岩	砂岩	輝緑岩	石英斑岩	安山岩	流紋岩	蛇紋岩	凝灰岩	緑色凝灰岩	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	頁岩	硬質頁岩	黒曜石	珪藻質泥岩	滑石	鉄石英	計
石鏃														5		1			6
石錐														5				1	6
石匙														8					8
筌状石器								1					2	13		1			17
両極石器														2	2				4
不定形石器												1		13		1			15
磨製石斧									2		1								3
石錘	1			1				1				2							5
磨石類	27	10	5	7	7	2	1	2		4									65
石皿類	2	1																	3
玉類																	1		1
計	30	11	5	8	7	2	1	4	2	4	1	3	2	46	2	3	1	1	133

第３表　器種別石質数量一覧

a）観　察　表

観察表は器種ごとにまとめて掲載した。観察表の掲載番号は図版の遺物番号と一致する。（　）は残存値を示す。

b）分　　類

石器の分類は以下のとおりである。玉は1点のみであるため分類は行っていない。

石鏃

「矢の先端に装着される石製の矢じり」［鈴木 1994］である。すべて基部が凹状のもの、いわゆる凹基無茎鏃である。このため凹部の湾曲が大きいものと小さいもので分類し、さらにA類は尖頭部の形状で細分した。

A類　凹部の湾曲が大きいもの。

A1類　尖頭部が鈍角を呈するもの。

A2類　尖頭部が鋭角を呈するもの。

B類　凹部の湾曲の小さいもの。

石錐

「ドリルとも呼ばれるごとく、回転穿孔のための道具と考えられている」［矢島・前山 1983］ものである。錐部を意図的に作出するか否かで分類した。

A類　明瞭に錐部が作り出されているもの。

B類　剥片の一側縁部を利用し錐部としているもの。

石匙

「つまみ状の突起を作り出し、ほかの縁辺に鋭い刃部をもつ」［戸沢 1994］ものである。刃部の位置で分類し、さらにA類は刃部の形状で細分した。

A類　縦型石匙　つまみ部の軸を垂直にしたとき刃部が縦に長いもの。

A1類　先端の形状が切り出し形（鋭角）を呈するもの。

A2類　先端の形状が平ら（鈍角）なもの。

B類　横型石匙　つまみ部の軸を垂直にしたとき刃部が横に長いもの。

箆状石器

「上方が狭く下方が広がる箆の形をし、押圧剥離によって丹念に形が整えられる」［戸沢 1994］ものである。刃部の形状で分類し、さらに刃部角で細分した。

A類　刃部の形状が直線的なもの。

A1類　刃部角が急傾斜なもの。

A2類　刃部角が浅いもの。

A3類　基部に錐状の突起を持つもの。

B類　刃部の形状が湾曲するもの。

B1類　刃部角が急傾斜なもの。

B2類　刃部角が浅いもの。

両極石器

「向かいあった二辺の縁辺部に階段状の剥離痕が対となる」［鈴木 1994］[1]ものである。いわゆる「楔形石器」、「ピエス・エスキーユ」と称されるものを一括した。

1）　ピエス・エスキーユの説明を一部引用。

不定形石器

定形的な剥片石器を除き、「剥片を素材とし、二次加工や使用痕の認められるもの、または使用によると考えられる微細剥離の認められるもの」［高橋・鈴木 1990］である。刃部の有無で分類した。

A 類　削器の類で刃部と判断できる縁辺を持つもの。

A1 類　刃部が両側縁にあるもの。

A2 類　刃部が一側縁にあるもの。

B 類　剥片に二次加工や使用痕を認めたもの。

磨製石斧

「原石を打ち欠いて形を整え、砥石で研磨した」［戸沢 1994］ものである。製作手法により分類した。

A 類　擦切り手法によるもの。

B 類　敲打により形を整え、研磨で仕上げたもの。

磨石類

球状礫や棒状礫に磨面を持つものを磨石類とした。また、敲打痕、凹痕を持つ石器も磨面を持つものが多いことから、一括して扱った。

A 類　いわゆる「特殊磨石」と呼称されるもので、棒状礫の稜部分を作業面とするもの。

A1 類　棒状礫の一つの稜に細長い磨痕が認められるもの。

A2 類　棒状礫の複数の稜に細長い磨痕が認められるもの。

A3 類　棒状礫の稜部分に磨痕があると同時に、礫の上端・下端・正面・裏面のいずれかに敲打痕が認められるもの。

B 類　球状礫または扁平礫に磨痕・線状痕・敲打痕・凹痕が認められるもの。

C 類　棒状礫の下端に敲打痕が認められるもの。

石錘

扁平礫の一方の軸に剥離によって縄掛けが作出されたものを石錘とした。

A 類　扁平礫の短軸方向に縄掛けがあるもの。

B 類　扁平礫の長軸方向に縄掛けがあるもの。

石皿類

大型自然礫の片面に磨面・敲打痕があるもので、石皿・砥石・台石などを含む。

A 類　磨面が平坦なもの。

B 類　磨面が礫の自然形状そのままのもの。

C 類　磨面が窪んでいるもの。

2）南側調査区の石器（図版 36・113 - 179 ～ 187）

南側の調査区で出土した石器は、両極石器 1 点（179）、不定形石器 1 点（180）、剥片 1 点（181）、磨石類 6 点(182 ～ 187)である。179 は両端部に微細な階段状の剥離を持つ両極石器である。階段状剥離のエッジ部分は摩滅しており、実体顕微鏡下では光沢が観察できる。180 は縁辺に微細剥離を持つ剥片である。剥離部のエッジは顕微鏡下では摩滅し光沢を持つ。181 はやや縦長の剥片で、打面の一部に礫面を残す。正面下部には微細剥離があり、顕微鏡下では摩滅し光沢を持つ。182・183 は磨石類 A1 類、184・186 は A3 類､185･187 は B 類である。187 は扁平礫であるが左右の側面に特殊磨石同様の細長い磨面を持つ。

3）　北側調査区の石器

北側調査区で出土した石器については、包含層であるⅧ層が分層されたことから、包含層・遺構出土石器ともに検出層位ごとに記載するが、Ⅷb2 層関連の石器は 5 点と少ないため、Ⅷb 層と一緒に記述した。

a）　Ⅷa 層関連の石器（図版 36・37・113・114 - 188 ～ 220）

Ⅷa 層関連の石器は、石鏃 1 点（188）、石匙 2 点（189･190）、石錐 2 点（192･193）、篦状石器 8 点（194 ～ 201）、不定形石器 3 点（191・202・203）、磨石類 16 点（204 ～ 217・219・220）、石錘 1 点（218）である。188 は A2 類の石鏃で、主要剥離面に凸凹のリングがある。189 は A1 類の石匙で横長剥片を利用している。素材剥片の打点側の厚みを直接打撃により減じ、その後、押圧剥離により刃部を形成している。190 は A1 類で、縦長剥片を利用したものである。左側縁は押圧剥離で刃が付けられ、右側縁は押圧剥離により調整した後、急角度の剥離調整で刃部が設けられている。本遺跡出土の石匙は概して、正面左側刃部が緩傾斜度に、右側刃部は急傾斜度に加工され、「松原型石匙」［秦 1991］の定義の一つに合致している。191 は不定形石器 A2 類で、礫表皮を持つ剥片の縁辺に刃部が設けられている。石質はホルンフェルスである。192 は B 類の石錐で、石質は鉄石英（赤）である。右側縁と先端部は摩滅している。削器と錐の機能を持つと考えられる。193 は B 類の石錐で、剥片端部の突起とその周辺は摩滅している。194・195 は篦状石器の基部である。196 ～ 200 は刃部の形状から篦状石器 A2 類とした。199 の刃部には裏面側に光沢がある。196・197・199 はいずれも横長剥片から作り出されている。200 は主要剥離面は見られず、刃部の調整も明確ではないが、裏面側にある剥離間の稜線上は摩滅し光沢が観察できる。201 は A1 類で刃部が急傾斜角を持つものである。顕微鏡下では刃部の裏面側に光沢が観察される。202 は左側縁に鋸歯状の剥離がある。203 は右側縁に抉入がある。204 ～ 217・219・220 は磨石類である。205・206・209・211・212・214・217 は A1 類である。204・208・210・215 は A3 類で、磨面のほかに下端または正面、側面に敲打痕がある。207 は A2 類で磨面が 2 か所ある。210 は右側面に敲打痕と磨面が並列してある。213・216・219・220 は B 類である。213 は正・裏面に磨面がある。216 は正・裏・両側面に磨面と上・下端に敲打痕がある。219 は扁平礫の側縁に磨面と正面に敲打痕がある。220 は側面のほぼ全周に敲打痕と裏面の一部に磨面がある。218 は石錘の B 類で、長軸方向の両端に打ち欠きがある。

b）　Ⅷb・Ⅷb2 層関連の石器（図版 38 ～ 42・114 ～ 117 - 221 ～ 319）

Ⅷb・Ⅷb2 層関連の石器は、石鏃 5 点（221 ～ 225）、石錐 4 点（226 ～ 229）、石匙 5 点（230 ～ 234）、石匙未成品 1 点（235）、篦状石器 9 点（239 ～ 247）、両極石器 3 点（248 ～ 250）、不定形石器 11 点（236 ～ 238･251 ～ 258）、剥片 2 点（259･260）、磨製石斧 7 点（261 ～ 268（うち 5 点が同一個体））、玉類 1 点（269）、磨石類 43 点（270 ～ 312）、石錘 4 点（313 ～ 316）、石皿類 3 点（317 ～ 319）である。このうちⅧb2 層出土の石器が 5 点（245・268・292・298・302）ある。221 は石鏃 B 類、222 ～ 225 は石鏃 A1 類である。221 は基部の抉りが浅く、形状は二等辺三角形を呈する。222 ～ 224 は基部の抉りが深いタイプである。225 については基部の形状は A1 類だが、尖頭部の両側縁がやや内反りになる。226 ～ 228 は石錐 A 類、229 は石錐 B 類である。227・228 は形状が異なるが、左側面が急角度剥離面（折断面？）の剥片を素材としている点で共通している。229 は残核を用いた可能性が高い。端部に先端から基部方向への微細剥離が付くが、摩耗などはない。230 は石匙 B 類である。横刃型のものだが刃部を欠損している。231 は

石匙 A1 類である。左側縁は正・裏面に剥離調整のある両刃で、右側縁は片刃で細かな剥離調整による。232 は A1 類で正・裏面に剥離がある。左側縁は長めの押圧剥離、右側縁はやや短い剥離により刃部を作り出している。刃部の断面形は、裏面側の剥離角が浅いため両刃形状にはなっていない。233・234 は A2 類に分類した。233 は正面の先端部と側縁に長めの押圧剥離を施し、裏面の先端部と片側縁に急角度の剥離調整がある。いわゆる「松原型石匙」［秦 1991］の定義に当てはまる。234 は素材の打点側を石器の刃部側にしている。刃部先端は剥離調整が行われていないが、顕微鏡下では裏面側の端部に光沢が、正面側の端部には微細剥離が認められる。刃部角は正面左側縁が浅いのに対し、右側縁は急傾斜となっている。235 は未成品と考えた。剥片の形状が 234 と類似する。完成形が 234 と同じであるなら図の天地は逆となる。236 は不定形石器 A2 類である。左側縁に素材の打面と礫皮が残る。右側縁の刃部には小さな剥離が連続している。237 は A1 類である。238 は A2 類で自然面を打面とした剥片である。一側縁に急角度の刃部調整を行っている。251 ～ 258 は不定形石器 B 類である。251 は縦長剥片の左側縁に刃部を設けたもの、252 は右側縁を直線状に微細剥離調整、左側縁は鋸歯状の剥離調整を行ったもの、253 は右側縁の一部に使用痕が観察できるもの、254 ～ 258 は側縁の一部に刃こぼれ状の使用痕が観察できる剥片である。このうち 253 ～ 257 は F165 の周囲で出土した。239 は篦状石器 A2 類である。240・241 は B1 類である。240 は大型の横長剥片を利用している。急角度の刃部を持つ。裏面側の打瘤部を直接打撃により剥離して厚みを減じている。241 は刃部裏面側にある剥離面及び稜線上に光沢がある。242 は A1 類で、刃部の裏面側に光沢がある。また側縁に抉入があり機能が複合していたと考えられる。243 は B2 類である。刃部は裏面側にも剥離調整がある。244 は B1 類である。245 は A3 類で、基部に錐としての突起がある。裏面側のリング凸部に光沢がある。246 は両極技法により上・下端部が潰れている。篦状石器の未成品の可能性がある。247 は篦状石器の基部で破片である。248 ～ 250 は両極石器である。248・249 は黒曜石で礫皮が残る。250 は、左側縁に打撃による潰れ痕、右側縁には逆方向からの剥離がある。259・260 は剥片で、剥離面の打面が残る。261 ～ 268 は磨製石斧である。261 ～ 264・267 は同一個体で、側縁が敲打で潰れていることから、分割または破損後敲石として再利用されたと考えられる。265 に接合図を示した。B 類と推測される。266 は緑色凝灰岩製である。擦切り手法による A 類で、刃部と基部を欠損しており、刃部側は使用時に剥離したと考えられる。268 は刃部片で側縁部に敲打痕があることから、敲石として再利用したものと考えられる。269 は滑石製の管玉で、F762 の覆土中から出土した。穿孔内には螺旋状の線状痕とこれに重なる縦方向の線状痕がある。270 ～ 312 は磨石類である。270 ～ 283・289・307 は A1 類、284 ～ 287 は A2 類、288・290 ～ 303 は A3 類である。308 ～ 312 は B 類とした。304 ～ 306 は C 類である。313 ～ 316 は石錘である。313・314 は短軸方向に縄掛けの打ち欠きがある A 類、315･316 は長軸方向に縄掛けの打ち欠きがある B 類である。317 ～ 319 は石皿類である。317 はわずかに内湾する磨面と敲打痕が認められる C 類である。318 は磨面が平坦な A 類、319 は礫の自然面を形状どおり作業面とした B 類である。

4　自然科学分析（縄文時代）

A　古環境と年代

パリノ・サーヴェイ（株）
千葉博俊　伊藤良永　斉藤崇人　馬場健司
松元美由紀　高橋　敦　辻本裕也

1）　分析目的と試料

調査区を東西に走る旧河川の南側から屋外炉や土坑を検出している。これらの遺構を検出したⅧ層は、見掛け塊状をなすシルト～粘土の泥質土からなり、旧河川南側では砂及び礫を基質とする堆積物の上位にこれらの泥質土が堆積する状況が観察できる。また、旧河川は、Ⅷ層を削剝する状況や、Ⅷ層と同様の層相の堆積物によって埋積される状況が確認できる。ここでは、古環境・植物利用、遺構の用途・形態の検討、土器の年代等を検討するため自然科学分析を行う。

a）古　環　境

試料は調査区東壁内・包含層土（基本土層試料）・旧河川内から採取した土壌試料である。試料の個別詳細としては、東壁沿いに設定したトレンチ（7Eグリッド）の最下層にある腐植土層（青灰色シルト～粘土）を試料番号1に、基本土層に関する試料は旧河川南側の屋外炉・土坑が集中した範囲内（7D12グリッド）のⅧ層から採取した土壌試料2点で、Ⅷa層のものを試料番号2に、Ⅷb層のものを試料番号3とした。旧河川に関する試料はトレンチ（7D12グリッド）のセクションベルトから採取した塊状試料である。試料観察では異なる層相が認められたことから、セクションベルトの上部（植物遺体混じりの灰褐色シルト）を試料番号4、中部（みかけ塊状の灰褐色シルト）を試料番号5として分析試料を採取した。上記の5試料を対象に花粉分析を、試料番号1・4・5の3試料を対象に植物珪酸体分析を、試料番号1を対象に珪藻分析を行った。また、旧河川採取土壌中から水洗選別した種実遺体については種実遺体同定を行った。

b）遺構・遺物の年代

試料は、旧河川最下層から出土した木材、遺物包含層や土坑内から出土した炭化材、土器の内外面に付着した炭化物である。旧河川から出土した径12㎝を呈する木材を試料No.1、a）の試料番号2の水洗選別によって抽出した炭化材（0.12g）を試料No.2、土坑付近（6C14グリッド）から出土した炭化材（0.8g）を試料No.3、SK831（Ⅷa層）出土土器（図版31-67）内土壌から採取した炭化材（0.23g）を試料No.4、SK446（Ⅷ層）出土土器（図版29-4）に付着した炭化物（0.24g）を試料No.5、SK875出土土器と接合した旧河川出土土器（図版33-113）の外面に付着した炭化物（0.01g）を試料No.6とし、これらを対象に放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。

c）遺構の用途・形態

縄文時代前期の動・植物利用の検討と屋外炉の形態や燃料材の検討を目的として分析を行った。動・植物利用の検討についは、遺構埋積物中の微細遺物の産状に注目し、F195、SK831（Ⅷa層）出土土器（図版31-67）内部、SK873（Ⅷb層）出土土器（図版33-110～112）下から採取した土壌試料3点と、この

ほかの土坑覆土や旧河川土壌の水洗選別により回収した炭化物を対象に微細物分析・樹種同定・灰像分析を行った。屋外炉の形態や燃料材の検討は、F195（Ⅷａ層）内２か所（試料①、②）とF401（Ⅷａ層）内１か所から採取した柱状の塊状試料３点と、屋外炉覆土の水洗選別によって回収した炭化物を対象とした。柱状の塊状試料は軟Ｘ線写真撮影により堆積構造の観察を行い、遺構構築について検討した。またこの試料についても灰像分析、炭化材の同定を行った。

２）分析方法

a）放射性炭素年代測定

目的外の異物については、超音波洗浄、ピンセットによる除去を行った。その後、HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う。試料をバイコール管に入れ、１ｇの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去）を加えて、管内を真空にして封じ切り、500℃（30分）、850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO_2を精製する。真空ラインにてバイコール管で精製したCO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１㎜の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、３MV小型タンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用した。AMS測定時に、標試で米国標準技術局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグランド試料の測定も行う。また測定中同時に$^{13}C/^{12}C$の測定も行うため、この値を用いて$\delta^{13}C$を算出する。放射性炭素の半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（OneSigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCABON CALIBRTION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（OneSigma）を用いる。

暦年較正は、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}Cの変動及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正結果は、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、１年単位で表記している。暦年較正については、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。暦年較正結果は、測定誤差σ、２σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、２σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、２σの範囲をそれぞれ１とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

b）珪藻分析

試料を湿重で７ｇ前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入し、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、［原口ほか1998］、［Krammer1992］、［Krammer & Lange-Bertalot1986,1988,1991a,1991b］、［渡辺ほか

2005］、［小林ほか2006］などを参照し、分類体系は［Round,Crawford & Mann1990］に従う。壊れた珪藻殻の計数基準は、［柳沢 2000］に従う。同定結果は、中心類（Centric diatoms; 広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae）と羽状類（Pennate diatomos）に分け、羽状類は無縦溝羽状系藻類（Arphid pennate diatomos; 広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae）と有溝羽状珪藻類（Raphid pennate diatoms; 広義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae）に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。各種類の生態性については、［Vos & de Wolf1993］を参考とするほか、塩分濃度に対する区分は［Lowe1974］に従い、真塩性種（海水性種）、中塩性種（汽水性種）、貧塩性種（淡水性種）に類別する。また、貧塩性種については更に細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応性についても示す。堆積環境の解析に当たり、貧塩性種（淡水性種）については［安藤 1990］、陸生珪藻については［伊藤・堀内 1991］、汚濁耐性については［Asai & Watanabe1995］、［渡辺ほか2005］の環境指標種を参考とする。

c）花粉分析

試料 10cc を正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9、濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラートを全面走査し、出現するすべての種類を対象に 200 個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。また、花粉・胞子量のほかに、試料中に含まれる微粒炭量も求める。炭片は 20 μ m 以上を対象とし、それ以下のものは除外する。結果は同定・計数結果一覧表及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。微粒炭量は、堆積物 1 cc 当たりに含まれる個数を一覧表・図として示した。この際、有効数字を考慮し、10 の位を四捨五入して 100 単位に丸める。図中の木本花粉は木本花粉総数を草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で算出し図示した。

d）植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させ、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、「短細胞珪酸体」と呼ぶ）、葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、「機動細胞珪酸体」と呼ぶ）を、［近藤 2004］の分類に基づいて同定・計数する。分析の際は、分析試料の乾燥重量、プレパラート作製に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1 g 当たりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1 g 当たりの個数に換算）を求める。結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、有効数字を考慮し、各分類群の含量は 10 の位を四捨五入して 100 単位に丸める。また、各分類群の植物珪酸体含量とその層位的変化から古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

e）灰像分析

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織細胞を呈している。植物体が土壌中に

取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や撹乱などの影響によって分離し単体となる。しかし、植物が燃えた後の灰には組織構造が珪化組織片（灰像）などの形で残されている場合が多い（例えば、［パリノ・サーヴェイ（株）1993］など）。そのため、珪化組織片の産状により当時の燃料材などの種類が明らかになると考えられる。今回の試料では、植物由来と思われる明瞭な灰が認められなかったため、植物珪酸体分析の手法を元に灰像の濃集と分離を試みる。また、鏡下での観察は灰像の産出に注目した。

f）　種実・微細植物片分析

土壌試料は 200cc を水に浸し、粒径 0.5 ㎜の篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実や炭化材（主に径 4 ㎜以上）などを抽出した。種実は鏡下で観察し、現生標本及び［石川 1994］、［中山ほか 2000］等の図鑑との対照から種類と部位を同定し、個数を表示した。鏡下で区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで表示した。炭化材は 70℃で 48 時間乾燥後の個数と重量を表示し、炭化材同定対象試料とした。分析後は、種実等を種類ごとに容器に入れ、70% 程度のエタノール溶液で液浸し、保管した。

g）　樹 種 同 定

木材（木片）

剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製した。生物顕微鏡で木材組織を観察し、現生標本及び独立行政法人森林総合研究所のデータベースと比較して種類を同定した。

炭化材

自然乾燥し重量を計量した後、上記の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察、その特徴を現生標本と森林総合研究所のデータベースと比較して種類を同定した。木材組織については、［林 1991］、［伊藤 1995,1996,1997,1998,1999］を参考にした。

h）　軟 X 線写真撮影

遺跡における遺物・遺構の埋没過程の検討には肉眼観察だけでは限界があり、土壌薄片や軟 X 線を用いた詳細なスケールでの堆積物・土壌の観察が行われている［Baraham 1995］。今回の調査でも、軟 X 線写真を用いた堆積物微細形態学的調査を実施する。採取した不撹乱試料は、厚さ 1 ㎝まで板状に成形し、湿潤状態のまま、管電圧 50Kvp、電流 3 mA、照射時間 540 秒、照射距離 0.6m の X 線強度条件において軟 X 線写真撮影を実施した。軟 X 線写真の記載は、堆積物については［宮田ほか 1990］、土壌については［佐藤 1990a,b］、［森ほか 1992］、［成岡 1993］などを参考とした。

3）　結果とまとめ

a）　放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）を第 4 表に、測定結果に基づく暦年較正結果を第 5 表に示した。各試料の暦年較正年代については、基本土層や遺構出土炭化材は calBC4,700 ～ calBC4,100 ころを示すのに対し、土器付着炭化物は calBC5,300 ～ calBC4,700 ころとやや古い値を示

試料№	遺構名	層名	試料の質	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code №	測定機関番号
1	旧河川	最下層	木材	5,360± 40	-28.34±0.73	5,410± 40	9704-5	IAAA-72414
2	7D12グリッド	Ⅷa層	炭化材	5,760± 40	-24.16±0.76	5,740± 30	9704-4	IAAA-72656
3	6C14グリッド	Ⅷb層	炭化材	5,610± 40	-23.64±0.61	5,590± 30	9704-3	IAAA-72655
4	SK831	土器内覆土中央部	炭化材	5,580± 40	-26.98±0.92	5,610± 40	9704-6	IAAA-72415
5	SK446	1層 土器4	土器付着炭化物	6,190± 40	-22.91±0.77	6,150± 40	9704-7	IAAA-72416
6	旧河川	4層 土器113	土器付着炭化物	5,900± 40	-24.40±0.90	5,890± 40	9704-8	IAAA-72417

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
2）BP年代値は、1,950年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第４表　放射性炭素年代測定結果

試料№	遺構名	層名	補正年代 (BP)		暦年較正年代 (cal)			相対比	Code №
1	旧河川	最下層	5,358± 38	σ	cal BC 4,319 - cal BC 4,295	cal BP 6,269 - 6,245		0.157	9704-5
					cal BC 4,264 - cal BC 4,226	cal BP 6,214 - 6,176		0.304	
					cal BC 4,204 - cal BC 4,165	cal BP 6,154 - 6,115		0.293	
					cal BC 4,129 - cal BC 4,114	cal BP 6,079 - 6,064		0.085	
					cal BC 4,100 - cal BC 4,074	cal BP 6,050 - 6,024		0.162	
				2σ	cal BC 4,327 - cal BC 4,283	cal BP 6,277 - 6,233		0.157	
					cal BC 4,271 - cal BC 4,146	cal BP 6,221 - 6,096		0.547	
					cal BC 4,136 - cal BC 4,052	cal BP 6,086 - 6,002		0.296	
2	7D12 グリッド	Ⅷa層	5,757± 35	σ	cal BC 4,678 - cal BC 4,637	cal BP 6,628 - 6,587		0.317	9704-4
					cal BC 4,619 - cal BC 4,549	cal BP 6,569 - 6,499		0.683	
				2σ	cal BC 4,706 - cal BC 4,521	cal BP 6,656 - 6,471		1.000	
3	6C14 グリッド	Ⅷb層	5,608± 35	σ	cal BC 4,483 - cal BC 4,480	cal BP 6,433 - 6,430		0.017	9704-3
					cal BC 4,463 - cal BC 4,437	cal BP 6,413 - 6,387		0.305	
					cal BC 4,426 - cal BC 4,369	cal BP 6,376 - 6,319		0.678	
				2σ	cal BC 4,503 - cal BC 4,356	cal BP 6,453 - 6,306		1.000	
4	SK831	土器内覆土中央部	5,581± 40	σ	cal BC 4,450 - cal BC 4,433	cal BP 6,400 - 6,383		0.205	9704-6
					cal BC 4,429 - cal BC 4,368	cal BP 6,379 - 6,318		0.795	
				2σ	cal BC 4,489 - cal BC 4,347	cal BP 6,439 - 6,297		1.000	
5	SK446	1層 土器4	6,188± 37	σ	cal BC 5,213 - cal BC 5,202	cal BP 7,163 - 7,152		0.091	9704-7
					cal BC 5,176 - cal BC 5,070	cal BP 7,126 - 7,020		0.909	
				2σ	cal BC 5,291 - cal BC 5,267	cal BP 7,241 - 7,217		0.025	
					cal BC 5,258 - cal BC 5,253	cal BP 7,208 - 7,203		0.003	
					cal BC 5,228 - cal BC 5,022	cal BP 7,178 - 6,972		0.972	
6	旧河川	4層 土器113	5,899± 37	σ	cal BC 4,822 - cal BC 4,820	cal BP 6,772 - 6,770		0.009	9704-8
					cal BC 4,799 - cal BC 4,721	cal BP 6,749 - 6,671		0.991	
				2σ	cal BC 4,847 - cal BC 4,690	cal BP 6,797 - 6,640		1.000	

1）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。
2）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3）暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4）統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
5）相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第５表　暦年較正結果

した。個々の土器が持つ編年的な時間軸とも整合性が取れているとは言い難い部分がある。

b）珪藻分析

結果を第６表に示した。最下層腐植土層は、珪藻化石の産出が極めて少なく、合計で３個体産出したのみである。

種　類	生態性			環境指標種	東壁最下層腐植土層 1
	塩分	pH	流水		
Bacillariophyta(珪藻植物門)					
Centric Diatoms(中心型珪藻類)					
Aulacoseira granulata (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	1
Thalassiosira sp.	Euh				1
Araphid Pennate Diatoms(無縦溝羽状珪藻類)					
Araphidineae(無縦溝類)					
Grammatophora sp.	Euh				1
海水生種					2
海水～汽水生種					0
汽水生種					0
淡水～汽水生種					0
淡水生種					1
珪藻化石総数					3

凡例
H.R.：塩分濃度に対する適応性
Euh ：海水生種
Ogh-ind：貧塩不定性種
pH ：水素イオン濃度に対する適応性
al-il ：好アルカリ性種
C.R.：流水に対する適応性
l-bi ：真止水性種
環境指標種群
M：湖沼浮遊性種(安藤,1990)
U：広域適応生種(Asai & Watanabe,1995)

第６表　珪藻分析結果

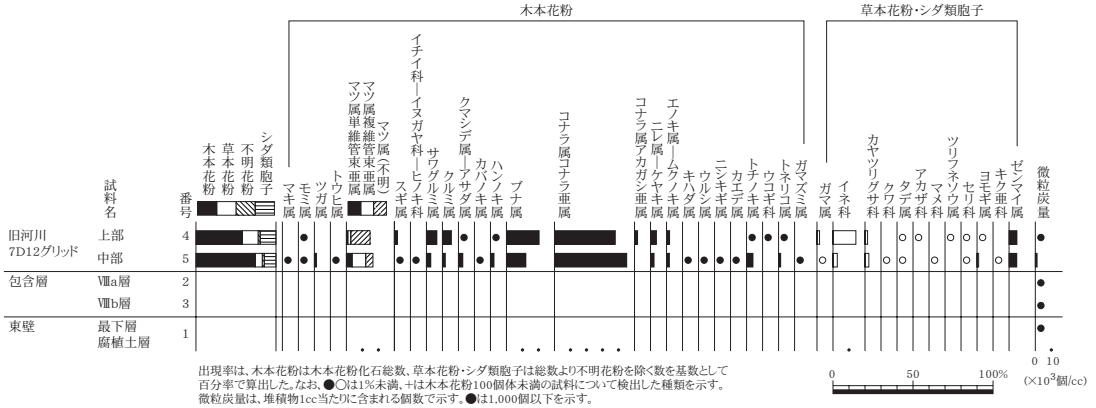
c）花粉分析

結果を第７表、第31・32図に示した。図表中で複数の種類を「-」で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。木本花粉総数が100個体未満の試料は、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるため、出現した種類を「+」で表示するに留めている。

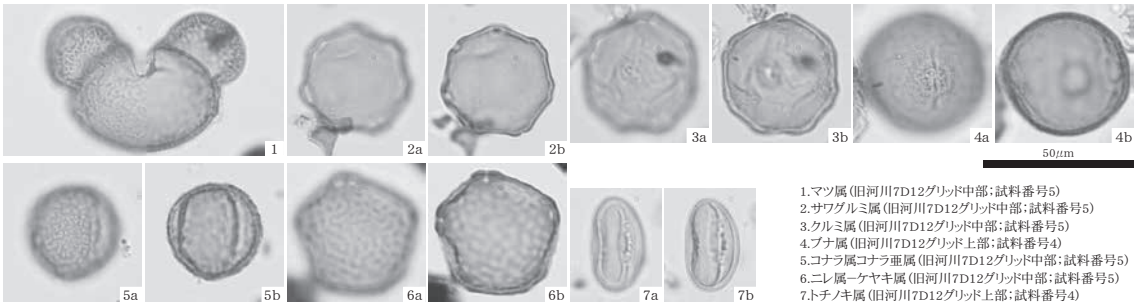
種類 ＼ 試料名 番号	旧河川7D12グリッド 上部 4	旧河川7D12グリッド 中部 5	基本土層 Ⅷa層 2	基本土層 Ⅷb層 3	東壁最下層 腐植土層 1
木本花粉					
マキ属	-	1	-	-	-
モミ属	1	1	-	-	-
ツガ属	-	3	-	-	-
トウヒ属	-	2	-	-	-
マツ属単維管束亜属	1	8	-	-	-
マツ属複維管束亜属	2	19	-	-	-
マツ属(不明)	13	10	-	-	-
スギ属	2	2	-	-	-
イチイ科−イヌガヤ科−ヒノキ科	-	1	-	-	-
サワグルミ属	7	6	-	-	-
クルミ属	6	4	-	-	-
クマシデ属−アサダ属	1	6	-	-	-
カバノキ属	-	1	-	-	-
ハンノキ属	1	5	-	-	-
ブナ属	22	27	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	41	101	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属	2	-	-	-	-
ニレ属−ケヤキ属	4	5	-	-	-
エノキ属−ムクノキ属	2	4	-	-	-
キハダ属	-	1	-	-	-
ウルシ属	-	1	-	-	-
ニシキギ属	-	1	-	-	-
カエデ属	-	1	-	-	-
トチノキ属	1	9	-	-	-
ウコギ科	1	-	-	-	-
トネリコ属	1	3	-	-	-
ガマズミ属	-	2	-	-	-

種類 ＼ 試料名 番号	旧河川7D12グリッド 上部 4	旧河川7D12グリッド 中部 5	基本土層 Ⅷa層 2	基本土層 Ⅷb層 3	東壁最下層 腐植土層 1
草本花粉					
ガマ属	3	1	-	-	-
イネ科	26	8	-	-	-
カヤツリグサ科	3	7	-	-	-
クワ科	-	1	-	-	-
タデ属	1	1	-	-	-
アカザ科	1	-	-	-	-
マメ科	-	1	-	-	-
ツリフネソウ属	1	-	-	-	-
セリ科	1	1	-	-	-
ヨモギ属	1	3	-	-	-
キク亜科	-	2	-	-	-
不明花粉	5	8	-	-	-
シダ類胞子					
ゼンマイ属	9	14	-	-	-
他のシダ類胞子	28	30	-	-	1
合　計					
木本花粉	108	224	0	0	0
草本花粉	37	25	0	0	0
不明花粉	5	8	0	0	0
シダ類胞子	37	44	0	0	1
総計(不明を除く)	182	293	0	0	1
1cc当たりの微粒炭量[個]	500	1,100	<100	500	<100

第７表　花粉・微粒炭分析結果



第 31 図　花粉化石群集の層位分布



第 32 図　花粉化石

d)　植物珪酸体分析

結果を第８表、第 33･34 図に示した。各試料からは植物珪酸体が検出されるが、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められ保存状況は不良である。

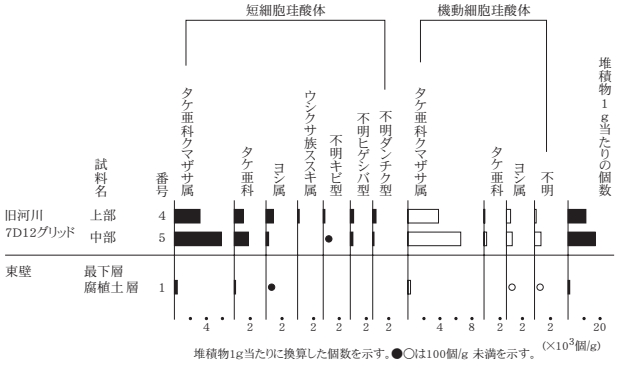
e)　灰 像 分 析

結果を第 34 図に示した。SK873 土器下・F401・F195 覆土からは、いずれも珪化組織片は検出されず、わずかに単体の植物珪酸体（クマザサ属など）が認められるのみである。

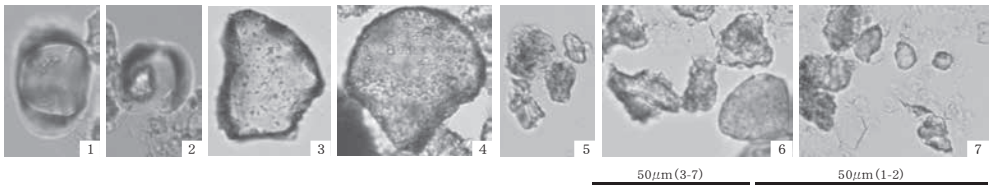
（個/g）

種類 ＼ 試料名 番号	旧河川7D12グリッド 上部 4	旧河川7D12グリッド 中部 5	東壁最下層 腐植土層 1
イネ科葉部短細胞珪酸体			
タケ亜科クマザサ属	3,200	5,900	400
タケ亜科	1,100	1,800	200
ヨシ属	900	300	<100
ウシクサ族ススキ属	200	-	-
不明キビ型	200	<100	-
不明ヒゲシバ型	400	300	-
不明ダンチク型	400	200	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
タケ亜科クマザサ属	3,800	6,600	300
タケ亜科	100	300	-
ヨシ属	500	700	<100
不明	200	800	<100
合　計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	6,500	8,500	600
イネ科葉身機動細胞珪酸体	4,600	8,400	400
総　計	11,200	17,000	1,000

第８表　植物珪酸体含量



第 33 図　植物珪酸体含量の層位分布

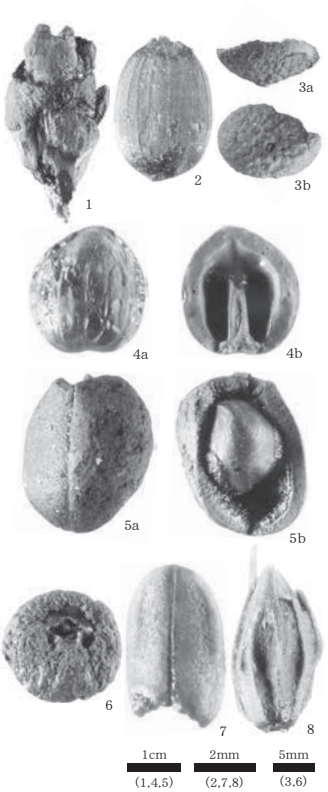


1.クマザサ属短細胞珪酸体（旧河川7D12グリッド上部；試料番号4）　2.ヨシ属短細胞珪酸体（旧河川7D12グリッド上部；試料番号4）
3.クマザサ属機動細胞珪酸体（旧河川7D12グリッド上部；試料番号4）　4.ヨシ属機動細胞珪酸体（旧河川7D12グリッド中部；試料番号5）
5.状況（鉱物粒子が散在）（F195；試料②）　6.状況（鉱物粒子が散在）（SK873）　7.状況（鉱物粒子が散在）（F401）

第 34 図　植物珪酸体・灰像分析プレパラート内の状況

分類群	部位/状態		遺構覆土 土壌 F195	SK831 土器内部	SK873 土器下	旧河川 単体種実 7C18-2	7C18-4	7D2-2	7D2-3	7D2-4	7D2-1	7D7-1	7D7-2
木本													
マツ属複維管束亜属	球果	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
オニグルミ	核	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
サワシバ	果実	完形	-	-	-	8	3	-	-	-	-	-	1
コナラ近似種	殻斗	完形	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
ナラガシワ	殻斗	破片	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
コナラ亜属	果実	破片	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
	果実・殻斗	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
	殻斗	破片	-	-	-	4	6	-	-	-	-	-	-
	幼果	完形	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-
コナラ属	果実	破片	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ブナ	殻斗	完形	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	-	3	2	-	-	-	-	-	-
ブナ科	果実	破片	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-
ムクノキ	核	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
エノキ	核	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
クワ属	種子	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
クスノキ科	種子	破片	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-
ホオノキ	種子	完形	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
コブシータムシバ	種子	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
サクラ属	核	完形	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	1
		破片	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
キハダ	核	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	果実	破片	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-
	種子	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ	果実・種子	完形	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-
	果実	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	-	4	2	-	2	-	-	-	1
	幼果	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-
		破片	-	-	-	3	-	2	-	2	15	9	-
クマヤナギ属	核	完形	-	-	-	2	2	-	-	-	-	-	-
ブドウ属	種子	完形	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ミズキ	核	完形	-	-	-	1	3	-	-	-	-	-	-
ハクウンボク	種子	完形	-	-	-	1		-	-	1	-	-	-
		破片	-	-	-	3	7	-	-	-	-	-	-
エゴノキ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
	種子	破片	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ガマズミ属	核	完形	-	-	-	4	1	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
草本													
ミクリ属	果実	完形	-	-	-	18	11	2	-	-	1	-	2
コウホネ属	種子	完形	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
不明種実			-	-	-	3	1	-	1	-	-	-	-
木の芽			-	-	-	9	8	-	-	-	1	-	1
木材			-	-	-	25	1	-	11	4	2	15	10
炭化材			18		16	1	1	-	-	-	1	-	-
			<0.01g	0.07g	0.02g	-	-	-	-	-	-	-	-
昆虫			-	-	2	1	2	-	-	-	4	-	-
土器			-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
			-	-	0.71g	-	-	-	-	-	-	-	-
		分析量	200cc 329.65g	200cc 312.8g	200cc 289.35g								

第９表　種実・微細植物片分析結果



1.マツ属複維管束亜属 球果（7D7-1 旧河川）
2.サワシバ 果実（7C18-4 旧河川）
3.コナラ近似種 殻斗（7C18-4 旧河川）
4.オニグルミ 核（7D7-1 旧河川）
5.トチノキ 果実・種子（7D2-3 旧河川）
6.コナラ亜属 果実・殻斗（7C18-2 旧河川）
7.クマヤナギ属 核（7C18-4 旧河川）
8.ミクリ属 果実（7C18-4 旧河川）

第 35 図　種実遺体

f)　種実・微細植物片分析

結果を第９表、第 35 図に示した。F195・SK831・SK873 の３試料からは炭化材を検出したが、同定可能な種実や動物遺存体等は検出されなかった。旧河川より採取した植物遺体からは、木本 25 分類群 141 個、草本２分類群 35 個、不明５個の計 181 個が確認できた。

g)　樹 種 同 定

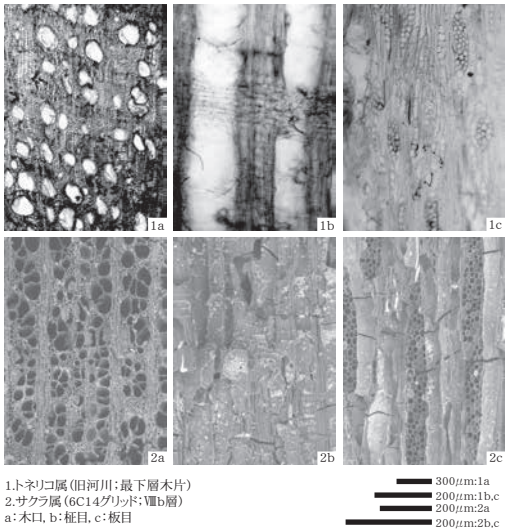
結果を第 10 表､第 36 図に示した。木片は広葉樹のトネリコ属に同定した。炭化材は､広葉樹５種類（コナラ属コナラ亜属コナラ節、クリ、ケヤキ、サクラ属、トネリコ属）に同定した。炭化材のうち、表に広葉樹と記入したものについては、導管が認められたが組織配列の観察ができず種類の同定には至らなかった。

遺構名／地点･層名		試料名	性状	重量(g)	樹　種	備　考
7D12グリッド	Ⅶa層	試料№2	炭化材		クリ	放射性炭素年代測定試料
6C14グリッド	Ⅶb層	試料№3	炭化材		サクラ属	放射性炭素年代測定試料
旧河川	最下層	試料№1	木片		トネリコ属(根株)	放射性炭素年代測定試料
SK831	土器中央部	試料№4	炭化材		クリ	放射性炭素年代測定試料
F165		水洗①	炭化材	0.04	広葉樹(散孔材)	
F168		水洗③	炭化材	2.05	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
					広葉樹(散孔材)	
F190		水洗①	炭化材	0.21	トネリコ属	
F196		水洗③	炭化材	1.68	クリ	
F358		水洗①	炭化材	1.86	トネリコ属	
F361		水洗③	炭化材	0.19	サクラ属	
F397		水洗③	炭化材	0.05	トネリコ属	
F410		水洗④	炭化材	0.04	クリ	
F470		水洗③	炭化材	0.10	広葉樹	
F775		水洗①	炭化材	0.12	クリ	
F937		水洗⑤	炭化材	2.14	トネリコ属	
F1070		水洗④・⑤	炭化材	0.26	広葉樹	
F1075		水洗③	炭化材	0.88	広葉樹	
SK259		水洗① 隣接部	炭化材	7.27	クリ	
					ケヤキ	
SK355		水洗①	炭化材(土塊混)	1.97	クリ	
					ケヤキ	
		水洗②	炭化材	5.47	広葉樹	
SK362		水洗①	炭化材	0.04	広葉樹	
SK400	土器下	水洗①	炭化材	0.45	クリ	
SK406	2層下位	水洗③	炭化材	0.51	ケヤキ	
SK755	1層下		炭化材	0.66	広葉樹	
SK861		水洗②	炭化材	0.15	ケヤキ	
SK1069		水洗④	炭化材	0.41	ケヤキ	

第 10 表　樹種同定結果

各分析の結果から、古環境について、以下のようにまとめた。

珪藻化石に認められた海水生種珪藻化石は、上流域の丘陵を構成する海成層等に由来する二次堆積と見られる。旧河川内からの木本花粉・種実から後背山地・丘陵には冷温帯性落葉広葉樹林が分布、低地部には常緑広葉樹が認められ、河川沿い、周辺の河畔や低地にはクルミ属、コナラ亜属、サワシバ（クマシデ属)、ハンノキ属、ニレ属 - ケヤキ属、エノキ属 - ムクノキ属、トチノキ、ミズキ、トネリコ属等の分類群が生育していたと考えられる。また、遺跡周辺には、開地を好む人里植物を多く含む分類群のイネ科（クマザサ属を含むタ



第 36 図　木材・炭化材

ケ亜科、ススキ属）やカヤツリグサ科、ヨモギ属、クワ科、タデ属、アカザ科などが草地を形成、河川内・周辺の湿地にはガマ属、ミクリ属、ヨシ属、コウホネ属が生息していたと考える。

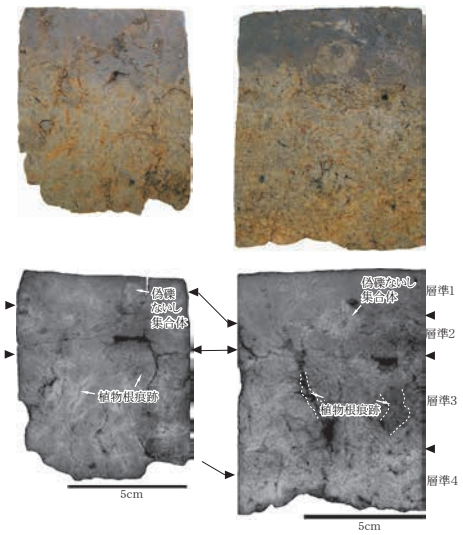
植物利用については、旧河川から、オニグルミ、コナラ、ナラガシワを含むコナラ（亜）属、ブナ、トチノキ、ブドウ属等の可食種実を検出した。これらの種実には、人為的な利用の痕跡は確認できていない。屋外炉から検出した炭化物には上記した種実に由来するものは確認できなかったが、コナラ節、クリ、サクラ属、トネリコ属の炭化材が検出された。また、土坑（SK873）・屋外炉（F401・195）覆土の灰像分析では、珪化組織片は全く検出できず、イネ科植物の利用については明確にできなかった。

h)　軟 X 線写真撮影

肉眼観察及び軟 X 線写真の観察結果に基づいて、各試料の層相を以下に記載する。

F195（試料①、②）

軟 X 線写真を第 37 図に示した。①、②のいずれも層相変化は類似する。上位より層準 1 ～ 4 に区分した。



第 37 図　軟 X 線透過写真（F195）

層準 1：層厚は試料①で 0.5 ㎝、②で 2 ㎝程度である。黒褐色を呈し塊状をなす腐植に富む極細粒砂質泥からなり、1 ㎜以下の細微な集合体ないし偽礫（ブロック土）粒がわずかに散在する。上位層から伸びる垂直・水平方向の 1 ㎜程度の微細な植物根痕がわずかに観察される。これらの層相から、本層準は遺構廃絶期に、基準面上昇など何らかの原因により、遺構の凹地内を覆った泥の可能性が高い。

層準 2：層厚 1 ～ 2 ㎝、黒褐色を呈する腐植に富む砂質泥の偽礫ないし集合体からなる。著しく撹乱されており、間隙に画された大きさが 4 ㎜程度に揃った偽礫ないし集合体が密に観察される。下位の層準 3 に由来する 1 ～ 1.5 ㎝の亜角状をなす偽礫ないし集合体も散在する。これらの層相から、本層準が遺構機能期に形成された堆積物であり、下位層準のブロックは遺構構築時（加工期）ないし機能期に人為的撹乱により取り込まれたものと判断される。

層準 3：灰色を呈する泥質砂～砂質泥からなる。擾乱されており、間隙に画された、大きさ 0.5 ～ 1.5 ㎝の偽礫、集合体が確認される。擾乱により不明瞭だが水平方向の葉理構造も確認される。本層準は河川氾濫等により形成された堆積物からなる。

層準 4：泥まじり細粒砂からなる。擾乱により不明瞭となっているが砂の葉理構造が確認される。層準 3・4 は炉が掘り込まれた地山土と判断できる。

F401

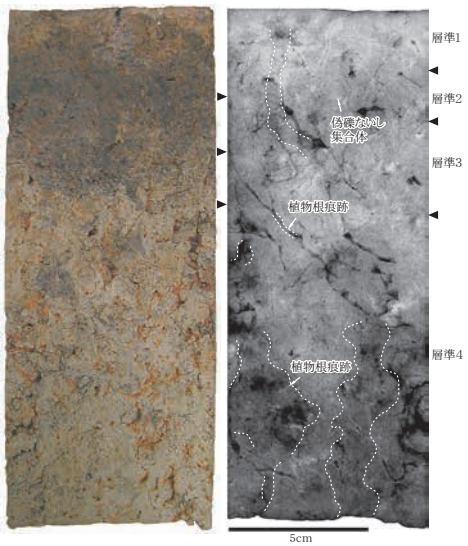
軟 X 線写真を第 38 図に示した。層相は上位より層準 1 ～ 4 に区分される。

層準 1：褐色～灰色を呈する砂質泥～泥質砂からなる。上位に向かって粗くなる、氾濫堆積物である逆級化成層［益田・伊勢屋 1985］をなす。本層相は遺構を覆う氾濫堆積物と判断される。最下部が泥質であることから、氾濫堆積物が累重する前に泥が累重する時期が存在した可能性がある。

層準 2：層厚 1 ～ 2 ㎝、黒褐色を呈する腐植に富む砂質泥の偽礫ないし集合体が散在する。著しく擾乱

されており、間隙に画された４㎜程度に揃った偽礫ないし集合体が密に確認できる。また、下位の層準３に由来する0.5 ～ 1 ㎝の亜角礫状をなす偽礫ないし集合体が散在する。本層準が遺構機能期に形成された堆積物であり、下位層準のブロックは遺構構築時（加工期）ないし機能期に人為的撹乱により取り込まれたものと判断される。

層準３：灰色を呈する泥質砂～砂質泥からなる。擾乱されており、間隙に画された、大きさ 0.5 ～ 1.5 ㎝の偽礫、集合体が確認される。本層準は河川氾濫等により形成された堆積物からなり、遺構構築時の掘削の影響を受けている可能性がある。



第 38 図　軟 X 線透過写真（F401）

層準４：塊状をなす泥混じり細粒砂からなる。生物擾乱により初生の堆積構造は不明瞭となっている。樹木根痕に由来する垂直方向に伸びる植物根痕が密に確認される。本層準は河川の氾濫堆積物からなる。植物根痕は層準１から連続することから遺構廃絶以後の擾乱の可能性が高い。以上の分析結果から、遺構の構造について以下にまとめた。

F195・401 の検出層準及び前後層準の堆積層は、腐植の発達などが認められず、氾濫堆積物の示相構造である逆級化成層をなす河川氾濫堆積物の累重からなることから、氾濫原の発達期に構築されたと推定できる。遺構内に形成された腐植に富む泥層は著しく擾乱されており、遺構機能期の堆積物と判断した。

引用・参考文献

安藤一男　1990　「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42,73 - 88

石川茂雄　1994　『原色日本植物種子写真図鑑』 石川茂雄図鑑刊行委員会　328p

伊東隆夫　1995　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料 ,31』 京都大学木質科学研究所 81 - 181

伊東隆夫　1996　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料 ,32』 京都大学木質科学研究所 66 - 176

伊東隆夫　1997　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料 ,33』 京都大学木質科学研究所 83 - 201

伊東隆夫　1998　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料 ,34』 京都大学木質科学研究所 30 - 166

伊東隆夫　1999　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料 ,35』 京都大学木質科学研究所 47 - 216

伊藤良永・堀内誠示　1991 『陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境への応用』 珪藻学会誌 6,23 - 45

植田弥生　2006　「出土木製品の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 157 集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅢ　住吉遺跡』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 75 - 82

大島秀俊・北村　淳・小林一弘・菊池康一郎　2008 「遺構」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 181 集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅩⅦ　田屋道遺跡Ⅰ・宮の越遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団 16 - 43

小椋純一　2008　「釧路湿原北東陸地部における微粒炭分析」『日本植生史学界 第 23 回大会講演要旨集』 日本植生史学会 46 - 47

金原　明　2006　「木製品の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 169 集 一般国道８号見附バイパス関係発掘

調査報告書　坂井遺跡』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

金原正明・金原正子　1992 「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構 - 右京七条一坊西北坪 - 』 奈良国立文化財研究所 12 - 15

金原正明・金原正子　1993 「史跡松江城二ノ丸番所跡 SK - 04 内堆積土の分析」『史跡松江城発掘調査報告書』 松江市教育委員会 51 - 56

金原正明･金原正子･中村亮仁　1995 「大宮坊跡（厠跡）における自然科学的分析」『史跡石動山環境整備事業報告Ⅱ』 石川県鹿島町教育委員会 51 - 70

（株）古環境研究所　1996 「自然科学分析」『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告書第 3 集 県営圃場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　高柳 A 遺跡・高柳 B 遺跡・名割遺跡』 新潟県荒川町教育委員会 72 - 88

（株）古環境研究所　2005 「細田遺跡出土の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 152 集 上信越自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅨ　下馬場遺跡・細田遺跡』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 83 - 89

（株）古環境研究所　2006 「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 159 集 北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅳ　用言寺遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 53 - 62

（株）パレオ・ラボ　2002 「木製品の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 110 集 北陸自動車道上越春日・木田地区発掘調査報告書Ⅶ　八反田遺跡・高畑遺跡』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 49 - 55

（株）パレオ・ラボ　2005 「木製品の樹種同定」『小国町埋蔵文財発掘調査報告書第 6 集 住宅団地造成に係わる埋蔵文財発掘調査報告書　築先遺跡』 新潟県小国町教育委員会 15 - 21

川村恵洋　　1983　「曽根遺跡出土木材の識別」 新潟大学農演報 16,75 - 82

国際航業（株）・パリノ・サーヴェイ（株）　2003 「出土遺物に関する理化学的分析結果」『卸売市場建設に伴う市道 8 - 273 建設事業用地内発掘調査報告書　東囲遺跡』 新潟市教育委員会 CD - R 所収

小杉正人　　1988　「珪藻の環境指標群の設定と古環境復元への応用」『第 4 紀研究』 27,1 - 20

小林謙一・今村峯雄・西本豊弘・坂本　稔　2003 「AMS^{14}C 年代による縄紋土器型式の変化の時間幅」『炭素 14 年代測定と考古学』 国立歴史民俗博物館研究業績集 国立歴史民俗博物館 127 - 130

小林　弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲　保・長田啓五　2006 『小林弘珪藻図鑑』第 1 巻（株）内田老鶴圃 531p

近藤錬三　　1982　『Plant opal 分析による黒色腐食層の成因究明に関する研究』 昭和 56 年文部省科学研究費（一般研究 C）研究成果報告書 32p

近藤錬三　　2004　「植物珪酸体研究」『ペドロジスト』 48,46 - 64

佐藤幸一　　1990a　「八郎潟干拓地重粘土水田土の粗孔隙の発達とその意義」 農業土木学会誌 60,25 - 30

佐藤幸一　　1990b　「八郎潟干拓地における畑地と草地土壌の粗孔隙の発達とその意義」 農業土木学会誌 60,287 - 292

島地　謙・伊藤隆夫　1982 『図説木材組織』 地球社 176p

杉山真二・藤原宏志　1986 「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定 - 古環境推定の基礎資料として - 」 『考古学と自然科学』 19,69 - 84

杉山真二　　2000　「植物珪酸体（プラントオパール）」辻　誠一郎（編著）-『考古学と自然科学 3』考古学と植物学 同成社 189 - 213

鈴木三男・小川とみ・能城修一　2004 「青田遺跡出土木材の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 163 集 日本海沿

岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ　青田遺跡 関連諸科学・写真図版編』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団 53 - 70

谷口康浩　　2001　「縄文時代遺跡の年代」『季刊考古学』77,17 - 21

徳永重元・山内輝子　1971 『花粉・胞子・石の研究法』 共立出版 50 - 73

中村　純　　1967　『花粉分析』 古今書店 232p

中山至大・井之口希秀・南谷忠志　2000 『日本植物図鑑』 東北大学出版会 642p

成岡　市　　1993　「土壌粗孔隙の形態とその測定法 土壌の不均一性と物質移動の研究前線」『日本土壌肥料科学雑誌』 64 - 1,90 - 97

林　昭三　　1991　『日本産木材』 顕微鏡写真集 京都大学木質科学研究所

原口和夫・三友清史・小林　弘　1998 「埼玉の藻類　珪藻類」『埼玉県植物誌』 埼玉県教育委員会 527 - 600

パリノ・サーヴェイ（株）　1993 「自然科学から見た人々の生活」(1)　『慶応義塾藤沢校地埋蔵文財調査室編湘南藤沢キャンパンス内遺跡 第1巻 総論』 慶応義塾 347 - 370

パリノ・サーヴェイ（株）　1994 「一之口遺跡東地区から出土した木質遺物の同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ　一之口遺跡東地区（本文編)』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団 147 - 167

パリノ・サーヴェイ（株）　2001a 「城田遺跡の自然科学分析」『神林村埋蔵文化財報告第10　城田遺跡（本文編)』 新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所 57 - 77

パリノ・サーヴェイ（株）　2001b 「里本庄遺跡群の自然科学分析」『神林村埋蔵文化財報告第11　里本庄遺跡群・内御堂遺跡・大木戸遺跡・里本庄B遺跡・光明寺遺跡』 新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所 34 - 54

パリノ・サーヴェイ（株）　2001c 「鬼倉遺跡出土遺物の自然科学分析」『加茂市文化財報告第13　鬼倉遺跡 - 国道403号線道路改良工事に係わる埋蔵文財発掘調査報告書』 新潟県加茂市教育委員会 144 - 158

パリノ・サーヴェイ（株）　2002a 「山屋遺跡群の自然科学分析」『神林村埋蔵文化財報告第15　山屋遺跡群・前坪遺跡・銅鉄遺跡・フケ田遺跡・天王前遺跡・水口沢遺跡』 新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所 17 - 38

パリノ・サーヴェイ（株）　2002b 「六百地遺跡の自然科学分析」『神林村埋蔵文化財報告第13　六百地遺跡』 新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所 13 - 42

パリノ・サーヴェイ（株）　2002c 「蔵ノ坪遺跡から出土した木材の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第115集 一般国道7号線中条黒川バイパス関係発掘調査報告書　蔵ノ坪遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団 45 - 59

パリノ・サーヴェイ（株）　2003a 「桃川遺跡群の自然科学分析」『神林村埋蔵文化財報告第19　桃川遺跡群・石川遺跡・草田遺跡・桃川板碑・堤下瓦窯跡』 新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所 18 - 54

パリノ・サーヴェイ（株）　2003b 「樋渡遺跡・堀下遺跡の自然科学分析」『神林村埋蔵文化財報告第18　樋渡遺跡・掘下遺跡』新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所 13 - 22

パリノ・サーヴェイ（株）　2004 「木製品の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第134集 一般国道253号線上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅱ　下割遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団 39 - 44

パリノ・サーヴェイ（株）　2005a 「馬越遺跡出土遺物の自然科学分析」『加茂市文化財報告第14　馬越遺跡 - 国道

403 号線道路改良工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書』新潟県加茂市教育委員会 130 - 136

パリノ・サーヴェイ（株） 2005b 「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 150 集 上信越自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅦ　海道遺跡・大塚遺跡』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 39 - 47

パリノ・サーヴェイ（株） 2005c 「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 148 集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅡ　西部遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 49 - 74

パリノ・サーヴェイ（株） 2006a 「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 154 集 一般国道 253 号線上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅱ　三角田遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 46 - 62

パリノ・サーヴェイ（株） 2006b 「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 163 集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅥ　西部遺跡Ⅲ』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 35 - 47

パリノ・サーヴェイ（株） 2008a 「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 181 集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅩⅦ　田屋道遺跡Ⅰ・宮の越遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 56 - 60

パリノ・サーヴェイ（株） 2008b 「出土木製品の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 189 集 一般国道 116 号出雲崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅵ　寺前遺跡 本文編』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 142 - 160

藤下典之　1984 「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」『古文化財の自然科学的研究』古文化財編集委員会編 同朋社 638 - 654

増田富士夫・伊勢屋ふじ子　1985 「逆グレーディング現象：自然堤防帯における氾濫洪水堆積物の示相堆積構造」堆積学研究会 22・23,108 - 116

松井　健・近藤鳴雄　1992 『土の地理学』 - 世界の土・日本の土 - 朝倉書店 122p

松葉礼子　2000 「大武遺跡出土木製品の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 97 集 一般国道 116 号線輪島バイパス関係報告書Ⅰ　大武遺跡（中世編）』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 42 - 47

三村昌史・植田弥生　2003 「仲田遺跡出土木製品の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 128 集 北陸新幹線関発掘調査報告書Ⅱ　仲田遺跡』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 35 - 41

三宅　尚・中越信和　1998 「森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究』 6,15 - 30

宮田雄一郎・山村恒夫・鍋谷　淳・岩田尊夫・八幡雅之・結城智也・徳橋秀一　1990 「淡水生デルタの形成過程 - 琵琶湖愛知川河口部を例として - 2．地質構成と堆積相」『地質学雑誌』96,839 - 858

宮脇　昭　1985 『日本植生誌 中部』 至文堂 604p

森　也寸志・滋賀摂子・岩間憲治・渡辺紹裕・丸山利輔　1992 「土地利用による土壌間隙構造の差異 - 軟Ｘ線による観察を中心として」『土壌の物性』66,19 - 27

安田喜憲　1987 『文明は緑を食べる』 読売新聞社 227p

柳沢幸夫　2000 『計数・同定．石の研究法 - 採集から最新の解析法まで - 』 石研究会 共立出版 49 - 50

吉川純子　2007 「窪田遺跡より出土した木製品の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 176 集 日本海沿岸東

北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸⅢ　窪田遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 100 - 107

渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻　彰洋・伯耆晶子　2005 『淡水珪藻生態図鑑』 内田老鶴圃 666p

Asai,K & Watanabe,T.　1995　Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution（２）Saprophilous andsaproxenous taxa.Diatom,10,35 - 47

Baraham,A.J.　1995　Methodological approaches to archaeological context recording. Archaeological iments and Soils:Analysis,Interpretation and Manegement. Country,M.A.,Goldberg,P. and Macphail,R.I.,1989,SoilsandMicromorphologyinarcha eology.Cambridge:Cambridge niversity Press,344p

Hustedt,F.　1937 - 1939　Systematische und okologische Unterrsuchungen uber die Diatomeen - Flora von Java,,BailundSumatra.ArchivfurHydrobiorogy,Supplement,15:131 - 177,15:187 - 295,15:393 - 506,15:683 - 790,16:1 - 155,16:274 - 394.

Krammer,K.　1992　PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26.J.CRAMER,353p

Krammer,K.　&　Lange - Bertalot,H.　1986　Bacillariophyceae.1.Teil:Naviculaceae.In:Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1.Gustav Fischer Verlage,876p

Krammer,K.　&　Lange - Bertalot,H.　1988　Bacillariophyceae.2.Teil:Epithemiaceae,Bacillaraceae,Surirellaceae. In:Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2.Gustav Fischer Verlage,230p

Krammer,K.　&　Lange - Bertalot,H.　1991a　Bacillariophyceae.3. Teil:Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae.In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3.Gustav Fischer Verlage,230p

Krammer,K. & Lange - Bertalot,H.　1991b　Bacillariophyceae.4. Teil:Achnanthaceae,Kritsche Ergaenzungen zu Navicula（lineolatae）und Gomphonema.In:Suesswasserflora Von Mitteleuropa.Band2/4. Gustav Fischer Verlag,248p.

Lowe,R.L　1974　Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh - water Diatoms.334p.In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4 - 74 - 005. Nat.Environmental Res.Center Office of Res.Develop .,US.Environ.Protect. Agency,Cincinati.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz Ⅰ .and Gasson P.E.　2006 「針葉樹材の識別」 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト 伊藤隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語監修）海青社 70p ［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I and Gasson P.E.（2004）IAWA List of Microscopic Features for Softwood Idenification］

Round,F.E..,Crawford,R.M. & Mann,D.G.　1990　The diatoms.Biology & morphology of the genera.747p. Cambrige University Press,Cambrige

Vos,P.C. & H.de Wolf　1993　Diatomas as a tool for reconstructing sedimentary environments incoastal wetlands;methodological aspects.Hydrobiologica,269/270,285 - 296

Wheeler E.A.,Bass P.and Gasson P.E.（編）　1998 『広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』 伊藤隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語監修） 海青社 122p ［Wheeler E.A.,Bass P.and Gasson P.E（1989）IAWA List of Microscopic Feautures for Hardeood Identification］

B　谷地遺跡の屋外炉の考古地磁気分析

富山大学理工学研究部　酒井英男　菅頭明日香
（株）ノガミ　　秋山真好

1）　は じ め に

谷地遺跡では屋外炉や土坑が検出され、出土土器は、縄文時代前期初頭から中葉の各式形が見られた。

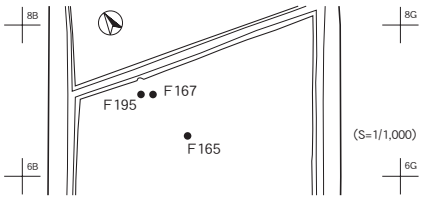
本分析では、縄文時代前期と推定される屋外炉遺構の焼土について残留磁化の分析を行った。従来、遺構焼土の残留磁化を用いて年代推定が行われており、過去 2,000 年間の対象については有力な年代推定法となっている。紀元前の対象では比較すべき地磁気変動の詳細が得られていないため、現段階では有効な年代推定法とはなっていないが、本研究の結果を従来研究と対比して年代推定を試みることを第一の目的とした。また、残留磁化は被熱の情報であるので、本研究で扱う焼土と推定される土壌が果たして焼土なのか、どの程度の加熱を受けたかを実験により検討することを第二の目的とした。

2）　遺構の概要と試料採取

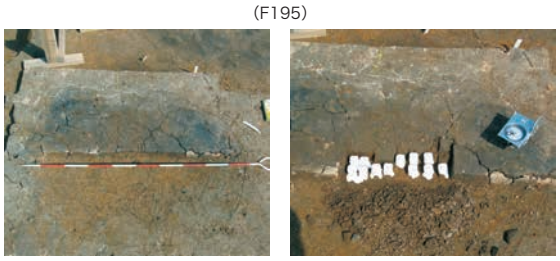
研究では、３基の屋外炉遺構（F165、F167、F195）の焼土を調査した。遺構は 0.5 ～ 1m の楕円・円形形状で全体的に黒褐色を呈し、本体部には炭化物はあまりなかった。

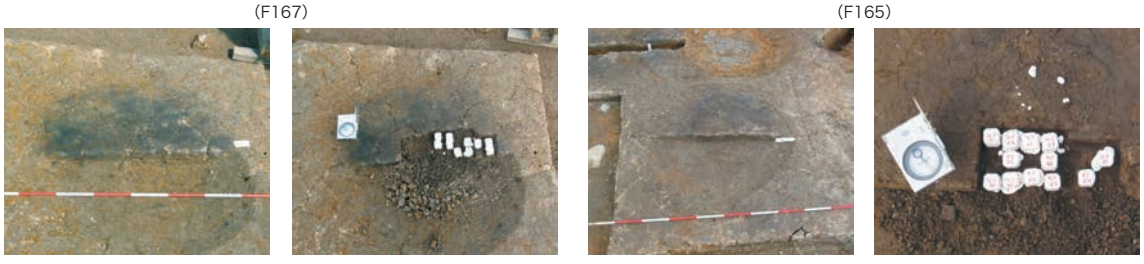
第 39･40 図に遺構と試料採取の様子を示しているが､分析用試料は､容量 10cc のプラスチック製キューブケース（以下､「ケース」と呼ぶ）を用いて採取した。まずケースに収まる大きさに焼土面をカッターや鍬を用いて整形し、１辺が約２㎝立方のブロック状にする。ブロックと周辺に薄い石膏をかけて固定し、次にケースに濃い石膏を入れてブロックに上から被せる。十分に固まった後でケース上面に水平面との交線をマークし､クリノメータを用いて磁北からのずれと水平面からの最大傾斜角を読み記録する。その後、焼土が入ったケースを焼土面から外して分析試料とする。

３基の炉（F195、F167、F165）から、それぞれ約 10 個の焼土を定方位で採集した。F195 では試料 NY1 ～ NY10、F167 では試料 NY20 ～ NY32、F165 では試料 NY40 ～ NY51 を得て分析した。



第 39 図　試料採取遺構



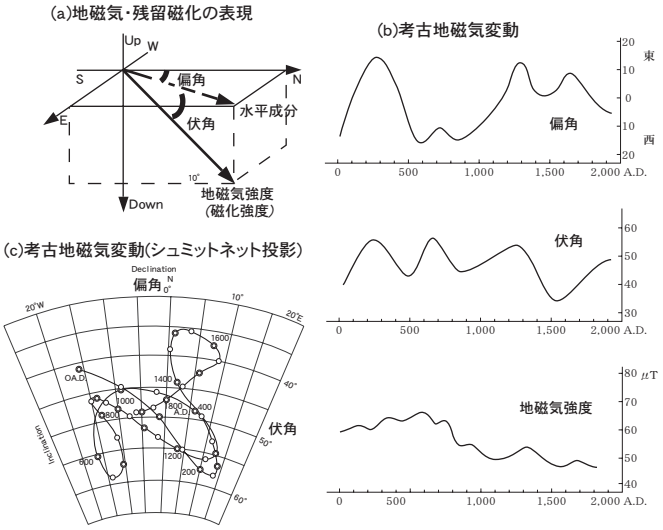


第 40 図　遺構と試料採取の様子

3）　考古地磁気の研究

自然界の土壌や岩石には数％の鉄の酸化鉱物が含まれており、特に、磁鉄鉱（Fe_3O_4）や赤鉄鉱（Fe_2O_3）は強磁性を示し磁石になる（磁化する）性質を有する。これらの強磁性鉱物は、被熱時に地磁気を記憶する磁石となり、その集合体として焼土や焼石は当時の地磁気の記録としての残留磁化を獲得することができる。そして、高温まで加熱を受けた焼土や遺物を採集して残留磁化を読み取ることにより、過去の地磁気の復元が可能となる。地磁気は、第 41 図（a）の様に方向を示す偏角、伏角と、地磁気強度の 3 成分で表される。地磁気は地球内部の核の運動により変動しており、過去の地磁気を調べることは地球そのものの履歴の研究としても重要である。

考古時代の地磁気変動については、国内の多数の窯跡において焼土や遺物の残留磁化の研究が精力的に行われ（[Hirooka1971]、[Sakai&Hirooka1986]［酒井ほか2007a］など）、第 41 図（b）に示す様な過去 2,000 年間における地磁気 3 成分の変動が得られている。第 41 図（b）、（c）の地磁気変動を標準変動として、焼土等の残留磁化と対比することにより遺構の年代が推定できる。これを考古地磁気年代推定法と称している。



第 41 図　考古地磁気年代推定法

ただし、これより古い時代については測定データ数は少なく、特に標準変動を得るための信頼できる年代を持つ試料からのデータは十分ではない［酒井ほか2007b］。縄文時代の地磁気年代推定は難しいのが現状であるが、縄文前期の地磁気データの一部が［広岡 2002］によりまとめられているので、本分析では比較に用いることにした。また最近は、海洋底や湖底の堆積物を用いる地磁気復元の研究も行われ、縄文時代の地磁気変動も対象になってきている。

4）　実 験 方 法

a）　残留磁化と交流消磁実験

土壌は加熱・冷却過程で地磁気方向に残留磁化を獲得するが、その後にいろいろな状況で付着したほかの磁化も含まれており、これを除く必要がある。本分析では交流磁場による消磁実験を行い、不要な磁化を除去し初生の残留磁化を抽出することにした。実験は、交流磁場を徐々に強くして各磁場強度の段階で二次磁化の消磁を検討しながら進めるので、段階交流消磁実験と称されている。

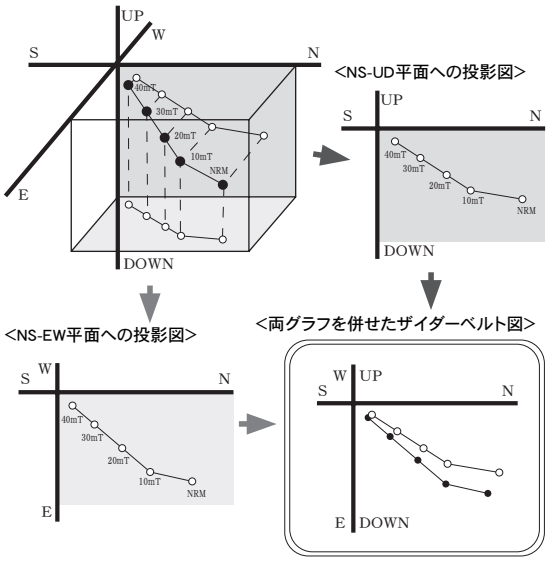
採取した試料のうち、加熱実験に用いる 3 試料を除いて、残りの試料について段階交流消磁の実験を行った。実験では最初に試料の自然残留磁化（NRM：natural remanent magnetization）を測定し、その後に交流消磁実験を行う。実験は、8 段階（2.5，5.0，10，15，20，30，40，50mT）の交流磁場（mT：milli - tesla は磁場強度の単位）にて行った。そして実験結果は次節のザイダーベルト図［Zijderveld1967］で解析し、地磁気の記録としての磁化を求めた。交流消磁を行わなかった試料については、c）に示す熱消磁とテリ

エ法実験を行った。

残留磁化の測定と交流消磁実験は、富山大学磁気シールド室にある超伝導磁力計（2G 760R）を使用して行った。熱消磁とテリエ法実験では電気炉実験装置を使用した。

b)　ザイダーベルト図法による消磁結果の解析

ザイダーベルト図法は、第 42 図に示すように三次元ベクトルである磁化を水平面投影（水平成分）と鉛直面投影（鉛直成分）に分解して、方向と大きさを平面に示す方法である。水平面投影では、横軸に南北成分を、縦軸には東西成分を取った図上でデータを黒丸にて表す。また鉛直面投影では、横軸に同様に南北成分を、縦軸に上下成分を取った図上でデータを白抜き丸にてプロットする。この様にして、磁化を水平と鉛直の成分に分解してそれぞれを平面図に投影し、横軸（南北軸）を共通にして 2 枚の図を重ねることで磁化を二次元として表示できる。残留磁化が安定な一成分の場合には、消磁磁場を強くしても磁化方向は変わらずに強度が減少していくので、磁化の変化は図の原点に向かう直線上にプロットされる。二次磁化がある場合にはプロットは二つの直線に乗るなど複雑になる。磁化方向は、主成分分析法［Kirshvink1980］を用いて、ザイダーベルト図上のプロットを解析し求めた。次節の熱消磁実験の結果も同様に解析した。



第 42 図　ザイダーベルト図の概念図

c)　熱消磁による熱履歴及びテリエ法実験

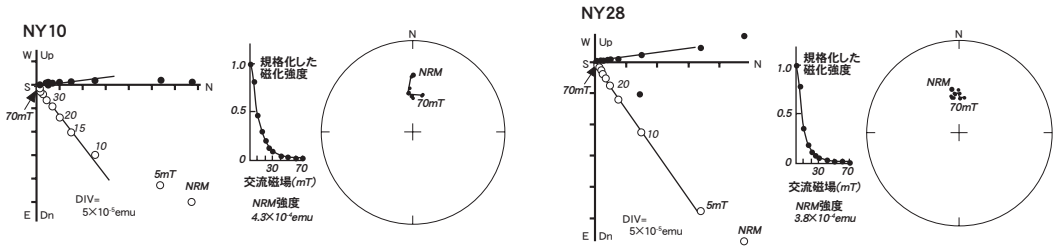
3 個の試料について、耐熱ボンドで固めて整形後に熱消磁とテリエ法実験を行った。実験結果から、試料の熱履歴と過去の地磁気強度の研究ができる（方法の詳細は［Thellier&Thellier1959］［Sakai&Hirooka1986］［酒井 1978］など）。熱消磁実験は試料を加熱して消磁する。交流磁場の強度を強くする効果と同様に、加熱温度を増すことで不安定な磁化成分を除去できる。加熱実験は、100、150、200、270、350、420、500℃の 7 段階で行った。そしてテリエ法実験に用いる人工磁場の強度は 50 μ T に設定した。

5）　実験結果と考察

a)　残留磁化の方向

第 43 図には交流消磁実験の結果例を、ザイダーベルト図、消磁に伴う磁化強度の変化、シュミットネット上での磁化方向の変化として示している。消磁により二次磁化が除かれて磁化方向は地磁気に近い北方位に変わる傾向にある。各試料の残留磁化の方向は、NRM の段階ではまとまりが悪かったが、第 43 図の様に消磁実験で二次磁化が取れた試料も多く、全体として磁化方向は北方位に集中する傾向にあった。

第 11 表に、3 基の遺構（F165、F167、F195）の各試料の残留磁化測定の結果をまとめている。熱消磁の実験に用いた 3 試料（NY4、NY31、NY50）以外の試料の磁化方向（偏角と伏角）については、交流消磁で得た安定な成分の方向を載せている。磁化強度は消磁前の値である。熱消磁に用いた試料についても同



第 43 図　交流消磁実験の結果例　　左：試料 NY10　右：試料 NY28

F165 の試料の磁化

試料番号	偏角	伏角	磁化強度
	(度)	(度)	(A㎡/kg)
NY40	14.2	55.0	3.1E-04
NY41	4.3	50.5	4.7E-04
NY42	-2.6	43.1	2.7E-04
NY45	-0.5	34.8	3.8E-04
NY46	-2.7	65.0	6.6E-05
NY47	3.5	50.8	2.0E-04
NY48	10.4	37.7	1.2E-04
NY49	-8.5	48.6	2.8E-04
NY50	9.0	40.8	2.9E-04
NY51	-2.5	41.5	1.4E-04

F167 の試料の磁化

試料番号	偏角	伏角	磁化強度
	(度)	(度)	(A㎡/kg)
NY20	15.9	68.9	1.7E-04
NY21	-18.2	53.0	1.6E-04
NY23	9.6	28.1	2.0E-04
NY24	0.0	53.1	1.5E-04
NY25	1.5	38.5	1.5E-04
NY28	-8.6	56.7	1.3E-04
NY30	4.5	47.4	1.2E-04
NY31	134.0	22.8	2.9E-04
NY32	9.0	33.2	8.6E-05

F195 の試料の磁化

試料番号	偏角	伏角	磁化強度
	(度)	(度)	(A㎡/kg)
NY1	-14.3	51.8	3.9E-05
NY2	1.1	53.8	2.8E-04
NY3	-113.7	52.3	2.0E-04
NY4	-12.8	26.5	4.7E-04
NY5	-6.8	57.2	3.2E-04
NY6	-13.1	57.2	2.3E-04
NY7	-32.6	42.7	2.1E-04
NY9	39.9	17.6	2.7E-04
NY10	-8.0	57.4	4.3E-04

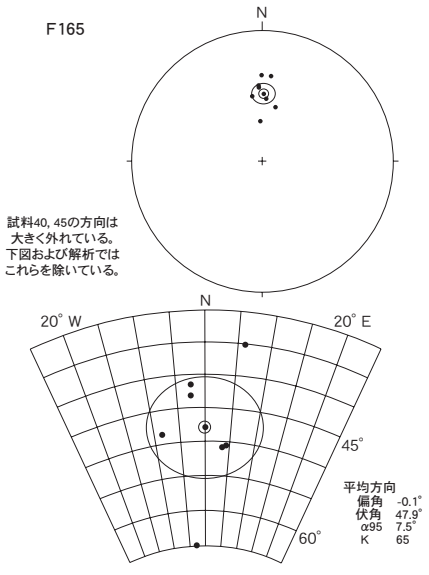
第 11 表　残留磁化の測定結果

様に消磁によって得た安定な方向をまとめている。今回の熱消磁の実験はテリエ法実験と併行して行ったが、そのための試料の整形時のずれの影響で磁化方向には誤差が生じており、熱消磁に用いた試料は磁化方向の議論には使用しないことにした。

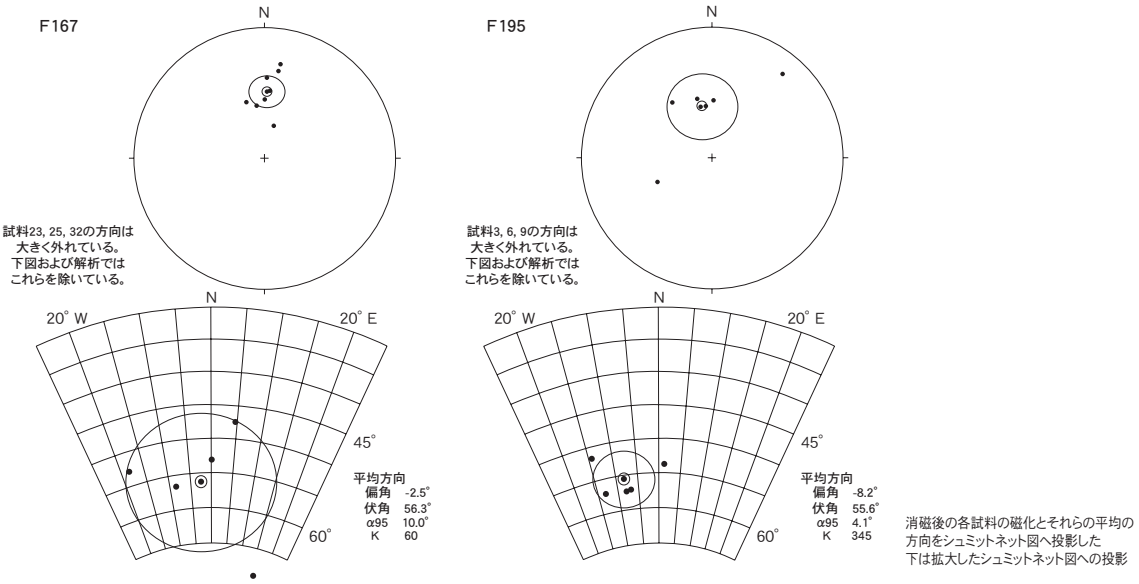
第44図と第45図には、3基の遺構について、消磁後の各試料の磁化とそれらの平均の磁化の方向をシュミットネット上に示している。平均の磁化方向を囲む円は、フィッシャー統計［Fisher1953］で求めた磁化の信頼度の範囲（α 95 円）を表している。各図で、上には通常のシュミットネットに、下には拡大したシュミットネットにデータを載せており、拡大シュミットネットでは、ほかと大きく外れた方向の結果は除いている。

F167 と F195 の磁化方向は似た方向にあるが、F165 はこれらの 2 基に比べて伏角が浅い。この結果は、F167 と F195 はあまり年代の差はないが、これら二つの遺構と F165 の年代は異なる可能性を示している。

予察的に縄文時代前期の遺跡での従来研究［広岡 2002］を参照すると、前期前葉と中葉の残留磁化方向に比べて前期後葉の磁化は伏角が深い傾向にあり、F165 はほかの 2 基より古い可能性が推測される。



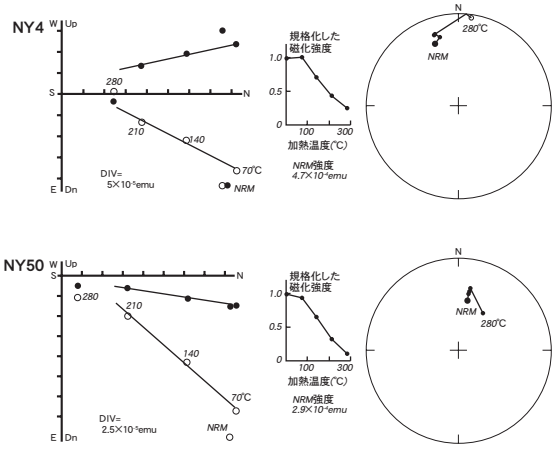
第 44 図　F165 の消磁後の磁化・平均の方向とシュミットネット図への投影



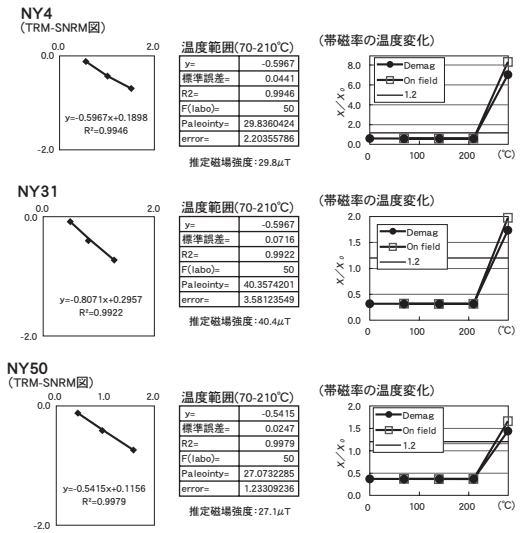
第 45 図　F167・195 の消磁後の磁化・平均の方向とシュミットネット図への投影

b)　加熱を受けた温度及び地磁気強度

第 46 図と第 47 図には、3 個の試料について行ったテリエ法実験の結果を示している。第 46 図の熱消磁に伴う磁化方向の変化は、300℃までの加熱でほぼ同じ方向であった。この結果は、土壌の磁化は 300℃付近から現地で獲得されていることを示唆する。また、第 47 図の SNRM/TRM 図を見ると、210℃までの温度段階のプロットが線形関係にある。これは熱消磁される NRM と人工的な加熱で獲得される TRM が比例し、NRM が熱起源の磁化であることを意味しており、つまり焼土は 210℃までの熱を現地で受けて熱残留磁化を獲得している証明となる。以上の結果は、対象とした土壌は、その場所で少なくとも 210℃（多分 300℃付近まで）の加熱を被ったことを示している。この温度はその場で焼かれた温度なのか、あるいは別の場所でより高温まで焼かれて冷え切らない状態で運ばれ、210 ～ 300℃の温度で定置したのかの二つの可能性がある。



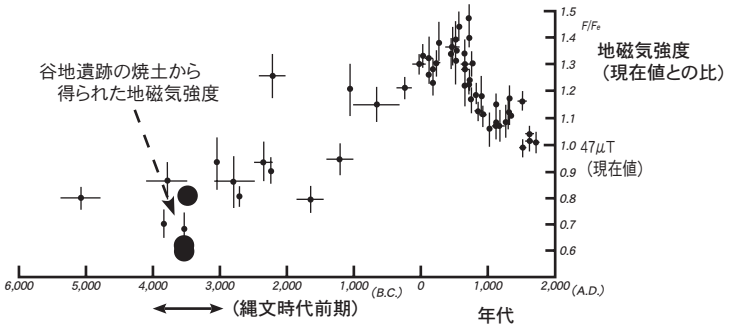
第 46 図　熱消磁に伴う磁化方向の変化



第 47 図　テリエ法実験の結果
（SNRM/TRM 図、帯磁率の温度変化）

次に、テリエ法の実験結果（第 47 図）から地磁気強度を求めた。その際、以下の３つの基準を設けて結果の信頼度を検討した。(1) SNRM/TRM 図の直線部の温度範囲での加熱後の帯磁率変化は初期帯磁率の 20% 以内である。(2) SNRM - TRM 図上で地磁気強度を推定するための直線範囲は３点以上を含み、その温度区間ではザイダーベルト図上で直線関係が成り立つ。

各試料ともに、加熱後の帯磁率の変化は 210℃までの温度範囲では大きくない。その温度範囲で直線関係を示す３点以上のプロットの解析による地磁気強度を求めた結果、第 47 図に示すように、３試料からは、約 40，30，27（mT）の強度が得られた。第 48 図では過去 8,000 年間における地磁気強度変動［Sakai& Hirooka1986］と、上記の地磁気強度を比較した。その結果、３試料から得られた地磁気強度は、縄文前期（5,000 ～ 6,000 年前）の地磁気強度が非常に弱い時代の値との対応が考えられた。つまり、本分析で対象とした谷地遺跡の焼土は縄文前期に加熱を被ったことを支持している。



第 48 図　テリエ法で得た地磁気強度と
過去 8,000 年間の地磁気強度変化との対比

6）ま　と　め

新潟県谷地遺跡において、平成 19 年度の調査で見つかった縄文時代前期と推定される炉跡３基の焼土面の残留磁化の分析を行った。

多くの試料の磁化には二次磁化の付着が大きかったが、消磁により取り除くことができ、各炉跡は比較的まとまった磁化方向を示した。磁化方向を比較すると、F167 と F195 の方向は似ているが、F165 の方向とはかなり異なっていた。これは、前者２遺構と F165 の時代が異なることを示唆すると考えた。縄文時代の標準となる地磁気変動は得られていないため年代推定は困難であるが、［広岡 2002］のまとめによる縄文時代前期の地磁気方向との比較を試みると、特に伏角の傾向からは F167 と F195 の２基は前期中葉、F165 は前期前葉の時代の可能性も推測される（厳密な比較は今後の課題である）。

また、炉の焼土の土壌色は黒いので焼けていない可能性も指摘されていた。そこで、土壌の磁化が被熱によって獲得された熱起源の残留磁化であるかどうかの検討も実施した。熱消磁とテリエ法の実験からは炉内の土壌は確かに熱起源の磁化を持っており、土壌は焼土であることが示された。実験結果からは、被熱温度は 210 ～ 300℃と推測された。さらに焼土の熱残留磁化についてテリエ法実験により地磁気強度を調べた結果、縄文前期として妥当な磁場強度が得られ、遺構は縄文前期の時代であることを支持する結果となった。

対象とした炉跡の焼土は、地山が直接被熱したのか他所から被熱土壌を持ってきて炉底に敷いたのかが課題となった。本分析の結果では、被熱土壌が常温まで冷えてから運ばれた可能性は低い。近傍で十分に被熱し現地に運ばれ、210 ～ 300℃まで冷却した状況で到達したのか、あるいは現地で直接被熱して 210 ～ 300℃まで加熱されたとの両方の可能性が考えられる。

今後、新潟県や北陸地域における縄文時代の遺構の残留磁化の研究を進めて地磁気変動データを蓄積することで、縄文時代における地磁気年代推定も可能となると考えられる。その時点で、今回対象とした遺

構の年代を再度検討することが望まれる。

謝辞

（株）ノガミの湯原勝美氏には、土壌サンプリングの手配をして頂いた。富山大学大学院修士２年生の田中恵氏には実験においてご助力頂いた。

引用・参考文献

酒井英男　　1978　「考古学試料からの地磁気強度決定について」『大阪府文化財調査報告書第 30 輯　陶邑Ⅲ』　大阪府教育委員会　156 - 161

酒井英男・松延礼佳・伊藤　孝・野原大輔　2007a　「砺波市久泉遺跡の焼土遺構の考古地磁気による年代測定」『久泉遺跡発掘調査報告Ⅲ』　砺波市教育委員会　215 - 223

酒井英男・松延礼佳・岸田　徹・菅頭明日香・岡田一広　2007b　「矢張下島遺跡で発掘された焼土と焼石の磁気の研究」『南砺市埋蔵文化財調査報告書 18』　南砺市教育委員会　29 - 42

広岡公夫　　2002　『文部科学省科学研究費研究成果報告書　“先史時代の考古地磁気永年変化曲線の確立”』168p

渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻　彰洋・伯耆晶子　2005　『淡水珪藻生態図鑑』　内田老鶴圃　666p

Fisher. R.A.　1953　Dispersion on a sphere, Proc. Roy. Soc. London, A, 217, 295 - 305

Hirooka, K.　1971　Archaeomagnetic study for the past 2000 years in southwest Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. and Mineral., 38, 167 - 207

Kirschvink,J.L.　1980　The least - squares line and plane and the analysis of palaeomagetic data, Geophys. J.R. Astr. Soc., 62, 699 - 718

Sakai, H. And K. Hirooka　1986　Archacointcnsity dctcrminations from wcstcrn Japan, J. Geomag. Geoelectr., vol.38, 1323 - 1329

Thellier, E., and O. Thellier　1959　Sur I’ intensite du champ magnetique terrestre dans lepasse histrique et geologique, Ann. Geophys., 15, 285 - 376

Zijderveld, J.D.A.　1967　A.C.demagnetization of rocks - analrsis of results, Methods in Paleomagnetism, edited by Collinson, D.W., Creer, K.M. and Runcorn, S.K., Elscvicr, 254 - 286

C　谷地遺跡の地質解析

新潟大学災害復興科学センター　高濱　信行

本遺跡は、縄文時代前期初頭から中葉の遺跡で、この時代に沖積低地に存在した数少ない遺跡の１つとして注目されている。

１）　地質学的検討課題

南側調査区が北側調査区と比べて遺構面が約 40 ㎝高く、この「段差」は東西方向にほぼ直線的に調査区を横切る。さらに調査区東壁におけるこの境界部では南側の礫層と北側のシルト層（Ⅸ層）が直接高角で接する。この原因について地質学的検討課題として提起された。

なお本遺跡では、上記の「段差」を南端として幅約 10m の「微低地」が存在し、この部分では遺溝はごくわずか検出されるだけで、「微低地部」の南側段上では多くのピット群、北側では炉跡が集中して発見されている。

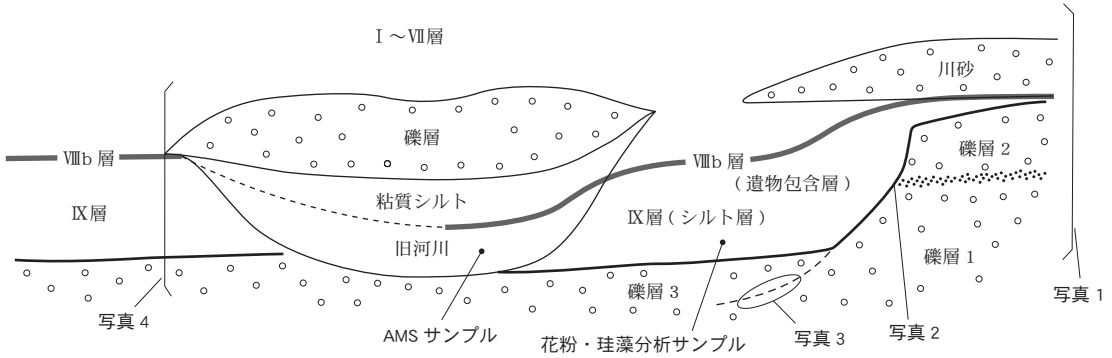
２）　調査・検討結果

上記の「段差」の問題は、当初断層の可能性が大きいと考えられた。この可能性も含め、その実体を明らかにするために、発掘終了後の平成 19 年 11 月 27 日に調査区東壁に沿ってトレンチ調査が実施された（第Ⅲ章１Ｄ層序　第 10 図④参照）。

この結果、問題地点の最下位の礫層（遺跡成立時の河川河床礫層の下位）がほぼ連続して分布することが確認できた。したがって、礫層とシルトが高角で接する原因は断層ではないことが判明した。

後述するように、本地点では縄文海進の影響を考えることは難しく、提起された問題の原因は「河川作用」による、と考えることが妥当であろう。

ここでは、「トレンチ」の断面（第 49 図：第 10 図④を模式概念化）を基に本地域の遺跡立地環境の変遷について推測を試みる。



第 49 図　東壁セクション模式概念断面図

a）　遺跡成立前

遺跡を含む広い範囲で扇状地・河川成の礫層が堆積した（第 49 図の礫層１・２）。次いで、この礫層が川で浸食（写真１・２）され（第 49 図の礫層３がその川床礫層とみなした：写真３）、その後、停滞水域（詳しい環境を指示する珪藻は未産出）が形成されシルト層が堆積した。シルト層堆積時に川岸が急勾配で、問題とさ

れた礫層とシルト層が高角度で接した（写真２）。高角度になった原因として、シルト層が礫層と接する部分に礫が含まれることから、川岸の最上部が崩壊した可能性が考えられる。

b）　遺跡成立時

前の時代の川は埋積し、陸化した。この時代、遺跡の北部と南部は「乾陸状態」で土壌化したことが確認されている。一方上述の東西方向の「微低地部」は「湿地状態」であったと推測される。この環境の差が遺溝の有無に反映したものと推測される。

なお、調査地の北部では遺跡成立時に、遺跡成立前に堆積したシルト層（Ⅸ層）を切り込んで川が流入した（第 10 図④、第 49 図の旧河川）。この川の出現は堆積物中の木材の年代測定によれば、5,360 ± 40BP を示す。

なお、本遺跡成立時はほぼ縄文海進のピーク時に当たり、調査時にはその影響についても議論された。しかし、遺跡の現在の標高は 11m で、その後の隆起を考慮しても、この標高近くまで縄文海進の影響が直接現れるということは考え難い。特に、遺跡成立前と遺跡成立時に新たに河川が流下したということは、局所的にこの地点の浸食基準面が低下したことを意味する。間接的であれ縄文海進の影響がこの地点まで及べば「浸食基準面の上昇」として現れることになり、浸食基準面の低下は、これと逆の現象で、この地点にまで縄文海進の影響が達しなかったことを示す。

c）　遺跡廃絶後

遺跡成立時の川は遺跡廃絶後にも存続した。それは、河床礫層を主体とする第 10 図④、第 49 図の礫層及び粘質シルト（写真４）の堆積物が示す。また、この南にも第 10 図④、第 49 図の「川砂」と記録された川が流下した。これらは礫を主体とする堆積物で、かなりの流速で堆積したものである。

以上この地域では、遺跡成立前から廃絶後に至るまで、活発な河道流路の変遷が見られる。これは、扇状地における河川流路変遷の特性が現れたものと思われる。

３）　古地震による液状化

なお、本遺跡では、古地震による複数回の液状化が認められた。遺跡との関連、また地域の古地震履歴解明の貴重なデータで、ここで記述する。

a）　遺跡成立時前後

この時期の液状化に関しては、発掘時に次の事実が確認されている。写真５に、遺構覆土に貫入した噴砂脈を示した。また、写真６に遺構覆土を被う噴砂層を示した。したがってこの液状化の時代は、縄文前期初頭から中葉の遺跡成立時あるいはその直後と解釈できる。

b）　遺跡廃絶後

調査区南壁で液状化に伴う噴砂礫脈が確認できた（写真７）。この噴砂礫脈に沿って遺物包含層（Ⅷ層）も上方に引き上げ・変形している。この上位では縄文時代後期と推測するⅤ層が堆積し、これに変形が認められない。したがって、この液状化をもたらした地震は縄文時代前期初頭後から縄文後期前に発生したことが分かる。

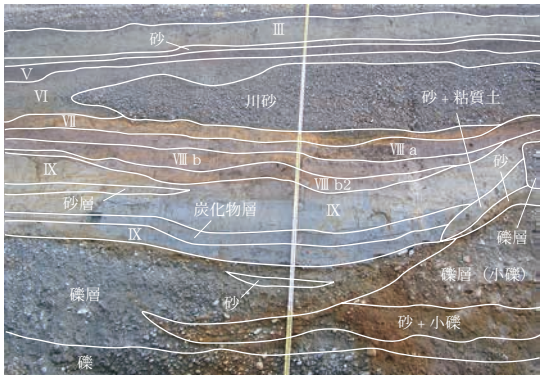


写真１（５・６グリッドの川）

写真２（礫層が高角度で接する）

写真３（５・６グリッドの川　河床礫）

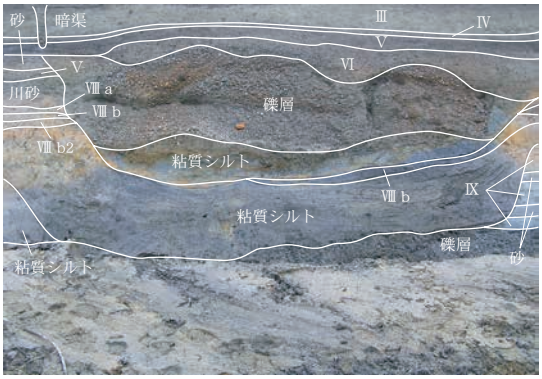


写真４（７グリッドの川）

写真５（P1023）

写真６（F351）

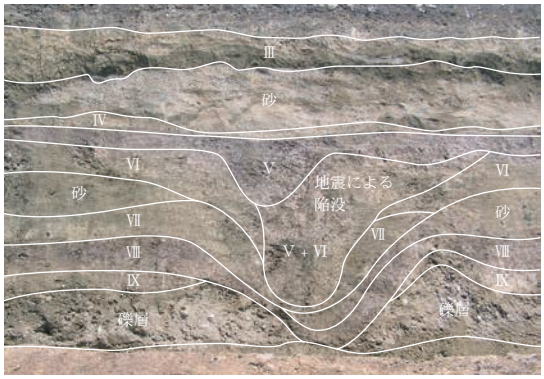


写真７（調査区南壁）

5　ま　と　め（縄文時代）

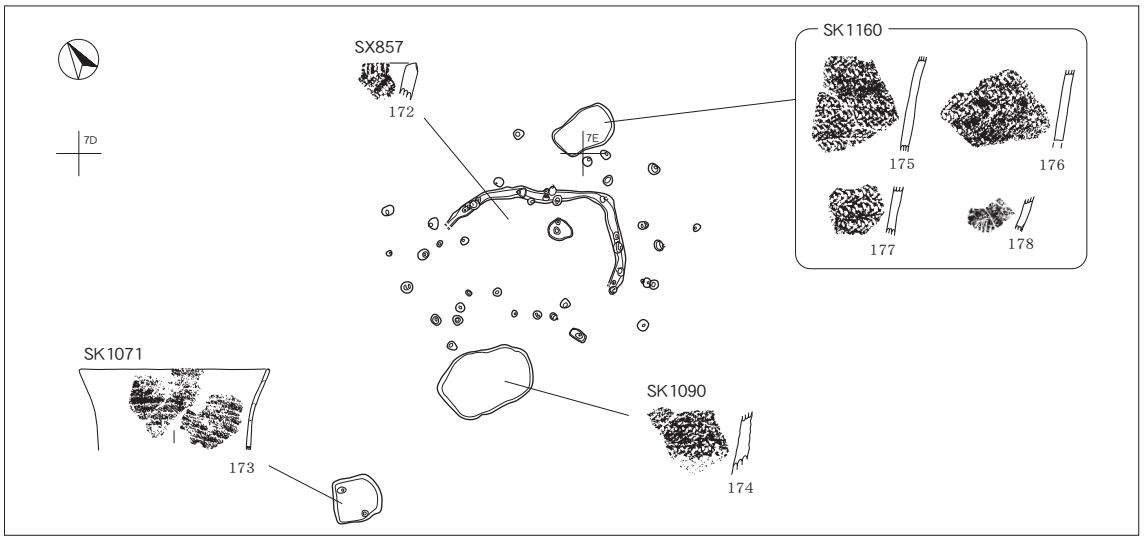
A　縄文時代前期初頭から中葉の土器について

今回の調査で谷地遺跡から出土した縄文土器は、前期初頭から前期中葉のものである。関東地方の編年に対比して言えば、花積下層式から有尾・黒浜式の時期に相当し、胎土に繊維を含む土器群である。その中でも新潟県内において布目式、新谷段階と称される前期前葉の土器群が中心となっている。県内におけるこの時期は、ほかの時期に比べ資料が少なく、明確な遺構に伴って出土する事例も非常に少ない。そのため編年体系の整備が遅れているのが実情である。残念ながら本遺跡出土土器は遺存状態・出土数量などは良好とは言い難いが、幸いにも層位別、さらに遺構出土の資料を得ることができた。今回これらの状況を提示するだけでも、今後の当該期の実体解明に有意義なものであると考えられる。

本遺跡出土土器のおおまかな時期については､先学諸氏の論考並びに報告書を参考に「第Ⅲ章３Ａ土器」に示した。本項では出土状況を加味し、谷地遺跡出土土器の変遷について若干の考察を行う。

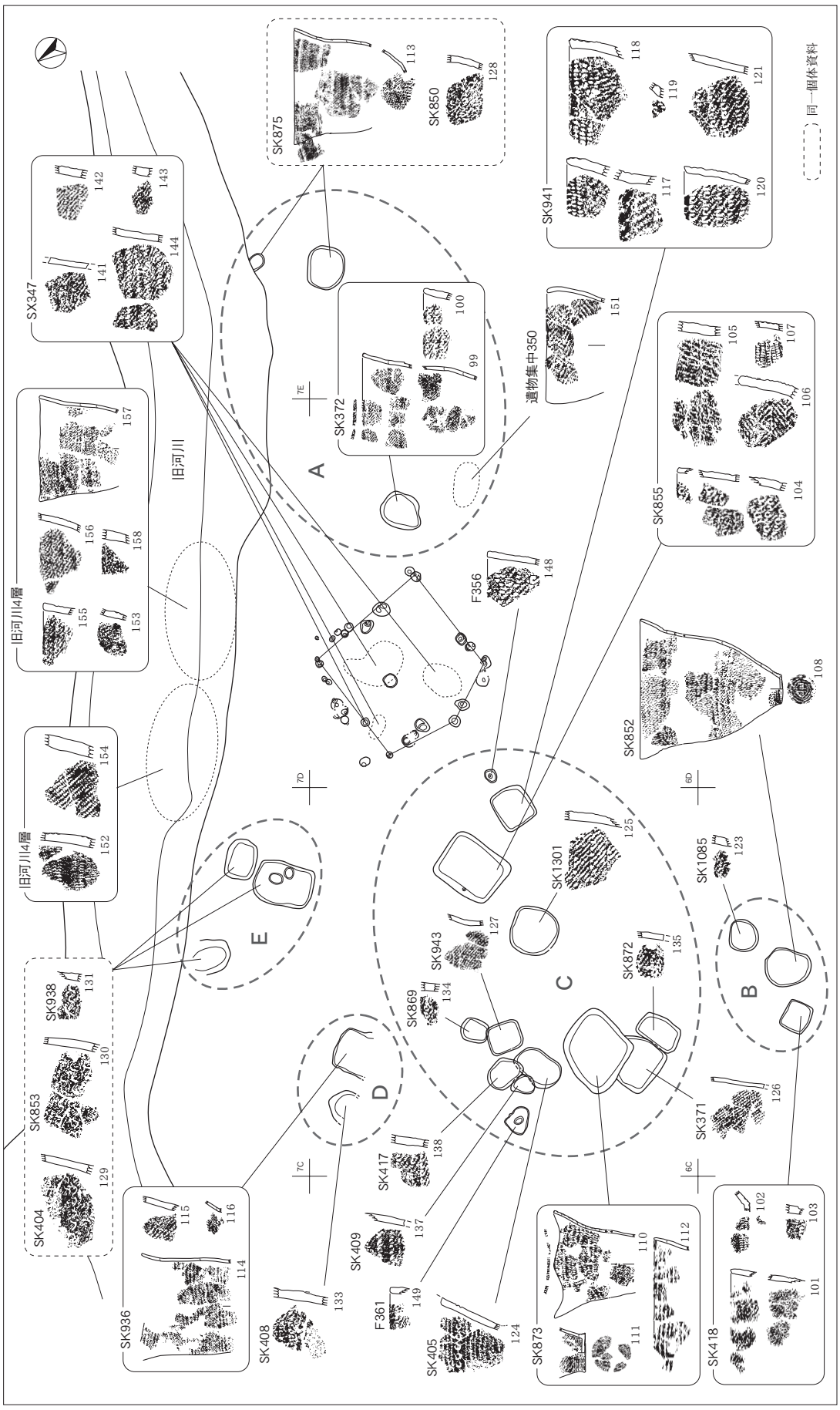
1）　北側調査区遺構出土の土器について

層位ごとに遺構が検出できた北側調査区について分析を行う。第 50 ～ 52 図には各層位で土器が出土した遺構とその出土土器を示した。第 50 図は最下層であるⅧb2 層検出の遺構と土器を示した図である。６D グリッド東側にまとまっている。いずれの土坑もやや不整形を呈し、長軸が東西方向とほぼ一致している。出土土器は布目式に比定されるⅡ群２類（174 ～ 177）と爪刺突の施された胴下端部片（178：Ⅲ群６類ａ種)、爪刺突の施された口縁部片（172:Ⅲ群１類 e2 種)、ループ文が施された地文のみの土器片（173:Ⅲ群７類 d3 種）である。



第 50 図　Ⅷb2 層の遺構出土土器とその分布

第 51 図はⅧｂ層検出の遺構と、そこから出土した土器を図示している。本層位においては土坑の分布と形状によりグルーピングを行った。一部遺物集中の分布も含む。A グループはⅧb2 層において布目式土器が出土した遺構の分布範囲に位置する。土坑の平面形は円・楕円形を呈している。遺物集中 350 も同じ範囲内に位置する。出土土器はⅡ群１類の布目式に比定される土器（99)、底部に逆「ハ」の字の爪



第51図　Ⅷb層の遺構出土土器とその分布

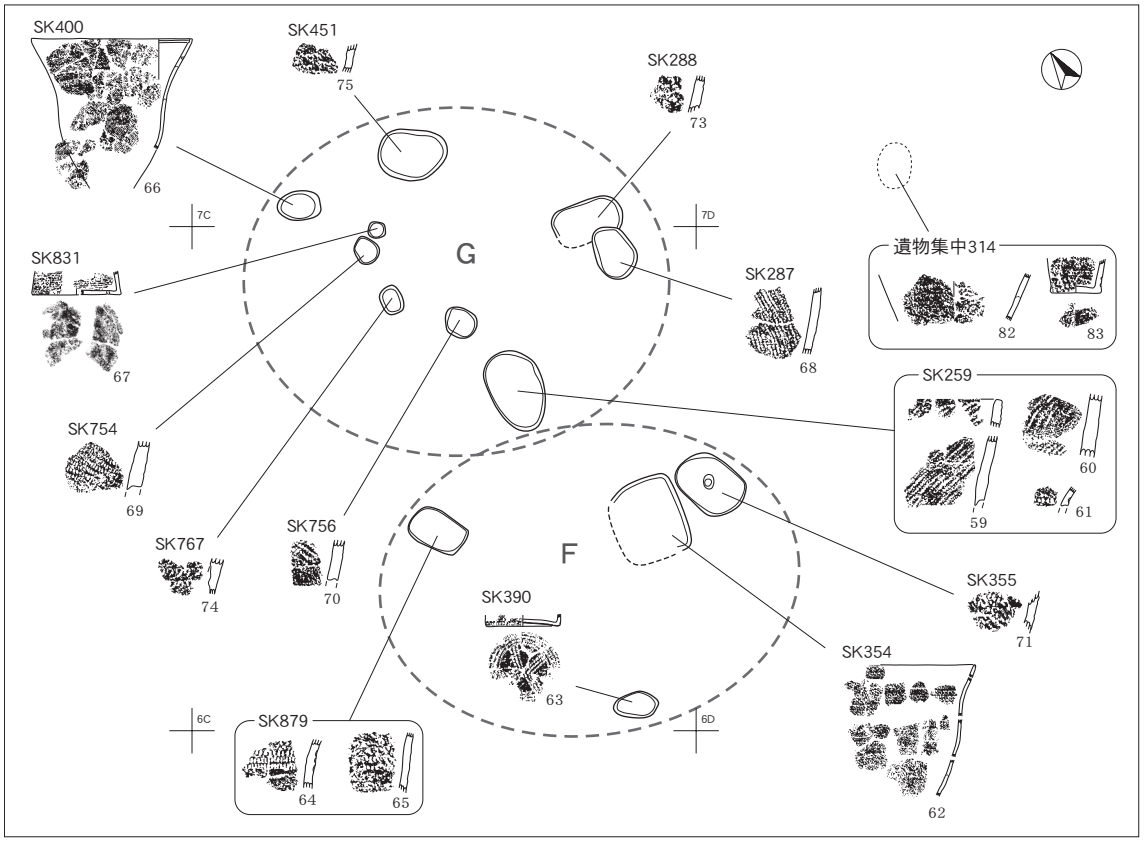
刺突が施され布目式の特徴を有する土器（113：Ⅲ群１類ｂ種）、幅狭等間隔の非結束羽状縄文が施された口縁部が内湾する土器（151）、ループ文の施された土器（100）であり、Ⅷb2 層的な様相が目立つ。B グループは北側調査区の中で南に位置する土坑群であり、A グループと同様の小型の円・楕円形の土坑と、隅丸方形の土坑で構成する。出土土器はⅢ群１類ｃ種に分類した深鉢（108）、爪刺突の施された胴部、胴下端部片（103・123）、C 字形爪形文が施された底部（102）、ループ文が施された口縁部から胴部片（101：Ⅲ群７類d3 種）である。B グループは土坑の形状、Ⅲ群１類土器の出土、爪刺突という文様要素から A グループとの共通項が見受けられる。C グループは隅丸方形・長方形が主体となり円・楕円形の土坑が混じる一群である。出土土器は口縁部に D 字形爪形文による帯状刺突列が施されたⅢ群３類（117・118）、刺突間隔の狭い篦状刺突により文様が描出され、円形竹管文が施されたⅢ群２類（107）、口縁部から胴部上位まで D 字形爪形文が横位に多段施文されたⅢ群５類（110）、Ⅳ群１類の根小屋式に比定される鉢（124）である。124 の根小屋式の鉢が出土した SK405 については、上層Ⅷａ層において根小屋式を出土する土坑群の分布範囲と近似し、長楕円形という平面形も上層土坑の特徴であるため、調査時における検出層位の誤認の可能性がある。そのほかに地文のみのⅢ群７類では、非結束羽状縄文の a1 種（106）、斜縄文の b1 種（125）、b2 種（105）がある。刺突文が施された土器の地文は原体の閉端部を強調した b2 種であり、d2 種の末端環のみを施文したループ文（104）、d3 種のループ文（120・121・134・135・137・138・148・149）が施された土器も出土している。またⅤ群２類では斜縄文のａ種（126・127）がある。C グループ出土土器の文様の特徴としては連続した刺突文の多段施文、帯状刺突列という点が指摘でき、先述の A・B グループとは様相を異にしている。

D・E グループは C グループと同様、隅丸方形・長方形の土坑を主体に構成される。D グループからは末端環のループ文により菱状、または鋸歯状の文様が描出されると考えられるⅢ群７類 d1 種（114）、d2 種のループ文（133）、Ⅴ群２類ａ種の斜縄文（115）が施された土器が出土した。E グループからは、Ⅴ群３類の結節回転文が施された土器（129 ～ 131）、また、F357 周囲から篦状刺突が多段に施された 145 が出土した。D・E グループは、刺突文の多段施文、Ⅴ群２類ａ種の斜縄文が C グループと共通し、遺構の形状とともに、関連性がうかがえる。

旧河川４層出土の土器群は東側の集中部から結節回転文が施されたⅢ群７類 c2 種の 157、爪刺突が施された 153・158、ループ文が施されたⅢ群７類 d3 種の 155・156 が出土し、その西側から刺突文により文様が描出されるⅢ群２類の 152 と、施文幅の広い斜縄文が施されたⅤ群２類ａ種の 154 が出土した。東側の土器群は A・B グループと類似する文様を持ち、152 と 154 は C・D・E グループと類似する。SX347 からは旧河川出土の 155・156 の原体に非常によく似たループ文が施される 142、施文幅が極めて狭いⅢ群７類 c1 種の結節回転文が施された 144 が出土した。

上層Ⅷａ層検出遺構とその出土土器を示したのが第 52 図である。図の F グループはⅧｂ層の C グループの範囲と重なる。Ⅷａ層でも隅丸方形の土坑が同じ範囲に位置しているのが分かる。そこに長楕円形の１基が加わる。出土土器は口縁上端と胴部上位に爪刺突が施されたⅢ群１類ａ種の深鉢（62）、篦状刺突による帯状刺突列が施されたⅢ群４類ｃ種の胴部片（64）、篦状刺突の間隔が狭く丁寧に施されたⅢ群６類 d2 種の底部片（63）、末端環のみのループ文が上下で密接して横位施文されたⅢ群７類 d2 種の胴部片（65）が出土した。

F グループ北側の円・楕円・長楕円形土坑で構成される一群を G グループとした。出土土器はⅣ群１類の根小屋式に比定される土器（66・67）のほか、篦状刺突が施されたⅢ群６類 d1 種の胴下端部（61）、



第 52 図　Ⅷａ層の遺構出土土器とその分布

Ⅴ群２類ａ種の斜縄文（59・60・68 ～ 70）、末端環のみのループ文のⅢ群７類 d2 種（73 ～ 75）である。なお、Ⅷｂ層検出の根小屋式の鉢（124）が出土した SK405 の長楕円形土坑は G・F グループの範囲に隣接している。

以上、北側調査区における遺構出土の土器、遺構形状・分布の分析から傾向を抽出すると以下に集約される。

・ Ⅷb2 層からは布目式の土器が出土した。
・ Ⅷｂ層 A グループは分布範囲がⅧb2 層の分布範囲と重なる。出土土器は布目式とⅢ群１類土器である。
・ Ⅷｂ層 B グループは遺構形状が A グループと類似する。出土土器はⅢ群１類であり A グループとの近似性が高い。
・ Ⅷｂ層 C グループは遺構形状が A・B グループと異なり隅丸方形・長方形を呈する。出土土器で地文以外の文様を有するものはⅢ群２類、３類、５類であり、刺突文の横位多段施文、帯状刺突列の土器である。遺構形状・出土土器の特徴はともに A・B グループとは異なる傾向にある。
・ Ⅷｂ層 D･E グループは遺構形状が C グループと類似する。刺突文が施されたものは１点のみであるが、箆状刺突が多段に施されたものである。遺構形状・出土土器ともに C グループとの関連を示す。
・ 旧河川４層出土の土器は大半が A・B グループと類似する特徴を持つ。一部は C・D・E グループと類似する。SX347 は A・B グループとの関連が予想される。
・ Ⅷａ層 F グループはⅧｂ層 C グループと分布範囲が重なり、遺構形状も類似する。出土土器はⅢ群１類と胴部に箆状刺突が横位多段施文された帯状刺突列のⅢ群４類である。
・ Ⅷａ層 G グループからは根小屋式に比定される土器が出土した。

以上の点から各グループはⅧb2層→Ⅷb層A・B→Ⅷb層C・D・E→Ⅷa層F→Ⅷa層Gと変遷して行くと考えられる。土器の変遷としては、Ⅱ群→Ⅲ群1類→Ⅲ群2・3・4・5類→Ⅳ群という変遷が抽出された。ただしⅧa層Fグループでは Ⅲ群1類が出土しており、Ⅲ群1類が時間幅を持って存在している可能性がある。また、Ⅲ群からⅣ群への移行については時間的な断絶が考えられる。それについては後述する。

2）　南側調査区出土の土器について

北側調査区での分析結果を踏まえて南側調査区出土の土器について概観する。南側調査区では3か所の遺物集中が認められる（遺物集中384・385・442）（第53図）。遺物集中384からはⅢ群4類の帯状刺突列が施された土器（7）が出土し、北側調査区Ⅷb層C・D・Eグループと併行する。遺物集中385からは頸部に爪刺突が施されたⅢ群1類土器（9）が出土し、北側調査区Ⅷb層Bグループとの併行が考えられる。遺物集中442からはⅢ群1類土器（11）が出土したほかは、刺突文を有する土器はⅢ群4・5類（13・16～18）であり、Ⅷb層C・D・Eグループと併行する可能性が高い。5Eグリッドに位置するSK446からはⅢ群1類d種（4）と、Ⅲ群7類d2種の末端環のみのループ文が施された鉢（5）が共伴している。遺構の形状は明確ではないが、出土土器からは北側調査区Ⅷb層A・Bグループとの併行が考えられる。そのほかの分布状況としては花積下層式に併行するⅠ群土器が調査区南西側にまとまる（1：SK845、2：P909、3：P892）。北側調査区での出土は確認されなかったため、その分布の中心は調査区外南西側に広がりを持つ可能性がある。

3）　谷地遺跡出土土器の変遷と他遺跡との比較

以上の検討を踏まえて谷地遺跡出土土器の変遷案を示したのが第54図である。

谷地遺跡Ⅰ期の土器はⅠ群土器が相当する。1類は幅広の横位非結束羽状縄文、内面の薄い横位の条痕から早期末までは上がらず花積下層式の古い段階に位置付けられよう。一方、撚糸側面圧痕の2類は県内における花積下層2段階［寺崎1990］、東北地方南部の編年における上川名式bグループ（宮城県原頭遺跡第Ⅱ群土器）［相原1990］、関東地方（群馬県）の編年における花積下層式Ⅲ段階［谷藤1994］に相当する。県内では、時期差を含む可能性があるが2類土器類似資料として旧東蒲原郡上川村室谷洞窟遺跡［中村・小片1964］、旧中魚沼郡中里村干溝遺跡［佐藤・石坂1994］、旧岩船郡朝日村山口遺跡［玉木・高橋1999］出土資料を提示した。山口遺跡からは撚糸側面圧痕を沈線でなぞる手法が用いられた資料が出土しており、本遺跡出土の1との類似性を示している。

谷地遺跡Ⅱ期の土器は布目式［上原1964］に比定されるⅡ群土器が相当する。口縁部・頸部（胴部上位）・底部に爪刺突が施され、地文には極めて幅狭で等間隔に第1種結束羽状縄文が施される一群であり、布目式の型式設定資料に極めて近い特徴を有する土器群、布目遺跡で主体的に出土する土器群の特徴を有するものである。器形では口縁下に有段部、もしくは横位の微隆帯を有するものが多い。当該期は小熊博史氏の編年案［小熊2008］による古1・2段階に相当する。

県内では布目式の標識遺跡となっている旧西蒲原郡巻町布目遺跡［小野・小熊1987；小熊1994］、旧三島郡和島村大武遺跡［春日・寺崎1995］、旧岩船郡朝日村アチヤ平遺跡［滝沢・富樫1998］出土の資料を提示した。大武遺跡出土の資料は未報告であるが、多くのものが布目遺跡出土の資料より新しい傾向のものであるという指摘がなされている［縄文セミナー2006］。しかし図に提示した資料は当段階に位

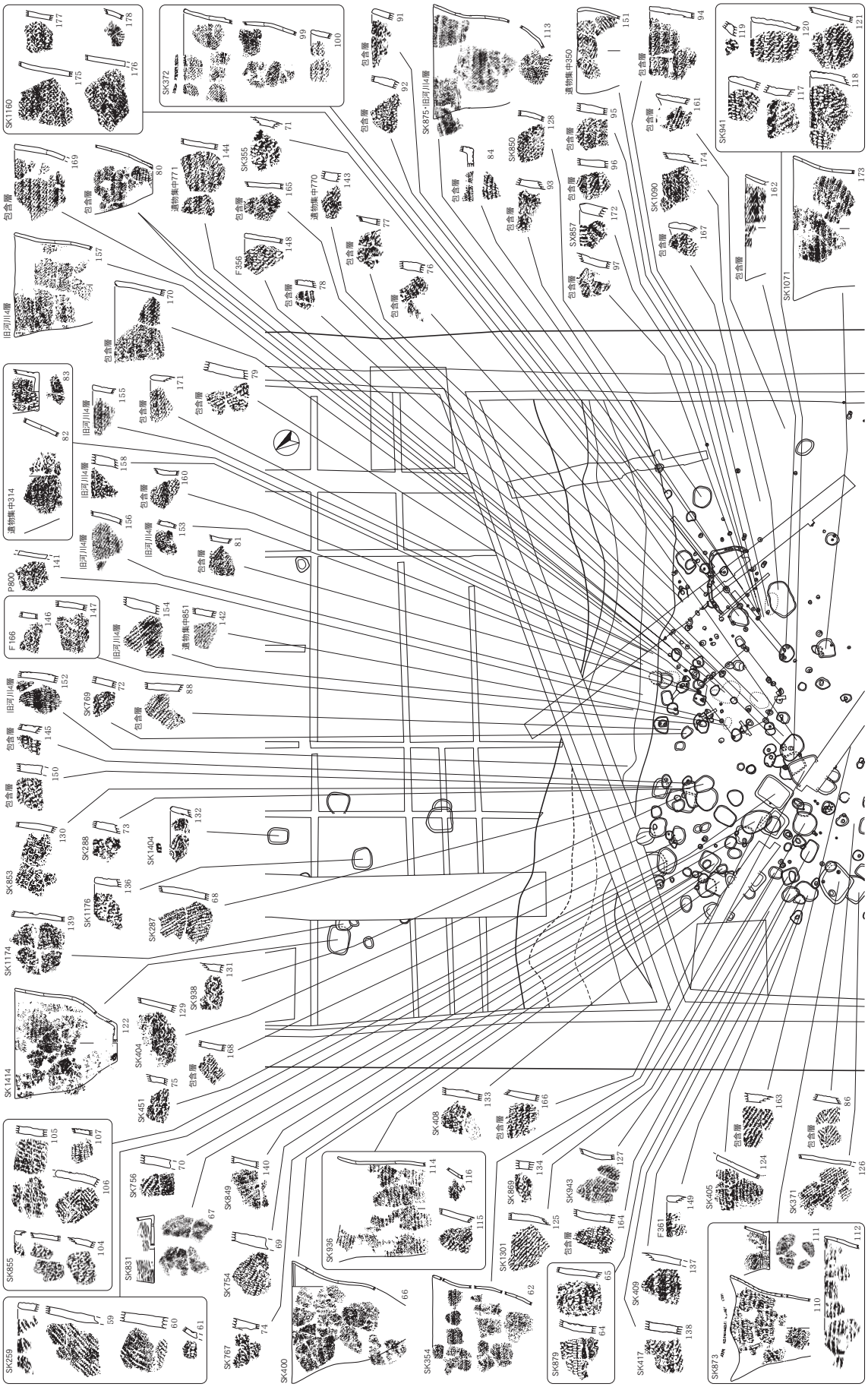
置付けられる資料と考えられる。アチヤ平遺跡出土資料は頸部に文様帯を有し、半截竹管状工具による列点により波状文が描かれている。

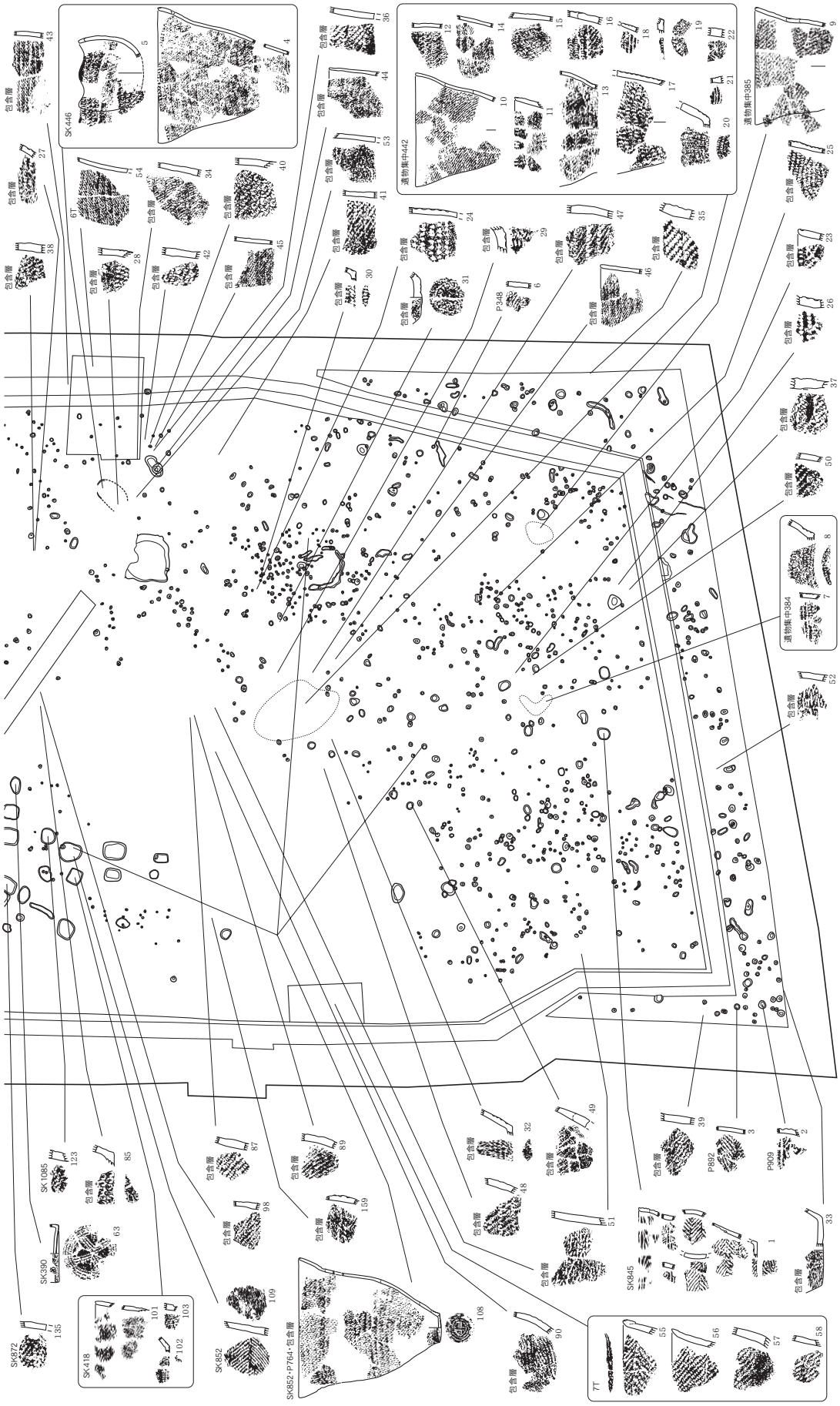
谷地遺跡Ⅲ期の土器群は上述の出土状況を基にａ・ｂの二時期に細分した。

Ⅲａ期はⅢ群１類の土器群を位置付けた。口縁上端、頸部、底部に文様帯を有し、ほかは地文となる布目式土器と同じ文様帯構成の土器群である。口縁下に有段部の名残が認められるものもある。布目式の系譜をひいた後続する土器群と言える。頸部の文様としては１類ａ種の爪刺突、１類ｂ種の沈線による波状文、１類ｃ種のコンパス文、ｄ種の無文帯がある。１類ａ種の９は地文に原体閉端部を強調した斜縄文が幅狭等間隔に横位施文される。62 はⅧａ層出土である。地文は結節回転文であるが、胴部の横位爪刺突列直下の地文のみループ文となっており、ほかの１類土器とは異なる特徴を持つ。旧北蒲原郡中条町二軒茶屋遺跡［水澤 2003］では地文の組紐に爪刺突が組み合わさる土器が出土しており、新しい段階までこの系統が残る可能性を示唆しているが、62 の土器は地文の結節回転文から関東地方に比較した場合、関山Ⅰ式の新しい段階までは下らないと考えられる。ｂ種の 113 は、出土位置と、底部の「ハ」の字の爪刺突という特徴からは、ほかの１類土器よりもⅡ期の土器により近い古手の可能性がある。地文は結節回転文である。ｃ種の 108 は地文に末端環のみのループ文が施され頸部にコンパス文が巡るものである。県内においてこのタイプの土器は見受けられないが、山形県一ノ坂遺跡［手塚・菊池 1996］において地文が末端環のループ文で頸部にコンパス状の文様が巡るものが出土している。また県内では二軒茶屋遺跡の提示した資料の中に器形・地文・底部の刺突文が類似したものが出土しているが、頸部文様帯は無文帯である。地文のループ文に爪刺突を持つ土器としては大武遺跡出土資料を提示している。上述したように、大武遺跡ではこの段階の資料が主体となるようである。ｄ種の４は地文に原体閉端部を強調した斜縄文が施され、頸部に無文帯を有する。類似資料として二軒茶屋遺跡から、口縁部も無文の資料が出土している。ｅ種の 55 は口縁端部と上端部に爪刺突が施され、地文が非結束羽状縄文の土器である。旧西蒲原郡巻町新谷遺跡［前山 1994］の深鉢６類と二軒茶屋遺跡において類似資料が認められるが、本遺跡では非結束羽状縄文が施される土器は散見される程度である。

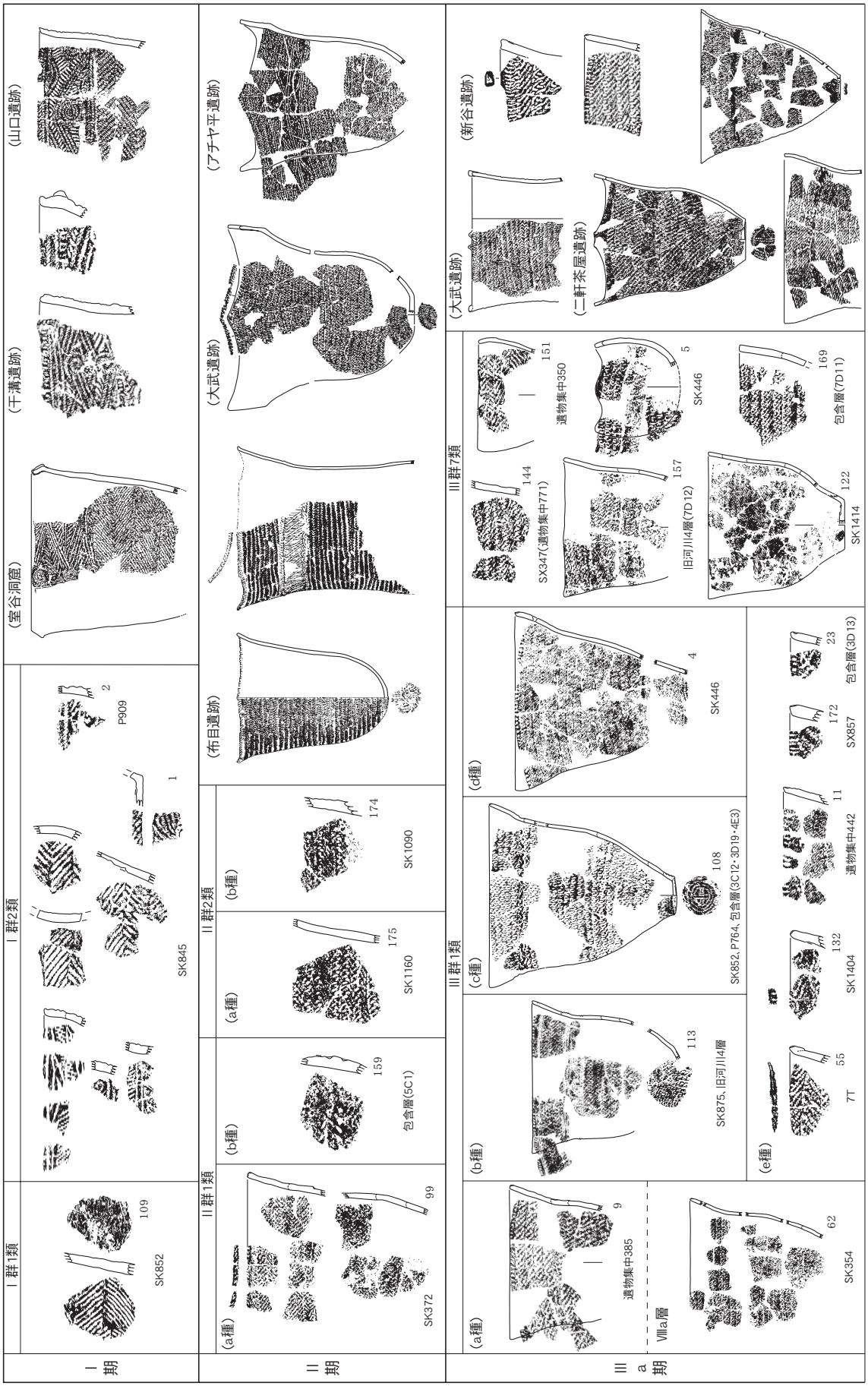
当段階に位置付けられる地文のみの７類土器としては、１類土器の４と共伴している５の末端環ループが施された鉢、SX347 出土の幅狭の結節回転文が施された 144、旧河川４層出土の結節回転文が施された 157 とループ文の 169、遺物集中 350 出土の非結束羽状縄文が横帯内羽状となる 151、上記で出土位置からの検討はしていないが、非常に幅の狭い等間隔横位施文の複節斜縄文が施された 122 も、施文幅の狭小さを根拠に当段階に位置付けたい。

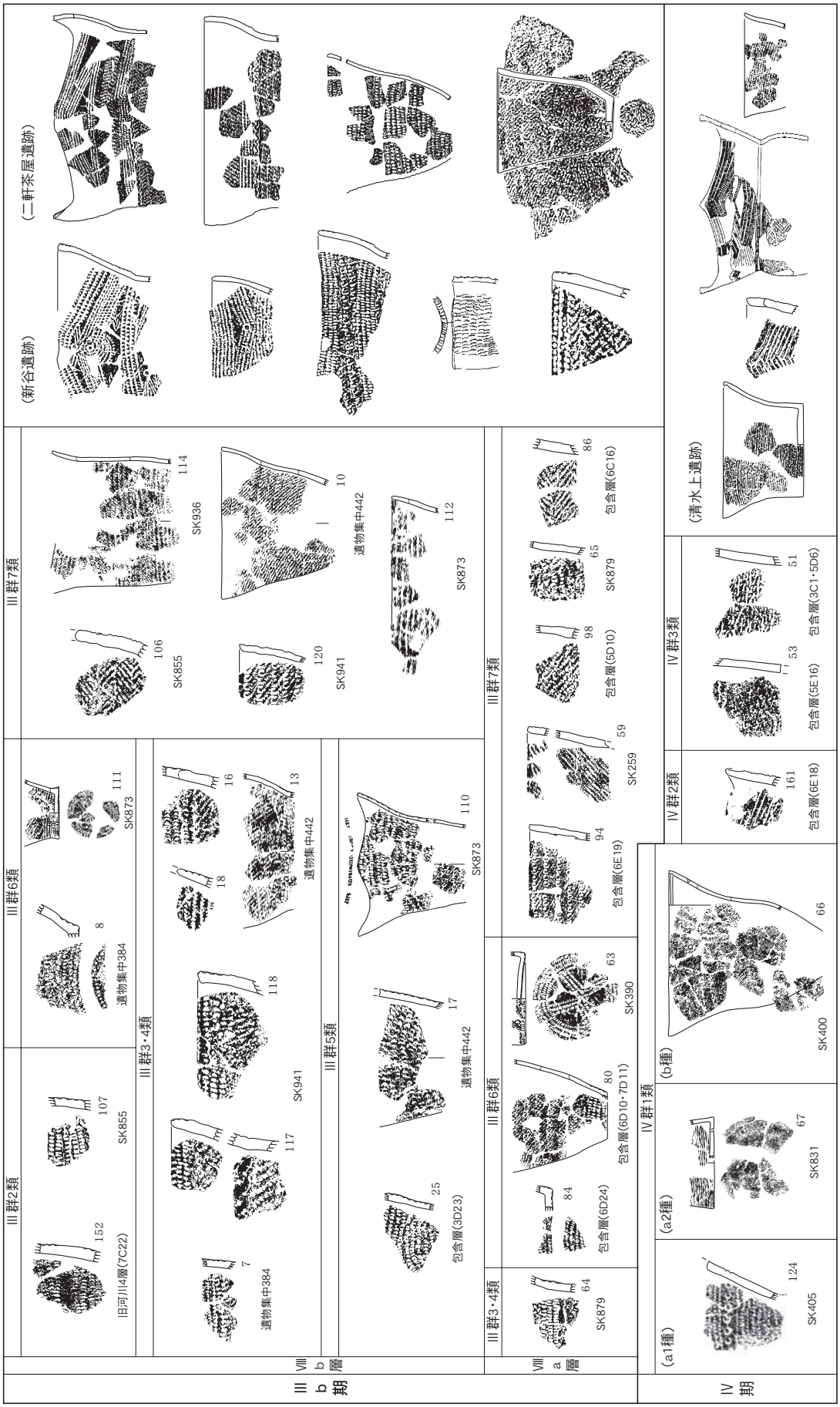
Ⅲｂ期には刺突文が横位に多段施文される土器群を位置付けた。刺突文により主文様を描くⅢ群２類、口縁部・頸部に帯状刺突列が施されるⅢ群３・４類、器面に幅広く多段施文されるⅢ群５類が相当する。Ⅲ群２類土器の 107 は新谷遺跡の深鉢４類［前山 前掲］に類似する。新谷遺跡深鉢４類は口縁上端部と文様帯下端に刺突列を施し、これによって区画された部分に刺突列による鋸歯状や蕨手状の文様、コンパス文が施される土器群である。東北地方の表館式［武藤 1988］や石川野式［加藤 1982］との関連が指摘されている類である［前山 1994；寺﨑 1999；谷藤 2005］。107 は破片右下隅に円形竹管文と思われる痕跡が見られ、破片下半の刺突列が斜位に施されることから新谷遺跡深鉢４類に類似する可能性が高い。このタイプの土器は新谷、二軒茶屋両遺跡において主体的に出土している。新谷遺跡の刺突列は連続したＤ字形爪形文（列点文）が主体であるが、二軒茶屋遺跡では爪形刺突により鋸歯状や菱状、連鎖する横位Ｓ字状文が施され、さらにコンパス文が発達して施される土器群も主体的に出土する。このようなモチー





第 53 図　出土土器と分布


一期
二期
三a期
Ⅰ群1類
Ⅰ群2類
Ⅱ群1類
Ⅱ群2類
Ⅲ群1類
Ⅲ群7類
(a種)
(b種)
(c種)
(d種)
(e種)
(室谷洞窟)
(干溝遺跡)
(山口遺跡)
(布目遺跡)
(大武遺跡)
(アチヤ平遺跡)
(新谷遺跡)
(二軒茶屋遺跡)
SK852
SK845
P909
SK372
SK1160
SK1090
包含層(5C1)
SK875、旧河川4層
SK852、P764、包含層(3C12・3D19・4E3)
SK446
遺物集中385
SK354
SK1404
遺物集中442
SX857
包含層(3D13)
SX347(遺物集中771)
遺物集中350
旧河川4層(7D12)
SK1414
包含層(7D11)
Ⅶa層
7T



第 54 図　谷地遺跡における土器の変遷と県内類似資料

フが胴部の横位刺突列直下に施されるものもあり、新谷遺跡深鉢４類タイプと共伴するがやや後出するものとの見解がある［谷藤 前掲］。このタイプの土器は本遺跡での出土は皆無である。152 は胴部片であり、破片の上部に斜位に施された刺突列が認められるが文様構成は不明である。本遺跡Ⅲ群３・４類は口縁部・頸部または胴部に横位の帯状刺突列が施されたもので、主文様を持たない土器群である。刺突文は連続したＤ字形爪形文（列点文）、Ｃ字形爪形文、篦状刺突文であり、各種の刺突文が認められる。新谷遺跡では深鉢６類の範疇に入り、二軒茶屋遺跡でも類似資料が出土している。新谷・二軒茶屋遺跡における刺突列は、沈線を施文後に沈線上に刺突、沈線間に刺突を施すという特徴を有するが、本遺跡Ⅲ群２・３・４類において明確な沈線との組み合わせが認められる刺突列はなく、107 の１点のみ弱い沈線が部分的に見られるが判然としていない。Ⅲ群５類は新谷・二軒茶屋遺跡でも類似資料が認められる。Ⅲ群６類は２～５類と共伴した資料、またはⅧａ層出土のものを位置付けた。Ⅲｂ期におけるⅧａ層出土の資料に施される刺突文はすべて篦状の工具を器面に垂直に施した篦状刺突である点は注目される。６類の 84 の底部片の篦状刺突は細かく密な施文となっており、旧西蒲原郡巻町豊原遺跡［小野 1994］出土資料と類似した傾向が見られる。施文刺突の繊細化が新しい段階の要素となる可能性も指摘されている［小野・前山 1988］。当段階における地文のみのⅢ群７類としては非結束羽状縄文、斜縄文、結節回転文、ループ文が施されたものがある。斜縄文が施された 10 は遺物集中 442 出土でⅢ群３・４類と共伴し出土した。10 の斜縄文は b2 種の原体の閉端部が強調された幅狭等間隔の横位施文で、縄文の圧痕は太くて深いという特徴を持つ。そのほかの斜縄文としては施文幅の広いⅤ群２類ａ種がⅧｂ層、Ⅷａ層から出土した。特にⅧａ層では大半が施文幅の広い斜縄文となっている。非結束羽状縄文が施されるⅢ群７類 a1 種（86・106）は幅狭等間隔で施文されるもので、縄文の節がかなり密なものが多い。Ⅷａ層での出土も認められた（86）。ループ文では末端環のみのループ文で文様が描かれる d1 種（114）、末端環のみのループ文が等間隔に横位施文される d2 種（65）、斜縄文部分も施文される d3 種（94・98）の各種が見られる。ループ文 d1 種は土器上半部のループ文が鋸歯状、もしくは菱状になると思われるが、遺存部がわずかのため明確なことは言えない。ループ文により鋸歯状文、入組鋸歯状文、連結Ｓ字状文などの主文様が描かれる土器は宮城県（金山貝塚）、福島県（宮田貝塚・獅子内遺跡・下ノ平Ａ・Ｄ遺跡・段ノ原Ｂ遺跡）、山形県（一ノ坂遺跡・松原遺跡）などの東北地方南部で出土している［堀江 2006］。それらの土器群はループ文による文様間は磨消による無文部となっているが、本遺跡出土の 114 には明確な磨消による無文部は認められない。県内においてはループ文により明確な主文様を描く土器の出土は認められない。ただし二軒茶屋遺跡において胴部にループ文が波状に施されたものが出土しているが、器面の風化のため文様が判然としていない（第 54 図提示資料）。Ⅷａ層出土のループ文では d2 種、d3 種が認められるが、d2 種では 65 のようにループ文の末端環の横位施文が上下でかなり密に施文されるものが認められる（65・73・91～93）。また d3 種では 98 のように横位文様帯が明確に意識されていないものもある。

Ⅲａ期の土器群とⅢｂ期の土器群は文様要素、施文手法、共伴関係、出土遺構の形状・グルーピングから先後関係があると判断したが、共伴する可能性もあり、Ⅲｂ期土器群がやや後出するぐらいの時間差であろうと考えられる。谷地遺跡出土のⅢ期土器群は、地文以外の文様を持つものは口縁上端・頸部・胴下端部・底部に文様帯が集約される傾向にある（３・４類）。この文様帯構成は布目式と同じであり、この系譜が引き継がれ文様の種類が変化しながら、つまり爪刺突から帯状刺突列という刺突列の多段構成化、刺突文自体も爪形文から篦状刺突文へ、さらに刺突文の繊細化を通して関山Ⅱ式併行と考えられている清水上遺跡東北系深鉢１類のような土器への変遷が想定される。刺突文の帯状化には東北の表館式の影響と

その融合が考えられよう。小熊氏の編年案［小熊 2008］に対比すると、本遺跡Ⅲａ期は古２～新１段階、Ⅲｂ期は新１段階に相当すると考えられる。

Ⅲａ期を県内の他遺跡と対比すると、大武遺跡は未報告のため詳細は不明であるが、新谷遺跡深鉢６類の一部、二軒茶屋遺跡類似資料、アチヤ平遺跡中段２Ｂ期が併行関係にあると考えられる。Ⅲｂ期は新谷遺跡深鉢４類・５類・６類の一部、二軒茶屋遺跡類似資料が併行関係にあると考えられる。アチヤ平遺跡中段３期は併行もしくは新しい段階の可能性がある。

谷地遺跡Ⅳ期の土器群はⅣ群土器が相当する。１類 a1 種・a2 種の土器は細かい点列状の刺突文が施される「根小屋式土器」［寺﨑 1996］に比定される鉢である。両者は刺突文の手法が異なり、a1 種の 124 は上部の点列状刺突文が細い棒状工具によるもので、円形竹管文以下が半截竹管状工具の内面、つまり二股の先端角の部分により平行な点列状刺突文が施されるという特徴を有している。a2 種の 67 は櫛歯状ではなく、非常に細い棒状工具により、一点一点丁寧な細かい点列状刺突文を施している。１類ｂ種の 66 は地文の斜縄文のみが施された深鉢である。やや細めの RL の原体により斜縄文が横位施文されるが、横帯施文区画は明瞭ではない。胴下端部の縄文にのみ原体 LR の斜縄文が施される。口縁上端部の内面には横位に一条の凹線が巡る。この特徴は根小屋式の鉢に認められるもので、従来鉢のみの器種構成と考えられていた根小屋式に、深鉢が存在することを示す資料である。１類の資料は内面調整が丁寧で、胎土の繊維含有量は微量である点で共通している。根小屋式は県内では旧北魚沼郡堀之内町清水上遺跡［寺﨑・鈴木 1996］、豊原遺跡［小野 前掲］、柏崎市大湊遺跡［金子 1987］でその出土が報告されている。一定量の出土量がある清水上遺跡での型式別構成比率は、有尾式が 79％、根小屋式が 18％、大木２ａ式が３％［寺﨑 1997］であり、有尾式の深鉢に根小屋式の鉢が加わるかたちで器種組成を補完している。今回本遺跡において根小屋式の深鉢資料が出土したことで、根小屋式が主体的に出土し、その深鉢と鉢で器種を構成する遺跡の存在も、可能性としては指摘できよう。

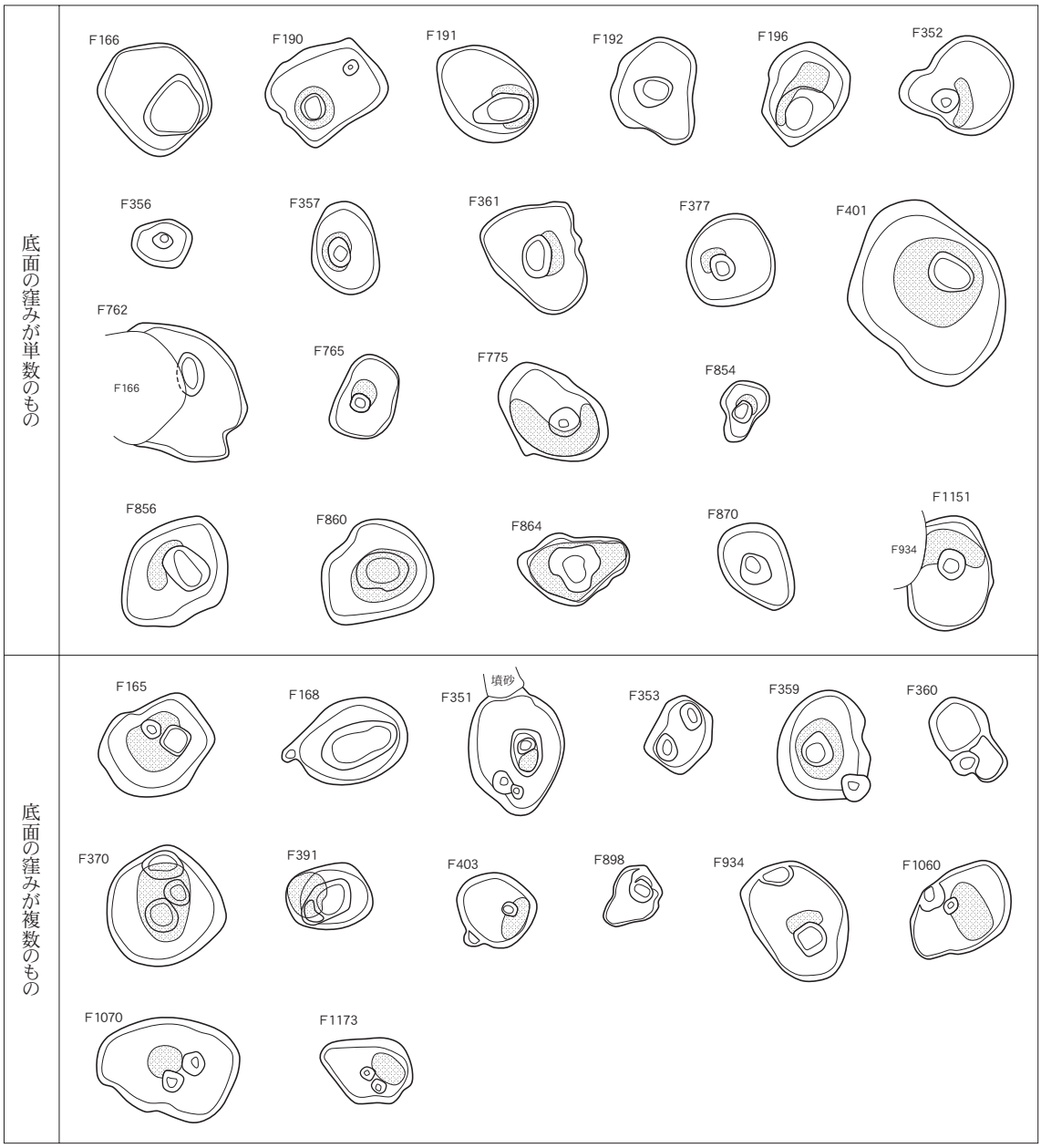
２類は平行沈線文が施された波状口縁となる土器の口縁部片である。平行沈線文は鋸歯状構成になると思われ、有尾式に比定されると考えられる。県内では干溝遺跡３号住居からまとまった資料が得られている［佐藤・石坂 1994］。櫛歯状工具による施文のものと爪形による施文のものに大別できる。３類は網目状撚糸文が施されるもので東北地方の大木２ａ式に比定されるものである。53 は器面の風化が著しく文様が判然としていないが、コンパス文が横位に施され、その下に網目状撚糸文が施される。

谷地遺跡出土土器は上記のように変遷すると考えられるが、時期的にはⅢｂ期とⅣ期の間に断絶がある可能性がある。つまり県内遺跡の例でいうと豊原遺跡、大湊遺跡、清水上遺跡前期前半Ⅰ段階、二軒茶屋遺跡の爪形刺突文により横位連結Ｓ字状文や発達したコンパス文などの主文様を描く段階の資料が欠落している。関東地方に対比するならば関山Ⅱ式併行段階の資料と言える。ただし上述したように繊細な刺突文が施された新しい傾向にある資料が少数ではあるが存在しているため、完全な断絶期であるかどうかは定かではない。また土器から見た本遺跡の利用頻度であるが、各段階の出土土器量からは、大規模な集団で長期間定住していた様子ではなく、かなり規模の小さい集団による短期的な利用状況がうかがえる。つまり本遺跡は時期的には前期初頭から中葉までと幅を持つが、連綿と絶え間なく人々が利用していたのではなく、少数の人々により短期間の利用が繰り返された場所である可能性が高いと言えよう。それは遺跡内に河川流路が存在し、土壌が氾濫堆積層という点から考えてもうなずける。にもかかわらず長期間にわたり人々が利用する点に谷地遺跡の重要性がうかがえる。

B　屋外炉について

谷地遺跡で検出した屋外炉は 63 基で、北側調査区でのみ検出した。形状は円形～楕円形のものが多いが、方形を呈するものもある。Ⅷａ・Ⅷｂ・Ⅷｂ2 層と分層した各層で検出し、層ごとの検出数はⅧａ層では 17 基、Ⅷｂ層では 36 基、Ⅷｂ2 層では 10 基である。屋外炉は通常、被熱により土壌が赤色化するが、谷地遺跡では多くが黒色を呈していた。現地調査では覆土の自然科学分析を行っており、以下に分析結果を整理し、本遺跡の屋外炉の構造についての考えを若干述べる。

炉の年代を探るための考古地磁気の分析（第Ⅲ章４B）では、F165（Ⅷｂ層）、F167・195（Ⅷａ層）を対象とした。分析の結果、炉はほぼ縄文時代前期に営まれ、さらに F167･195 より F165 の時期が古いとする、遺構の層位的な検出状況を肯定した結果となった。黒色土が焼土であるか否かを検証するために行った熱

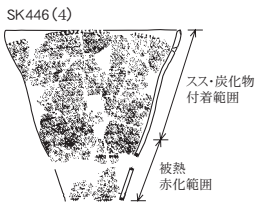


図中の ▨ は被熱による硬化範囲を示す　（上方向が北　S=1/40）

第 55 図　窪みを持つ屋外炉の平面形態分類図

消磁とテリエ法による実験では（第Ⅲ章４B）、黒色土は焼土で被熱温度は 210 ～ 300℃と通常の焚き火温度（600 ～ 800℃）より低いという結果を得た。また、F195 について軟Ｘ線透過写真による土壌構造の分析を行った。その結果、地山土に掘り込まれた遺構であるとともに、覆土が撹拌されていることが分かった。さらに灰像分析（第Ⅲ章４A）では珪化組織は観察されず、種実・微細植物片分析では炭化材だけが検出されている。炭化材は覆土全般から出土しているが、特に検出面付近では大型のものが多い。樹種は、コナラ節・クリ・サクラ属・トネリコ属で、これらが燃焼材であった可能性が高く、珪化組織が検出できなかったことは、イネ科植物を燃料として使用していないことを示している。

一方、遺構には底面に円形または楕円形の窪みを持ち、その周囲が被熱により硬化しているものも多く見られる（第 55 図）。出土土器の胴部下半の被熱痕やススの付着具合（第 56 図）からは、土器が正位で置かれ、火にかけられたと推測できる。土器の底部が小さく不安定なことから、炉に残された窪みは土器を安定させる据付け穴の可能性がある。



第 56 図　SK446 出土土器（４）
被熱状況

以上のことから谷地遺跡の屋外炉においては、掘り込み底部の窪みに土器を据え、その周囲で薪を燃やしたことが想定できる。また、熱テリエ法分析で示された黒色土（焼土）の低温での被熱の要因としては、調査時に覆土中に炭化物が含まれていることを確認し、軟Ｘ線透過写真において覆土が撹拌を受けたと分析されたことを考慮すると、一つの考えとしては、炉内の温度がある程度下がった段階で、再使用に備えた炉内の清掃や炉底の整形時に、焼土が除去・撹拌されたためと推測されよう。

C　北側調査区の検討

北側調査区の遺構と出土土器の関係については、第Ⅲ章５A において土器文様の分類と変遷を踏まえてグルーピングを行った。ここでは、土器を伴わない遺構についても分析の対象として、層位ごとの平面形や検出位置、土器の分類結果を手掛かりとして北側調査区検出の遺構の性格について検討する。

北側調査区では、屋外炉、土坑、ピット、住居の可能性のある遺構を検出した。土坑は総数 117 基で、北側調査区では 94 基をⅧa・Ⅷb・Ⅷb2 の各層で検出した。各層の検出数はⅧa 層 25 基、Ⅷb 層 58 基、Ⅷb2 層 11 基である。形状は円形～楕円形と方形に大きく分けることができる。層位ごとの形状別の数量を第 12 表にまとめた。Ⅷa 層では円形～楕円形のものが多く、Ⅷb 層では隅丸方形～長方形のものが多い。またⅧb2 層では円形～楕円形と方形のものの比率はほぼ半々である。また南側調査区では、方形土坑は見られず、すべて円形～楕円形土坑である。層位ごとの遺構分布を第 57 図に、出土土器ごとの遺構分布を第 58 図に示した。これによると、調査区の 6C グリッドの北側と 7C グリッド付近に系統不明

北側調査区

Ⅷa 層土坑の平面形

形　状	数量
円形	7
楕円形	8
長楕円形	3
隅丸方形	4
隅丸長方形	2
不明	1
計	25

Ⅷb 層土坑の平面形

形　状	数量
円形	4
楕円形	10
長楕円形	5
隅丸方形	16
隅丸長方形	9
不明	14
計	58

Ⅷb2 層土坑の平面形

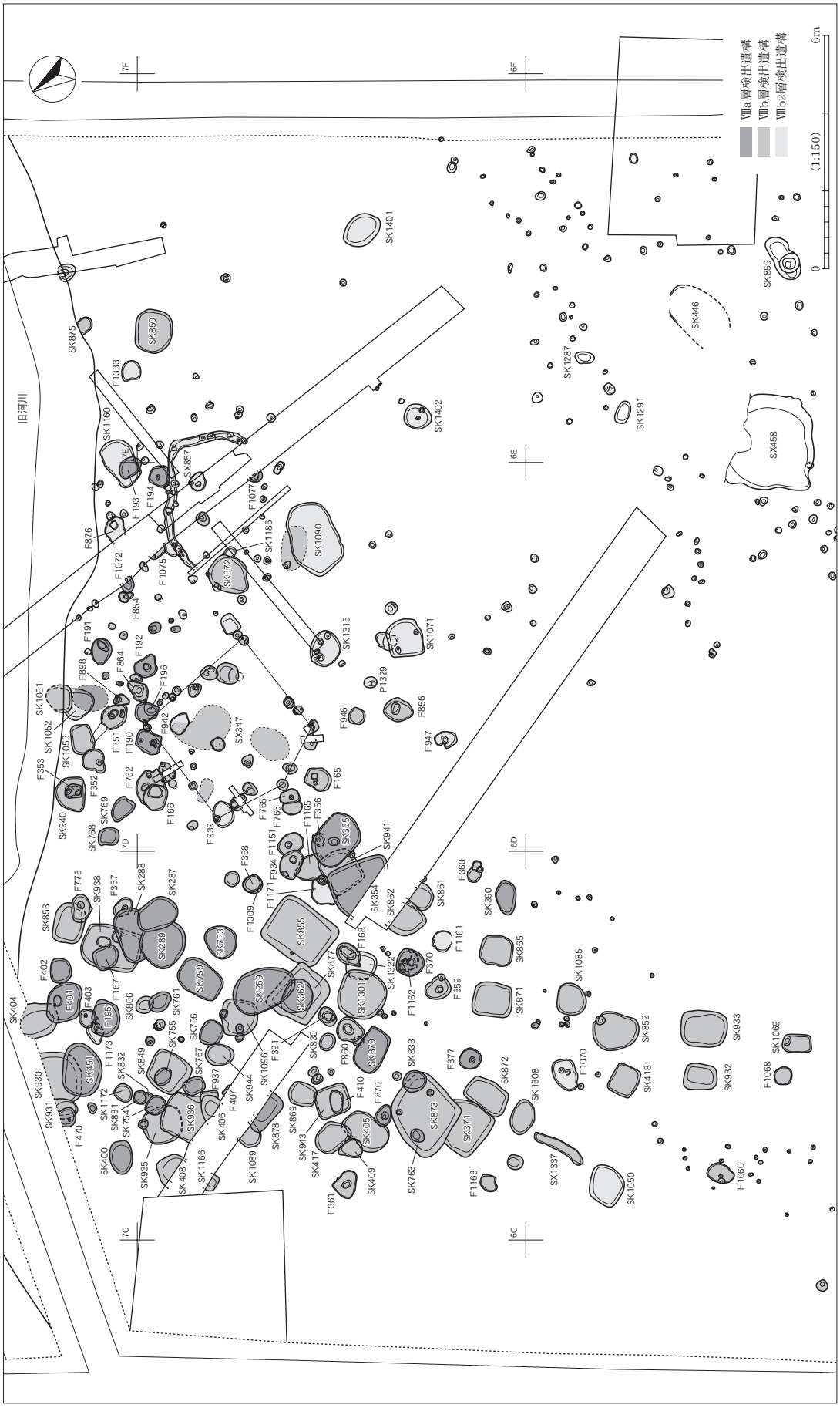
形　状	数量
円形	2
楕円形	3
長楕円形	1
隅丸方形	3
隅丸長方形	1
不明	1
計	11

南側調査区

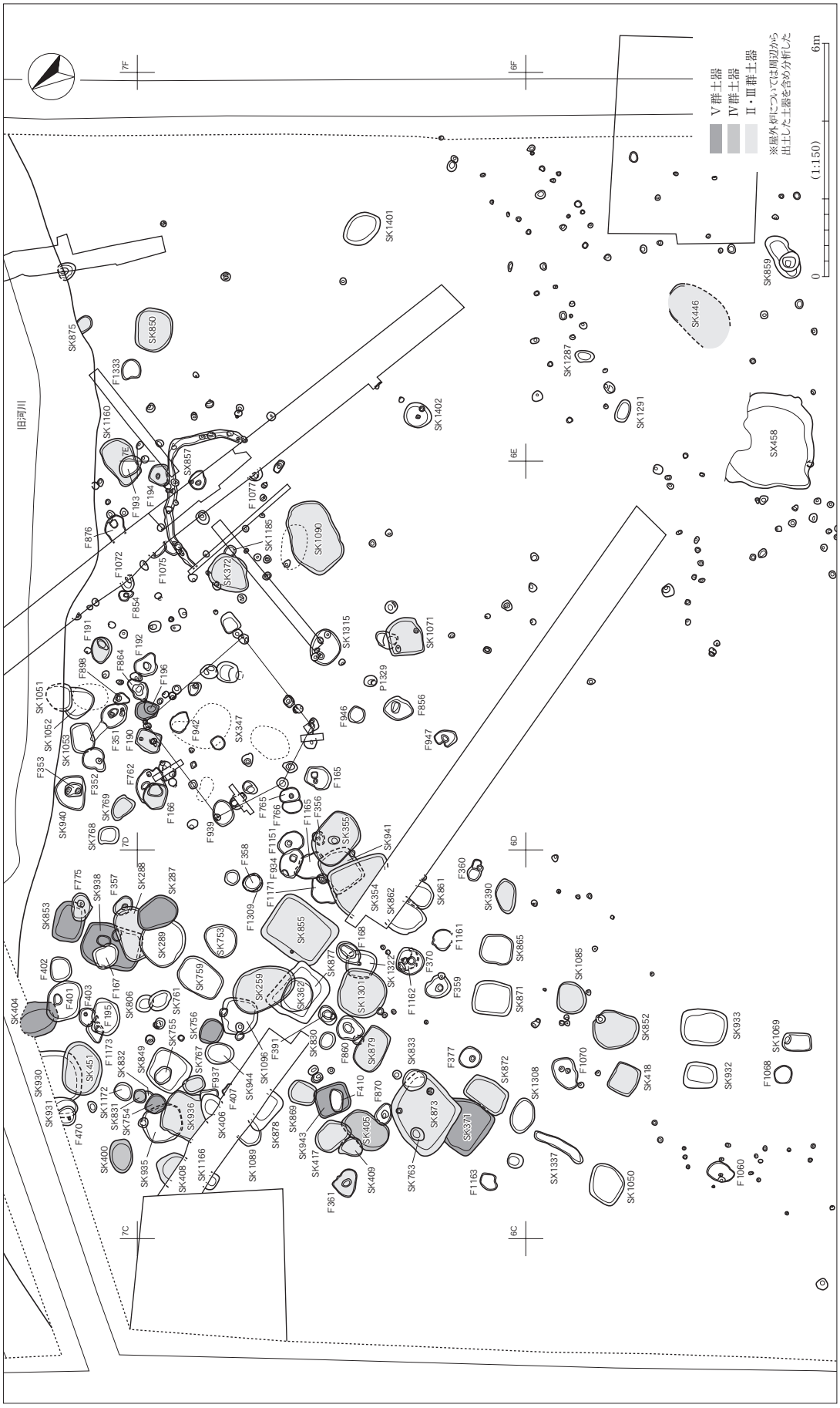
Ⅷ層（Ⅸ層上面検出含む）土坑の平面形

形　状	数量
円形	6
楕円形	4
長楕円形	10
隅丸方形	0
隅丸長方形	0
不明	3
計	23

第 12 表　層位ごとの土坑平面形別数量



第 57 図　層位別遺構分布



第 58 図　土器別遺構分布

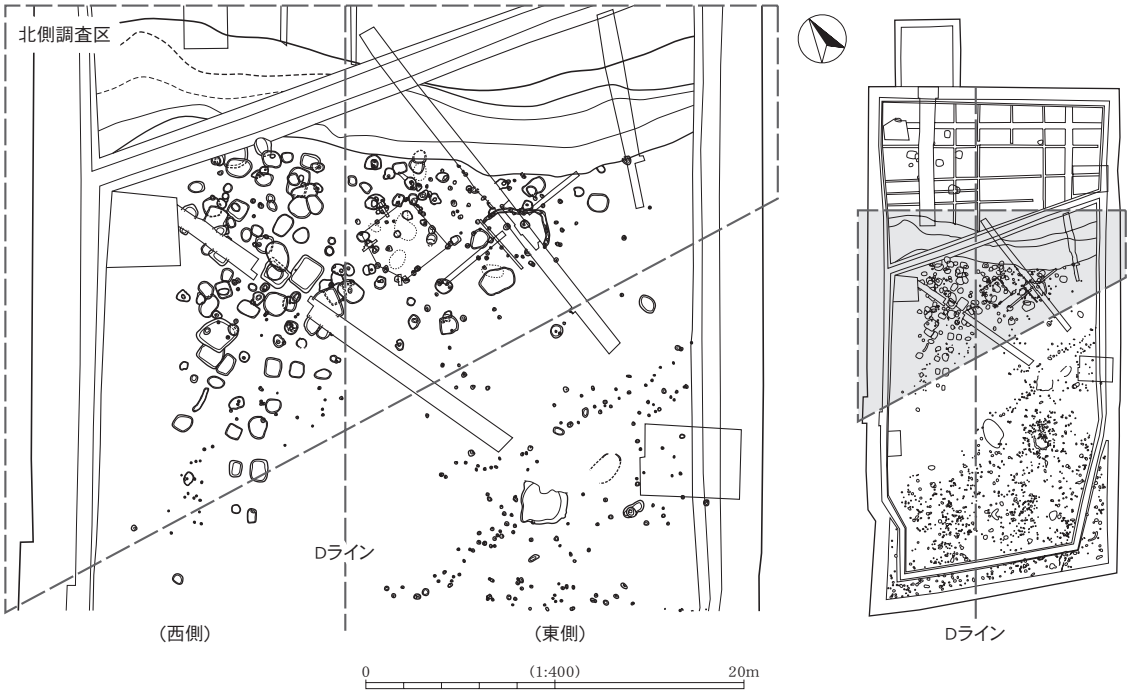
としたⅤ群の土器が、６C・７C グリッドの西側で根小屋式相当としたⅣ群土器が、ほぼ全域に新谷遺跡出土土器から二軒茶遺跡出土土器に相当するⅢ群土器が、６D ～６E グリッドにかけて布目式に相当するⅡ群土器が出土した屋外炉及び土坑が分布する。さらにⅢ群土器が出土した屋外炉と土坑のうち、刺突文を施文する２～５類土器の分布は、６C グリッドと旧河川及びその周辺の７C グリッドで多く、口縁上端に刺突文を持ち、口縁部以下に縄文や沈線で幅の狭い文様帯を持つⅢ群１類と、縄文による幅の狭い文様帯を持つⅢ群７類のうちⅢ群１類土器と共伴するものが、５C ～６D グリッドに分布する。

第Ⅲ章５A において、土器の変遷をⅡ群→Ⅲ群１類→Ⅲ群２・３・４・５類→Ⅳ群と示し、出土土器から見たグループごとの遺構の変遷は、Ⅷb2 層→Ⅷb 層 A・B →Ⅷb 層 C・D・E →Ⅷa 層 F →Ⅷa 層 G とした。この分析結果と、第 57・58 図の内容を加味すると、遺構の層位別分布ではⅧb2 層→Ⅷb 層→Ⅷa 層の順で、出土土器ではⅡ群→Ⅲ群＋（Ⅴ群）→Ⅳ群と時代を経るごとに北西側に遺構が分布する傾向がある。その中で、層位ではⅧb 層、出土土器ではⅢ群土器の時期に、平面的な広がりのピークがある。遺構の全体的な分布についても、土坑群・屋外炉群は調査区の北西側に集中しており、居住に関わる遺構と考えられる SX347・857（第 61 図）の周囲への分布は少なく、小林圭一氏の言う居住域と離れた位置に土坑がまとまりを見せる縄文時代前期前葉の集落の特徴［小林 2001］と合致している。

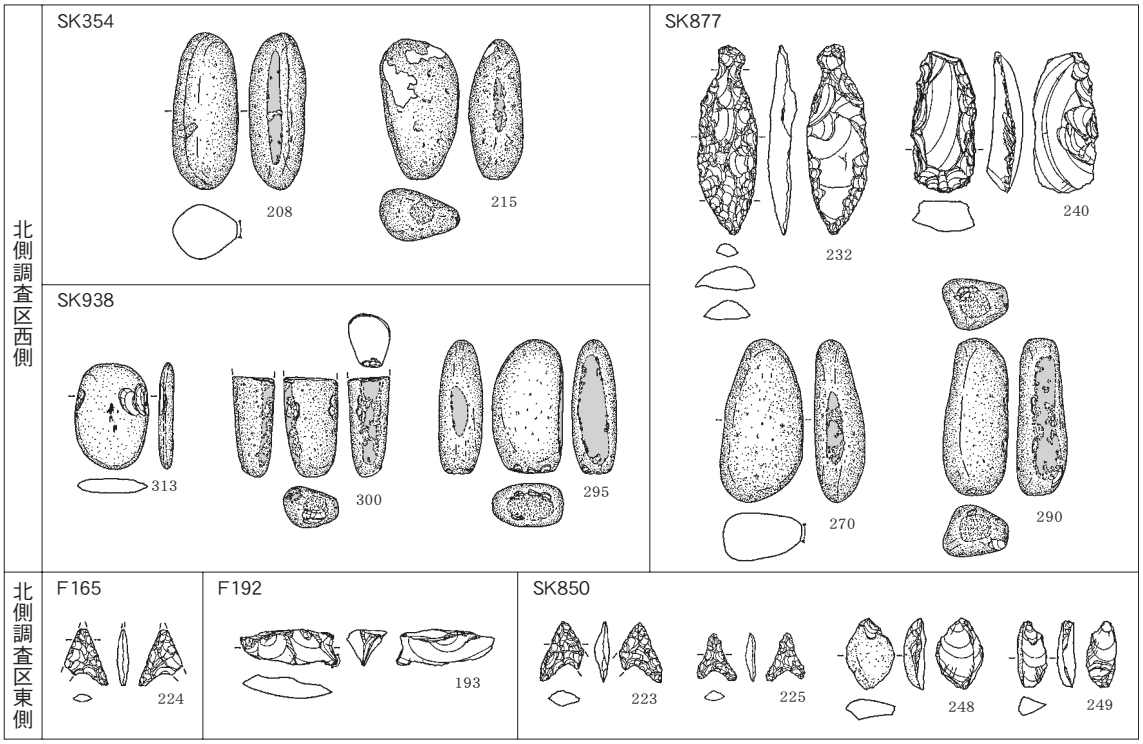
次に遺構及びその周辺における遺物出土状況から遺構の性格が推測されるものについて若干ふれる。Ⅳ群１類ｂ種の土器（66）が出土した SK400 や、Ⅲ群６類土器（111）とⅢ群５類土器（110）が覆土下層から、Ⅲ群７類土器（112）が覆土上層からそれぞれまとまって出土した SK873 では、土器の出土状況から土器を廃棄したというより、むしろ何らかの目的を持って土器を遺構内に設置する行為が想定されるものである。SK861 は覆土中に珪藻質泥岩の砕片が大量に含まれ、この石材を使った石器は、F165（石鏃 224）、Ⅷb 層（篦状石器 247・不定形石器 258）から出土している。調査区全体では石器製作に関わった資料は極めて少なく、遺跡内で積極的に石器が製作されたとは言えないが、砕片は石器製作に関わり廃棄された可能性が高く、遺跡内には完成品またはそれに近いかたちで石器が持ち込まれ、ここで刃付けや最小限の二次加工が行われたと推測されるものである。また、F165 の周辺では複数の石器（篦状石器・石匙・石匙未成品・剥片）が重なって出土し（図版 12）、その出土状況から埋納行為が想定され、F769 の埋め戻し土と考えられる覆土からは、滑石製の管玉が出土しており、屋外炉周辺で精神的な行為が執り行われた可能性が考えられる。さらに、土坑と屋外炉はいずれも近接しており、その周辺から出土した多数の篦状石器や特殊磨石は、遺構の用途を推測する手掛かりとなろう。

このように、個々の遺構を見ていくと、その想定される性格は一律ではなく、性格解明には今後の類例増加と研究の進展を待たねばならないが、北側調査区全体としては、住居と考えられる SX347・857 が位置する東側では西側でも出土した磨石や篦状石器などの生産・加工に関わる工具のほかに石鏃のような狩猟具や石錐（ドリル）のような工作具が出土しており（第 59・60 図）、北側調査区の中でも東側と西側で活動内容が異なる可能性が推測できる。

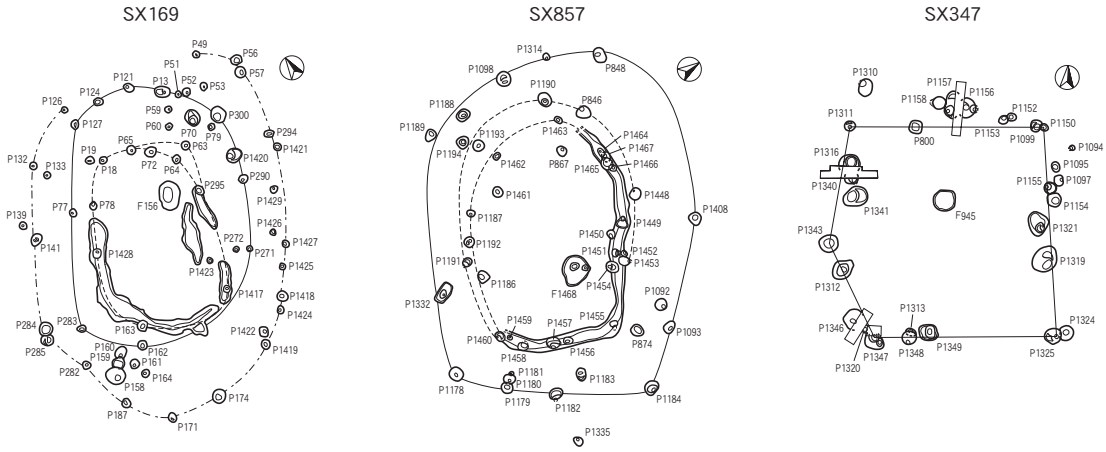
最後に調査区で検出した住居と考えられる性格不明遺構（第 61 図）について若干ふれたい。縄文時代前期前葉では一般的に住居が定形化し、深い掘り込みを持った住居になる。県内の事例では花積下層式土器の時期とされる大角地遺跡［加藤ほか 2006a］で、工事立会の際に深い掘り込みを持つ SI1 が報告されているが、建物の一部分だけの検出で炉の存在は不明である。また清水上遺跡［寺﨑・鈴木 1996］ではやや新しい根小屋式の時期の掘立柱建物が報告されている。谷地遺跡で検出した溝とピットを伴う SX169・SX857 については、類似する遺構が二軒茶屋遺跡［水澤 2003］で 55 ～ 70 号遺構として報告されている。



第 59 図　北側調査区出土の石器



第 60 図　遺構出土石器



第 61 図　住居の可能性がある性格不明遺構

また新谷遺跡［前山 1994］でも円形に巡る溝とピットからなる遺構が報告されているが、谷地遺跡と比較するとピットの並びもはっきりとしたものではなく、溝も規模が小さい。谷地遺跡で検出した SX169・SX857 はその構造から定形化した住居形態とは言い難く、上屋構造についても不明で、炉もあまり焼けていない地床炉である。SX347 については、竪穴構造や溝はなく平地式住居か掘立柱建物の可能性を考えたいが、ここで性急に結論付けることは避け、事例の増加を待って改めて検討したい。

D　南側調査区の検討

谷地遺跡では５～６グリッドに位置する旧河川を境に北側調査区と南側調査区に区分している。これは、流路の南岸が比高 0.4 mほどの段状を呈することや、流路の北と南で土層の堆積環境や土質が異なっていたためである。特に段状の地形については、地震による断層の可能性もあり、検討事項となっていた。

このため新潟大学の高濱信行氏に現地指導を依頼し、遺跡の東側壁部に深さ３ｍほどの深掘りトレンチを設定して、断層としての可能性や旧河川が周囲の土層へ及ぼした影響を検証した。その結果、段状地形の下位にある礫層は安定して継続する状態が観察され、段状地形の成因が地震ではないことが推測されるに至った（第Ⅲ章４C）。地震以外の成因としては、河川の影響により高位置にあった礫層が崩落したことにより、見掛け上の段差が生じた可能性が指摘された。この旧河川の南側では北側より礫層が高い位置にあることから、自然堤防が形成されていたと推測でき、このことから旧河川の南側は「乾陸化」（第Ⅲ章４C）し、安定した腐植土層（Ⅷ層）が形成されたと推察できた。

また、旧河川の状況及び周囲の土層への影響については、５～６グリッドにある旧河川は７グリッドの旧河川とは異なり、比較的短時間に流路を変更し、その後、10 × 20 ｍほどの三日月湖状の水溜りから湿地へ変化したことが、堆積状況や等高線の配置（図版３）から推測できた。また旧河川は、流れていたときに洪水を起こし遺物包含層であるⅧ層に影響を与えていたことが、川の南岸部で検出した遺物集中 442（図版９）の土器の状態からうかがうことができる。遺物集中 442 では土器片が立った状態で検出され、拳大の円礫がこれに混じることから、急激な水流で撹拌された状況と推測できた。しかし水の影響を受けた地域はこの河川の南岸部だけで、全体的には安定した状態である。

南側調査区で検出した遺構は小型の土坑、ピット、湾曲した短溝、住居の可能性のある遺構（SX169）、遺物集中である。遺構の大部分は 10 ～ 20 ㎝ほどの小ピットである。小ピットにはその位置に幾つかのまとまりが見られるが配置に規則性がないことや、断面形や深さから柱穴とできるものはほとんど見当たらない状況であった。

遺物の出土した遺構には SK446・845、P892・909 がある。SK446 は５～６グリッドにある旧河川の南岸にあり、長楕円形の土坑と思われるが、川の影響を受け西側のプランが判然としない。土器はⅢ群１類の深鉢（図版 29 - ４）とⅢ群７類の鉢（図版 29 - ５）が出土している。SK845、P892・909 からはⅠ群２類土器が出土している。SK845 からは底面に小片が重なるように出土しているが、規則性があるようには見られない。このほかにⅢ群土器が遺物集中 384・385 で出土しているが、いずれもピットの集中か所に隣接していることから小ピット群との関係が推測できる。このように南側調査区では、ピットの多さが目に付く一方、人々の活動内容を推測できる遺構が見当たらず、石器も石鏃、石錐、削器、掻器、石斧、篦状石器などの狩猟具・工作具・加工具は見当たらない。ただしⅢ群土器の時期には北側調査区と同時に利用された可能性が高く、北側調査区の西側が屋外炉や土坑を中心とする作業領域、東側が居住域とすれば、南側調査区はあまり生活感がない領域と表現することができよう。

こうした谷地遺跡の調査成果は、これまでの新潟県内での調査事例では見られない新たな知見を提示したが、一方、これを比較検討できる事例も極めて少ないという県内の状況をも改めて確認できた。『列島における縄文時代集落の諸様相』［縄文時代文化研究会 2001］の当該期を概観すると、新潟県に接する群馬県の集落については、住居は明確な深い掘り込みを有する定形化したものになり、集落の規模は２～３棟の小規模なもので、基本構造は直線的（列状集落）であるとしている［石坂・大工原 2001］。また関東地方に視点を広げてみると、千葉県では、前期の集落は土坑群の集中と墓域としての認識によって特徴付けられ、さらに居住・貯蔵・埋葬といった生活に関わる基本的な要素の組み合わせにより集落というものが存在するならば、「遺跡群」として隣接する遺跡の組み合わせを視野に入れた分析が必要としている［加納 2001］。また埼玉県では、早期末から前期前半では縦列展開を示す小群がしばしば現れる点を指摘し得るが、全体として集落構造に規則性を見いだすことは難しいとしている［渡辺 2001］。東京都では、

前期初頭から前葉の集落について、多摩丘陵では集落規模が小さく１～２軒、多くても５、６軒の規模であることから、東京湾沿岸部では概して集落の規模が小さいことを指摘している［土井・黒尾 2001］。一方、東北地方に目を転じると、山形県では、前期前葉になると一定の地理的な範囲の中で拠点となる大規模集落が成立しており、機能を分有した多用な遺跡間で社会紐帯が形成されつつあったことが推定されるとしている［小林 2001］。

新潟県周辺の状況を考え合わせると、谷地遺跡は、北側調査区東側の定形化しているとは言い難い住居の可能性がある遺構からなる「居住域」と、北側調査区西側の川辺に営まれた屋外炉群と土坑群からなる「作業領域」、南側調査区の「性格が不明な領域」により構成されると要約できる。また他県の状況から、遺跡の周辺地域に谷地遺跡と補完関係にある集落（例えば定形化された住居、墓・貯蔵施設を持つもの）の存在を想定できることから、小林圭一氏が示す「機能を分有した多様な遺跡」［小林 2001］のひとつである可能性がある。今後、調査例が増加した時点で、隣接する遺跡の組み合わせを視野に入れた分析も可能となろう。

6　中　　世

A　層　　序

1）概　　要

試掘確認調査時のデータを参考にⅠ～Ⅴ層に分層した。各調査区の名称は、便宜的に北側拡張部分を「中世北側調査区」、本来の調査区を「中世南側調査区」と呼称する。なお、中世南側調査区の基本層序については、第Ⅲ章1Dでまとめて記載した。Ⅰ層は、中世北側調査区で水田耕作土、中世南側調査区は畑耕作土である。いずれも削平を受けており、その上位には盛土が堆積する。Ⅰ'層は現水田の床土である。Ⅱ層は遺構検出面であるⅢ層との関係から中世の遺物包含層と考えられるが、明確に遺物との関係は把握できない。このⅡ層は場所によって堆積状況が変化するため、調査段階においてⅡa・Ⅱa'・Ⅱb・Ⅱb'層の4層に細分した（第62図）。Ⅲ層は灰オリーブ色粘質土層で遺構検出面である。Ⅳ層はオリーブ黄色粘質土である。Ⅴ層は褐色粘質土である。

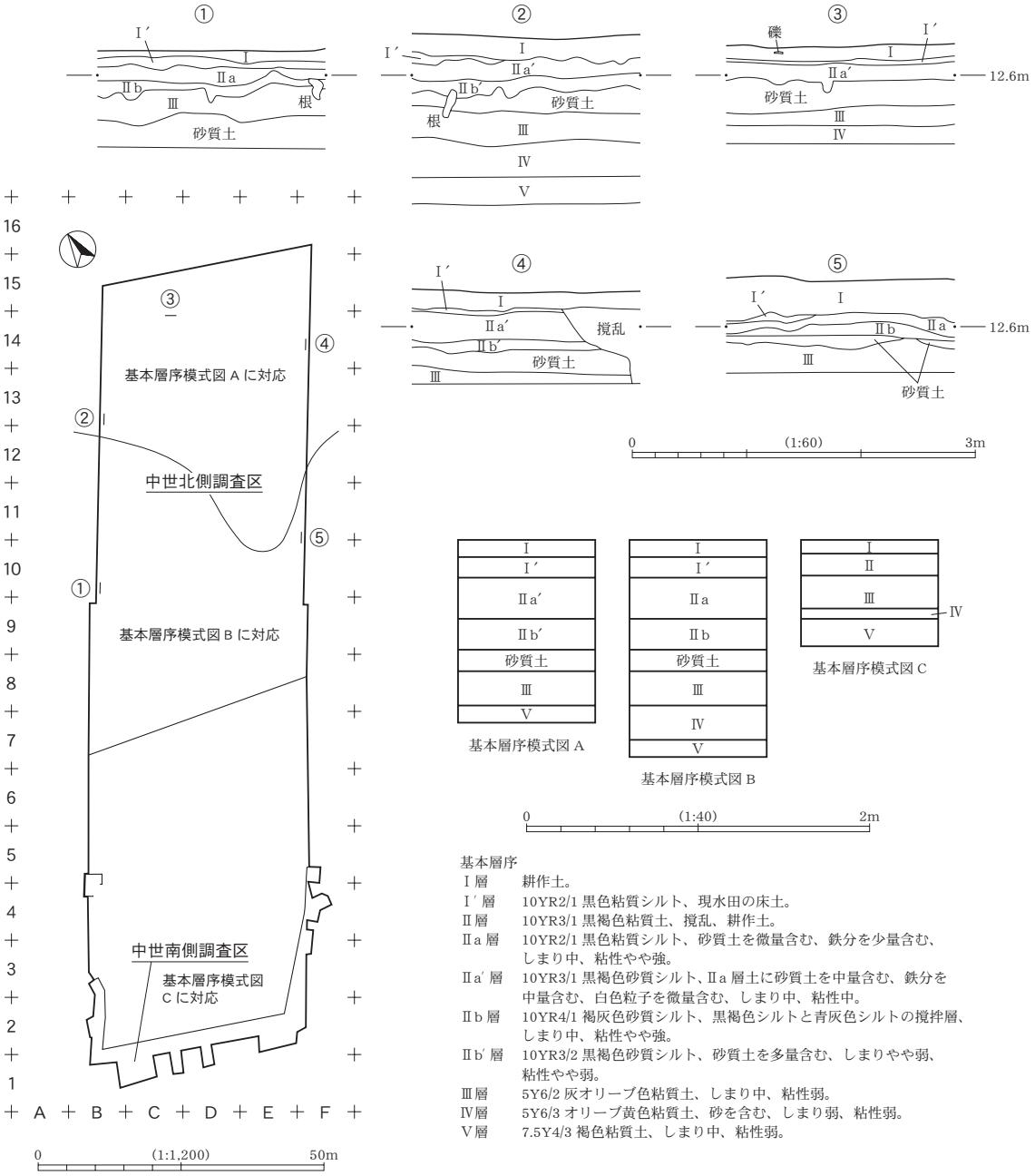
2）基本層序（第62図）

Ⅰ層の厚さは10～50㎝である。直下には現水田の床土であるⅠ'層が薄く堆積する（中世北側調査区）。Ⅱ層は、中世南側調査区では層厚10～15㎝で、畑耕作やその後の撹乱で削平を受け部分的に残っている程度である。中世北側調査区では層厚10～40㎝の黒色粘質土で、東側の一部を除き比較的残りが良い。北側に向かって緩やかに傾斜している。Ⅱ層は層序の関係から遺物包含層と考えたが、遺物は皆無であった。中世北側調査区は土質、色調からⅡa・Ⅱa'・Ⅱb・Ⅱb'層の4層に細分した。中世南側調査区は、堆積が薄いため細分できないが、色調や土質から中世北側調査区のⅡa層に相当すると考えられる。Ⅱa層は、黒色粘質シルトで微量の砂質土が混入し粘性が比較的強い。層厚は5～30㎝で、13Bと10Eグリッドを結んだラインより南側で確認できる。遺構の大半はこの区域で検出しており、覆土の主体層である。Ⅱb層は、褐灰色砂質シルトで、層厚は5～20㎝である。Ⅱa'層は、黒褐色砂質シルト内に鉄分が比較的多く混入した堆積土で、粘性がⅡa層より弱くなる。層厚は10～40㎝である。堆積の範囲（第62図）は、13Bと10Eを結んだラインより北側である。検出した遺構はピットと土坑で、遺構覆土の主体層である。Ⅱb'層は、黒褐色砂質シルトでⅡb層土よりも更に粘性が弱く、砂質土（層）が多量に混入する。層厚は5～20㎝である。中世北側調査区のⅢ層は直上に砂質土が厚く堆積していることから水流で削られたものと推測される。層厚は20～40㎝である。Ⅳ層はオリーブ黄色粘質土で砂を含む。Ⅴ層は褐色粘質土である。標高は中世南側調査区が12.9～13.1m、中世北側調査区が12.7～12.3mで、北側に向かって緩やかに傾斜している。11～13ラインは12.3～12.4mで、周辺より20㎝ほど東西方向に溝状に窪んでいる。

B　遺構各説

1）概　　要

検出した遺構は掘立柱建物1棟、井戸4基、土坑23基、溝11条、ピット72基（掘立柱建物の柱穴以外のピットは65基）である。遺構の帰属時期は中世後期（15世紀代）と推測される。遺構の分布は、SD2042の南側と北側で状況が異なる。南側は遺構が比較的密で掘立柱建物、井戸、土坑、東西と南北に直交する溝、ピッ



第 62 図　谷地遺跡（中世）基本層序

トが分布する。建物（SB1）は、溝と長軸方向が平行または直交し、井戸（SE2030）は建物（SB1）に隣接している。遺構の配置から、屋敷地的な遺構構成が読み取れる。一方、北側は遺構が疎で、ピットも掘立柱建物のように規格性を持つものは検出されなかった。Ⅱ層直下には、旧河川堆積土（中世南側調査区では存在しない堆積土）や、風倒木、木根の痕跡が存在することから、居住域とは積極的に認められず、中世では湿地帯または水田域であると推測される。今回調査した谷地遺跡は中世集落の端に位置していたと考えられる。

2） 掘立柱建物

SB1（図版 44・48・118）

2E グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。調査区内で確認できた規模は梁間２間（3.24m）、桁

行２間以上で側柱建物と考えられる。桁行は西側が２間、東側を１間検出しているが、柱穴の間隔が変則的である。床面積は現状で７㎡である。長軸方向はＮ７°Ｅで、南北棟と考えられる。桁行の柱間隔は1.05 ～ 1.45m、梁間の柱間隔は 1.52 ～ 1.72m である。覆土の状況は、黒褐色砂質シルトのⅡ層土が主体で、客体的に黄褐色シルトブロック（Ⅲ層土）が混入する。柱穴の径は 0.16 ～ 0.32m で、深さは 0.06 ～ 0.4m である。P2023 では柱痕を確認した。柱痕の平面形はほぼ円形で、径は約 0.13m である。覆土は柱痕部分がⅡａ層主体、掘形部分はⅢ層土が主体で、客体的にⅡ層土がブロック状に混入する。P2025 では柱の埋設位置を確認した。断面形が階段状となるピットで、西壁面に寄せて柱が据えられていたと推定できる。出土遺物はない。北に位置する SD2004 とは長軸方向が直交し、本遺構の北東側約３m には SE2030 が位置する。

３）井　　戸

SE2001（図版 48・118）

４Ｂ９・10・14・15、５Ｂ６・11 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。構造は、断面観察から井戸側部分が板組構造であったと推定できる。平面形は検出面で楕円形、中位～下位で隅丸方形である。断面形は漏斗状で上位～中位に掘形を持つ。規模は長軸 2.8m、短軸（1.9）m、深さ 2.85m である。底面の標高は 10m である。覆土は 19 層に分層し１～７層は井戸廃棄時の埋め戻し土である。８～ 19 層は掘形覆土である。井戸側内の埋没状況は、上層（１・２層）はレンズ状堆積で井戸側上部の板材を撤去した後、埋め戻したものと考えられる。中～下層（４～７層）は水平堆積で、７層は腐植土層である。覆土から珠洲焼の甕（２・３）、瓦質土器の擂鉢（１）、下駄（22）、梳櫛（16）、鉤状木製品（20）、曲物の側板（18・21）、不明木製品（17・19）、鉄鍋（10）、鉄釘（11）、硯（15）などが出土した。鉄鍋は４層の埋め戻し土からの出土である。使用時に壁面が崩落した痕跡は認められない。井戸は透水層と考えられる礫層上面まで掘り込んでいる。P2010・2011・2012 と重複し、これらより古い。帰属時期は甕の特徴から 15 世紀後半と考えられる。

SE2016（図版 49・119）

５B18･19･24 グリッドに位置する。Ⅷ層上面で検出した。素掘りの井戸と考えられる。平面形は円形、断面形は箱状で南西側の一部に段を持つ。規模は長軸 1.06m、短軸 0.92m、深さ 1.18m であるが、中世の掘り込み面であるⅢ層上面から深さを推定すると約 2.6m である。底面の標高は 10.2m である。覆土は４層に分層した。埋没状況は水平堆積で人為的な埋め戻し土である。覆土から青磁の椀（４）、下駄（26・27）、木槽（29）、棒状木製品（23・24・31・33）、杭状木製品（32・44）、板状木製品（36・37）、建物部材・柱材（34・38 ～ 43・45）、箱状木器（28）、杭（30・46）、板材（35）、浮子（25）、砥石（13）、被熱礫（47 ～ 50）が出土した。遺物は１層から木製品のみが出土した。２・３層は木製品と被熱礫が出土した。木製品には、炭化した建物の部材が多い。３層からは青磁の椀も出土した。体部を意図的に打ち欠いた痕跡が見られる。４層は腐植土層で遺物は皆無である。壁面はほぼ垂直に立ちあがり、一部崩落した痕跡が認められる。底面から 0.25m 上の壁面には、水平方向に掘った横穴が２か所並列する。規模は幅 0.22m、高さが 0.12m、奥行が 0.05m である。帰属時期は龍泉窯系の青磁椀の特徴から 15 世紀後半と考えられる。

SE2017（図版 49・119）

６Ｄ３・４・８・９グリッドに位置する。Ⅷ層上面で検出した。縄文時代の調査により遺構上部は削平され、残存していた部分は井戸の最下部であるため全体の構造は不明である。平面形は円形で、断面形は弧状で

ある。残存規模は長軸 0.78m、短軸 0.68m、深さ 0.21m である。中世の掘り込み面であるⅢ層から推定すると、深さは約 1.7m ほどであったものと考えられる。底面の標高は 11.1m である。覆土は２層に分層した。覆土から珠洲焼の擂鉢（5）、礫が出土した。珠洲焼の擂鉢片の出土位置から考えると、井戸の径は今回検出した掘り込み部分よりさらに広がっていたことが明らかである。検出した部分は水溜め施設の窪み部分である可能性が高い。壁面の状況は不明である。帰属時期はⅥ期に比定される珠洲焼から 15 世紀後半と考えられる。

SE2030（図版 44・49・119・120）

２E25、３E21 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形は検出面でほぼ円形、中位～下位にかけて隅丸方形である。断面形はU字状である。構造は素掘りの井戸と考えられるが、中位以下が隅丸方形であることから井戸側が附設された可能性がある。規模は長軸 1.39m、短軸 1.26m、深さ 2.2m である。底面の標高は 10.7m である。覆土は 16 層に分層した。埋没状況は上層の１～８層がブロック状堆積の黒褐色シルトが主体である。中層の９・10 層はレンズ状堆積、下層の 11 ～ 16 層は水平堆積で砂質土や小礫が主体である。出土遺物はない。上位の壁面は、地山の砂質層が流出したため、ほぼ全周にわたりⅢ層土が崩落していた。下位（12 ～ 16 層）の部分は、上位より径が小さくなっており水溜め部分であったと考えられる。本遺構は SE2001 と同様、透水層と考えられる礫層を掘り貫いている。帰属時期は SB1 の覆土と本遺構の最終埋没土（１層）が類似していることから中世と考えられる。

４） 土　　坑

SK2006（図版 45・49）

７C25、７D ５グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形は遺構の南側が削平されているため不明である。断面形は半円状である。規模は長軸 0.72m、短軸（0.25）m、深さ 0.36m である。覆土は３層に分層した。Ⅱａ層土が主体となる。出土遺物はない。

SK2008（図版 45・49）

７C25、７D ５グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形は長楕円形で、断面形は弧状である。規模は長軸 0.7m、短軸 0.46m、深さ 0.14m である。覆土は２層に分層した。Ⅱａ層土が主体となる。出土遺物はない。

SK2020（図版 44・49）

４F １グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形は円形で、断面形は台形状である。規模は長軸（0.92）m、短軸（0.82）m、深さ 0.28m である。覆土は単層で、Ⅱａ層土が主体である。出土遺物はない。

SK2041（図版 45・50・120）

８D ７～９・12 ～ 14 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形は隅丸方形で、断面形は台形状である。規模は長軸 3.17m、短軸 3.05m、深さ 0.66m である。壁面の状況は全体的に急傾斜である。床面は、ほぼ平坦である。覆土は 11 層に分層した。上層の１・２層はブロック状の堆積土、中～下層（３層～ 10 層）はレンズ状堆積土であるが人為的埋め戻し土である。最下層（11 層）は自然埋没土で、遺物はすべてこの層から出土した。珠洲焼の甕（6・7）、棒状木製品（52）、そのほか磨石（14）、モモの種子（51）、枝状の自然木などが出土した。帰属時期はⅥ期に比定される珠洲焼が出土したことから、15 世紀後半と考えられる。

SK2045（図版 45・49）

９C17 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形は長楕円形で、断面形は階段状である。規模は長軸 0.62m、短軸 0.33m、深さ 0.26m である。覆土は３層に分層した。１層はⅡａ層土が主体である。出土遺物はない。

SK2048（図版 45・49）

７D10、８D ６グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形は長楕円形で、断面形は弧状である。規模は長軸 1.44m、短軸 0.6m、深さ 0.1m である。覆土は単層でⅡａ層土が主体である。出土遺物はない。

SK2053（図版 45・50）

９C13・18 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。中央部にピット状の浅い掘り込みを伴う。規模は長軸 1.3m、短軸 0.9m、深さ 0.3m である。覆土は７層に分層した。１、２層はⅡａ層土が主体である。出土遺物はない。

SK2064（図版 45・49）

10B11・16 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形は長楕円形で、断面形は弧状である。規模は長軸 0.55m、短軸 0.22m、深さ 0.05m である。覆土は単層で、Ⅱａ層土が主体である。出土遺物はない。

SK2078（図版 46・50）

10D19･24 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形は隅丸長方形で、断面形は台形状である。規模は長軸（１）m、短軸 0.7m、深さ 0.26m である。覆土は２層に分層した。１層はⅡａ層土が主体である。出土遺物はない。SK2079 と重複し、これより古い。

SK2079（図版 46・50）

10D19・24 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形は楕円形で、断面形は箱状である。規模は長軸 0.66m、短軸 0.5m、深さ 0.13m である。覆土は２層に分層した。１層はⅡａ層土が主体である。出土遺物はない。SK2078 と重複し、これより新しい。

SK2080（図版 46・50）

11B17・22 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形は長楕円形で、断面形は階段状である。規模は長軸 0.8m、短軸 0.3m、深さ 0.22m である。覆土は単層でⅡａ層土が主体である。出土遺物はない。

SK2086（図版 46・50）

11C20 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形は長楕円形で、断面形は箱状である。規模は長軸 0.6m、短軸 0.4m、深さ 0.1m である。覆土は２層に分層した。１層はⅡａ層土が主体である。出土遺物はない。

SK2093（図版 46・50）

11D13・18 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形は隅丸方形で、断面形は弧状である。規模は長軸 0.94m、短軸 0.82m、深さ 0.18m である。覆土は６層に分層した。４層はⅡａ層土が主体である。出土遺物はない。

SK2100（図版 47・50）

13C ８･13･14 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形は長楕円形で、断面形は弧状である。北側は浅いテラス状になる。規模は長軸 1.08m、短軸 0.62m、深さ 0.12m である。覆土は単層で、Ⅱａ'層土が主体である。出土遺物はない。

SK2107（図版 47・50）

13E 2 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形は長楕円形で、断面形は弧状である。規模は長軸 0.6m、短軸 0.38m、深さ 0.16m である。覆土は 2 層に分層した。1 層はⅡ a' 層土が主体である。出土遺物はない。

SK2131（図版 47・51）

13D20・25 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形は長楕円形で、断面形は台形状である。規模は長軸 0.58m、短軸 0.22m、深さ 0.25m である。覆土は単層で、Ⅱ a' 層土が主体である。出土遺物はない。

SK2134（図版 46・51）

11D24・25 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形は長楕円形で、断面形は台形状である。規模は長軸 1.12m、短軸 0.62m、深さ 0.32m である。覆土は 4 層に分層した。出土遺物はない。

5） 溝

SD2002（図版 44・51・120）

2B グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。西側は調査区外へ伸びる。長さ（2.4）m、幅 1.15m、深さは 0.52m である。断面形は台形状で、長軸方向は N83° W である。覆土は 5 層に分層した。底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

SD2003（図版 44・51・120）

1C、2C グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。南側は調査区外へ伸びる。北側に位置する SD2002-2004 とは T 字状に交わっているものと考えられる。長さ(6.4)m、幅 1.2m、深さは 0.2m である。断面形は台形状である。長軸方向は N11° E ～ N20° E で北側はやや東方に偏る。覆土は 3 層に分層した。底面はほぼ平坦で、地形に逆行して北から南に向かって緩やかに傾斜する。遺物は詳細不明の土器片が出土した。SD2013 と重複し、これより古い。

SD2004（図版 44・51・120）

3F、4F グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。東側は調査区外へ伸びる。長さ(2.57)m、幅 1.3m、深さは 0.36m である。断面形は台形状で、長軸方向は N79° W である。覆土は 4 層に分層した。底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

SD2005（図版 44・51・121）

4F グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。東側は調査区外へ伸びる。長さ（4.7）m、幅 1.26m、深さは 0.24m である。断面形は台形状で、長軸方向は N79° W である。底面はほぼ平坦である。遺物は 2 層から青磁の小杯（8）が出土した。T 字状に交わる SD2058 とは、土層観察から同時期に機能した溝であると考えられる。覆土は SD2058 と合わせ 7 層に分層した。帰属時期は龍泉窯Ⅰ類に類似した青磁小杯の特徴から 15 世紀前半と考えられる。

SD2007（図版 45・51・121）

8D・E グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。長さ（8.7）m、幅 1.64m、深さは 0.65m である。断面形は台形状で、長軸方向は N13° E である。底面はほぼ平坦で、地形に沿って南から北に向かって緩やかに傾斜する。出土遺物はない。SD2042 とは T 字に交わり、断面観察から同時期に存在していた溝である。覆土は SD2042 と合わせ 28 層に分層した。

SD2013（図版 44・51・121）

1B・C グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。東、西側は調査区外のため、全貌は不明である。長さ（5）m、幅（0.76）m、深さは 0.26m である。断面形は弧状である。長軸方向は N70° W ～ N83° W で、西側は南方にやや偏る。覆土は 3 層に分層した。底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。SD2003 と重複し、これより新しい。

SD2034（図版 44・51・121）

1B、2B グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。長さ 2.5m、幅 0.48m、深さは 0.1m である。断面形は台形状である。長軸方向は N 0°～ N 7° E で、北側は東方にやや偏る。覆土は単層で、底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。P2039 と重複し、これより古い。

SD2042（図版 45・51・121）

8B・C・D、9D・E グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。東、西側は調査区外のため、全貌は不明である。長さは（27.68）m、幅 1.32m、深さは 0.7m である。断面形は台形状である。長軸方向は N73° W ～ N83° W で、西側は南方にやや偏る。底面はほぼ平坦で、東から西に緩やかに傾斜する。遺物は 26 層から白磁の皿（9）が逆位で 1 点出土したほか、枝状の自然木が 1 点出土している。T 字状に交わる SD2007 とは覆土の状況、規模、形状から同時期に機能していたものと考えられる。覆土は SD2007 と合わせ 28 層に分層した。帰属時期は白磁皿の特徴から 15 世紀前半と考えられる。

SD2056（図版 47・52）

15B・C・D・E、16E グリッドに位置する。近・現代の溝の可能性が高い。Ⅰ' 層直下で検出した。東、西側は調査区外のため全貌は不明である。長さ（33.06）m、幅 3.31m、深さは 0.92m で、断面形は半円状である。長軸方向は N70° W である。覆土は 18 層に分層した。底面はほぼ平坦で、東から西に傾斜する。出土遺物はない。SD2057 と重複し、これより古い。

SD2057（図版 47・52）

14D・E・F、15C・D・E・F グリッドに位置する。近・現代の溝である。Ⅰ' 層直下で検出した。東、北西側は調査区外のため全貌は不明である。長さ（26.9）m、幅 4.06m、深さは 0.72m である。断面形は半円状である。長軸方向は N22° W ～ N49° W で、西側は北西方向に緩やかに曲がる。覆土は 11 層に分層した。底面はほぼ平坦で、東から北西に緩やかに傾斜する。出土遺物はない。SD2056 と重複し、これより新しい。

SD2058（図版 44・51・121）

4F、5F グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。長さ（6.4）m、幅 1.1m、深さは 0.2m である。断面形は弧状である。長軸方向は N 7° E で、底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。また、SD2005 とは T 字状に交わり、土層観察から同時期に機能した溝と考えられる。覆土は SD2005 と合わせ 7 層に分層した。

6）ピ　ッ　ト（図版 52）

ピットは 72 基（うち掘立柱建物の柱穴は 7 基）を検出した。中世南側調査区では、掘立柱建物、井戸、溝、土坑の周辺に位置するものが比較的多い。P2010 ～ 2012・2039 は井戸や溝と重複関係にあり、いずれもピットが新しい。中世北側調査区では、11C・14E グリッド周辺で比較的まとまって検出したが、建物にできるようなピットの規則性は確認できなかった。ピットの規模は、径が 0.1 ～ 0.46m で 0.2m 前後

のものが主体をなす。深さは 0.06 ～ 0.48m で 0.2m 前後のものが主体となる。ピットからの出土遺物はない。

C 遺　　物

1） 概　　要

本遺跡から出土した土器・陶磁器類の総数は 29 点である。そのうち中世段階のものは 25 点で、その大半は井戸内に投棄されたものである。器種別には土師質土器が試掘調査で２点、瓦質土器は擂鉢が SE2001 から１点出土しており、特徴から 15 世紀後半に位置付けられる。施釉陶器は瀬戸・美濃焼の供膳具が試掘調査で２点、ほかには越前焼と珠洲焼が出土した。越前焼は甕片で SE2001 から１点、試掘調査で２点と合わせて３点出土した。珠洲焼はVI期に属し SE2001 から甕片が４点、SE2017 から擂鉢片が１点、SK2041 から甕片が４点、試掘調査で６点と合わせて 15 点出土しており 15 世紀後半のものである［吉岡 1994］。陶磁器は青磁が SE2016 から椀が、SD2005 から小杯が、試掘調査で椀が各１点と合わせて３点出土した。白磁は SD2042 から皿が１点出土した。SE2016 の青磁椀と SD2005 の青磁小杯は龍泉窯系で 15 世紀代のものである。また SE2016 の青磁椀は破損状況から体部を意図的に打ち欠いた痕跡がある。SD2042 の白磁皿片は 15 世紀前半に位置付けられ、一部人為的に打ち欠いた痕跡が見られる。自然の割れ面には漆が付着しており補修した痕跡がある。両者とも高台部分の内側にはそれぞれ墨痕や漆痕が明瞭に残っていることから、本来とは違う用途に二次利用されたと考えられる。

2） 各　　説

a） 分類と記述の方法

各遺物の分類・編年については、珠洲焼は［吉岡 1994］、輸入陶磁器は［横田・森田 1978］、15 世紀以降の青磁は［上田 1982］、15 世紀以降の白磁は［森田 1982］を参考にした。また、器面調整についてはカタカナで表記した。

b） 土器・陶磁器類

SE2001（図版 53・122 - 1 ～ 3）

瓦質土器の擂鉢が１点（1）、珠洲焼の甕が２点（2・3）出土した。１は体部片である。内面には１単位３条以上の卸し目がある。15 世紀後半のものと考えられる。２は口縁部から胴部片である。内面はあて具痕が、外面は横幅約６㎝の平行タタキである。時期はVI期と考えられる。３は口縁部から胴部片である。内面はナデ調整で、外面胴部は平行タタキである。外面口縁部から頸部にも一部平行タタキがある。時期はVI期と考えられる。

SE2016（図版 53・122 - 4）

青磁椀が１点（4）出土した。高台部と体部の約半分が残存する。体部の割れ口部分を人為的に打ち欠いている。高台内部の一部には墨痕がある。体部外面には蓮弁文、内面は無文である。全体に暗緑色の釉が厚くかかる。龍泉窯系で 15 世紀後半のものと考えられる。

SE2017（図版 53・122 - 5）

珠洲焼の擂鉢が１点（5）出土した。体部片で内面全体に１単位９条の卸し目が入る。時期はVI期と考えられる。

SK2041（図版 53・122 - 6 ・ 7）

珠洲焼の甕が２点（6・7）出土した。6 は胴部片である。内面は指ナデ調整で、外面は平行タタキである。内面の一部に漆が付着している。時期はⅥ期と考えられる。 7 は口縁部から胴部片である。口縁部は短く外反する。内面は指ナデ調整で、外面は平行タタキである。内面胴部には漆が付着する。防水効果を図るために意図的に塗布している可能性がある。時期はⅥ期と考えられる。

SD2005（図版 53・122 - 8）

青磁の小杯が１点（8）出土した。高台部片である。内面底部に草花文がある。外面底部を除き施釉される。時期は龍泉窯Ⅰ類と類似していることから 15 世紀前半と考えられる。

SD2042（図版 53・122 - 9）

白磁の皿が１点（9）出土した。高台部から体部の一部が残存する。割れ口の一部を意図的に打ち欠いた痕跡がある。外面は施釉部分と高台部分を除き漆が付着する。特に高台内部は漆が厚く付着する。打ち欠き痕以外の割れ口部分には、漆接ぎの痕跡がある。時期は 15 世紀前半と考えられる。

c） 金 属 製 品

SE2001・試掘３トレンチ （図版 53・122 - 10 ～ 12）

SE2001 から鉄鍋が１点（10）、鉄釘が１点（11）、試掘３トレンチから銭貨が１点（12）出土した。10 は口縁部片である。「く」の字に屈曲する。内耳が付くＣ型に該当する可能性が高い［五十川 1992］。11 は断面形が長方形で、頭部上端は平坦である。12 は「寛永通寶」である。初鋳年は、1,726（享保 11）年の新寛永で「通」は不鮮明である。

d） 石　製　品

SE2001 （図版 53・122 - 15）

硯が１点（15）出土した。長方形の小型硯である。陸部の一部が残存する。海部はすべて欠損する。陸部には墨痕と二次的に加工された溝状の窪みがある。正面には破損した部分を修復した調整痕がある。裏面と側面部に鋸による切出し痕がある。石質はシルト岩である。

SE2016（図版 53 - 13・図版 123 - 47 ～ 50）

砥石が１点（13）、被熱礫が４点（47 ～ 50）出土した。13 は全体に被熱しススが付着する。割れ面の左右端には摩耗痕があり、左縁は幅 0.5 ㎝、長さ 10.3 ㎝、右縁は幅 0.2 ㎝、長さ 7.5 ㎝である。被熱で割れた後、砥石として再利用したものと考えられる。石質は砂岩である。47 は円形の扁平礫で、ほぼ全面被熱している。被熱で縁部の半分以上が欠ける。石質は花崗岩である。48 は円礫である。片側のみが被熱し炭化物が付着する。石質は花崗岩である。49 はほぼ全面被熱しているが、一部ススが被熱で飛んで斑紋状になる。石質は花崗岩である。50 は片側のみ被熱する。石質は花崗岩である。

SK2041（図版 53・122 - 14）

磨石が１点出土した。一部被熱した扁平礫を使用している。用途は不明である。石質は閃緑岩である。

e） 木　製　品

SE2001（図版 53・54・122 - 16 ～ 22）

櫛が１点（16）、木片が１点（17）、曲物側板が２点（18・21）、不明木製品が１点（19）、鉤状木製品が

1点（20）、下駄が1点（22）出土した。16は櫛歯が密な梳櫛である。歯数は46本で幅7.1㎝である。樹種はイスノキである。17は下端のみが炭化する。付け木の可能性がある。18は両面とも平滑に削られている。正面上端部分には釘穴が1か所ある。曲物の側板と考えられる。片面にケビキがある。19は芯持材で径は2㎝前後である。下半は軸に沿って丁寧に削られている。一部樹皮が残る。下端は斜めに削り先端を尖らせている。20は2個体に分かれ出土した。接合しないが同一材である。長さは下部が46.4㎝、上部が28.8㎝で合わせると約75㎝である。各部位の長さは棒状部分が約73㎝、鉤状部分は2つの部位に分かれ、湾曲部分が約8㎝、先端部分が9㎝である。棒状部分は軸に沿って丁寧に削り出している。径は約2.4㎝である。湾曲部分は使用の痕跡が著しく、細くなっている。先端部分は四角錐状に削り出し先を尖らせている。21は曲物の側板である。幅0.6㎝の綴じ目用の穴があり、両面は平滑に丁寧に削られている。一部欠損している。22は台部に差歯の枘穴を4か所貫通させた露卯下駄である。台部は一部欠損しているがほぼ完形で、平面形は長楕円形である。差歯の部分は出土していない。鼻緒の穴はほぼ垂直に貫通しているが、下の2か所の穴は内傾している。この穴は鑿で裏面から穿っている。樹種はモクレン属である。

SE2016（図版54・55・122・123 - 23 ～ 46）

棒状木製品が4点（23・24・31・33）、有頭状の浮子が1点（25）、下駄が2点（26・27）、箱状木製品の部材が1点（28）、大型木槽が1点（29）、杭が2点（30・46）、杭状木製品が2点（32・44）、建築部材が11点（34 ～ 43･45）出土した。23は全面を工具で削った丁寧な調整痕がある。断面形は円形で、径は3.1㎝である。上部の約2.9㎝分は0.2㎝分を削り落して段差を作る。この部分は、ほぼ全周に擦痕のような横線が無数に確認でき、後述する24と同様、紐が巻かれていた可能性がある。さらに、一側面には軸方向に長さ2.6㎝、幅0.8㎝、深さ1.6㎝の断面U字状の溝が直線的に彫られている。下端は炭化している。上・下端部は欠損している。用途は機織具の部材と考えられる。24は全面を工具で削った丁寧な調整痕がある。断面形はほぼ円形で、径は3㎝である。上部は0.2㎝分を削り落して段差を作る。この段差部分には、紐が何重にも巻かれていた。下部は、0.2㎝分を削り落して段差を作り先端部に向かって細く加工している。径は1.8㎝である。一側面は、上端から下端まで軸方向に沿って断面U字状の溝が直線的に彫られている。この溝の長さは11.7㎝、幅0.8㎝、深さ1.7㎝である。上端部は欠損、下端部は一部欠損している。用途は23同様機織具の可能性がある。31の上端は刃物で斜めに切断されている。側面は刃物で削っているが一部樹皮が残存する。下端は炭化している。33の先端は一部を削り尖らせている。全体に腐食が著しく、上端の尖った部分と側面部分の調整痕は不明である。25は丸材で一部に樹皮が残る。上端部は頭部を作出すために抉られている。断面形はほぼ円形で、抉った部分は多角形になる。26は連歯下駄である。右側約1/3は欠損している。台部表面は一部炭化している。歯幅は3.5㎝で片側が擦り減っている。樹種はモクレン属である。27は小型で高歯の連歯下駄である。一部欠損している。長さ14.2㎝、幅7.8㎝、高さ4.4㎝である。歯幅は約3㎝で右側が若干擦り減る。歯は台部から削り出した痕跡が明瞭に残る。樹種はクリである。28は箱状木製品の側板と考えられる。ほぼ方形の板材で、竹釘穴が上・下端部に各3か所（合計6か所）ある。上・下端の片穴には竹釘が残る。竹釘の突起の状況から推定すると厚さ0.7㎝以上の板材と組まれていた可能性があるが、該当する板材は出土しなかった。29は巨木を刳り貫いた大型木槽である。残存部分は、底面と左側小口面と大口面の一部である。そのほかの部位は焼失している。大きさを復元すると長辺63㎝、短辺37㎝、深さ18㎝である。底面部分は長辺35㎝、短辺21㎝、厚さは6㎝である。小口面の内側は、鑿による調整痕が明瞭に残る。内面底部と外面は、遺存状況が悪く調

整痕は確認できない。樹種はマツ属である。30 は上部は炭化しており、先端に向かって削り出し、断面は方形を呈している。46 は上端部と先端部の一側面を残し欠損している。残存している側面には加工痕があり細く尖らせている。全体に炭化している。32 は上端部を斜めに切断している。枝の周りには樹皮が残る。下部は炭化している。44 の上端部は四方から刃を入れて折られている。側面部は削られ平滑になっている。断面形はほぼ円形である。全体に炭化している。34 は上部が著しく炭化する。工具痕が残る。下端の小口面は両側から切断されている。上端の小口面は炭化し旧状を留めない。43 は割材である。割った面と上端部が炭化している。下部は加工痕があるが、側面の一部には自然面が残る。全体に腐食が著しい。35 は両面とも刃物で平滑に加工されている。両側面は弱く炭化、上端部も炭化している。36 は正面が炭化し､左側面は工具痕がある。37 は長押材の板材と考えられる。正面は工具で削って平滑にする。両端と裏面は炭化している。38 は下端が切断され、一部炭化している。上端は炭化が著しく旧状を留めない。柱材と考えられる。39 の上端部は切断痕がある。そのほかの面には明確な加工痕は確認できない。先端部分は先細りになっている。裏面は炭化し旧状を留めない。正面も上半部は炭化している。柱材と考えられる。40 は割材で断面は厚い。両面が炭化している。遺存状況は下端の小口面は節の部分で終わり、上端の小口面は腐食して折れている。柱材と考えられる。41 は芯持材である。３面は加工されているが１面は自然面が残る。総体的に断面角柱状である。全体が炭化している。柱材と考えられる。42 は表面に工具痕が残り、上・下端と両側面が炭化している。柱材と考えられる。45 は芯持材で断面を七角形に加工している。腐食が著しく小口面の両端は折れている。約半分が炭化している。柱材と考えられる。

SK2041（図版 123）

種子が１点（51）、棒状木製品が１点（52）出土した。51 はモモの種子である。52 の下端は斜めに切断されている。上端は折れている。

D　自然科学分析

1）　分析目的と試料

古植生や植物利用の検討を目的として分析を実施した。試料は SK2041 の 11 層、SD2042 の土壌（15 層の黒褐色粘質土　8 D25 グリッド）、SE2001 の木製品、SE2016 覆土の水洗選別による炭化物、木製品である。木製品のうち SE2016 の 41 と未掲載遺物 1 点には炭化が認められたため、当該部分より試料を採取した。SK2041・SD2042 の覆土試料を対象に花粉分析、SD2042 の 15 層試料を対象に植物珪酸体分析、SK2041・SE2016 の炭化物について微細物分析、種実遺体同定、木製品の樹種同定、SE2001 の木製品については樹種同定を行った（分析方法は第Ⅲ章４A を参照）。

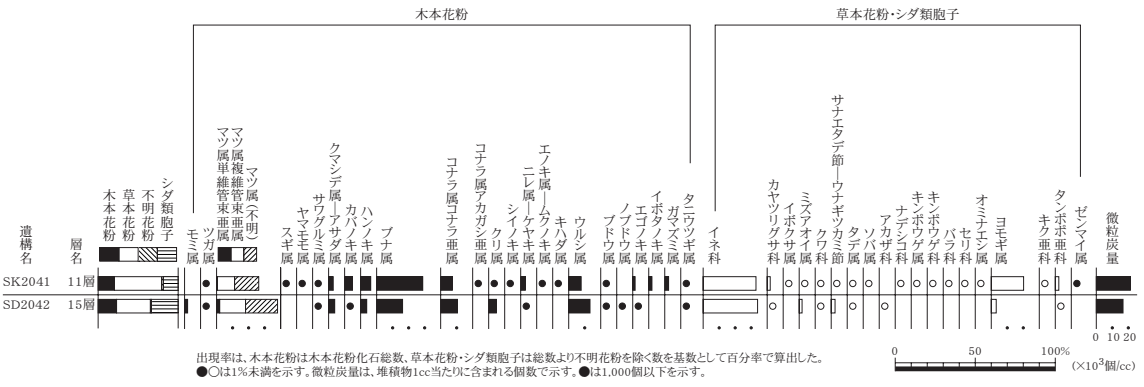
2）　結　　果

a）　花 粉 分 析

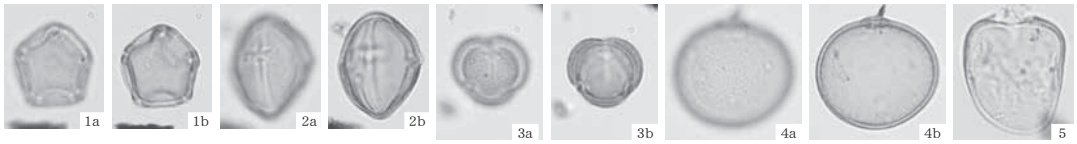
結果を第 13 表、第 63・64 図に示した。花粉化石群集組成が類似し、草本花粉の割合が高い。イネ科が多産し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、サナエタデ節 - ウナギツカミ節等を伴う。水湿地生植物であるイボクサ属、ミズアオイ属や栽培種のソバ属に由来する花粉も検出した。木本花粉では、マツ属・ブナ属が多産し、コナラ属コナラ亜属、ウルシ属、クマシデ属 - アサダ属、ハンノキ属等を伴う。微粒炭量は SK2041 の 11 層は約 21,300 個 /cc、SD2042 の 15 層は約 16,700 個 /cc である。

種　類 ＼ 試料名	SK2041 11層	SD2042 15層
木本花粉		
モミ属	-	2
ツガ属	1	1
マツ属単維管束亜属	1	2
マツ属複維管束亜属	22	17
マツ属(不明)	31	21
スギ属	1	-
ヤマモモ属	1	-
サワグルミ属	2	1
クマシデ属－アサダ属	6	4
カバノキ属	10	1
ハンノキ属	13	4
ブナ属	59	17
コナラ属コナラ亜属	15	11
コナラ属アカガシ亜属	1	-
クリ属	1	5
シイノキ属	1	-
ニレ属－ケヤキ属	6	1
エノキ属－ムクノキ属	2	-
キハダ属	1	-
ウルシ属	16	14
ブドウ属	1	1
ノブドウ属	-	1
エゴノキ属	3	1
イボタノキ属	4	-
ガマズミ属	5	-
タニウツギ属	2	1
草本花粉		
イネ科	324	153
カヤツリグサ科	19	2
イボクサ属	1	-
ミズアオイ属	9	8
クワ科	6	2
サナエタデ節－ウナギツカミ節	1	11
タデ属	1	1
ソバ属	1	-
アカザ科	-	1
ナデシコ科	1	-
キンポウゲ属	1	-
キンポウゲ科	1	-
セリ科	1	-
オミナエシ属	1	-
ヨモギ属	198	14
キク亜科	1	-
タンポポ亜科	22	1
不明花粉	22	6
シダ類胞子		
ゼンマイ属	2	-
他のシダ類胞子	185	152
合　計		
木本花粉	205	105
草本花粉	589	193
不明花粉	22	6
シダ類胞子	187	152
総計(不明を除く)	981	450
1cc当たりの微粒炭量[個]	21,300	16,700

第 13 表　花粉・微粒炭分析結果



第 63 図　花粉化石群集



1.ハンノキ属(SK2041:11層)　2.ウルシ属(SK2041:11層)　3.ヨモギ属(SK2041:11層)
4.イネ科(SK2041:11層)　5.カヤツリグサ科(SK2041:11層)

第 64 図　花粉化石

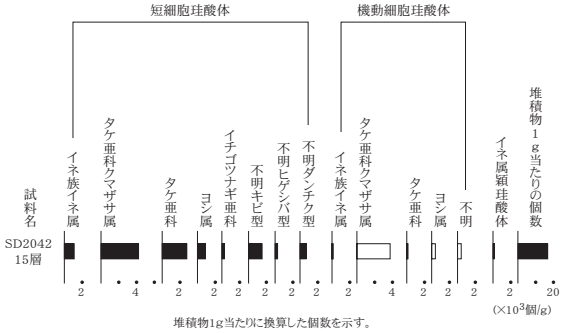
b)　植物珪酸体分析

結果を第 14 表、第 65・66 図に示した。植物珪酸体含有量は約 16,700 個 /g で、クマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、イチゴツナギ亜科も検出した。栽培植物ではイネ属を検出した。珪酸体の含有量は短細胞珪酸体が約 1,100 個 /g、機動細胞珪酸体と穎珪酸体はそれぞれ約 100 個 /g である。

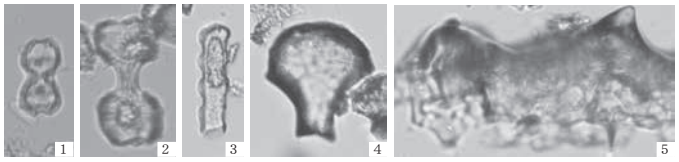
(個/g)

種　類 ＼ 試料名	SD2042 15層
イネ科葉部短細胞珪酸体	
イネ族イネ属	1,100
タケ亜科クマザサ属	4,200
タケ亜科	2,800
ヨシ属	900
イチゴツナギ亜科	300
不明キビ型	1,500
不明ヒゲシバ型	300
不明ダンチク型	700
イネ科葉身機動細胞珪酸体	
イネ族イネ属	100
タケ亜科クマザサ属	3,700
タケ亜科	100
ヨシ属	400
不明	400
珪化組織片	
イネ属穎珪酸体	100
合　　計	
イネ科葉部短細胞珪酸体	11,800
イネ科葉身機動細胞珪酸体	4,800
珪化組織片	100
総　計	16,700

第 14 表　植物珪酸体含量



第 65 図　植物珪酸体含量



1.イネ属短細胞珪酸体(SD2042:15層)
2.ススキ属短細胞珪酸体(SD2042:15層)
3.イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(SD2042:15層)
4.イネ属機動細胞珪酸体(SD2042:15層)
5.イネ属穎珪酸体(SD2042:15層)

第 66 図　植物珪酸体・灰像分析プレパラート内の状況

c)　微細植物片分析

結果を第 15 表、第 67 図に示した。SK2041 の 11 層から木本 2 分類群 5 個、草本 17 分類群 240 個を検出し、栽培植物のイネの穎 17 個（1 個炭化）、シソ属 5 個を確認した。SE2016 の水洗選別試料（水洗①・③・⑧）からは草本 14 分類群 109 個を検出し、栽培植物のイネの炭化胚乳 9 個（1 個穎付着）、マメ類の炭化種子 1 個を確認した。

d)　樹 種 同 定

結果を第 16 表、第 68 ～ 70 図に示した。木製品は、針葉樹 2 種類（マツ属複維管束亜属、マツ属単維管束亜属）と広葉樹 5 種類（コナラ属コナラ亜属コナラ節、クリ、ケヤキ、モクレン属、イスノキ近似種）に同定された。

分類群	部位/状態		SK2041 11層 土壌	SE2016 炭化物*
木本				
クワ属	種子		2	-
ツツジ科	種子		3	-
草本				
イネ	胚乳	完形　炭化	-	5
		破片　炭化	-	3
	胚乳・穎	破片　炭化	-	1
	穎	完形	1	-
		破片	15	-
		破片　炭化	1	-
エノコログサ属	果実		3	1
イネ科	果実		31	-
カヤツリグサ科	果実		4	4
イボクサ	種子		4	-
ミズアオイ属	種子		2	-
カナムグラ	種子	完形	-	4
		破片	-	1
サナエタデ近似種	果実		7	6
タデ属	果実	完形	26	2
		破片	83	1
アカザ科	種子		-	24
ヒユ科	種子		-	3

分類群	部位/状態		SK2041 11層 土壌	SE2016 炭化物*
草本				
ナデシコ科	種子		21	44
アブラナ科	種子		3	-
キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属	核		-	1
マメ類	種子	完形　炭化	-	1
カタバミ属	種子		-	6
スミレ属	種子		3	-
チドメグサ属	果実		-	1
サクラソウ科	種子		-	1
イヌコウジュ属	果実		14	-
シソ属	果実		5	-
トウバナ属	果実		1	-
シロネ属	果実		4	-
メナモミ属	果実	完形	4	-
		破片	4	-
キク科	果実		4	-
炭化材			12	-
			<0.01g	-
昆虫			0.5cc	-
		分析量	200cc	-
			427.5g	-

* SE2016 水洗①･③･⑧ 炭化物より検出された種実遺体を対象としている。

第 15 表　微細植物片分析結果

1.クワ属 種子(SK2041:11層)　2.ツツジ科 種子(SK2041:11層)　3.イネ 胚乳(SE2016)　4.イネ 穎(SK2041:11層)
5.イネ科 果実(SK2041:11層)　6.イボクサ 種子(SK2041:11層)　7.カナムグラ 種子(SE2016)　8.サナエタデ近似種 果実(SK2041:11層)
9.タデ属 果実(SK2041:11層)　10.アカザ科 種子(SE2016)　11.ナデシコ科 種子(SE2016)　12.マメ類 種子(SE2016)
13.シソ属 果実(SK2041:11層)

第 67 図　種実遺体

遺構名	遺物№	備　考	木　取	樹　種	備　考
SE2001	22	差歯下駄(露卯)	柾目	モクレン属	
	16	梳櫛	割材	イスノキ近似種	
	20	鉤状木製品	丸材	クリ	
SE2016	29	大型木槽	割材	マツ属複維管束亜属	
	41	柱材	芯持材	マツ属複維管束亜属	炭化
	33	棒状木製品	芯持材	クリ	
	43	建築部材	割材	マツ属複維管束亜属	
	26	連歯下駄	割材	モクレン属	台表中央付近に樹芯が通る
	39	柱材	割材	クリ	
	未掲載	板状木製品	割材	ケヤキ	炭化
	28	箱状木器	割材	マツ属複維管束亜属	
	25	浮子(有頭状)	丸材	クリ	
	24	棒状木製品	割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	刳貫有り
	27	連歯下駄	割材	クリ	歯の付け根付近に樹芯が通る
SK2041	未掲載	木製品(分割材か？)	割材	マツ属単維管束亜属	

第 16 表　樹種同定結果

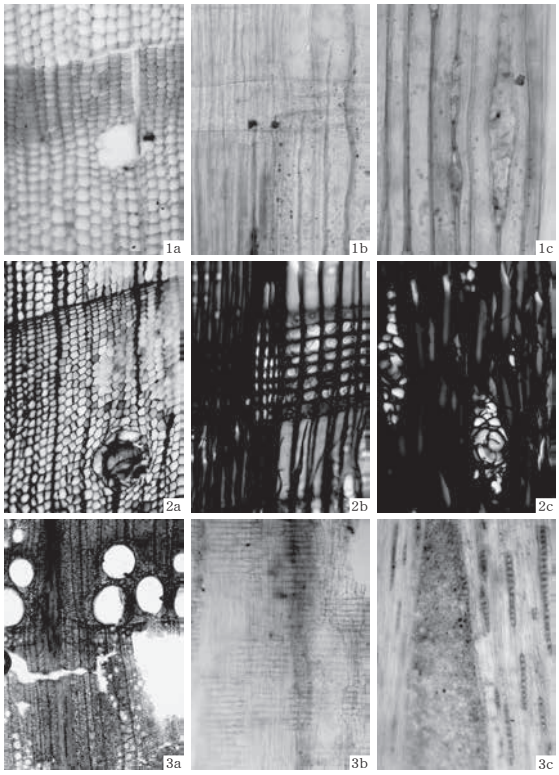
3）ま と め

a）古 植 生

2試料からウルシ属を多く検出した。ウルシ属は花粉生産量が少なく、局地的要因を反映しやすい種類であることから遺跡近傍で生育していた可能性がある。縄文時代前期と比較すると、草本花粉の割合が高く、イネ科の多産が特徴として指摘できる。また、イネ属の植物珪酸体や種実、栽培種であるソバ属の花粉の存在も当該期の特徴とすることができる。

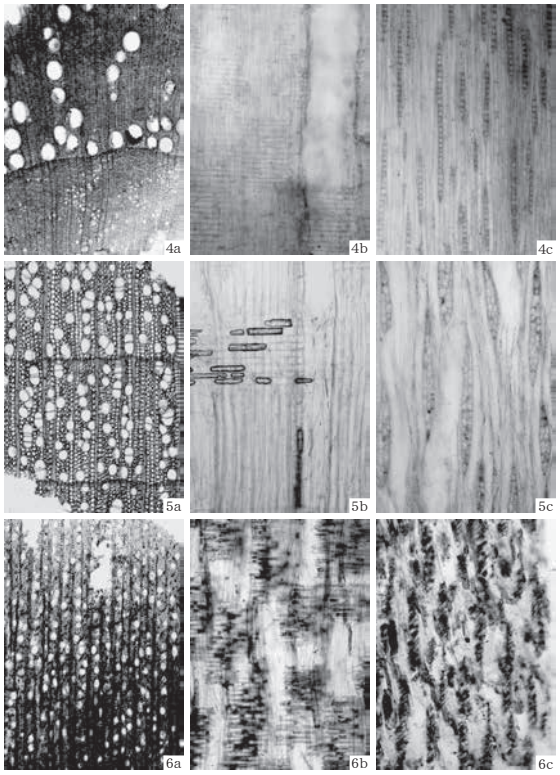
b）植 物 利 用

栽培植物については、SE2016 からはイネの胚乳、豆類、SK2041 からシソ属が確認された。ほかソバ属に由来する花粉も検出、遺跡周辺での栽培の可能性が指摘できる。



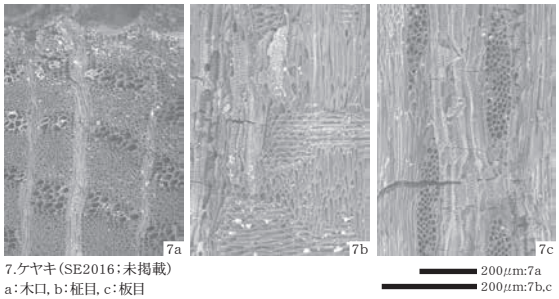
1.マツ属複維管束亜属（SE2016：29）
2.マツ属単維管束亜属（SK2041：未掲載）
3.コナラ属コナラ亜属コナラ節（SE2016：24）
a：木口，b：柾目，c：板目

第 68 図　木材・炭化材（1）



4.クリ（SE2016：25）
5.モクレン属（SE2001：22）
6.イスノキ近似種（SE2001：16）
a：木口，b：柾目，c：板目

第 69 図　木材・炭化材（2）



7.ケヤキ（SE2016：未掲載）
a：木口，b：柾目，c：板目

第 70 図　木材・炭化材（3）

木製品については、差歯下駄（図版 54 - 22）がモクレン属、連歯下駄（図版 54 - 26・27）がモクレン属とクリである。新潟県内の調査事例ではクリ下駄の報告例が少なく、上越市一之口遺跡の 1 例［パリノ・サーヴェイ（株）1994］、上越市海道遺跡 1 例［パリノ・サーヴェイ（株）2005b］、旧三島郡和島村大武遺跡 2 例［松葉 2000］、加茂市馬越遺跡 1 例［パリノ・サーヴェイ（株）2005a］が知られている。モクレン属の下駄は、旧神林村の古代～中世の遺跡［パリノ・サーヴェイ（株）2001a ～ c、2002a.b、2003a.b］で連歯下駄に 4 例、差歯下駄に 3 例、形態不明に 2 例ある。櫛は梳櫛（図版 53-16）でイスノキに同定された。県内の中世梳櫛はすべてイスノキに同定されている。槽については旧岩船郡神林村西部遺跡［パリノ・サーヴェイ（株）2005c］と見附市坂井遺跡［金原 2006］で各 1 例報告され、本遺跡同様マツ属複維管束亜属が利用されている。建築部材はマツ属複維管束亜属とクリであった。

E ま と め

1） 谷地遺跡の中世集落の様相と大館跡との関係

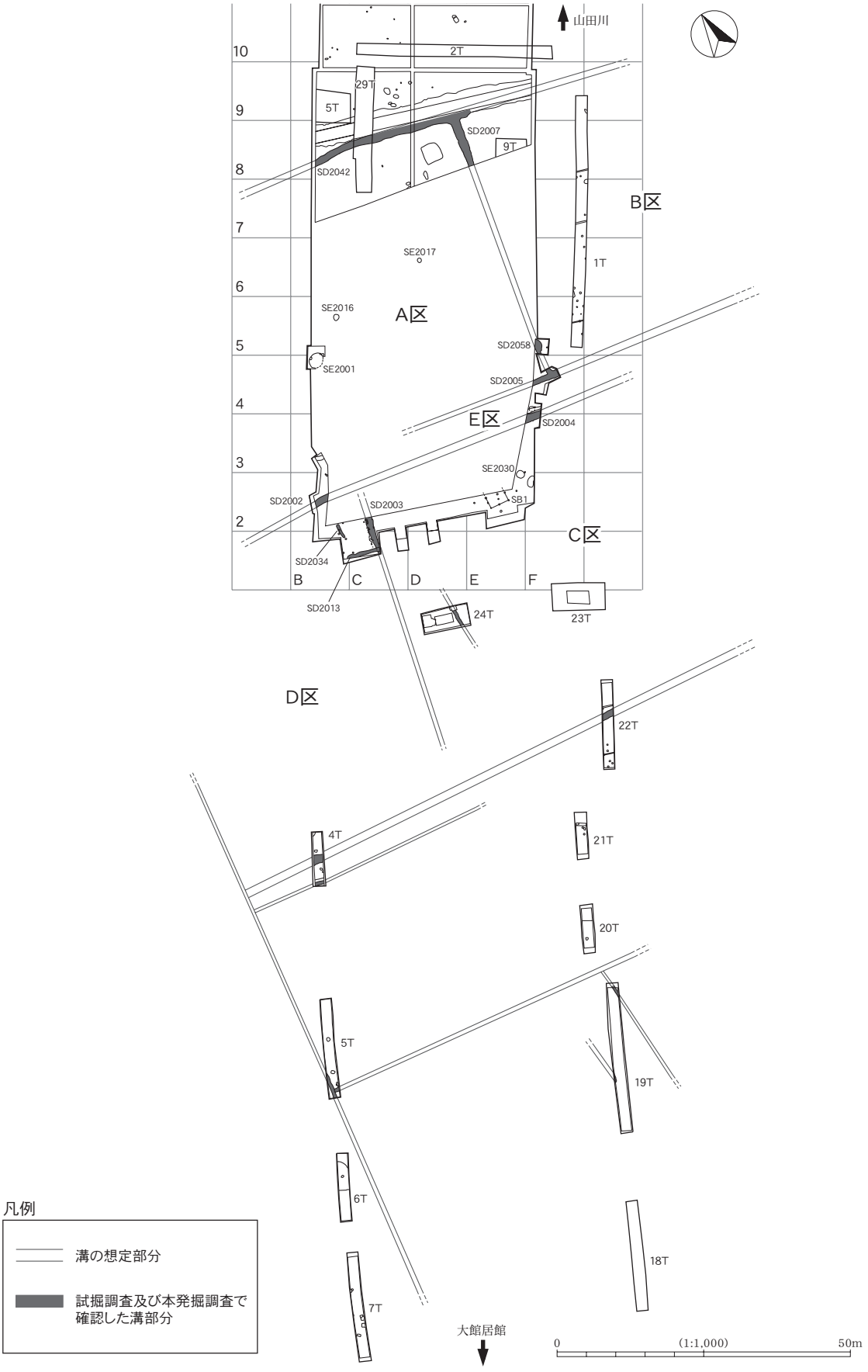
本遺跡は三面川の左岸に広がる標高約 13m の低湿地帯（三面川低地）に立地する集落遺跡である。北側は北方約 200m を流れる山田川に向かって緩やかに傾斜し、南側は南方約 600m に位置する大館跡に向かって微高地を形成している。遺構の分布を見ると調査区中央の SD2042 を境に北側と南側で様相が変化する。北側は遺構外も含めて中世段階の遺物は皆無で、Ⅰ・Ⅰ'層と試掘トレンチに近世遺物（古伊万里・伊万里）が混入していた程度である。遺構もピット、土坑が散在する程度であり集落を想定できるような状況ではなかった。一方、南側は東西 - 南北に直交する溝、井戸、建物などを検出しており、集落の様相である。溝は、建物、井戸、土坑、ピットを取巻くように東西 - 南北に整然と配置されている様子が見受けられることから、屋敷地の区画溝の可能性がある。この屋敷地は５区画を確認したが、調査区の関係で各区画の全貌を把握することはできなかった。各区画溝同士の距離間は、南北方向は東西に走る SD2042 と SD2005 間が溝の内側で約 47m、SD2042 と SD2002 - 2004 の距離が約 54m、SD2005 と SD2002 - 2004 との距離が 4.3m である。一方、東西方向は対になる溝が調査区外に想定できるが溝間の距離は不明である。溝の規模は、総じて東西方向の溝は幅、深さともにしっかりした掘形であるのに対して、南北方向は比較的幅が狭く深さも浅い。これらの区画溝は土層の堆積状況や遺物の年代観から同時期に機能していたことが推測される。また、覆土は粘質土や粘質シルトが主体層であり空堀であった可能性があることから、屋敷地の範囲の明確化、雨水の排水処理などが目的であったものと考えられる。

次に、これら東西と南北の溝によって構成すると想定した５区画の屋敷地を便宜上、Ａ～Ｅ区に区分けして説明することとする（第 71 図）。

Ａ区は、SD2042、SD2007 - 2058、SD2005 に囲まれた区画である。大部分を縄文時代前期の遺構検出面まで掘削したため遺構を検出できた面積はわずかであるが、井戸３基、土坑４基、ピット４基を検出した。溝は東側の南北辺が約 47m であるが、南辺の東西溝は調査区西壁で確認できなかったため途切れるか、または、北方向に屈曲している可能性がある。区画の内側には板組み構造であったと考えられる井戸（SE2001）が存在し、検出した井戸の中では最大規模で出土遺物も多く、ほかの井戸（素掘り井戸）とは一線を画す。また､北東隅には土坑(SK2041)と呼称した竪穴状の掘り込みを検出した。平面形が方形で、平坦な底面にはごくわずかな珠洲焼片と多量の自然木の枝片が出土した。また、SD2042・2007 とは長軸方向を合わせ､約３m の距離間を保って区画内に整然と配置されている。用途については不明であるが、旧中頸郡吉川町樋田遺跡［室岡ほか 1989･1990･1991］で類例を求めることができ、貯蔵穴、水溜め施設、庭園池の可能性があるとされる。貯蔵穴については種籾やそのほか種子類を保管し、盗難や火難を避けるため屋外の人目のつかない場所を選んでいる可能性があるとされており［室岡 1990］、本土坑は屋敷地の北東隅に位置する配置関係から貯蔵的な施設の可能性を指摘しておきたい。

Ｂ区は、Ａ区同様 SD2042、SD2007-2058、SD2005（2058）に囲まれた区画で、Ａ区の東隣に位置する。調査が可能であったのは北西隅部のみであったため、検出した遺構はピット１基である。南辺（SD2005）と北辺（SD2042）の溝は、更に東方向へ伸びていることが確実である。Ａ区の東に隣接し、ほぼ同規模の区画が想定できる。

Ｃ区は、SD2002 - 2004 と SD2003 に囲まれた区画である。SD2003 の北方延長上には SD2002 -



第 71 図　屋敷地区画想定図

2004 が存在し、溝の規模や覆土の状況が類似することから共有する溝と推測し、屋敷地を区画する溝と判断される。遺構は掘立柱建物１棟、井戸１基、ピット５基を検出した。SB1 の調査区内での面積は７㎡（桁行２間以上、梁間２間の側柱建物）と小規模だが、本遺跡と同時期（15 世紀）の集落遺跡である上越市水久保遺跡［高橋ほか 1996］や見附市坂井遺跡［小田 2006］の建物の規模は、10 ㎡程度の建物が集落の主体をなしている。また、本建物（SB1）は隣接する井戸（SE2030）との配置関係から居住用建物と判断でき、この時期の一般的な屋敷形態［水澤 1993］を示している。

D区は、C区同様 SD2002 - 2004 と SD2003 に囲まれた区画で、C区の西隣りに位置する。遺構は溝２条、ピット６基を検出した。東辺を区画する SD2003 の内側には小ピットが溝に沿って連続している。このような事例は樋田遺跡で検出されており、柵と溝で区画した屋敷地とされている［室岡 1991］。本遺跡においても一部の屋敷地は柵と溝によって区画されていた可能性が考えられ、樋田遺跡と似たような景観が広がっていたものと思われる。SD2013・2034 は幅、深さともに小規模で屋敷地を区画する溝の特徴とは明らかに異なる。建物に付帯する溝の様相と類似することから、調査区外に建物が存在する可能性がある。

E区は、A・B区とC・D区に挟まれた幅約４m の帯状の空間である。この空間からは土坑１基、ピット３基を検出した。道路の可能性があるが、中世で見られる一般的な道路と比較すると幅がかなり広く、硬化面など道路と認定できる材料に乏しい。A～D区の屋敷地とは明らかに区画の形状が異なり一線を画す空間である。

以上、調査区内では５区画を確認した。これに調査区周辺の試掘調査のデータを加味して説明する。今回の調査区南端から南方約 150m までの間はほぼ同一の長軸方向を示す溝を東西方向で３条、南北方向で４条確認している。調査区内において SD2042 と SD2005 の距離間が約 47m、SD2005 と SD2002 - 2004 の距離間が約４m であることは説明したが、この状況とほぼ同様の溝の配列が、南方の試掘トレンチで確認することができる。試掘４トレンチでは、東西方向に伸びる２条の並列する溝が確認でき、互いの距離間は約３m、SD2002 - 2004 との距離間は約 50m であり、今回の調査区で検出した集村化した屋敷地の区画と類似する。さらに南側に位置する試掘５トレンチでは、南北と東西方向の溝がT字状に交わり共有する溝の存在がうかがえる。試掘 19 トレンチには南北方向へ伸びる溝が存在し、これも屋敷地を区画する溝の可能性がある。試掘 22 トレンチでは試掘４トレンチから伸びてくる溝を確認しており、やはり屋敷地の区画溝の可能性がある。このような状況から調査区外の南方は今回の調査区と類似した状況であることが想像でき、調査区から繋がる屋敷地の区画が広がっているものと判断される。このことから東・西方にも同様な区画が広がっていることは想像に難くない。試掘５・19 トレンチにある溝で囲まれた区画の南側が集落（集村化した屋敷地）の南端と考えても良いのではないだろうか。一方、北側はA・B区を区画する SD2042 の北方でピット、土坑を検出したがいずれも少数で集落的な様相は見受けられない。また、遺構内外から、中世に関係する遺物も出土していない。遺構以外には数多くの木根や風倒木に加え、河川や洪水により堆積したと考えられる砂質土が厚く堆積していることから、北方約 200m に位置する山田川に向かって湿地帯が形成されていたものと判断される。したがって、A・B区画の北側に位置する SD2042 が集落（集村化した屋敷地）の北端に当たるものと推定したい。この場合、本集落の南北方向の規模は約 200m と想定することができ、集落の全体像がおぼろげながら見えてきた。ただし東西方向については不明で、調査区内で検出した５区画を遙かに上回る屋敷地の区画数が存在した可能性がある。中世後期は中世前期と比較して農民の階層分化が進んでいるとされており［広瀬 1999］、屋敷地（区画）面積

の大小の差は階層差を表している可能性もある。

谷地遺跡では出土遺物から、帰属時期は15世紀後半と推測される。当該期、集落は屋敷地を囲むように区画溝が設置され集村化するようになり、一方で、一辺が半町～２町の方形の区画で堀と土塁を伴う居館が集落が展開する空間内に存在し、集落を統括したであろう（中世Ⅱ期）としている［坂井1997］。本遺跡の集落は正に前者でいう集村化した状況と一致する。本集落の区画の形態は、各屋敷地を独立した溝で区画するタイプではなく、複数の屋敷地に共通する溝（溝が共有されている）で区画するタイプである。この類例は樋田遺跡［室岡ほか前掲］があり、大・小の規模の差はあるが、60～70m四方あると想定できる区画を主体に全10区画が検出された。各区画には建物、井戸、土坑が溝の軸に合わせて整然と配置されており、本遺跡でも類似した景観が広がっていた可能性がある。共通する溝の存在からは、集落の計画的な造営が感じられ、短期間のうちにほぼ同時並行的に屋敷地が構築されていたことを物語っている。この集村化した屋敷地を統括する領主居館による強力な意志が働いていたのであろうか。

遺構から出土した遺物を見ると、珠洲焼、青磁椀・小杯、白磁ともに15世紀代のものが主体である。また、各屋敷地（区画）から検出した遺構の重複頻度や遺物の出土量、年代観から集落の存続期間は約50～100年であろう。このことから谷地遺跡の集落は15世紀後半を中心に繁栄し、遅くとも16世紀前半には終焉（廃絶）を迎えたものと推測できる。集落を統括したであろう居館については、調査区の南方約600mに大館跡が存在し、平成18、19年の土塁、堀の一部の調査から、15世紀中葉から後葉に最盛期を持つ居館の様子が分かってきた［青木ほか2008］。本集落もこの大館居館と歩調を合わせるかのように15世紀後半に最盛期を迎えていることから、大館跡に関連する集落であると考えられる。このような集落は、１つの居館に対して一定の距離間をおいて複数存在するとされており［広瀬1999］、大館居館を中心に一定の距離を保ちながら集落が点在していた可能性がある。今後、周辺の調査が進展することによって居館の持つ勢力範囲が次第に明らかになるものと考えられる。

２）遺　　物

本遺跡の遺物のほとんどはSE2001・2016から出土した。いずれの井戸も石製品・木製品が出土したが、出土状態に違いが見られた。

SE2016からは多量の礫と木製品が出土した。礫は、中層～下層にかけて挙大から人頭大の自然礫が大量に出土した。このほとんどは被熱しており、炭化物がほぼ全面に付着しているものも幾つか見られる。木製品は下駄、大型木槽、箱状木製品などの日常生活用品と柱材、長押材、板材、杭などの建築部材があり出土量は後者が圧倒的に多い。これらの木製品の８割が部分的に焼けている。建物解体後の焼却によるものなのか、建物火災による焼失なのかは現段階においては判断できないが、焼けた建物の部材を井戸内に廃棄したと考えられる。

一方、SE2001からは、上層を主体に挙大程度の自然礫が一定量出土しており、被熱した礫がごくわずか含まれていたが、ほとんどの礫は被熱していない。木製品は井戸の機能に無関係な櫛、下駄、鉤状木製品などの日常生活用品が多量に出土したが、SE2016のように炭化した木製品は皆無で、明らかに建築部材と判断できるものも出土していない。井戸下位（７層）には腐植土層があり、アシ・ヨシ類が小礫とともに検出されている。４層からは口縁部が「く」の字に屈曲する鉄鍋が出土しており、内耳が付くＣ型に該当する［五十川1992］。この形態の鉄鍋は井戸、堀、溝、埋納遺構などから出土するケースが多いとされている［越田2007］。

このようにSE2016は被熱した礫と炭化した木製品が多量に一括投棄されている状況である。人為的な埋め戻しであり廃棄儀礼によると考えられる。SE2001からは日常生活用品が多量に出土し、7層の腐植土層から、大量の植物遺体が検出された。井戸の機能とは無関係な遺物が投げ込まれている状況と、埋め戻し時の祭祀に関わる可能性があるとされる。植物遺体が出土したことから井戸の廃棄儀礼に伴う遺物の可能性がある。この2基の井戸における遺物出土状況の違いは、井戸の廃棄儀礼に多様性があるためと理解したい。

第Ⅳ章　八太郎遺跡

1　遺跡の概要

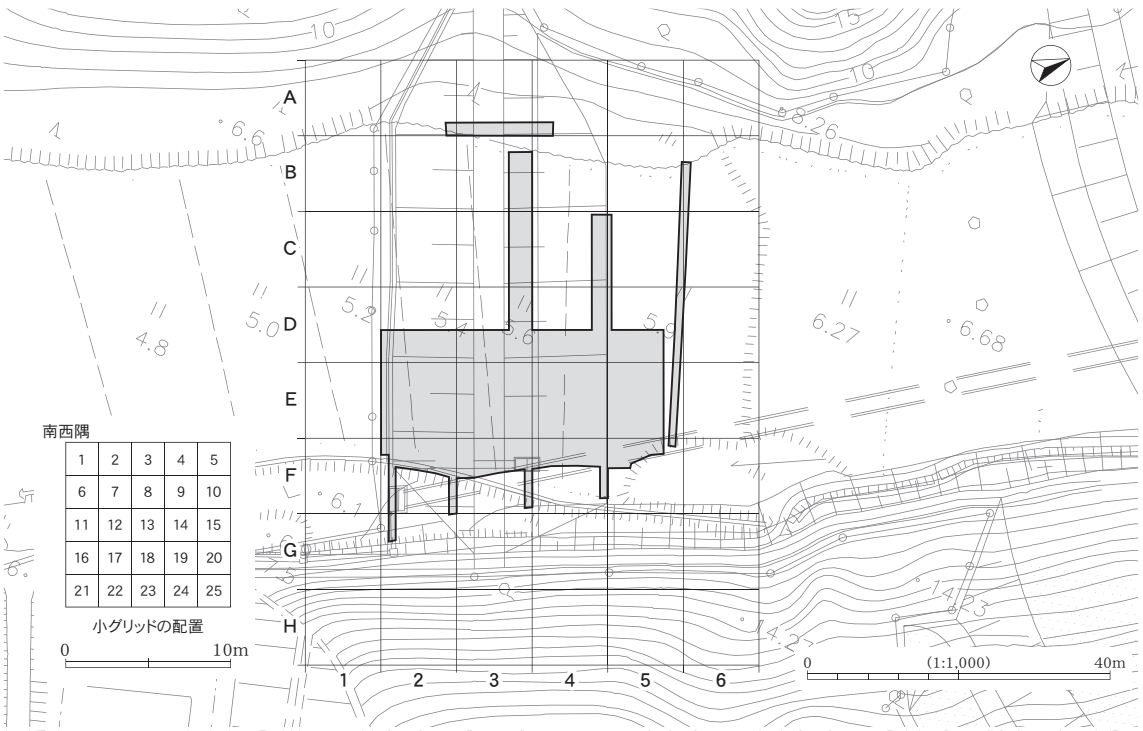
A　概　　観

本遺跡は、村上市（旧神林村）の村上丘陵内の谷部に位置する遺跡である。この谷部は遺跡の北方丘陵部から流れる幾筋もの自然流路により形成された小規模な谷底平野で、調査前は水田であった。遺跡の南約 500 mには東から西へ流れる助淵川がある（第１・２図）。『瀬波郡絵図』（慶長２（1597）年）には石川と合流しかつての岩船潟（琵琶潟）へと注いでいた様子が描かれている。村上丘陵の谷部を形成しながら流れていた自然流路も当時は岩船潟へと注いでいたことであろう。

遺跡の標高は約５mで、北東から南西方向に緩やかに傾斜し、調査区内での比高差は 50 ～ 70 ㎝である。調査区からは自然流路の一部を掘り込み、土留めの木組みを施した水場遺構を１基、ピット２基、打ち込み杭８本を検出した。また水場遺構が構築されている自然流路と同時存在したと考えられる別の自然流路を１筋検出した。出土遺物は珠洲焼の甕、土師質土器の皿、木製品の箸・曲物・箱物・梳櫛・コモヅチ・人形などがある。水場遺構を構成する杭の放射性炭素年代測定（AMS）数値が 13 世紀代を示し、遺物の時期と測定数値の整合性が認められた。包含層（Ⅲ層）出土遺物の多くは中世であるが、縄文時代、古代、近世の遺物も少量出土した。調査面積は 880 ㎡である。

B　グリッドの設定（第 72 図）

グリッドの東西方向を建設予定である貯水池の堰堤に一致させ、旧日本測地系　X ＝ 244745.048、Y



第 72 図　八太郎遺跡グリッド設定図

＝85447.475（2A）と旧日本測地系　X＝244721.037、Y＝85513.228（2H）とを結んだ線を東西方向の基準線（2ライン）として、10 m四方の方眼を組み、大グリッドとした。このため、グリッドの南北方向は真北から 20° 03′ 40″東偏している。

大グリッドの名称は南西隅を基点とし、南北方向を算用数字、東西方向をアルファベットとして「3D」のように表示した。大グリッドをさらに2m四方に 25 分割し、小グリッドを設定した。小グリッドは1～25 の算用数字で表し、南西隅が1で、北へ2・3・4・5、東へ6・11・16・21 の順で、北東隅を25 とした。表記は大グリッドの後に付けて「3D12」のように呼称した。

C　発掘調査の方法

表土除去　試掘調査の結果、本発掘面積は 1,530 ㎡となったが、遺構・遺物を検出した。トレンチは調査区の東側に偏っていた。そこで、西側の状況と東側の遺跡内容を把握するためトレンチを南北方向に3本、東西方向に2本設定し、試掘調査時の遺構検出面であるオリーブ灰色シルト質粘土層まで重機により丁寧に掘削した。その結果、面的な調査は遺構・遺物を検出した調査区東側の 670 ㎡の範囲とし、調査区西側では遺構を検出できなかったことから谷部の地形復元を主眼としたトレンチ調査とした（第 72 図)。このため実質的な調査面積は 880 ㎡となった。

表土には現水田耕作土（Ⅰ層）と旧水田耕作土（Ⅱ層）がある。これらを取り除くとオリーブ黒色シルト質粘土であるⅢ層となる。同層には遺物が多く含まれているためⅠ・Ⅱ層を重機にて掘削後、人力で掘削作業を行い遺物の検出に努めた。層厚は 20 ㎝ほどである。同層掘削中に木杭の上端部を検出した。

このⅢ層と試掘調査時の遺構検出面であるオリーブ灰色シルト質粘土層の間に、部分的にではあるが灰色シルト質粘土層が堆積しており、これについても人力で掘削した。灰色シルト質粘土層は上・下層に分けられ、下層は植物遺体と炭化物を多量に含んでいた。上層をⅣ層、下層をⅤ層とした。これらの層から遺物は出土しなかった。

遺構検出は試掘調査同様、Ⅵ層としたオリーブ灰色シルト質粘土層の上面で行った。

土層観察　土層観察は、調査区の外周囲に設けた排水用の開渠壁面とグリッドラインに沿って設定した東西トレンチの壁面を利用して行った。また調査区のほぼ中央となる4ラインから北に幅約 60 ㎝の土層観察用ベルトを設定し、上層の土層観察を行った。

遺構の土層観察については、サブトレンチを設定して壁の立ち上がりの確認と覆土の観察を行い図面と写真に記録した。

遺構検出　遺構の検出はⅥ層上面で行った。Ⅲ層掘削中に検出した杭については周辺の土層を残しⅥ層まで掘り下げ、遺構の検出に努めた。杭以外に検出したものは水場遺構1基とピット2基である。水場遺構は部分的に残るⅤ層を切るかたちで検出され、遺構内には遺構が構築された自然流路の砂とシルト質土がラミナ状に堆積している。ピット1基については試掘調査時に検出した柱根状の材で、残りの1基も柱根状の材である。

遺構調査　遺構の覆土と周囲の土壌との区別がつきにくいためサブトレンチを設定し、覆土堆積状況の観察・土層断面図を作成した。杭の側面図では、杭の両脇に基本土層を記入し、打ち込み深度を示した。遺構平面図作成、遺物の取り上げはトータルステーションで行い、土層断面図及び微細図は手実測で作成した。

D　層　　序（第 73・74 図）

1）概　　要

遺跡の層序は、試掘調査のデータを参考にしながらⅠ～Ⅶ層に分層した。Ⅰ・Ⅱ層は水田耕作土である。Ⅲ層については谷部の流水作用による再堆積土層であるが、人為的な撹乱が認められる。Ⅲ層とⅣ層との層界は明確であり、Ⅳ層以下には人為的な要素は認められず、流水作用による再堆積の状況となっている。各層間には幾筋もの自然流路が埋没しており、これらにより北側上流から運ばれた土が氾濫堆積し、谷底平野となった状況を示している。

調査区東側丘陵斜面部については、現地表面から 30 ㎝ほどで地山土の黄褐色土となり、この土壌により丘陵部は形成されている。黄褐色土下には青灰色粘質土があり、丘陵・谷部の基盤層となっている。

2）基 本 層 序

Ⅰ層は、厚さ 20 ～ 30 ㎝の現水田耕作土である。耕作の具合により深度が異なっており、調査区東側ではⅡ層を削平して堆積している。Ⅰ'層は東側丘陵部の崩落土である。東側斜面下の一部のみに認められる。Ⅱ層は旧水田耕作土である。層厚は 10 ～ 30 ㎝で、耕作深度の違いにより部分的に厚さが異なる。Ⅲ層はオリーブ黒色シルト質粘土層で、層厚は 20 ～ 30 ㎝である。同層から遺物が出土した。また植物遺体や炭化物を多く含み、氾濫堆積の再堆積土層と考えられるが、部分的に砂礫が混じり人為的な撹乱も認められる。Ⅳ層以下についても自然流路の影響による氾濫堆積層と考えられる。Ⅳ層は灰色シルト質粘土層である。層厚は約 10 ㎝で、部分的に認められた。Ⅴ層は灰色シルト質粘土層である。層厚は約 10 ㎝で、部分的に認められた。植物遺体と炭化物を多量に含んでいる。Ⅵ層はオリーブ灰色シルト質粘土層で、層厚は 30 ～ 40 ㎝である。同層上面が遺構検出面である。同層は調査区全域で認められた。Ⅶ層は灰色シルト質粘土層で、Ⅵ層よりもシルト分が多く粘性が弱い。わずかに植物遺体を含む。Ⅵ層と同様に調査区全域で認められた。開渠溝と東西トレンチの掘り下げは同層までである。

2　遺 構 各 説

A　遺構の概要

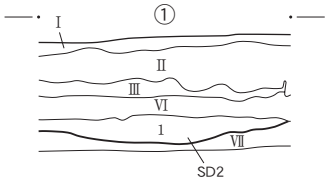
本遺跡で検出した遺構は自然流路（SD1）の一部を掘り込んだ水場遺構 1 基とピット 2 基、打ち込み杭が 43 本（うち水場遺構以外の杭は 8 本）である。ピット 1 基については試掘調査時に検出した。また水場遺構の構築されている自然流路と同時存在したと考えられる自然流路（SD2）を検出した。水場遺構については、機能が完全に特定されていないことから、性格不明遺構である SX で表記することとした。

B　水 場 遺 構（SX）

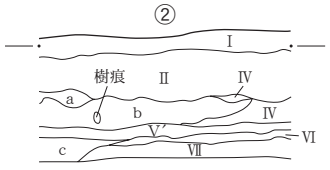
SX1（図版 57 ～ 64・125 ～ 129）

位置　3E22 ～ 25、3F 2 ～ 5・8 ～ 10 グリッドにかけて位置する。

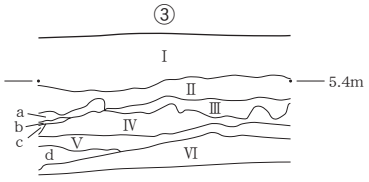
遺構の確認と調査　南北軸に設定した先行トレンチ調査時に自然流路（SD1）と杭列を検出した。当初杭列については自然流路の護岸施設か、東側丘陵部崩落土の土留め杭と認識していたが、サブトレンチ調査を行ったところ杭列の東側と西側で土質・堆積状況が異なり、東側が自然流路を掘り込んだ遺構である



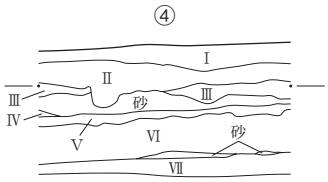
SD2
1. 7.5Y3/1オリーブ黒色砂、シルト質粘土を塊状に含む、しまり弱、粘性中。

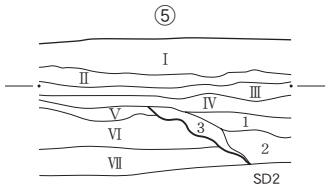


自然流路
a. 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土、植物遺体を多量含む、しまり弱、粘性強。
b. N5/0灰色シルト質粘土、砂を少量含む、植物遺体を多量含む、しまり弱、粘性強。
c. N4/0灰色シルト質粘土、Ⅴ層土に砂が多量混じる、しまり弱、粘性中。

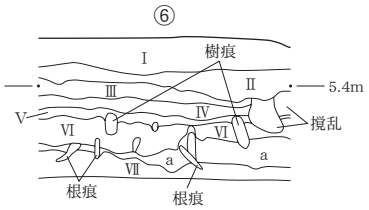


自然流路
a. 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土、Ⅲ層土に砂が混じる、しまり弱、粘性中。
b. 7.5Y3/2オリーブ黒色シルト質粘土、1層より砂が多量混じる、しまり弱、粘性中。
c. N5/0灰色シルト質粘土、Ⅴ層土に砂が多量混じる、しまり中、粘性中。
d. N6/0灰色砂、植物遺体を含む、しまり弱、粘性弱。

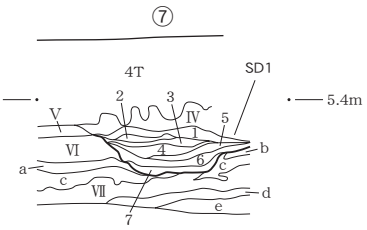




SD2
1. 7.5Y3/1オリーブ黒色砂、Ⅳ層土を斑状に含む、しまり弱、粘性中。
2. 5Y4/1灰色砂、粘質土を多量含む、しまり強、粘性中。
3. 5Y4/1灰色砂、粘質土を塊状に多量含む、しまり強、粘性中。

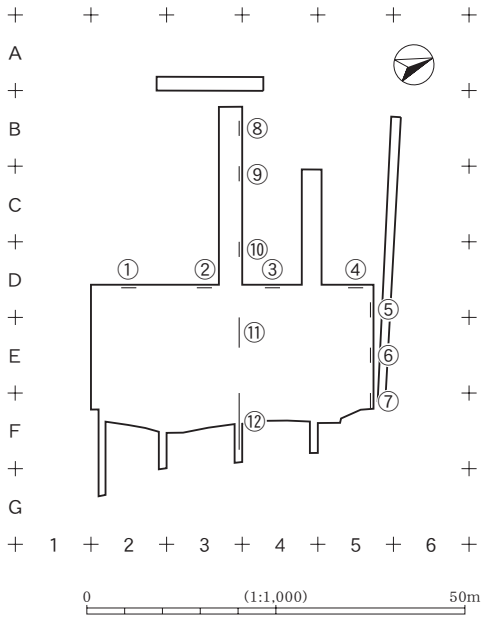


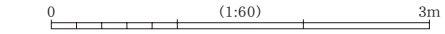
自然流路
a. 5Y3/2オリーブ黒色砂、φ1.0cmほどの青灰色粘質土を塊状に含む、炭化物を少量含む、しまり中、粘性弱。

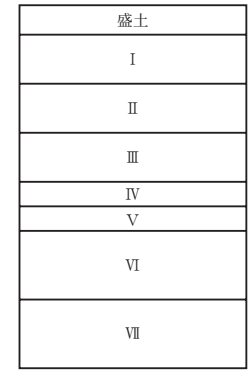


自然流路
a. 5Y3/2オリーブ黒色シルト質粘土、植物遺体と炭化物を含む、しまり中、粘性強。
b. 5Y4/2灰オリーブ砂、青灰色粘質土を塊状に多量含む、しまり中、粘性中。
c 2.5Y7/1灰白色砂、粗粒砂主体、しまり弱、粘性弱。
d. 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土、砂礫を多量含む、しまり中、粘性中。
e. 5Y4/1灰色粘質土、植物遺体を多量含む、しまり弱、粘性強。

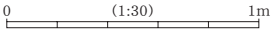
SD1
1. 2.5Y5/3黄褐色砂、白色細粒砂主体、しまり強、粘性弱。
2. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト、φ1.0cmほどの青灰色粘質土を塊状に少量含む、炭化物を少量含む、しまり強、粘性弱。
3. 2.5Y4/1黄灰色砂、白色粗粒砂主体、しまり中、粘性弱。
4. 5Y3/2オリーブ黒色シルト質土、φ1.0cmほどの青灰色粘質土を塊状に含む、粗粒砂と植物遺体と炭化物を含む、しまり中、粘性強。
5. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂、細粒砂主体、φ1.0cmほどの青灰色粘質土を塊状に少量含む、炭化物を少量含む、しまり強、粘性弱。
6. 2.5Y4/2暗灰黄色砂、白色砂主体、φ1.0cmほどの青灰色粘質土を塊状に微量含む、炭化物を少量含む、しまり中、粘性弱。
7. 2.5Y3/1黒褐色粘質土、腐植物と炭化物を中量含む、しまり弱、粘性強。





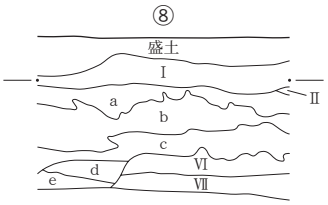


基本層序模式図

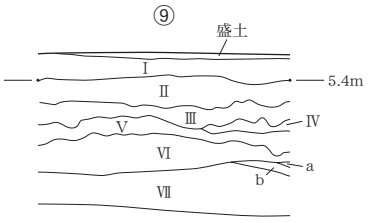


基本層序
Ⅰ層　7.5Y5/1灰色シルト質粘土、現水田耕作土、砂礫を含む、しまり弱、粘性中。
Ⅰ′層　表土、東側丘陵部地山土(黄褐色ローム)の崩落による再堆積土。
Ⅱ層　7.5Y4/1灰色シルト質粘土、旧水田耕作土、砂礫と炭化物を含む、しまり中、粘性弱。
Ⅲ層　7.5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土、砂礫を含む、植物遺体と炭化物を含む、しまり強、粘性弱。
Ⅳ層　N5/0灰色シルト質粘土、しまり中、粘性強。
Ⅴ層　N4/0灰色シルト質粘土、植物遺体と炭化物を多量含む、しまり弱、粘性強。
Ⅴ′層　Ⅴ層土に灰色砂がわずかに混じる。
Ⅵ層　2.5GY6/1オリーブ灰色シルト質粘土、しまり弱、粘性中。
Ⅶ層　5Y4/1灰色シルト質粘土、しまり弱、粘性弱。

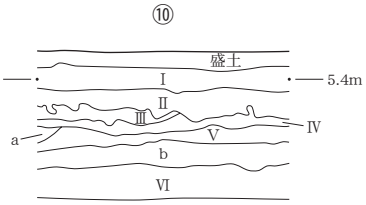
第 73 図　八太郎遺跡基本層序①



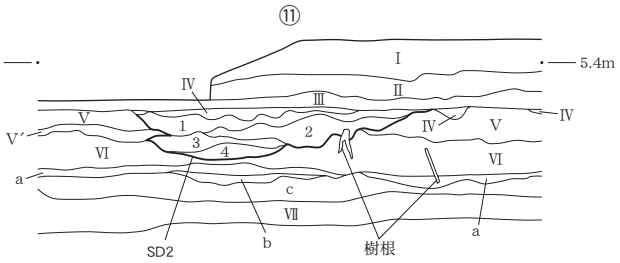
自然流路
a. 7.5Y5/1灰色シルト質土、植物遺体と炭化物を含む、しまり弱、粘性中。
b. 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト質土、礫と植物遺体を含む、しまり中、粘性中。
c. 5Y4/1灰色砂、シルト質土を塊状に含む、しまり弱、粘性弱。
d. 7.5Y5/1灰色シルト質粘土、砂を中量含む、しまり弱、粘性中。
e. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂、粗粒砂主体、しまり弱、粘性弱。



自然流路
a. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂、シルト質粘土がラミナ状に混じる、しまり弱、粘性弱。
b. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト質粘土、砂を中量含む、しまり弱、粘性強。

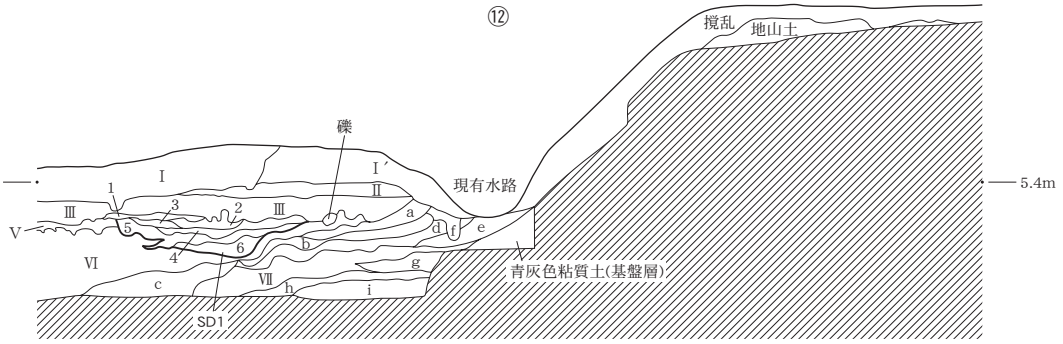


自然流路
a. N4/0灰色シルト質粘土、砂を少量含む、しまり中、粘性強。
b. 7.5Y4/1灰色シルト質粘土、砂を多量含む、しまり中、粘性弱。



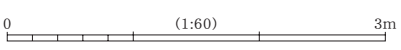
自然流路
a. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト質粘土、植物遺体と炭化物を多量含む、しまり中、粘性中。
b. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂、シルト質土がラミナ状に混じる、しまり強、粘性弱。
c. 5Y4/1灰色シルト質粘土、植物遺体を多量含む、しまり中、粘性強。

SD2
1. 7.5Y3/1オリーブ黒色砂、シルト質粘土を塊状に含む、しまり弱、粘性中。
2. 5Y3/1オリーブ黒色砂、炭化物を含む、しまり弱、粘性やや弱。
3. 5Y4/1灰色砂、粘質土を塊状に多量含む、しまり強、粘性中。
4. 2.5Y4/2暗灰黄色砂、φ2.0～3.0cmの粘質土を塊状に含む、しまり中、粘性弱。



自然流路
a. 5Y4/2灰オリーブ砂、青灰色粘質土を塊状に少量含む、しまり中、粘性中。
b. 5Y4/2灰オリーブ砂、青灰色粘質土を塊状に多量含む、しまり中、粘性中。
c. 5Y3/2オリーブ黒色シルト質粘土、植物遺体と炭化物を含む、しまり中、粘性強。
d. 5Y4/1灰色シルト質土、砂を多量含む、青灰色粘質土を塊状に少量含む、しまり中、粘性中。
e. 5Y4/1灰色砂、φ1.0cmほどの礫を少量含む、しまり中、粘性弱。
f. 5Y3/2オリーブ黒色シルト質粘土、植物遺体を含む、しまり弱、粘性強。
g. 2.5Y7/1灰白色砂、粗粒砂主体、しまり弱、粘性弱。
h. 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土、砂礫を多量含む、しまり中、粘性中。
i. 5Y4/1灰色粘質土、植物遺体を多量含む、しまり弱、粘性強。

SD1
1. 2.5Y5/3黄褐色砂、白色細粒砂主体、しまり強、粘性弱。
2. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト質土、炭化物を少量含む、しまり中、粘性中。
3. 2.5Y4/1黄灰色砂、白色粗粒砂主体、シルト質土を少量含む、しまり中、粘性弱。
4. 2.5Y3/2黒褐色シルト質粘土、砂を少量含む、しまり強、粘性弱。
5. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂、しまり強、粘性弱。
6. 2.5Y4/2暗灰黄色砂、5層より粗い砂主体、φ0.5cmほどの青灰色粘質土を塊状に少量含む、しまり強、粘性弱。

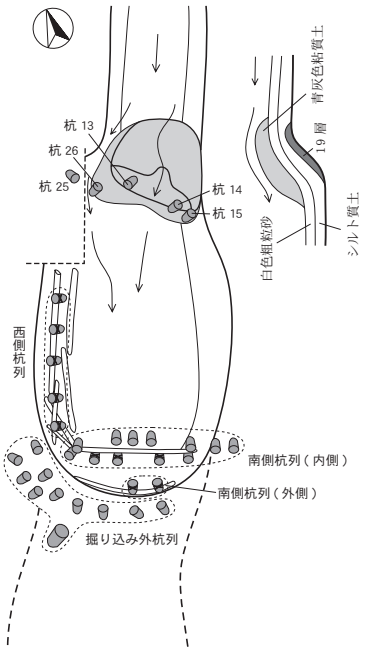


第 74 図　八太郎遺跡基本層序②

ことを認識した。その後、流路に沿って長楕円形に掘り込み、掘り込み壁面の崩落を防ぐために杭に横木を組み合わせた木組みの構造を有する施設であることが判明した。さらには本遺構北側（自然流路上流側）に人為的に盛られた青灰色粘質土を検出し、その構造から流路からの取水量を調整する施設に関するものと判断した。南北・東西ベルトとサブトレンチを設定し覆土の堆積状況、木組み施設・取水部の構造把握に努めた。

規模等　平面形は長楕円形で、長軸5.92 m、短軸3.04 m、深さ0.4 mを測る。長軸方向は、N22°Eである。底面はほぼ平坦で、立ち上がりは西側がやや急である。断面形は台形状である。検出層位はⅥ層上面である。

覆土　1～12層が取水部の青灰色粘質土が貼られた後に堆積した覆土である。シルト質土、シルト質粘土、砂が互層となりレンズ状に堆積している。2層の細粒砂は自然流路（SD1）の1層に相当する。6・7層からは遺物が多数出土した。13層（第75図トーン部分）が取水部の青灰色粘質土である。14～16層は遺構掘り込み後、取水部に粘土を貼る前に流入・堆積したもので、14層の粗粒砂は自然流路（SD1）の3層に相当する（第73図⑦）。17～19層は木組み施設の裏込め土、盛土である。シルト質土と砂がブロック状に混じっている。



第75図　水場遺構（SX1）構造模式図

取水部　遺構上流側に青灰色粘質土が盛られている（第75図トーン部分）。範囲は、長軸1.5 m、短軸1.4 m、厚さ10 cmほどで、平面形状は南西側が広がる台形状を呈している。杭13・26と杭14・15がほぼ対称的に位置し、その間に若干の窪みが認められる。おそらくこの部位が流水路となっていたのであろう。西側には粘土が盛られておらず一部開口しているので、この取水部は粘質土の上と西側に流水を分水して取り入れる構造となっていたと考えられる。構築状況は自然流路を掘り込んだ後、上流側にシルト質土と砂が混じった19層土を盛り、14～16層の自然堆積後に青灰色粘質土を盛り取水部を設けている。つまり19層土を盛った後、青灰色粘質土を盛土せずに使用した期間が短時間であるが存在する。

木組み施設　遺構掘り込み内の西側と南側壁面に杭列と横木による木組みが施されている。西側の打ち込み杭（杭33～36・47）は、すべて壁側（西側）に鉛直から10～30°傾いてⅦ層中まで打ち込まれている。南側の杭は内側と外側の列をなし、内側杭列（杭28～30・38～43・45）はすべて壁側（南側）に鉛直から10～25°傾き、杭28・41以外はⅦ層中まで打ち込まれている。外側杭列（杭31・46）は両者とも内側に11～15°傾き、やはりⅦ層中まで打ち込まれている。横木には小径木や材（57）、杭と同様にみかん割りされた割材（63）が用いられており、南側の横木に縄（59）が遺存していたことから、打ち込み杭と横木は縄で固定されていたと推測される。この木組みと壁の間には礫、割材（55）、加工材（60・61）などが裏込め材として用いられ、さらにシルト質土と砂の混合土（17～19層）が込められている。杭は裏込め土・材を押さえるかたちで傾いており、遺構壁面崩落を防ぐための土留め施設であることが判明した。

遺構北側取水部には杭13～15・25・26が打ち込まれている。横木との組み合わせはない。杭13～15・26は青灰色粘質土盛り付け部の南端に打ち込まれている。杭13・14の断面観察で青灰色粘質土を

引き込んでいることから、粘質土を盛った後に打ち込まれたことが分かる。杭 13・14・25 は遺構内側方向に 12 ～ 16°傾き、杭 15・26 は粘質土側に 15°傾いている。

また遺構掘り込み外の西南部にも杭列があり、遺構内の「L」字状に設けられた杭列のコーナー部に平行したかたちで設けられている。横木との組合せはない。西側は２重になっており、内側に杭 17・21・37 が打ち込まれている。杭 17 は南に 11°、杭 21・37 は遺構掘り込み側に７～ 12°傾いている。外側には杭 16・22 ～ 24 が打ち込まれており、杭 24 は南に 14°、そのほかは遺構掘り込み側に 16 ～ 25°傾いている。南側には杭 10 ～ 12・27 が打ち込まれている。杭 10・27 は北に鉛直から 16°、杭 11・12 は北西に 22 ～ 25°傾いている。

出土遺物　大半が６・７層からの出土である。珠洲焼の甕（1）、土師質土器の皿の底部（2）、砥石（13）のほか炭化物が付着した礫（14）が数点出土し、そのほかは木製品・材・種実である。箸状木製品４点（19 ～ 22）のうち、19 は取水部粘土下の 14 層出土である。梳櫛１点（23）、コモヅチ３点（24 ～ 26）、人形１点（27）、曲物・折敷・箱物の底板・同側板９点（28 ～ 36）、板状木製品８点（37 ～ 44）、そのほか加工材・切片、木組み部材の流れ込みと思われる木製品が出土した。種実はオニグルミ、モモ、トチノキなどが出土した。

C　杭

杭３（図版 59）

４Ｅ 20 グリッドに位置する。Ⅲ層中で検出した。割材で樹皮はない。杭の平面上での傾きはN12°Ｗで、鉛直に対し 11°傾き、Ⅴ層中まで打ち込まれている。

杭４（図版 59）

３Ｆ８グリッドに位置する。Ⅲ層中で検出した。割材で樹皮はない。傾きはなく、Ⅵ層上面まで鉛直に打ち込まれている。SX1 の東側に位置するが、杭の形状・打ち込み深度が大きく異なるため別遺構と判断した。

杭５（図版 59）

５Ｅ２グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出した。丸材で樹皮が残る。傾きはなく、Ⅵ層上面まで鉛直に打ち込まれている。自然流路（SD2）の西側に位置し、流路に関する施設と考えられる。

杭６（図版 59）

４Ｅ 10 グリッドに位置する。Ⅳ層中で検出した。丸材で樹皮はない。杭の平面上での傾きはN65°Ｗで、鉛直に対し 16°傾き、Ⅵ層中まで打ち込まれている。自然流路（SD2）の西側に位置し、流路に関する施設と考えられる。

杭７（図版 59）

５Ｅ１グリッドに位置する。Ⅲ層中で検出した。丸材で樹皮が一部残る。杭の平面上での傾きは N47°Ｅで、鉛直に対し 25°傾き、Ⅴ層中まで打ち込まれている。自然流路（SD2）の西側に位置し、流路に関する施設と考えられる。

杭８（図版 59）

２Ｅ７グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。割材で樹皮が一部残る。杭の平面上での傾きはN67°Ｅで、鉛直に対し 46°傾き、Ⅵ層中まで打ち込まれている。自然流路（SD1）の東側に位置し、流路に関する施設と考えられる。

杭９（図版 59）

４Ｅ 23 グリッドに位置する。Ⅴ層中で検出した。割材で樹皮はない。杭の平面上での傾きはN60°Ｅで、鉛直に対し 15°傾き、Ⅶ層中まで打ち込まれている。自然流路（SD1）の西側に位置し、流路に関する施設と考えられる。

杭 20（図版 59）

４Ｅ 23 グリッドに位置する。Ⅴ層中で検出した。半割材で樹皮が一部残る。杭の平面上での傾きはN64°Ｅで、鉛直に対し 27°傾き、Ⅶ層中まで打ち込まれている。自然流路（SD1）の西側、杭９の北側に位置し、流路に関する施設と考えられる。

D ピ ッ ト（P）

Ｐ２（図版 59・126）

２Ｅ 13 グリッドに位置する。試掘調査時にⅥ層上面で検出した。トレンチにより壊されているため平面形状・規模は推定であるが、平面形は円形で、長軸は 0.6 ｍほどと考えられる。深さは 0.62m、断面形はＵ字状である。柱根状の材が遺存しており、樹皮が一部残る。加工痕が明瞭ではない。

P48（図版 59・126）

２Ｅ 23、２Ｆ３グリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。平面形は楕円形で、長軸 0.3m、短軸 0.22m、深さは 0.38m である。断面形はＵ字状である。柱根状の材が遺存しており、一部が掘形底面下まで及んでいる。樹皮が残り、人為的な加工痕も明瞭でない。

E 自 然 流 路（SD）

SD1（第 73・74 図）

５Ｆグリッドから調査区に入り、２～４Ｆ、２・３・５Ｅグリッドを通る。Ⅴ・Ⅵ層を切っている。全体として北から南に流れるが２Ｅ・Ｆグリッドでは西に曲がる。３Ｅ・Ｆグリッドにおいて流路を切るように SX1 が構築されている。SX1 に至るまでは後述する SD2 に比べ直線的であり、人為的な流路改変の可能性もある。検出した長さは、およそ 29.7 ｍである。流路幅は４Ｆグリッド付近が 1.3 ｍ、３Ｆグリッド付近が最も広く 2.5 ｍ、２Ｅグリッド付近が 1.3 ｍほどを測る。深さは 0.35 ｍほどで、断面形は弧状である。

覆土は砂、シルト質土、粘質土の互層である。上位から１・３・５・６層が砂層であるが、１・５層が細粒で、３・６層が粗粒砂である。SX1 より南には１～４層は認められず、SX1 構築後は３Ｆグリッド以南の流路に一定の水が流れた形跡は明確でない。遺物は覆土から多面体に加工された材（122）が１点とそのほかは流木である。本遺跡の包含層出土遺物は本流路周辺に集中している。

SD2（第 73・74 図）

５Ｅグリッドから調査区に入り、２・３・５Ｄ、３～５Ｅグリッドを通る。Ⅴ～Ⅶ層を切っている。５Ｅグリッドでは北から南に流れ、４Ｅグリッド以南から西に曲がりそのまま直線的に流れている。検出した長さはおよそ 33.3 ｍ、流路幅は５ライン付近が最も広く 4.3 ｍ、そのほかは 1.5 ～ 2.5 ｍを測る。深さは 0.35 ｍほどであり、断面形は弧状である。覆土は砂層で粘質土ブロックが混じっている。本流路については検出のみで完掘はしていない。杭３・５・６・７が上流側に打ち込まれており、本流路との関連性がうかがえる。

3　遺　　物

A　概　　要

本遺跡から出土した遺物は土器・陶磁器が平箱で１箱分、石製品が６点、木製品が 140 点、銭貨が３点である。木製品の多くは SX1 からの出土であるが、そのほかの遺物は大半が遺物包含層出土である。これらのうち代表的なものを図示した。

土器・陶磁器は中世のものが主体であり、珠洲焼・土師質土器・青白磁が出土した。そのほか古代の須恵器、近世の陶磁器が少数出土した。石製品では砥石のほか縄文時代のものと考えられる不定形石器・石錘が出土した。木製品では飲食器の漆塗椀・箸・折敷、容器類の箱物・曲物類、装身具の櫛、道具類のコモヅチ、祭祀具の人形、水場遺構の部材である杭・横木、そのほか板材・加工材など多種多様である。銭貨では中国銭が２枚、近世銭貨が１枚出土した。

B　各　　説

１）　分類と記述の方法

記載に当たり土器・陶磁器の編年に関しては、それぞれ以下の論考を参考にした。須恵器は［春日 1999］、土師質土器は［品田 1997］、珠洲焼は［吉岡 1994］、近世陶磁器は［大橋 1989］、銭貨は［永井 1996］である。なお、須恵器の胎土表記は第Ⅵ章３に、珠洲焼の調整は第Ⅲ章６に倣った。

２）　土器・陶磁器類

SX1（図版 60・127 - １・２）

珠洲焼の破片が１点（１）、土師質土器皿の底部片が１点（２）出土した。１は厚みがあり、甕の胴部破片と考えられる。外面の平行タタキは３㎝当たり７目ほどで粗い。Ⅱ期に相当する。２は手づくね成形で、底部は丁寧にナデられている。在地のもので 13 ～ 14 世紀の所産と考えられる。

試掘トレンチ・包含層・表土層（図版 60・127 - ３～ 12）

試掘トレンチから珠洲焼が４点（３～６）、須恵器が１点（９）、包含層から珠洲焼が１点（７）、肥前系磁器が２点（11・12）、表土層から青白磁が１点（８）、須恵器が１点（10）出土した。

３～７は珠洲焼の破片である。３は甕の胴部下位の破片と思われる。焼きがあまい。外面の平行タタキは密であり、Ⅱ期と考えられる。４も甕の胴部下位の破片である。外面に自然釉がかかり、焼成も良好で薄手である。タタキは３㎝当たり９目でやや粗く、Ⅳ期に相当すると考えられる。５は甕か壺Ｔ種の胴部破片である。外面は細密な平行タタキで、やや鈍角な綾杉状となっている。Ⅱ～Ⅲ期と考えられる。包含層出土土器と接合した。６は擂鉢の体部片である。焼き締めがあまく、黄灰色を呈している。１単位４条の卸し目が付き、幅は 1.1 ㎝と狭い。Ⅳ期に相当すると考えられる。７は擂鉢の口縁から体部下位の破片である。口縁形態は外傾する方頭である。１単位 10 条の卸し目が付き、幅は 1.4 ㎝である。Ⅱ期と考えられる。

８は青白磁の合子の蓋である。上面周縁から側面にかけて蓮弁が施される。外面と内面上半部には淡青白色の釉がかかる。13 ～ 14 世紀のものと考えられる。

９・10 は須恵器である。９は直線的に外傾する口縁部にやや肩が張る胴部を持つ大甕である。口縁端

部に面を持ち、内面にやや突出している。外面には平行タタキ、内面には同心円状のあて具痕が残る。胎土はＡで時期はⅣ期相当と考えられる。包含層出土土器と接合した。10 は整形・傾きから壺の胴部片と考えられるが詳細は不明である。

11・12 は肥前系磁器の椀である。11 は口縁から体部の破片であり、外面口縁部に二重の圏線、体部に唐草文が施される。12 は体部片である。染付けが施されるが文様の詳細は不明である。両者ともに 17 世紀代の所産と考えられる。

3） 石　製　品

SX1（図版 61・127 - 13・14）

13 は砥石、14 は炭化物の付着した礫である。両者ともに遺構底面からの出土である。13 は自然礫を利用した砥石で、石質は砂岩である。砥面は正面の１面のみである。右側面に刃物痕が、上面と左側面には敲打痕が残る。14 の礫は花崗岩で、炭化物の付着以外、使用痕などは認められない。本遺構からはこのような礫が数点出土した。

包含層・試掘トレンチ（図版 61・127 - 15 ～ 18）

包含層から砥石が２点（15･16）、試掘トレンチから不定形石器が１点（17）、石錘が１点（18）出土した。15 は加工石の砥石で石質は流紋岩である。砥面は正・裏と左・右側面の４面である。左・右側面には切り出しの際の鋸痕が残る。16 は自然礫を利用したもので、石質は砂岩である。砥面は正･裏の２面である。下面に炭化物が付着している。

17 は縄文時代の不定形石器と考えられる。右側縁は連続した抉りにより鋸歯状となり、左側縁にも抉りがある。右側縁の抉りは上から順に正面・裏面・裏面からの打撃によるものである。左側縁は裏面からのものである。両側縁部には微細な剝離痕が認められる。石質は硬質頁岩である。18 は上・下端に抉りがある石錘である。上端の抉りは正・裏交互の打撃により、下端の抉りは正面からの打撃による。エッジは磨耗している。縄文時代のものの可能性がある。石質は角閃石片麻岩である。

4） 木　製　品

SX1（図版 61 ～ 64・127 ～ 129 - 19 ～ 100）

19 ～ 22 は箸状木製品である。19 のみ取水部の粘土下から出土した。19 は両端が加工された両箸で、樹種はスギである。20 ～ 22 は欠損していて全体形は不明である。20 は先端が細く削られている。いずれも断面形状は多角形だが、22 は三角形となっている。

23 は梳櫛で、樹種はイスノキである。両端が欠損している。櫛歯側面の線条痕から櫛歯は鋸により挽き出されたものと考えられる。歯間・歯厚は１㎜以下である。

24 ～ 26 はコモヅチである。樹種は 24 がクリ、25 がハリギリで、すべて丸材を用いている。24 は両端が面取りされ中央に溝が設けられ、経糸で吊すと横長になるタイプである。25 も両端が面取りされ、溝が上端寄りに設けられており、経糸で吊したときに縦長になるタイプである。26 は下端のみが面取りされている。中央には溝ではなく切り込みが施される。吊すと横長になるタイプである。

27 は完形の人形である。樹種はクリで丸材を用いている。頭部に烏帽子状の装飾、顔面・後頭部が削り出され、肩と思われる部位が表現されている。鼻や口など表情の表現はない。下端は杭状に先鋭の加工が施される。

28 ～ 36 は蓋・折敷・曲物・箱物と考えられる。木取りは 28 ～ 32・35 が柾目、33・34・36 が板目である。28 は曲物の底板に二次加工を施したものである。円形に近い形状と側面の釘穴、側面の角度が内傾していることから元は曲物の底板であると考えられるが、側面の一部にくびれを削り出し、右側先端部を削り、尖らせている。形状から鳥形の可能性もある。樹種はスギである。29 は蓋である。円形に近い平面形と中央の２か所の釘穴から、この釘穴がつまみに関するものと考え、鍋・釜の蓋と判断した。樹種はスギである。30・31 は折敷で同一個体である。隅丸方形の平面形状と、平面図の穿孔から折敷の底板と判断した。樹種はスギである。32 は箱物の側板で外面に黒漆が塗られている。右側面に外面からの切断痕がある。樹種はスギである。33 ～ 36 は曲物の側板である。33 は外面に炭化物の付着が見られる。墨痕状に見えるが赤外線写真による検討の結果、文字でないことが判明した。34 は外面に圧痕と黒色部が認められる。樺紐痕か。35・36 はやや湾曲している。36 は大型の曲物容器と考えられる。

37 ～ 44 は板状木製品である。木取りは 37・38 が柾目、39 ～ 44 が板目である。37 は正面に２か所の炭化部があり、若干窪んでいる。38 は右側面に削りが見られる。39 は上端が直線的に欠損している。切り込み後に折り取られた可能性がある。41 も上端に正・裏面からの切り込みがあり、折り取られている。44 は正面に墨痕状の炭化物の付着が見られるが、赤外線写真による検討の結果、文字でないことが判明した。

45 は棒状木製品で、断面は四角形である。46 は用途不明の加工材である。47・48 は断面形状が円く、手斧による切片と考えられる。49 は上端を切断し一部折り取っている。法量からコモヅチか何らかの木製品の素材と考えられる。

50 ～ 100 は SX1 の構成部材と考えられる。50 は杭状の木製品で先端のみ残存している。半割材の先端に一方向から数回刃を入れて斜位に切断している。51・52 は先端が斜めに切断された材である。木組み部分の横木に用いられた材と考えられる。53 ～ 58 は端部が炭化している材である。54 はみかん割りされた材の上端を切断し、下端が炭化している。55 は木組みの裏込めに用いられていた材で、下端が炭化している。56 は上端が斜めに切断され、下端が炭化している。57 は横木に用いられていた材で、下端が炭化している。58 は横木の流れ込んだものと思われ、下端が炭化している。59 は右撚りの縄である。南側の横木に付着していた。60・61 は木組みの裏込め材に用いられたものである。60 は丸材で、下端を斜位に、上端をＶ字状に切断している。加工痕断面が円く、手斧によるものと考えられる。樹皮は残らない。61 も丸材で、両端を斜位に切断している。側面に刃物痕がある。樹皮は残らない。62 は割材で両端を斜位に切断している。60 ～ 62 は法量から建物部材転用の可能性も考えられる。63 ～ 67 は杭状木製品である。63 は横木に用いられていた。63・64 はみかん割りの材で、65 ～ 67 は丸材である。65 ～ 67 は先端を鋭く削り出している。

68 ～ 100 は木組みを構成する打ち込み杭である。木取りはみかん割りの材が 68・69・71 ～ 73・76・79 ～ 82・84 ～ 86・91・93・96 ～ 100 で最も多く、半割材が 70・77・83・88 ～ 90、丸材が 74・75・87・92・94・95 であり、78 が板状の割材となっている。丸材を用いた杭は南側の内側杭列に集中している。先端は 70・74・78 が一方向から斜位に、そのほかはすべて数方向から鋭く削り出されている。また 88（杭 36）と 89（杭 34）が接合し、その接合関係から半割後にそれぞれの先端を加工している状況が復元できた。同様に 97（杭 45）と 98（杭 14）も接合し、みかん割りした後に先端を加工している。樹種同定を行った杭はすべてクリであった。

そのほかの遺構（図版 65・129 - 101 ～ 106）

ここでは SX1 以外の遺構からの出土で特徴的なものを記す。101 ～ 106 はすべて打ち込み杭である。101（杭 3）・102（杭 4）は割材で先端は切断されたのみで尖っていない。103（杭 6）は丸材で先端を斜位に切断している。104（杭 8）はみかん割りの材であるが、先端の加工はなく、そのまま打ち込まれていた。105（杭 9）はみかん割りの材で先端を数方向から削り出している。106（杭 20）は半割材で先端が斜位に加工されている。

包含層・SD1（図版 65・129 - 107 ～ 123）

122 は自然流路（SD1）からの出土で、それ以外はすべて包含層からの出土である。107 ～ 109 は箸状木製品で、いずれも欠損しており先端の加工は不明である。断面は多角形である。110 は断面形が四角形で下端が斜位に加工された棒状木製品である。111 は漆塗椀の底部で、高台部は欠損している。内・外面に黒漆が見られる。底径が小さいため近世以降の製品と考えられる。112 ～ 115 は曲物の底板である。いずれも木取りは柾目である。113 は側面に加工痕の稜が残ることから、加工途中のものと考えられる。114 は右側面に枘穴がある。115 は刃物痕が残る。平面形状から曲物と判断した。116 は格子目状のケビキがある。曲物の側板と考えられる。117 は柾目の板材の端部に釘穴が見られる。側板と結合させる釘穴と思われ、箱物の底板と考えられる。118 は柾目の板状木製品で、片面に刃物痕が多数ある。119 は柾目の板材の端部が斜めに加工されるものである。箱物の側板か。120 の木取りは板目で正・裏面に多数の刃物痕がある。端部に枘か枘穴と考えられる突出部がある。121 は右側縁断面が斜めに加工され、片刃状となるものである。用途は不明である。刃物痕が正・裏面に残る。122 は全面が多面体に加工されている。椀の粗型としては加工が粗く、用途は不明である。樹種はクリである。123 は丸材で先端を斜めに切断した杭状木製品である。上端が炭化している。

5） 銭　　貨

表土層・試掘トレンチ（図版 65・129 - 124 ～ 126）

表土層から中国銭が 2 点（124・125）、試掘トレンチから近世銭貨が 1 点（126）出土した。124 は北宋銭の「至道元寶」である。初鋳年は 995 年で、文字は草書体である。125 は北宋銭の「祥符通寶」である。初鋳年は 1,009 年で、文字は真書である。126 は「寛永通寶」である。1,636（寛永 13）～ 1,659（万治 2）年に鋳造された古寛永である。

4　自然科学分析

A　分析目的と試料

中世の水場遺構（SX1）の年代、構造材や機能の検討、古環境について自然科学分析を行った。試料はSX1 の３F ３グリッドに設定したセクションベルト（r-r' セクション）南面から採取した柱状試料（試料１（塊状の黒褐色シルト～粘土３～６層）・試料２（最下層の黒褐色砂質シルト質粘土（砂含む）７層））、SX1 覆土中から採取した種実遺体、SX1 の構築材、Ⅵ層検出の柱根である。（分析方法については第Ⅲ章４A を参照、ただし樹種同定の項で、SX1 出土の縄（図版 62 - 59）については、柔らかく切片作製は不可能であった。このため、端部を切り取り、合成樹脂で包み・固化した後にダイヤモンドカッターで切断し、切断面を研磨して薄片を作製し、生物顕微鏡で観察した。）

B　八太郎遺跡の水場遺構と周辺環境について

八太郎遺跡では水場遺構を検出した。水場遺構の機能を推測し、併せて周辺遺跡を探るために分析を行なう。

1）　結果とまとめ

a）　放射性炭素年代測定

結果を第 17・18 表に示した。SX1 の年代は、出土した遺物のうち珠洲焼が吉岡編年のⅡ期、土師質土器が 13 ～ 14 世紀であることと、杭 33（図版 64 - 87）の暦年較正年代（σ）が、13 世紀前半～後半ころの年代を示したことから、ほぼ整合性を示した。Ⅵ層 P2 出土の柱根状木材の暦年較正（σ）は、５世紀中ごろ～６世紀末ころの年代を示した。遺跡からはこの時期を示す遺物は出土していない。

試料名	試料の質	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code №.	測定機関番号
P2柱根状木材	木材	ブナ属	1,530± 40	-26.70±0.86	1,560± 30	9704-1	IAAA-70392
SX1杭33	木材	クリ	770± 40	-29.83±0.87	850± 30	9704-2	IAAA-70393

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
2)BP年代値は、1,950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第 17 表　放射性炭素年代測定結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代（cal）												相対比	Code №.
P2柱根状木材	1,528± 35	σ	cal	AD	441	-	cal	AD	484	cal	BP	1,509	- 1,466	0.363	9704-1
			cal	AD	432	-	cal	AD	585	cal	BP	1,518	- 1,365	0.622	
			cal	AD	589	-	cal	AD	590	cal	BP	1,361	- 1,360	0.015	
		2σ	cal	AD	431	-	cal	AD	603	cal	BP	1,519	- 1,347	1.000	
SX1杭33	774± 36	σ	cal	AD	1,225	-	cal	AD	1,272	cal	BP	725	- 678	1.000	9704-2
		2σ	cal	AD	1,189	-	cal	AD	1,197	cal	BP	761	- 753	0.012	
			cal	AD	1,207	-	cal	AD	1,286	cal	BP	743	- 664	0.988	

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。
2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3)暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
5)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第 18 表　暦年較正結果

b）　珪 藻 分 析

結果を第 19 表、第 76 図に示した。SX1（試料２）からは珪藻化石が豊富に産出した。産出分類群数は、26 属 75 分類群である。試料からは、淡水域に生育する水生珪藻が検出され、全体の 75% を占めた。これに付随し陸生珪藻が 20%、淡水～汽水生種が約 10% 産出した。淡水性種の生態性（塩分濃度、水

種　類	生態性 塩分	pH	流水	環境指標種	SX1 試料2
Bacillariophyta(珪藻植物門)					
Centric Diatoms(中心型珪藻類)					
Aulacoseira ambigua (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N,U	1
Araphid Pennate Diatoms(無縦溝羽状珪藻類)					
Araphidineae(無縦溝類)					
Fragilaria capitellata (Grun.)J.B.Petersen	Ogh-ind	al-il	ind	T	1
Fragilaria perminuta (Grun.)Lange-Beltalot	Ogh-ind	al-il	ind		7
Meridion circulare var. *constrictum* (Ralfs)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	1
Raphid Pennate Diatoms(有縦溝羽状珪藻類)					
Monoraphid Pennate Diatoms(単縦溝羽状珪藻類)					
Lemnicola hungarica (Grunow)Round & Basson	Ogh-ind	al-il	ind	U	1
Achnanthidium minutissimum (Kuetz.)Czarn.	Ogh-ind	al-il	ind	U	1
Biraphid Pennate Diatoms(双縦溝羽状珪藻類)					
Amphora copulata (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh-ind	al-il	ind	U	1
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	5
Cymbella amphioxys (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-ph		1
Cymbella cuspidata Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	T	1
Cymbopleura naviculiformis (Auerswald)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	O,U	10
Encyonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	6
Encyonema mesianum (Kholnoky)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	2
Encyonema silesiacum (Bleisch)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	3
Placoneis elginensis (Greg.)E.J.Cox	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	1
Placoneis elginensis var. *neglecta* (Krasske)H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	3
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	1
Gomphonema angustatum var. *linearis* Hustedt	Ogh-ind	ac-il	ind		1
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	4
Gomphonema lagenula Kuetzing	Ogh-ind	ind	r-ph	S	1
Gomphonema parvulum (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	16
Gomphonema pseudoaugur Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	S	2
Gomphonema sphaerophorum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	1
Gomphonema subclavatum (Grun.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	1
Navicula veneta Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	U	8
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	2
Stauroneis anceps var. *siberica* Grunow	Ogh-ind	ind	ind		1
Stauroneis nobilis fo. *densestriata* H.Kobayasi & Ando	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1
Stauroneis parallelistriata H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O,U	2
Frustulia rhomboides (Ehr.)De Toni	Ogh-hob	ac-il	l-ph	P,U	2
Frustulia rhomboides var. *amphipleuroides* (Grun.)De Toni	Ogh-hob	ac-il	l-ph	P,T	2
Frustulia rhomboides var. *saxonica* (Rabh.)De Toni	Ogh-hob	ac-il	l-ph	P,O	6
Brachysira brebissonii R. Ross	Ogh-ind	ac-il	l-ph	O,U	1
Luticola cohnii (Hilse)D.G.Mann	Ogh-ind	al-bi	ind	RI	1
Luticola mutica (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	1
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph		1
Neidium dubium (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ind	ind		1
Neidium iridis (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	ind	O,U	2
Neidium productum (W.Smith)Cleve	Ogh-ind	ind	ind		1
Caloneis silicula var. *truncatula* (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	4
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	2
Pinnularia divergentissima (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		1
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	3
Pinnularia mesolepta (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ac-il	ind	S	1
Pinnularia neomajor Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-bi		1
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	O	2
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RB	7
Pinnularia stomatophora (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		1
Pinnularia stomatophora var. *triundulata* (Font.)Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		4
Pinnularia streptoraphe Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	4
Pinnularia subcapitata var. *paucistriata* (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	3
Pinnularia substomatophora Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		2
Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O,U	5
Sellaphora laevissima (Kuetz.)Mann	Ogh-ind	ind	ind	U	1
Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	1
管縦溝類					
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	11
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	RB,U	1
Nitzschia palea (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	2
Nitzschia angustata (W.Smith)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		3
Nitzschia nana Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB,S	1
Nitzschia parvuloides Cholnoky	Ogh-ind	ind	ind	U	1
Tryblionella plana (W.Sm.)Pelletan	Meh				1
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	4
翼管縦溝類					
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	1
Surirella minuta Brebisson	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1
短縦溝類					
Eunotia bilunaris (Ehr.)Mills	Ogh-hob	ac-bi	ind	U	5
Eunotia duplicoraphis H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph		2
Eunotia exigua (Breb. Ex Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	P,U	1
Eunotia implicata Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	O	4
Eunotia minor (Kuetz.)Grunow	Ogh-hob	ind	ind	O,T	25
Eunotia praerupta var. *bidens* (Ehren.)Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	2
Eunotia tenelloides H.Kobayasi,K.Ando & T.Nagumo	Ogh-hob	ac-il	ind	RB	1
Eunotia veneris (Kuetz.)De Toni	Ogh-hob	ac-il	ind	T	1
海水生種					0
海水～汽水生種					0
汽水生種					1
淡水～汽水生種					15
淡水生種					199
珪藻化石総数					215

凡例

H.R.：塩分濃度に対する適応性

Meh	：汽水生種
Ogh-Meh	：淡水－汽水生種
Ogh-hil	：貧塩好塩性種
Ogh-ind	：貧塩不定性種
Ogh-hob	：貧塩嫌塩性種
Ogh-unk	：貧塩不明種

pH：水素イオン濃度に対する適応性

al-bi	：真アルカリ性種
al-il	：好アルカリ性種
ind	：pH不定性種
ac-il	：好酸性種
ac-bi	：真酸性種
unk	：pH不明種

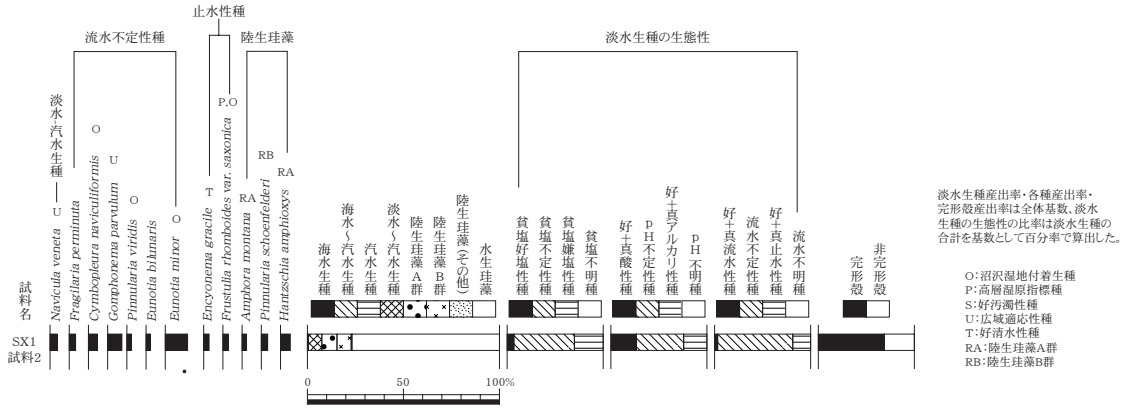
C.R.：流水に対する適応性

l-bi	：真止水性種
l-ph	：好止水性種
ind	：流水不定性種
r-ph	：好流水性種
r-bi	：真流水性種
unk	：流水不明種

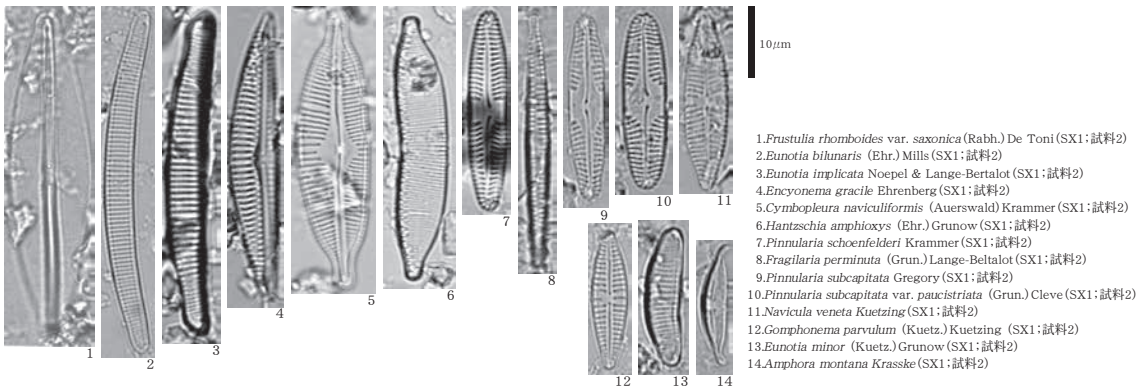
環境指標種群
K：中～下流性河川指標種
N：湖沼沼沢湿地指標種
O：沼沢湿地付着生種
P：高層湿原指標種（安藤,1990）
S：好汚濁性種
U：広域適応性種
T：好清水性種
（以上はAsai & Watanabe,1995）
R：陸生珪藻
（RA：A群，RB：B群，RI：未区分、伊藤・堀内,1991）

第 19 表　珪藻分析結果

素イオン濃度、流水に対する適応性）の特徴は、貧塩不定性種、真＋好アルカリ性種～好酸性種、流水不定性種と真＋好止水性種が優占あるいは多産する。主要種は、流水不定性で沼沢湿地付着生種の *Eunotia minor* が約 12% 産出し、流水不定性の *Gomphonema parvulum*、流水不定性で沼沢湿地付着生種の *Cymbopleura naviculiformis*、*Pinnularia viridis*、淡水～汽水生種の *Navicula veneta*、それに陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻 A 群の *Hantzchia amphioxys* 等を伴う。



第 76 図　主要珪藻化石群集



1.*Frustulia rhomboides* var. *saxonica* (Rabh.) De Toni (SX1；試料2)
2.*Eunotia bilunaris* (Ehr.) Mills (SX1；試料2)
3.*Eunotia implicata* Noepel & Lange-Bertalot (SX1；試料2)
4.*Encyonema gracile* Ehrenberg (SX1；試料2)
5.*Cymbopleura naviculiformis* (Auerswald) Krammer (SX1；試料2)
6.*Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (SX1；試料2)
7.*Pinnularia schoenfelderi* Krammer (SX1；試料2)
8.*Fragilaria perminuta* (Grun.) Lange-Beltalot (SX1；試料2)
9.*Pinnularia subcapitata* Gregory (SX1；試料2)
10.*Pinnularia subcapitata* var. *paucistriata* (Grun.) Cleve (SX1；試料2)
11.*Navicula veneta Kuetzing* (SX1；試料2)
12.*Gomphonema parvulum* (Kuetz.) Kuetzing (SX1；試料2)
13.*Eunotia minor* (Kuetz.) Grunow (SX1；試料2)
14.*Amphora montana Krasske* (SX1；試料2)

第 77 図　珪藻化石

c）花粉分析

結果を第 20 表、第 78・79 図に示した。花粉化石群集組成では、木本化石の割合が高い。ブナ属、ハンノキ属が多産し、スギ属、クマシデ属 - アサダ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属 - ケヤキ属等を伴う。草本花粉では、イネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、ヨモギ属等を伴う。微粒炭量は、約 19,000 個 /g である。

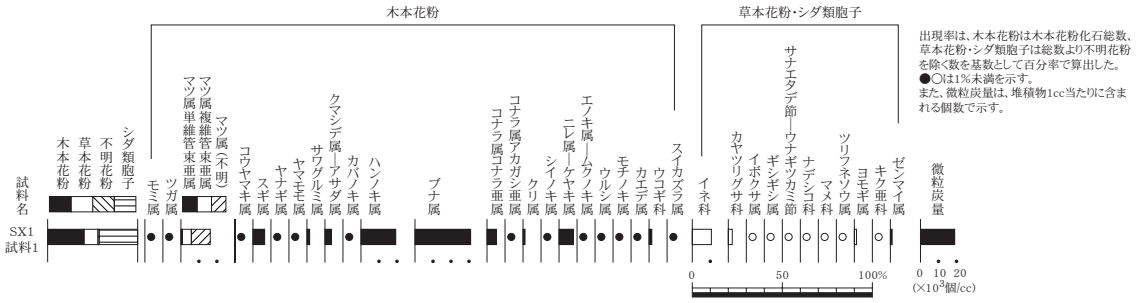
種類 ＼ 試料名	SX1 試料1
木本花粉	
モミ属	1
ツガ属	1
マツ属単維管束亜属	2
マツ属複維管束亜属	14
マツ属(不明)	29
コウヤマキ属	2
スギ属	18
ヤナギ属	1
ヤマモモ属	1
サワグルミ属	4
クマシデ属－アサダ属	10
カバノキ属	1

種類 ＼ 試料名	SX1 試料1
木本花粉	
ハンノキ属	53
ブナ属	85
コナラ属コナラ亜属	14
コナラ属アカガシ亜属	1
クリ属	3
シイノキ属	2
ニレ属－ケヤキ属	22
エノキ属－ムクノキ属	1
ウルシ属	1
モチノキ属	2
カエデ属	2
ウコギ科	4
スイカズラ属	1

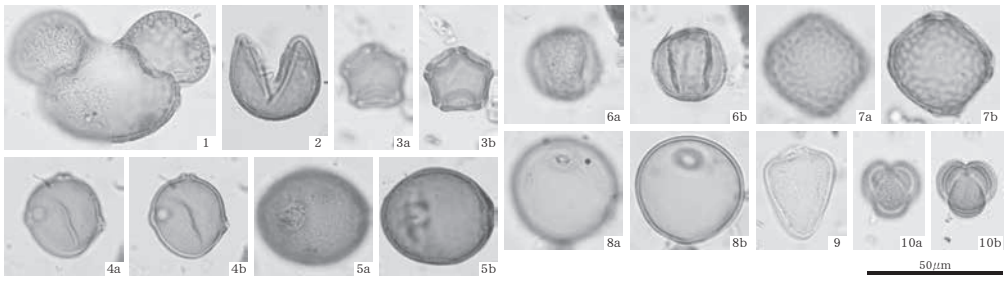
種類 ＼ 試料名	SX1 試料1
草本花粉	
イネ科	71
カヤツリグサ科	15
イボクサ属	1
ギシギシ属	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節	4
ナデシコ科	1
マメ科	1
ツリフネソウ属	1
ヨモギ属	8
キク亜科	1

種類 ＼ 試料名	SX1 試料1
不明花粉	11
シダ類胞子	
ゼンマイ属	7
他のシダ類胞子	283
合　計	
木本花粉	275
草本花粉	104
不明花粉	11
シダ類胞子	290
総計（不明を除く）	669
1cc当たりの微粒炭量[個]	19,000

第 20 表　花粉・微粒炭分析結果



第 78 図　花粉化石群集



1.マツ属(SX1;試料1)　2.スギ属(SX1;試料1)　3.ハンノキ属(SX1;試料1)　4.クマシデ属-アサダ属(SX1;試料1)　5.ブナ属(SX1;試料1)
6.コナラ属 コナラ亜属(SX1;試料1)　7.ニレ属-ケヤキ属(SX1;試料1)　8.イネ科(SX1;試料1)　9.カヤツリグサ科(SX1;試料1)　10.ヨモギ属(SX1;試料1)

第 79 図　花粉化石

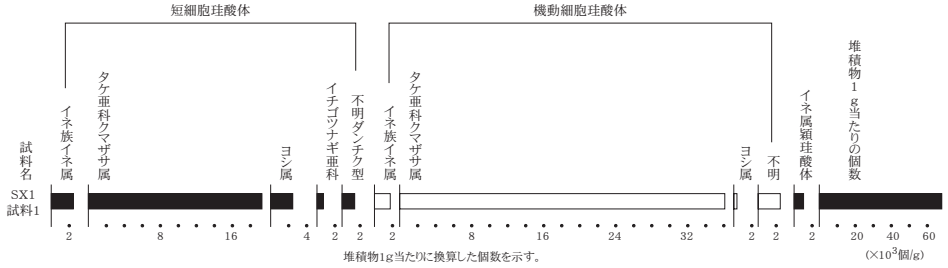
d)　植物珪酸体分析

結果を第 21 表、第 80・81 図に示した。SX1（試料 1）の植物珪酸体含量は約 68,000 個 /g である。分類群ではクマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立つ。栽培植物のイネ属を検出した。珪酸体の含量は短細胞珪酸体が約 2,500 個 /g、機動細胞珪酸体が約 1,800 個 /g、穎珪酸体が約 1,100 個 /g である。

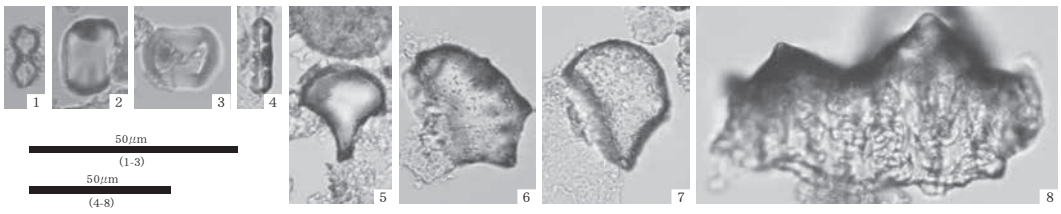
(個/g)

種　類 ＼ 試料名	SX1 試料1
イネ科葉部短細胞珪酸体	
イネ族イネ属	2,500
タケ亜科クマザサ属	19,300
ヨシ属	2,500
イチゴツナギ亜科	700
不明ダンチク型	1,400
イネ科葉身機動細胞珪酸体	
イネ族イネ属	1,800
タケ亜科クマザサ属	36,100
ヨシ属	400
不明	2,500
珪化組織片	
イネ属穎珪酸体	1,100
合　計	
イネ科葉部短細胞珪酸体	26,300
イネ科葉身機動細胞珪酸体	40,700
珪化組織片	1,100
総　計	68,000

第 21 表　植物珪酸体含量



第 80 図　植物珪酸体含量



1.イネ属短細胞珪酸体(SX1;試料1)　2.クマザサ属短細胞珪酸体(SX1;試料1)　3.ヨシ属短細胞珪酸体(SX1;試料1)　4.イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(SX1;試料1)
5.イネ属機動細胞珪酸体(SX1;試料1)　6.クマザサ属機動細胞珪酸体(SX1;試料1)　7.ヨシ属機動細胞珪酸体(SX1;試料1)　8.イネ属穎珪酸体(SX1;試料1)

第 81 図　植物珪酸体

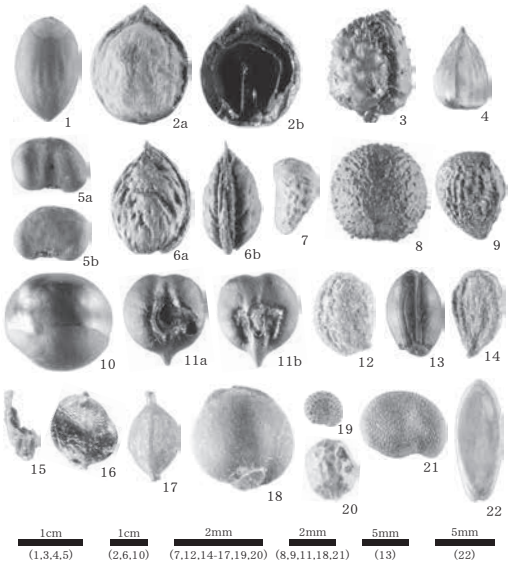
e)　種実遺体分析

結果を第 22 表、第 82 図に示した。SX1 の種実試料からは、木本 17 分類群 179 個、草本 21 分類群 84 個、不明 2 個、計 265 個の種実を検出した。栽培植物はモモ 3 個、イネ 1 個、メロン類 1 個、栽培種の可能性の高いナス科 1 個である。種実試料はモモ、トチノキなどの大型種実、やや小型の木本や草本の種実が確認され、洗出済残滓からは草本主体のより微小な種実を検出した。

遺構名			SX1					
層名			-	1層	6層 サンプル中	サンプル下	7層(下層7層)	
試料名			2	28,29				64～67,121,127～130,135,201～203
分類群	部位	状態	単体	種実	単体	種実	残滓*	単体種実
木本								
カヤ	種子	完形	-	-	-	1	-	-
オニグルミ	核	完形 食痕	-	-	-	1	-	-
ブナ	殻斗	完形	-	-	1	6	-	-
		破片	-	-	8	4	-	-
	果実	完形	-	-	1	5	-	-
		破片	-	-	-	3	-	-
ホオノキ	種子	完形	-	-	1	-	-	-
コブシータムシバ	種子	完形	-	-	4	2	-	-
クスノキ科	種子	完形	-	-	-	1	-	-
モモ	核	完形	1	2	-	-	-	-
キイチゴ属	核	完形	-	-	-	-	2	-
アカメガシワ	種子	完形	-	-	-	1	-	-
イヌザンショウ属	核	完形	-	-	2	-	1	-
トチノキ	果実	破片	-	-	-	2	-	-
	種子	完形	-	-	-	1	-	13
		破片	-	-	3	4	-	-
キブシ	種子	破片	-	-	-	-	1	-
ブドウ属	種子	完形	-	-	-	1	-	-
ノブドウ	種子	完形	-	-	1	-	-	-
タラノキ	核	完形	-	-	-	-	1	-
ハクウンボク	種子	完形	-	-	1	1	-	-
エゴノキ属	種子	完形	-	-	19	60	-	-
		破片	-	-	11	13	-	-
草本								
ヘラオモダカ	果実		-	-	-	-	3	-
オモダカ属	果実		-	-	-	-	1	-
オモダカ科	種子		-	-	-	1	-	-
イネ	穎	破片	-	-	-	-	1	-
イネ科	果実		-	-	-	1	1	-
ホタルイ属	果実		-	-	-	4	2	-
カヤツリグサ科	果実		-	-	1	-	12	-
ミズアオイ属	種子		-	-	-	1	-	-
カナムグラ	種子	完形	-	-	13	2	-	-
		破片	-	-	4	-	-	-
タデ属	果実	完形	-	-	1	1	1	-
		破片	-	-	-	3	1	-
ヒユ科	種子		-	-	-	-	1	-
スベリヒユ科	種子		-	-	-	1	-	-
ナデシコ科	種子		-	-	1	1	4	-
キジムシロ類+	核		-	-	-	-	2	-
カタバミ属	種子		-	-	-	-	2	-
スミレ属	種子		-	-	-	1	3	-
チドメグサ属	果実		-	-	-	-	1	-
イヌコウジュ属	果実		-	-	-	-	9	-
ナス科	種子		-	-	1	-	1	-
メロン類	種子		-	-	-	1	-	-
キク科	果実		-	-	-	-	1	-
不明種実			-	-	2	-	-	-
木材			-	-	8	6	-	-
炭化材			-	-	-	2	-	-
昆虫			-	-	1	6	-	-

「*」；残滓　種実等回収後の残渣とされる試料。本試料より5cc/1.37g（乾燥重量）を分析
「+」；キジムシロ類：キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属

第 22 表　種実遺体分析結果



1.カヤ 種子(SX1;6層下)
2.オニグルミ 核(食痕)(SX1;6層下)
3.ブナ 殻斗(SX1;6層下)
4.ブナ 果実(SX1;6層下)
5.コブシータムシバ 種子(SX1;6層下)
6.モモ 核(SX1;3F4グリッド)
7.キイチゴ属 核(SX1;下層7層)
8.アカメガシワ 種子(SX1;6層下)
9.イヌザンショウ属 核(SX1;6層中)
10.トチノキ 種子(SX1;下層7層)
11.ブドウ属 種子(SX1;6層下)
12.タラノキ 核(SX1;下層7層)
13.エゴノキ属 種子(SX1;6層下)
14.ヘラオモダカ 果実(SX1;下層7層)
15.イネ 穎(SX1;下層7層)
16.ホタルイ属 果実(SX1;下層7層)
17.カヤツリグサ科 果実(SX1;下層7層)
18.カナムグラ 種子(SX1;6層中)
19.ナデシコ科 種子(SX1;下層7層)
20.イヌコウジュ属 果実(SX1;下層7層)
21.ナス科 種子(SX1;6層中)
22.メロン類(モモルディカメロン型) 種子(SX1;6層下)

第 82 図　種実遺体

f)　周辺の環境

SX1 覆土下部層に相当する試料 2 から検出した珪藻化石群集は、流水環境を指標する種類がほとんど産出しなかったのに対し、沼沢湿地付着生種の種類が多く、その割合が高いといった特徴を示した。このことから遺構内は流れの少ない環境であったと推定できる。また、貧塩不定性種が多く認められたことから、汚濁の進んでいない水質と考える。

周囲の環境は花粉や種実の検出状況から、谷底周囲の丘陵や周辺の山地にはブナ属、コナラ属コナラ亜属からなる冷温帯性落葉広葉樹が見られ、部分的にマツ属、スギ属などの針葉樹も林分を形成していたと

推定できる。丘陵斜面から谷底にかけての林縁部にはキイチゴ属、アカメガシワ、イヌザンショウ属、トチノキ、キブシ、タラノキ、ハクウンボク、エゴノキ、タニウツギ等の中・低木類やブドウ属、ノブドウ等の藤本類も生育していたと考える。また、低湿地を好むヤナギ属、サワグルミ属、オニグルミ、クマシデ属 - アサダ属、ハンノキ属、ニレ属 - ケヤキ属、モチノキ属、トチノキ等の木本類も生育、草本類では、オモダカ属やヘラオモダカ、オモダカ科、ヨシ属、ホタルイ属、ミズアオイ属、イボクサ属、ツリフネソウ属等の水生植物や人里植物も生育していたと推定できる。

g）植物利用

SX1 の覆土から栽培植物のモモ、イネ、メロン類と、栽培種の可能性のあるナス科が確認された。ナス科は大型種子であることから栽培種の可能性が示唆される。メロン類はモモルディカメロン型［藤下 1984］に該当し、果実が食用される。またカヤ、オニグルミ、ブナ、キイチゴ属、トチノキ、ブドウ属は周辺に自生した可食可能な分類群である。なお、トチノキには成熟した種子の完形個体や果実の破片が見られたことから、選択的に成熟種子を採取し水場でアク抜きを行った可能性もある。

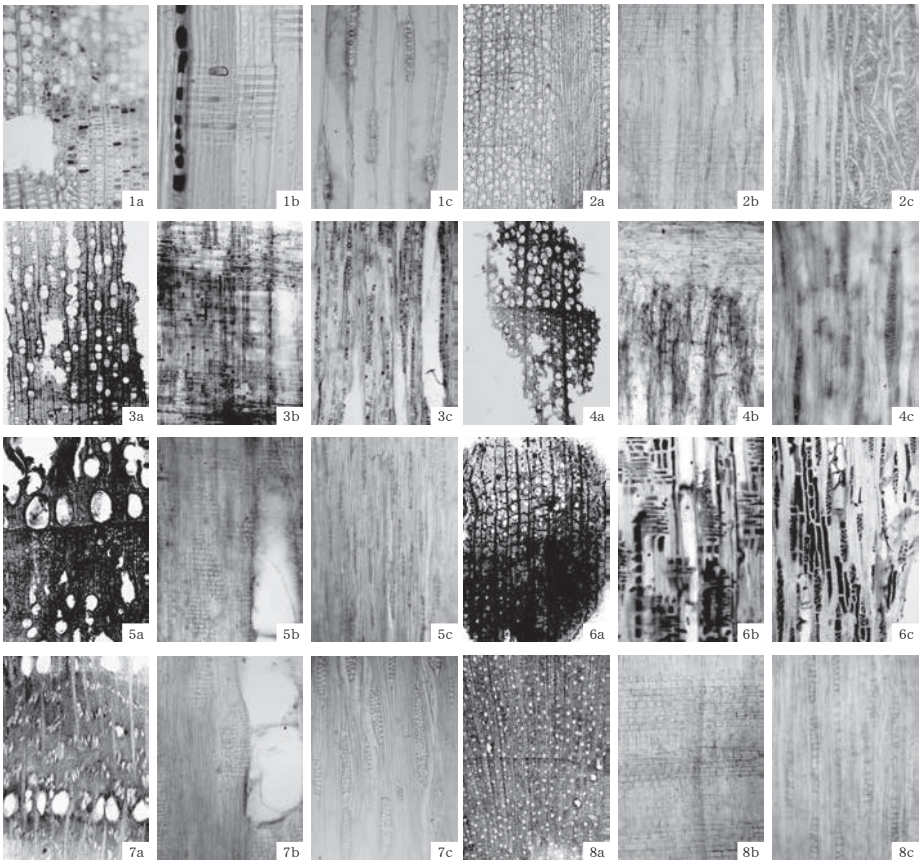
h）木製品

結果を第 23 表、第 83 図に示した。木製品の樹種は、針葉樹 1 種類（スギ）と広葉樹 7 種類（ハンノキ属ハンノキ亜属、アサダ、ブナ属、クリ、イスノキ、ハリギリ、タニウツギ属）である。板状加工を施す木製品に関しては木取りに関係なくすべて割裂性の高いスギである。コモヅチは、太い資料（図版 61 - 25）と細い資料（図版 61 - 24）からなり、芯持丸木が利用されている。図版 61 - 25 はハリギリ、図版 61 - 24 はクリである。県内の事例では、上越市海道遺跡でクリとモクレン、旧中頸城郡板倉町仲田遺跡でクリとブナ属

遺構名	遺物No.	器　種	識別	木　取	樹　種	備　考
SX1	32	箱物側板		柾目	スギ	外面黒漆
SX1	33	曲物側板		板目	スギ	炭化物付着
SX1	30	折敷（底板）		柾目	スギ	釘穴1か所あり
SX1	25	コモヅチ（太）		芯持丸木	ハリギリ	
SX1	27	人形		芯持丸木	クリ	
SX1	59	縄		-	不明	右撚り
SX1	24	コモヅチ（細）		芯持丸木	クリ	
SX1	28	曲物底板		柾目	スギ	曲物底板転用　鳥形か
SX1	19	箸状木製品		削出	スギ	断面六角形
SX1	29	蓋		柾目	スギ	中央に釘穴2か所あり
SD1	122	加工材		割材	クリ	多面体加工
包含層	111	漆塗椀		横木地柾目取	ブナ属	内外面黒色
SX1	23	梳櫛		削出	イスノキ	
SX1(杭11)	69	杭		割材	クリ	
SX1(杭42)	95	杭		芯持丸木	クリ	
SX1(杭16)	-	杭		芯持丸木	アサダ	
P48	-	柱根状木材		(芯持丸木)	ハンノキ属ハンノキ亜属	
P2	-	柱根状木材			ブナ属	
SX1(杭34)	89	杭		半裁木	クリ	
SX1(杭45)	97	杭		割材	クリ	
SX1(杭33)	87	杭		芯持丸木	クリ	
SX1(杭40)	94	杭		芯持丸木	クリ	
杭9	105	杭		割材	クリ	
SX1(杭10)	68	杭		割材	クリ	
SX1	-	SX1西側横木	-1	芯持丸木	クリ	小径木
			-2	芯持丸木	クリ	小径木
			-3	芯持丸木	クリ	小径木
			-4	芯持丸木	広葉樹（若年枝）	小径木
			-5	芯持丸木	タニウツギ属	小径木
			-6	芯持丸木	クリ	小径木
			-7	芯持丸木	クリ	小径木
			-8	芯持丸木	クリ	小径木

第 23 表　樹種同定結果

が利用されている［パリノ・サーヴェイ（株）2005b；三村・植田 2003］。梳櫛（図版 61 - 23）はイスノキで谷地遺跡（中世）ほか事例は多い。イスノキは日本海側には分布しないことから製品として持ち込まれた可能性が高い。漆塗椀は、横木地柾目取りで、みかん割りに分割した木材から加工されたと推定できる。同定されたブナ属のものは旧岩船郡神林村西部遺跡［パリノ・サーヴェイ（株）2005c］をはじめ県内では比較的多くの出土例が報告されている。SX1 の構築材は杭材がハンノキ属とブナ属で、ほかにアサダが 1 点確認された。横木材はクリが主体で、ほかにウツギ属と種類不明の広葉樹が確認されている。



1.スギ（SX1：30）
2.ハンノキ属
　ハンノキ亜属（P48：未掲載）
3.アサダ（SX1：未掲載）
4.ブナ属（包含層：111）
5.クリ（SX1：87）
6.イスノキ（SX1：23）
7.ハリギリ（SX1：25）
8.タニウツギ属（SX1：未掲載）
a：木口, b：柾目, c：板目

300μm:2-8a
200μm:1a,2-8b,c
100μm:1b,c

第 83 図　木材

5 ま と め

八太郎遺跡で検出した遺構は自然流路内に構築された水場遺構１基、杭が８本、ピットが２基である。遺構の時期は、水場遺構内出土の珠洲焼がⅡ期（13 世紀代）に相当し、遺構の木組み打ち込み杭の放射性炭素年代測定値（AMS）も 13 世紀代を示すことから（第Ⅳ章４　自然科学分析参照）、中世と考えられる。遺構が構築された流路（SD1）についても同様である。そして検出層位が同一な自然流路（SD2）と、その周辺に打ち込まれている杭も同時期のものと考えられる。ピット２基については、P2 から出土した柱根状木材の放射性炭素年代測定値（AMS）が５～６世紀代を示したが、同時期の遺物は出土しておらず当該期の遺構とする根拠に欠ける。包含層からは中世遺物のほかに近世の肥前系磁器が出土しており、近世以降の包含層の撹乱が考えられる。また８～９世紀代の須恵器の大甕が出土したが、この時期の遺構は検出されていないため周辺遺跡からの流れ込みと考えたい。

本遺跡の主体時期は遺構・遺物の様相から考えて中世（13 世紀代）であるが、遺跡からは居住施設を示す遺構は検出されていない。水場遺構を使用した集団や目的についての手掛りは得られていないが、遺跡周辺集落の人々により用いられたと考えるのが妥当である。周辺に存在が確認されている遺跡では家ノ前遺跡［神林村教育委員会 2007］があり、珠洲焼の壺が出土したが、確認調査のため詳細は不明である。本遺跡から西方向 1,500 mに位置する浦田山丘陵南辺には 13 ～ 15 世紀の集落遺跡と考えられている六百地遺跡［田辺・大賀 2002］が存在する。本遺跡と時期が重なるが関連性を示す積極的な資料がないためここでの言及は避けたい。

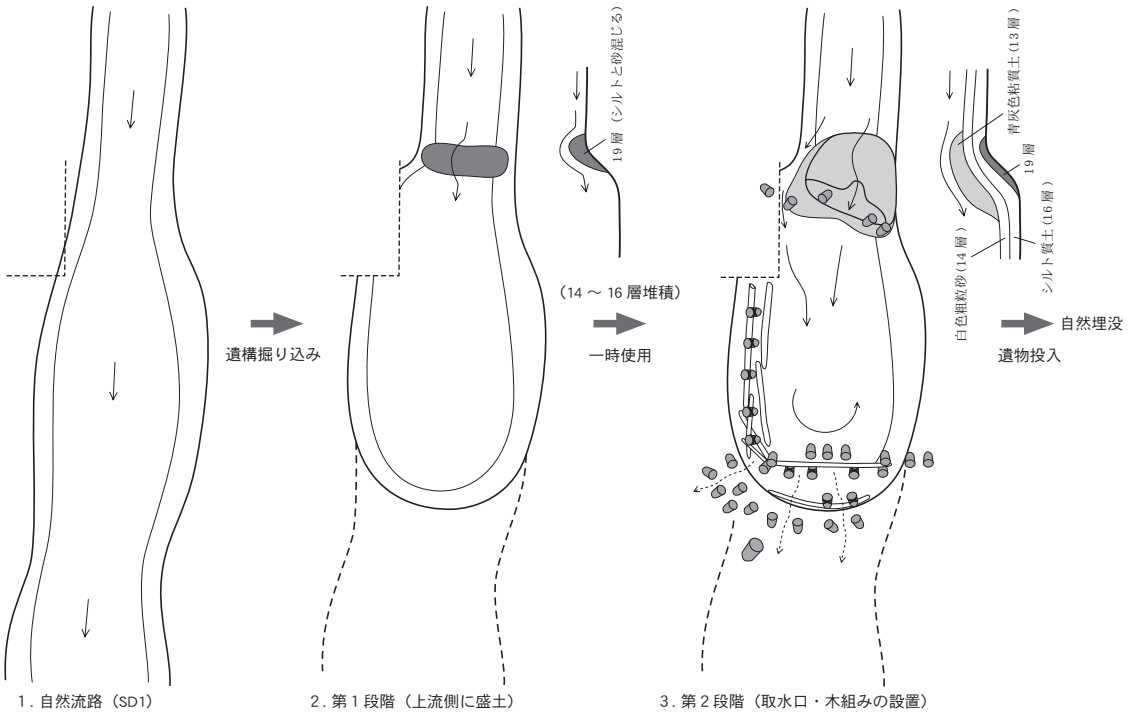
次に水場遺構の機能･用途についてであるが、県内において同時期の類似する遺構は認められていない。そのため、その構造、出土遺物の様相から若干の考察を加える。

水場遺構の構築・使用状況　第 84 図に水場遺構（SX1）の構築段階を復元した。取水部付近の土層観察から自然流路を掘り込んだ後、シルト質土と砂の混合土を取水部に当たる遺構上流側に盛り（19 層土）、その後、シルト質土･砂が遺構内に流入して堆積（14 ～ 16 層土）、その上に青灰色粘質土を盛っている（13 層土）。さらに盛った青灰色粘質土の土留めとして打ち込まれた杭は木組みの南側打ち込み杭と接合しており（杭 14・45）、木組みの構築は取水部構築と同時に行われたと考えられる。以上の状況から考えると SX1 の使用には２段階あり、遺構を掘り込み上流部に土盛りした後、シルト質土と砂が流入･堆積する間、木組みがない状態で使用された段階（以下､「第１段階」とする。第 84 図-２）と､その後､青灰色粘質土を盛って取水部を構築し、木組みによる土留め施設を設けた段階（以下､「第２段階」とする。第 84 図-３）である。

第１段階の使用状況は、その覆土（14 ～ 16 層）から遺物の出土が認められないため、具体的な機能・用途については不明である。ただし、上流部に盛土をしているため、取水量・速度の調節を行い、掘り込み部分に貯水した利水施設であることは推測できる。

第２段階は取水部の構築により自然流路の流水を分水して取水し、第１段階に比べ流水速度を抑え、水を取り入れることが可能となっている。また遺構本体の壁の土留めにより壁崩落による水の汚濁が防止されている。つまり遺構内の水が澄んだ状態を維持できる施設に構築されている。ただし出水口の構築が見られないため短時間に遺構内の水が入れ替わる状態には設計されていない。ある程度水が澱む状況と推測できる。

このような施設の果たす機能として推測されるのが堅果類の虫殺し・灰汁抜きのための水晒し場、また



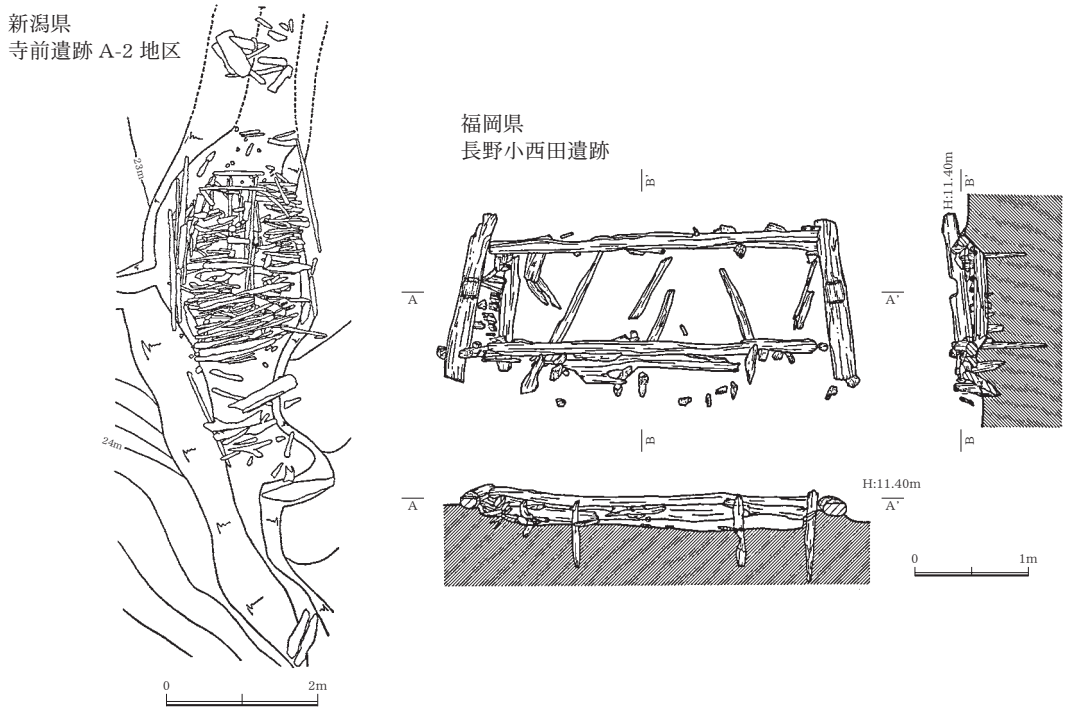
第 84 図　水場遺構構築状況図

は木製品加工の際に樹皮を剝がしやすくし、木材を柔軟化させるための木材水漬け場である。前者を推測したのは遺構底面直上からトチノキの実の完形個体・殻が 20 点ほど出土したためである。本遺構のように木組み施設を有する水場遺構について時代別に挙げると、縄文時代は埼玉県川口市赤山陣屋遺跡・長野県中野市栗林遺跡・新潟県出雲崎町寺前遺跡・新潟県柏崎市刈羽大平遺跡［岡村 1995］・東京都東村山市下宅部遺跡［千葉ほか 2006］など、弥生時代では福岡県北九州市長野小西田遺跡［前田ほか 2001］などが知られており（第 85 図）、堅果類の作業場として報告されている。これらの遺構の特徴としては河道、若しくは自然流路内に構築し、導水路、取水口、出水口、出水路を設け、水を「溜め」、水を「流す」工夫がされている。つまり水流を一定に保ち、常に新鮮な水に入れ替わるシステムが構築されている。本遺構には出水口が見られず、この点で設計が異なる。さらに本遺構周辺からは加工残渣の集積遺構などは検出していない。

後者を推測したのは、底面直上から加工木片や切片など木材加工の可能性を示す遺物が出土したためである。また土留めの裏込め材に丸太材が用いられ、自然流路や包含層からも加工木片の出土が認められることから、遺跡周辺の丘陵で建築部材や木工素材の採集、基礎加工が行われていた可能性が推測でき、本遺構の木製品加工に関与する用途を補強するが、遺構外からはこれら実作業に関する遺構は検出していない。

推測した両者の用途については、それに関連した遺物の出土量がわずかで、それらの作業に関する遺構の検出もないため限定できない状況である。本遺構出土のそのほかの遺物には珠洲焼の甕、土師質土器の皿、砥石、焼礫、箸状木製品、折敷、容器類の箱物・曲物類、櫛、コモヅチ、人形木製品、板状木製品、焼痕のある材、オニグルミ、モモの種実がある。これらの遺物の様相が本遺構最終状況を示していると考えられる。この組成は祭祀関連遺構や井戸の出土遺物と類似する。

祭祀関連遺構としては周知の石川県穴水町の西川島遺跡群白山橋遺跡［四柳 1987］がある（第 86 図）。

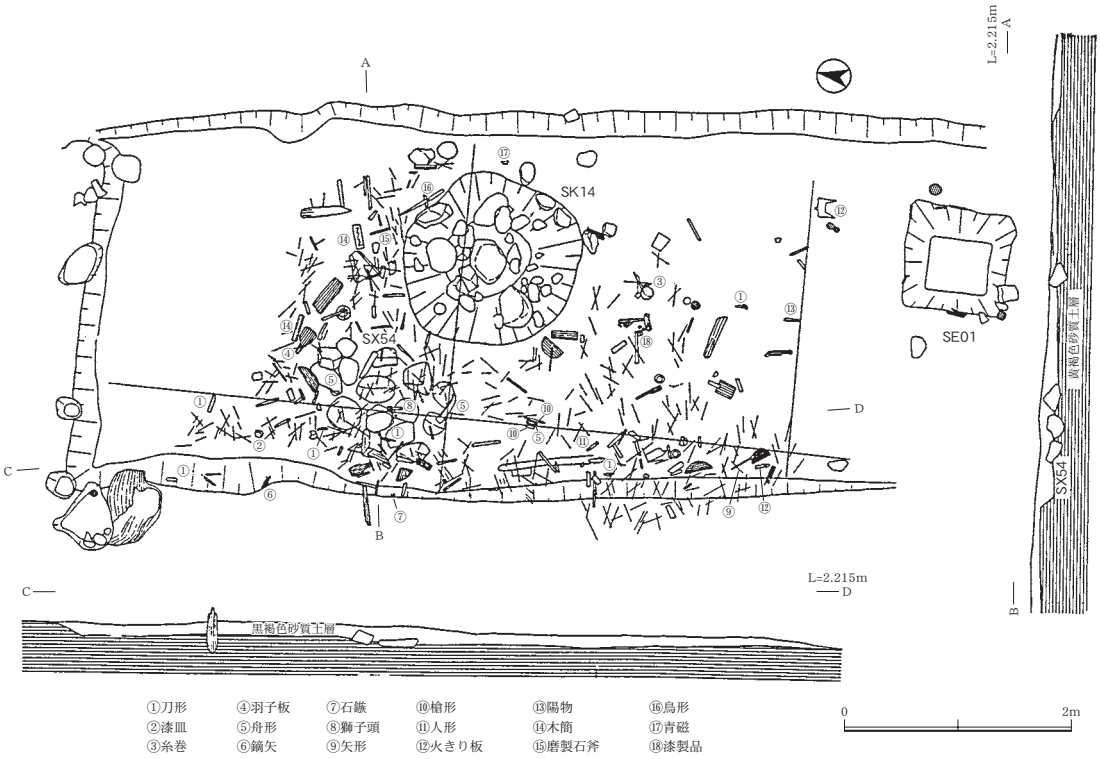


第 85 図　木組み施設を有する水場遺構の例

13 世紀後半～ 14 世紀前半の遺跡で祭祀遺物埋納遺構が検出されている。6 × 3 m、深さ約 20 ㎝の長方形の掘り込み区画内から獅子頭・舟形・人形・刀形・矢形・鳥形などの祭祀具、糸巻、曲物、折敷、木簡、土錘、漆器、青磁、土器とともに 3,444 点の箸状木製品が出土した。県内の祭祀関連遺構としては旧北蒲原郡豊浦町北沢遺跡杣遺構［川上 1996］、上越市一之口遺跡［鈴木・春日ほか 1994］、旧白根市馬場屋敷遺跡［川上 1985］などがあり、北沢遺跡では大量の木屑と小枝とともに多数の串状の木製品が出土した。焚火跡もあり、この周辺から多くの串状の遺物が出土し、単なる廃棄材の処理とは考えにくいとしている。串状木製品には箸状と桟状のものがあり、桟状のものには焼痕を伴うものが多い。北沢遺跡の立地は麓の平野部から 500 mほど沢を入った山中に位置し、「手斧はじめ」などの山の神に対する儀式が行われたと指摘している［川上 1996］。一之口遺跡では調査区中央の旧河道から土器とともに下駄、人形、刀形、舟形、櫂形、斎串、櫛、扇子などが出土した。馬場屋敷遺跡では中・上層において 1 ～ 4 号の木串が長方形に刺された祭祀遺構が検出されている。木簡、蘇民将来札をはじめとする呪符、人形・舟形・鳥形などの形代のほか多種多量の串類、なかでも箸状のものが多数出土した。

井戸内遺物としては旧岩船郡神林村窪田遺跡［前川ほか 2007］で良好なセットが見られる。SE113 は良好な井戸側が遺存する井戸であるが、井戸側内覆土上層からは珠洲系鉢の口縁部片、砥石、人形、漆器の椀・皿・鉢、片口、折敷、曲物底板、小刀、拳大の石が出土し、埋め戻し時の祭祀行為の状況を物語ると報告されている。旧岩船郡神林村田屋道遺跡［大島ほか 2008］では SE330 の井戸内炭化物層下部から珠洲焼の片口鉢破片、漆塗皿、曲物、箸状木製品、斎串状木製品、コモヅチ、建築部材、砥石、焼礫が出土した。村上市谷地遺跡（第Ⅲ章 6）では、SE2001 の井戸内から珠洲焼の甕、越前焼、硯、鉄鍋、釘、焼礫、下駄、櫛、鉤状木製品が出土した。

以上のように本遺構出土遺物と、祭祀関連遺構・井戸内出土の遺物には共通するものが認められる。人形は祭具であり、箸状木製品には使用痕跡が認められず、上述の馬場屋敷遺跡の木串のように斎串と同様



第 86 図　石川県西川島遺跡群白山橋遺跡の祭祀遺物埋納遺構

の性格を有すると考えられ、焼痕のある材についても火を用いた祭祀との関連性が指摘できる。櫛についても祭具の玉串と同音なことから祭具としての性格が付され、井戸内出土例では水の湧き出す最下層部からの出土が多い点から清水の豊富な湧出を願うものとの指摘がある［駒見 1992］。礫については、小石を２個抱き合わせて中へ投入することにより井戸を媒介として「山の神」を祭る滋賀県大津市田上大鳥居で行われる民俗例の記述［駒見 前掲］があり、水が大切な農民にとって谷に水を供給する山の神は重要な神であり、その神を村で祭る際に井戸端が当てられたとして紹介している。また本遺構出土のモモ種実は、井戸内での出土例もあり、邪気を避ける性格を持つとの指摘がある［駒見 前掲］。さらにモモは遺跡周辺で自生する植物ではなく栽培種であるため、祭具としての性格から意図的に本遺構へ投入されたことが理解される。またオニグルミについても同様の性格が付加されていた可能性が指摘されている［辻 1999］。

井戸内の遺物はその出土状況から、使用中の井戸端における祭祀と埋井の際の祭祀行為として取り上げられ、総じて水元の神に対するものとして論じられている［駒見 前掲］。これらの遺物と類似する本遺構出土遺物からは、本遺構において井戸と同様な性格を有する祭祀が行われた可能性を想起させる。本遺跡の立地を考慮すると、村上丘陵内の谷に位置し、上流の丘陵部からは自然流路が流れ、下流の助淵川と合流し、過去には岩船潟の湿地帯に注いでいた。そこでは水田が営まれていた。本遺構においては上述のように水の供給元である丘陵、水元の神、つまりは「山の神」に対する祭祀が行われていた可能性が考えられる。

今回の調査において本遺跡の具体的な機能・用途、領有していた集団の特定はできなかったが、中世前半の岩船潟北縁部における谷の利用状況の一端を知る手掛かりが得られた。特に水場遺構は本県において類例が乏しく、貴重な事例と言える。今後の事例増加を期待し、その性格･機能･用途を解明していきたい。

第Ⅴ章　田屋道遺跡Ⅱ

1　遺跡の概要

A　概　　観

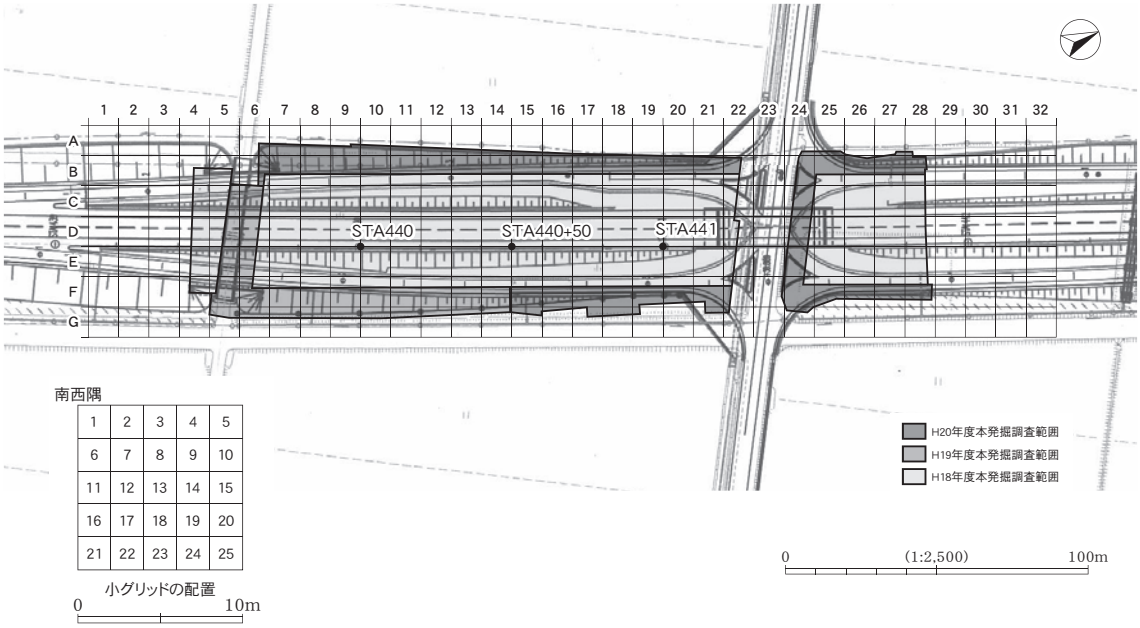
本遺跡は、村上市(旧神林村)の荒川右岸に広がる標高約1.5mの低湿地部に立地する中世の集落跡である。遺跡の周囲には関根川や百川などの小河川が流れている。発掘調査は高速道路及びインターチェンジ建設工事の工程に合わせ、平成18年度は本線部分を、平成19年度及び20年度は本線と進入路部分を行った。年度ごとの延べ調査面積は、平成18年度が8,614㎡、平成19年度が1,066㎡、平成20年度が1,772㎡である。

調査区からは、掘立柱建物、井戸、土坑、性格不明遺構、溝、ピット、杭などを検出した。遺物は須恵器・土師器・珠洲焼、陶磁器類、木製品などが出土した。

B　グリッドの設定（第87図）

グリッドの方向は、平成18年度調査時に高速道路のセンター杭を基準として、道路の方向に一致させた。STA440（旧日本測地系　X＝241301.8581、Y＝83590.5534）とSTA441（旧日本測地系　X＝241393.7989、Y＝83629.8830）とを結んだ線を南北方向の基準線として、10m四方の方眼を組み、大グリッドとした。このため、グリッドの南北方向は真北から23°09′35″東偏している。

大グリッドの名称は南西隅を基点とし、南北方向を算用数字、東西方向をアルファベットとして「18F」のように表示した。大グリッドをさらに2m四方に25分割し、小グリッドを設定した。小グリッドは1～25の算用数字で表し、南西隅が1で、北へ2・3・4・5、東へ6・11・16・21の順で、北東隅を25とした。表記は大グリッドの後に付けて「18F15」のように呼称した。なお平成19年度調査区と平



第87図　田屋道遺跡グリッド設定図

成 20 年度調査区の境界となった 15 グリッドライン上にある STA440+50 の座標は X=241347.8287 Y=83610.2182 である。

C　発掘調査の方法

表土除去・包含層掘削　表土は工事による盛土からなり、層厚は 30 ～ 100 ㎝である。Ⅰ層は層厚 20 ～ 40 ㎝の水田耕作土であるが、大部分で盛土前に削平されていた。表土及びⅠ層を取り除くと、黒褐色粘質土の遺物包含層Ⅱｂ層となるが、平成 19 年度及び 20 年度調査区では、耕作や盛土前の削平によりほとんど失われていた。このため遺構検出面であるⅢｂ層上面まで重機と人力で掘削した。

土層観察　土層観察は、調査区の壁面を利用して行った。また、平成 18 年度調査に対応するように 12・14・16 ラインに土層観察用のベルトを設定し、これを記録した。

遺構検出　遺構の検出はⅢｂ層上面で行った。遺構覆土の主体であるⅡｂ層土は褐灰色粘質土であるため、灰色のⅢｂ層面では色調の違いから遺構を比較的容易に検出できた。打ち込み柱については、掘り込みを伴わないものや、腐食で材の先端が土壌化しているものがあるため、トレンチによる調査を併用し、掘り残しや樹木根との誤認がないようにした。

遺構調査　遺構の覆土を掘り下げる前に、外形を確認するため平面での精査を行った。覆土の掘り下げは、遺構の片側半分ないし十字にベルトを残すかたちで行い、土層断面図を作成した。低湿地に立地する遺跡であることを考慮し、サブトレンチを積極的に設定し遺構の立ち上がりを確認した。完掘に際しては、遺構の覆土と周囲の土壌との区別がつきにくいものがあるため、掘り足りないことがないように注意した。実測・計測関係では、遺構平面図の作成や遺物の取り上げはトータルステーションで行い、土層断面図は原則手実測で作成した。

調査区の設定　平成 18 年度調査［大島ほか 2008］では市道及び農道で分断された調査区を、北側から A、B、C の 3 地区に分け調査を行ったが、平成 19 年度及び 20 年度調査においては、調査面積が狭いことから前記の地区は設定していない。

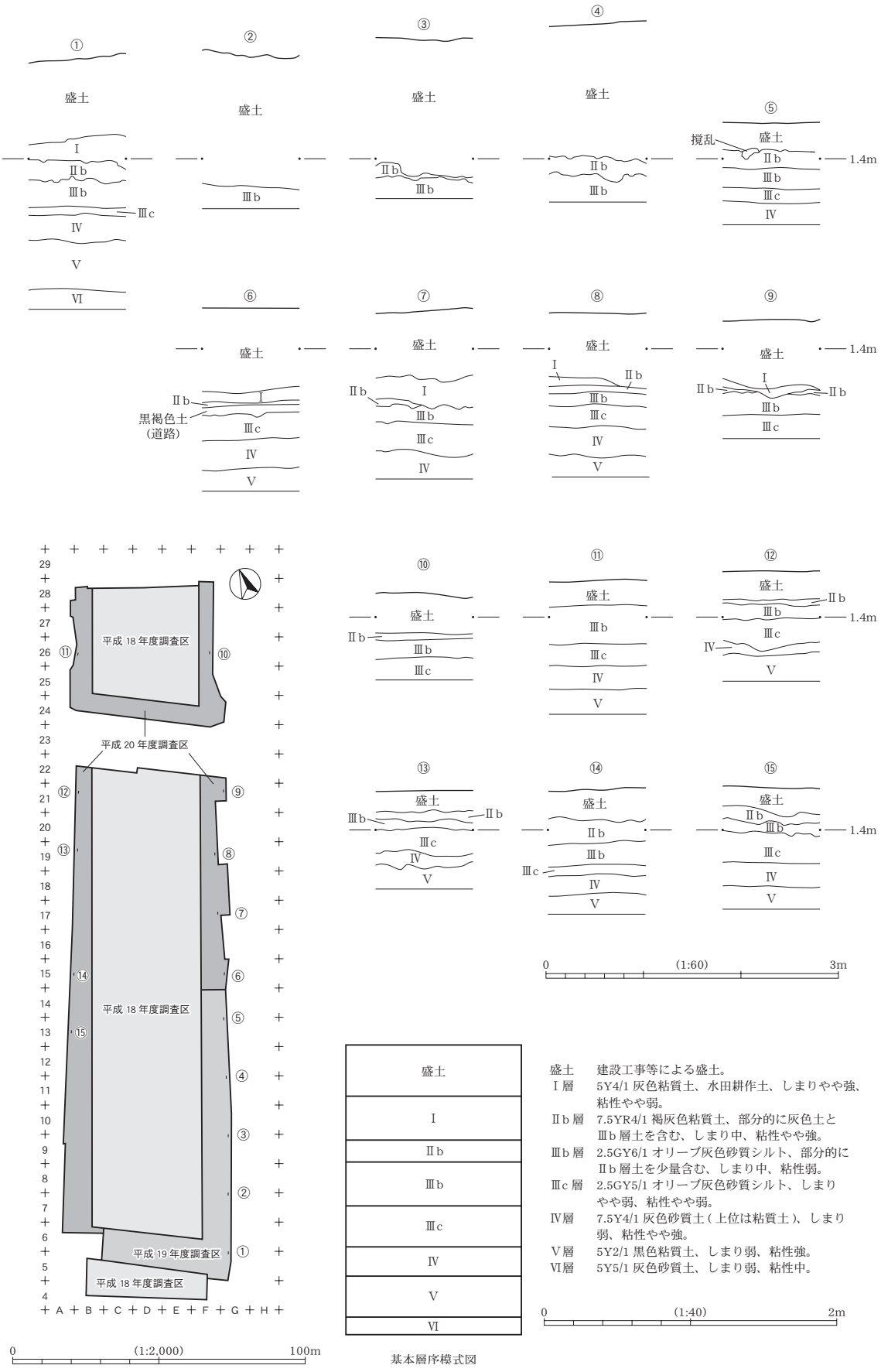
D　層　　序

1）概　　要

遺跡の層序は、平成 18 年度調査に従いⅠ～Ⅵ層に分層した。平成 19 年度及び 20 年度調査区の大部分は、水田耕作や土地改良などによる撹乱を受け中世の遺物包含層であるⅡｂ層までが撹拌されていた。また、平成 18 年度調査区では、一部でⅡａ層を、16 グリッドライン付近でⅢａ層を確認したが、平成 19 年度及び 20 年度調査区では確認できなかった。Ⅲｂ層はオリーブ灰色のシルト質土で、遺構検出面となっている。

2）基 本 層 序（第 88 図）

Ⅰ層は、20 ～ 40 ㎝の厚さを持つ水田耕作土主体である。ただし本調査区の大部分において道路建設により削り取られていた。また、中世の遺物包含層であるⅡｂ層も大部分が水田耕作により撹拌されていた。層厚は 10 ～ 15 ㎝である。Ⅲｂ層は層厚 30 ㎝で、オリーブ灰色を呈す。土質は砂質シルトで、中世の遺構検出面である。Ⅲｃ層は層厚 25 ～ 30 ㎝でⅢｂ層と同色だが、やや暗い色調である。砂が増し、しまりが更に弱くなる。Ⅳ層は層厚 20 ～ 25 ㎝で、灰色の粘質土であるが、葦などの根痕にⅢ層土が入り

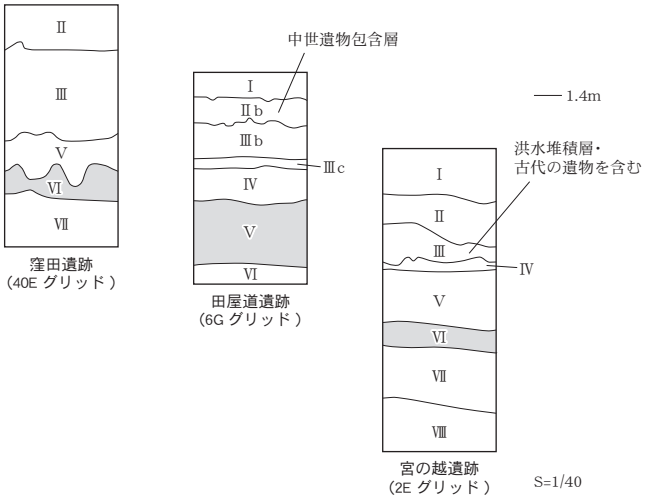


第 88 図　田屋道遺跡Ⅱ基本層序

込む所は斑状を呈する。Ⅴ層は黒色を呈する粘質土である。Ⅴ層は窪田遺跡［前川ほか2007］、宮の越遺跡［大島ほか2008］でも確認され、放射性炭素年代測定の分析では、縄文時代後期の土層の可能性を指摘している（第Ⅴ章４）。平成18年度の調査ではⅥ層まで土層観察を行ったが、平成19・20年度調査区は狭小のため、作業の安全を考慮しⅢｃ層以下はトレンチ調査とした。

３）　田屋道遺跡におけるⅤ層（黒色土層）の年代と環境

日沿道建設に伴い、村上市（旧神林村）に位置する田屋道遺跡［大島ほか2008］、宮の越遺跡［大島ほか2008］、窪田遺跡［前川ほか2007］を調査したところ、標高0.3～0.8mにおいて黒色土層を確認した。黒色土は粘性の強い土質で、田屋道遺跡のⅤ層、宮の越遺跡のⅥ層、窪田遺跡のⅥ層としたものがこれに該当する。



第89図　黒色土層の標高

田屋道遺跡のⅤ層は、放射性炭素年代測定（AMS）の補正年代から、BC1,550年ころと想定でき、宮の越遺跡、窪田遺跡の分析からも縄文後期に堆積した可能性が高い（第Ⅴ章４）。荒川右岸の低地部にある中部北遺跡では、標高1.0～1.8mで縄文時代中期から後期の遺物や遺構を検出し［継ほか2008］、生活面の標高は窪田遺跡や田屋道遺跡の黒色土のそれと近い。また、田屋道遺跡の平成18年度調査では、遺構底面が黒色土に達する溝（SD673）の最下層から縄文後期と考えられる土器底部が出土した［大島ほか前掲］。今後、遺跡間における土層の連続性について検証していく必要があるが、旧神林村域の平野部ではこの黒色土層が比較的広域に分布することから縄文時代の鍵層になる可能性がある。

花粉分析からは、当時遺跡後背の丘陵で落葉広葉樹と針葉樹が混在する森林が広がり、低地の比較的乾いた部分では常緑広葉樹が生育していたとし、縄文時代における遺跡周辺の環境は現在とほぼ同様と推測している。また、主観的ではあるが、各遺跡の土層が比較的水平に堆積していること、中世・古代の生活面から黒色土までの堆積が薄く、大規模な洪水起源の堆積物がないことから、遺跡周辺は比較的安定した土壌堆積環境にあったと推測できる。

２　遺　　構

Ａ　記述の方法

遺構の図面図版は、全体図・分割図・個別図で構成している。全体図は図版66において1/500の縮尺ですべての遺構を表示した。分割図は調査区域を６分割して1/250の縮尺で作成した（図版67～72）。個別図の縮尺については1/40を原則とした。また、平成18年度調査区に関わる遺構については、土層説明は18年度調査成果に対応させ、観察表の「規模」には合計した規模を記載した。

B　遺構の分類

1）　堆積状況の分類

ピットのうち柱根・柱痕の認められるものについては、平成 18 年度調査［大島ほか 2008］に従って覆土の堆積状況を分類した（第 24 表）。

細分類 a	1	上位または上半に、人為的埋土と思われる堆積土層を含むもの。
	2	下位または下半に、人為的埋土と思われる堆積土層を含むもの。
細分類 b	1	柱痕部分埋土がⅡ層土主体のもの。
	2	柱痕部分埋土がⅡ・Ⅲ層混合土主体のもの。
細分類 c	1	掘形部分埋土がⅡ層土主体のもの。
	2	掘形部分埋土がⅡ・Ⅲ層混合土主体のもの。
	3	掘形部分埋土がⅢ層土主体のもの。
細分類 d	1	上位にⅡ層土主体の別の層が堆積するもの。
	2	上位にⅡ・Ⅲ層混合土主体の別の層が堆積するもの。

第 24 表　遺構覆土の堆積状況の分類

C　遺 構 各 説

1）　概　　要

平成 19・20 年度調査で検出した遺構は、掘立柱建物 6 棟（うち 1 棟は平成 18 年度調査で一部を検出していた）、建物の付属施設の可能性があるピット列 2 条、井戸 3 基、土坑 10 基、性格不明遺構 5 基（うち 1 基は平成 18 年度調査区からの延長分）、溝 33 条（うち 23 条は平成 18 年度調査区からの延長分）、ピット 232 基（掘立柱建物及びピット列以外のものは 176 基）、杭 14 本である。遺構密度は調査区の南西側が疎で、北東側の 17 ～ 22F グリッドで密になる。

掘立柱建物については、東方向の伸びを確認するため、二期線工事部分の 17 ～ 19G グリッドの一部を拡張した（図版 73）。この結果、17 ～ 19F グリッドで南北棟を 4 棟検出した。SB37 ～ 39 の 3 棟は、ほぼ同じ位置に建て替えられていた。井戸は 3 基検出し、形態及び覆土はそれぞれに特徴があった。また、平成 18 年度調査区からの延長である大型の区画溝（SD535）は、その屈曲部分を確認できた。

2）　掘立柱建物

掘立柱建物は 6 棟検出した。そのうち、SB28 は平成 18 年度調査で建物の一部が調査区の東側に伸びると推測していたものである。平成 20 年度調査で残りの柱穴を検出した。また、SB41 は平成 18 年度調査区内の柱穴 4 基と平成 20 年度調査で検出した柱穴 4 基を合わせ、新たな掘立柱建物とした。

SB37 ～ 40 の 4 棟は平成 20 年度調査区で検出した南北棟の側柱建物である。SB37 ～ 39 はほぼ同一の場所に建てられているが、建物の長軸方向、柱穴の規模、礎盤（板）の樹種などを考慮し、建て替えを想定した。建物の長軸は SB37・38 が N21° E、SB39 が N24° E で、平成 18 年度調査区の建物の長軸にほぼ一致する。また、柱穴の規模は、西側の側柱が大型で、東側の側柱はやや小型である。礎盤（板）の樹種はクリ材を使用するものと、そうでないものがある。柱は底部下に打ち込むものと、掘形に据えるものがある。

SB37（図版 70・73 ～ 75・131 ～ 133）

17F、18F、19F グリッドに位置する南北棟である。桁行は西側で 5 間（12.1m）、東側で 6 間（12.26m）、梁間 1 間（1.28m）の側柱建物で、長軸方向は N21° E である。桁行の柱間隔はおおむね 2.5m だが、東側の P1038 だけその中間に位置する。西側は南北端の P1062・1067 がやや小型で、径が 0.3m 程度、深さが 0.1m 程度で、中央の P1063 ～ 1066 はやや大型で、径が 0.4m ほど、深さが 0.3m ほどである。東側の柱穴列は全体的に小型で、径が 0.3m ほど、深さが 0.15m ほどのものである。

P1064・1068・1070・1071・1072 で礎盤（板）が出土した。P1064 は椀の粗型を転用したと考えられる円盤状の材（34）を使用している。P1068・P1070 ～ P1072 の礎盤（板）は、樹種がクリで、P1070 と P1071 の礎盤（板）は木目の間隔が合うことから同一材の可能性がある。

SB38（図版 70・73 ～ 76・131 ～ 134）

17F、18F グリッドに位置する南北棟である。SB38 の P1030・1033・1172 は、SB39 の P1026・1029・1032 より古い。桁行は西側で 4 間（9.8m）、東側で 5 間（9.97m）、梁間は 1 間（2.66m）の側柱建物で、長軸方向は N21° E である。桁行の柱間隔はおおむね 2.3m で、西側の P1033 と P1049 の間は 4.2m と広い。また東西の側柱とも北端の柱間隔は 1.3m とやや狭い。P1036 で礎盤（板）が出土した。西側の側柱は、南北端がやや小型であるのに対し中央の P1033・1172 が大型である。総じて深さは 0.2m ほどと浅い。東側は径 0.3m ほどで、深さは南北端が浅く 0.1m ほど、中央の P1030・1036・1041 は 0.3m ほどとやや深い。床面積（梁間×桁行）は約 26 ㎡である。

SB39（図版 70・73 ～ 76・131 ～ 134）

17F、18F グリッドに位置する南北棟である。桁行は 3 間（6.85m）、梁間は 1 間（1.98m）の側柱建物で、長軸方向は N24° E である。桁行の柱間隔はおおむね 2.3m である。P1026・1040・1050・1053 で礎盤（板）が出土した。P1026・1040 の礎盤（板）は樹種がモクレン属で、２枚の板を十字に重ねている。P1040 の上位の礎盤は腐食が著しかった。西側の側柱は南端の P1050 以外、径 0.4 ～ 0.7m と大型であるが、深さは 0.1m ほどと浅い。東側はやや小さく径 0.35m ほど、深さは 0.15m ほどである。床面積（梁間×桁行）は約 14 ㎡である。

SB40（図版 70・73・74・77・135）

18F、19F グリッドに位置する南北棟である。桁行は西側で 3 間、東側で 4 間（4.82m）、梁間は南側で 1 間、北側で 2 間（2.65m）の側柱建物で、長軸方向は N20° E である。桁行の柱間隔は 1 ～ 2.5m、梁間の柱間隔は北側は 1.1 ～ 1.6m である。P991 で柱根がほぼ鉛直に打ち込まれた状態で出土した。P984 の覆土中から、炭化したイネ科の種子が出土した。また、建物の北側にある井戸 SE1004 の覆土からも、炭化したイネ科の種子が出土している。床面積（梁間×桁行）は約 13 ㎡である。

SB41（図版 69・70・78・136）

15F、16E・F グリッドに位置する東西棟である。開渠により一部壊されているが、桁行が 3 間（7.42m）、梁間は 2 間（4.13m）と考えられる側柱建物で、長軸方向は N56° W である。桁行の柱間隔は 2.2 ～ 2.9m、梁間の柱間隔は東側は 1.8 ～ 2.3m である。P299 は SB41 と SB11 の両方の建物の柱穴である。P1164 で柱根が残る。床面積（梁間×桁行）は約 31 ㎡である。

SB28（図版 70・73・74・77・143）

19F グリッドに位置する総柱建物である。平面形は少し歪んだ方形である。桁行は 2 間（4.79m）、梁間は 2 間（4.26m）、長軸方向は N18° E である。平成 18 年度調査で検出していた建物であるが、未調査部分については柱穴の位置を想定していた。平成 20 年度調査で、想定した位置に P1006 を検出し建物の規模が判明した。床面積（梁間×桁行）は約 20 ㎡である。

3）ピット列

柱穴が直線状に並んでいるが、建物など特定施設として認識できなかったものをピット列とした。ピット列は二条検出した。P1013・1020・1031・1039 の 4 基で構成するピット列 1 と、P1078・1081・1083・1084・1085 の 5 基で構成するピット列 2 である。列の軸はともに N24° E である。

ピット列 1（図版 70・73・74・76・132・137）

18F グリッドに位置する。径 0.5m ほどのピットからなり、P219 を含めると平成 18 年度調査区の

SB14 の廂とした P723・338・663・332 の軸と直交する。P1020・1039 では礎盤（板）が出土した。

ピット列２（図版 70・73・74・76・77・132・137）

17F・18F グリッドに位置する。ピット列１と軸は平行するが、平面的に見るとピットの並びは互い違いになる。P1083 以外はピット列１に比べやや小型で、径 0.3m ほどである。17 ～ 19G グリッドの一部を東側に拡張したが、ピット列２に伴う遺構は検出しなかった。

４） 井　　戸

井戸は３基検出した。いずれも井戸側などの施設は検出しなかった。遺物は珠洲焼、陶磁器類、箸状木製品、棒状木製品、曲物の蓋、漆塗椀などが出土した。また、SE1004 の覆土から炭化したイネ科の種子が、SE1090 では未炭化のイネの籾殻が出土した。

SE1004（図版 70・73・79・137・138）

19F13･18 グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸は 0.88m、短軸は 0.84m、深さは 1.32m である。断面形はＵ字状である。検出時は遺構の外縁に黒色土が回り環状をなしていた。黒色土からは炭化したイネ科の種子や木屑が出土した。６・７層では先端を尖らせた杭状木製品（58）が直立した状態で出土した。遺物は珠洲焼の壺Ｔ種（２）、箸状木製品（51 ～ 56）、曲物の蓋（57）、杭状木製品（58）、棒状木製品（59 ～ 64）、板材（65・66）、木片、礫（スス付着）などが出土した。

炭化したイネの種子を含む黒色土について、遺構の機能や覆土の性格を探るため寄生虫分析･灰像分析･花粉分析･種実遺体分析を行った。分析では寄生虫を確認できないためトイレ遺構の可能性は低い。また、灰像分析でイネ属の葉部や籾部に由来する珪化組織片を確認したことから、黒色土の成因についてはイネ科植物を燃やしたためと推測され、イネの種子が２～７層にあることから、遺構を一度に埋めたと考えられる。黒色土内より井戸の廃棄儀礼に関連するとされる遺物が出土していることと合わせると、黒色土も井戸の廃棄儀礼に伴うものの可能性がある。

SE1090（図版 70・79・138）

20F16･17･21･22 グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、長軸は 1.78m、短軸 1.48m、深さ 1.39m である。断面形は漏斗状である。８層では未炭化のイネ科植物の種子や籾殻が出土した。下位の壁面からは棒状の木製品（72・73）が立った状態で出土し、壁面に貼りつくように樹皮が残っていた。木製品が出土した場所の井戸壁面は砂層で崩落しやすいことから、壁面の補強材として使用された可能性がある。遺物は珠洲焼の壺Ｔ種（３）、青磁の椀（４）、箸状木製品（67）、漆塗椀（68）、下駄（69）、曲物の底板（70）、曲物の蓋（71）、棒状木製品（72 ～ 74）、マツの種子、木片、樹皮などが出土した。遺物は６～９層で多く出土した。

SE1110（図版 70・71・79・139）

20F12・13・17・18 グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸は 1.24m、短軸 1.08m、深さ 1.71m である。断面形は漏斗状である。遺物は珠洲焼の壺Ｔ種（５）・擂鉢（６）、箸状木製品（75）、板材（76）が出土した。76 は形状から柱材などに使用していた可能性がある。

５） 土　　坑

土坑は 10 基検出した。径が 0.5 ～ 1 m の円形または楕円形を呈するものが多い。遺物が出土したのは２基で、SK1141 からは須恵器の横瓶（７）の破片が出土した。性格が想定できる土坑は少ないが、

SK920 は SD42 内にあることから水を溜める施設、そして SK1014 は SB37・38 の傍らで検出したことから、建物の付属施設の可能性がある。

SK920（図版 69・80・139）

12F23、12G 3 グリッドに位置する。平面形は不整長楕円形で長軸は（1.13）m、短軸は 0.68m、深さは 0.47m である。断面形は階段状である。SD42 の確認作業のためトレンチを設置した際の断面観察で遺構を確認した。覆土の堆積状況を確認するため長軸方向にトレンチを掘削したところ、覆土が SD42 から流れ込むように連続して堆積していたため、SD42 の付属施設と考えられる。覆土上半は白色ブロックが混じる。遺物は大型の円礫（94）1 点が遺構底面から出土した。

SK922（図版 67・68・80）

8A18･19･23･24 グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸は 0.54m、短軸は 0.53m、深さは 0.14m である。断面形は台形状である。出土遺物はない。

SK929（図版 68・80）

10A19 グリッドに位置する。西半は調査区外であるが、平面形は円形と考えられる。長軸は（0.26）m、短軸は 0.42m、深さは 0.08m である。断面形は台形状である。出土遺物はない。

SK932（図版 70・80）

17B 3・8 グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸は 0.82m、短軸は 0.8m、深さは 0.07m である。断面形は弧状である。出土遺物はない。

SK933（図版 70・80）

17B 6 グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸は 0.64m、短軸は 0.55m、深さは 0.1m である。断面形は弧状である。SD1173 より新しい。出土遺物はない。

SK1014（図版 70・73・80・139）

18F14・15 グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長軸は 0.92m、短軸は 0.58m、深さは 0.31m である。断面形は台形状である。SB37・38 に近いことから、掘立柱建物の付属施設の可能性がある。出土遺物はない。

SK1119（図版 71・72・80）

24F24 グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸は 0.54m、短軸は 0.47m、深さは 0.2m である。断面形は台形状である。出土遺物はない。

SK1121（図版 72・80）

25F15･20 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸は 1.54m、短軸は 1.19m、深さは 0.19m である。断面形は弧状である。出土遺物はない。

SK1122（図版 72・80）

26F11･12 グリッドに位置する。平面形は不整形で、長軸は 1.31m、短軸は 1.03m、深さは 0.17m である。断面形は弧状である。出土遺物はない。

SK1141（図版 71・80・139）

21F14 グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸は 0.59m、短軸は 0.55m、深さは 0.32m である。断面形は半円状である。遺構の形状や規模から柱穴の可能性も考えたが、断面観察で柱痕が確認できないことから土坑とした。遺物は須恵器の横瓶（7）が出土した。

6） 溝

溝は 33 条を調査し、そのうち平成 20 年度調査で新たに検出した溝は SD930・945・996・1093・1094・1120・1153・1170・1171・1173 である。また平成 19・20 年度は、平成 18 年度調査区からの延長分を含め道路側溝の可能性を考えたもの（SD237・252・286・289）、区画をなすもの（SD2・42・186・234・237・288・525・535・579・847・1094）を調査した。溝の長軸は N5° E ～ 20° E とその直交方向の N56° W ～ 75° W のもの（SD186・234・286・288・289・525・535・847・1094）と、N30° E ～ 35° E とその直交方向の N40° W ～ 55° W のもの（SD2・42・237・252）に大別できる。SD286・289 の長軸は、平成 18 年度調査では区画溝 SD288 との関連を考えていたが、平成 20 年度調査で若干南に向きを変えることから（15・16F グリッド付近）、SD237・252 に平行する可能性がある。

SD1（図版 67・80）

5B・C・D・E グリッドに位置する。平成 18 年度調査区から続く直線的な溝であるが、農業用水管埋設による撹乱で南側が壊れている。長軸方向は N72° W である。SD2 より古い。断面形は弧状で、長さは（28.12）m、幅は 1.53m、深さは 0.14m である。出土遺物はない。

SD2（図版 67・68・80）

4E、5E、6E、7E、8E・F、9F・G グリッドに位置する。平成 18 年度調査区から続く溝であるが、平成 19 年度調査で直角に曲がり、東に伸びることが分かった。長軸方向は南北方向が N31° E で、東西方向が N55° W である。SD1 より新しい。断面形は階段状で、長さは南北に（49.8）m、東西に（8.86）mで、幅は 2.1m、深さは 0.42m である。遺物は曲物の側板（77）、棒状木製品（78）が出土した。

SD42（図版 68・69・81）

9F、11F、12F・G、13G グリッドに位置する。平成 18 年度調査区から続く直線的な溝である。10F グリッド付近は撹乱により壊れている。長軸方向は N30° E で、南端は SD2 の屈曲部で交わる。SD237・252 の長軸と直交関係である。断面形は階段状で、長さは（39.25）m、幅は 1.16m、深さは 0.3m である。P913 より古く、SK920 については同時に機能したと考えられる。遺構の性格は区画溝であろう。遺物は須恵器の無台杯（8）が出土した。

SD139（図版 68・69・81）

11A、12A・B・C、13C・D・E、14E・F グリッドに位置する。平成 18 年度調査区から続く直線的な溝で、長軸方向は N84° E であり、ほかの大型溝とは軸が違う。SD252 より古い。断面形は台形状で、長さは（58）m、幅は 1.38m、深さは 0.25m である。遺物は珠洲焼の甕（9）が出土した。

SD140（図版 69・81）

13A・B・C・D グリッドに位置する。平成 18 年度調査区から続く直線的な溝で、長軸方向は N72° W である。断面形は弧状で、長さは（23.34）m、幅は 2 m、深さは 0.19m である。平成 20 年度調査区においては南側部分が撹乱で壊れている。出土遺物はない。

SD186（図版 69・70・81・140）

12B、13B、14B、15B、16B グリッドに位置する。平成 18 年度調査区から続く直線的な溝で、長軸方向は N20° E である。SD286・303 と重複するが新旧は不明である。SD288 との重複関係は、本遺構が SD288 より北に伸びないこと、両者の覆土が類似することから、ある期間、同時に機能していた可能性がある。また、SD289 より新しい。断面形は台形状で、長さは（37.41）m、幅は 0.95m、深さは 0.18m

である。出土遺物はない。

SD234（図版 70・71・81・140）

16C、17B・C、18B・C、19B、20B、21B、22B グリッドに位置する。平成 18 年度調査区から続く直線的な溝で、長軸方向は N12° E である。SD945 より古い。断面形は階段状で、長さは（59.82）m、幅は（2.1）m、深さは 0.34m である。平成 18 年度調査成果を合わせると SD237・288・535 とともに区画を呈すると考えられる。遺物は漆塗椀の漆膜片、木片、礫が出土した。

SD236（図版 69・70・81・141）

14F・G、15D・E・F、16C・D グリッドに位置する。平成 18 年度調査区から続く直線的な溝で、長軸方向は N43° W である。SD237 より新しい。断面形は台形状で長さは（45.12）m、幅は 0.8m、深さは 0.27m である。出土遺物はない。

SD237（図版 69・70・81・141）

14F・G、15D・E・F・G、16C・D グリッドに位置する。平成 18 年度調査区から続く直線的な溝で、長軸方向は N43° W である。P1058 より新しく、SD236 より古い。断面形は階段状で、長さは（56.29）m、幅は 2.2m、深さは 0.33m である。調査区の東側壁面では、南側にある SD252 との間に灰白色土の盛り上がりを確認した。平成 18 年度調査では道路側溝の可能性を考えたが、本遺構は連続して溝状に検出したのに対し、SD252 は不連続に検出したことから、溝の機能に違いがある可能性もある。遺物は須恵器の横瓶（10）、珠洲焼の擂鉢（11）、木片が出土した。

SD238（図版 69・81・141）

14F グリッドに位置する。平成 18 年度調査区から続く直線的な溝で、長軸方向は N45° W である。断面形は弧状で、長さは（8.12）m、幅は 0.63m、深さは 0.09m である。SD252 より新しい。平成 20 年度調査区では遺構上部が撹乱により壊れているが、平成 18 年度調査区では上部まで残っており、覆土の状況から SD252 の掘り直しと考えている。出土遺物はない。

SD252（図版 69・81・141）

14E・F、15D・E グリッドに位置する。平成 18 年度調査区から続く直線的な溝で、長軸方向は N48° W である。断面形は弧状で、長さは（4.1）m、幅は 0.56m、深さは 0.06m である。SD139 より新しく、SD238 より古い。東側壁面で SD237 との間に灰白色土の盛り上がりを確認した。平成 18 年度調査では SD237 とともに道路側溝の可能性を考えたが、SD237 と異なり不連続に検出することから、機能が違う可能性もある。出土遺物はない。

SD286（図版 69・70・82・131・141）

15C・D・E・F・G、16A・B・C・D・E グリッドに位置する。平成 18 年度調査区から続く直線的な溝で、長軸方向は N60° W であるが、本次調査の 15F グリッドでやや南に振れ N44° W となり、やや南に向きを変える。15F グリッドでは幅が広がる。SD186 との新旧関係は、重複部分が撹乱により壊れているため、不明である。断面形は階段状で、長さは（52.77）m、幅は 2 m、深さは 0.25m である。調査区東壁で SD289 との間は黒褐色土と灰白色土が撹拌されていた。平成 18 年度の調査では道路側溝の可能性を指摘した。遺物は須恵器の杯蓋（12）、土師質土器の皿（13）が出土した。

SD288（図版 70・82・140・141）

16A・B・C・D・E・F・G グリッドに位置する。平成 18 年度調査区から続く直線的な溝で、16F グリッドでは幅が広がる。長軸方向は N64° W である。SD289 より新しい。調査区の西側では SD186 と重複し、

合流部の覆土が類似することとほぼ直角に交わりそれより北には伸びていないことから、同時に存在した可能性がある。遺構の性格は区画溝と考え、SD234・237・535 を合わせて区画を呈すると考えられる。断面形は階段状で、長さは（50.87）m、幅は 2.15m、深さは 0.22m である。出土遺物はない。

SD289（図版 69・70・82・131・140・141）

15F・G、16A・B・C・D・E・F・G グリッドに位置する。平成 18 年度調査区から続く直線的な溝で、長軸方向は平成 18 年度調査区では N62° W、本次調査の 16F グリッドではやや南へ振れ N44° W を示す。対になる道路側溝の可能性がある SD286 もほぼ同じ方向に向きを変えることから、SD237・252 と平行する可能性がある。P948・1160 より新しく、SD186・288、P1091・1159・1164 より古い。断面形は階段状で、長さは（52.61）m、幅は 0.83m、深さは 0.25m である。遺物は須恵器の横瓶（14）が出土した。

SD303（図版 69・70・81・141）

15C・D、16B・C グリッドに位置する。平成 18 年度調査区から続く直線的な溝で、長軸方向は N42° W である。SD186 との新旧関係は不明である。断面形は弧状で、長さは（21.09）m、幅は 1.4m、深さは 0.13m である。道路側溝の可能性がある SD252 の延長上にある。出土遺物はない。

SD392（図版 71・82・141）

21C・D・E・F、22B・C・D・E・F・G グリッドに位置する。平成 18 年度調査区から続く直線的な溝であるが、東側で北に向きを変えることを確認した。長軸方向は東西方向が N65° W である。南北方向は大部分が調査区外であり長軸は特定できない。SD1153、P1136 より新しく、P1156 より古い。断面形は台形状で、長さは（44.31）m、幅は 0.6m、深さは 0.26m である。遺物は珠洲焼の甕、木片、礫（スス付着）が出土した。

SD525（図版 71・81・141）

21D・E・F・G、22D グリッドに位置する。平成 18 年度調査区から続く L 字状の溝で、長軸方向は東側が N73° W、西側が N16° E である。P1142 より古い。断面形は台形状で、長さは（30.26）m、幅は 0.95m、深さは 0.42m である。SD847・594 とともに方形の区画を呈すると考えられる。平成 20 年度の調査で、21F・G グリッド付近で溝が途切れていることを確認した。遺物は珠洲焼の擂鉢（15・16）、青磁の椀（17）、陶器、礫（スス付着）が出土した。

SD535（図版 71・72・83・141）

24B、25B・C・D・E・F グリッドに位置する。平成 18 年度調査区から続く L 字状の溝で、長軸方向は東側が N72° W、西側が N12° E である。調査区北西の 25B グリッド付近で SD1093・1094 と重複し、それらより新しい。ただし、SD1094 は 28B グリッド付近で本遺構に平行するように向きを変えることから、関連があると考えられる。断面形は階段状で、長さは（46.56）m、幅は 2.3m、深さは 0.14m である。遺構の性格は SD234・237・288 を合わせ区画を呈すると考えられる。出土遺物はない。

SD579（図版 71・82・141）

21E・F・G、22E グリッドに位置する。平成 18 年度調査区から続く L 字状の溝で、長軸方向は東側が N67° W、西側が N15° E である。P1138・1152・1154 より古い。断面形は台形状で、長さは（16.45）m、幅は 0.9m、深さは 0.22m である。遺物は珠洲焼の壺 T 種（18）が出土した。

SD673（図版 71・84・142）

20E・F グリッドに位置する。平成 18 年度調査区から続く直線的な溝で、長軸方向は N75° W である。今回の調査で検出した SX1095 と連続しており、覆土の堆積状況から SX1095 と同時に存在したと考え

られる。断面形は台形状で、長さは（7.21）m、幅は 0.82m、深さは 0.65m である。遺物は遺構底面から棒状木製品（81）と柱状木製品（82）が出土した（遺物の記載は SX1095 で一括して行う）。平成 18 年度調査区においても、柱状木製品が溝の底部から横位で出土した。出土状況から、礎盤のように構造物の沈下を防ぐものと推測される。

SD835（図版 71・72・83）

24C グリッドに位置する。長軸方向は北側では N18° E、南側では N84° W で、平面形は西に曲がる鉤状である。断面形は台形状で、長さは（4.9）m、幅は 1 m、深さは 0.27m である。SD1171 より新しい。出土遺物はない。

SD838（図版 71・72・83）

24B・C グリッドに位置する。長軸方向は北側では N18° E、南側では N81° W で、平面形は西に曲がる鉤状である。断面形は台形状で、長さは（4.65）m、幅は 1.3m、深さは 0.29m である。遺物は土師器の長甕（19）が出土した。

SD847（図版 71・72・83）

24D グリッドに位置する。直線的な溝で、長軸方向は N15° E である。断面形は台形状で、長さは（5.18）m、幅は 1.05m、深さは 0.2m である。平成 18 年度調査では SD525・594 を合わせ方形の区画をなすと考えた。出土遺物はない。

SD930（図版 68・82）

11B グリッドに位置する。鉤状の溝で、長軸方向は東側で N25° W、西側で N24° E である。SX89 より古い。断面形は弧状で、長さは（4.48）m、幅は 0.67m、深さは 0.19m である。出土遺物はない。

SD945（図版 71・81・140）

22B グリッドに位置する。直線的な溝で、長軸方向は N60° W である。SD234 より新しい。断面形は台形状で、長さは（3.86）m、幅は 1.09m、深さは 0.25m である。出土遺物はない。

SD996（図版 70・73・82）

19F グリッドに位置する。直線的な溝で、長軸方向は N71° W である。P990・997・1003 より新しい。断面形は台形状で、長さは（2.74）m、幅は 0.39m、深さは 0.21m である。南側に SB40 があることから建物に伴う溝の可能性がある。出土遺物はない。

SD1093（図版 72・83・141）

24B、25A・B グリッドに位置する。直線的な溝で、長軸方向は N21° W である。SD535 より古い。断面形は台形状で、長さは（6.65）m、幅は 1.25m、深さは 0.45m である。出土遺物はない。

SD1094（図版 72・83・142）

25B、26B、27A・B、28A・B グリッドに位置する。L 字状の溝で、長軸方向は東西方向で N87° W、南北方向で N 8° E である。P1109 より新しく、SX1092 より古い。また SD535 より埋没年代は古いが、T 字状に交わるため構築年代の新旧を把握することはできなかった。断面形は弧状で、長さは（35.08）m、幅は 1.42m、深さは 0.15m である。25B グリッドから始まり、30m ほど北へ伸び、SD535 に平行して東に向きを変える。SD234・237・288・535 による区画の北側に小区画をなしている。出土遺物はない。

SD1120（図版 71・72・82）

24F・G グリッドに位置する。直線的な溝で、長軸方向は N78° W である。断面形は台形状で、長さは（1.8）m、幅は 0.41m、深さは 0.11m である。出土遺物はない。

SD1153（図版 71・82・141）

21F・G、22F・G グリッドに位置する。直線的な溝で、長軸方向は N65° W である。SD392 より古い。断面形は弧状で、長さは（4.47）m、幅は 1.4m、深さは 0.05m である。出土遺物はない。

SD1170（図版 71・83）

24D グリッドに位置する。直線的な溝で、長軸方向は N16° E である。SD1171 より新しい。断面形は階段状で、長さは（1.65）m、幅は 1.3m、深さは 0.18m である。長軸方向から SD524 と関連があると考えられる。出土遺物はない。

SD1171（図版 71・72・83）

24C・D グリッドに位置する。直線的な溝で、長軸方向は N70° W である。SD835・1170 より古い。断面形は階段状で、長さは（9.74）m、幅は 1.12m、深さは 0.08m である。SD535 に平行する。遺物は青磁の椀（20・21）が出土した。

SD1173（図版 70・80・141）

16B、17A・B グリッドに位置する。直線的な溝で、長軸方向は N43° W である。SK933 より古い。断面形は台形状で、長さは（5.3）m、幅は 1.1m、深さは 0.16m である。出土遺物はない。

7） 性格不明遺構

性格不明遺構は 5 基検出した。断面形状は台形状をなすものが多いが、SX1095 は断面形が漏斗状を呈し井戸に似た形態をしている。遺物が出土したのは SX89・1095 である。

SX89（図版 68・83・142）

11B 7・8・12・13・17・18・22・23 グリッドに位置する。SD930 より新しい。東半分を平成 18 年度に調査しており、平成 20 年度調査により平面形が長楕円形であることが分かった。長軸は 7.08m、短軸は 2.9m、深さは 0.37m である。断面形は台形状である。平成 18 年度調査では、珠洲焼・青磁・陶器・黒漆塗りの木片などが出土したが、今回は木片が出土したのみである。

SX1092（図版 72・83・142）

27A24・25、28A21 グリッドに位置する。SD1094 より新しい。遺構の西側は調査区外に伸びるため、平面形は不明である。長軸は（2.83）m、短軸は（0.65）m、深さは 0.65m である。断面形は台形状である。出土遺物はない。

SX1095（図版 71・84・142・143）

20F14・19 グリッドに位置する。覆土の堆積状況から、SD673 と一連の遺構と考えられる。平面形は楕円形で、長軸は 1.41m、短軸は 0.96m、深さは 0.92m である。断面形は漏斗状である。遺物は覆土中から珠洲焼の擂鉢（22・23）、鍬状木製品（79）、遺構底部から板状木製品（80）、ススが付着した礫（95・96）などが出土した。底面は透水層に達しており水が湧いていた。井戸として機能したと考えられる。

SX1108（図版 72・84）

25B 1 グリッドに位置する。遺構の西側は撹乱により壊れているため平面形は不明である。長軸は（1.03）m、短軸は（0.72）m、深さは 0.09m である。断面形は台形状である。出土遺物はない。

SX1162（図版 71・84）

21G 3・4 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸は（0.41）m、短軸は不明、深さは 0.15m である。断面形は台形状である。出土遺物はない。

8）ピ　ッ　ト

ピットは232基検出し、掘立柱建物及びピット列以外のものは176基である。17～22Fグリッドで多く検出し、隣接する平成18年度調査区でも多数のピットを検出した。ただし21・22F・Gグリッドは現市道に接しており全体を発掘していないため、建物に認定できなかったピットが多い。ピットの掲載については、柱根や礎盤（板）が残るものや柱痕跡があるもの（P901、902、944、946、953、954、958、973、985、987、988、1003、1008、1028、1052、1054、1057、1058、1074、1080、1112、1131、1139、1140、1154、1167、1169）を図示し、記述は柱根や礎盤が残るものについて行った。そのほかは観察表に規模や形状等を記載した。

P901（図版68・84・143）

9G4・9グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸は0.15m、短軸は0.14m、深さは1.03mである。断面形はV字状で柱根（83）が掘形底部下へ打ち込まれている。調査終了後に付近を掘り下げ、関連のあるピットの検出に努めたが確認できなかった。柱根はほぼ鉛直にV層中まで打ち込まれている。

P902（図版68・69・84・143）

11G 5グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸は0.27m、短軸は0.21m、深さは0.11mである。断面形は半円状で底部から礎盤（板）（84）が出土した。調査終了後に付近を掘り下げ、関連のあるピットの検出に努めたが確認できなかった。

P985（図版70・73・84・143）

19F12グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸は0.23m、短軸は0.22m、深さは0.4mである。断面形はU字状である。柱根（85）が残存する。柱根の芯部は腐食しているが、下面は平坦な加工と推測される。

P1003（図版70・73・84）

19F13グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸は0.28m、短軸は0.27m、深さは0.25mである。断面形は台形状である。SD996より古い。柱根（86）が残る。柱の下面の加工は腐食のため不明である。

P1028（図版70・73・85）

18F23グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長軸は0.28m、短軸は0.15m、深さは0.42mである。断面形は漏斗状である。柱根が残るが、腐食が著しく加工等の詳細は不明である。柱は斜めに打ち込まれている。

P1057（図版69・85・143）

15F17グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸は0.28m、短軸は0.24m、深さは0.25mである。断面形は階段状である。柱根(87)が残り、柱の下面は斜めに加工している。柱は斜めに打ち込まれている。

P1058（図版69・85・144）

15F12グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸は0.2m、短軸は0.17m、深さは0.16mである。断面形は階段状である。SD237より古い。柱根（88）が残る。

P1074（図版70・73・85）

19F21グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸は0.39m、短軸は0.38m、深さは0.3mである。断面形は台形状である。P1051より古い。土師器の皿（24）が出土した。

P1131（図版 71・85・144）

21F15 グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸は 0.26m、短軸は 0.24m、深さは 0.38m である。断面形は階段状である。枘穴と考えられる窪みがある柱根（89）が残り、柱底面は平坦に加工している。

P1140（図版 71・85・144）

21F25 グリッドに位置する。平面形は円形で、長軸は 0.28m、短軸は 0.27m、深さは 0.49m である。断面形は U 字状である。柱根（90）が残る。柱根は立った状態で出土し、下端は腐食により細くなり、上端には切断痕がある。ほかの柱痕は上下が逆の状態で出土したことから、抜き取りなどの痕跡を調査したが、確認できなかった。

P1154（図版 71・85・144）

21G 5 グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長軸は 0.52m、短軸は 0.33m、深さは 0.22m である。断面形は半円状である。礎盤（板）（91・92）が残るが、表面の腐食が著しく加工は不明瞭である。SD579 より新しい。

9） 杭（図版 85・144）

杭は 14 本出土した。Ⅱb 層とⅢb 層で検出している。Ⅲb 層で検出したものは腐食が著しく樹皮のみが残るものが多い。調査区北西側の 21B グリッド付近で、多数検出している。建物に関係するものはない。杭については主要なものを図示し、観察表に平面及び鉛直方向の傾きを示した。

3 遺　　物

A 概　　要

今回の調査で出土した遺物は、平箱にして 20 箱分である。内訳は古代、中・近世の土器・陶磁器類が 1 箱、木製品・柱根・礎盤・杭などが 17 箱、礫が 2 箱である。遺物包含層の多くは近・現代の耕作によって削平・撹拌されており、出土量は少なかった。

土器・陶磁器類は、中世の 13 ～ 14 世紀代のものが主体で、そのほかに古代の 8 ～ 9 世紀代の須恵器・土師器や近世の陶磁器などが出土した。

木製品は中世の井戸から出土したものが最も多く、その内容も多様である。また、ピットからは柱根及び礎盤が出土した。

B 各　　説

1） 分類と記述の方法

土器・陶磁器類では、須恵器、土師器、珠洲焼、陶磁器、土師質土器などが出土した。

珠洲焼の編年・器種分類・用語については［吉岡 1994］、陶磁器類の器種分類・用語については［横田・森田 1978］、須恵器・土師器の編年は［春日 1999］、成形及び調整の名称は［坂井ほか 1989］を参考にした。なお、須恵器の胎土表記は第Ⅵ章 3 に、珠洲焼の調整は第Ⅲ章 6 に倣った。

木製品は漆器・曲物・箸状・棒状・板材などの「製品」と、柱根・礎盤・杭などの「建築部材」に大別できるが、これらを一括して木製品の項で記述する。

石製品はなかったが、井戸から出土した礫の中に被熱しているものがあり、井戸の廃棄儀礼との関連か

ら図示した。また、SK920 から出土した礫は、出土状況から遺構に関連があると考え図示した。

2）　土器・陶磁器

SB37（図版 86・145 - 1）

SB37 の柱穴 P1038 から珠洲焼の擂鉢が 1 点（1）出土した。卸し目は 1 単位 7 条以上で、Ⅳ～Ⅴ期のものと考えられる。

SE1004（図版 86・145 - 2）

珠洲焼の壺 T 種が 1 点（2）出土した。口縁から肩部にかけてのもので、綾杉状のタタキがある。覆土の 1 層と 5 層から出土した遺物が接合した。Ⅳ期のものと考えられる。

SE1090（図版 86・145 - 3・4）

珠洲焼の壺 T 種が 1 点（3）、青磁椀の体部破片が 1 点（4）出土した。3 はⅠ～Ⅱ期のものと考えられる。4 は龍泉窯系で鎬蓮弁文が施される。13 世紀代のものと考えられる。

SE1110（図版 86・145 - 5・6）

珠洲焼の壺 T 種が 1 点（5）、擂鉢が 1 点（6）出土した。5 はⅣ期以前、6 はⅡ～Ⅲ期のものと考えられる。

SK1141（図版 86・145 - 7）

須恵器の横瓶の体部片が 1 点（7）出土した。

SD42（図版 86・145 - 8）

須恵器の無台杯が 1 点（8）出土した。口縁部から体部にかけての破片で胎土は B である。Ⅴ～Ⅵ期のものと考えられる。

SD139（図版 86・145 - 9）

珠洲焼の甕が 1 点（9）出土した。外面にタタキ、内面にあて具痕がある底部付近の破片で、Ⅰ期のものと考えられる。

SD237（図版 86・145 - 10・11）

須恵器の横瓶が 1 点（10）、珠洲焼の擂鉢が 1 点（11）出土した。10 は肩部片で外面にタタキを有する。胎土は A である。11 は 1 単位 10 条以上の卸し目がある。Ⅲ～Ⅳ期のものと考えられる。

SD286（図版 86・145 - 12・13）

須恵器の杯蓋が 1 点（12）、土師質土器の皿が 1 点（13）出土した。12 は杯蓋の口縁部片、胎土は A で 8 世紀前半のものと考えられる。13 は底部ヘラ切りの皿である。13 世紀後半～ 14 世紀ころのものと考えられる。

SD289（図版 86・145 - 14）

須恵器の横瓶の体部片が 1 点（14）出土した。外面はカキメが、内面には同心円のあて具痕がある。胎土は A である。

SD525（図版 86・145 - 15 ～ 17）

珠洲焼の擂鉢が 2 点（15・16）、青磁椀が 1 点（17）出土した。15 は口縁部片である。16 は体部片で 1 単位 12 条の卸し目がある。15 はⅡ～Ⅲ期、16 はⅢ期のものと考えられる。17 は 12 世紀末～ 13 世紀のものと考えられる。

SD579（図版 86・145 - 18）

珠洲焼の壺 T 種が 1 点（18）出土した。肩部片で外面はタタキ、内面にはあて具痕がある。Ⅴ期のもの

と考えられる。

SD838（図版 86・145 - 19）

土師器の長甕が 1 点（19）出土した。内・外面にハケメがある。

SD1171（図版 86・145 - 20・21）

青磁の椀が 2 点（20・21）出土した。ともに龍泉窯系で鎬蓮弁文が施される。大宰府分類のⅢ類で、鎌倉時代後期のものと考えられる。

SX1095（図版 86・145 - 22・23）

珠洲焼の擂鉢が 2 点（22・23）出土した。22 は口縁から体部片で 14 条の卸し目がある。23 は体部から底部片で 1 単位 6 条以上の卸し目がある。ともにⅢ期の可能性がある。

P1074（図版 86・145 - 24）

土師器の皿が 1 点（24）出土した。10 世紀後半のものと考えられる。

包含層（図版 86・87・145 - 25 ～ 33）

包含層からは須恵器、土師器、珠洲焼、陶器などが出土した。25・26 は須恵器の横瓶の体部片で、外面はタタキの後カキメが、内面には同心円のあて具痕がある。胎土は A である。27 は須恵器の大甕の胴部片で、内面には輪積み痕が残る。28 は周辺から出土した遺物の時期から古代の土師器の長甕と考えたが、外面、割れ口とも黒色であることから、より古い時代の可能性がある。平底で外面にハケメが残る。29 は土師器の長甕の胴部片で、内・外面にハケメがある。30 は瓷器系の甕である。13 世紀後半～ 14 世紀のものと考えられる。31・32 は珠洲焼の擂鉢の体部片で、31 は 1 単位 8 条の卸し目がある。Ⅲ期のものと考えられる。32 は 1 単位 9 条の卸し目があり、Ⅲ期のものと考えられる。33 は唐津焼で、椀の体部から高台部片である。17 世紀ころのものと考えられる。

3） 木　製　品

SB37（図版 87・145・146 - 34 ～ 39）

礎盤（板）が 6 点（34 ～ 39）出土した。34 は円盤状に粗削りされており、椀などの未成品を転用したものと考えられる。表面はやや腐食している。樹種はケヤキである。P1068 では 2 枚（35・36）が重なった状態で出土した。35・36 ともに丸材の外縁部を割って礎盤としている。割面を上にして出土した。樹種はクリである。36 の放射性炭素年代測定（AMS　補正年代）から推測される年代は AD1,050 ± 30 年である。37 は棒状の材を礎盤として使用している。樹種はクリである。38 は細めの丸材を割り礎盤としている。割面を上にして出土した。表面に節が残る。樹種はクリである。放射性炭素年代測定（AMS　補正年代）から推測される年代は AD1,130 ± 30 年である。39 は丸材の芯に近い部分を使用している。樹種はクリである。35・36・39 は、樹種・木取り・年輪・樹皮の遺存状況から同一材の可能性がある。また 37・38 も樹種や木目などから同一材の可能性がある。

SB38（図版 87・146 - 40・41）

礎盤（板）が 2 点（40・41）出土した。P1036 からは 40・41 の 2 点が並列した状態で出土した。いずれも表面が腐食しており加工の状況は判然としない。樹種はモクレン属である。

SB39（図版 87・88・146 - 42 ～ 46）

礎盤（板）が 5 点（42 ～ 46）出土した。P1026 からは 42・43 が十字に重なった状態で出土した。SB37 の礎盤（板）に比べ太い材を使用している。P1040 でも礎盤（板）が十字に重なった状態で出土したが、

最上位の礎盤（44）のみ木部が残り、ほかは腐食が著しくほぼ土壌化していた。44 の樹種はモクレン属である。また、放射性炭素年代測定（AMS　補正年代）から推測される年代は AD850 ± 30 年である。形状や木取りは 42・43 に類似する。45 の樹種はクリである。46 は断面形状から、角材を分割し転用した可能性がある。樹種はカツラで、放射性炭素年代測定（AMS　補正年代）から推測される年代は AD1,000 ± 30 年である。

SB40（図版 88・146 - 47）

P991 から柱根が 1 点（47）出土しており、丸材で底面は平坦に加工している。樹種はクリである。

SB41（図版 88・146 - 48）

P1164 から柱根が 1 点（48）出土しており、丸材で樹皮は残っていない。樹種はサクラ属である。

ピット列 1（図版 88・146 - 49・50）

P1020・1039 から礎盤（板）が 2 点（49・50）出土した。細長い板材で、50 は腐食により 2 つに割れた状態で出土したが接合した。形状から角材であったと考えられる。

SE1004（図版 88・146・147 - 51 ～ 66）

箸状木製品 6 点（51 ～ 56）、曲物の蓋 1 点（57）、杭状木製品 1 点（58）、棒状木製品 6 点（59 ～ 64）、板材 2 点（65・66）が出土した。51 ～ 56 の箸状木製品はいずれも上・下端が欠損している。57 の曲物の蓋は直径約 20 ㎝で、中央部から少しずれた所に円形の孔を有する。孔の中には栓かつまみと見られる円柱状の木片が入っている。樹種はケヤキである。58 は先端部を杭状に尖らせている。覆土 7 層から直立して出土した。樹種はクリである。59 は管状で端部を斜めに切断している。樹種はウツギ属である。60 は炭化後に両端を切断した後、一部樹皮を削り取っている。61 は割材で刃物痕がある。樹種はアサダである。棒状木製品の 62 ～ 64 は枝の両端に切断痕を有するもので、井戸の底部で垂直に立った状態で出土した。65・66 の板状木製品は幅 4 ～ 10 ㎝前後の柾目の板材で、樹種は 65 がタカノツメで 66 はクリである。

SE1090（図版 88・89・147 - 67 ～ 74）

箸状木製品 1 点（67）、漆塗椀 1 点（68）、下駄 1 点（69）、曲物の底板 1 点（70）、曲物の蓋 1 点（71）、棒状木製品 3 点（72 ～ 74）が出土した。67 の箸状木製品は全体を断面四角形に加工しており先端はかなり細身である。上部は欠損している。68 は黒漆塗りの総高台の椀で、外底面を除き漆塗りしている。樹種はケヤキである。69 は連歯の高歯下駄で、残存する後歯は接地面の方が幅広くなる。樹種はケヤキである。70 は曲物の底板で、正・裏面とも刃物痕と考えられる細い線状の傷がある。黒色を呈する部分がある。樹種はスギである。71 の曲物の蓋は直径約 21 ㎝で、外縁部は粗い削りにより加工される。中央部から若干ずれた位置に 1.5 × 0.7 ㎝の長方形の孔がある。樹種はケヤキである。72・73 は 80 ㎝前後の棒状で、壁際に立った状態で出土した。樹皮が壁面に貼りついて出土したことから、壁押さえの構築材としての機能が考えられる。74 は半割の棒状木製品で、下端に切断面がある。樹種はウツギ属である。

SE1110（図版 89・147 - 75・76）

箸状木製品 1 点（75）、板材 1 点（76）が出土した。75 の箸状木製品は断面が六角形、先端は尖るように加工している。上部が折れた状態で出土した。76 は断面三角形で、角材を斜めに半割したものと考えられる。樹種はカツラである。

SD2（図版 89・147 - 77・78）

曲物の側板 1 点（77）と棒状木製品 1 点（78）が出土した。曲物の側板（77）には頭が潰れた木釘が残る。

外面は腐食しているが、内面の木釘穴付近に材が重なっていた痕跡がある。樹種はスギである。棒状木製品（78）は細い中空の丸材で、長さは 22.6 ㎝で、径は 1.7 ㎝である。表面は一部腐食しており、先端は斜めに切断してある。

SX1095（図版 89・147 - 79 ～ 82）

鍬状木製品 1 点（79）、板状木製品 1 点（80）、棒状木製品 1 点（81）、柱状木製品 1 点（82）が出土した。79 の側面から先端にかけての縁部を、刃部を取り付けるために削り出しており、鍬または鋤の身部である可能性がある。上方には柄部装着のための長方形の切り込みがある。樹種はケヤキである。80 は板状の加工品で、樹種はケヤキである。81･82 は溝部分から出土した。81 は下端を杭状に尖らせている。82 は丸材で形状は柱根に類似するが、溝の底部に横たわって出土した。上部の物の沈下を防ぐ礎盤などの機能を想定する。樹種はクリである。SD673 では、平成 18 年度調査区でも溝の底部から丸材が出土した。

そのほかの遺構（図版 89・90・148 - 83 ～ 93）

掘立柱建物や杭列とは認定できなかった柱根、礎盤、杭について記述する。83 は P901 から出土した柱根で、樹種はハンノキ亜属である。腐食しており下端の加工は明瞭ではないが、上部には樹皮が残る。84 は P902 から出土した礎盤（板）である。85 は P985 から出土した丸材の柱根である。芯部は腐食により中空となっている。樹種はクリである。86 は P1003 から出土した半割材の柱根である。腐食が進み加工痕は観察できないが、上端は炭化している。樹種はクリである。87 は P1057 から出土した丸材の柱根である。樹種はクリである。88 は P1058 から出土した丸材の柱根で、下端を杭状に加工している。樹種はヌルデである。89 は P1131 から出土した丸材の柱根で、下部に枘穴と考えられる窪み状の加工痕がある。下端は平坦に加工している。樹種はクリである。放射性炭素年代測定（AMS　補正年代）から推測される年代は AD1,270 ± 30 年である。90 は P1140 から出土した丸材の柱根である。出土時の上下関係に合わせて図化した。上部は外から内に切断される。下部は腐食している。樹種はクリである。91・92 は P1154 から出土した礎盤（板）である。表面は腐食している。樹種はともにクリである。93 は割材を用いた杭である。表面は腐食している。樹種はクリである。

4） 円礫・焼礫

SK920（図版 90・148 - 94）

円礫（94）が 1 点出土した。石質は花崗岩である。遺構の底面中央から出土した。

SX1095（図版 90・148 - 95・96）

焼礫（95・96）が 2 点出土した。石質はともに花崗岩である。95 は 3 つの礫が接合したものである。SX1095 は形状が井戸に似ていることから、井戸の水の浄化や廃棄儀礼に伴うものの可能性がある。

4　自然科学分析

A　分析目的と試料

田屋道遺跡では、平成 18 ～ 20 年度の調査で、掘立柱建物、井戸、土坑、溝、杭などを検出した。また、Ⅴ層の黒褐色土は、南方の窪田遺跡のⅥ層、北方の宮の越遺跡のⅥ層に近似しており、この地域に広範囲に分布する可能性があることが分かった。

ここでは前半に、田屋道遺跡、窪田遺跡、宮の越遺跡の土壌及び土層堆積状況に関する自然科学分析の結果を示し、後半で平成 19 ～ 20 年度の、田屋道遺跡の遺構及び遺物に関する分析結果を示す。

土壌分析では、放射性炭素年代測定、花粉分析、植物珪酸体分析を行い考察した。また、田屋道遺跡における自然科学分析では、掘立柱建物の柱根・礎盤の放射性炭素年代測定、井戸の覆土の花粉分析、植物珪酸体分析、寄生虫分析、微細物分析、灰像分析、種実遺体同定、掘立柱建物の柱根・礎盤や井戸及び溝から出土した木製品の樹種同定を行う。なお、分析方法については第Ⅲ章４Ａの自然科学分析を参照されたい。

B　田屋道遺跡・窪田遺跡・宮の越遺跡の土層分析について

田屋道遺跡のⅤ層、宮の越遺跡のⅥ層、窪田遺跡のⅥ層は見掛け上、黒褐色を呈し、層序にも類似性がある。この層の土壌特性や時間軸を探ることにより、鍵層として利用できる可能性があることに着目し分析を行う。

1）　結果とまとめ

a）　放射性炭素年代測定

結果を第25･26表に示した。田屋道遺跡、宮の越遺跡、窪田遺跡の各基本土層の暦年較正年代（測定誤差σ）は、田屋道遺跡のⅤ層は calBC1,607 - calBC1,500、窪田遺跡のⅥ層は calBC2,118 - calBC1,961、宮の

遺跡名／層名	試料	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code №.	測定機関番号
田屋道遺跡　Ⅴ層	土壌中の炭化物	3,270± 30	-22.18±0.86	3,220± 30	9704-10	IAAA-72657
窪田遺跡　Ⅵ層	土壌中の炭化物	3,650± 30	-23.74±0.73	3,630± 30	9704-11	IAAA-72658
宮の越遺跡　Ⅵ層	土壌中の炭化物	3,270± 40	-27.20±0.71	3,300± 40	9704-12	IAAA-72659

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
2)BP年代値は、1,950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第 25 表　放射性炭素年代測定結果

遺跡名／層名	補正年代 (BP)	暦年較正年代（cal）			相対比	Code №.
田屋道遺跡　Ⅴ層	3,269± 33	σ	cal BC 1,607 - cal BC 1,571	cal BP 3,557 - 3,521	0.398	9704-10
			cal BC 1,560 - cal BC 1,548	cal BP 3,510 - 3,498	0.118	
			cal BC 1,540 - cal BC 1,500	cal BP 3,490 - 3,450	0.484	
		2σ	cal BC 1,624 - cal BC 1,489	cal BP 3,574 - 3,439	0.937	
			cal BC 1,481 - cal BC 1,455	cal BP 3,431 - 3,405	0.063	
窪田遺跡　Ⅵ層	3,650± 31	σ	cal BC 2,118 - cal BC 2,097	cal BP 4,068 - 4,047	0.179	9704-11
			cal BC 2,039 - cal BC 1,961	cal BP 3,989 - 3,911	0.821	
		2σ	cal BC 2,135 - cal BC 2,068	cal BP 4,085 - 4,018	0.265	
			cal BC 2,065 - cal BC 1,938	cal BP 4,015 - 3,888	0.735	
宮の越遺跡　Ⅵ層	3,265± 37	σ	cal BC 1,607 - cal BC 1,570	cal BP 3,557 - 3,520	0.381	9704-12
			cal BC 1,561 - cal BC 1,546	cal BP 3,511 - 3,496	0.123	
			cal BC 1,541 - cal BC 1,498	cal BP 3,491 - 3,448	0.496	
		2σ	cal BC 1,625 - cal BC 1,449	cal BP 3,575 - 3,399	1.000	

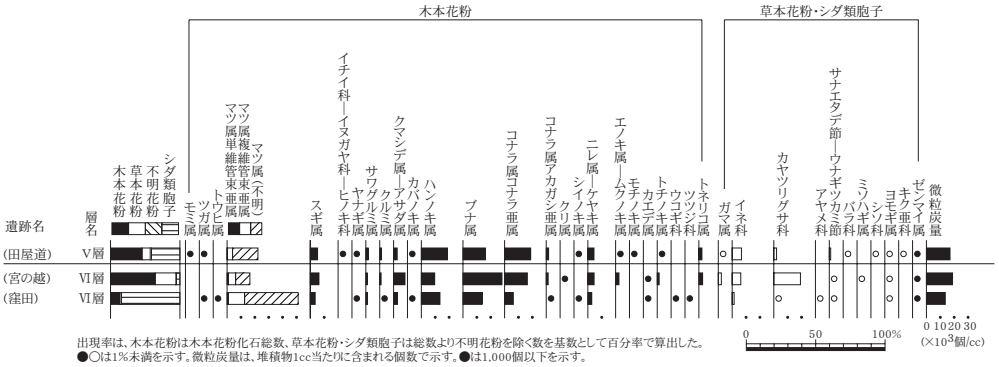
1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。
2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3)暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
5)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第 26 表　暦年較正結果

越遺跡のVI層は calBC1,607 - calBC1,498 であった。これらの分析結果から、分析対象とした各遺跡の基本土層は、いずれも縄文時代後期ころに形成された堆積物の可能性がある。

b)　花 粉 分 析

結果を第 27 表、第 90・91 図に示した。縄文時代後期ころの堆積物と見られる 3 遺跡の基本土層試料の花粉分析結果では、田屋道遺跡のＶ層と宮の越遺跡のVI層の花粉群集組成は木本花粉が高い割合を示した。検出した分類群等の産出状況等を考慮すると、後背の丘陵や山地部にはブナ属やコナラ亜属等からなる落葉広葉樹林が成立しており、林縁部等にマツ属、スギ属等の針葉樹が混在するような森林が広がっていたと推測される。また、ハンノキ属をはじめとし、サワグルミ属やクマシデ属-アサダ属、コナラ亜属、ニレ属 - ケヤキ属、トネリコ属等の河畔林・湿地林を構成する種類を含む分類群は、周辺の河川沿いや河畔、低湿地等に生育し、低地部の比較的乾いた部分にはコナラ属アカガシ亜属、シイノキ属等の常緑広葉



第 90 図　花粉化石群集

種類 ＼ 試料名	(田屋道) V層	(宮の越) VI層	(窪田) VI層
木本花粉			
モミ属	2	-	-
ツガ属	1	-	2
トウヒ属	-	-	1
マツ属単維管束亜属	-	3	2
マツ属複維管束亜属	9	15	30
マツ属(不明)	42	30	98
スギ属	12	18	9
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	1	-	-
ヤナギ属	1	-	1
サワグルミ属	4	3	3
クルミ属	3	3	2
クマシデ属－アサダ属	6	24	7
カバノキ属	2	-	2
ハンノキ属	43	28	34
ブナ属	37	82	35
コナラ属コナラ亜属	43	48	16
コナラ属アカガシ亜属	4	4	1
クリ属	-	1	-
シイノキ属	1	-	1
ニレ属－ケヤキ属	10	13	7
エノキ属－ムクノキ属	1	7	-
モチノキ属	1	-	-
カエデ属	-	1	1
トチノキ属	1	4	-
ウコギ科	-	-	1
ツツジ科	-	-	1
トネリコ属	5	8	-
草本花粉			
ガマ属	3	10	-
イネ科	33	28	26
カヤツリグサ科	10	87	3
アヤメ科	-	-	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節	5	3	9
バラ科	1	-	-
ミソハギ属	-	3	-
シソ科	1	-	-
ヨモギ属	4	4	3
キク亜科	2	-	-
不明花粉	8	1	5
シダ類胞子			
ゼンマイ属	4	1	2
他のシダ類胞子	204	24	1,614
合　計			
木本花粉	229	292	254
草本花粉	59	135	42
不明花粉	8	1	5
シダ類胞子	208	25	1,616
総計(不明を除く)	496	452	1,912
1cc当たりの微粒炭量[個]	17,000	18,800	13,600

第 27 表　花粉・微粒炭分析結果

1.マツ属(田屋道;V層)　2.スギ属(田屋道;V層)
3.コナラ属コナラ亜属(田屋道;V層)　4.ブナ属(田屋道;V層)
5.ニレ属-ケヤキ属(田屋道;V層)　6.コナラ属アカガシ亜属(田屋道;V層)
7.ガマ属(田屋道;V層)　8.カヤツリグサ科(田屋道;V層)
9.イネ科(田屋道;V層)

第 91 図　花粉化石

樹も生育していたと推定する。

一方、窪田遺跡は、田屋道遺跡・宮の越遺跡の試料と比較して花粉化石の保存状態は不良であり、シダ類胞子が多産した。花粉化石群集組成では、抵抗性が高いシダ類や、分解に強いマツ属等を相対的に多く検出していることから､経年変化等の影響を受けていると考えられる。検出した分類群は上記した田屋道･宮の越遺跡試料とほぼ類似することから、ほぼ同様の周辺植生であったと推測される。

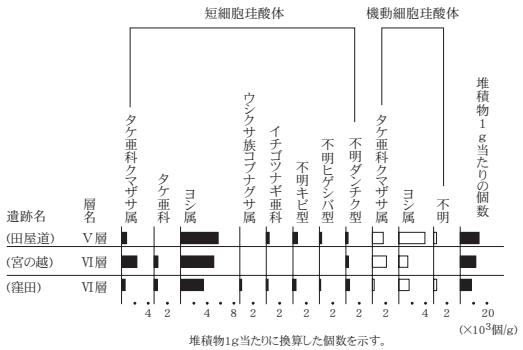
c)　植物珪酸体分析

結果を第 28 表、第 92・93 図に示した。田屋道遺跡のⅤ層及び窪田遺跡のⅥ層では、栽培植物に由来する植物珪酸体は検出しなかった。

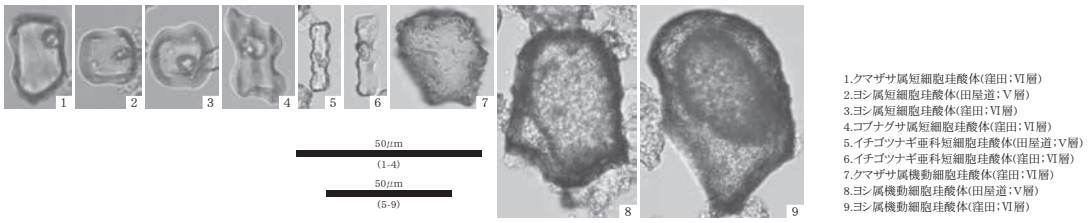
（個/g）

種類 ＼ 試料名	(田屋道) Ⅴ層	(宮の越) Ⅵ層	(窪田) Ⅵ層
イネ科葉部短細胞珪酸体			
タケ亜科クマザサ属	800	2,300	500
タケ亜科	-	600	500
ヨシ属	5,600	5,000	3,400
ウシクサ族コブナグサ属	-	-	300
イチゴツナギ亜科	400	-	300
不明キビ型	700	-	500
不明ヒゲシバ型	300	-	200
不明ダンチク型	300	400	500
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
タケ亜科クマザサ属	1,600	2,100	300
ヨシ属	3,900	1,300	1,500
不明	400	-	500
合　計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	8,100	8,200	6,200
イネ科葉身機動細胞珪酸体	6,000	3,500	2,300
珪化組織片	0	0	0
総　計	14,100	11,700	8,400

第 28 表　植物珪酸体含量



第 92 図　植物珪酸体含量



第 93 図　植物珪酸体

d)　微 粒 炭 量

結果を第27表に示した。縄文時代後期と考えられる堆積物の微粒炭量は 14,000～19,000 個/cc であった。微粒炭は、人間活動と密接に関係していることがこれまでの研究から指摘されているが、本地域では微粒炭を対象とした調査事例が少ないことから、今後さらに資料を蓄積し検討する必要がある。

C　遺構及び遺物の分析

1）分 析 方 法

第Ⅲ章４Ａで取り扱わなかった分析について以下に記載する。

a)　寄生虫卵・花粉分析

試料 10cc を正確に秤り取る。水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重 2.3）による有機物の分離の順に物理・化学的処理を施し、寄生虫卵及び花粉・胞子を分離・濃集する。処理後の残渣を定容してから一部を取り、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して出現するすべての寄生虫卵と花粉・胞子化石について同定・計数する。

結果は、寄生虫卵は1cc当たりの寄生虫卵の個数を、花粉・胞子化石は同定及び計数結果を一覧表に表示する。また、花粉化石群集の散布図も表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、図表中で複数の種類を「-」で結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。

b)　微細物分析

試料を水に浸し、粒径0.5㎜の篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットで同定可能な種実や、4㎜角以上の遺物を抽出する。現生標本及び［石川1994］、［中山ほか2000］等との対照から、種実の種類と部位を同定し、個数を表示する。SE1090の8層のイネの穎については、3/4個体以上の完形は個数、1/2～3/4個体の破片は個数と容量、1/2未満の破片は容量を表示する。P984とSE1004の7層は、一定試料中における微細植物片の産状の検討と、イネ穎等の微細片を除く種実遺体群の種類組成の調査を目的とし、定量・定性分析を併用する。なお、検出された炭化材は、70℃48時間乾燥後の重量と最大径を表示する。

2）　結果とまとめ

a)　放射性炭素年代測定

柱材（柱根）や礎盤等の建築部材の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）を第29表に、補正年代に基づく暦年較正結果（σ）を第30表に示した。

暦年較正年代から読みとれる掘立柱建物の年代は、SB37は11世紀中ごろ～13世紀中ごろ、SB39は9世紀末～12世紀中ごろ、P1311の柱根（89）は13世紀後半～14世紀後半ころである。このうち、各試料の確立分布の高い暦年代を見ると、全体的にSB39はSB37に比べ古い値を示し、柱根（89）は

試料名（遺構名　遺物番号　種別）	柱状	樹種	補正年代(yrBP)	$\delta^{13}C$(‰)	測定年代(yrBP)	測定機関code
SB37-P1068　36　礎板	木材	クリ	900±30	-28.57±0.90	950±30	IAAA-82186
SB37-P1071　38　礎板	木材	クリ	820±30	-27.52±0.63	860±30	IAAA-82187
SB39-P1040　44　礎板	木材	モクレン属	1,100±30	-23.69±0.72	1,080±30	IAAA-82188
SB39-P1053　46　礎板	木材	カツラ	950±30	-24.95±0.65	950±30	IAAA-82189
P1131　89　柱根	木材	クリ	680±30	-27.46±0.69	720±30	IAAA-82190

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
2)BP年代値は、1,950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第29表　放射性炭素年代測定結果

試料名	補正年代(yrBP)		暦年較正年代（cal）											相対比	測定機関Code
SB37-P1068 36(礎板)	895± 32	σ	cal	AD	1,048	-	cal	AD	1,086	cal	BP	902	- 864	0.392	IAAA-82186
			cal	AD	1,123	-	cal	AD	1,138	cal	BP	827	- 812	0.137	
			cal	AD	1,150	-	cal	AD	1,189	cal	BP	800	- 761	0.398	
			cal	AD	1,197	-	cal	AD	1,207	cal	BP	753	- 743	0.072	
		2σ	cal	AD	1,040	-	cal	AD	1,110	cal	BP	910	- 840	0.411	
			cal	AD	1,116	-	cal	AD	1,214	cal	BP	834	- 736	0.589	
SB37-P1071 38(礎板)	816± 32	σ	cal	AD	1,209	-	cal	AD	1,262	cal	BP	741	- 688	1.000	IAAA-82187
		2σ	cal	AD	1,167	-	cal	AD	1,269	cal	BP	783	- 681	1.000	
SB39-P1040 44(礎板)	1,101± 33	σ	cal	AD	896	-	cal	AD	923	cal	BP	1,054	- 1,027	0.386	IAAA-82188
			cal	AD	940	-	cal	AD	984	cal	BP	1,010	- 966	0.614	
		2σ	cal	AD	886	-	cal	AD	1,015	cal	BP	1,064	- 935	1.000	
SB39-P1053 46(礎板)	947± 32	σ	cal	AD	1,029	-	cal	AD	1,051	cal	BP	921	- 899	0.256	IAAA-82189
			cal	AD	1,081	-	cal	AD	1,127	cal	BP	869	- 823	0.537	
			cal	AD	1,135	-	cal	AD	1,152	cal	BP	815	- 798	0.208	
		2σ	cal	AD	1,023	-	cal	AD	1,159	cal	BP	927	- 791	1.000	
P1131 89(柱根)	678± 31	σ	cal	AD	1,279	-	cal	AD	1,302	cal	BP	671	- 648	0.634	IAAA-82190
			cal	AD	1,367	-	cal	AD	1,382	cal	BP	583	- 568	0.366	
		2σ	cal	AD	1,271	-	cal	AD	1,318	cal	BP	679	- 632	0.609	
			cal	AD	1,353	-	cal	AD	1,390	cal	BP	597	- 560	0.391	

1)RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。
2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3)暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
5)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第30表　暦年較正結果

SB37・39 よりやや新しい値を示す傾向にある。

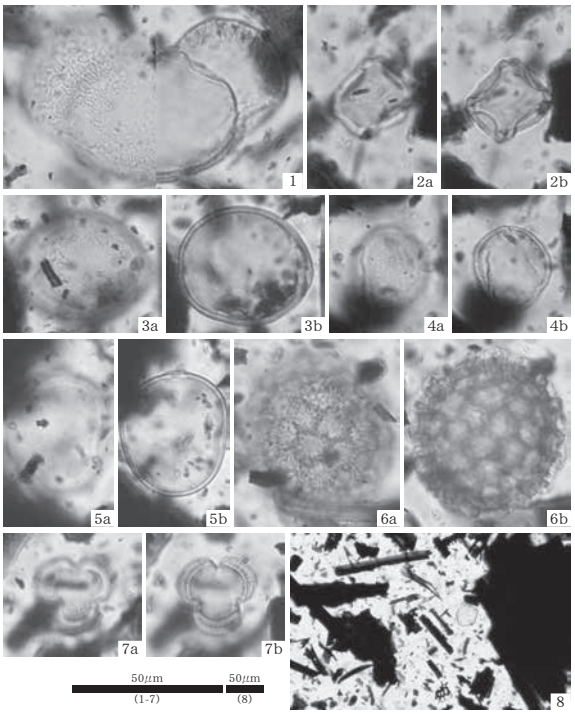
b)　寄生虫卵・花粉分析

結果を第 31 表、第 94・95 図に示した。SE1004 の 7 層からは、寄生虫卵は 1 個体も検出されない。

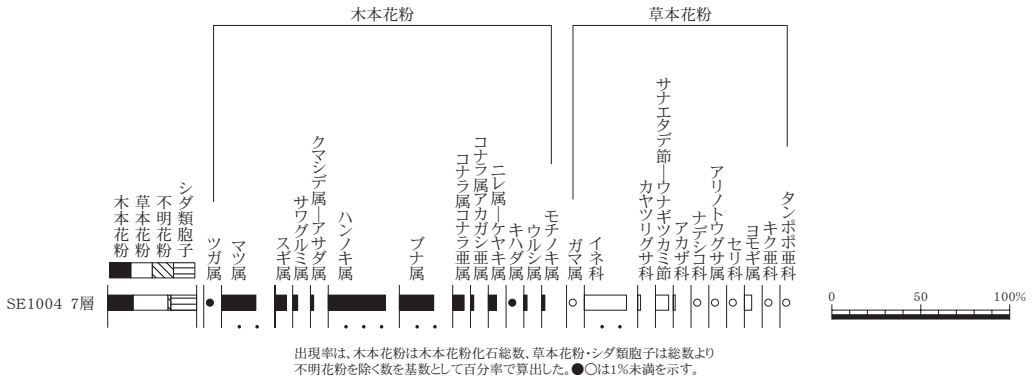
花粉群集は、木本花粉のハンノキ属が最も多く産出し、次いでマツ属、ブナ属等が多い。このほかに、スギ属、サワグルミ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属 - ケヤキ属等を伴う。草本花粉ではイネ科が多く産出し、カヤツリグサ科、サナエタデ節 - ウナギツカミ節、アカザ科、ヨモギ属等が産出する。分析残渣中には、微粒炭（微細な炭化植物片）が多量に認められる。微粒炭は、100 μ m 以上の大型のものが比較的多く含まれるほか、細胞が縦長の長方形を呈し、細胞壁が波打つ形状を示す特徴的な微粒炭が比較的多く検出される。

種類 ＼ 試料名	SE1004 7層
寄生虫卵	
寄生虫卵[個/cc]	0
木本花粉	
ツガ属	1
マツ属単維管束亜属	1
マツ属複維管束亜属	3
マツ属（不明）	17
スギ属	7
サワグルミ属	3
クマシデ属－アサダ属	2
ハンノキ属	35
ブナ属	21
コナラ属コナラ亜属	7
コナラ属アカガシ亜属	2
ニレ属－ケヤキ属	5
キハダ属	1
ウルシ属	2
モチノキ属	2
草本花粉	
ガマ属	1
イネ科	87
カヤツリグサ科	6
サナエタデ節－ウナギツカミ節	27
アカザ科	4
ナデシコ科	2
アリノトウグサ属	1
セリ科	1
ヨモギ属	15
キク亜科	3
タンポポ亜科	1
不明花粉	13
シダ類胞子	
シダ類胞子	110
合　計	
木本花粉	109
草本花粉	148
不明花粉	13
シダ類胞子	110
総計（不明を除く）	367

第 31 表　寄生虫卵・花粉分析結果



第 94 図　花粉化石



第 95 図　花粉化石群集

c)　灰 像 分 析

灰像(珪化組織片)の検出状況を第32表に示した。SE1004の7層からは、イネ属に由来する珪化組織片が多産する。葉部に形成される短細胞列の産出が顕著であり、籾殻に形成される穎珪酸体も比較的多い。このほかに、ススキ属の短細胞列やウシクサ族の機動細胞列も認められる。

種類 ＼ 試料名	SE1004 7層
イネ属穎珪酸体	＋＋
イネ属短細胞列	＋＋＋
イネ属機動細胞列	＋
ススキ属短細胞列	＋
ウシクサ族機動細胞列	＋

＋＋＋：非常に多い，＋＋：多い，＋：検出

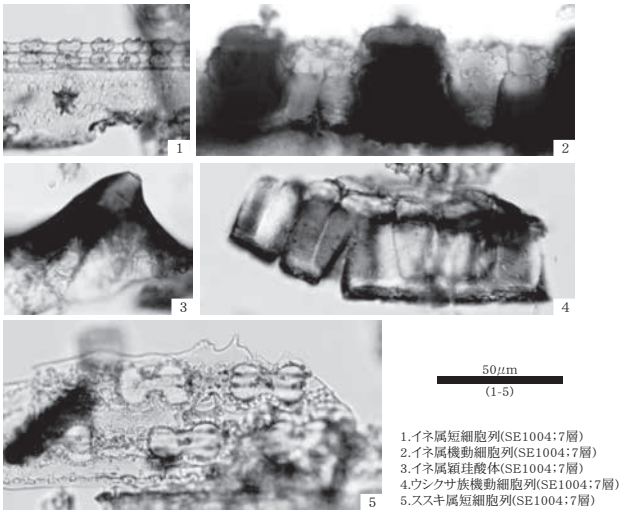
第32表　灰像分析結果

d)　植物珪酸体分析

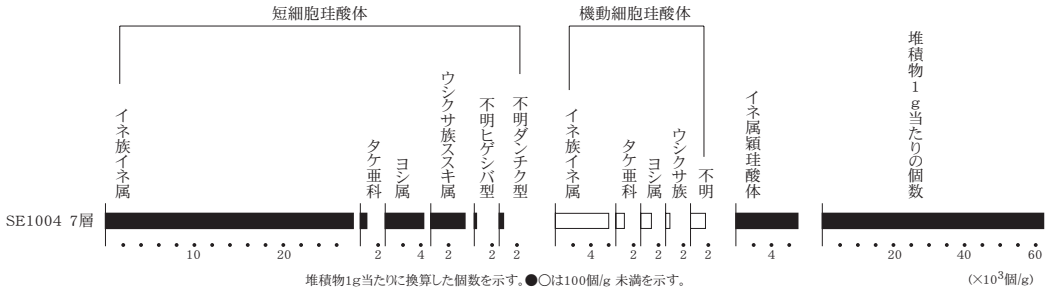
植物珪酸体含量を第33表、第96・97図に示した。SE1004の7層の植物珪酸体含量は約5.5万個/gであり、珪化組織片でも認められたイネ属に由来する植物珪酸体含量が高い値を示す。このほかに、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族が検出される。

分類群 ＼ 試料名	SE1004 7層
イネ科葉部短細胞珪酸体	
イネ族イネ属	27,900
タケ亜科	700
ヨシ属	4,300
ウシクサ族ススキ属	3,800
不明ヒゲシバ型	200
不明ダンチク型	500
イネ科葉身機動細胞珪酸体	
イネ族イネ属	6,000
タケ亜科	1,000
ヨシ属	1,200
ウシクサ族	500
不明	1,700
珪化組織片	
イネ属穎珪酸体	7,000
合　計	
イネ科葉部短細胞珪酸体	37,500
イネ科葉身機動細胞珪酸体	10,300
珪化組織片	7,000
総　計	54,800

第33表　植物珪酸体含量



第96図　植物珪酸体



第97図　植物珪酸体含量

e)　微細物分析

結果を第34表、第98図に示した。定量・定性分析を通じて、全試料から木本1個、草本12分類群562個＋8cc、計563個＋8ccの種実や、木材、炭化材、昆虫の破片などが確認された。

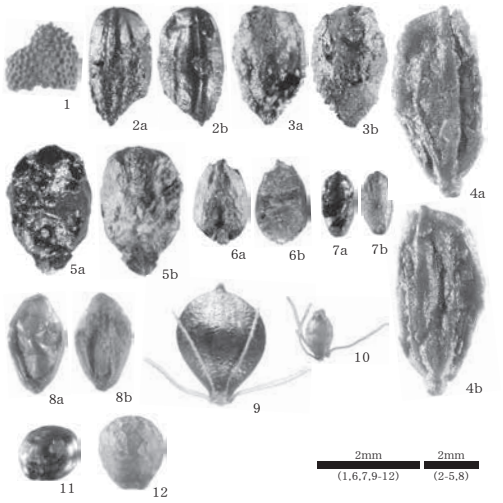
f)　柱穴・井戸跡埋積物についての検討

SE1004についてはトイレの可能性が指摘され、寄生虫卵に関する分析を行った。寄生虫卵は普通の土壌中にも含まれるが、糞便などの堆積物で多産する調査事例も報告されている（例えば［金原 1992,1993］

分類群	部位	状態		P984 1層		SE1090 8層	SE1004 7層	
木本								
マタタビ属	種子	破片		-	-	-	1	-
草本								
イネ	穎	完形(3/4以上)		-	-	19	-	-
		破片(1/2～3/4)		-	-	160(2cc)	-	-
		破片(1/2未満)		-	-	8cc	-	-
		破片	炭化	72	50	-	68	2*
	穎・胚乳	完形	炭化	-	2	-	1	1
		破片	炭化	-	2	-	3	-
	胚乳	完形	炭化	7	6	-	16	15
		破片	炭化	6	12	-	45	38
アワ近似種	穎・胚乳	完形	炭化	1	-	-	-	-
アワ－ヒエ	胚乳	完形	炭化	-	-	-	-	1
オオムギ	胚乳	完形	炭化	-	2	-	-	-
コムギ	胚乳	完形	炭化	2	-	-	-	-
イネ科	胚乳	完形	炭化	1	-	-	1	1
	果実	完形		-	-	14	-	-
		破片		-	-	4	-	-
ホタルイ属	果実	完形		-	-	5	-	-
カヤツリグサ科	果実	完形		-	-	1	-	-
タデ属	果実	完形	炭化	-	1	-	-	-
ヒユ科	種子	完形		-	-	1	-	-
タケニグサ	種子	完形		-	-	-	-	1
イヌコウジュ属	果実	完形		-	-	1	-	-
木材				-	-	2	2	-
炭化材			乾燥重量	0.14g	-	<0.01g	0.24g	-
			最大径	1cm	-	3mm	1.5cm	-
昆虫				1	-		3	-
			分析量	50cc	50cc	10cc	100cc	100cc
				54.53g	59.31g	11.46g	123.29g	133.86g

註)径1mm以上を抽出。

第 34 表　微細物分析結果



1.マタタビ属 種子(SE1004:7層)　2.イネ 胚乳(SE1004:7層)
3.イネ 穎・胚乳(SE1004:7層)　4.イネ 穎(SE1090:8層)
5.コムギ 胚乳(P984:1層)　6.アワ近似種 穎・胚乳(P984:1層)
7.イネ科 胚乳(P984:1層)　8.イネ科 果実(SE1090:8層)
9.ホタルイ属 果実(SE1090:8層)　10.カヤツリグサ科 果実(SE1090:8層)
11.ヒユ科 種子(SE1090:8層)　12.イヌコウジュ属 果実(SE1090:8層)

第 98 図　種実遺体

［金原ほか 1995］など)。

SE1004 の 7 層の寄生虫卵分析結果では寄生虫卵は全く検出されず、検鏡時のプレパラート中には花粉化石や微粒炭が確認されたのみであった。同試料の微細物分析結果では、炭化したイネの穎や胚乳が主体であり、種ごと食する可能性のある種類（例えばゴマ、ナス科、ブドウ属、キイチゴ属、メロン類など）は検出されなかった。このことから SE1004 はトイレとして利用されていた可能性は低いと考えられる。

SE1004 の 7 層の黒色泥質土では寄生虫分析時に、多量の微粒炭やイネ科草本類の珪化組織片が検出された。微粒炭は大型のものが比較的多く、細胞が縦長の長方形で細胞壁が波打つ形状を示すものが認められた。これは、波状組織を持つ微粒炭として記載されていることが多く、イネ科葉部に由来する微粒炭とされる［小椋 2008 など］。珪化組織片は、イネ属の葉部や籾殻に由来する珪化組織片が多く、イネ属以外の分類群ではススキ属を含むウシクサ族の珪化組織片が検出された。植物珪酸体含量でもイネ属の含量が極めて高い値を示したほか、ヨシ属やススキ属を含むウシクサ族等が検出された。また、検出された種実遺体群も、上記したように炭化したイネの穎・胚乳を主体として、炭化したアワ - ヒエやイネ科が検出されている。

以上の分析結果から、SE1004 の 7 層にはイネ科葉部に由来する可能性のある微粒炭をはじめとして、イネ科草本類に由来する珪化組織片、炭化種実等が混入していることが示唆され、特にイネ属の植物体に由来する珪化組織片や種実が多い。このことから、黒色の成因の一つとして、火熱の影響により炭化・燃焼したイネの植物体（葉部や籾殻等）や、ススキ属等のイネ科草本に由来する植物体が蓄積された堆積物であると言える。本遺跡では基本土層にも黒色土層が確認されており、遺構壁面や周囲から流入した堆積物の影響も推定される。この点については、発掘調査成果等による覆土の堆積状況の検討や、基本土層における産状との比較、土壌の理化学性等に着目した検討も望まれる。

SE1090 の 8 層の植物遺体からは、未炭化のイネの穎（籾殻）と、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、ヒユ科、イヌコウジュ属の種実が検出された。また、検出されたイネの穎は大部分が破片であった。発掘調査時に覆土中に炭化種実が検出された P984 からは、炭化した栽培種のイネの穎・胚乳、アワ（近似種）の穎・胚乳、オオムギ・コムギの胚乳が検出された。栽培種を主体とすることや、いずれも炭化する状況

などは、SE1004 の 7 層と共通する傾向と言える。

古植生については、SE1004 の 7 層の花粉群集における草本類や検出された栽培種を除く種実遺体群は、イネ科やカヤツリグサ科、サナエタデ節 - ウナギツカミ節、アカザ科、タケニグサ、ヨモギ属等の人里植物を含む分類群が認められた。このことから、井戸周辺は明るく開けた環境であり、これらの分類群からなる草本群落が分布したと考えられる。また、水湿地生のホタルイ属やカヤツリグサ科も検出されたことから、周囲にはこれらが生育する湿潤な環境も存在したと考えられる。

木本類では、低湿地等の適湿地に湿地林を形成する種を含む分類群であるハンノキ属が多産し、渓谷沿いや河畔・低湿地に生育する種類を含むニレ属 - ケヤキ属、サワグルミ属、クマシデ属 - アサダ属等が検出された。平成 18 年度調査区で実施した基本土層（Ⅲｃ～Ⅱｂ層）の花粉分析結果でも、ハンノキ属が多産し、ヤナギ属、サワグルミ属、クルミ属、クマシデ属 - アサダ属、ニレ属 - ケヤキ属、トチノキ属、シナノキ属、トネリコ属等の河畔林･湿地林を形成する種を含む分類群が確認されている［パリノ･サーヴェイ（株）2008a］。このことから、当該期の周辺域には、これらの分類群からなる河畔林・湿地林が分布していたと考えられる。このほかにマツ属やブナ属、コナラ亜属が比較的多く産出した。マツ属は極端な陽樹で、伐採地や海岸砂丘上などで生育が可能であり、ブナ属はコナラ属コナラ亜属等とともに冷温帯性落葉広葉樹林の主要構成要素である。上記した花粉分析結果では、後背山地や丘陵部にはブナ属を主体とする落葉広葉樹林が分布し、低地や丘陵縁辺にはマツ属、スギ属等の針葉樹、コナラ属アカガシ亜属、シイノキ属等の常緑広葉樹、海岸砂丘上にはマツ属等が生育していたと推定されている［パリノ・サーヴェイ（株）2008a］。今回産出した分類群も、後背山地・丘陵や海岸林等の植生に由来すると推定される。

g）樹種同定

結果を第 35 表、第 99 ～ 102 図に示した。建築部材や木製品は、針葉樹 1 分類群（スギ）と広葉樹 10 分類群（アサダ・クリ・ケヤキ・モクレン属・カツラ・ウツギ属・サクラ属・ヌルデ・タカノツメ・ハンノキ亜属）に同定された。

遺構の年代観及び木材利用について建築部材と木製品に分けて述べたい。

建築材の柱根（9 点）や礎盤（板）（15 点）からは、広葉樹 7 種類（クリ、ケヤキ、カツラ、モクレン属、サクラ属、ヌルデ、ハンノキ亜属）が認められた。クリは重硬で強度・耐朽性が高く、サクラ属は強度が高い、カツラは比較的強度が高い、モクレン属は広葉樹材としては軽軟な部類に入り、割裂性が高く加工が容易で、割れや狂いが少ないとされ、ヌルデは強度が低いという材質的特徴を有する。

柱根は、芯持丸木状を呈するものと、半裁木状のものからなり、クリが 6 点と多く、サクラ属とヌルデとハンノキ亜属が各 1 点認められた。クリを主体とする樹種構成は、隣接する調査区の建物の柱材に認められた樹種構成と同様の傾向と言える。なお、ヌルデは、過去の分析調査では確認されていない分類群であり、その用途が注目される。ハンノキ亜属は旧岩船郡荒川町高柳 B 遺跡で 1 例報告されている程度である［(株）古環境研究所 1996］一方、隣接する窪田遺跡の古代以前とされる柱材の種類構成を見るとクリを主体としてハンノキ節（ハンノキ亜属）の利用が認められている［吉川 2007］。したがって、異なる時期の木材利用を反映している可能性も推測され、今後分析対象とした遺跡（柱根）の年代と合わせた検討が必要と考えられる。

礎盤は、分割材や半裁木が多かったが、椀の粗型と見られる分割材（P1064（34））や断面が蒲鉾状を呈する分割材（P1068（35・36））、角材状を呈する分割材（P1072（39）、P1053（46））等も認められた。これ

遺構名		層位	遺物番号	器　種	木　取	樹　種	備　考
SB37	P1064	3層	34	礎盤(板)	横木地柾目取	ケヤキ	椀粗型転用？
	P1068	2層	35	礎盤(板)	分割材	クリ	断面:蒲鉾状
		2層	36	礎盤(板)	分割材	クリ　＊	断面:蒲鉾状
	P1070	3層	37	礎盤(板)	分割材	クリ	
	P1071	1層	38	礎盤(板)	半裁木	クリ　＊	
	P1072	3層	39	礎盤(板)	半裁角材	クリ	
SB38	P1036	2層	40	礎盤(板)	追柾	モクレン属	
		2層	41	礎盤(板)	追柾	モクレン属	
SB39	P1026	2層	42	礎盤(板)	柾目～追柾	モクレン属	
		2層	43	礎盤(板)	柾目	モクレン属	
	P1040	1層	44	礎盤(板)	追柾	モクレン属　＊	
	P1050	1層	45	礎盤(板)	板目	クリ	
	P1053	2層	46	礎盤(板)	半裁角材	カツラ　＊	
SB40	P991	1層	47	柱根	芯持丸木	クリ	
SB41	P1164	1層	48	柱根	芯持丸木	サクラ属	
P1131		1層	89	柱根	芯持丸木	クリ　＊	
P1140		1層	90	柱根	芯持丸木	クリ	
P1154		3層	91	礎盤(板)	分割材	クリ	
		3層	92	礎盤(板)	分割材	クリ	
P985		1層	85	柱根	芯持丸木	クリ	
P1003		1層	86	柱根	半裁木	クリ	
P1057		1層	87	柱根	芯持丸木	クリ	
P1058		1層	88	柱根	芯持丸木	ヌルデ	
SE1004		7層	58	杭状木製品	芯持丸木	クリ	
		6層	61	棒状木製品	分割棒状	アサダ	
		6層	66	板材	柾目	クリ	
		7層	57	曲物の蓋	横木地柾目取	ケヤキ	
		7層	65	板材	柾目	タカノツメ	
		7層	59	棒状木製品	芯持丸木	ウツギ属	
SE1090		6層	70	曲物の底板	柾目	スギ	
		6層	68	漆塗椀	横木地柾目取	ケヤキ	
		9層	69	下駄	板目	ケヤキ	連歯
		9層	74	棒状木製品	半裁木状	ウツギ属	
		9層	71	曲物の蓋	柾目	ケヤキ	
SE1110		7層	76	板材	分割材	カツラ	
SD2		5層	77	曲物の側板	柾目	スギ	
SX1095		7層	80	板状木製品	柾目	ケヤキ	
		10層	79	鍬状木製品	柾目	ケヤキ	
		7層	82	柱状木製品	芯持丸木	クリ	
杭1087		Ⅲb層	93	杭	分割材	クリ	
P901		1層	83	柱根	芯持丸木	ハンノキ亜属	平成19年度調査

＊：放射性炭素年代測定試料

第 35 表　樹種同定結果

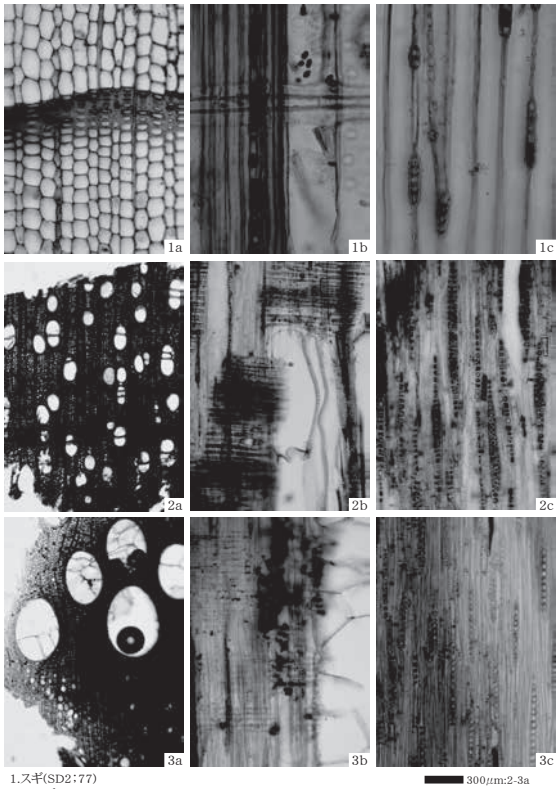
らは、加工状況や形状等から木製品の転用や丸木材整形時の残材の再利用も推定される。樹種は、クリやケヤキ、モクレン属、カツラの４種類が認められ、クリが８点と最も多く、次いでモクレン属５点、ケヤキ・カツラが各１点という種類構成であった。平成 18 年度に確認された礎盤（板）については、クリ、カツラ、ハリギリの３種類が確認されており、おおむね同様の樹種構成と考えられる。なお、椀の粗型と見られる分割材（P1064（34））のケヤキは、椀の木地に一般的に認められる樹種である。モクレン属は、SB38 の柱穴（P1036）と、SB39 の柱穴（P1026・1040）より出土した礎盤（板）に認められ、いずれも柾目あるいは追柾の板状を呈するという共通する特徴がうかがわれる。

建物等の建築材の樹種構成（第 36 表）では、SB37 試料の礎盤（板）６点はクリと椀粗型を転用したと考えられる試料にケヤキ、SB38 試料の礎盤（板）２点はいずれもモクレン属、SB39 試料の礎盤（板）5 点はモクレン属（３点）とカツラとクリ（各１点）という組成を示した。このことから、SB38 や SB39 の建築部材として利用された礎盤は、モクレン属を主とした木材利用が推定され、クリを主体とする SB37 と樹種構成が異なる。SB37 及び SB39 の礎盤（板）から得られた暦年代を参考とすると、時期によって木材選択が異なっていた可能性もある。

このほかに、SB41、P901・1158 の柱根はそれぞれサクラ属、ハンノキ亜属、ヌルデで、SB40、P985・1003・1057・1131・1140 の柱根と P1154 の礎盤（板）はすべてクリで

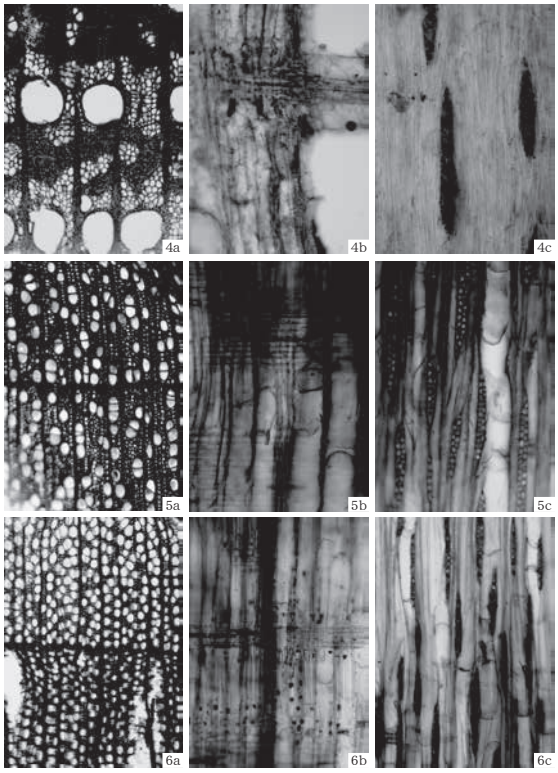
遺構名 / 分類群	SB37 礎盤(板)	SB38 礎盤(板)	SB39 礎盤(板)	SB40 柱根	SB41 柱根	その他の柱穴 礎盤(板)	その他の柱穴 柱根	合計
クリ	5		1	1		2	5	14
ケヤキ	1							1
カツラ			1					1
モクレン属		2	3					5
サクラ属					1			1
ヌルデ							1	1
ハンノキ亜属							1	1
合計	6	2	5	1	1	2	7	24

第 36 表　建築材の遺構別樹種構成



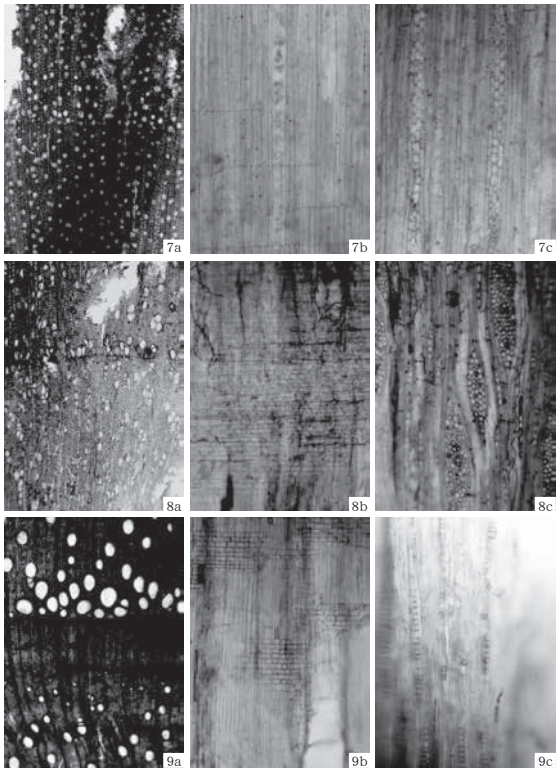
1.スギ(SD2；77)
2.アサダ(SE1004；61)
3.クリ(P1050；45)
a：木口,b：柾目,c：板目

第 99 図　木材（1）



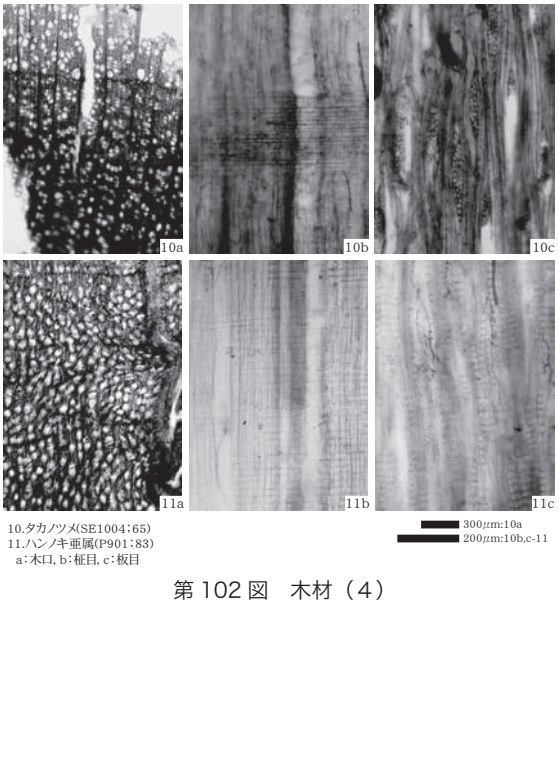
4.ケヤキ(SE1090；69)
5.モクレン属(P1036；41)
6.カツラ(P1053；46)
a：木口,b：柾目,c：板目

第 100 図　木材（2）



7.ウツギ属(SE1090；74)
8.サクラ属(P1164；48)
9.ヌルデ(P1058；88)
a：木口,b：柾目,c：板目

第 101 図　木材（3）



10.タカノツメ(SE1004；65)
11.ハンノキ亜属(P901；83)
a：木口, b：柾目, c：板目

第 102 図　木材（4）

あった。これらの試料については、建物における建築材の全体の構成や柱穴の帰属が不明であるため、詳細な検討は控えるが、クリを主体とする点は本遺跡における建築材の樹種構成と調和する傾向と言える。

木製品は、井戸や性格不明遺構、溝等から出土した漆塗椀や曲物（底板・蓋）、下駄（連歯）、端部に加工が認められる棒状木製品等計 17 点である。漆塗椀（SE1090（68））は、木取りが横木取であり、広葉樹のケヤキであった。ケヤキは、ブナ属やトチノキとともに椀の樹種として最も確認されている樹種の一つである。過去に本遺跡で実施した椀や皿の分析調査では、対象とした試料がすべてケヤキであり、ブナ属やトチノキは確認されていないことから、特にケヤキが選択利用されていた可能性がある。一方、曲物の底板（SE1090（70））や曲物の側板（SD2（77））等の板状加工を施す器種では、割裂性の高いスギが認められた。スギは、平成 18 年度調査区から出土した曲物に認められており、今回の分析結果と調和的である。

連歯下駄（SE1090（69））は、台が板目となる木取りであり、強度・耐朽性の高いケヤキであった。本遺跡周辺における中世の下駄の調査事例では、村上市草田遺跡でスギとケヤキが確認されている［パリノ・サーヴェイ（株）2003a］。新潟県内における中世の下駄の調査事例には、連歯下駄にはスギやヒノキ、ヒノキ科、クリ、ケヤキ、ヤマグワ、モクレン属、カツラ、キハダ等の樹種が確認されており、このうち、ケヤキは８例認められている［パリノ・サーヴェイ（株）2008b］。

棒状木製品は、一方の端部を斜めに切り落とした半裁木であり、中心の髄の部分が抜け落ちた状態であった。樹種はウツギ属であったことから、周囲の河畔や林縁部等に普通に見られる樹種が利用されたと推定される。ウツギ属は、近接する村上市西部遺跡で粗朶木として利用された事例が認められているが、このほかには西部遺跡の中世とされる丸棒状の木製品や胎内市蔵ノ坪遺跡の古代とされる槍形に確認されている［パリノ・サーヴェイ（株）2002c・2005c］。今回の結果は、棒状木製品の出土状況も含め、ウツギ属の利用を検討する上で貴重な事例と言える。

5 ま と め

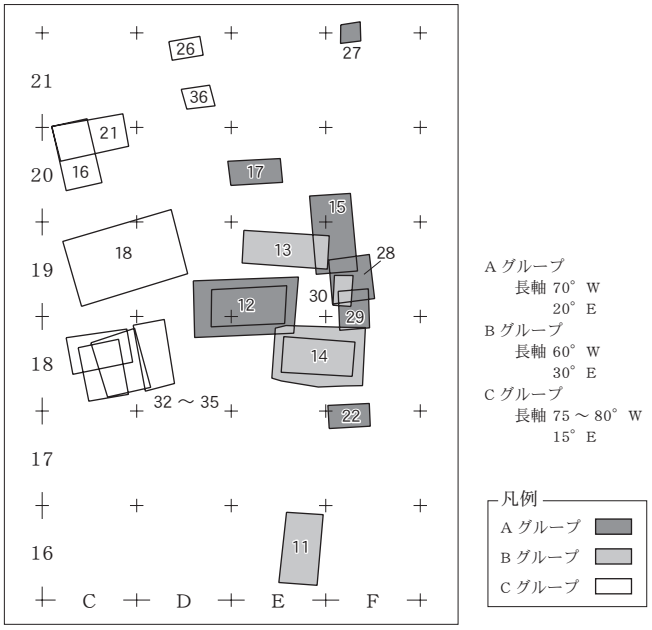
A 田屋道遺跡で検出した遺構について

田屋道遺跡では平成 18 ～ 20 年度の調査で、区画溝内から掘立柱建物・井戸・土坑を検出し、古代から中世にかけての遺物が出土した。遺構及び遺物の検出状況から田屋道遺跡は中世の集落であると推測できる。

1） 掘立柱建物

平成 18 年度に 36 棟、平成 20 年度に 5 棟の掘立柱建物を検出した。平成 18 年度調査の報告書で行った長軸をもとにした建物のグループ分けは（第 103 図）、平成 20 年度調査の建物についても合致するものであった（第 107 図）。だが平成 20 年度調査により掘立柱建物の構造について認識が深まったことから、調査区全体の掘立柱建物を検討し一部修正することとした。

修正した掘立柱建物の遺構番号については、例えば SB1 と SB2 を合わせ 1 棟としたときは SB1（SB2）とした。また、SB1 を修正して 2 棟としたときは SB1a、SB1b とし、SB1 内での修正のときは、平成 18 年度調査の遺構番号とした。



第 103 図　平成 18 年度調査の掘立柱建物グループ模式図

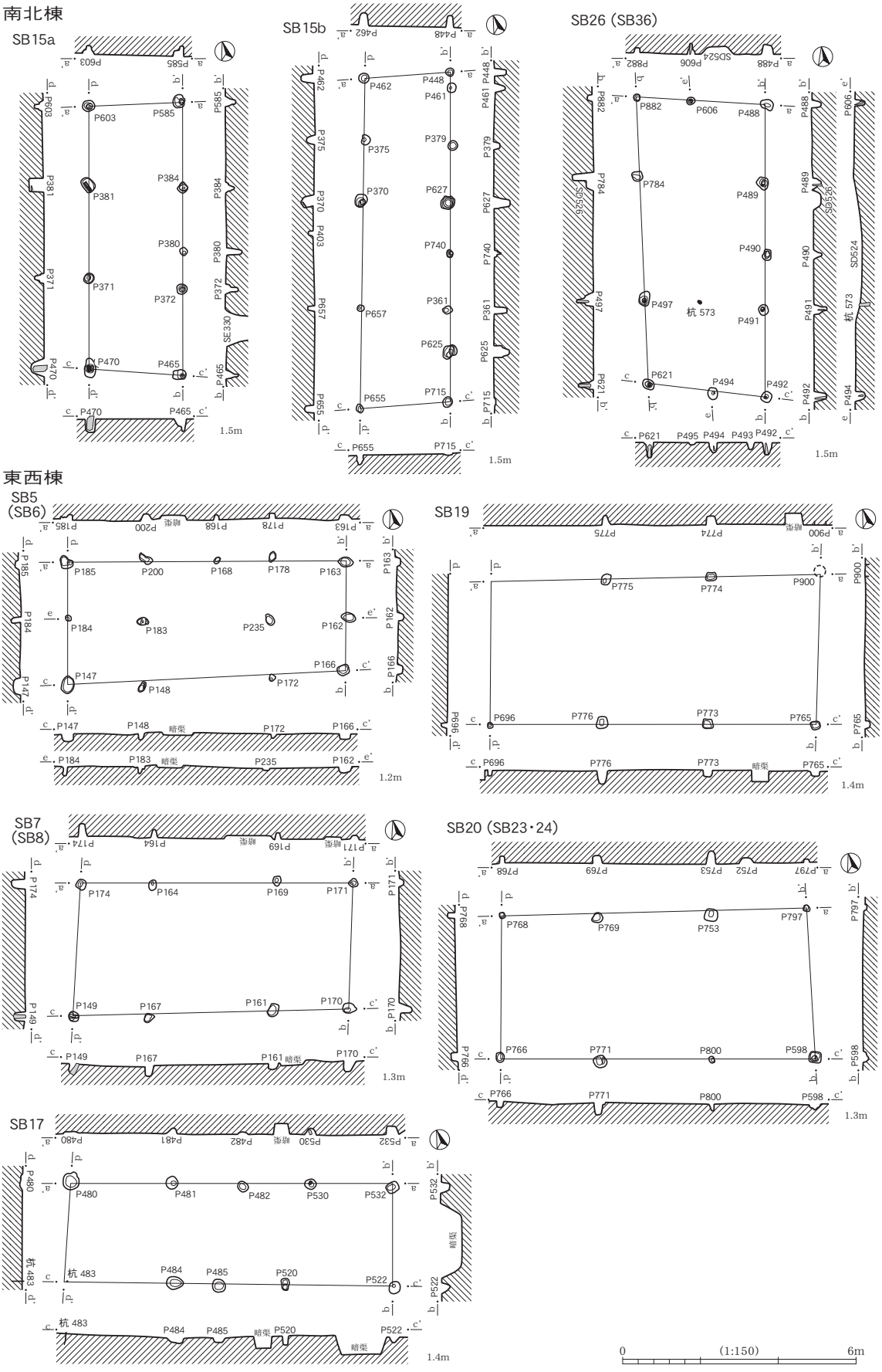
再検討した掘立柱建物は、SB5 と SB6、SB7 と SB8、SB26 と SB36、SB20 と SB23 と SB24 で、それぞれを 1 棟とし SB5（SB6）、SB7（SB8）、SB26（SB36）、SB20（SB23・24）とした。また、SB15 を建物の構造と長軸方向から 2 棟に分け SB15a と SB15b とし、SB17 と SB19 は建物の構造を考慮して桁行を増やした。修正した建物については第 104 図に平面図を掲載し、観察表に建物の内容、規模及び構成する柱穴の一覧を掲載した。

区画溝内にある構造が明瞭な掘立柱建物について、建物構造や長軸方向が類似するものを第 105 図にまとめた。

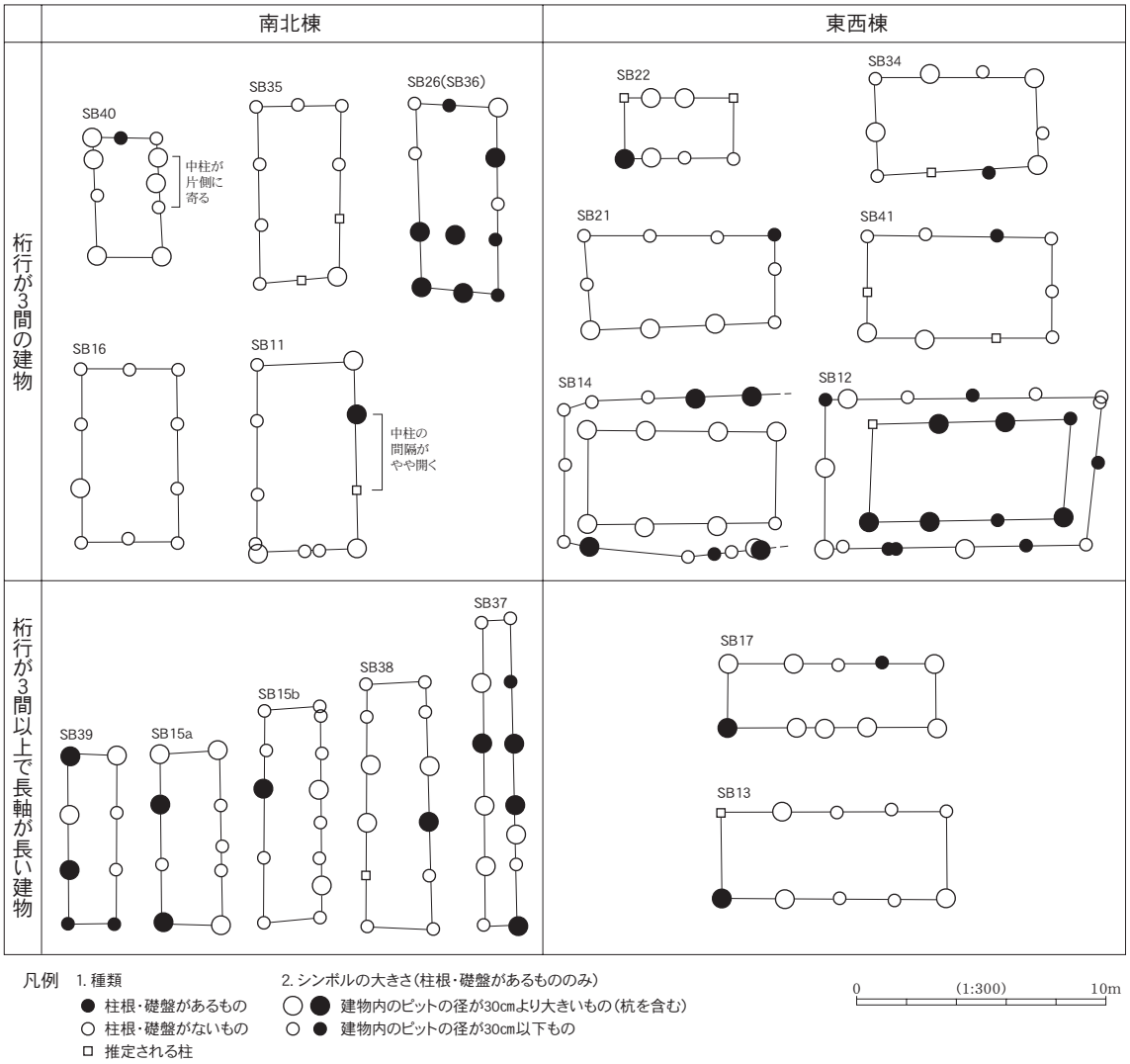
SB22・40 は小型の側柱建物で、梁間 1 間、桁行 3 間を基調とするが、桁行の中柱の位置が片側に寄っている。

SB11・16・21・26（36）・34・35・41 は梁間 1 間、桁行 3 間を基調とする側柱建物である。桁行の中柱の間隔がやや開いており、その柱穴は四隅の柱よりやや深い。規模は梁間が 3 ～ 4 m、桁行は 7 ～ 8 m である。廂を持つと想定した SB12・14 についても、身舎部分の平面形態・規模はほかの側柱建物に類似する。

SB13・15a・15b・17・37・38・39 は、梁間 1 間で 2 ～ 3 m、桁行が梁間より比較的長い側柱建物である。



第 104 図　平成 18 年度調査の掘立柱建物の検討



第 105 図　区画内部の掘立柱建物の構造

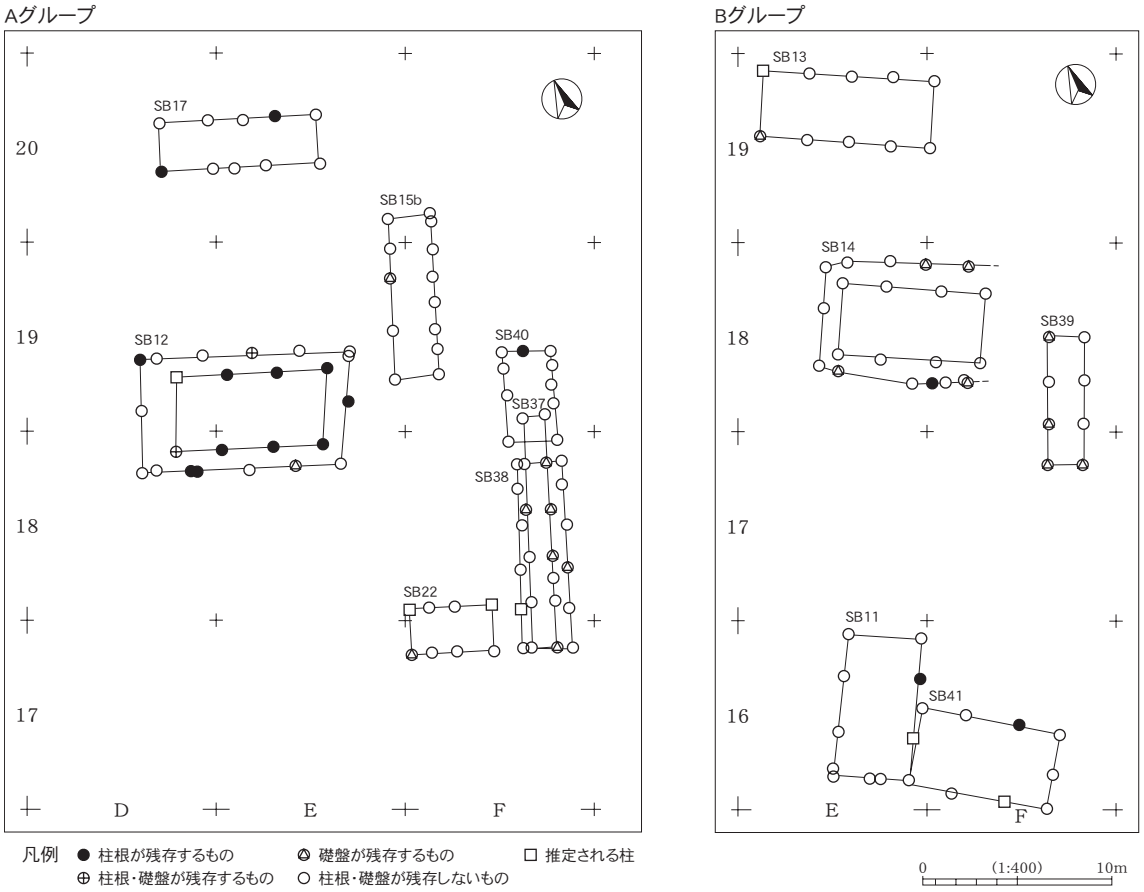
桁行の中央部分の柱穴が大型のもの（SB38）と一方の柱穴が大型のもの（SB17・39）がある。

掘立柱建物の長軸方向及び配置について、平成 18 年度調査報告書の考察を基にグループ分けした（第 103・106・107 図）。

A グループは、平成 18 年度調査では長軸 N70° W 付近の SB12・17・22 と直交する N20° E 付近の SB15・27・28・29 とした。このうち SB27・29 は梁間 1 間、桁行 1 間の建物で、長軸や構造を検討しづらいことから、今回の分析から除外する。また、SB15 については、ほかの建物との関連から構造を見直し 2 棟とした。本グループに含めるものは SB15b である。なお、SB28 は平成 18 年度調査で A グループとしていたが、平成 20 年度調査で柱穴（P1006）を検出し検討した結果、長軸方向を修正し C グループとした。平成 20 年度調査区で本グループに含めるものは、SB37・38・40 である。

B グループは、平成 18 年度調査では長軸 N60° W 付近の SB13・14 と直交する N30° E 付近の SB11・30 とした。このうち SB30 は、梁間 1 間、桁行 1 間の建物で、長軸や構造を検討しづらいことから、今回の分析から除外する。平成 20 年度調査区で本グループに含めるものは、SB39・41 である。

C グループは、平成 18 年度調査では長軸 N75 ～ 80° W 付近の SB18・21・26・34・36 と直交する N15° E 付近の SB16・32・33・35 とした。このうち SB32・33 は、撹乱などで壊れた柱穴があり構造を



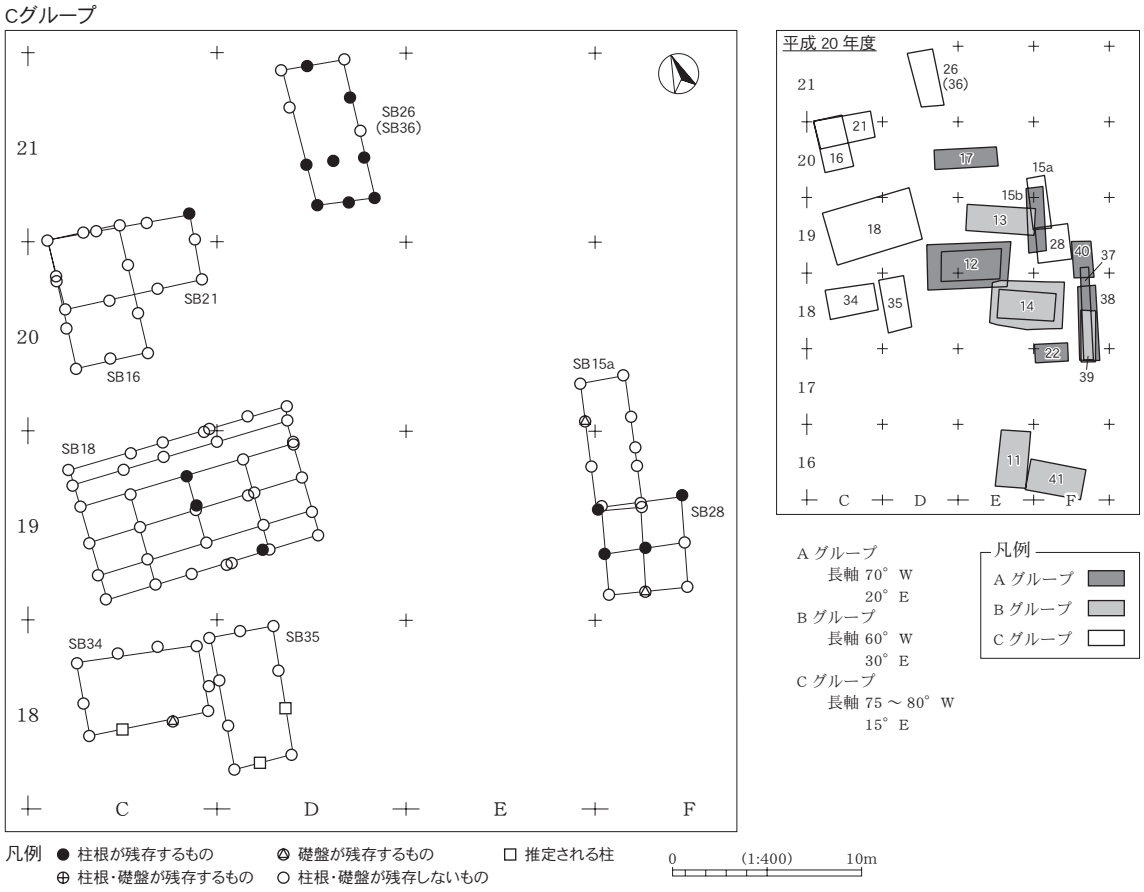
第 106 図　A・B グループの掘立柱建物の配置

確定できないので分析から除外する。SB26 と 36 は合わせて 1 棟（SB26（SB36））としたが、建物の長軸では本グループに属する。また SB15a と SB28 は建物の長軸を再検討した結果、C グループとした。各グループはそれぞれ大型の建物（SB12・14・18）を中心に側柱建物が配置され、位置関係は、調査区の東から西方向に B グループ→ A グループ→ C グループとなり、それぞれ長軸を 10°ずつ違えている。

建物の長軸以外の要素を検討すると、建築材の樹種同定から C グループはクリが、B グループはクリ以外が主体であると言える。A グループはクリが比較的多いが、SB12・38 ではクリ以外の材もある。各グループの大型建物の柱穴の構造を比較すると、B グループの SB14 は柱穴が浅いのに対し、A･C グループの SB12・18 は柱穴が深く柱根が残り、角材も出土した。これらのことから、A・C グループに近似性があること、A グループは B・C グループに対し中間的要素があることがうかがえる。

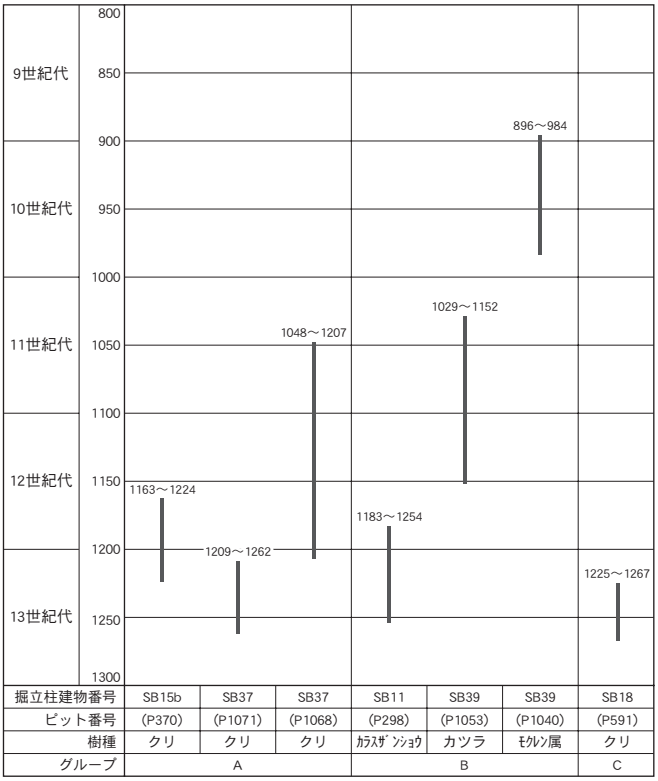
グループごとに柱根の樹種及び大型建物の柱穴構造にまとまりが見られ、グループ間の建物で重複関係があることから、建物の長軸の違いは時期差を示す可能性があると考えた。第 108 図は柱根と礎盤（板）の放射性炭素年代測定（AMS）暦年較正年代（以下、「暦年較正年代」とする）について誤差範囲（σ）を含め示したものである。

柱穴ごとに柱根･礎盤(板)の暦年較正年代を見ると､年代が古く出ているものは SB39 の P1040･1053 で、時期は 12 世紀中葉以前である。SB37 の P1068 については誤差範囲の古い時期は SB39 の柱穴の時期と重なり、新しい時期は 13 世紀の初頭に入る。そのほかの柱穴は 12 世紀後半～ 13 世紀後半の値を示す。グループ別に見ると、測定値が古く出ている順に B グループ→ A グループ→ C グループとなり、この順序は遺跡におけるグループの配置と一致する。



第 107 図　C グループの掘立柱建物の配置・掘立柱建物グループ模式図

建築材の樹種と年代の関連を見ると、クリは分析試料中、比較的新しい時期に位置し、クリの選択性が時期を追うごとに徐々に高まったと推測できる。ただし、出土遺物は 13 ～ 14 世紀代のものが主体であることから、暦年較正年代と対比すると半世紀程度ずれが生ずる。この点は、暦年較正年代は材の伐採年代を、遺物は遺跡内での活動期間を現すもので、その時期差と考えておきたい。一方、暦年較正年代が古く出ている礎盤（板）がある点は、転用材を使用したためと推測する。

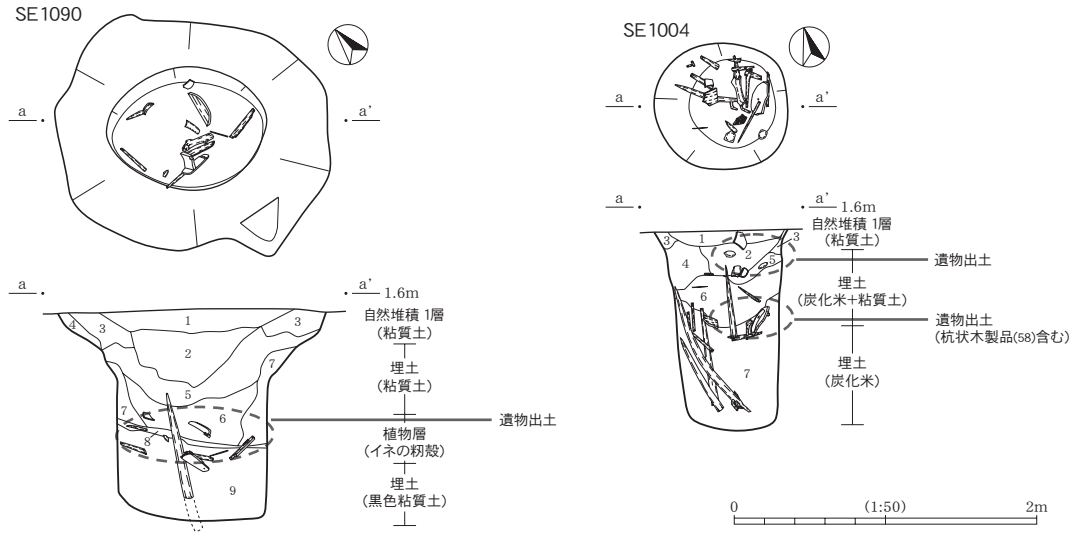


掘立柱建物番号	SB15b	SB37	SB37	SB11	SB39	SB39	SB18
ピット番号	(P370)	(P1071)	(P1068)	(P298)	(P1053)	(P1040)	(P591)
樹種	クリ	クリ	クリ	ｶﾗｽｻﾞﾝｼｮｳ	カツラ	ﾓｸﾚﾝ属	クリ
グループ	A			B			C

第 108 図　柱根・礎盤（板）の暦年較正年代一覧

2） 井　　戸

井戸は 3 基検出したが、そのうち開口部が広い大型の井戸（SE1090）と比較的小型の井戸（SE1004）について検討したい（第 109 図）。



第 109 図　井戸の覆土の状況

SE1090 は開口部が広い平面形状である。８層からイネの籾殻が、６～９層から箸状木製品（67）、漆塗椀（68）、下駄（69）、曲物の蓋（71）、マツの種子などが出土した。村上市（旧神林村）では埋井の祭祀において、ウメにヨシ（埋めてよし）とかけあわせ、ウメやモモの種実とともにアシやヨシを井戸に入れる習慣がある［田辺 2001］。SE1090 における植物遺体の出土状況は廃棄儀礼が指摘される井戸と類似するが、用いられた植物の種類に違いがある。

SE1004 の覆土は黒色を呈し、分析から黒色の成因の一つとして、火熱により炭化・燃焼したイネの植物体や、ススキ属等のイネ科草本に由来する植物体が蓄積された堆積物であることが確認された。炭化・燃焼したイネなどの植物体を土と一緒に井戸に埋めたのであろうか。９B・C グリッドにある SE88 の灰像分析においてもイネ属の籾殻を検出しており［大島ほか 2008］、この井戸も廃棄する際にイネの灰を入れた可能性がある。新潟県で灰や炭化物とともに焼けた礫や土器類・木製品類を埋納する埋井の祭祀を行うのは、鎌倉時代から室町時代に最盛となり、その背景に陰陽道や律令制の崩壊に伴う中世村落の誕生が関わるという指摘がある［駒見 1992］。田屋道遺跡の井戸から出土した遺物の年代はおおむね当該期に属していることから、炭化したイネは井戸の廃棄儀礼に関連があると考えられる。

また、SE1004 では直立した状態で杭状木製品（58）が出土した。旧岩船郡神林村大木戸遺跡［田辺・松田 2001］の SK105 は平面形や規模が SE1004 に近似し、同様に柱根状の木製品が遺構底面に突き立ったように出土した。埋井の祭祀との関連では、井戸に神の息抜き棒を立てる例はあるが、これらは中空の材を使用する事が多い［岩本 2005］。水田遺構の例ではあるが、山梨県二本柳遺跡において杭状木製品が斎串の役割をしている可能性が指摘されている［畑 2006］。

SE1090・1004 では遺物の出土状況や内容から井戸の廃棄儀礼を行ったと考えられるが、覆土や遺物の出土状況に差違がある。また、埋井の祭祀として挙げられる事例とも一部違いが見られる。これらの違いが儀礼の多様性を示すのかについては、今後の事例の増加を待ちたい。

次に掘立柱建物と井戸の検出位置について平成 18 年度調査区を含め比較検討したい（第 110 図）。SE1090 に類似し開口部が広い井戸は SE328・534 が挙げられる。いずれも複数の建物の間に位置していることから、共同井戸としての性格を考えたい。検出位置は西から東に SE534 → SE328 → SE1090 とやや弧を描きながらほぼ等間隔に並ぶ。一方、SE1004 に類似し開口部が狭く、覆土に炭化物を含む黒色土

がある小型の井戸はSE327・330・336などが挙げられる。これらの井戸は特定の建物の傍に位置しており、建物に付随する井戸と考えられる。

3) 溝

平成19年度及び20年度は33条の溝を調査したが、そのうち23条は平成18年度調査区からの延長部であった。ここでは、平成18年度調査区の溝を含め検討したい。

平成18年度調査では、溝の長軸はN40°W～83°Wと直交するN 4°W～36°Eにまとまりが見られることを指摘した［大島ほか2008］。さらに、平成19年度及び20年度調査区の成果を合わせると、長軸方向と検出位置に関連があることが分かった。長軸がN30°E～35°Eと直交するN40°W～55°Wの溝は16ラインより南側で、長軸がN5°E～20°Eと直交するN56°W～75°Wの溝は16ラインより北側で多く検出した。このことから、方形の地割りを意識していること、地区によって地割りの方向設定に違いがあることが推測できる。

16ラインより南側では、平成18年度調査［大島ほか2008］で区画Bと想定したSD2が、9Fグリッドで直角に曲がり東に伸びることを確認した。またSD42もSD2の延長線上に伸び、区画をなす可能性がある。

16ライン付近では、SD237・252・286・289が東西方向に伸びる。平成20年度調査で、SD286・289は15・16Fグリッドで幅を広げ若干南に向きを変えることが分かった。このことからSD286・289はSD237･252と同じ方向に伸びる可能性がある。これらの溝については道路側溝としての可能性を考え、調査区東壁を観察したところ溝間にシルト質土の盛り上がりを確認した。ただSD237とSD252は平面形に違いがあることから性格が異なる可能性もある。

16ラインより北側では、平成18年度調査で区画Aと想定したSD234・237・535やSD288がある。平成20年度調査で、区画の北側にあるSD535は25Bグリッド付近で南に曲がり、SD234の方向に伸びることを確認した。このことからSD535とSD234は同一の区画をなす溝であり、区画の西辺は約90mと考えられる。

そのほかの溝についてはSD535の北側にSD1094が、SD288の南側にSD186がある。平面的に見ると大区画SD234･237･288･535の南にSD186、北にSD1094による区画があり関連があると考えられる。また、大区画の内部にはSD525・526・527・594・847などの小区画をなす溝を検出している。出土遺物を見ると大区画のSD234・288ではⅠ～Ⅲ期の、小区画のSD525・527ではⅡ～Ⅲ期の珠洲焼が出土した。溝に伴う遺物が少ないことから詳細は不明であるが、大区画と小区画の間に明確な時期差はなく同時期に存在したものと考えられる。

B 田屋道遺跡における中世集落の概要

田屋道遺跡で検出した掘立柱建物・井戸・溝について、検出位置や出土遺物から関連性を探りたい。

大区画の溝（SD234・237・288・535）と掘立柱建物の長軸は、SD234とCグループが、SD288とAグループがそれぞれ平行または直交する。Bグループの建物軸に平行または直交する溝はない。前述のようにA・Cグループは建築材の選択性や柱穴規模が近似しており、さらにAグループはBとCグループの中間的要素が強く、建物の長軸の違いは時間差を示す可能性があることを考慮し、第37表に遺構と出土遺物の関連を、第110図に村落の変遷を示した。

1段階は、Bグループの建物の暦年較正年代が古く出ていること、建物軸に平行または直交する溝がないことから、区画溝が成立する以前の建物群の段階を想定した。ただし、SB38はAグループであるが柱穴の重複関係からBグループのSB39より古い。このことから18Fグリッド付近の建物は時期が古いと考えられ、この付近を中心に建物群が成立した可能性がある。

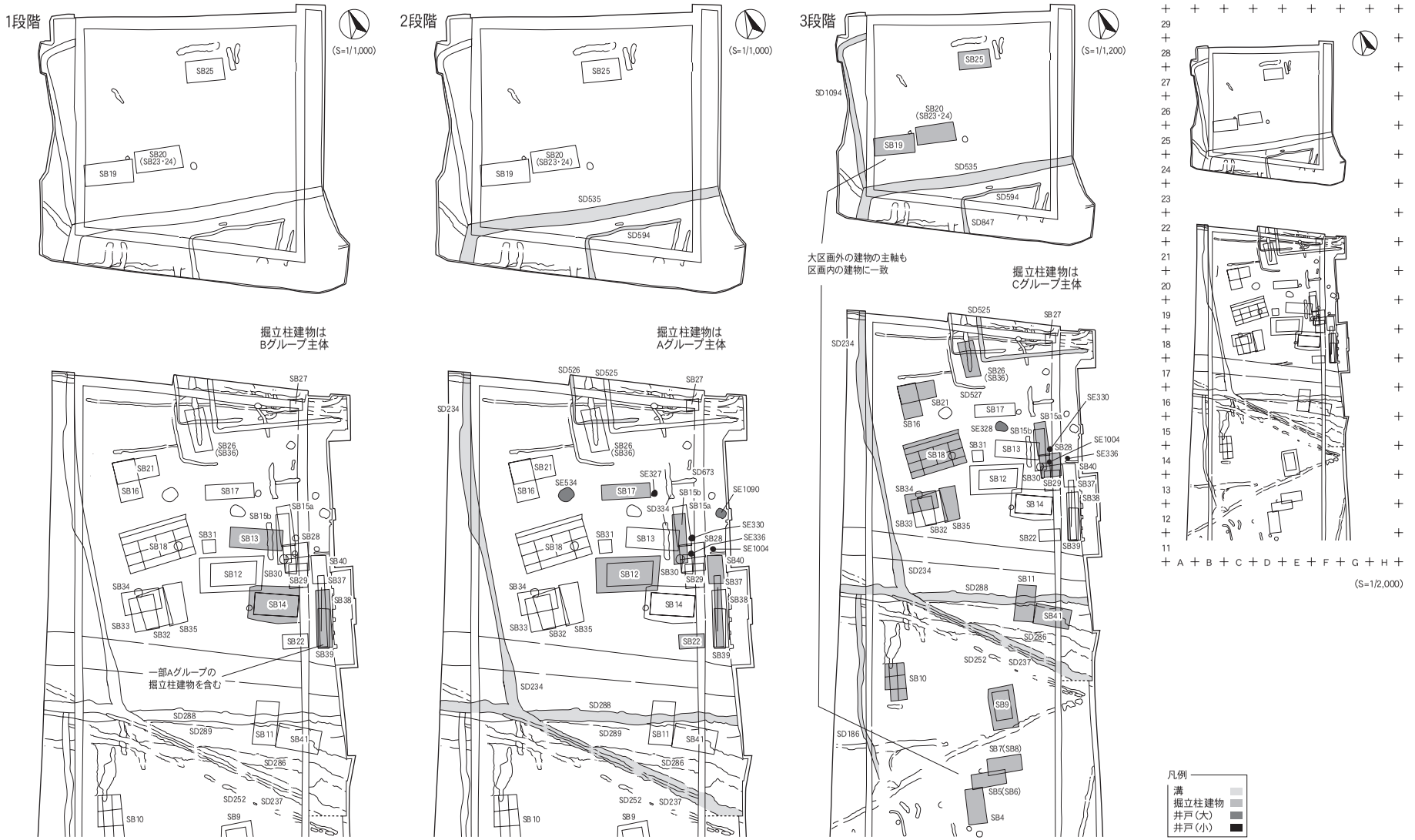
2段階は、BとCグループの中間的な要素を持つAグループの建物が大区画のSD288の長軸と平行または直交していることを考慮し、区画溝が形成され屋敷地が成立した段階を想定した。また、小区画はSD526と525の重複関係からSD526をこの段階に位置付けた。2段階では開口部が広い井戸が複数の建物の間に、開口部が狭く炭化物が覆土に入る井戸が側柱建物付近に位置するようになる。井戸の配置から建物の性格が違うことが想定され、区画溝内部で性格の違う建物が存在すると考えられる。

3段階は、Cグループの建物が大区画のSD234の長軸と平行または直交すること、大区画の外側にある掘立柱建物の長軸もCグループと近似することから、屋敷地が拡大し集落が形成された段階を想定した。大区画の南北にはSD186・1094による区画が隣接しており、地割りが周囲に及んでいると言える。また、BグループのSB11・41はSD288との重複関係や暦年較正年代などから本段階とした。柱穴の位置がSD288・289を跨ぐ位置にあること、SB11のP298では大型の柱が打ち込まれ、その他の柱穴も掘形が深く大区画の建物と違いが見られることから、橋などの施設である可能性がある。また、大区画の内部にはSD525・594・847による一辺30mほどの小区画がある。

遺構の検出位置、重複関係、出土遺物などから1～3段階の集落変遷を想定した。1段階は関連する出土遺物がなく時期の詳細は不明であるが、礎盤（板）の暦年較正年代などから2・3段階より古いと考えられる。また、2段階の井戸SE327からⅢ期の珠洲焼（擂鉢）が、SE534・1090からⅠ～Ⅲ期の珠洲焼（甕）が出土し、田屋道遺跡全体における出土遺物は珠洲焼のⅡ～Ⅳ期が主体であることから、2段階は珠洲焼Ⅰ～Ⅲ期相当、3段階は珠洲焼Ⅲ～Ⅳ期相当と推測される。2・3段階の建物のクリ材の暦年較正年代は12世紀後半から13世紀中葉までが多いことから、田屋道遺跡は13世紀ころには屋敷地に区画溝を持つ集落へと展開していたものと推測しておきたい。

段階		掘立柱建物	大区画溝	小区画溝	井戸(大)	井戸(小)
1	関連遺構	Bグループ	SB11(P298)はSD288より新しい 存続時期は2段階と重なる可能性あり			
	建物長軸	N60°W・N30°E付近				
	年代 重複関係	SB39礎盤(板)の暦年較正年代は古い SB11は柱構造や暦年較正年代がA・Cグループに近い SB39はAグループのSB38より新しい				
	遺物内容	柱や礎盤の材はクリ以外が主体				
2	関連遺構	Aグループ	SD234・237・288・535	SD526	SE534・1090	SE327・330・336・1004
	建物長軸 区画溝	N70°W・N20°E付近	SD234・237・288・535の存続時期は3段階と重なる	SD526		
	年代 重複関係	SB15b・37礎盤(板)の暦年較正年代はB・Cグループの間	Aグループの掘立柱建物と長軸が一致		珠洲焼(Ⅰ～Ⅲ期)、青磁(13c)	SE327から珠洲焼(Ⅲ期)他、珠洲焼(Ⅲ～Ⅳ期)、12～13c総高台の漆塗皿
	遺物内容	柱や礎盤の材はクリとクリ以外を用いる 角材を使用する建物あり(SB12)	SD237・288から珠洲焼(Ⅰ～Ⅲ期)			
3	関連遺構	Cグループ	SD234・237・288・535	SD525・594・847	SE328	SE330・336・1004
	建物長軸 区画溝	N75～80°W・N15°E付近	SD234・237・288・535	SD525・594・847		
	年代 重複関係	SB18柱根の暦年較正年代は新しい	Cグループの掘立柱建物と大区画の外側にあるSB4・5(6)・7(8)・9・10・19・20(23・24)・25の長軸が一致する		珠洲焼(Ⅲ～Ⅳ期)	珠洲焼(Ⅲ～Ⅳ期)、12～13c総高台の漆塗皿
	遺物内容	柱や礎盤の材はクリ主体 角材を使用する建物あり(SB18・28)	SD234から珠洲焼(Ⅳ期以前)、瓷器系・陶器(13c後半)	SD525から珠洲焼(Ⅰ～Ⅲ期)、青磁(12c末～13c)		

第37表　集落内遺構相関図



第 110 図　田屋道遺跡の集落変遷図

第VI章　宮の越遺跡 II

1　遺跡の概要

A　概　　観

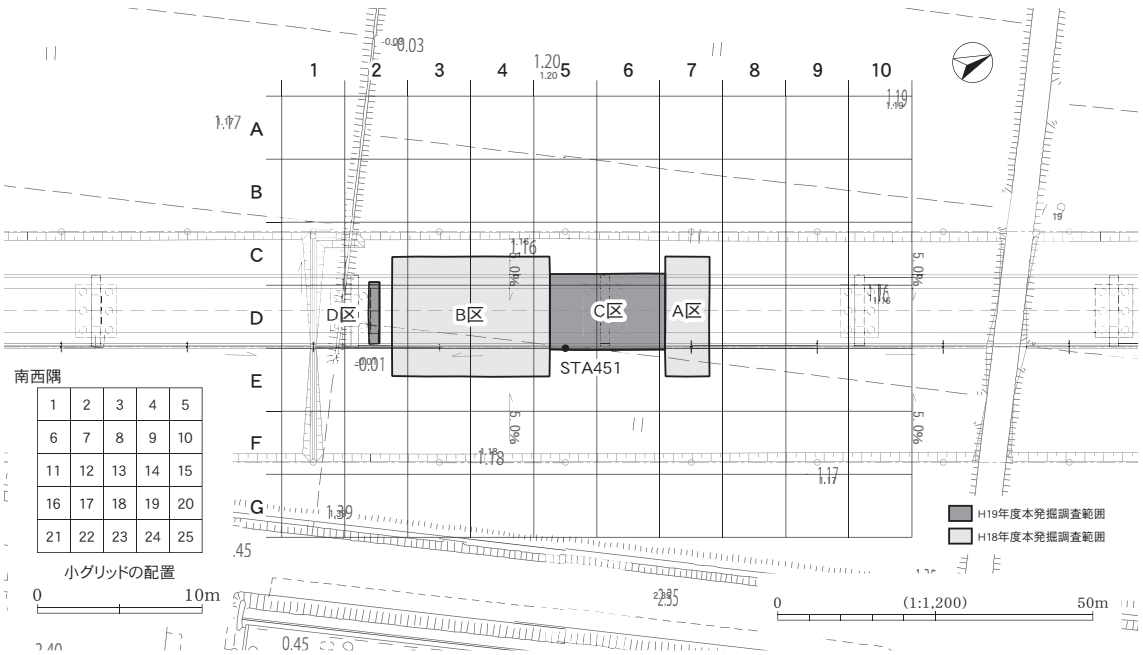
本遺跡は、荒川の右岸に広がる低湿地部に立地する遺跡である。田屋道遺跡から北へ２km の位置にあり、慶長２（1597）年の『瀬波郡絵図』に描かれた新飯田の集落は北西方向、九日市の集落は南方向にある。遺跡の南には百川（旧桃川）、北には笛吹川が流れ、これらの川に挟まれるように遺跡が立地する。遺跡の標高は約 0.6m である。これらの小河川はかつて岩船潟へ注いでいた。

遺跡は平成 18 年度に 611 ㎡を調査し、土坑、打ち込み杭を検出した。遺物は９世紀代の須恵器、土師器、製塩土器などが出土したが、放射性炭素年代測定（AMS）による杭の数値は７世紀代を示した。平成 19 年度は平成 18 年度調査区（A 区・B 区）に挟まれた C 区と、B 区の南側に設定した D 区の調査で、C 区で杭を検出するとともに古代の須恵器・土師器・木製品が出土したが、D 区では遺構・遺物は検出されなかった。

B　グリッドの設定（第 111 図）

グリッドの方向は、高速道路のセンター杭を基準として、道路の方向に一致させた。STA451（旧日本測地系　X = 242322.703、Y = 84000.162）と STA450（旧日本測地系　X = 242229.718、Y = 83963.367）とを結んだ線を南北方向の基準線として、10 m四方の方眼を組み、大グリッドとした。このため、グリッドの南北方向は真北から 21° 35′ 21″東偏している。

大グリッドの名称は南西隅を基点とし、南北方向を算用数字、東西方向をアルファベットとして「３D」のように表示した。大グリッドをさらに２m四方に 25 分割し、小グリッドを設定した。小グリッドは１



第 111 図　宮の越遺跡グリッド設定図

～ 25 の算用数字で表し、南西隅が 1 で、北へ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5、東へ 6 ・ 11 ・ 16 ・ 21 の順で、北東隅を 25 とした。表記は大グリッドの後に付けて「 3 D12」のように呼称した。C 区内 6 D グリッドの座標は X ＝ 242331.032、Y ＝ 83992.702 である。

C　発掘調査の方法

表土除去　平成 19 年度の調査区は橋脚位置の変更から、平成 18 年度調査区の A 区と B 区に挟まれた部分（C 区 226 ㎡）と B 区の南側に設定した部分（D 区 221 ㎡）からなる。ただし D 区には水路などの既在施設が含まれ、この部分では遺跡が撹乱されていると判断できたことから、水路の北側 16 ㎡の調査となった。表土は耕作土（Ⅰ、Ⅱ層）で、畑の耕作土（Ⅰ層）と水田耕作土（Ⅱ層）に分けた。これを取り除くと、褐灰色の砂層（Ⅲ層）となる。層厚は 20 ～ 30 ㎝である。Ⅲ層中にはラミナ状に黒色土が入ることから河川の氾濫等に起因する再堆積土と考えられる。同層中には遺物が多数含まれることから、Ⅰ、Ⅱ層を重機で掘削した後、Ⅲ層については、人力で掘削作業を行い遺物の検出に努めた。

土層観察　土層観察については、調査区の外周囲に設けた開渠の壁面を利用して行った。C 区では西・東壁、D 区では北・東・西壁で観察し、図と写真に記録した。

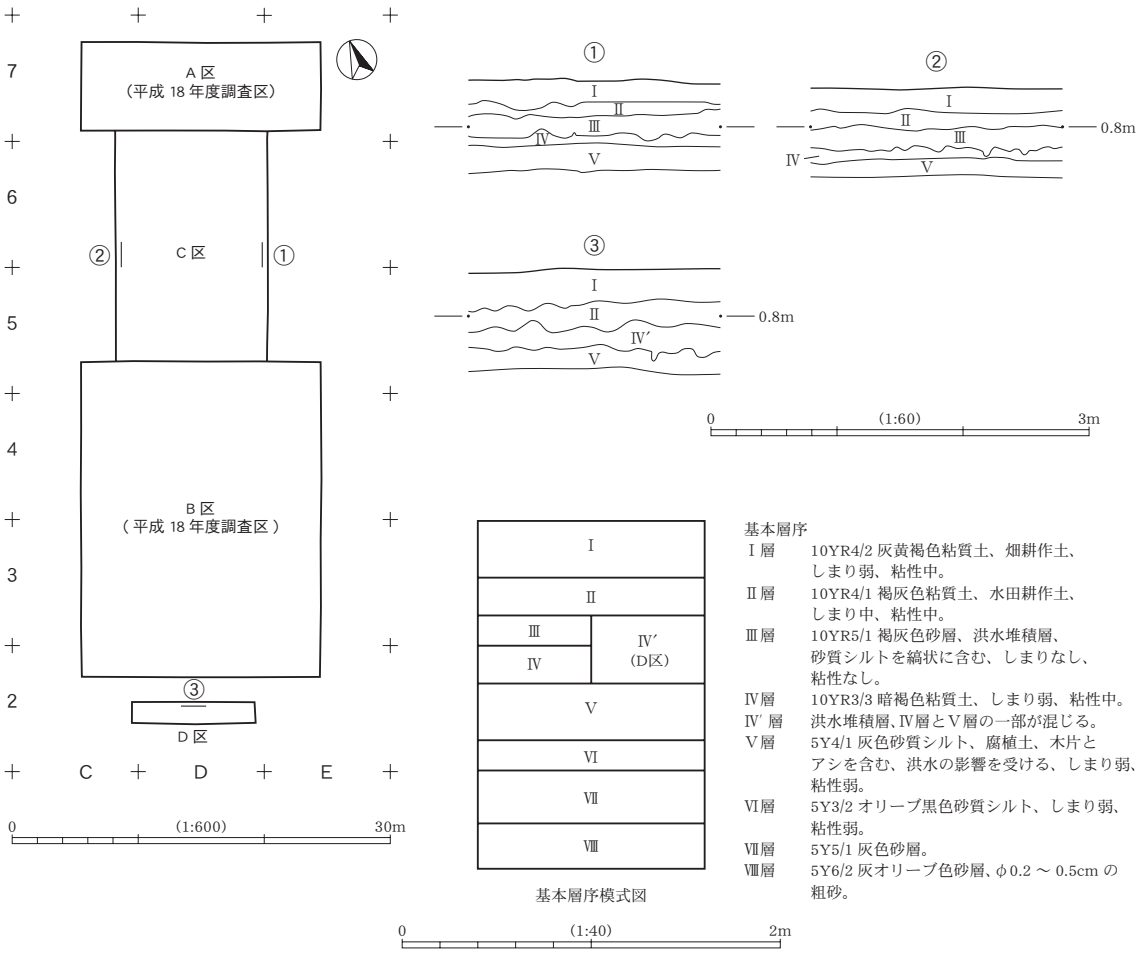
遺構検出　遺構検出は平成 18 年度同様、Ⅳ層上面で行ったが、打ち込み杭以外に検出した遺構がなく、平成 18 年度の調査でⅣ層中に折れて検出したものがあったことから、Ⅳ層を 20 ㎝ほど掘り下げ杭の有無を確認した。

遺構調査　杭の調査は、打ち込み角度を考慮してトレンチを設定し、その角度と打ち込み層の堆積状況を記録した。

D　層　　序（第 112 図）

1）基本層序

遺跡の層序は、平成 18 年度の調査に合わせ、Ⅰ～Ⅷ層に分層した。Ⅰ層は水田耕作土の上部を削り取り、畑作用の土壌を客土したもので、20 ～ 30 ㎝の厚さを持つ。土質はやや粘質でしまりは弱い。Ⅱ層は水田耕作土である。層厚は 10 ～ 20 ㎝で、場所により耕作が及んでいる深度が異なり下位層のⅢ、Ⅳ層土が同層中に含まれる部分も存在している。Ⅲ層は洪水堆積層で、層厚は 20 ～ 30 ㎝である。主体は砂だがⅣ層土を削りながらの堆積のため、砂層中にⅣ層土及び河川性堆積物がラミナ状に含まれる。同層中には古代の遺物が含まれており、遺跡本体の遺物包含層が洪水により流失して再堆積したものと考えられる。遺跡の南側 D 区ではⅢ層は見られず、Ⅳ層土とⅤ層土の一部が撹拌された土が堆積していた（Ⅳ'層）。Ⅳ層は遺構検出面である。暗褐色粘質土で層厚は 10 ～ 20 ㎝である。しまりは弱く粘性は中程度である。Ⅴ層は灰色砂質シルト層である。層厚は 20 ～ 30 ㎝で、腐植土のラミナや木片、アシ・ヨシの類、トチの実等を含むことから、洪水堆積層と考えられる。しまりは弱く、粘性も弱である。開渠溝での掘り下げはこの層までである。Ⅵ層以下は土層サンプル取得のためのトレンチで壁面を確認した。Ⅵ層はオリーブ黒色を呈する砂質シルト層である。同層中にも粘土が混じり部分的に互層となっていることから、水成堆積層である可能性が高い。わずかに植物遺体が混じる。田屋道遺跡のⅤ層に相当すると考えられる。近隣の窪田遺跡とともに土層サンプルの放射性炭素年代測定を行ったところ、縄文時代後期に相当する結果を得た（第Ⅴ章 4 ）。Ⅶ層は灰色のやや細かい砂層、Ⅷ層は灰オリーブ色でφ 0.2 ～ 0.5 ㎝の粗砂からなる。



第 112 図　宮の越遺跡Ⅱ基本層序

2　遺構各説

A　概　　要

本調査では打ち込み杭を 7 本検出した。杭番号は平成 18 年度調査で 9 まで附番したので 10 からの附番である。

B　杭

杭 10（図版 91・149）

6D23 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出した。丸材で樹皮が一部残る。Ⅵ層中まで鉛直に打ち込まれている。

杭 11（図版 91・149）

6D22 グリッドに位置する。Ⅲ層中で検出した。丸材で樹皮はない。平面上での杭の傾きは N36° W で、鉛直に対し 22°傾き、Ⅴ層中まで打ち込まれている。

杭 12（図版 91・149）

6D23 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出した。丸材で樹皮が一部残る。Ⅴ層中までほぼ鉛直に打ち込まれている。

杭 13（図版 91・149）

6D 7グリッドに位置する。Ⅲ層中で検出した。中央より下半がやや湾曲した丸材で樹皮はない。Ⅳ層中までほぼ鉛直に打ち込まれている。

杭 14（(図版 91・150）

5D20 グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出した。丸材で樹皮はない。平面上での杭の傾きは N27° E で、鉛直に対し 45°傾き、Ⅴ層中まで打ち込まれている。

杭 15（図版 91・150）

5D12 グリッドに位置する。Ⅲ層中で検出した。細い割材で樹皮はない。平面上での杭の傾きは N50° W で、鉛直に対し 10°傾き、Ⅳ層中まで打ち込まれている。

杭 16（図版 91・150）

7D 6 グリッドに位置する。Ⅳ層中で検出した。丸材で樹皮はない。平面上での杭の傾きは N76° E で、鉛直に対し 10°傾き、Ⅶ層中まで打ち込まれている。

3　遺　　物

A　概要と記述の方法

本遺跡から出土した遺物は、木杭 7 点以外、いずれも洪水による再堆積層からの出土である。その総数は 131 点で、内訳は土師器 57 点、須恵器 50 点、磁器 1 点、陶器 2 点、木製品が 21 点である。そのほかに被熱礫などが出土した。須恵器・土師器の記述については［春日 1999］を参考に記述した。また、［坂井 1989］を基にした［春日 2004］の分析では、須恵器の胎土には、A「胎土そのものが相対的に粗く、石英・長石・金雲母を多く含むもの」、B「胎土そのものが精良で、白色小粒子を多く含むもの」、C「胎土そのものは比較的精良であり、石英・長石の小粒子を少量含むもの」があり、A については旧岩船郡荒川町元山窯跡群、旧北蒲原郡豊浦町・笹神村五頭山麓窯跡群など、阿賀北地域で生産された須恵器に一般的に見られ、B については佐渡小泊窯跡群の特徴で、C は新津丘陵窯跡群の特徴とされるが、荒川町元山窯跡群や旧北蒲原郡黒川村松山窯跡群の中にも確認できるという。

B　各　　説

1）須　恵　器（図版 91・92・150・151 - 1 ～ 15）

1 ～ 12 は無台杯である。1 は内面底部に「×」のヘラ記号がある。外面底部はヘラ切り後ナデ調整されている。外面口縁に重ね焼き痕がある。胎土は A に類似する。Ⅳ期のものと考えられる。2 は外面底部に右回転のヘラ切り痕があり、切り離し後の調整はない。胎土は A に類似する。Ⅳ～Ⅴ期のものと考えられる。3 は外面底部に左回転ヘラ切り痕がある。胎土は B でⅤ期の所産と考えられる。4 の胎土は A で時期は不明である。5 は口縁部に重ね焼き痕がある。胎土は A で精選されている。時期はⅣ～Ⅴ期と考えられる。6 は無台杯としたが口縁の立ち上がりが急角度であることから有台杯の可能性もある。胎土は C で時期はⅣ～Ⅴ期と考えられる。7 は 2 と同じ胎土の土器でロクロ回転方向、底部切り離しも同様である。Ⅳ～Ⅴ期のものと考えられる。8 は外面に自然釉が付き光沢を持つ。胎土は A でⅣ～Ⅴ期のものと考えられる。9 の胎土 C で精選されている。10・12 は底部に糸切り痕を持つ。産地は不明である。11 は 1 と同じ胎土であり、器形も類似する。13 は有台杯である。外面底部はヘラ切り後ナデ調整されて

いる。胎土はＡでＶ期の所産と考えられる。14 は大甕の口縁から肩部片である。外面には平行タタキとカキメが見られ、内面には同心円状のあて具痕が見られる。15 は横瓶の頸部から肩部片で、外面に平行タタキが見られる。外面全体に薄く自然釉が被る。内面には同心円状のあて具痕が見られる。胎土はＡでＶ期の所産と考えられる。

２）　土　師　器（図版 92・151 - 16 ～ 22）

16 ～ 22 は小甕である。16 の口縁は「く」の字状に浅く外傾する。外面の口縁は横ナデ、体部にはヘラケズリと縦位のハケメが見られる。内面の成形痕は摩滅のため顕著ではない。17 は口縁が大きく「く」の字に外傾するもので、胴が丸く膨らむ器形を持つ。内・外面にカキメがある。外面口縁にススと内面には炭化物(おこげ)が付着している。18 ～ 22 は非ロクロ成形の小甕である。18 は胴部片で、外面には縦位、内面には横位のハケメがある。19 は胴部から底部片で、外面胴部には縦位、内面には縦・横位のハケメと、外面底部には木葉痕がある。20 は胴部片で、外面にわずかに縦位のハケメと内面に横位のナデがある。21 は底部片で、内・外面にケズリがある。22 は胴部片で、外面には縦位のハケメが付き、内面はナデられている。

３）　被　熱　礫（図版 93・151 - 23）

23 は平坦面を持つ被熱礫の三方を平坦面に対してほぼ垂直に割ったものである。被熱による焦げ痕を持つものである。石質はアブライトである。

４）　木　製　品（図版 93・151 - 24 ～ 41）

24 ～ 26 は幅約 1 ㎝の断面が方形の木製品である。24・25 は両端が切断され、26 は欠損している。27・28 は径が 0.6 ㎝で断面形は丸い棒状の木製品である。両端は削られていてほぼ平坦である。29 は 26 とほぼ同じ断面が方形の木製品である。長さ約 30 ㎝で上端は切断されている。30 は箱物の底板と考えられる。側縁は丸みを帯び、釘穴が２個ある。31 は幅約２㎝で、下端は楔状に削られている。32 は箱物または折敷の底板と考えられる。角は丸く縁取りされている。33 は板材の断片である。34 ～ 41 は杭である。34 は丸材で一部に樹皮が残る。先端は２方向からＶ字形に削り出されている。35 はやや湾曲した丸材の先端を斜めに切断している。樹皮はない。36 は丸材で樹皮が一部に残る。先端を斜めに切断している。樹種はハンノキ亜属である。37 は杭として検出したが、先端の加工痕が腐食のため判然としない。丸材で樹皮は残っていない。38 は、丸材で先端をＶ字形に切断している。樹皮はない。39 は、板状の材で下端はやや薄く篦状である。40 は丸材で先端はＶ字形に削られている。樹皮はない。41 は割材で、先端は４面に加工されている。

4　自然科学分析

A　分析目的と試料

平成 18 年度の調査で検出した立杭の放射性炭素年代測定値は、7 世紀中ごろの年代が得られたが、出土した遺物の年代が 9 世紀代を示すことから、データ間に齟齬をきたしていた。このため平成 19 年度検出の立杭について、再度、放射性炭素年代測定を行い遺跡の所属年代の検討を行う。試料は芯持丸木の杭 12 である。最外年輪を含む部位から木片を採取し、試料とした（分析方法は第Ⅲ章４Ａを参照）。

B　結果とまとめ

結果を第 38・39 表に示した。杭 12 の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は、1,230 ± 30BP を示す。この測定結果に基づく暦年較正結果（σ）は、calAD712 - 861 である。また、分析対象とした試料の由来（種類）の検討を目的とした樹種同定の結果、杭 12 はハンノキ属ハンノキ亜属に同定された。この結果から、年代については、出土土器の年代に近い値を示し、平成 18 年度の測定結果と合わせて考えると遺跡の年代が 7 ～ 9 世紀の幅を持つ可能性を示唆した。ハンノキ亜属については、トネリコ属とともに、周辺低湿地に林分を形成する種であることから、手軽に入手できる材と言える。

遺構名	樹種	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code №.	測定機関番号
杭12	ハンノキ亜属	1,230± 30	-31.41±0.56	1,340± 30	9704-9	IAAA-72418

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
2)BP年代値は、1,950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第 38 表　放射性炭素年代測定結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				相対比	Code №.
杭12	1,232± 28	σ	cal AD 712 - cal AD 746	cal BP 1,238 - 1,204	0.334	9704-9
			cal AD 767 - cal AD 784	cal BP 1,183 - 1,166	0.178	
			cal AD 787 - cal AD 824	cal BP 1,163 - 1,126	0.335	
			cal AD 841 - cal AD 861	cal BP 1,109 - 1,089	0.154	
		2σ	cal AD 689 - cal AD 752	cal BP 1,261 - 1,198	0.349	
			cal AD 761 - cal AD 880	cal BP 1,189 - 1,070	0.651	

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。
2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3)暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
5)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第 39 表　暦年較正結果

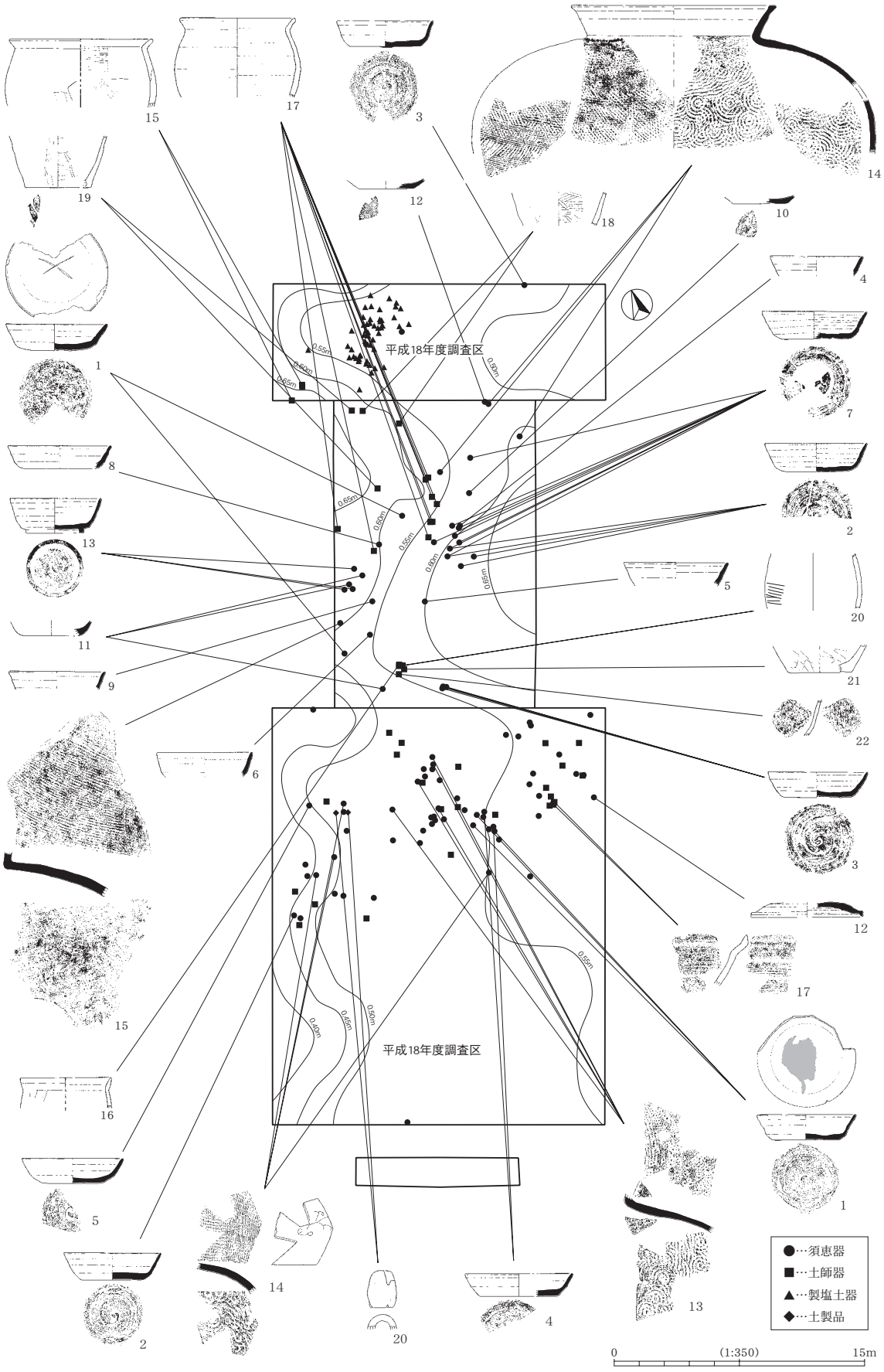
5　ま　と　め

宮の越遺跡で検出した遺構は、平成 18 年度調査では、土坑 1 基、打ち込み杭 8 本、平成 19 年度調査は打ち込み杭 7 本である。平成 18 年度検出の杭 4 は、放射性炭素年代測定（AMS）による値が 7 世紀代であるのに対し、出土した須恵器が『新潟県の考古学』［春日 1999］で示された編年の 8 ～ 9 世紀代とされるⅣ～Ⅵ期のものが大勢を占めたことから、杭の年代測定値との間に齟齬が生じるという現象があったが、平成 19 年度検出の杭 12 の年代測定値が 8 ～ 9 世紀代を示すことから、この遺跡がある程度年代幅のある遺跡であることが判明した。岩船潟周辺の古代に属する遺跡の多くが年代幅を持ちつつも、出土遺物は 9 世紀代のものが多い傾向がうかがえ、本遺跡もその傾向を示している。ただし、集落の構造については依然として遺跡全体を調査するような例が少なく、不明な点が多い。近年の日沿道関係の調査で、田屋道遺跡［大島ほか 2008］の 7 世紀代の打ち込み柱による建物（SB1）や、8 世紀代の打ち込み柱による建物を 7 棟検出した窪田遺跡［前川ほか 2007］での状況から、建物の構造の一端が分かってきた。いずれの遺跡でも竪穴建物は検出されず、掘立柱建物である。窪田遺跡で見られるような隅柱の位置に二本の柱が打ち込まれた構造の建物（SB4）や同様な構造の総柱建物（SB1）もあり、低湿地における建物の基礎構造に新たな知見をもたらしている。

宮の越遺跡では、集落の構造が分かるような遺構は検出されていない。ただし、検出した杭は打ち込みの間隔や杭の規格に規則性は見られないものの、杭 10 - 12 - 11 - 14 - 15 - 8 - 6 - 2 は北東 - 南西方向に列を成している。前述の窪田遺跡［前川ほか 前掲］では打ち込み柱による建物に隣接して、SA1・2 といった杭列が報告され、杭列が建物の軸に沿ってほぼ並行していることから、建物と関連のある杭列としている。また、遺跡の時期（中世前半）は異なるが平成 18 年度調査の田屋道遺跡［大島ほか 前掲］で SA1・2・3 の杭列を報告している。窪田遺跡のように建物に密接するわけではないが、杭列は掘立柱建物の棟方向とほぼ合致しており、建物との関係が推測できる。本遺跡の杭列の性格については、ほかに検出した遺構が土坑 1 基だけであり、現状では積極的にその性格を言及するのは困難である。ただ出土遺物が食膳具・煮炊具などの土器、土錘・製塩土器などの漁撈や生産に関わる道具など集落の存在を示唆するものであることから、これら杭列も集落に付随するものと考えるのが妥当であろう。

出土遺物のうち須恵器で胎土から産地が推定できるものは、平成 18 年度のものを含めて 26 点である。産地の内訳と比率は佐渡産が 2 点で 7.7%、阿賀北産が 15 点で 57.7%、新津・元山産が 9 点で 34.6% である。須恵器の推定産地は阿賀北産が約半数を占め、新津・元山産を含めると 92% が岩船・沼垂郡からの供給となり、佐渡産のものはわずかである。佐渡小泊窯跡群の生産のピークが 9 世紀の中ごろと言われ、越後全域への供給を目的とする生産が行われたとされるが［笹沢 1999］、宮の越遺跡ではまだその組成比率が小さい。いずれにしても、調査自体が遺跡の中心部から外れた地点であり、今回の資料が全体像を表しているとは言い難いがおおよその傾向は示していると考えられる。

遺跡の所在する阿賀北地域が越後国として成立したのは 7 世紀の末ごろといわれるが、今のところその時期の遺跡数は少なく、遺跡・遺物が増加する傾向にあるのは前述のように 9 世紀代であろう。［坂井 1999］によれば、9 世紀代の遺跡立地は砂丘上から沖積低地内の微高地（自然堤防）上となり、住居は掘立柱建物が主で、遺跡は新たな水田開発により成立したとしている。岩船地域の遺跡数の増加についても同様に水田開発により経済的に安定化したことが原因と考えられるが、それを立証すべき遺跡の調査事例



第 113 図　宮の越遺跡遺物分布図

は少ない。その中で近年、荒川右岸の低湿地に位置する西部遺跡［村田 2008］で、8 世紀末～ 10 世紀前葉の水田跡が調査され、古代における水田の規模や水田耕作に伴う祭祀のあり方が報告されている。今後において、このような事例が増え、尚且つ水田などの生産遺構とそれを営んだ集落の関係を総合的に知り得る調査例の増加に期待しまとめとする。

要　　約

[谷地遺跡]

1　谷地遺跡は、村上市天神岡字谷地ほかに所在し、三面川左岸の沖積地に立地する。

2　日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、平成 19 年度に調査した。

3　調査によって、中世と縄文時代の遺跡であることが分かった。調査面積は中世 3,107 ㎡、縄文時代 2,670 ㎡である。

縄文時代

4　縄文時代の遺構検出面の標高は約 11m である。調査によって、縄文時代前期初頭から中葉にかけての屋外炉 66 基（うち性格不明遺構の炉 3 基)、土坑 117 基、性格不明遺構 25 基（うち住居の可能性があるもの 3 基)、遺物集中 8 か所（うち性格不明遺構に属するもの 3 か所)、ピット 1,241 基（うち性格不明遺構に付属するピット 137 基）を検出した。屋外炉は地床炉で、明瞭な焼土があるものは少ない。また、土坑は屋外炉と近接して検出されたことから関連があると考えられる。

5　住居の可能性がある遺構には、溝とピットの組み合わせからなるものと、掘立柱建物状のものがある。

6　土器は、縄文時代前期初頭から中葉の花積下層式、布目式、新谷遺跡及び二軒茶屋遺跡出土土器相当、根小屋式、有尾式、大木 2a 式などが出土している。

7　石器・石製品は、石鏃、石錐、石匙、篦状石器、両極石器、不定形石器、磨製石斧、磨石類、石錘、石皿類、玉類（管玉）が出土している。磨石類では棒状礫の縁辺部を使用した、いわゆる特殊磨石が多い。

中世

8　中世の遺構検出面の標高は約 13 mである。調査によって、中世(15 世紀)の掘立柱建物 1 棟、井戸 4 基、土坑 23 基、溝 11 条、ピット 72 基（掘立柱建物の柱穴以外のピットは 65 基）を検出した。

9　溝で区画された屋敷地を検出した。

10　遺物は、土器・陶磁器類が珠洲焼、越前焼、青磁、白磁、瓦質土器などで、木製品が下駄、大型木槽、箱状木器など、ほかに金属製品、銭貨、石製品などが出土している。土器・陶磁器類は 15 世紀の所産で珠洲焼はⅥ期［吉岡 1994］に該当すると考えられる。

[八太郎遺跡]

1　八太郎遺跡は、村上市上助淵字八太郎 640 ほかに所在し、村上丘陵内の谷部に立地する。

2　日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、平成 19 年度に調査した。調査面積は 880 ㎡である。

3　中世の遺構検出面の標高は約 5 mである。調査によって、中世（13 世紀）の水場遺構 1 基、ピット 2 基、打ち込み杭 43 本（うち水場遺構以外の杭は 8 本）を検出した。

4　水場遺構には取水口が設けられ、土留めの木組みが施されていた。

5　水場遺構からは人形などの祭祀遺物が出土したことから、水元に関する祭祀が行われたものと考えられる。

6　遺物は、縄文時代の不定形石器・石錘、古代の須恵器大甕・壺、中世の珠洲焼甕・擂鉢、土師質土器皿、合子蓋、近世の肥前磁器椀が出土している。水場遺構から出土した珠洲焼甕はⅡ期［吉岡 1994］に該当すると考えられる。

［田屋道遺跡Ⅱ］

1　田屋道遺跡は、村上市九日市字堂田 1459 ほかに所在し、荒川右岸の沖積地に立地する。

2　日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、平成 19 ～ 20 年度にかけて調査した。調査面積は平成 19 年度が 1,066 ㎡で、平成 20 年度が 1,772 ㎡である。

3　中世の遺構検出面の標高は約 1.5m である。調査によって、掘立柱建物 6 棟（うち 1 棟は平成 18 年度調査で一部検出）、建物の付属施設の可能性があるピット列 2 条、井戸 3 基、土坑 10 基、性格不明遺構 5 基（平成 18 年度調査区からの延長分が 1 基）、溝 33 条（平成 18 年度調査区からの延長分が 23 基）、ピット 232 基（掘立柱建物及びピット列の柱穴以外のものは 176 基）、杭 14 本を検出した。建物の柱穴には、柱を底部下へ打ち込むもの、掘形に据えるもの、礎盤を用いるものが見られた。

4　掘立柱建物は、その長軸方向でおおよそのグループ分けができた。井戸の覆土からは炭化したイネの種子や籾殻が出土した。廃棄儀礼との関連を推測する。大型の溝は、方形の区画溝と道路側溝の可能性がある。平成 18 年度調査成果を合わせると、方形の区画を持つ集落と考えられる。

5　遺物は、土器類が須恵器無台杯・杯蓋・大甕・横瓶、土師器長甕、珠洲焼甕・壺・擂鉢、陶磁器椀などで、12 ～ 14 世紀のものが主体である。木製品は、箸・棒状木製品、下駄、柱材、杭などが出土している。掘立柱建物の柱材はクリを主体的に使用するものと、そうでないものがある。

［宮の越遺跡Ⅱ］

1　宮の越遺跡は、村上市新飯田字宮ノ越 14 ほかに所在し、荒川右岸の沖積地に立地する。

2　日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、平成 19 年度に調査した。調査面積は 243 ㎡である。

3　古代の遺構検出面の標高は約 0.6m である。調査によって、打ち込み杭 7 本を検出した。杭の年代は放射性炭素年代測定（AMS）によって 8 ～ 9 世紀代の数値が示されている。

4　遺物は、古代の須恵器無台杯・有台杯・大甕・横瓶、土師器鍋・小甕、木製品では容器の底板、板状・棒状木製品などが出土している。須恵器はⅣ～Ⅴ期［春日 1999］に該当すると考えられる。

引用・参考文献

相原淳一　1990　「東北地方における縄文時代早期後半から前期前葉にかけての土器編年 - 仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に - 」『考古学雑誌』第 76 巻第 1 号　日本考古學會

青木　学ほか　2008　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 180 集　日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸⅥ　松蔭東遺跡・中曽根遺跡Ⅱ・大館跡Ⅰ』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

朝倉康二　1993　「鍋・釜」『ものと人間の文化史』72　法政大学出版局

荒川隆史・加藤　学ほか　1999　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 93 集　上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ　和泉Ａ遺跡』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

五十川伸矢　1992　「古代・中世の鋳鉄鋳物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 46 集　国立歴史民俗博物館

石坂　茂・大工原豊　2001　「群馬県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相　第 1 回研究集会　基礎資料集』　縄文時代文化研究会

岩本正二　2001　「中世の井戸」『第 14 回北陸中世考古学研究会　中世北陸の井戸』　北陸中世考古学研究会

岩本正二　2005　『草戸千軒町遺跡の井戸』「月刊考古学ジャーナル No.537」　ニューサイエンス社

上田秀夫　1982　「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2　日本貿易陶磁研究会

上原甲子郎　1964　「図説 No.26　布目式」『日本原始美術Ⅰ　縄文式土器』山内清男編　講談社

植村泰徳　1997　「福島市における縄文時代前期大木２ａ式土器について」『第 10 回　縄文セミナー　前期中葉の諸様相』　縄文セミナーの会

大川　清・鈴木公雄・工楽善通編　1996　『日本土器辞典』　雄山閣出版

荻野正博　1983　「越後国中世荘園の成立」『新潟史学』第 16 号　新潟史学会

大島秀俊ほか　2008　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 181 集　日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸⅦ　田屋道遺跡Ⅰ・宮の越遺跡Ⅰ』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

大谷稚歌　2000　「２　ツチノコの規格」『人類誌集報』　東京都立大学人類誌調査グループ

大橋康二　1989　「肥前陶磁」『考古学ライブラリー』55　ニューサイエンス社

岡村秀雄　1995　「貯蔵穴と水さらし場」『季刊　考古学』第 50 号　雄山閣出版

小熊博史　1994　「布目遺跡」『巻町史　資料編１考古』　新潟県巻町

小熊博史　1994　「新潟県における縄文早期・前期初頭の土器様相」『第７回　縄文セミナー　早期終末・前期初頭の諸様相』　縄文セミナーの会

小熊博史　2008　「布目式・新谷式土器」『総覧　縄文土器』　小林達雄編　『総覧　縄文土器』　刊行委員会

小田由美子　2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 169 集　一般国道８号見附バイパス関係発掘調査報告書　坂井遺跡』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

小野　昭・小熊博史　1987　「巻町布目遺跡の調査」『巻町史研究』Ⅲ　新潟県巻町

小野　昭　1994　「豊原遺跡」『巻町史　資料編１考古』　新潟県巻町

小野　昭・前山精明　1988　「巻町豊原遺跡の調査」『巻町史研究』Ⅳ　新潟県巻町

折井　敦ほか　2007　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 174 集　日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸⅡ　道下遺跡』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

加賀英樹　1997　「珠洲焼」『中・近世の北陸 - 考古学が語る社会史』　柏書房

春日真実・寺﨑祐助　1995　「15 新潟県三島郡和島村大武遺跡」『日本考古学年報』48 日本考古学協会

春日真実　1999　「土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会 高志書院

春日真実　2004　「第Ⅱ章 磐船郡の土器様相 1荒川右岸」『越後阿賀北地域の古代土器様相』 新潟古代土器研究会

加藤邦夫　1982　「縄文尖底土器」『縄文文化の研究』 雄山閣出版

加藤 学ほか　2003　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 128 集 北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅱ 仲田遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤 学ほか　2006a　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 173 集 北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅴ 大角地遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤 学ほか　2006b　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 159 集 北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅳ 用言寺遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤 学ほか　2007　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 183 集 北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅶ 用言寺遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

鐘方正樹　2003　『井戸の考古学 ものが語る歴史８』 同成社

金子拓男　1987　「３ 大湊遺跡」『柏崎市史資料集 考古編１』 新潟県柏崎市史編さん委員会

加納 実　2001　「千葉県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相 第１回研究集会 基礎資料集』 縄文時代文化研究会

神林村史編纂委員会編　1985　『神林村誌』 新潟県神林村

神林村教育委員会　2007　『神林村埋蔵文化財報告書第 24 村内遺跡確認調査報告書（県営圃場整備事業に伴う平成元年度～平成９年度の確認調査)』 新潟県神林村教育委員会

川上貞雄　1985　「馬場屋敷遺跡出土の中世木簡と呪術資料」『日本歴史』 第 441 号 吉川弘文館

川上貞雄　1996　「北沢遺跡（杣遺構)」『飾る・遊ぶ・祈るの木製用具』 北陸中世土器研究会

黒坂禎二ほか　1984　『深作東部遺跡群』 埼玉県大宮市遺跡調査会

黒坂禎二　2006　「二ツ木・関山式土器の変容と細分史 - 南関東を中心として - 」『第 19 回 縄文セミナー 前期前葉の再検討』 縄文セミナーの会

小池邦明　1999　「陶磁器類の組成と変遷 中世前期 12 世紀後半から 13 世紀前半」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会 高志書院

越田賢一郎　2007　「東日本・北海道と北方地域の鉄鍋・土鍋」『北東アジア交流史研究 - 古代と中世 - 』 塙書房

小林圭一　2001　「山形県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相 第１回研究集会 基礎資料集』 縄文時代文化研究会

駒見和夫　1992　「 井戸をめぐる祭祀 」『考古学雑誌』第 77 巻 第４号 日本考古學會

小村正之ほか　2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 161 集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅣ 沢田遺跡Ⅱ・桜林遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

小山正忠・竹原秀雄　2005　『新版標準土色帖』 農林水産省農林水産技術会議事務局 監修 財団法人日本色彩研究所 色票監修

斉藤 準　2006　「新潟県における縄文前期前葉の土器群について - 布目式からそれ以後の土器群 - 」『第 19 回 縄文セミナー 前期前葉の再検討』 縄文セミナーの会

坂井秀弥　1989　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 53 集 新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀Ⅱ遺跡』 新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所

坂井秀弥　1997 『中・近世の北陸 考古学が語る社会史』 桂書房
坂井秀弥　1999 「第４章第１節総論」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会 高志書院
笹沢正史　1999 「第４章第４節第２項窯業」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会 高志書院
佐藤雅一・石坂圭介　1994 『中里村文化財調査報告書第６集 干溝遺跡』 新潟県中里村教育委員会
品田高志　1997 「越後国における土師器の変遷と諸相」『中・近世の北陸 考古学が語る社会史』 柏書房
下中 弘編　1996 『新版 地学辞典』 平凡社
縄文時代文化研究会　2001 『列島における縄文時代集落の諸様相 第１回研究集会 基礎資料集』
縄文セミナーの会　1994 『第７回 縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相』 縄文セミナーの会
縄文セミナーの会　1997 『第 10 回 縄文セミナー 前期中葉の諸様相』 縄文セミナーの会
縄文セミナーの会　2006 『第 19 回 縄文セミナー 前期前葉の再検討』 縄文セミナーの会
鈴木克彦ほか　1980 『青森県埋蔵文化財調査報告書第 57 集 長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告書』 青森県教育委員会
鈴木俊成・春日真実ほか　1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 60 北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書４ 一之口遺跡東地区』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財事業団
鈴木俊成・折原洋一ほか　2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 148 集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅡ 西部遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
鈴木道之助　1994 『石器入門辞典 縄文』 柏書房
高橋一樹　1999 「小泉荘の成立と展開」「鎌倉時代の小泉荘」『村上市史』 新潟県村上市
高橋 保　2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 157 集 日海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅢ 住吉遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
高橋 学ほか　2000 「中世・近世の出土遺物」『秋田県埋蔵文化財調査報告書第 303 集 洲崎遺跡』 秋田県埋蔵文化財センター
高橋保雄・鈴木俊成　1990 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 55 集 関越自動車道関係発掘調査報告書 清水上遺跡』 新潟県教育委員会
高橋保雄ほか　1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第79集 北越北線関係発掘調査報告書 水久保遺跡･宮平遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
高橋保雄　2004 「朝日村山口遺跡及び奥三面遺跡群ミヤソリ遺跡出土の「特殊磨石」について」『三面川流域の考古学』第３号 奥三面を考える会
滝沢規朗･高橋保雄ほか　2002『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ⅩⅣ 朝日村文化財報告書第22集 元屋敷遺跡Ⅱ』 新潟県朝日村教育委員会
滝沢規朗・富樫秀之　1998 『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅷ 朝日村文化財報告書第 14 集 アチヤ平遺跡中・下段』 新潟県朝日村教育委員会
田中耕作ほか　2007 『県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 狐森Ｂ遺跡』 新潟県新発田市教育委員会
田辺早苗ほか　1991 『神林村埋蔵文化財報告第３ 長松遺跡』 新潟県神林村教育委員会
田辺早苗　1992 『牧目館跡発掘調査報告書』 新潟県神林村教育委員会
田辺早苗　2001 「越後の様相」『第 14 回北陸中世考古学研究会 中世北陸の井戸』 北陸中世考古学研究会
田辺早苗・松田政基　2001 『神林村埋蔵文化財報告第 11 里本庄遺跡群』 新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所
田辺早苗・大賀 健　2002 『神林村埋蔵文化財報告第 13 六百地遺跡発掘調査報告書』 新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所

谷藤保彦　1994　「群馬県における早期末・前期初頭の土器」『第７回　縄文セミナー　早期終末・前期初頭の諸様相』　縄文セミナーの会

谷藤保彦　2002　「群馬県における二ツ木式土器」『地域考古学の展開 - 村田文夫先生還暦記念論文集 - 』　村田文夫先生還暦記念論文集刊行会

谷藤保彦　2005　「表館式土器に関する一考察 - 広域分布からみた視点 - 」『北奥の考古学 - 葛西勵先生還暦記念論文集 - 』　葛西勵先生還暦記念論文集刊行会

谷藤保彦　2006　「二ツ木式から関山式への土器文様の変遷と異系統土器」『第 19 回　縄文セミナー　前期前葉の再検討』　縄文セミナーの会

谷藤保彦　2007　「縄文時代前期前葉におけるコンパス文の発生と系譜」『列島の考古学Ⅱ』別冊　渡辺誠先生古稀記念論文集

玉木善行・高橋保雄　1999　『朝日村文化財報告書第 19 集　山口遺跡』　新潟県朝日村教育委員会

田村浩司　1999　「第３項　漆器」『新潟県の考古学』　新潟県考古学会　高志書院

千葉敏明ほか　2006　『下宅部遺跡Ⅰ』　下宅部遺跡調査団・東村山遺跡調査会

辻誠一郎　1999　「第９節　古代の環境と開発１　更埴条里遺跡・屋代遺跡群の環境史（２）」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 42　更埴条里遺跡・屋代遺跡群』　（財）長野県文化振興事業団・長野県埋蔵文化財センター

継　実ほか　2008　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 146 集　日海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸＶ　中部北遺跡・桜林遺跡Ⅱ』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

手塚　均・相原淳一ほか　1987　『宮城県文化財調査報告書第 121 集　東北横断自動車道関係遺跡調査報告書Ⅱ　西林山遺跡』　宮城県教育委員会

手塚　考・菊池政信　1996　『米沢市埋蔵文化財調査報告書第 53 集　一ノ坂遺跡発掘調査報告書』　山形県米沢市教育委員会

寺崎裕助　1990　「第五節　前期の土器」『柏崎市史』上巻　新潟県柏崎市史編さん委員会

寺崎裕助　1996　「B　縄文時代前期前半の土器について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 72 集　関越自動車道堀之内パーキングエリア関連発掘調査報告書　清水上遺跡Ⅱ』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財事業団

寺崎裕助・鈴木俊成　1996　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 72 集　関越自動車道堀之内パーキングエリア関連発掘調査報告書　清水上遺跡Ⅱ』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財事業団

寺崎裕助　1997　「新潟県における前期中葉の土器 - 根小屋式を中心として - 」『第 10 回　縄文セミナー　前期中葉の諸様相』　縄文セミナーの会

寺崎裕助　1999　「新潟県における縄文時代前期の土器　- その標識資料と編年 - 」『縄文土器論集 - 縄文セミナー 10 周年記念論文集 - 』　縄文セミナーの会

寺崎裕助・石原正敏　1999　「第３項　前期」『新潟県の考古学』　新潟県考古学会　高志書院

土井義夫・黒尾和久　2001　「東京都における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相　第１回研究集会　基礎資料集』　縄文時代文化研究会

戸沢充則編　1994　『縄文時代研究辞典』　東京堂出版

中村孝三郎・小片　保　1964　『室谷洞窟』　新潟県長岡市立科学博物館

永井久美男　1996　『日本出土銭総覧』　兵庫埋蔵銭調査会

長田友也　2005　「新潟県アチヤ平遺跡出土の磨石類雑感」『三面川流域の考古学』第４号　奥三面を考える会
新潟古代土器研究会　2004　『越後阿賀北地域の古代土器様相』　新潟古代土器研究会
秦　昭繁　1991　「特殊な剥離技法をもつ東日本の石匙 - 松原型石匙の分布と製作時期について -」『考古学雑誌』第 76 巻第４号　日本考古學會
畑　大介　2006　「中世前期の村落祭祀と串状の木製品」『鎌倉時代の考古学』小野正敏・萩原三雄編　高志書院
北陸中世土器研究会編　1996　『第９回北陸中世土器研究会　飾る・遊ぶ・祈るの木製用具』　北陸中世考古学研究会
早瀬亮介　2005　「阿武隈川下流域における縄文時代前期初頭の土器型式」『歴史』第 104 輯　東北史学会
広瀬和雄　1999　「中世集落の考古学的研究」『中世集落と灌漑』　大和古中近研究会
北陸中世考古学研究会　1998　『第 11 回北陸中世考古学研究会　北陸中世の金属器 - 生産と流通 - 』　北陸中世考古学研究会
堀江　格ほか　2004　「総括編」『福島市埋蔵文化財報告書第 172 集　摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告 13』　福島市教育委員会・(財）福島市振興公社
堀江　格　2006　「南東北の様相 - 福島県を中心に - 」『第 19 回縄文土器セミナー　前期前葉の再検討』　縄文セミナーの会
前川雅夫ほか　2007　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 176 集　日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸⅢ　窪田遺跡Ⅰ』　新潟県教育委員会・(財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
前田義人ほか　2001　『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 262 集　長野小西田遺跡２』　（財）北九州市文化事業団
前山精明・山口栄一　1986　「巻町福井南部における遺跡分布と出土・採集遺物」『巻町史研究』Ⅱ　新潟県巻町
前山精明　1994　「新谷遺跡」『巻町史　資料編１考古』　新潟県巻町
水澤幸一　1993　「越後における中世村落の様相」『第６回北陸中世土器研究会資料　中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』　北陸中世土器研究会
水澤幸一　2003　『中条町埋蔵文化財調査報告書第 27 集　主要地方道中条紫雲寺線改築工事に伴う発掘調査報告書Ⅳ　二軒茶屋遺跡』　新潟県中条町教育委員会
武藤康弘　1988　「東北地方北部の縄文前期時群の編年学的研究」『考古学雑誌』第 74 巻第２号　日本考古學會
村田道博　2008　「西部遺跡（05 北区南側)」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』　平成 19 年度（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
室岡　博ほか　1989・1990・1991　『樋田遺跡』　新潟県吉川町教育委員会
森田　勉　1982　「14 ～ 16 世紀の白磁の形式分類と編年」『貿易陶磁研究』２　日本貿易陶磁研究会
矢島國雄・前山精明　1983　「石錐」『縄文文化の研究　７』　雄山閣
山内清男　1979　『日本先史土器の縄紋』　先史考古学会
横田賢次郎・森田　勉　1978　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４　九州歴史資料館
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館
吉田秀享ほか　1995　「段ノ原Ａ遺跡」「段ノ原Ｂ遺跡」「総括」『福島県文化財調査報告書第 312 集　相馬開発関連遺跡調査報告Ⅲ』　福島県文化財センター・(財）福島県文化センター
吉田　充ほか　2004　『岩手県埋蔵文化財調査報告書第 433 集　小松Ⅰ遺跡発掘調査報告書』　（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
四柳嘉章　1987　『西川島 - 能登における中世村落の調査』　石川県穴水町教育委員会
渡辺清志　2001　「埼玉県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相　第１回研究集会　基礎資料集』　縄文時代文化研究会

谷地遺跡(縄文時代) 遺構観察表(1)
焼土 (F)

遺構No.	グリッド	検出面	形状		規模(cm)					報告書掲載遺物	他遺構との重複関係
			平面形(掘り込み部)	断面形	黒色土・焼土範囲		掘り込み部		深さ		
					長軸	短軸	長軸	短軸			
167	7C16	Ⅷa	楕円形	弧状	68	58	70	58	6		＞SK938
190	6D10,7D6	Ⅷa	隅丸長方形	弧状	65	54	65	54	7	石錘(218)	＞SX347(P1099・1152・1153)
191	7D11	Ⅷa	楕円形	弧状	68	52	68	52	6		
192	6D15,7D11	Ⅷa	不整楕円形	弧状	64	48	64	50	5	石錐(193)	＞P1088
193	6D25,6E5,7D21,7E1	Ⅷa	楕円形	弧状	64	47	64	47	6		＞SK1160
194	6D25	Ⅷa	不整円形	弧状	58	58	60	58	8		＞SX857(溝部分,P1453)
195	7C11・16	Ⅷa	不整楕円形	弧状	98	72	98	74	6	筌状石器(199)	＞F403・1173
196	6D10,7D6	Ⅷa	楕円形	弧状	64	50	64	50	7		＞SX347(P1094・1150),F864
353	7D1	Ⅷa	隅丸長方形	弧状	46	40	48	37	4		＞SK940
370	6C17	Ⅷa	円形	弧状	74	73	74	73	4		＞F1162
377	6C11	Ⅷa	円形	弧状			54	54	5		
401	7C11・12・16・17	Ⅷa	楕円形	弧状	116	94	116	94	8		＞SK404
402	7C16・17	Ⅷa	円形	弧状	64	60	64	54	5		
165	6D3・8	Ⅷb	円形	弧状	67	60	67	60	7	石鏃(224)	
166	6D5	Ⅷb	円形	弧状	68	62	68	60	4	土器片(146・147)	＞F762
168	6C18	Ⅷb	長楕円形	弧状	78	51	78	51	5		＞SK1322
351	7D6	Ⅷb	楕円形	弧状	70	58	74	58	6		＞F898
352	7D6	Ⅷb	不整円形	弧状	68	60	68	60	8		＞SK1053
356	6D3	Ⅷb	楕円形	弧状	34	28	36	30	8	土器片(148)	＜SK355
357	7C21	Ⅷb	楕円形	弧状	56	42	56	42	6		＜SK288
358	6C24	Ⅷb	隅丸長方形	弧状	48	40	48	40	8		＞F1309
359	6C16・17	Ⅷb	楕円形	弧状			68	56	6		
360	6C21	Ⅷb	長楕円形	階段状	56	34	56	34	6		
361	6C3	Ⅷb	不整円形	弧状	74	60	72	62	5	土器片(149)	
391	6C13	Ⅷb	楕円形	弧状	52	40	52	42	10		
403	7C11	Ⅷb	円形	弧状	52	44	47	43	5		＞F1173 ＜F195
410	6C8	Ⅷb	長楕円形	弧状	60	36	60	38	10		＞SK943
762	6D5・10,7D1	Ⅷb	楕円形	弧状	98	(68)	98	(72)	6	玉類(269)	＞P1157 ＜F166 ？P1342
765	6D3・4	Ⅷb	楕円形	弧状	48	36	52	36	6		＞F766
766	6D3・4	Ⅷb	楕円形	弧状	50	(30)	52	(30)	5		＜F765
775	7C21	Ⅷb	楕円形	弧状	72	54	72	52	8		＞SK853
854	7D16	Ⅷb	不整楕円形	弧状	38	28	38	28	6		
856	6D7	Ⅷb	楕円形	弧状	76	62	78	62	15		
860	6C13	Ⅷb	不整楕円形	弧状	72	60	70	60	5		＞P1170
864	6D10・15,7D6・11	Ⅷb	不整楕円形	弧状	68	46	68	46	5		＞P1094 ＜F196
898	7D6・11	Ⅷb	不整楕円形	弧状	42	30	42	30	4		＜F351
934	6C23・24,6D3・4	Ⅷb	楕円形	弧状	78	54	78	54	8		＞F1151・1165
937	6C9・10	Ⅷb	楕円形	弧状			48	(10)	6		＞SK936 ＜SK406
946	6D8	Ⅷb	円形	弧状	46	42	46	42	2		
1060	5C3	Ⅷb	楕円形	弧状			72	52	8		
1068	5C7・12	Ⅷb	円形	弧状	50	48	50	48	6		
1075	6D20	Ⅷb	楕円形	弧状	50	(14)	50	(14)	8		＞SK1082
1151	6C23・24,6D3・4	Ⅷb	楕円形	弧状	68	52	68	52	8		＜F934
1163	6C1	Ⅷb	不整円形	弧状	48	42	50	42	6		
1165	6C23	Ⅷb	不整楕円形	弧状	86	66	86	66	7		＞F1171 ＜F934,SK355・941,P827
876	7D16・21	Ⅷb2	楕円形	弧状	(48)	62	(50)	58	8		？P1406
939	6D4・5	Ⅷb2	楕円形	弧状	54	42	68	54	6		＜SX347(P1311)
942	6D10	Ⅷb2	楕円形	弧状	56	44	58	44	8		
947	6D6・7	Ⅷb2	不整楕円形	弧状	50	44	60	44	8		
1070	5C10・15	Ⅷb2	楕円形	弧状	86	58	86	58	7		
1171	6C23	Ⅷb2		弧状	(73)	(66)	(73)	(66)	4		＜F1165,SK354・941,P827
1173	7C11	Ⅷb2	楕円形	弧状	60	39	60	39	8		＜F195・403
1309	6C24	Ⅷb2	円形	弧状	50	44	50	44	8		＜F358
1333	6E10,7E6	Ⅷb2	不整円形	弧状	52	50	58	52	8		

土坑 (SK) (1)

遺構No.	グリッド	検出面	形状		覆土分類	規模(cm)			長軸方向	報告書掲載遺物	他遺構との重複関係
			平面形	断面形		長軸	短軸	深さ			
446	5E8・9・13・14	Ⅷ		弧状	B		(108)	14	N80° E	土器片(4・5)	
479	2C19	Ⅷ	長楕円形	弧状	A	82	45	10	N50° E		
578	3C12	Ⅸ	円形	弧状	A	53	52	5			
611	3C9・10	Ⅸ	長楕円形	弧状	A	77	45	10	N54° E		＞P612・613 ＜P610
680	2D15,3D11	Ⅸ	楕円形	弧状	A	65	52	8	N72° W		
845	2D5,3D1	Ⅸ	円形	台形状	F	65	62	9	N46° E	土器片(1)	
1113	3D2・3	Ⅸ	楕円形	弧状	B	55	42	11	N48° W		
1116	3D8・13	Ⅸ	楕円形	弧状	B	65	45	9	N7° W		
259	6C14・18・19	Ⅷa	長楕円形	弧状	A	168	110	11	N10° E	土器片(59～61)、不定形石器(202)	＞SK877・1096 ？SK362
287	6C20・25	Ⅷa	楕円形	弧状	B	110	80	12	N10° E	土器片(68)	＞SK288・289

谷地遺跡(縄文時代) 遺構観察表(2)
土坑 (SK) (2)

遺構No.	グリッド	検出面	形状		覆土分類	規模(cm)			長軸方向	報告書掲載遺物	他遺構との重複関係
			平面形	断面形		長軸	短軸	深さ			
288	6C20･25,7C16･21	Ⅶa	長楕円形	弧状	A	141	(68)	9	N78° W	土器片(73)、磨石類(219)	＞F357,SK938 ＜SK287･289
289	6C20･25	Ⅶa	円形	弧状	B	123	116	13			＞SK288･938 ＜SK287
354	6C22･23	Ⅶa	隅丸方形	台形状	A	161	(88)	30		土器片(62)、磨石類(208･215)	＞F1171,SK941
355	6C23,6D3	Ⅶa	楕円形	弧状	A	142	103	15	N20° W	土器片(71)	＞F356･1165,SK941
362	6C13･14･18･19	Ⅶa	楕円形	弧状	B	95	75	15	N21° W		＞SK877 ？SK259
390	6C21	Ⅶa	長楕円形	台形状	A	90	54	20	N60° W	土器片(63)	
400	7C1･6	Ⅶa	楕円形	台形状	F	86	58	18	N40° W	土器片(66)	
451	7C6･11	Ⅶa	楕円形	弧状	A	138	102	10	N50° W	土器片(75)、磨石類(210)	＞SK930
754	6C10	Ⅶa	円形	台形状	A	56	48	8	N18° E	土器片(69)	＞SK832･935･936
755	6C10･15	Ⅶa	楕円形	弧状	A	50	40	9	N0°		＞SK849
756	6C14･15	Ⅶa	円形	弧状	A	68	60	6	N0°	土器片(70)	
767	6C10･15	Ⅶa	隅丸長方形	台形状	A	55	45	12	N20° E	土器片(74)	＞SK849
769	7D1	Ⅶa	楕円形	弧状	A	68	48	10	N20° W	土器片(72)	
831	6C10,7C6	Ⅶa	円形	弧状	F	35	33	10		土器片(67)	＞SK832
878	6C9	Ⅶa		台形状	B	108	(42)	30			＞SK1089
879	6C12･13	Ⅶa	隅丸長方形	弧状	B	110	76	9	N23° W	土器片(64･65)	＞P1170
371	6C6･7	Ⅶb	隅丸方形	箱状	C	(88)	130	26		土器片(126)、磨石類(277)	＜SK872･873
372	6D19･20	Ⅶb	不整楕円形	箱状	B	112	92	26	N30° E	土器片(99･100)	＞SK1185,SX857(P1190･1463)
404	7C12･17	Ⅶb	楕円形	台形状	B	(106)	90	42	N16° E	土器片(129)	＜F401
405	6C7･8	Ⅶb	長楕円形	箱状	A	126	84	20	N66° E	土器片(124)	＜F870,SK409･417
406	6C9･10	Ⅶb	楕円形	台形状	B	(50)	64	28			＞F937,SK936
408	6C5･10	Ⅶb		半円状	B	(50)	89	34		土器片(133)	
409	6C8	Ⅶb	不整楕円形	箱状	A	62	50	14	N22° E	土器片(137)	＞SK405 ＜SK417
417	6C8	Ⅶb	楕円形	弧状	A	96	70	13	N0°	土器片(138)	＞SK405･409
418	5C9･14	Ⅶb	隅丸方形	弧状	A	78	70	8	N20° W	土器片(101～103)	
849	6C10･15	Ⅶb	隅丸方形	台形状	C	107	101	30	N68° E	土器片(140)	＜SK755･767
850	6E10,7E6	Ⅶb	楕円形	箱状	B	110	97	18	N43° W	土器片(128)、石鏃(223･225)、両極石器(248･249)	
852	5C14･15	Ⅶb	楕円形	弧状	B	120	100	16	N34° E	土器片(108･109)	＜P429
853	7C16･17･21･22	Ⅶb	隅丸長方形	台形状	C	102	78	22	N46° W	土器片(130)	＜F775
855	6C18･19･23･24	Ⅶb	隅丸長方形	台形状	B	170	138	38	N81° E	土器片(104～107)、不定形石器(251)	＜SK877
861	6C22	Ⅶb		台形状	B	(52)	(66)	26			＜SK862
862	6C17･22	Ⅶb		台形状	B	(70)	90	22			＞SK861
865	6C16	Ⅶb	隅丸方形	弧状	A	85	75	10	N41° E	磨石類(296)	
869	6C8･9･13	Ⅶb	隅丸方形	台形状	A	72	60	10	N55° E	土器片(134)	？SK943
871	6C11･16	Ⅶb	隅丸方形	弧状	A	103	90	20	N33° E	磨石類(275)	
872	6C6･11	Ⅶb	隅丸長方形	弧状	B	116	74	24	N65° E	土器片(135)、石鏃(221)	＞SK371
873	6C6･7･12	Ⅶb	隅丸方形	弧状	C	177	168	30	N81° E	土器片(110～112)	＞SK371 ＜SK763･833 ？P373･374
875	7E6	Ⅶb	長楕円形	弧状	B	(40)	36	10	N0°	土器片(113)	
877	6C13･14･18･19	Ⅶb	隅丸長方形	台形状	B	145	120	30	N23° W	石匙(232)、篦状石器(240)、磨石類(270･290)	＞SK855 ＜SK259･362
930	7C6･11･12	Ⅶb		弧状	B	(92)	(90)	26		磨製石斧(266)	＜SK451･931
932	5C8･13	Ⅶb	隅丸長方形	台形状	D	84	68	22	N53° E	篦状石器(246)	
935	6C10	Ⅶb	隅丸方形	台形状	A	(104)	95	18			＜SK754･936,P802
936	6C10	Ⅶb		弧状	C	(110)	120	14		土器片(114～116)	＞SK935 ＜F937,SK406･754
938	6C20,7C16･21	Ⅶb	隅丸長方形	箱状	C	154	114	30	N50° E	土器片(131)、磨石類(295･300)、石錘(313)	＜F167,SK288･289
940	7D1･2	Ⅶb	不整円形	弧状	A	94	80	10		石錘(315)	＜F353
941	6C23,6D3	Ⅶb	隅丸方形	箱状	B	105	97	20	N90°	土器片(117～121)	＞F1165･1171 ＜SK354･355,P827･948
943	6C8･13	Ⅶb	隅丸方形	台形状	A	90	78	16	N18° E	土器片(127)	＜F410 ？SK869
944	6C14･15	Ⅶb	楕円形	台形状	C	74	54	11	N34° E		
1085	5C15･20	Ⅶb	円形	台形状	A	86	76	14	N42° W	土器片(123)	
1089	6C9	Ⅶb		弧状	A	(50)	(50)	10			＜SK878
1168	8C19･20	Ⅶb	不整円形	弧状	A	120	120	18			
1174	8C4･5	Ⅶb		弧状	F	(80)	(54)	18		土器片(139)	＞SK1414 ＜SK1175
1176	8C9･14	Ⅶb	隅丸方形	弧状	A	116	105	16	N42° W	土器片(136)	
1301	6C12･13･17･18	Ⅶb	円形	台形状	A	132	132	16		土器片(125)	＞SK1322 ＜P1195
1404	9C11･12･16･17	Ⅶb	隅丸長方形	台形状	A	110	85	16	N42° E	土器片(132)	
1414	8B25,8C4･5	Ⅶb	隅丸長方形	台形状	F	148	117	21	N55° W	土器片(122)	＜SK1174
1050	5C4･5	Ⅶb2	隅丸方形	弧状	A	95	90	13			
1052	7D6･11	Ⅶb2	円形	弧状	B	83	(59)	13			＜SK1051
1071	6D12	Ⅶb2	隅丸方形	台形状	B	100	91	17		土器片(173)	＞P1330
1090	6D18･19･23･24	Ⅶb2	長楕円形	弧状	A	194	122	16	N74° W	土器片(174)	
1160	6D25,7D21,7E1	Ⅶb2	隅丸長方形	弧状	A	122	84	12	N90°	土器片(175～178)	＜F193
1322	6C17･18	Ⅶb2	隅丸方形	台形状	A	78	(72)	20		篦状石器(245)	＜F168,SK1301
1401	6E12･13･17･18	Ⅶb2	楕円形	弧状	A	106	76	16	N0°		
1402	6E2	Ⅶb2	円形	弧状	A	70	64	10	N50° E	磨石類(302)	＜P1387･1388

谷地遺跡(縄文時代) 遺構観察表(3)
性格不明遺構 (SX) (1)

遺構No.	グリッド	検出面	形状		覆土分類	規模(cm)			長軸方向	報告書掲載遺物	他遺構との重複関係
			平面形	断面形		長軸	短軸	深さ			
SX169	4D・E	Ⅸ	楕円形		A	560	400	6	N33° E		＞P1416・1417・1428 ＜P163・295

遺構No.	グリッド	検出面	形状		覆土分類	規模(cm)			報告書掲載遺物	他遺構との重複関係
			平面形	断面形		長軸	短軸	深さ		
F156(炉)	4D23,4E3・4	Ⅸ	楕円形	弧状	A	46	33	10		＜P73
P13	4D24,4E4	Ⅸ	楕円形	階段状	A	24	17	12		
P18	4D24	Ⅸ	楕円形	台形状	A	12	10	8		
P19	4D24	Ⅸ	円形	台形状	A	14	12	11		
P49	4E4・5	Ⅸ	円形	台形状	A	11	10	8		
P51	4E4	Ⅸ	円形	台形状	A	10	9	7		
P52	4E4	Ⅸ	円形	漏斗状	A	13	12	10		
P53	4E4	Ⅸ	楕円形	漏斗状	A	13	10	8		
P56	4E4・5	Ⅸ	楕円形	台形状	A	17	14	10		
P57	4E4	Ⅸ	円形	台形状	A	18	16	12		
P59	4E4	Ⅸ	円形	台形状	A	10	10	6		
P60	4E4	Ⅸ	円形	弧状	A	10	9	4		
P63	4E4	Ⅸ	円形	半円状	A	14	13	7		
P64	4E4	Ⅸ	円形	半円状	A	14	12	8		
P65	4D24	Ⅸ	円形	漏斗状	A	14	14	11		
P70	4E4	Ⅸ	楕円形	階段状	A	27	21	12		
P72	4D24	Ⅸ	円形	漏斗状	A	18	16	13		
P77	4D23	Ⅸ	楕円形	漏斗状	A	12	10	10		
P78	4D23	Ⅸ	円形	台形状	A	13	11	8		
P79	4E4	Ⅸ	円形	台形状	A	11	10	10		
P121	4D24	Ⅸ	楕円形	台形状	A	17	13	12		
P124	4D24	Ⅸ	楕円形	弧状	A	15	12	4		
P126	4D24	Ⅸ	円形	漏斗状	A	10	9	6		
P127	4D24	Ⅸ	楕円形	台形状	A	15	11	8		
P132	4D19・24	Ⅸ	円形	漏斗状	A	12	11	9		
P133	4D24	Ⅸ	円形	漏斗状	A	11	11	10		
P139	4D18	Ⅸ	円形	漏斗状	A	12	11	8		
P141	4D18・23	Ⅸ	楕円形	階段状	A	20	15	14		
P158	4D22	Ⅸ	円形	台形状	A	32	27	13		＞P159
P159	4D22	Ⅸ	円形	弧状	A	(18)	20	4		＞P160 ＜P158
P160	4D22	Ⅸ	楕円形	台形状	A	(18)	16	13		＜P159
P161	4D22	Ⅸ	円形	漏斗状	A	15	14	10		
P162	4D22	Ⅸ	円形	台形状	A	15	14	9		
P163	4D22	Ⅸ	円形	台形状	A	17	16	11		＞SX169(溝部分)
P164	4D22	Ⅸ	円形	漏斗状	A	12	11	8		
P171	4E2	Ⅸ	楕円形	台形状	A	16	12	8		
P174	4E2	Ⅸ	円形	台形状	A	22	20	16		
P187	4D22	Ⅸ	円形	漏斗状	A	14	14	14		
P271	4E3	Ⅸ	円形	台形状	A	9	9	5		
P272	4E3	Ⅸ	円形	台形状	A	8	8	6		
P282	4D22	Ⅸ	円形	半円状	A	12	12	8		
P283	4D22	Ⅸ	楕円形	半円状	A	14	11	10		
P284	4D22	Ⅸ	円形	弧状	A	22	22	6		＞P285
P285	4D22	Ⅸ	円形	階段状	A	20	(15)	12		＜P284
P290	4E3・4	Ⅸ	円形	漏斗状	A	15	13	9		
P294	4E4	Ⅸ	楕円形	台形状	A	14	11	5		
P295	4E3	Ⅸ	楕円形	台形状	A	16	12	8		＞SX169(溝部分)
P300	4E4	Ⅸ	円形	台形状	A	26	24	14		
P1417	4E3	Ⅸ	円形	台形状	A	12	11	8		＜SX169(溝部分)
P1418	4E3・8	Ⅸ	円形	台形状	A	18	16	17		
P1419	4E2	Ⅸ	円形	半円状	A	16	14	11		
P1420	4E4	Ⅸ	円形	階段状	A	26	23	13		
P1421	4E4	Ⅸ	円形	台形状	A	14	12	10		
P1422	4E2	Ⅸ	円形	半円状	A	18	16	15		
P1423	4E3	Ⅸ	円形	漏斗状	A	10	10	8		
P1424	4E2・3	Ⅸ	円形	漏斗状	A	13	11	14		
P1425	4E3	Ⅸ	楕円形	台形状	A	12	10	12		
P1426	4E3	Ⅸ	円形	箱状	A	10	9	12		
P1427	4E3・8	Ⅸ	円形	台形状	A	12	12	9		
P1428	4D23	Ⅸ	円形	漏斗状	A	16	14	11		＞SX169(溝部分)
P1429	4E3	Ⅸ	円形	漏斗状	A	12	11	11		

遺構No.	グリッド	検出面	形状		覆土分類	規模(cm)			長軸方向	報告書掲載遺物	他遺構との重複関係
			平面形	断面形		長軸	短軸	深さ			
SX258	3E12	Ⅸ	短溝	台形状	A	73	27	10	N75° W		

谷地遺跡(縄文時代) 遺構観察表(4)
性格不明遺構 (SX) (2)

遺構No.	グリッド	検出面	形状		覆土分類	規模(cm)			長軸方向	報告書掲載遺物	他遺構との重複関係
			平面形	断面形		長軸	短軸	深さ			
SX458	5D22・23,5E2・3	Ⅷ	不整方形	弧状	C	245	(160)	13			＞P1274

遺構No.	グリッド	検出面	形状		覆土分類	規模(cm)			長軸方向	報告書掲載遺物	他遺構との重複関係
			平面形	断面形		長軸	短軸	深さ			
SX511	2C15	Ⅸ	短溝	台形状	A	73	25	7	N90°		

遺構No.	グリッド	検出面	形状		覆土分類	規模(cm)			長軸方向	報告書掲載遺物	他遺構との重複関係
			平面形	断面形		長軸	短軸	深さ			
SX1022	2E20・25,3E16・21	Ⅸ	短溝	台形状	B	210	30	7	N75° E		

遺構No.	グリッド	検出面	形状		覆土分類	規模(cm)			長軸方向	報告書掲載遺物	他遺構との重複関係
			平面形	断面形		長軸	短軸	深さ			
SX347	6D	Ⅷb	方形			340	300		N95° W		

遺構No.	グリッド	検出面	形状		覆土分類	規模(cm)			報告書掲載遺物	他遺構との重複関係
			平面形	断面形		長軸	短軸	深さ		
遺物集中770	6D9	Ⅷb				93	45		土器片(143)	
遺物集中771	6D9・10	Ⅷb				130	100		土器片(144)、石匙(230)	
遺物集中851	6D5	Ⅷb				55	20		土器片(142)	
F945(炉)	6D9・10	Ⅷb	円形	弧状	B	38	35	4		
P800	6D5	Ⅷb	円形	半円状	A	22	22	13	土器片(141)	
P1094	6D10	Ⅷb	円形	U字状	A	8	7	10		＜F196・864
P1095	6D10	Ⅷb	楕円形	半円状	F	16	13	12		
P1097	6D10・15	Ⅷb	楕円形	階段状	A	17	14	11		
P1099	6D10	Ⅷb	円形	階段状	F	18	(16)	12		＜F190,P1150
P1150	6D10	Ⅷb	楕円形	半円状	A	14	11	8		＞P1099 ＜F196
P1152	6D10	Ⅷb	円形	U字状	A	14	12	17		＜F190
P1153	6D10	Ⅷb	楕円形	U字状	F	16	13	20		＜F190
P1154	6D15	Ⅷb	円形	階段状	A	22	22	13		
P1155	6D10・15	Ⅷb	円形	階段状	F	20	18	12		
P1156	6D10	Ⅷb	円形	階段状	B	32	(20)	18		？P1157
P1157	6D5・10	Ⅷb	長楕円形	階段状	F	(43)	(15)	14		＜F762 ？P1156
P1158	6D5	Ⅷb	円形	階段状	A	21	20	15		
P1310	6D5	Ⅷb	楕円形	半円状	A	28	21	24		
P1311	6D4・5	Ⅷb	円形	階段状	A	18	16	22		＞F939
P1312	6D4・8・9	Ⅷb	楕円形	階段状	A	38	29	20		
P1313	6D8	Ⅷb	長楕円形	半円状	A	16	(10)	16		＜P1348
P1316	6D4	Ⅷb	楕円形	階段状	A	34	(18)	27		？P1340
P1319	6D14・15	Ⅷb	楕円形	階段状	D	45	36	20		＞P1318
P1320	6D8	Ⅷb		半円状	A	(6)	12	8		？P1346・1347
P1321	6D10・15	Ⅷb	楕円形	階段状	A	40	32	18		
P1324	6D14	Ⅷb	円形	半円状	A	24	23	14		＞P1317 ＜P1325
P1325	6D14	Ⅷb	円形	半円状	A	27	25	15		＞P1324
P1340	6D4	Ⅷb	円形	漏斗状	A	22	(9)	30		？P1316
P1341	6D4	Ⅷb	楕円形	階段状	A	40	32	18		
P1343	6D4	Ⅷb	円形	半円状	A	29	27	22		
P1346	6D8	Ⅷb	円形	漏斗状	A	(19)	32	24		？P1320
P1347	6D8	Ⅷb	楕円形	階段状	A	(32)	(17)	18		？P1320
P1348	6D8	Ⅷb	円形	半円状	A	22	20	15		＞P1313
P1349	6D8・9	Ⅷb	楕円形	階段状	A	32	26	20		

遺構No.	グリッド	検出面	形状		覆土分類	規模(cm)			長軸方向	報告書掲載遺物	他遺構との重複関係
			平面形	断面形		長軸	短軸	深さ			
SX857	6D・E,7D・E	Ⅷb2	楕円形		C	610	420		N60° W	土器片(172)、磨石類(292)	＞SK1082 ＜F194

遺構No.	グリッド	検出面	形状		覆土分類	規模(cm)			報告書掲載遺物	他遺構との重複関係
			平面形	断面形		長軸	短軸	深さ		
F1468(炉)	6D25	Ⅷb2	円形	弧状	F	48	46	5		
P846	6D20	Ⅷb2	円形	U字状	A	23	20	27		
P848	6D15・20	Ⅷb2	楕円形	半円状	F	25	18	22		
P867	6D20	Ⅷb2	円形	U字状	A	16	14	20		
P874	6E5	Ⅷb2	円形	半円状	F	20	18	18		
P1092	6D25,6E5	Ⅷb2	円形	漏斗状	B	19	18	18		
P1093	6E5,7E1	Ⅷb2	楕円形	漏斗状	B	20	14	16		
P1098	6D19	Ⅷb2	円形	階段状	A	24	22	16		
P1178	6E4	Ⅷb2	円形	漏斗状	B	22	22	28		

谷地遺跡(縄文時代) 遺構観察表(5)
性格不明遺構 (SX) (3)

遺構No.	グリッド	検出面	形状		覆土分類	規模(cm)			報告書掲載遺物	他遺構との重複関係
			平面形	断面形		長軸	短軸	深さ		
P1179	6E4	Ⅷb2	円形	漏斗状	A	20	18	12		＞P1180
P1180	6E4	Ⅷb2	楕円形	漏斗状	A	19	(15)	18		＞P1181 ＜P1179
P1181	6E4	Ⅷb2	楕円形	漏斗状	A	8	(6)	12		＜P1180
P1182	6E5	Ⅷb2	楕円形	漏斗状	B	22	17	16		
P1183	6E5	Ⅷb2	楕円形	階段状	A	20	14	15		
P1184	6E5	Ⅷb2	楕円形	階段状	A	24	20	20		
P1186	6D24	Ⅷb2	円形	半円状	A	19	16	10		＜F1077
P1187	6D24	Ⅷb2	楕円形	半円状	A	13	10	10		
P1188	6D19	Ⅷb2	楕円形	漏斗状	A	22	17	12		
P1189	6D19	Ⅷb2	楕円形	半円状	A	20	16	12		
P1190	6D19･20	Ⅷb2	楕円形	階段状	A	(24)	(19)	10		＜SK372
P1191	6D24	Ⅷb2	楕円形	階段状	A	16	13	11		
P1192	6D24	Ⅷb2	円形	階段状	F	16	16	18		
P1193	6D19	Ⅷb2	円形	半円状	A	18	18	14		
P1194	6D19	Ⅷb2	円形	階段状	A	20	19	14		
P1314	6D19･20	Ⅷb2	楕円形	漏斗状	A	12	10	15		
P1332	6D24,6E4	Ⅷb2	隅丸長方形	階段状	A	34	20	16		
P1335	6E10	Ⅷb2	楕円形	階段状	A	16	12	20		
P1408	7D21	Ⅷb2	円形	台形状	A	21	20	22		
P1448	6D25	Ⅷb2	楕円形	漏斗状	A	20	16	13		
P1449	6D25	Ⅷb2	円形	箱状	A	20	20	10		
P1450	6D25	Ⅷb2	円形	半円状	A	14	12	12		
P1451	6D25	Ⅷb2	楕円形	階段状	A	12	10	12		
P1452	6D25	Ⅷb2	楕円形	U字状	A	10	8	10		
P1453	6D25	Ⅷb2	楕円形	漏斗状	A	18	14	14		＜F194
P1454	6D25	Ⅷb2	円形	階段状	A	20	18	15		
P1455	6E5	Ⅷb2	楕円形	U字状	A	13	10	20		
P1456	6E5	Ⅷb2	楕円形	半円状	A	16	11	14		
P1457	6E4･5	Ⅷb2	楕円形	階段状	A	22	18	16		
P1458	6E4	Ⅷb2	楕円形	箱状	F	16	12	14		
P1459	6E4	Ⅷb2	円形	U字状	A	8	7	12		
P1460	6E4	Ⅷb2	円形	漏斗状	A	16	14	18		
P1461	6D24	Ⅷb2	円形	半円状	A	17	16	16		
P1462	6D19	Ⅷb2	楕円形	半円状	A	12	10	8		
P1463	6D20	Ⅷb2	長楕円形	半円状	A	14	9	10		＜SK372
P1464	6D20	Ⅷb2	長楕円形	半円状	A	14	9	14		＞SX857(溝部分･P1467)
P1465	6D20	Ⅷb2	楕円形	箱状	A	22	18	24		＞SK1082,SX857(溝部分･P1466･1467)
P1466	6D20	Ⅷb2	楕円形	U字状	A	12	10	14		＞SK1082 ＜SX857(溝部分･P1465)
P1467	6D20	Ⅷb2	円形	台形状	A	16	14	11		＞SK1082 ＜SX857(溝部分･P1464･1465)

遺物集中

遺構No.	グリッド	検出面	規模(cm)		報告書掲載遺物	他遺構との重複関係
			長軸	短軸		
384	3D7･8	Ⅷ	140	120	土器片(7･8)	
385	3E2･3･7･8	Ⅷ	160	110	土器片(9)、磨石類(185)	
442	4D3～5･8･9･13	Ⅷ	360	320	土器片(10～22)、磨石類(182･187)	
314	7D6･11	Ⅷa	40	30	土器片(82･83)	
350	6D18･19･23･24	Ⅷb	100	50	土器片(151)	

ピット (P) (1)

遺構No.	グリッド	検出面	形状		覆土分類	規模(cm)			報告書掲載遺物	他遺構との重複関係	備考
			平面形	断面形		長軸	短軸	深さ			
346	4E7	Ⅷ	長楕円形	階段状	A	45	25	15			
510	2C20	Ⅷ	楕円形	階段状	F	28	20	17			
794	3C2･3	Ⅷ	円形	階段状	A	15	13	8			
796	3C3	Ⅷ	円形	U字状	A	10	9	16			
797	3C3	Ⅷ	円形	V字状	A	14	13	12			
824	3B24	Ⅷ	円形	半円状	A	16	14	12			
842	4E6･11	Ⅷ	円形	階段状	B	47	40	22			
887	2B17	Ⅷ	円形	U字状	F	22	21	23			
888	2C7･8	Ⅷ	楕円形	階段状	A	45	37	18			
889	2C2	Ⅷ	楕円形	階段状	A	36	28	12			
892	2B17	Ⅷ	円形	弧状	C	30	28	7	土器片(3)		
905	2C2	Ⅷ	円形	階段状	F	37	35	16			
906	2B22	Ⅷ	楕円形	箱状	B	50	39	10			
909	2B16･17	Ⅷ	円形	半円状	B	43	38	14	土器片(2)		

谷地遺跡(縄文時代) 遺構観察表(6)
ピット (P) (2)

遺構No.	グリッド	検出面	形状		覆土分類	規模(cm)			報告書掲載遺物	他遺構との重複関係	備考
			平面形	断面形		長軸	短軸	深さ			
912	2C7・12	Ⅷ	楕円形	半円状	A	34	27	9			
918	2C17	Ⅷ	円形	階段状	A	45	39	14			
919	2C17・18	Ⅷ	長楕円形	弧状	A	56	25	10			
954	2D13	Ⅷ	楕円形	階段状	F	35	29	14			
955	2D8	Ⅷ	円形	階段状	F	26	22	10			
982	2C22・23	Ⅷ	長楕円形	階段状	A	63	32	12			
1103	2D18	Ⅷ	円形	台形状	A	17	15	12			
1143	2B16	Ⅷ	円形	台形状	A	30	27	14			
1356	3C4	Ⅷ	円形	台形状	A	37	35	12			
1358	3C4	Ⅷ	円形	弧状	A	43	38	10			
1444	4E16	Ⅷ	円形	U字状	A	16	16	17			
420	5C25	Ⅷa	円形	階段状	F	16	14	14			Ⅷa層a群ピット
421	5C25	Ⅷa	円形	漏斗状	F	10	10	12			Ⅷa層a群ピット
422	5C25	Ⅷa	円形	半円状	F	11	10	10			Ⅷa層a群ピット
425	5C20	Ⅷa	円形	半円状	F	13	12	11			Ⅷa層a群ピット
427	5C20	Ⅷa	楕円形	U字状	F	8	6	14			Ⅷa層a群ピット
428	5C20	Ⅷa	円形	半円状	F	14	12	10			Ⅷa層a群ピット
432	5C15	Ⅷa	円形	半円状	F	13	12	11			Ⅷa層a群ピット
433	5C15	Ⅷa	長楕円形	漏斗状	F	25	16	18			Ⅷa層a群ピット
1054	5C9	Ⅷb	円形	半円状	A	15	14	8			Ⅷb層b群ピット
1056	5C8	Ⅷb	楕円形	U字状	A	12	10	16			Ⅷb層b群ピット
1057	5C3	Ⅷb	円形	半円状	A	10	10	10			Ⅷb層b群ピット
1059	5C8	Ⅷb	長楕円形	半円状	A	12	8	10			Ⅷb層b群ピット
1065	5C3	Ⅷb	円形	U字状	A	7	6	8			Ⅷb層b群ピット
1302	5C7	Ⅷb	楕円形	半円状	A	12	10	12			Ⅷb層b群ピット
1339	6D16	Ⅷb2	円形	漏斗状	A	28	24	18			Ⅷb2層c群ピット
1399	5D15	Ⅷb2	円形	漏斗状	A	16	14	16			Ⅷb2層c群ピット
1410	6D17・18	Ⅷb2	円形	階段状	A	19	17	16			Ⅷb2層c群ピット
1411	6D22	Ⅷb2	円形	半円状	A	18	18	16			Ⅷb2層c群ピット
1412	6D11	Ⅷb2	楕円形	半円状	A	16	13	16			Ⅷb2層c群ピット
1413	6D11	Ⅷb2	楕円形	漏斗状	A	20	16	15			Ⅷb2層c群ピット
1415	6D17	Ⅷb2	円形	階段状	A	32	32	18			Ⅷb2層c群ピット
1432	5D20	Ⅷb2	楕円形	半円状	A	24	20	18			Ⅷb2層c群ピット
1443	5D20	Ⅷb2	楕円形	U字状	A	23	19	27			Ⅷb2層c群ピット

谷地遺跡(縄文時代) 遺物観察表(1)

土器 (1)

No.	遺構名	出土地点	出土層位	時期	器種	部位	器形	文様	調整・施文	器高	口径	底径	胎土	混入物	色調	炭化物	備 考
1	SK845	3D1	1層	前期初頭	深鉢	口～底	C1・c類	Ⅰ群2類	撚糸側面圧痕文(R) 非結束羽状縄文(LR・RL) 内面:ナデ				B	雲 石 砂◎	褐		
2	P909	2B16	1層	前期初頭	深鉢	口		Ⅰ群2類	撚糸側面圧痕文(L)	(3.2)			B	砂	浅黄	外面	2・3同一個体か
3	P892	2B17	1層	前期初頭	深鉢	胴		Ⅰ群2類	非結束羽状縄文(LR・RL)	(5.2)			B	砂	浅黄	内面	2・3同一個体か
4	SK446	5E8・13・14	1層	前期前葉	深鉢	口～底	C1・a類	Ⅲ群1類d種	爪形刺突文(D字形) 無文帯 斜縄文(RL) 閉端部強調施文 内面:指頭圧痕・ナデ	(26.8)	36.8		B	石◎砂◎	褐灰	内外面	
5	SK446	5E8	1層	前期前葉	鉢	口～底	C2・b類	Ⅲ群7類d2種	ループ文(RL)末端環強調施文 内面:ナデ	(12.8)	13.8		B	石◎砂◎	浅黄	内面	
6	P348	3E20	1層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:ナデ	(3.5)			B	雲	にぶい黄橙	内外面	
7	遺物集中384	3D7	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群4類b種	爪形刺突文(D字形)連続施文	(3.2)			B	石 砂	にぶい黄橙		
8	遺物集中384	3D7	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	底	2a類	Ⅲ群6類c種	爪形刺突文(D字形)同心円状施文 内面:ナデ	(3.7)			B	石 砂	にぶい黄褐		
9	遺物集中385	3E2・3・7・8	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	口～胴	B1・c類	Ⅲ群1類a種	爪刺突 斜縄文(RL)閉端部強調施文 内面:ケズリ	(14.4)	23.8		B	石 砂	浅黄		
10	遺物集中442	4D8	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	口～胴	C1・b類	Ⅲ群7類b2種	斜縄文(RL)閉端部強調施文 内面:ナデ	(22.1)	31.2		A	雲◎石 砂	褐	内外面	
11	遺物集中442	4D9	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	口	B1・a類	Ⅲ群1類e2種	爪刺突 結節回転文 内面:ナデ	(5.0)			B	砂	暗灰黄		
12	遺物集中442	4D4	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群1類d種	無文帯 ループ文(RL)	(6.3)							
13	遺物集中442	4D8・9	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群4類b種	ループ文(RL) 爪形刺突文(D字形)連続施文 内面:ナデ	(11.0)			B	砂	にぶい黄橙		
14	遺物集中442	4D8	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:指頭圧痕	(7.5)			B	雲 石◎	明褐	内面	
15	遺物集中442	4D3	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類c2種	結節回転文 内面:ケズリ	(5.9)			B	石 砂	にぶい黄橙		
16	遺物集中442	4D3	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群4類a種	爪形刺突文(C字形)連続施文 斜縄文(RL)閉端部強調施文 内面:ナデ	(5.0)			A	石 砂	褐	内面	
17	遺物集中442	4D9	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群5類a種	爪形刺突文(C字形) 内面:ケズリ	(6.5)			B	石 砂	にぶい黄橙	内面	
18	遺物集中442	4D13	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群4類a種	爪形刺突文(C字形)連続施文	(2.7)			A	砂	浅黄	内面	
19	遺物集中442	4D9	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	底	2類	Ⅲ群6類b1種	爪形刺突文(C字形)同心円状施文				A	砂	暗褐	内面	
20	遺物集中442	4D4	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	底	2a類	Ⅲ群6類b1種	爪形刺突文(C字形)同心円状施文 内面:ナデ	(4.5)			B	石 砂	にぶい黄褐		
21	遺物集中442	4D4	Ⅷ層	前期		胴		Ⅴ群1類	平行沈線文	(2.0)			C	砂	明赤褐		
22	遺物集中442	4D4	Ⅷ層	前期		胴		Ⅴ群1類	平行沈線による波状文か 鋸歯状文か	(2.6)			C	石 砂	明赤褐		
23		3D13	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	口	B1・a類	Ⅲ群1類e3種	爪形刺突文(D字形) 斜縄文(RL)	(2.7)			C	石 砂	灰白		
24		4D25	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群5類b種	爪形刺突文(D字形)	(5.3)			B	石 砂	にぶい黄橙	内面	
25		3D23	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群5類b種	爪形刺突文(D字形) 内面:指頭圧痕	(5.0)			A	砂	にぶい黄		
26		2D25	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群5類b種	爪形刺突文(D字形)	(3.0)			B	石 砂	にぶい黄橙		
27		5E5	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	底		Ⅲ群6類c種	爪形刺突文(D字形)								
28		5E8	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴下端		Ⅲ群6類d1種	筵状刺突文	(3.5)			B	石 砂	浅黄		
29		4D14	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	底	2類	Ⅲ群6類b1種	爪形刺突文(C字形)同心円状施文				C	石 砂	明褐		
30		5E11	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	底	2a類	Ⅲ群6類b1種	爪形刺突文(C字形)同心円状施文				A	雲 石 砂	にぶい黄		
31		4D19	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	底	1類	Ⅲ群6類a種	爪刺突同心円状施文 内面:ナデ				A	石 砂	にぶい黄		
32		4D3	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	底	2a類	Ⅲ群6類a種	爪刺突 底面無文	(3.5)			A	砂	にぶい黄	内面	
33		2B21	Ⅷ層		深鉢	底	2a類			(2.6)			A	砂	浅黄	内面	器面風化著しい
34		5E13	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類b2種	斜縄文(RL)閉端部強調施文 内面:指頭圧痕	(8.6)			A	石◎砂	にぶい黄橙	内面	
35		3F1	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類b2種	斜縄文(RL)閉端部強調施文 内面:ナデ	(3.6)			B	石 砂	にぶい黄褐		

谷地遺跡(縄文時代) 遺物観察表(2)
土器 (2)

No.	遺構名	出土地点	出土層位	時期	器種	部位	器形	文様	調整・施文	器高	口径	底径	胎土	混入物	色調	炭化物	備 考
36		5E17	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴下端		Ⅲ群7類b2種	斜縄文(RL)閉端部強調施文	(4.8)			B	雲 石 砂	褐		
37		2D25	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類b2種	斜縄文(RL)閉端部強調施文	(4.2)			B	石 砂	にぶい黄橙		
38		5E5	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴			結節回転文か ループ文か	(3.2)			A	石 砂	暗褐	外面	
39		2B18	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類c2種	結節回転文	(3.8)			A	石 砂	にぶい黄橙		
40		5E17	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d2種	ループ文(RL)末端環強調施文	(4.8)			B	雲◎石 砂	褐	内面	
41		5E11	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d2種	ループ文(RL)末端環強調施文 内面:ナデ	(3.7)			B	雲 石 砂	明褐	内面	
42		5E17	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d2種	ループ文(RL)末端環強調施文	(3.9)			B	雲 石 砂	明褐		
43		5E25, 5F4	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d2種	ループ文(LR)末端環強調施文 内面:ナデ	(7.5)			B	石 砂	にぶい黄橙	内面	
44		5E12	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	口	B1・b類	Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:指頭圧痕	(11.6)			B	雲◎石 砂	明褐	外面	44・45同一個体か
45		5E17	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL)	(8.0)			B	雲◎石 砂	明褐	外面	44・45同一個体か
46		4D13	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	口	B1・b類	Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:ケズリ	(8.5)			B	石 砂	にぶい黄	内外面	
47		4D13	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:ナデ	(4.7)			B	雲 砂	にぶい黄褐	内外面	
48		4C16	Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL)	(4.5)			B	石 砂	にぶい黄橙	外面	
49		4C23	Ⅷ層		深鉢	胴下端		Ⅴ群2類a種	斜縄文(RL) 内面:ケズリ	(5.0)			B	石 砂	にぶい黄褐	内面	
50		3D12	Ⅷ層		深鉢	胴		Ⅴ群2類a種	斜縄文(RL) 内面:ナデ	(2.7)			A	石 砂	褐灰		
51		3C1, 5D6	Ⅷ層	前期中葉	深鉢	胴		Ⅳ群3類	網目状撚糸文 内面:ケズリ	(5.9)			A	石 砂	にぶい黄褐	内外面	51・52同一個体か
52		2C23	Ⅷ層	前期中葉	深鉢	胴		Ⅳ群3類	網目状撚糸文 内面:ケズリ	(3.0)			A	石 砂	にぶい黄褐	内外面	51・52同一個体か
53		5E16	Ⅷ層	前期中葉	深鉢	胴		Ⅳ群3類	コンパス文 網目状撚糸文 内面:ナデ	(5.9)			A	石 砂	にぶい黄褐		
54			Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d3種	ループ文(LR) 内面:ナデ	(10.6)			B	石 砂	灰黄褐	内面	試掘6Tより出土
55			Ⅷ層	前期前葉	深鉢	口	B1・b類	Ⅲ群1類e1種	爪刺突 非結束羽状縄文(RL・LR)閉端部強調施文	(3.5)			B	石 砂	にぶい黄橙	外面	試掘7Tより出土
56			Ⅷ層	前期	深鉢	口	D・d類	Ⅲ群7類b1種	斜縄文(RL) 内面:ナデ	(5.0)			A	砂	浅黄		試掘7Tより出土
57			Ⅷ層	前期	深鉢	胴下端		Ⅴ群2類a種	斜縄文(RL)	(4.3)			A	砂	浅黄	内面	試掘7Tより出土
58			Ⅷ層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類c2種	結節回転文 内面:ナデ	(2.7)			A	砂	浅黄	内面	試掘7Tより出土
59	SK259	6C19	1層	前期	深鉢	口～胴	B1・c類	Ⅴ群2類a種	斜縄文(RL) 内面:ナデ				B	砂	暗褐	外面	59～61同一個体か
60	SK259	6C19	1層	前期	深鉢	胴		Ⅴ群2類a種	斜縄文(RL) 内面:ナデ	(4.5)			B	砂	暗褐	外面	59～61同一個体か
61	SK259	6C19	1層	前期前葉	深鉢	胴下端		Ⅲ群6類d1種	筵状刺突文 内面:ナデ	(1.5)			B	砂	暗褐		59～61同一個体か
62	SK354	6C23	1層	前期前葉	深鉢	口～胴	B1・c類	Ⅲ群1類a種	爪刺突 結節回転文 ループ文(RL) 内面:ケズリ・ミガキ				B	石 砂	灰黄褐		
63	SK390	6C21	1層	前期前葉	深鉢	底	3類	Ⅲ群6類d2種	筵状刺突文同心円状・十字状施文			11.0	B	雲 石 砂	浅黄		
64	SK879	6C12	1層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群4類c種	筵状刺突文連続施文 円形竹管文 内面:ナデ	(4.2)			B	石 砂	灰黄	内面	
65	SK879	6C12	1層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d2種	ループ文(RL)末端環強調施文 内面:ナデ	(4.7)			A	砂	にぶい黄		
66	SK400	7C1・6	1層	前期中葉	深鉢	口～胴	B2・c類	Ⅳ群1類b種	斜縄文(RL)(LR) 内面口端:凹線1条 内面:ナデ・ミガキ	(23.3)	33.9		A	雲 石 砂	灰黄褐	内外面	
67	SK831	6C10	1層	前期中葉	鉢	底	2c類	Ⅳ群1類a2種	点列状刺突文 内面:ナデ			14.0	B	石 砂	浅黄	外面	底面穿孔
68	SK287	6C25	3層	前期	深鉢	胴		Ⅴ群2類a種	斜縄文(RL) 内面:ナデ	(7.8)			B	砂	にぶい黄橙	内面	
69	SK754	6C10	1層	前期	深鉢	胴		Ⅴ群2類a種	斜縄文(RL) 内面:ナデ	(3.9)			B	石 砂	にぶい黄橙	内面	
70	SK756	6C15	1層		深鉢	胴下端		Ⅴ群2類a種	斜縄文(RL) 内面:ナデ	(3.8)			B	砂	黄灰	外面	
71	SK355	6C23	1層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d2種	ループ文(RL)末端環強調施文 内面:ナデ	(3.5)			A	石 砂	にぶい黄橙		
72	SK769	7D1	1層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類c1種	結節回転文	(2.5)			B	雲◎石 砂	褐	外面	
73	SK288	7C16	1層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d2種	ループ文(RL)末端環強調施文 内面:ナデ	(3.0)			A	砂	にぶい黄橙	内面	
74	SK767	6C10	1層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d2種	ループ文(LR)末端環強調施文	(3.2)			B	砂	にぶい黄橙	外面	
75	SK451	7C11	1層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d2種	ループ文(RL)末端環強調施文	(2.4)			A	雲 砂	褐	外面	

谷地遺跡(縄文時代) 遺物観察表(3)

土器 (3)

No.	遺構名	出土地点	出土層位	時期	器種	部位	器形	文様	調整・施文	器高	口径	底径	胎土	混入物	色調	炭化物	備 考
76		7D21	Ⅶa層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類a1種	非結束羽状縄文(LR・RL) 内面:ケズリ	(2.7)			A	雲 石◎砂	黄褐	内面	F194付近で出土
77		7D21	Ⅶa層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類c1種	結節回転文 内面:ナデ	(2.7)			B	雲◎石 砂	褐		F194付近で出土
78		6D15	Ⅶa層	前期	深鉢			Ⅴ群2類a種	平行沈線文	(2.2)			A	砂	灰黄	内面	F196付近で出土
79		7D6	Ⅶa層	前期	深鉢	胴		Ⅴ群2類a種	斜縄文(RL) 内面:ナデ	(4.7)			A	石 砂	暗灰黄		F196付近で出土
80		6D10 7D11	Ⅶa層	前期前葉	深鉢	胴～底	2a類	Ⅲ群6類d1種	ループ文(RL) 筵状刺突文 底面無文 内面:指頭圧痕・ナデ	(11.9)		(6.0)	B	雲 石 砂	浅黄		F190・191付近で出土
81		6D10	Ⅶa層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類b2種	斜縄文(RL)＋結節	(3.4)			B	雲◎石 砂	褐		F190付近で出土
82	遺物集中314	7D6	Ⅶa層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:指頭圧痕・ナデ	(4.6)			B	雲◎石 砂	浅黄	内面	82・83同一個体か
83	遺物集中314	7D6	Ⅶa層	前期前葉	深鉢	底	2b類	Ⅲ群6類b2種	爪形刺突文(C字形)連続施文 底面無文 内面:指頭圧痕	(3.6)		5.4	B	雲◎石 砂	浅黄	内面	82・83同一個体か
84		6D24	Ⅶa層	前期前葉	深鉢	底	2a類	Ⅲ群6類d2種	筵状刺突文同心円状施文	(1.4)			B	砂	黄褐		
85		5D10	Ⅶa層	前期前葉	深鉢	底	2a類	Ⅲ群6類e種	ループ文(RL)　底面無文	(2.4)			B	石 砂	にぶい黄橙		
86		6C16	Ⅶa層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類a1種	非結束羽状縄文(LR・RL) 内面:ナデ	(4.1)			B	砂	淡黄		
87		5D6	Ⅶa層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類b2種	斜縄文(RL)閉端部強調施文	(4.6)			B	石 砂	明褐		
88		7D1	Ⅶa層	前期	深鉢	胴		Ⅴ群2類a種	斜縄文(RL)	(5.1)			A	雲 石 砂	にぶい黄橙		
89		5D6	Ⅶa層	前期	深鉢	胴		Ⅴ群2類a種	斜縄文(RL) 内面:ケズリ	(5.3)			A	石◎砂	明褐		
90		5D1	Ⅶa層	前期		胴		Ⅴ群2類c種	反撚(LL) 内面:指頭圧痕	(6.1)			A	砂	灰黄		
91		6D19	Ⅶa層	前期前葉	深鉢	口	B1・b類	Ⅲ群7類d2種	ループ文(RL)末端環強調施文 内面:ナデ	(2.4)			A	砂	褐		
92		6D19	Ⅶa層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d2種	ループ文(RL)末端環強調施文 内面:ナデ	(2.9)			A	雲 石 砂	明褐		
93		6D19	Ⅶa層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d2種	ループ文(RL)末端環強調施文 内面:ナデ	(3.1)			A	雲 石 砂	明褐		
94		6E19	Ⅶa層	前期前葉	深鉢	口	B1・b類	Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL)	(6.2)			A	雲 石 砂	褐灰		内面風化著しい
95		6D19	Ⅶa層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:ナデ	(3.2)			B	石 砂	明褐		95～97同一個体か
96		6D19	Ⅶa層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL)	(3.3)			B	砂	褐	外面	95～97同一個体か
97		6D19	Ⅶa層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:ナデ	(3.6)			B	砂	明褐		95～97同一個体か
98		5D10	Ⅶa層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:ナデ	(3.7)			B	雲 石 砂	褐		
99	SK372	6D19	1層	前期前葉	深鉢	口～胴	A1・b類	Ⅱ群1類a種	爪刺突 第1種結束羽状縄文(LR×RL) 内面:指頭圧痕・ナデ				A	雲◎石 砂	褐	内外面	
100	SK372	6D19	1層	前期前葉	深鉢	口	B1・b類	Ⅲ群7類d2種	ループ文(RL)末端環強調施文 内面:ナデ	(3.0)			B	雲 石 砂	明褐		
101	SK418	5C14	1層	前期前葉	深鉢	口～胴	B1・c類	Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:ケズリ				A	砂	褐灰		101・102同一個体か
102	SK418	5C14	1層	前期前葉	深鉢	底	2a類	Ⅲ群6類b1種	爪形刺突文(C字形)同心円状施文 内面:ナデ				A	砂	褐灰		101・102同一個体か
103	SK418	5C14	1層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群1類a種	爪刺突 ループ文(RL)か	(1.8)			A	砂	褐灰		
104	SK855	6C18	1層	前期前葉	深鉢	口～胴	B1・b類	Ⅲ群7類d2種	ループ文(RL)末端環強調施文 内面:ナデ				B	雲 石 砂	灰黄褐		
105	SK855	6C24	3層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類b2種	無節斜縄文(L)閉端部強調施文 内面:ナデ	(4.4)			A	雲 砂	にぶい黄橙		
106	SK855	6C18	2層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類a1種	非結束羽状縄文(LR・RL) 内面:ナデ	(6.2)			A	雲 石 砂	にぶい黄橙		
107	SK855	6C18	2層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群2類b種	筵状刺突文連続施文 円形竹管文	(3.0)			A	雲 石 砂	にぶい黄		
108	SK852 P764	3C12, 3D5・19,4E3,5C14	1層	前期前葉	深鉢	口～底	A2・c・1類	Ⅲ群1類c種	爪形刺突文(C字形) コンパス文 ループ文(RL)末端環強調施文 内面:ケズリ	(39.0)	38.2	8.0	B	石 砂	浅黄		包含層出土破片と接合
109	SK852	5C14	1層	前期初頭	深鉢	胴		Ⅰ群1類	非結束羽状縄文(LR・RL) 内面:条痕(横位)・指頭圧痕	(6.2)			B	雲 砂	にぶい黄		
110	SK873	6C7	2層	前期前葉	深鉢	口～胴	C1・b類	Ⅲ群5類b種	爪形刺突文(D字形) ループ文(RL) 内面:ナデ	(16.0)	22.0		B	雲 石 砂◎	明黄褐	内面	
111	SK873	6C7	2層	前期前葉	深鉢	底部	2b類	Ⅲ群6類b2種	縄文(RL) 爪形刺突文(C字形)連続施文 同心円状・十字状施文 内面:ナデ	(5.3)		8.0	B	雲 石 砂	明黄褐		
112	SK873	6C7	1層	前期前葉	深鉢	口	C1・c類	Ⅲ群7類d2種	ループ文(RL)末端環強調施文 内面:ナデ	(9.5)	39.0		B	石◎砂◎	灰黄褐	外面	

谷地遺跡(縄文時代) 遺物観察表(4)
土器 (4)

No.	遺構名	出土地点	出土層位	時期	器種	部位	器形	文様	調整・施文	器高	口径	底径	胎土	混入物	色調	炭化物	備 考
113	SK875 旧河川	7E6	1層 4層	前期 前葉	深鉢	口～底	A1・a類	Ⅲ群1類b種	爪刺突 平行沈線文 平行沈線による波状文 結節回転文 内面:ナデ	(20.2)	23.8		A	雲 石 砂	浅黄	内外面	113・128同一個体
114	SK936	6C10	1層	前期 前葉	深鉢	口～胴	D・b類	Ⅲ群7類d1種	ループ文(LR)末端環強調施文 鋸歯状モチーフか 内面:指頭圧痕・ケズリ	(24.4)	29.0		C	石 砂	浅黄	外面	波状口縁か 114・116同一個体か
115	SK936	6C10	1層	前期 前葉	深鉢	胴		Ⅴ群2類a種	斜縄文(RL)	(5.0)			B	石 砂	暗灰	外面	内面風化著しい
116	SK936	6C10	1層	前期 前葉	深鉢	胴下端		Ⅲ群7類d2種	ループ文(LR)末端環強調施文 内面:ケズリ	(4.5)			C	石 砂	浅黄		114・116同一個体か
117	SK941	6C23	1層	前期 前葉	深鉢	口～胴	B1・c類	Ⅲ群3類	爪形刺突(D字形)文連続施文 コンパス文 斜縄文(RL)閉端部強調 内面:ナデ・ミガキ				A	石 砂	灰黄褐		
118	SK941	6C23	1層	前期 前葉	深鉢	口	C1・a類	Ⅲ群3類	爪形刺突(D字形)連続施文 縄文 ナデ・ミガキ	(5.5)			A	石 砂	灰黄褐		
119	SK941	6C23	1層	前期 前葉	深鉢	胴下端		Ⅲ群6類b1種	爪形刺突文(C字形)	(1.3)			A	石 砂	灰黄褐		
120	SK941	6C23	1層	前期 前葉	深鉢	口	B1・a類	Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:ナデ	(6.8)			B	石 砂	灰黄褐	外面	120・121同一個体か
121	SK941	6C23	1層	前期 前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:ナデ	(6.2)			B	石 砂	灰黄褐		120・121同一個体か
122	SK1414	8C5	1層	前期 前葉	深鉢	口～底	B1・b・2a類	Ⅲ群7類b3種	複節斜縄文(LRL) 底面無文 内面:指頭圧痕・ナデ	(28.6)	30.4		A	雲 石 砂	暗灰黄	内面	
123	SK1085	5C15	1層	前期 前葉	深鉢	胴下端		Ⅲ群6類a種	爪刺突 ループ文(RL) 内面:ナデ	(2.0)			A	砂	褐灰		
124	SK405	6C8	1層	前期 中葉	鉢	胴		Ⅳ群1類a1種	点列状刺突文 円形竹管文 内面:指頭圧痕・ナデ	(6.2)			B	雲 石 砂	明赤褐		
125	SK1301	6C17	1層	前期 前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類b1種	斜縄文(RL) 内面:ナデ	(5.8)			A	石 砂	浅黄		
126	SK371	6C6	4層	前期	深鉢	胴		Ⅴ群2類a種	斜縄文(RL) 内面:ナデ	(7.4)			A	石 砂	灰黄褐		
127	SK943	6C8	1層	前期	深鉢	胴		Ⅴ群2類a種	斜縄文(RL) 内面:ナデ	(5.0)			B	砂	明褐		
128	SK850	6E10	1層	前期 前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類c2種	結節回転文 内面:ナデ	(3.7)			A	雲 石	浅黄	内面	113・128同一個体
129	SK404	7C12	4層	前期	深鉢	胴		Ⅴ群3類	斜縄文(RL)＋結節 内面:指頭圧痕・ナデ	(5.5)			A	雲◎石◎砂	褐	内面	129～131同一個体か
130	SK853	7C21	2層	前期	深鉢	胴		Ⅴ群3類	斜縄文(RL)＋結節 内面:指頭圧痕・ナデ	(5.9)			A	雲◎石◎砂	褐	内面	129～131同一個体か
131	SK938	7C16	3層	前期	深鉢	胴		Ⅴ群3類	斜縄文(RL)＋結節 内面:指頭圧痕・ナデ	(3.0)			A	雲◎石◎砂	褐	内面	129～131同一個体か
132	SK1404	9C11	1層	前期 前葉	深鉢	口	B1・c類	Ⅲ群1類e2種	爪刺突 斜縄文(RL)＋結節	(3.0)			A	石 砂	にぶい黄橙		内面風化著しい
133	SK408	6C5	3層	前期 前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d2種	ループ文(RL)末端環強調施文 内面:ナデ	(5.5)			B	石 砂	にぶい黄橙	内面	
134	SK869	6C8	1層	前期 前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL)末端環強調施文	(1.8)			B	雲 砂	にぶい黄褐		
135	SK872	6C6	1層	前期 前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL)末端環強調施文 内面:ナデ	(2.8)			B	雲 石 砂	灰黄褐	外面	
136	SK1176	8C14	1層		深鉢	口	B1・b類	Ⅲ群7類d2種	ループ文(RL)末端環強調施文 内面:ナデ	(2.8)			B	雲 石 砂	浅黄	内面	
137	SK409	6C8	1層	前期 前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:ナデ	(4.1)			A	雲 砂	にぶい黄褐	内面	
138	SK417	6C8	1層	前期 前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL)	(3.9)			A	雲 砂	灰黄		内面風化著しい
139	SK1174	8C5	1層	前期 前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d2種	ループ文(RL)末端環強調施文	(7.4)			A	石 砂	にぶい黄褐	内面	
140	SK849	6C10	1層	前期	深鉢	胴			縄文か 内面:指頭圧痕・ナデ	(5.0)			A	石 砂	暗灰黄		器面風化著しい
141	P800	6D5	1層	前期 前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:ナデ	(4.3)			A	石 砂	灰黄		SX347
142	遺物集中 851	6D5	Ⅶb層	前期 前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:ナデ	(3.4)			A	石 砂	灰黄		SX347
143	遺物集中 770	6D9	Ⅶb層	前期 前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類c1種	結節回転文 内面:ナデ	(2.0)			A	雲◎石 砂	褐		SX347 143・144・146同一個体か
144	遺物集中 771	6D10	Ⅶb層	前期 前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類c1種	結節回転文 内面:ナデ	(5.2)			A	雲◎石 砂	褐		SX347 143・144・146同一個体か
145		7C21	Ⅶb層	前期 前葉	深鉢	胴下端		Ⅲ群4類c種	筵状刺突文 内面:ナデ	(2.5)			A	雲 石 砂	褐灰		F357付近で出土
146	F166	6D5	3層	前期 前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類c1種	結節回転文 内面:ナデ	(2.6)			A	雲◎石 砂	褐		143・144・146同一個体か
147	F166	6D5	4層	前期 前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:ナデ	(4.5)			A	石 砂	にぶい黄橙		

谷地遺跡(縄文時代) 遺物観察表(5)
土器 (5)

No.	遺構名	出土地点	出土層位	時期	器種	部位	器形	文様	調整・施文	器高	口径	底径	胎土	混入物	色調	炭化物	備 考
148	F356	6D3	4層	前期前葉	深鉢	口	B1・b類	Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:ケズリ	(5.8)			B	雲 石	浅黄	内面	
149	F361	6C3	1層	前期前葉	深鉢	口	B1・b類	Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL)	(2.0)			A	雲 石 砂	褐灰	外面	内面風化著しい
150		7C21	Ⅷb層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL)	(2.7)			B	砂	にぶい黄橙	内面	F775付近で出土
151	遺物集中350	6D18・23	Ⅷb層	前期前葉	深鉢	口～胴	C2・c類	Ⅲ群7類a1種	非結束羽状縄文(LR・RL) 内面:ナデ	(8.9)	17.8		A	雲 石 骨◎	暗灰黄		
152	旧河川	7C22	4層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群2類a種	爪形刺突文(C字形)横位・斜位施文 内面:指頭圧痕・ナデ	(5.4)			A	雲 石 砂 骨	にぶい黄	内面	
153	旧河川	7D12	4層	前期前葉	深鉢	胴下端		Ⅲ群6類a種	爪刺突 縄文か 内面:指頭圧痕・ナデ	(2.6)			A	石 砂	にぶい黄	外面	
154	旧河川	7D7	4層	前期	深鉢	胴		Ⅴ群2類a種	斜縄文(RL) 内面:指頭圧痕・ナデ	(5.0)			A	石 砂	浅黄	内面	
155	旧河川	7D12	4層	前期前葉	深鉢	口	B1・b類	Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:ナデ	(3.2)			A	石 砂	灰黄褐	外面	155・156同一個体か
156	旧河川	7D7	4層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:ナデ	(4.0)			A	石 砂	浅黄	外面	155・156同一個体か
157	旧河川	7D12	4層	前期前葉	深鉢	口～胴	B1・b類	Ⅲ群7類c2種	結節回転文 内面:指頭圧痕・ナデ	(21.9)	28.6		B	石◎砂	灰黄褐	内外面	
158	旧河川	7D12	4層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群1類a種	爪刺突 縄文か 内面:指頭圧痕・ナデ	(2.8)			B	石◎砂	灰黄褐	内外面	
159		5C1	Ⅷb層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅱ群1類b種	爪刺突 縄文か	(4.6)			A	石◎砂	浅黄		器面風化著しい
160		6D10	Ⅷb層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群1類d種	無文帯 ループ文(RL)	(4.0)			A	石 砂	にぶい黄褐		内面風化著しい
161		6E18	Ⅷb層	前期中葉	深鉢	口	B1・C類	Ⅳ群2類	平行沈線文斜位施文	(4.6)			A	雲 石◎	明黄褐		波状口縁
162		6D13	Ⅷb層	前期前葉	深鉢	口	D・b類	Ⅲ群7類a2種	非結束羽状縄文(RL・LR)閉端部強調施文 内面:ナデ	(4.2)	21.6		A	雲 石 砂	灰黄褐		
163		6D1	Ⅷb層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類b1種	斜縄文(RL)	(3.1)			A	砂	浅黄		内面風化著しい
164		6C4	Ⅷb層		深鉢	胴		Ⅴ群2類b種	斜縄文(LR縦位)	(4.4)			B	石 砂	灰黄褐	外面	内面風化著しい
165		6D3	Ⅷb層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類c1種	結節回転文 内面:ナデ	(5.3)			A	雲◎石	暗褐		
166		6C19	Ⅷb層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d2種	ループ文(RL)末端環強調施文 内面:ナデ	(4.9)			A	石 砂	明黄褐	内面	
167		6E9	Ⅷb層	前期前葉	深鉢	口	C1・b類	Ⅲ群7類d2種	ループ文(RL)末端環強調施文 内面:ナデ	(2.8)			A	雲◎砂	黒褐		波状口縁
168		7C11	Ⅷb層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL)	(2.9)			B	砂	にぶい黄褐		内面風化著しい
169		7D11	Ⅷb層	前期前葉	深鉢	口	B1・b類	Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:ナデ	(7.1)			A	石 砂	にぶい黄橙		
170		7D11	Ⅷb層	前期前葉	深鉢	口	B1類	Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:ナデ	(7.1)			A	石 砂	にぶい黄橙		器面風化著しい
171		7D12	Ⅷb層	前期前葉	深鉢	口	B1・c類	Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:ナデ	(3.4)			A	石 砂	明黄褐		
172	SX857	6D24	1層	前期前葉	深鉢	口	C1・a類	Ⅲ群1類e2種	爪刺突 斜縄文(LR)	(2.9)			A	砂	褐灰		内面風化著しい
173	SK1071	6D12	1層	前期前葉	深鉢	口～胴	C1・b類	Ⅲ群7類d3種	ループ文(RL) 内面:指頭圧痕・ナデ	(12.7)	29.5		A	雲 石	にぶい黄褐		
174	SK1090	6D23	1層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅱ群2類b種	第1種結束羽状縄文(RL×LR) 片翼状	(5.0)			A	石◎砂	にぶい黄		内面風化著しい
175	SK1160	7E1	1層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅱ群2類a種	第1種結束羽状縄文(RL×LR) 結束部強調 内面:ナデ	(7.5)			A	石◎砂	浅黄		175～177同一個体か
176	SK1160	7E1	1層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅱ群2類a種	第1種結束羽状縄文(RL×LR) 結束部強調 内面:ナデ	(5.6)			A	石◎砂	浅黄		175～177同一個体か
177	SK1160	7E1	1層	前期前葉	深鉢	胴		Ⅱ群2類a種	第1種結束羽状縄文(RL×LR) 結束部強調 内面:ナデ	(3.8)			A	石◎砂	浅黄		175～177同一個体か
178	SK1160	7E1	1層	前期前葉	深鉢	胴下端		Ⅲ群6類a種	爪刺突	(2.9)			B	石 砂	浅黄		

谷地遺跡(縄文時代) 遺物観察表(6)

石鏃

No.	遺構名	出土地点	出土層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　質	遺存状況	備　　考
188		7D6	Ⅷa層	A2	2.6	1.5	0.3	0.7	硬質頁岩	完形	F196付近で出土
221	SK872	6C6	2層	B	2.6	1.2	0.3	0.8	硬質頁岩	完形	
222		6D5	Ⅷb層	A1	1.5	1.3	0.3	0.5	硬質頁岩	先端欠損	
223	SK850	6E10	1層	A1	1.6	1.2	0.4	0.5	硬質頁岩	右基部欠損	
224	F165	6D3･8		A1	1.5	1.6	0.3	0.2	珪藻質泥岩	左基部欠損	覆土の土壌水洗で出土
225	SK850	6E10	2層	A1	1.2	1.1	0.3	0.2	硬質頁岩	完形	

石錐

No.	遺構名	出土地点	出土層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　質	遺存状況	備　　考
192		6D14	Ⅷa層	B	4.8	3.6	1.7	18.6	鉄石英	完形	右側縁に光沢あり
193	F192	6D15	3層	B	1.9	5.2	2.1	10.9	硬質頁岩	完形	左端部に光沢あり
226		6E4	Ⅷb層	A	2.4	1.3	0.4	1.1	硬質頁岩	完形	線条痕あり
227		6C21	Ⅷb層	A	2.1	1.4	0.5	1.3	硬質頁岩	完形	先端摩滅
228		6C21	Ⅷb層	A	2.3	3.5	1.1	5.0	硬質頁岩	先端欠損	
229		6D1	Ⅷb層	B	6.2	3.5	3.2	29.1	硬質頁岩	完形	

石匙

No.	遺構名	出土地点	出土層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　質	遺存状況	備　　考
189		6C18	Ⅷa層	A1	7.2	2.2	1.0	11.3	硬質頁岩	完形	
190		7D6	Ⅷa層	A1	4.8	2.6	0.5	6.6	硬質頁岩	完形	F196付近で出土
230	遺物集中771	6D10	Ⅷb層	B	2.7	1.7	0.5	2.4	硬質頁岩	刃部欠損	
231		6C13	Ⅷb層	A1	7.0	2.8	0.8	12.7	硬質頁岩	完形	
232	SK877	6C18	3層	A1	7.5	2.4	1.1	16.3	硬質頁岩	完形	つまみ括れ部に紐づれ
233		7D22	Ⅷb層	A2	6.8	2.3	1.0	11.6	硬質頁岩	完形	
234		6D8	Ⅷb層	A2	8.0	2.9	1.5	16.6	硬質頁岩	完形	F165付近で出土
235		6D8	Ⅷb層		9.7	4.5	2.5	52.3	硬質頁岩	未成品	F165付近で出土

箆状石器

No.	遺構名	出土地点	出土層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　質	遺存状況	備　　考
194		7C16	Ⅷa層		2.9	2.3	1.0	6.1	硬質頁岩	下半部欠損	
195		7D6	Ⅷa層		3.2	3.2	1.2	7.6	硬質頁岩	下半部欠損	F196付近で出土
196		5E20	Ⅷa層	A2	5.1	3.4	1.1	17.6	硬質頁岩	基部欠損	
197		6C23	Ⅷa層	A2	5.3	3.7	1.4	29.8	硬質頁岩	完形	SK354付近で出土
198		6D10	Ⅷa層	A2	3.0	4.6	1.3	18.4	硬質頁岩	上半部欠損	F196付近で出土
199	F195	7C11	1層	A2	6.7	3.6	1.2	33.9	硬質頁岩	完形	裏面の下端刃部に光沢あり
200		7C16	Ⅷa層	A2	5.5	3.6	1.7	34.8	硬質頁岩	完形	裏面の稜部に光沢あり　F167付近で出土
201		6D20	Ⅷa層	A1	5.9	3.3	1.6	26.5	硬質頁岩	完形	裏面の下端刃部に光沢あり
239		6D8	Ⅷb層	A2	7.3	3.4	1.8	31.5	流紋岩	完形	F165付近で出土
240	SK877	6C18	3層	B1	7.4	3.5	2.0	53.0	頁岩	完形	
241		6C14	Ⅷb層	B1	9.1	4.2	3.0	96.1	頁岩	完形	裏面の下端刃部に光沢あり
242		6D9	Ⅷb層	A1	5.0	3.2	1.2	16.9	硬質頁岩	完形	裏面の下端刃部に光沢あり
243		4B25	Ⅷb層	B2	5.6	4.1	1.7	34.3	硬質頁岩	完形	
244		6C16	Ⅷb層	B1	4.4	2.3	1.5	8.9	硬質頁岩		
245	SK1322	6C17	1層	A3	6.1	4.0	1.6	32.6	硬質頁岩	完形	裏面に光沢あり
246	SK932	5C13	1層		5.6	3.8	1.6	30.6	硬質頁岩	未成品か	
247		6C1	Ⅷb層		2.9	2.6	1.0	7.4	珪藻質泥岩	下半部欠損	

両極石器

No.	遺構名	出土地点	出土層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　質	遺存状況	備　　考
179		3D2	Ⅷ層		3.3	5.0	1.7	18.4	硬質頁岩		自然面あり
248	SK850	6E10	2層		1.9	1.3	0.6	1.3	黒曜石		自然面あり
249	SK850	6E10	2層		1.8	0.8	0.5	0.6	黒曜石		自然面あり
250		6C11	Ⅷb層		3.5	3.2	1.5	13.0	硬質頁岩		

不定形石器･剝片 (1)

No.	遺構名	出土地点	出土層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　質	遺存状況	備　　考
180		4D20	Ⅷ層	B	3.7	3.8	0.7	5.5	硬質頁岩		右側縁から下側縁に微細剝離
181		4D25	Ⅷ層	剝片	6.2	5.0	1.1	27.7	硬質頁岩		右側縁から下端に微細剝離
191		6D15	Ⅷa層	A2	4.0	9.3	1.1	34.7	ホルンフェルス	完形	
202	SK259	6C19	1層	B	6.9	4.2	1.4	26.7	硬質頁岩		左側縁に微細剝離
203		6C25	Ⅷa層	B	6.7	3.4	1.8	38.3	硬質頁岩		右側縁に抉入あり

谷地遺跡(縄文) 遺物観察表(7)

不定形石器・剥片 (2)

No.	遺構名	出土地点	出土層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 質	遺存状況	備 考
236		5D20	Ⅷb層	A2	6.2	4.6	1.0	20.0	硬質頁岩	上半部欠損	
237		6D15	Ⅷb層	A1	6.8	3.8	1.5	24.0	硬質頁岩	上半部欠損	
238		6C25	Ⅷb層	A2	4.8	9.1	1.7	67.8	硬質頁岩	完形	
251	SK855	6C18	4層	B	6.9	3.9	1.4	35.1	硬質頁岩		左側縁に微細剥離
252		7C21	Ⅷb層	B	6.8	5.0	1.6	31.2	硬質頁岩		左右・下端に微細剥離　F775付近で出土
253		6D3	Ⅷb層	B	2.2	3.4	1.0	4.8	硬質頁岩		右側縁に微細剥離　F165付近で出土
254		6D3	Ⅷb層	B	3.9	5.0	1.2	15.8	硬質頁岩		下側縁に微細剥離　F165付近で出土
255		6D8	Ⅷb層	B	5.0	6.7	1.3	25.0	硬質頁岩		下側縁に微細剥離　F165付近で出土
256		6D8	Ⅷb層	B	4.8	3.8	1.1	13.9	硬質頁岩		左側縁に微細剥離　F165付近で出土
257		6D3	Ⅷb層	B	4.7	1.2	0.3	1.9	硬質頁岩		右側縁に微細剥離　F165付近で出土
258		6C21	Ⅷb層	B	3.8	1.7	0.6	1.6	珪藻質泥岩		両面縁に微細剥離
259		6C19	Ⅷb層	剥片	5.2	3.5	0.9	10.3	硬質頁岩		
260		7D16	Ⅷb層	剥片	7.3	5.0	1.5	42.9	硬質頁岩		

磨製石斧

No.	遺構名	出土地点	出土層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 質	遺存状況	備 考
261		6C22	Ⅷb層	B	4.6	3.9	1.8	36.9	蛇紋岩		
262		6C16	Ⅷb層	B	4.7	4.2	2.3	50.0	蛇紋岩		
263		6C22	Ⅷb層	B	2.3	1.4	0.4	0.9	蛇紋岩		
264		5C25	Ⅷb層	B	3.7	3.1	1.4	20.5	蛇紋岩		
265				B	10.5	4.7	2.3	108.3	蛇紋岩		261～264・267が接合
266	SK930	7C12	1層	A	7.2	3.4	1.8	51.9	緑色凝灰岩	上下端欠損	
267		6C21	Ⅷb層	B	2.7	4.7	1.2	15.2	蛇紋岩		
268		7D21	Ⅷb2層	B	4.9	3.7	1.6	27.6	蛇紋岩	裏面剥離	F876付近で出土

玉類

No.	遺構名	出土地点	出土層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 質	遺存状況	備 考
269	F762	6D10	1層		1.1	0.9	0.8	1.0	滑石	完形	両面穿孔

磨石類 (1)

No.	遺構名	出土地点	出土層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 質	遺存状況	備 考
182	遺物集中442	4D8	Ⅷ層	A1	12.9	8.3	6.1	905.8	花崗岩	完形	磨面右側
183		3D20	Ⅷ層	A1	15.6	7.0	5.2	779.7	閃緑岩	完形	磨面右側
184		4D22	Ⅷ層	A3	14.9	7.7	4.5	684.5	花崗岩	完形	敲打下端　磨面右側
185	遺物集中385	3E8	Ⅷ層	B	10.1	7.9	4.5	510.0	閃緑岩(片麻状)	完形	磨面正・裏面
186		4D13	Ⅷ層	A3	15.8	6.3	5.3	764.2	花崗岩	完形	敲打下端　磨面右側
187	遺物集中442	4D5・10	Ⅷ層	B	11.6	9.3	4.5	784.3	はんれい岩	完形	磨面正・裏・左・右側
204		6D25	Ⅷa層	A3	16.0	7.7	7.1	877.3	砂岩	下位一部欠損	敲打正面　磨面右側　F194付近で出土
205		7C16	Ⅷa層	A1	17.1	6.6	4.6	712.0	花崗岩(片麻状)	上端欠損	磨面右側　F167付近で出土
206		7D11	Ⅷa層	A1	12.7	6.2	5.1	564.7	花崗岩	完形	磨面右側　F191付近で出土
207		6D15	Ⅷa層	A2	7.8	6.8	6.1	344.6	砂岩	上下端欠損	磨面左・右側　F192付近で出土
208	SK354	6C23	1層	A3	16.6	6.8	6.0	1003.7	はんれい岩	完形	磨面右側
209		6D1	Ⅷa層	A1	17.2	8.4	6.1	1166.0	輝緑岩	完形	磨面右側　線条痕あり
210	SK451	7C6	1層	A3	13.7	6.2	5.9	810.3	はんれい岩	完形	敲打右側　磨面正・右側
211		6D9	Ⅷa層	A1	4.6	5.5	4.1	77.2	石英斑岩	3/4欠損	磨面右側
212		6D9	Ⅷa層	A1	8.4	6.9	4.6	306.8	砂岩	上半部欠損	磨面右側
213		6C17	Ⅷa層	B	9.8	8.7	4.1	425.2	安山岩	完形	磨面正・裏面
214		6C15	Ⅷa層	A1	11.7	7.4	4.5	511.1	砂岩	下半部欠損	磨面右側　F195付近で出土
215	SK354	6C23	1層	A3	14.8	8.4	5.5	859.0	花崗岩	完形	敲打正・下端　磨面右側
216		7D6	Ⅷa層	B	15.3	7.7	5.0	991.6	閃緑岩	完形	被熱　敲打上・下端　磨面正・裏・左・右側 F190付近で出土
217		5B22	Ⅷa層	A1	8.4	6.9	3.8	279.3	輝緑岩	上半部欠損	磨面右側
219	SK288	7C16	1層	B	12.3	8.2	5.1	787.6	はんれい岩	完形	敲打正面　磨面右側
220		7C11	Ⅷa層	B	9.6	8.4	4.3	435.1	砂岩	完形	敲打上・下・左・右側　磨面裏面　F195付近で出土
270	SK877	6C19	2層	A1	17.3	8.7	5.2	1129.9	閃緑岩	完形	敲打・磨面右側
271		6D19	Ⅷb層	A1	16.1	6.7	5.6	766.1	花崗岩	完形	磨面右側
272		6D3	Ⅷb層	A1	15.9	7.8	5.7	964.4	花崗岩	完形	磨面右側
273		6C14	Ⅷb層	A1	14.5	6.6	5.3	718.1	花崗岩	完形	磨面右側
274		6D2	Ⅷb層	A1	14.6	7.1	5.1	781.9	花崗岩	完形	磨面右側
275	SK871	6C16	1層	A1	13.4	6.2	4.0	498.7	花崗岩	完形	磨面右側
276		6C22	Ⅷb層	A1	12.9	8.9	6.4	934.2	花崗岩	完形	敲打・磨面右側
277	SK371	6C6	1層	A1	14.7	8.2	5.4	1015.7	閃緑岩	完形	磨面右側
278		5C10	Ⅷb層	A1	13.5	8.5	5.2	595.9	流紋岩	完形	敲打・磨面右側
279		6C25	Ⅷb層	A1	12.4	4.2	3.4	248.0	花崗岩	完形	磨面右側
280				A1	15.4	6.7	3.4	549.0	輝緑岩	完形	磨面右側　試掘7Tより出土

谷地遺跡(縄文) 遺物観察表(8)
磨石類 (2)

No.	遺構名	出土地点	出土層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　質	遺存状況	備　　考
281		6D24	Ⅷb層	A1	8.3	7.4	4.8	359.8	花崗岩	上半部欠損	磨面右側
282		5C3	Ⅷb層	A1	13.0	7.8	4.3	555.2	凝灰岩	完形	磨面右側
283		6D20	Ⅷb層	A1	15.3	7.6	4.7	791.2	花崗岩	完形	磨面右側
284		6C14	Ⅷb層	A2	15.8	8.5	4.6	910.5	花崗岩	完形	磨面左･右側
285		6D4	Ⅷb2層	A2	14.9	7.2	7.9	812.7	花崗岩	完形	磨面正･裏･右側　F939付近で出土
286		6E8	Ⅷb層	A2	16.6	7.5	5.1	971.0	輝緑岩	完形	磨面左･右側
287		6D4	Ⅷb層	A2	16.3	6.4	6.0	894.2	花崗岩	完形	磨面正･裏･右側
288		9C21	Ⅷb層	A3	9.7	6.4	4.7	424.7	閃緑岩	上半部欠損	敲打下端　磨面右側
289		6E4	Ⅷb層	A1	21.3	6.6	4.4	928.2	輝緑岩	完形	磨面右側
290	SK877	6C18	1層	A3	16.6	6.9	5.3	857.0	花崗岩	完形	敲打下端　磨面右側
291		5D14	Ⅷb層	A3	9.1	5.2	6.1	311.8	凝灰岩	下半部欠損	敲打上端　磨面裏･右側
292	SX857	6D25	1層	A3	7.2	6.1	4.6	168.7	砂岩	両端欠損	敲打下端　磨面右側
293		6C16	Ⅷb層	A3	13.2	8.2	6.5	822.2	花崗岩	完形	敲打上端　磨面右側　F359付近で出土
294		6D3	Ⅷb層	A3	14.3	5.8	4.9	658.7	閃緑岩(片麻状)	完形	敲打下端　磨面右側　F165付近で出土
295	SK938	7C16	1層	A3	14.2	7.5	4.6	817.0	閃緑岩	完形	敲打下端　磨面左･右側
296	SK865	6C16	1層	A3	16.2	6.2	5.2	780.7	閃緑岩	完形	敲打下端　磨面左･右側
297		6E9	Ⅷb層	A3	16.1	8.1	5.4	1007.6	花崗岩	完形	敲打下端　磨面右側
298		6D12	Ⅷb2層	A3	15.0	7.7	4.8	697.3	花崗岩	下端一部欠損	敲打下端　磨面右側
299				A3	6.6	6.0	4.7	263.3	花崗岩	上半部欠損	敲打下端　磨面左･右側　試掘29Tより出土
300	SK938	7C16	3層	A3	10.6	5.6	4.3	350.2	凝灰岩	上端欠損	敲打下端　磨面左･右側
301		6D20	Ⅷb層	A3	13.5	7.4	5.8	703.7	花崗岩	完形	敲打上端　磨面右側
302	SK1402	6E2	1層	A3	14.6	7.4	4.9	787.0	閃緑岩	完形	敲打上端　磨面右側
303		5C2	Ⅷb層	A3	11.9	6.2	6.2	589.9	流紋岩	完形	敲打上･下端　磨面正･右側
304		6D2	Ⅷb層	C	15.7	6.8	5.3	921.1	花崗岩	完形	敲打下端
305		6D3	Ⅷb層	C	12.1	5.8	5.4	600.0	輝緑岩	完形	敲打下端
306		6E3	Ⅷb層	C	12.7	7.6	5.7	817.9	輝緑岩	完形	敲打下端
307		7D6	Ⅷb層	A1	11.1	4.7	4.0	322.4	はんれい岩	完形	磨面上･右側
308		5D14	Ⅷb層	B	11.6	8.9	4.3	539.1	凝灰岩	完形	磨面正･裏･右側
309		6C24	Ⅷb層	B	7.6	9.1	4.7	409.4	花崗岩	上半部欠損	表面凹あり　F358付近で出土
310		6C21	Ⅷb層	B	11.8	10.5	4.1	591.9	砂岩	完形	敲打･磨面正･裏･左･右側
311		6C25	Ⅷb層	B	10.2	8.1	4.3	522.9	花崗岩	完形	磨面正･裏面
312		7D6	Ⅷb層	B	10.0	8.9	4.4	446.1	石英斑岩	完形	敲打右側面　磨面正面

石錘

No.	遺構名	出土地点	出土層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　質	遺存状況	備　　考
218	F190	6D10	2層	B	3.6	4.9	1.1	24.9	ホルンフェルス	完形	被熱　長軸上･下端に剝離
313	SK938	7C16	1層	A	11.3	7.7	1.6	177.3	流紋岩	完形	短軸両端に剝離
314		6C5	Ⅷb層	A	11.4	8.2	1.7	224.9	砂岩	完形	短軸両端に剝離
315	SK940	7D1	1層	B	8.1	11.3	2.4	361.5	花崗岩	完形	長軸上･下端に剝離
316		6E18	Ⅷb層	B	3.6	5.7	1.2	31.3	ホルンフェルス	完形	長軸上･下端に剝離

石皿類

No.	遺構名	出土地点	出土層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　質	遺存状況	備　　考
317				C	28.0	12.6	3.7	2200.0	閃緑岩	1/2	試掘29Tより出土
318		6E1	Ⅷb層	A	31.0	23.6	6.8	5800.0	花崗岩	完形	
319		7E16	Ⅷb層	B	26.6	24.4	7.5	6600.0	花崗岩	完形	

谷地遺跡(中世) 遺構観察表(1)
掘立柱建物 (SB)

遺構観察表の( )は残存値

SB1		側柱建物	梁間 2間 3.24 m			桁行 2間 (2.17)m				面積 (7.0)㎡				長軸 N7° E		
遺構No.	遺構種	グリッド	形状		覆土分類	規模(cm)			柱根・杭傾斜		出土遺物			他遺構との重複関係	備考
			平面形	断面形		長軸	短軸	深さ	角度	方向	柱根	礎盤	その他		
2023	P	2E8	隅丸長方形	台形状	F	23	18	22							柱痕あり
2025	P	2E19	隅丸方形	階段状	C	24	22	24							
2026	P	2E18	円形	台形状	C	24	20	18							
2027	P	2E13	円形	台形状	A	26	22	16							
2028	P	2E12・13	円形	半円状	A	16	16	6							
2031	P	2E14	隅丸方形	U字状	C	30	28	34							
2032	P	2E8	隅丸方形	U字状	A	32	30	40							

井戸 (SE)

遺構No.	グリッド	形状		覆土分類	規模(cm)			出土遺物	他遺構との重複関係
		平面形	断面形		長軸	短軸	深さ		
2001	4B9・10・14・15, 5B6・11	楕円形	漏斗状	D	280	(190)	285	珠洲焼(甕)、越前焼(甕)、瓦質土器(擂鉢)、硯、鉄鍋、鉄釘、下駄、梳櫛、鉤状木製品、曲物、不明木製品、被熱礫	＜P2010・2011・2012
2016	5B18・19・24	円形	箱状	C	106	92	118	青磁(椀)、下駄、木槽、棒状・杭状・板状木製品、建築部材、箱状木器、杭、浮子、板材、被熱礫	
2017	6D3・4・8・9	円形	弧状		78	68	21	珠洲焼(擂鉢)、礫	
2030	2E25,3E21	円形	U字状	D	139	126	220		

土坑 (SK)

遺構No.	グリッド	形状		覆土分類	規模(cm)			出土遺物	他遺構との重複関係
		平面形	断面形		長軸	短軸	深さ		
2006	7C25,7D5		半円状	B	72	(25)	36		
2008	7C25,7D5	長楕円形	弧状	E	70	46	14		
2020	4F1	円形	台形状	A	92	82	28		
2041	8D7～9・12～14	隅丸方形	台形状	B	317	305	66	珠洲焼(甕)、磨石、種子(モモ)、棒状木製品	
2045	9C17	長楕円形	階段状	B	62	33	26		
2046	9C17	長楕円形	弧状	A	94	55	24		
2048	7D10,8D6	長楕円形	弧状	A	144	60	10		
2050	9D4	楕円形	半円形	C	58	46	18		
2053	9C13・18	楕円形	弧状	B	130	90	30		
2054	9C17・18・22・23	長楕円形	弧状	B	90	60	20		
2064	10B11・16	長楕円形	弧状	A	55	22	5		
2078	10D19・24	隅丸長方形	台形状	B	(100)	70	26		＜SK2079
2079	10D19・24	楕円形	箱状	C	66	50	13		＞SK2078
2080	11B17・22	長楕円形	階段状	A	80	30	22		
2086	11C20	長楕円形	箱状	B	60	40	10		
2093	11D13・18	隅丸方形	弧状	B	94	82	18		
2094	11D19	長楕円形	階段状	E	64	32	22		
2100	13C8・13・14	長楕円形	弧状	A	108	62	12		
2105	13B24	楕円形	階段状	A	54	38	32		
2107	13E2	長楕円形	弧状	B	60	38	16		
2131	13D20・25	長楕円形	台形状	A	58	22	25		
2133	11D20・25	楕円形	台形状	C	110	85	27		
2134	11D24・25	長楕円形	台形状	C	112	62	32		

溝 (SD)

遺構No.	グリッド	断面形	覆土分類	規模(cm)			長軸方向	出土遺物	他遺構との重複関係
				長さ	幅	深さ			
2002	2B	台形状	D	(240)	115	52	N83° W		
2003	1C,2C	台形状	E	(640)	120	28	N11° E～N20° E	土器片	＜SD2013
2004	3F,4F	台形状	B	(257)	130	36	N79° W		
2005	4F	台形状	C	(470)	126	24	N79° W	青磁(小杯)	＝SD2058
2007	8D,8E	台形状	B	(870)	164	65	N13° E		＝SD2042
2013	1B,1C	弧状	E	(500)	(76)	26	N70° W～N83° W		＞SD2003
2034	1B,2B	台形状	A	250	48	10	N0° ～N7° E		＜P2039
2042	8B,8C,8D,9D,9E	台形状	B	(2768)	132	70	N73° W～N83° W	白磁(皿)	＝SD2007
2056	15B,15C,15D,15E,16E	半円状	E	(3306)	331	92	N70° W		＜SD2057
2057	14D,14E,14F,15C,15D,15E,15F	半円状	E	(2690)	406	72	N22° W～N49° W		＞SD2056
2058	4F,5F	弧状	C	(640)	110	20	N7° E		＝SD2005

谷地遺跡(中世) 遺構観察表(2)
ピット (P)

遺構No.	グリッド	形状		覆土分類	規模(cm)			出土遺物	他遺構との重複関係
		平面形	断面形		長軸	短軸	深さ		
2010	4B10	楕円形	半円状	C	46	32	38		＞SE2001
2011	5B11	円形	台形状	A	24	21	18		＞SE2001
2012	4B15,5B11	円形	階段状	F	41	37	48		＞SE2001
2018	1B25	円形	階段状	F	28	27	18		
2021	4F1	円形	半円状	F	16	14	10		
2022	2E3	楕円形	台形状	A	26	20	6		
2024	2E13	円形	台形状	A	22	20	10		
2029	2D25,2F5,3E21,3F1	楕円形	台形状	A	24	20	14		
2033	2E24	円形	台形状	A	24	22	16		
2035	2B20	円形	階段状	C	28	24	18		
2036	2B15･20	楕円形	V字状	A	24	18	16		
2038	2B21	円形	台形状	A	20	20	16		
2039	2B21	楕円形	階段状	F	30	25	16		＞SD2034
2043	8C12	長楕円形	半円状	A	30	17	14		
2044	9C1･2	円形	弧状	A	28	24	8		
2047	9D13	楕円形	台形状	A	18	15	10		
2051	9C24	楕円形	U字状	B	22	16	15		
2052	9C18･23	円形	U字状	E	24	22	22		
2055	2E12･17	円形	箱状	A	38	32	34		
2059	1B25	円形	箱状	F	27	24	34		
2060	1B24	円形	階段状	C	29	27	19		
2061	5F6	円形	U字状	C	20	18	20		
2062	1C4	楕円形	階段状	C	24	20	18		
2065	10B16	円形	半円状	A	20	20	16		
2066	10B16･17･21･22	長楕円形	半円状	A	26	17	18		
2068	10B17	円形	U字状	C	16	16	18		
2069	10C10	楕円形	半円状	A	22	18	14		
2070	10C10	円形	半円状	B	22	22	10		
2071	10C17･18	長楕円形	半円状	A	26	14	14		
2072	10C22	円形	階段状	C	10	10	14		
2075	10C19	長楕円形	U字状	C	21	14	22		
2077	10D24	長楕円形	階段状	B	34	22	16		
2081	11B23	楕円形	V字状	A	12	10	12		
2082	11B23	円形	台形状	A	24	23	20		
2083	11C8	長楕円形	U字状	A	21	14	36		
2084	11C2	隅丸方形	階段状	F	21	19	18		
2085	11C7	円形	U字状	C	14	12	16		
2087	11C15	円形	U字状	A	18	18	20		
2089	11C3･8	楕円形	漏斗状	A	15	12	17		
2095	13C17	楕円形	漏斗状	A	20	16	28		
2097	13C17･18	円形	U字状	C	20	19	23		
2098	13C22	楕円形	漏斗状	A	22	18	23		
2101	13C18	楕円形	U字状	A	20	16	28		＞P2109
2104	13C25	長楕円形	U字状	C	28	18	32		＜P2108
2108	13E22･23	円形	階段状	B	40	36	22		
2109	13E22･23	円形	台形状	A	(25)	28	12		
2110	13E16･17	楕円形	漏斗状	A	26	18	26		
2111	14E16	楕円形	漏斗状	B	18	14	24		
2112	14E22	楕円形	U字状	A	25	20	21		
2113	14E11	楕円形	台形状	A	20	15	8		
2114	13E9	不整楕円形	弧状	A	24	20	10		
2115	14E17	円形	台形状	A	26	24	14		
2116	14E17	楕円形	半円状	A	24	19	13		
2117	13E5	楕円形	台形状	A	24	20	8		
2122	10B15,11B11	楕円形	U字状	C	24	17	30		
2124	14E18	円形	台形状	A	32	30	18		
2126	14E19	円形	漏斗状	C	20	19	24		
2127	14E8･9	楕円形	U字状	E	30	23	26		
2129	14E8	楕円形	U字状	C	24	20	30		
2136	12D4	円形	U字状	F	24	24	38		
2137	12D4	円形	階段状	A	40	36	32		
2138	12D5	円形	U字状	F	28	27	28		
2139	12D5	円形	U字状	C	20	20	36		
2141	12D15,13D11	円形	半円状	C	37	35	18		
2144	14D3	楕円形	U字状	B	28	23	28		

谷地遺跡(中世) 遺物観察表

土器・陶磁器

遺物観察表の( )は、土器・陶磁器の口径は推定値、他は残存値である

No.	遺構名	出土地点	出土層位	時期	種別	器種	調整等	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	備考
1	SE2001	4B10	1層	15C後半	瓦質土器	擂鉢		(2.9)			灰	体部片　内面卸し目1単位3条以上
2	SE2001	4B15	4層	Ⅵ期	珠洲焼	甕	内面口縁部～頸部ロクロナデ　胴部あて具とナデ 外面口縁部～頸部ロクロナデ　胴部平行タタキ	(7.7)	(41.0)		オリーブ黒	口縁部～胴部片
3	SE2001	4B10	2層	Ⅵ期	珠洲焼	甕	内面口縁部～頸部ロクロナデ　胴部ナデ 外面口縁部～頸部ロクロナデ　胴部平行タタキ	(11.5)	(51.0)		灰	口縁部～胴部片　外面口縁部～頸部の一部に平行タタキあり
4	SE2016	5B19	3層	15C後半	青磁	椀	ロクロ成形	(4.5)		(5.2)	暗灰	高台～体部下半残存　龍泉窯　体部細蓮弁文 高台内部に墨痕　割れ面に打欠き痕あり
5	SE2017	6D4		Ⅵ期	珠洲焼	擂鉢	ロクロ成形	(9.6)			灰	体部片　内面卸し目1単位9条
6	SK2041	8D13	11層	Ⅵ期	珠洲焼	甕	内面指ナデ　外面平行タタキ	(13.3)			灰	胴部片　内面に漆付着
7	SK2041	8D7	11層	Ⅵ期	珠洲焼	甕	内面口縁部～頸部ロクロナデ　胴部指ナデ 外面口縁部～頸部ロクロナデ　胴部平行タタキ	(10.0)	(51.0)		灰	口縁部～胴部片　内面胴部に漆付着
8	SD2005	4F9	2層	15C前半	青磁	小杯	ロクロ成形	(1.7)		(5.1)	灰	高台部片　外面底部を除き施釉 龍泉窯Ⅰ類に類似　内面底部に草花文あり
9	SD2042	8B23	26層	15C前半	白磁	皿	ロクロ成形	(1.9)		(4.0)	灰白	高台部～体部　外面は施釉部分と高台部を除き漆痕あり　割れ断面に漆接ぎの痕跡と一部に打ち欠き痕あり

金属製品

No.	遺構名	出土地点	出土層位	種別	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	遺存状況	備考
10	SE2001	4B15	4層	金属製品	鉄鍋	(5.0)	4.7	0.3	47.3	口縁部片	口縁部「く」の字　内耳鍋C型
11	SE2001	4B10	2層	金属製品	鉄釘	(5.8)	1.4	0.9	46.2	完形品	断面長方形　頭部上端は平坦

銭貨

No.	遺構名	出土地点	出土層位	銭名	初鋳年	直径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
12			Ⅰ層	寛永通寶	1,726	2.35	1.0	1.40	享保11年　試掘3Tより出土

石製品

No.	遺構名	出土地点	出土層位	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
13	SE2016	5B24	2層	砥石	16.7	(6.8)	3.4	627.9	砂岩	全面被熱　ススが付着
14	SK2041	8D7	11層	磨石	(6.9)	10.9	1.7	174.0	閃緑岩	扁平礫　一部被熱　用途不明
15	SE2001	4B15	6層	硯	(3.6)	4.5	1.3	21.1	シルト岩	裏面、側面は鋸の切出し痕あり　海部欠損　陸部に墨痕と溝状の加工痕あり
47	SE2016	5B19	2層	礫	20.0	17.0	5.0	2800.0	花崗岩	全面被熱　円形の扁平礫
48	SE2016	5B24	2層	礫	12.5	6.2	3.8	482.0	花崗岩	片面のみ被熱　炭化物が付着　円形の扁平礫
49	SE2016	5B19	3層	礫	25.0	14.0	10.0	7000.0	花崗岩	全面被熱　長楕円形の礫
50	SE2016	5B19	3層	礫	17.4	10.3	8.5	2200.0	花崗岩	片面のみ被熱　楕円形の礫

木製品

No.	遺構名	出土地点	出土層位	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	遺存状況	樹種	木取り	備考
16	SE2001	4B15	7層	梳櫛	3.7	7.8	1.0	歯部分半分欠損	イスノキ	割材	幅7.1cmに歯数46本
17	SE2001	4B15	7層	木片	11.0	1.2	0.8		針葉樹	割材	下端炭化　つけ木か
18	SE2001	4B15	7層	曲物側板	8.3	2.7	0.3		針葉樹	割材	釘穴1か所あり
19	SE2001	4B15	7層	不明木製品	15.7	2.1	2.0		広葉樹	丸材	一部樹皮残る
20	SE2001	4B15	7層	鉤状木製品	75.2	2.4	2.4		クリ	丸材	上部28.8cm 下部46.4cm
21	SE2001	4B15	7層	曲物側板	(27.4)	4.5	2.5	一部欠損	針葉樹	割材	綴じ目用の穴あり
22	SE2001	4B15	7層	下駄	21.5	8.4	3.6	差歯欠落	モクレン属	柾目	露卯下駄　差歯の枘穴4か所あり
23	SE2016	5B24	2層	棒状木製品	(18.5)	3.1	2.9	上・下端欠損	針葉樹	割材	下部炭化　上部に横線痕ほぼ全周あり　側面に溝あり　機織具か
24	SE2016	5B24	3層	棒状木製品	11.7	3.0	2.8	上・下端欠損	コナラ属	割材	上部に紐が巻かれる　側面に溝あり　機織具か
25	SE2016	5B19	3層	浮子(有頭状)	10.1	2.0	1.9		クリ	丸材	一部樹皮残る
26	SE2016	5B24	1層	下駄	17.7	9.0	3.1	一部欠損	モクレン属	割材	連歯下駄　一部炭化　歯底は片側が擦り減る
27	SE2016	5B24	2層	下駄	14.2	7.8	4.4	一部欠損	クリ	割材	連歯下駄
28	SE2016	5B19	3層	箱状木製品	10.1	8.0	1.5		マツ属	割材	釘穴6か所あり　竹釘2か所残存
29	SE2016	5B19	1層	大形木槽	51.4	33.6	6.5		マツ属	割材	小口面に加工痕あり
30	SE2016	5B24	1層	杭	33.7	4.7	4.9		広葉樹	芯持材	上端炭化
31	SE2016	5B19	1層	棒状木製品	33.4	2.6	2.1		広葉樹	割材	下端炭化　一部樹皮残る
32	SE2016	5B19	1層	杭状木製品	60.3	3.7	4.0		広葉樹	丸材	下端炭化　一部樹皮残る
33	SE2016	5B19	1層	棒状木製品	23.2	2.6	1.2		クリ	芯持材	腐食著しい
34	SE2016	5B19	1層	建築部材	32.2	19.2	5.4		針葉樹	割材	上部炭化　工具痕あり
35	SE2016	5B19	2層	建築部材	68.4	13.0	3.2		広葉樹	割材	側面炭化
36	SE2016	5B19	1層	建築部材	32.7	12.7	4.0		広葉樹	割材	左側面刃物痕あり　正面炭化
37	SE2016	5B19	1層	建築部材	15.9	8.0	3.4		広葉樹か	割材	両端と裏面炭化
38	SE2016	5B24	1層	建築部材	51.4	15.6	7.6		針葉樹	柾目	一部炭化
39	SE2016	5B24	1層	建築部材	97.5	13.0	6.8		クリ	割材	正面上半部炭化
40	SE2016	5B24	1層	建築部材	31.6	9.3	3.6		針葉樹	割材	ほぼ全面炭化
41	SE2016	5B19	1層	建築部材	32.5	10.3	9.8		マツ属	芯持材	全面炭化
42	SE2016	5B19	1層	建築部材	39.6	13.4	7.4		広葉樹	割材	工具痕あり　両端と側面炭化
43	SE2016	5B19	1層	建築部材	45.6	8.8	6.2		マツ属	割材	割面と上端部炭化　腐食著しい
44	SE2016	5B19	2層	杭状木製品	15.9	5.0	4.0		広葉樹	芯持材	全面炭化
45	SE2016	5B24	1層	建築部材	77.6	14.1	14.0		広葉樹	芯持材	約半分炭化
46	SE2016	5B19	2層	杭	23.3	5.8	6.5	完形	広葉樹	芯持材	全面炭化　側面工具痕あり
51	SK2041	8D12	11層	種子	3.3	2.1	1.6				モモの種子
52	SK2041	8D8	11層	棒状木製品	116.0	1.0	1.0	上端は欠損		丸材	下端を斜めに切断

八太郎遺跡 遺構観察表

水場遺構 (SX)

遺構No.	グリッド	形状		規模(cm)			長軸方向	出土遺物	備考
		平面形	断面形	長軸	短軸	深さ			
SX1	3E22～25, 3F2～5・8～10	長楕円形	台形状	592	304	40	N22° E	珠洲焼(甕)、土師質土器(皿)、砥石、被熱礫、箸状・板状・棒状・杭状木製品、梳櫛、コモヅチ、人形、曲物(側板・底板)、箱物(側板)、蓋、折敷、加工材、切片、縄、材	取水部粘土貼付 SD1より新しい

遺構No.	グリッド	杭傾斜		出土遺物	遺構No.	グリッド	杭傾斜		出土遺物
		角度	方向				角度	方向	
杭10	3F2	16°	N0°	杭(割材)	杭29	3F2	14°	N118° W	杭(割材)
杭11	3F2	25°	N68° W	杭(割材)	杭30	3F2	11°	N136° W	杭(割材)
杭12	3F2	22°	N34° W	杭(半割材)	杭31	3F2	11°	N66° E	杭(割材)
杭13	3F5	16°	N116° W	杭(割材)	杭33	3E24	24°	N96° W	杭(丸材)
杭14	3F4	12°	N79° W	杭(割材)	杭34	3E23	13°	N74° W	杭(半割材)
杭15	3F4	15°	N90° E	杭(割材)	杭35	3E23	15°	N52° W	杭(半割材)
杭16	3E22	25°	N76° E	杭(丸材)	杭36	3E23	17°	N55° W	杭(半割材)
杭17	3E23	11°	N171° W	杭(割材)	杭37	3E22	7°	N80° E	杭(割材)
杭18	3F2	12°	N170° W	杭(丸材)	杭38	3F2	19°	N170° E	杭(丸材)
杭19	3F2	10°	N155° W	杭(丸材)	杭39	3F2	20°	N167° W	杭(割材)
杭21	3E22	12°	N96° E	杭(割材)	杭40	3F2	14°	N108° W	杭(丸材)
杭22	3E22	16°	N91° E	杭(半割材)	杭41	3F2	11°	N174° E	杭(丸材)
杭23	3E22	16°	N90° E	杭(割材)	杭42	3F2	12°	N167° E	杭(丸材)
杭24	3E22	14°	N140° E	杭(割材)	杭43	3E23	13°	N149° W	杭(割材)
杭25	3F5	12°	N150° E	杭(割材)	杭45	3E22	10°	N89° W	杭(割材)
杭26	3F5	15°	N86° E	杭(割材)	杭46	3F2	15°	N71° E	杭(割材)
杭27	3E22	16°	N10° E	杭(割材)	杭47	3E23	29°	N91° W	杭(割材)
杭28	3F2	25°	N150° W	杭(半割材)					

杭

遺構No.	グリッド	杭傾斜		出土遺物	他遺構との重複関係
		角度	方向		
3	4E20	11°	N12° W	杭(割材)	
4	3F8	0°	鉛直	杭(割材)	
5	5E2	0°	鉛直	杭(丸材)	
6	4E10	16°	N65° W	杭(丸材)	

遺構No.	グリッド	杭傾斜		出土遺物	他遺構との重複関係
		角度	方向		
7	5E1	25°	N47° E	杭(丸材)	
8	2E7	46°	N67° E	杭(割材)	
9	4E23	15°	N60° E	杭(割材)	
20	4E23	27°	N64° E	杭(半割材)	

ピット (P)

遺構No.	グリッド	形状		覆土分類	規模(cm)			柱根傾斜		出土遺物	他遺構との重複関係
		平面形	断面形		長軸	短軸	深さ	角度	方向		
2	2E13	円形	U字状	B	(55)	(23)	62	0°	鉛直	柱か(丸材)	
48	2E23,2F3	楕円形	U字状	A	30	22	38	0°	鉛直	柱か(丸材)	

自然流路 (SD)

遺構No.	グリッド	出土層位	断面形	規模(m)			出土遺物	他遺構との重複関係
				長さ	幅	深さ		
1	2・3・5E,2～5F	Ⅵ層	弧状	29.7	1.3～2.5	0.35	加工材(122)	＜SX1
2	2・3・5D,3～5E	Ⅵ層	弧状	33.3	1.5～4.3	0.35		

八太郎遺跡 遺物観察表(1)

遺物観察表の( )は、土器・陶磁器の口径は推定値、他は残存値である

【須恵器胎土分類】 胎土A：胎土粗く、石英・長石・金雲母を多く含む 胎土B：胎土精良、白色粒子を多く含む
胎土C：胎土精良、石英・長石の小粒子を少量含む

土器・陶磁器

No.	遺構名	出土地点	出土層位	時期	種別	器種	調整等	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	備考
1	SX1	3F3	7層	Ⅱ期	珠洲焼	甕	外面平行タタキ 内面あて具	(8.8)			オリーブ黒	
2	SX1	3F2	17層	13～14C	土師質土器	皿	手づくね成形 底部外面ナデ	(1.0)		8.0	黄橙	在地
3			Ⅲ層	Ⅱ期	珠洲焼	甕	外面平行タタキ 内面あて具	(6.1)			灰	試掘5Tより出土
4			Ⅲ層	Ⅳ期	珠洲焼	甕	外面平行タタキ 内面あて具	(4.8)			灰	外面自然釉 試掘11Tより出土
5		2E5	Ⅲ層	Ⅱ～Ⅲ期	珠洲焼	甕・壺T種	外面平行タタキ 内面あて具	(9.6)			灰	試掘6Tより出土 包含層出土破片と接合
6			Ⅱ層	Ⅳ期	珠洲焼	擂鉢	ロクロ成形	(3.0)			黄灰	内面卸し目1単位4条 試掘6Tより出土
7		3F2	Ⅲ層	Ⅱ期	珠洲焼	擂鉢	ロクロ成形	(8.4)	(27.8)		灰	内面卸し目1単位10条
8			Ⅱ層	13～14C	青白磁	合子		1.6	(8.0)	(7.0)	淡青白	蓋 側面蓮弁文 表採
9		5E17	Ⅲ層	Ⅳ期	須恵器	大甕	外面平行タタキ 内面同心円あて具	38.8	(23.0)		暗オリーブ灰	胎土A 試掘4Tより出土 包含層出土破片と接合
10			Ⅱ層		須恵器	壺	ロクロ成形	(5.1)			灰	表採
11		2E23	Ⅲ層	17C代	肥前系磁器	椀	ロクロ成形	(3.7)	(12.0)		灰白	呉須透明釉 染付 唐草文
12		3E22	Ⅲ層	17C代	肥前系磁器	椀	ロクロ成形	(3.0)			灰白	呉須透明釉 染付

八太郎遺跡 遺物観察表(2)

石製品

No.	遺構名	出土地点	出土層位	種 別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 質	備 考
13	SX1	3F3	7層	砥石	18.1	12.8	4.3	1400.0	砂岩	
14	SX1	3F3	7層	礫	12.1	10.6	5.8	920.5	花崗岩	炭化物付着
15		2E15	Ⅲ層	砥石	(6.9)	4.0	2.9	94.6	流紋岩	
16		3E25	Ⅲ層	砥石	14.8	(9.8)	5.0	1145.4	砂岩	下面に炭化物付着
17			Ⅰ層	不定形石器	5.3	4.0	1.2	18.9	硬質頁岩	縄文時代か　試掘1Tより出土
18			Ⅲ層	石錘	12.8	8.8	1.9	384.3	角閃石片麻岩	縄文時代か　試掘11Tより出土

木製品 (1)

No.68～121・123の「出土層位」覧は検出層位

No.	遺構名	出土地点	出土層位	種 別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	遺存状況	樹 種	木取り	備 考
19	SX1	3F5	14層	箸状木製品	20.2	0.5	0.4	完形	スギ	削出	
20	SX1	3F2	7層	箸状木製品	(11.1)	0.7	0.6	上部欠損		削出	
21	SX1	3F3	7層	箸状木製品	(6.3)	0.7	0.5	上端欠損		削出	
22	SX1	3F3	7層	箸状木製品	(5.7)	0.7	0.5	上端欠損		削出	
23	SX1	3F3	7層	梳櫛	4.4	(4.0)	1.0		イスノキ	削出	
24	SX1	3E24	7層	コモヅチ	7.4	2.4	2.1	完形	クリ	丸材	
25	SX1	3F4	6層	コモヅチ	9.4	3.6	3.0		ハリギリ	丸材	
26	SX1	3F3	7層	コモヅチ	18.7	3.8	2.4			丸材	一部樹皮残る
27	SX1	3F3	7層	人形	15.8	1.5	1.7	完形	クリ	丸材	
28	SX1	3E23	7層	曲物底板	(14.2)	(1.8)	0.7	破片	スギ	柾目	刃物痕あり　側面釘穴　鳥形に加工か
29	SX1	3E23	7層	蓋	(13.6)	(1.3)	0.4	破片	スギ	柾目	中央に釘穴2か所あり
30	SX1	3F3	6層	折敷	(10.6)	(2.9)	0.2		スギ	柾目	釘穴1か所あり　No.31と同一個体
31	SX1	3F3	6層	折敷	(11.6)	(2.2)	0.3		スギ	柾目	No.30と同一個体
32	SX1	3F4	6層	箱物側板	(6.6)	3.2	0.4	破片	スギ	柾目	外面黒漆
33	SX1	3E23	7層	曲物側板	(14.0)	3.7	0.3	破片	スギ	板目	炭化物付着
34	SX1	3E23	7層	曲物側板	(14.1)	2.8	0.4	破片		板目	黒色範囲あり
35	SX1	3F7	Ⅲ層	曲物側板	(7.1)	2.6	0.6	破片		柾目	
36	SX1	3F3	7層	曲物側板	(31.5)	5.4	0.6			板目	
37	SX1	3F3	7層	板状木製品	(13.4)	4.7	0.5			柾目	炭化2か所あり
38	SX1	3E23	7層	板状木製品	(11.0)	3.3	0.3	破片		柾目	
39	SX1	3F8	7層	板状木製品	(9.6)	2.0	0.3	破片		板目	
40	SX1	3E24	7層	板状木製品	(12.1)	2.1	0.3	破片		板目	
41	SX1	3E23	7層	板状木製品	(14.1)	3.2	0.6	破片		板目	
42	SX1	3E23	7層	板状木製品	(14.9)	2.6	0.6	破片		板目	
43	SX1	3F3	7層	板状木製品	(13.2)	2.0	3.0	破片		板目	
44	SX1	3F3	7層	板状木製品	(24.8)	2.0	0.5	破片		板目	炭化物付着
45	SX1	3F4	6層	棒状木製品	(6.3)	0.6	0.5	下端欠損		割材	
46	SX1	3F3	7層	加工材	(7.4)	0.7	0.5	下端欠損		柾目	
47	SX1	3F4	7層	切片	20.5	8.9	2.4			板目	
48	SX1	3E24	7層	切片	15.0	5.5	1.1			板目	
49	SX1	3F4	6層	加工材	13.1	3.9	3.8			丸材	
50	SX1	3F3	7層	杭状木製品	(11.8)	5.4	2.4	先端のみ残存		半割材	
51	SX1	3F4	6層	加工材	(34.8)	1.1	1.1	上端欠損		丸材	
52	SX1	3F3	7層	杭状木製品	(50.8)	3.2	3.4			丸材	
53	SX1	3F4	6層	加工材	24.5	6.8	3.2			柾目	上端炭化
54	SX1	3F3	7層	杭状木製品	23.8	4.3	4.7			割材	下端炭化
55	SX1	3E23	17層	材	31.8	3.1	1.3			板目	下端炭化　木組みの裏込めに使用
56	SX1	3F3	7層	材	20.2	1.8	0.6			柾目	下端炭化
57	SX1	3E23	17層	材	32.3	1.6	1.6			丸材	横木に使用　下端炭化
58	SX1	3F3	7層	材	(66.0)	2.7	2.6	上端欠損		丸材	下端炭化
59	SX1	3F2	17層	縄	11.0	1.8	1.8				右撚り
60	SX1	3E24	17層	加工材	30.0	13.2	13.4			丸材	木組みの裏込めに使用
61	SX1	3E23	17層	加工材	29.5	11.9	11.0			丸材	木組みの裏込めに使用
62	SX1	3F3	7層	加工材	25.6	12.1	8.3			割材	
63	SX1	3E23	17層	杭状木製品	(64.6)	5.4	3.0	先端・上端欠損		割材	横木に使用
64	SX1	3F3	7層	杭状木製品	(61.6)	4.3	3.7	先端・上端欠損		割材	
65	SX1	3F3	7層	杭状木製品	(73.1)	5.1	5.0	上端欠損		丸材	
66	SX1	3F3	7層	杭状木製品	(42.3)	4.3	4.7	上端欠損		丸材	
67	SX1	3F4	7層	杭状木製品	(26.6)	4.0	3.3	先端・上端欠損		丸材	
68	SX1	3F2	Ⅲ層	杭	(74.2)	4.0	4.0	上端欠損	クリ	割材	杭10
69	SX1	3F2	Ⅲ層	杭	(53.6)	5.9	4.2	上端欠損	クリ	割材	杭11
70	SX1	3F2	Ⅲ層	杭	(33.8)	5.0	2.9	先端・上端欠損		半割材	杭12
71	SX1	3F5	Ⅲ層	杭	(85.0)	6.5	4.8	上端欠損		割材	杭13
72	SX1	3F4	Ⅲ層	杭	(63.8)	2.9	6.0	上端欠損		割材	杭15
73	SX1	3E23	Ⅲ層	杭	(61.4)	7.5	5.0	上端欠損		割材	杭17
74	SX1	3F2	Ⅲ層	杭	(53.0)	4.5	4.5	先端・上端欠損		丸材	杭18
75	SX1	3F2	Ⅲ層	杭	(46.5)	4.2	3.1	上端欠損		丸材	杭19
76	SX1	3E22	Ⅲ層	杭	(45.3)	5.1	5.2	上端欠損		割材	杭21
77	SX1	3E22	Ⅲ層	杭	(43.0)	6.2	4.1	上端欠損		半割材	杭22
78	SX1	3E22	Ⅲ層	杭	(36.7)	5.4	2.9	上端欠損		割材	杭23

八太郎遺跡 遺物観察表(3)
木製品 (2)

No.	遺構名	出土地点	出土層位	種　別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	遺存状況	樹　種	木取り	備　　考
79	SX1	3E22	Ⅲ層	杭	(70.0)	5.6	4.7	上端欠損		割材	杭24
80	SX1	3F5	Ⅲ層	杭	(65.0)	4.7	3.6	上端欠損		割材	杭25
81	SX1	3F5	Ⅲ層	杭	(87.0)	5.4	3.3	上端欠損		割材	杭26
82	SX1	3E22	Ⅲ層	杭	(16.7)	4.6	4.1	先端･上端欠損		割材	杭27
83	SX1	3F2	Ⅲ層	杭	(34.1)	4.5	2.6	上端欠損		半割材	杭28
84	SX1	3F2	Ⅲ層	杭	90.0	6.7	4.6			割材	杭29
85	SX1	3F2	Ⅲ層	杭	(118.0)	6.0	4.1	上端欠損		割材	杭30
86	SX1	3F2	Ⅲ層	杭	74.2	6.3	4.7			割材	杭31
87	SX1	3E24	Ⅲ層	杭	(97.0)	5.8	5.3	上端欠損	クリ	丸材	杭33
88	SX1	3E23	Ⅲ層	杭	96.0	84.0	4.3		クリ	半割材	杭36　杭34と接合
89	SX1	3E23	Ⅲ層	杭	97.3	9.0	5.3		クリ	半割材	杭34　杭36と接合
90	SX1	3E23	Ⅲ層	杭	(103.0)	5.8	4.0	上端欠損		半割材	杭35
91	SX1	3E22	Ⅲ層	杭	(51.8)	49.5	3.8	上端欠損		割材	杭37
92	SX1	3F2	Ⅲ層	杭	(61.0)	3.7	3.8	上端欠損		丸材	杭38
93	SX1	3F2	Ⅲ層	杭	(68.5)	4.7	4.0	上端欠損	クリ	割材	杭39
94	SX1	3F2	Ⅲ層	杭	(21.7)	3.0	2.6	先端･上端欠損	クリ	丸材	杭40
95	SX1	3F2	Ⅲ層	杭	(50.6)	4.5	4.1	上端欠損	クリ	丸材	杭42
96	SX1	3E23	Ⅲ層	杭	(59.6)	4.3	5.4	上端欠損		割材	杭43
97	SX1	3E22	Ⅲ層	杭	99.0	7.6	3.3		クリ	割材	杭45　杭14と接合
98	SX1	3F4	Ⅲ層	杭	(80.4)	5.4	3.1	上端欠損	クリ	割材	杭14　杭45と接合
99	SX1	3F2	Ⅲ層	杭	(103.0)	7.2	5.2	上端欠損		割材	杭46
100	SX1	3E23	Ⅲ層	杭	94.6	7.1	5.2			割材	杭47
101	杭3	4E20	Ⅲ層	杭	(33.8)	5.5	3.8	上端欠損		割材	
102	杭4	3F8	Ⅲ層	杭	(20.0)	5.7	3.5	上端欠損		割材	
103	杭6	4E10	Ⅳ層	杭	(23.2)	3.8	3.7	上端欠損		丸材	
104	杭8	2E7	Ⅴ層	杭	(69.4)	7.0	5.6	上端欠損		割材	
105	杭9	4E23	Ⅴ層	杭	(38.2)	3.8	3.0	上端欠損	クリ	割材	
106	杭20	4E23	Ⅴ層	杭	(41.7)	4.7	2.8	上端欠損		半割材	
107		3F2	Ⅲ層	箸状木製品	(6.8)	0.6	0.6	先端･上端欠損		削出	
108		3E7	Ⅲ層	箸状木製品	(5.2)	0.5	0.5	先端･上端欠損		削出	
109		3F3	Ⅲ層	箸状木製品	(4.9)	0.7	0.5	先端･上端欠損		削出	
110		3F3	Ⅲ層	棒状木製品	8.1	0.6	0.5				
111		5F7	Ⅲ層	漆塗椀	口：(7.3)	高：(1.0)	底：4.3	底部のみ残存	ブナ属	柾目	内外面黒漆　高台欠損
112		4E17	Ⅲ層	曲物底板	(21.0)	(6.9)	1.1	破片		柾目	
113		3E23	Ⅲ層	曲物底板	(14.1)	(2.9)	0.5	破片		柾目	
114		4E19	Ⅲ層	曲物底板	(18.0)	(4.0)	0.9	破片		柾目	側面に枘穴あり
115		3E4	Ⅲ層	曲物底板	14.3	(1.4)	0.5			柾目	刃物痕あり
116		4F5	Ⅲ層	曲物側板	(5.5)	2.4	0.6	破片		柾目	格子目状のケビキあり
117		2E25	Ⅲ層	箱物底板	(10.6)	(2.9)	0.5	破片		柾目	端部釘穴1か所あり
118		5E17	Ⅲ層	板状木製品	(14.1)	(2.9)	0.6	破片		柾目	刃物痕あり
119		3E20	Ⅲ層	板状木製品	(8.6)	3.5	0.4	破片		柾目	
120		4F1	Ⅲ層	部材	(11.4)	(1.1)	0.9	破片		板目	刃物痕あり　枘穴か
121		3F9	Ⅲ層	片刃状木製品	9.9	3.1	0.5			柾目	刃物痕あり
122	SD1	5F1	1層	加工材	9.3	8.9	5.6		クリ	割材	多面体加工
123		4E25	Ⅲ層	杭状木製品	44.1	4.7	3.9			丸材	上端炭化

銭貨

No.	遺構名	出土地点	出土層位	銭　名	国名	初鋳年	直径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　　考
124			Ⅱ層	至道元寶	北宋	995	2.4	0.1	3.4	草書　表採
125			Ⅱ層	祥符通寶	北宋	1009	2.5	0.1	3.4	真書　表採
126			Ⅰ層	寛永通寶		1639	2.4	0.1	3.6	試掘1Tより出土

田屋道遺跡 II 遺構観察表(1)
掘立柱建物 (SB) (1)

桁行の( )は間数が違うときに記載
規模の( )は残存値

SB37		側柱建物	梁間 1間 1.28m				桁行 5間(6間) 12.26m				面積 16㎡				長軸 N21° E	
遺構No.	遺構種	グリッド	形状		覆土				規模(cm)			柱根・杭傾斜		出土遺物		他遺構との重複関係
			平面形	断面形	分類	細分類 a	b	c	d	長軸	短軸	深さ	角度	方向	柱根	礎盤	その他	
1038	P	18F17・22	円形	台形状	F		2	3		32	31	13					珠洲焼(擂鉢)	
1062	P	19F16	楕円形	台形状	C		2	2	1	30	25	12						
1063	P	18F20	楕円形	半円状	F		2	2		45	33	21						＞P1060
1064	P	18F18・19	円形	台形状	F		2	3	2	40	39	39				○		
1065	P	18F17	円形	半円状	F		2	3		44	41	35						
1066	P	18F16	円形	半円状	C		2	2	1	42	38	34						
1067	P	17F20	楕円形	台形状	F		2	3		30	22	6						
1068	P	17F20・25	円形	台形状	F		2	3		37	30	10				○		
1069	P	18F16・21	円形	半円状	F		2	3		30	28	12						
1070	P	18F17	楕円形	台形状	F		2	3		41	30	11				○		
1071	P	18F18	円形	階段状	F		2	3		31	29	15				○		
1072	P	18F20	隅丸方形	台形状	F		2	3		29	25	17				○		＞P1100
1073	P	19F16	円形	半円状	F		1	1		25	22	19						

SB38		側柱建物	梁間 1間 2.66m				桁行 5間(4間) 9.97m				面積 26㎡				長軸 N21° E	
遺構No.	遺構種	グリッド	形状		覆土				規模(cm)			柱根・杭傾斜		出土遺物		他遺構との重複関係
			平面形	断面形	分類	細分類 a	b	c	d	長軸	短軸	深さ	角度	方向	柱根	礎盤	その他	
1016	P	18F25	楕円形	台形状	E					22	18	15						
1018	P	18F24	円形	台形状	C					26	22	12						
1021	P	18F14・19	円形	漏斗状	F		2	3		25	22	20						
1030	P	18F23	長楕円形	U字状	F		2	3		31	(19)	34					種子	＜P1029
1033	P	18F12・17	円形	弧状	F					46	40	8						＜P1032
1036	P	18F22	円形	U字状	F		2	3		32	31	33				○		
1041	P	18F21	円形	漏斗状	C					30	28	23						
1047	P	17F25	楕円形	台形状	E					27	20	8						＜P1046
1049	P	17F20	楕円形	台形状	F		2	3		23	17	15						
1059	P	18F15・20	円形	V字状	F					21	18	11						＞P1060
1172	P	18F13・18		階段状	B					(36)	54	18						＜P1026

SB39		側柱建物	梁間 1間 1.98m				桁行 3間 6.85m				面積 14㎡				長軸 N24° E	
遺構No.	遺構種	グリッド	形状		覆土				規模(cm)			柱根・杭傾斜		出土遺物		他遺構との重複関係
			平面形	断面形	分類	細分類 a	b	c	d	長軸	短軸	深さ	角度	方向	柱根	礎盤	その他	
1026	P	18F18	不整楕円形	階段状	B					71	57	16				○		＞P1172
1029	P	18F23	円形	階段状	B					35	31	26						＞P1030
1032	P	18F17	隅丸方形	台形状	F		2	3		45	44	14						＞P1033
1037	P	18F22	楕円形	半円状	F		2	3		22	18	17						
1040	P	18F16	円形	弧状	F					44	42	8				○		
1042	P	18F21	隅丸方形	台形状	F					20	19	12						
1050	P	17F20	楕円形	弧状	F					30	25	4				○		
1053	P	17F25	円形	弧状	F		2	3		30	29	7				○		

SB40		側柱建物	梁間 2間 2.65m				桁行 3間(4間) 4.82m				面積 13㎡				長軸 N20° E	
遺構No.	遺構種	グリッド	形状		覆土				規模(cm)			柱根・杭傾斜		出土遺物		他遺構との重複関係
			平面形	断面形	分類	細分類 a	b	c	d	長軸	短軸	深さ	角度	方向	柱根	礎盤	その他	
983	P	19F12・13	長楕円形	階段状	F		2	3		45	24	40						
984	P	19F12	円形	半円状	F		1	3		34	32	34					炭化米	
989	P	19F18	円形	階段状	C					25	21	25						
991	P	19F18	円形	階段状	F		1	2		21	20	44			○(打ち込み柱)			
998	P	19F17	円形	漏斗状	F		2	3	2	34	32	32					珠洲焼(甕)	
1001	P	19F17	円形	階段状	F		1	3		34	30	18						
1002	P	19F16・21	円形	階段状	F		1	2	2	28	28	55						
1005	P	19F11	円形	台形状	B					26	24	16						
1010	P	18F15	楕円形	階段状	F		2	3		40	32	37						
1012	P	18F20・25	円形	台形状	C					32	28	23						

SB41		側柱建物	梁間 2間 4.13m				桁行 3間 7.42m				面積 31㎡				長軸 N56° W	
遺構No.	遺構種	グリッド	形状		覆土				規模(cm)			柱根・杭傾斜		出土遺物		他遺構との重複関係
			平面形	断面形	分類	細分類 a	b	c	d	長軸	短軸	深さ	角度	方向	柱根	礎盤	その他	
299	P	16E21	不整楕円形	U字状	C		2	2	2	47	37	40						
308	P	16F3・8	不整円形	U字状	C		2	3	2	29	27	49						
314	P	16F1	不整楕円形	台形状	F					33	25	31						
315	P	16E23	不整楕円形	台形状	C	1				29	24	18						
1086	P	15F20,16F16	楕円形	箱状	F		2	3		21	16	10						
1091	P	16F16・17	隅丸方形	U字状	F		2	3	2	24	23	29					礫	＞SD289
1161	P	16F17・18	楕円形	U字状	C					27	21	27						
1164	P	16F13	長楕円形	U字状	F					27	17	30			○			＞SD289

田屋道遺跡 II 遺構観察表(2)

掘立柱建物 (SB) (2)

SB28		総柱建物	梁間 2間 4.26m				桁行 2間 4.79m				面積 20㎡					長軸 N18° E	
遺構No.	遺構種	グリッド	形状		覆土					規模(cm)			柱根・杭傾斜		出土遺物			他遺構との重複関係
			平面形	断面形	分類	細分類 a	b	c	d	長軸	短軸	深さ	角度	方向	柱根	礎盤	その他	
222	P	19F12・13		漏斗状	C			3	1	(40)		45						
224	P	19F14	楕円形	階段状	F					37	26	54	11°	N114° E	○(打ち込み杭)			
318	P	19F2	不整円形	U字状	A			2		26	25	36	0°	鉛直	○			＞SE326
368	P	19F9	円形	階段状	C		1	2		23	20	35						＜P465
469	P	19F3・4	不整円形	U字状	C		2	2		30	27	34						＞P470
646	P	19F7	不整円形	U字状	C		2	2		25	21	40	7°	N114° E	○			
711	P	19F6	円形	U字状	C		2	3		28	27	34				○		
713	P	19F1	円形	半円状	C		2	2		32	28	22						＞P787
1006	P	19F11	楕円形	階段状	F		1	2		30	25	22						

ピット列

ピット列1		形状		覆土					規模(cm)			柱根・杭傾斜		出土遺物			長軸 N24° E
遺構No.	グリッド	平面形	断面形	分類	細分類 a	b	c	d	長軸	短軸	深さ	角度	方向	柱根	礎盤	その他	他遺構との重複関係
1013	18F20	円形	台形状	F		2	3		44	40	22						
1020	18F19	不整形	階段状	F		2	3		66	51	15				○	礫	
1031	18F18	楕円形	階段状	F		2	3		44	32	10						
1039	18F16	長楕円形	階段状	B					45	30	10				○		

ピット列2		形状		覆土					規模(cm)			柱根・杭傾斜		出土遺物			長軸 N24° E
遺構No.	グリッド	平面形	断面形	分類	細分類 a	b	c	d	長軸	短軸	深さ	角度	方向	柱根	礎盤	その他	他遺構との重複関係
1078	18F21	楕円形	半円状	F		2	2	1	26	20	20						
1081	18F24	円形	階段状	F		2	3		34	29	22						＞P1082
1083	18F23	隅丸方形	階段状	B					37	34	20						
1084	18F22	円形	箱状	C					26	26	26						
1085	17F25	楕円形	台形状	C		2	3		25	20	20						

掘立柱建物 (前年度SB) (1)

SB5(6)		側柱建物	梁間 2間 3.06m				桁行 4間(3間) 7.12m				面積 21㎡					長軸 N76° W	
遺構No.	遺構種	グリッド	形状		覆土					規模(cm)			柱根・杭傾斜		出土遺物			他遺構との重複関係
			平面形	断面形	分類	細分類 a	b	c	d	長軸	短軸	深さ	角度	方向	柱根	礎盤	その他	
147	P	12D19	楕円形	半円状	F					45	32	17						
148	P	12D24	長楕円形	半円状	F					29	16	15						
162	P	12E10	長楕円形	台形状	F					38	24	16						
163	P	13E6	長楕円形	台形状	B			2	1	40	25	12						
166	P	12E10	不整楕円形	半円状	F					31	25	15						
168	P	13D21,13E1	長楕円形	台形状	B					20	13	14						
172	P	12E4	円形	半円状	F					17	15	10						
178	P	13E1	不整円形	箱状	F					24	17	13						
183	P	12D25	長楕円形	階段状	C			2	2	30	20	20						
184	P	12D20	楕円形	U字状	F					17	14	24						
185	P	12D20,13D11・16	不整円形	階段状	F					34	32	12						
200	P	13D16・21	長楕円形	半円状	C	1				37	20	20						＜SE181
235	P	12E5	長楕円形	弧状	B		2	3		31	19	7						

SB7(8)		側柱建物	梁間 1間 3.40m				桁行 3間 7.15m				面積 24㎡					長軸 N76° W	
遺構No.	遺構種	グリッド	形状		覆土					規模(cm)			柱根・杭傾斜		出土遺物			他遺構との重複関係
			平面形	断面形	分類	細分類 a	b	c	d	長軸	短軸	深さ	角度	方向	柱根	礎盤	その他	
149	P	12D25,12E5	円形	U字状	A			2		26	25	30	30°	N105° E	○			
161	P	13E11	楕円形	半円状	F					35	24	17						
164	P	13E2	長楕円形	台形状	B	2				28	18	11						
167	P	13E1	楕円形	台形状	F					27	22	26						
169	P	13E13	円形	半円状	F		1	2		25	22	17						
170	P	13E16	楕円形	半円状	F					36	26	27						
171	P	13E18	不整円形	半円状	F					25	22	12						
174	P	13D22	不整円形	台形状	B		2	2		25	25	34						

SB15a		側柱建物	梁間 1間 2.44m				桁行 3間(4間) 7.03m				面積 17㎡					長軸 N15° E	
遺構No.	遺構種	グリッド	形状		覆土					規模(cm)			柱根・杭傾斜		出土遺物			他遺構との重複関係
			平面形	断面形	分類	細分類 a	b	c	d	長軸	短軸	深さ	角度	方向	柱根	礎盤	その他	
371	P	19E25	円形	階段状	F		2			27	27	23						
372	P	19F10	円形	階段状	F		1			26	26	33						
380	P	19F10	円形	U字状	F					22	20	39						
381	P	20E21	楕円形	箱状	B		2	2		37	28	36				○		
384	P	20F1	隅丸方形	V字状	A					29	26	22						
465	P	19F8・9	隅丸長方形	階段状	C		1	2		35	25	30						＞P368
470	P	19E23,19F3・4	長楕円形	漏斗状	C		2	2		49	29	30	7°	N77° W	○			＜P469
585	P	20F2	不整円形	階段状	C		1	3	1	35	30	28						
603	P	20E22	円形	階段状	C		2	1		31	28	24						

田屋道遺跡 II 遺構観察表(3)
掘立柱建物 (前年度SB) (2)

SB15b	側柱建物	梁間 1間 2.36m			桁行 4間(7間) 8.54m					面積 19㎡					長軸 N20° E		
遺構No.	遺構種	グリッド	形状		覆土					規模(cm)			柱根・杭傾斜		出土遺物			他遺構との重複関係
			平面形	断面形	分類	細分類 a	b	c	d	長軸	短軸	深さ	角度	方向	柱根	礎盤	その他	
361	P	19F3	円形	U字状	E		2	3		(20)	20	34						＞P402 ＜P362
370	P	19E24・25	円形	階段状	B		1	2	3	35	29	30				○		
375	P	19E25	円形	半円状	C					26	(14)	21						＜P374
379	P	19F5	円形	台形状	F					25	25	16						
448	P	20F1	円形	台形状	E	2				21	21	30						
461	P	20F1	円形	階段状	A					25	21	28						
462	P	20E21	円形	U字状	F					26	26	34						
625	P	19F3	不整形	階段状	B		1	2		38	33	44						
627	P	19F4・5	不整円形	台形状	B					39	33	36						
655	P	19E22	円形	階段状	B		1	3		23	28	24						
657	P	19E23	円形	U字状	F					18	17	34						＜P365
715	P	19F2	円形	弧状	A					27	23	5						
740	P	19F4	楕円形	階段状	C		1	2		20	16	16						

SB17	側柱建物	梁間 1間 2.58m			桁行 4間 8.37m					面積 21㎡					長軸 N70° W		
遺構No.	遺構種	グリッド	形状		覆土					規模(cm)			柱根・杭傾斜		出土遺物			他遺構との重複関係
			平面形	断面形	分類	細分類 a	b	c	d	長軸	短軸	深さ	角度	方向	柱根	礎盤	その他	
480	P	20D19	不整円形	台形状	A					46	44	6					礫	
481	P	20D24	円形	半円状	E					33	30	14						
482	P	20E4	円形	弧状	A					28	24	10						
483	杭	20D17											3°	N67° W	○			
484	P	20D22・23,20E2	楕円形	半円状	C		1	2		44	32	12						
485	P	20E2・3	円形	半円状	F					36	33	12						
520	P	20E7・8	隅丸長方形	階段状	C		1	1		32	21	24						＞P521
522	P	20E13	不整円形	台形状	B		1	2		33	29	22						
530	P	20E9	円形	半円状	F			2		29	26	19	20°	N36° E	○			
532	P	20E14	隅丸長方形	箱状	C		2	3		32	27	21						

SB19	側柱建物	梁間 1間 3.93m			桁行 3間 8.36m					面積 32㎡					長軸 N74° W		
遺構No.	遺構種	グリッド	形状		覆土					規模(cm)			柱根・杭傾斜		出土遺物			他遺構との重複関係
			平面形	断面形	分類	細分類 a	b	c	d	長軸	短軸	深さ	角度	方向	柱根	礎盤	その他	
696	P	25B19	円形	U字状	B		1	2		15	14	16						
765	P	25C15	隅丸方形	台形状	B		2	3		27	24	14						
773	P	25C5・10	隅丸方形	台形状	B		2	2		32	29	16						
774	P	26C1・2	楕円形	台形状	B		2	2		28	22	22						
775	P	26B21	楕円形	漏斗状	B		2	2		30	24	24						
776	P	25B24・25	隅丸方形	U字状	B		2	2		35	31	36						
900	P	26C12																

SB20(23・24)	側柱建物	梁間 1間 3.66m			桁行 3間 8.11m					面積 30㎡					長軸 N74° W		
遺構No.	遺構種	グリッド	形状		覆土					規模(cm)			柱根・杭傾斜		出土遺物			他遺構との重複関係
			平面形	断面形	分類	細分類 a	b	c	d	長軸	短軸	深さ	角度	方向	柱根	礎盤	その他	
598	P	26D6	隅丸方形	階段状	B		1	3		32	28	13						
753	P	26C23,26D3	隅丸方形	漏斗状	C		2	2		33	31	34						
766	P	25C15,26C11	楕円形	台形状	F					26	21	16						
768	P	26C12	隅丸方形	U字状	F					16	14	19						
769	P	26C17	不整円形	箱状	C		2	2		29	26	19						
771	P	25C20,26C16	円形	階段状	B		2		2	36	33	32						
797	P	26D8	円形	弧状	F					19	16	7						
800	P	26D1	楕円形	U字状	F					17	13	18						

SB26(36)	側柱建物	梁間 2間 3.25m			桁行 3間(4間) 7.49m					面積 23㎡					長軸 N10° E		
遺構No.	遺構種	グリッド	形状		覆土					規模(cm)			柱根・杭傾斜		出土遺物			他遺構との重複関係
			平面形	断面形	分類	細分類 a	b	c	d	長軸	短軸	深さ	角度	方向	柱根	礎盤	その他	
488	P	21D20	不整楕円形	半円状	C		2	3	2	33	25	26						
489	P	21D19	不整楕円形	階段状	B		2	2		35	28	24	0°	鉛直	○			
490	P	21D18・19	楕円形	半円状	E					29	23	21						
491	P	21D18	隅丸方形	階段状	B		1	2		26	24	30	12°	N10° E	○			
492	P	21D22	隅丸方形	U字状	C		1	2		27	26	33	0°	鉛直	○			
494	P	21D16・17	楕円形	半円状	B		1	2		31	25	26	0°	鉛直	○			
497	P	21D12・13	楕円形	階段状	C		1	2		38	27	46	0°	鉛直	○			
573	杭	21D18											8°	N42° W	○			？SD524
606	P	21D15	楕円形	階段状	C		2	2		22	18	24	18°	N156° E	○			
621	P	21D11・12	楕円形	漏斗状	B			3	2	32	25	46	0°	鉛直	○			
784	P	21D9	隅丸方形	台形状	F					29	28	55						＞SD526
882	P	21D10	円形	台形状	A					19	17	13						

田屋道遺跡 II 遺構観察表(4)

井戸 (SE)

遺構No.	グリッド	形状		覆土分類	細分類a	規模(cm)			出土遺物	他遺構との重複関係
		平面形	断面形			長軸	短軸	深さ		
1004	19F13・18	円形	U字状	B	2	88	84	132	珠洲焼(壺T種)、曲物(蓋)、箸状・杭状・棒状木製品、板材、木片、礫(スス付着)、炭化米	
1090	20F16・17・21・22	不整楕円形	漏斗状	B	2	178	148	139	珠洲焼(壺T種)、青磁(椀)、曲物(蓋・底板)、漆塗椀、下駄、箸状・棒状木製品、礫(スス付着)、木片、樹皮、種子(マツ・イネ)	
1110	20F12・13・17・18	円形	漏斗状	B		124	108	171	珠洲焼(壺T種・擂鉢)、箸状木製品、板材	

土坑 (SK)

遺構No.	グリッド	形状		覆土分類	細分類a	規模(cm)			出土遺物	他遺構との重複関係
		平面形	断面形			長軸	短軸	深さ		
920	12F23,12G3	不整長楕円形	階段状	B		(113)	68	47	円礫	＝SD42
922	8A18・19・23・24	円形	台形状	A		54	53	14		
929	10A19		台形状	A		(26)	42	8		
932	17B3・8	円形	弧状	F		82	80	7		
933	17B6	円形	弧状	F		64	55	10		＞SD1173
1014	18F14・15	長楕円形	台形状	C		92	58	31		
1119	24F24	円形	台形状	C		54	47	20		
1121	25F15・20	楕円形	弧状	C		154	119	19		
1122	26F11・12	不整形	弧状	C		131	103	17		
1141	21F14	円形	半円状	B		59	55	32	須恵器(横瓶)	

溝 (SD)

遺構No.	グリッド	断面形	覆土分類	細分類a	規模(cm)			長軸方向	出土遺物	他遺構との重複関係 (平成19・20年度調査区内)
					長さ	幅	深さ			
1	5B・C・D・E	弧状	C		(2812)	153	14	N72° W		＜SD2
2	4E,5E,6E,7E,8E・F,9F・G	階段状	D		(5866)	210	42	N55° W N31° E	曲物(側板)、棒状木製品	＞SD1
42	9F,11F,12F・G,13G	階段状	C		(3925)	116	30	N30° E	須恵器(無台杯)	＜P913 ＝SK920
139	11A,12A・B・C,13C・D・E,14E・F	台形状	E		(5800)	138	25	N84° E	珠洲焼(甕)	＜SD252
140	13A・B・C・D	弧状	B		(2334)	200	19	N72° W		
186	12B,13B,14B,15B,16B	台形状	B		(3741)	95	18	N20° E		？SD286・303 ＞SD289 ＝SD288
234	16C,17B・C,18B・C,19B,20B,21B,22B	階段状	B		(5982)	(210)	34	N12° E	漆膜片(椀)、木片、礫	＜SD945
236	14F・G,15D・E・F,16C・D	台形状	E		(4512)	80	27	N43° W		＞SD237
237	14F・G,15D・E・F・G,16C・D	階段状	B		(5629)	220	33	N43° W	須恵器(横瓶)、珠洲焼(擂鉢)、木片	＞P1058 ＜SD236
238	14F	弧状	F		(812)	63	9	N45° W		＞SD252
252	14E・F,15D・E	弧状	F		(410)	56	6	N48° W		＞SD139 ＜SD238
286	15C・D・E・F・G,16A・B・C・D・E	階段状	B		(5277)	200	25	N60° W N44° W	須恵器(杯蓋)、土師質土器(皿)	？SD186
288	16A・B・C・D・E・F・G	階段状	B		(5087)	215	22	N64° W		＞SD289 ＝SD186
289	15F・G,16A・B・C・D・E・F・G	階段状	B		(5261)	83	25	N62° W N44° W	須恵器(横瓶)	＞P948・1160 ＜SD186・288,P1091・1159・1164
303	15C・D,16B・C	弧状	B		(2109)	140	13	N42° W		？SD186
392	21C・D・E・F,22B・C・D・E・F・G	台形状	B	2	(4431)	60	26	N65° W	珠洲焼(甕)、木片、礫(スス付着)	＞SD1153,P1136 ＜P1156
525	21D・E・F・G,22D	台形状	B	1	(3026)	95	42	N16° E N73° W	珠洲焼(擂鉢)、青磁(椀)、陶器、礫(スス付着)	＜P1142
535	24B,25B・C・D・E・F	階段状	B		(4656)	230	14	N12° E N72° W		＞SD1093・1094
579	21E・F・G,22E	台形状	B	2	(1645)	90	22	N15° E N67° W	珠洲焼(壺T種)	＜P1138・1152・1154
673	20E・F	台形状	B		(721)	82	65	N75° W	棒状・柱状木製品	＝SX1095
835	24C	台形状	C	2	(490)	100	27	N18° E N84° W		＞SD1171
838	24B・C	台形状	B	2	(465)	130	29	N18° E N81° W	土師器(長甕)	
847	24D	台形状	C	2	(518)	105	20	N15° E		
930	11B	弧状	C		(448)	67	19	N24° E N25° W		＜SX89
945	22B	台形状	B		(386)	109	25	N60° W		＞SD234
996	19F	台形状	B		(274)	39	21	N71° W		＞P990・997・1003
1093	24B,25A・B	台形状	B		(665)	125	45	N21° W		＜SD535
1094	25B,26B,27A・B,28A・B	弧状	B		(3508)	142	15	N8° E N87° W		＞P1109 ＜SD535,SX1092
1120	24F・G	台形状	C		(180)	41	11	N78° W		
1153	21F・G,22F・G	弧状	A		(447)	140	5	N65° W		＜SD392
1170	24D	階段状	B		(165)	130	18	N16° E		＞SD1171
1171	24C・D	階段状	A		(974)	112	8	N70° W	青磁(椀)	＜SD835・1170
1173	16B,17A・B	台形状	B		(530)	110	16	N43° W		＜SK933

田屋道遺跡 II 遺構観察表(5)

性格不明遺構 (SX)

遺構No.	グリッド	形状		覆土分類	細分類a	規模(cm)			出土遺物	他遺構との重複関係
		平面形	断面形			長軸	短軸	深さ		
89	11B7･8･12･13･17･18･22･23	長楕円形	台形状	B		708	290	37	木片	＞SD930
1092	27A24･25,28A21		台形状	B		(283)	(65)	65		＞SD1094
1095	20F14･19	楕円形	漏斗状	B	2	141	96	92	珠洲焼(擂鉢)、礫(スス付着)、鍬状･板状･棒状木製品	＝SD673
1108	25B1		台形状	A		(103)	(72)	9		
1162	21G3･4	楕円形	台形状	B		(41)		15		

ピット (P) (1)

遺構No.	グリッド	形状		覆土					規模(cm)			柱根･杭傾斜		出土遺物	他遺構との重複関係
		平面形	断面形	分類	細分類				長軸	短軸	深さ	角度	方向		
					a	b	c	d							
213	18F12 (H18調査)	楕円形	半円状	F					28	22	27				
218	18F14 (H18調査)	円形	U字状	C					26	23	34				
219	18F15 (H18調査)	楕円形	半円状	B					41	31	31				
221	19F11 (H18調査)	円形	半円状	F		2	3		22	21	20				
901	9G4･9	円形	V字状	F			1		15	14	103	2°	N30° W	柱根(丸材　打ち込み柱)	
902	11G5	楕円形	半円状	B		2			27	21	11			礎盤(板)	
903	11G4	楕円形	U字状	C		2			24	18	31				
904	12G4	円形	半円状	F					15	13	12				
905	13G2	隅丸方形	半円状	F		1	2		23	20	18				
906	12F24	円形	半円状	F					13	12	11				
907	12F24	楕円形	階段状	F					30	22	14				
908	12G4	楕円形	半円状	F					18	15	7				
909	12G4	楕円形	半円状	F					30	25	8				
913	12G5	不整楕円形	半円状	F		1	2		30	25	11				＞SD42
914	12G5	円形	半円状	F		1	2		31	28	12				
915	12G4	楕円形	U字状	F		1	3		25	20	25				
916	6D2	円形	半円状	E					20	18	16				
917	13G1	楕円形	階段状	F					27	21	10				
918	13F21,13G1	隅丸長方形	階段状	F		1	3		22	18	11				
919	13F22	楕円形	階段状	F		1	2		20	15	16			柱根	
921	13G2	円形	半円状	F		1	2		35	30	22				
923	9A17･22	円形	半円状	F					28	25	23				
924	9A17	円形	半円状	F					22	21	19				
925	9B6	楕円形	階段状	F					18	15	13				
926	7A19	円形	階段状	C					41	38	57				
927	9B1･6	楕円形	半円状	B					17	14	15				
928	9B15	楕円形	台形状	F					16	12	9				
931	11B8･9･13･14	楕円形	半円状	F					26	19	24				
943	22B1	円形	V字状	A					10	10	32				
944	18B1	円形	台形状	F		2	3		31	28	16				
946	18B1	円形	台形状	F		2	3		27	25	10				
947	17B7	円形	半円状	B					35	33	22				
948	16B4	円形	U字状	F					17	11	17				＜SD289
949	19F25	楕円形	階段状	F		2	2		34	25	38				
950	19F25	隅丸方形	階段状	B					25	23	10				
951	19F20	円形	半円状	F					16	14	6				
952	19F20	円形	台形状	F					13	11	6				
953	19F20	隅丸方形	階段状	F		1	2		26	26	22				
954	19F19･20	楕円形	階段状	F		1	2		31	25	10				
955	19F19･24	楕円形	半円状	B					26	20	12				
956	19F19	円形	U字状	A					10	9	12				
957	19F19	楕円形	階段状	B					30	22	17				
958	19F18･19･23･24	円形	U字状	B					24	22	25			土器	
959	19F18	楕円形	U字状	F					12	10	18				
960	19F18	楕円形	階段状	F		1	3		24	19	18				
961	19F18	円形	U字状	C					26	22	40				
962	19F15･20	楕円形	半円状	F		2	3		30	24	22				
963	19F20	円形	U字状	C					30	26	44				
964	19F15	楕円形	階段状	F					34	25	26				
965	19F14	円形	台形状	F		2	2		26	25	10				
966	19F14	円形	階段状	F		2	2	3	27	25	26				
967	19F14･15	楕円形	台形状	B					22	16	14				
968	19F14	楕円形	階段状	B					31	25	14				
969	19F14	円形	台形状	F					24	21	18				
970	19F14･19	隅丸方形	階段状	F					25	24	28				
971	19F14	隅丸方形	台形状	F					27	27	17				
972	19F14	円形	台形状	B					17	15	10				
973	19F14	円形	U字状	C		1	3	2	30	29	40				
974	19F19	長楕円形	半円状	F		2	3		68	26	34				＞P975
975	19F19	円形	U字状	F		2	3		(26)	26	42				＜P974
976	19F13	円形	漏斗状	F		2	3		24	23	33				
977	19F13	円形	階段状	F		1	2		21	19	22				

田屋道遺跡 II 遺構観察表(6)
ピット (P) (2)

遺構No.	グリッド	形状		覆土					規模(cm)			柱根・杭傾斜		出土遺物	他遺構との重複関係
		平面形	断面形	分類	細分類				長軸	短軸	深さ	角度	方向		
					a	b	c	d							
978	19F14	楕円形	階段状	F		2	3		30	24	18				
979	19F13・14	楕円形	半円状	F		1	3		28	22	23				
980	19F13	円形	U字状	C					26	23	38				
981	19F13	円形	半円状	F		1	3		14	13	10				
982	19F13	楕円形	台形状	B					24	17	9				
985	19F12	円形	U字状	F		2	2		23	22	40	7°	N54° W	柱根(丸材)	
986	19F17	円形	U字状	F		2	2		35	34	44				
987	19F17	円形	台形状	F		2	3		30	28	12				
988	19F17	円形	階段状	F		2	3		24	22	42				
990	19F18・23	円形	半円状	F		2	3		(32)	32	30				<SD996
992	19F13・18	円形	U字状	F		2	3		28	24	37				>P995
993	19F12・13	円形	半円状	F		2	3		(34)	34	20				<P994
994	19F12・13	隅丸方形	半円状	F					27	(13)	7				>P993 <P995
995	19F12・13・17・18	円形	階段状	F		2	3		20	20	12				>P994 <P992
997	19F18・23	円形	漏斗状	B					(22)	(19)	40				<SD996
999	19F17・22	長楕円形	半円状	F		2	2		40	26	30				
1000	19F17	楕円形	半円状	F		1	2		32	26	28				
1003	19F13	円形	台形状	F		1	2		28	27	25	8°	N0°	柱根(半割材)	<SD996
1007	19F11	楕円形	階段状	B					17	14	14				
1008	19F16	円形	階段状	F		1	2	2	26	25	37				
1009	19F16	円形	階段状	C					36	34	28				
1011	18F20	円形	弧状	F		2			24	22	9				
1015	18F19	楕円形	階段状	F		2	3		21	17	14				
1017	18F25	円形	台形状	C					12	12	6				
1019	19F21	円形	半円状	F					19	17	15				
1022	18F14	円形	階段状	F					14	12	12				
1023	18F13・14	円形	半円状	F		2	3	1	26	24	25				
1024	18F13	楕円形	半円状	F					10	8	6				
1025	18F13	円形	V字状	F					13	12	10				
1027	18F18	円形	U字状	F					7	6	17				
1028	18F23	長楕円形	漏斗状	F		2	3		28	15	42	51°	N0°	柱根(打ち込み柱)	
1034	18F20	楕円形	台形状	C					21	16	12				>P1035
1035	18F20	長楕円形	階段状	C					38	(11)	24				<P1034
1043	17F20,18F16	楕円形	台形状	F		2	3		24	18	11				
1044	17F25,18F21	円形	台形状	F					18	16	10				
1045	17F25	長楕円形	弧状	F					30	20	7				
1046	17F25	隅丸方形	半円状	F		2	3	2	27	25	22				>P1047
1048	17F24	長楕円形	階段状	F		2	2	2	48	32	32				
1051	19F21	楕円形	階段状	F		2	3		18	14	14				>P1074
1052	18F23	円形	半円状	F		2	3	1	30	27	19				
1054	19F13	円形	階段状	F		2	3		19	16	18				
1055	19F13	楕円形	台形状	E					13	9	10				
1056	17F19	隅丸方形	U字状	F					15	15	26				
1057	15F17	円形	階段状	F		2	3		28	24	25	52°	N134° E	柱根(丸材　打ち込み柱)	
1058	15F12	円形	階段状	F					20	17	16	2°	N132° E	柱根(丸材)	<SD237
1060	18F20	円形	V字状	F					(8)	20	10				<P1059・1063
1061	18F20・25	円形	半円状	F		2	3	2	13	13	10				
1074	19F21	円形	台形状	F		2	3	2	39	38	30			土師器(皿)	<P1051
1075	18F25	楕円形	台形状	F		2	3		24	20	12				>P1080
1076	18F23	隅丸方形	台形状	F		2	2		16	15	8				
1077	18F22	隅丸方形	半円状	F		2	3	1	31	28	28				
1079	18F25,19F21	円形	半円状	C					20	19	12				
1080	18F24・25	不整楕円形	台形状	F		2	2		(30)	25	18				<P1075
1082	18F24	隅丸方形	箱状	F					21	(20)	18				<P1081
1088	18F20・25	長楕円形	台形状	B					25	16	18				>P1089
1089	18F20	長楕円形	階段状	F					(20)	20	15				<P1088 >P1100
1096	20F11	楕円形	半円状	F		2	1		30	24	22				
1097	20F18	楕円形	半円状	F		1	2		21	16	18				
1098	20F18	楕円形	階段状	F		1	1		22	18	25				>P1099
1099	20F18	円形	階段状	A					16	15	3				<P1098
1100	18F20	楕円形		F					24	(9)	12				<P1072・1089
1101	20F18	楕円形	階段状	C		1	2	1	31	24	20				
1102	19F15,20F11	円形	半円状	F		1	1		23	22	12				
1103	26B13・14	円形	半円状	F		1	1		14	13	5				
1104	25B10	楕円形	箱状	C					15	12	10				
1105	25B13・14	楕円形	台形状	A					12	9	6				
1106	25B13	円形	半円状	A					16	14	8				
1107	25B6	円形	U字状	A					6	5	14				
1109	25B11	円形	半円状	F					(28)	(27)	(10)				<SD1094
1111	20F21	隅丸方形	U字状	C					26	24	34				
1112	20F16	楕円形	U字状	B		1	1		43	30	50				
1113	20F19	円形	半円状	F		1	3		17	16	14				
1114	20F19	円形	階段状	F		1	2		16	14	12				
1115	20F17	不整形	階段状	B					20	19	12				

田屋道遺跡 II 遺構観察表(7)

ピット (P) (3)

遺構No.	グリッド	形状		覆土					規模(cm)			柱根・杭傾斜		出土遺物	他遺構との重複関係
		平面形	断面形	分類	細分類				長軸	短軸	深さ	角度	方向		
					a	b	c	d							
1116	20F17	円形	階段状	B					30	27	18				
1117	24F23	隅丸方形	半円状	C					29	28	14				
1118	24F23・24	隅丸方形	半円状	C					28	24	26				
1123	26F13・18	楕円形	台形状	C		2		1	26	20	22				
1124	26F14	円形	階段状	F		2			19	18	18				
1125	26F14・15	円形	階段状	F					18	16	6				
1126	26F15	隅丸方形	台形状	F		2	2		16	14	5				
1127	26F15,27F11	楕円形	半円状	F		2	2		22	18	15				
1128	26F13	円形	半円状	C					14	12	12				
1129	27F20	円形	階段状	F					9	9	17			柱根	
1130	26F13	円形	漏斗状	F					14	14	37			柱根	
1131	21F15	円形	階段状	F		2	3	2	26	24	38	35°	N90°	柱根(丸材　打ち込み柱)	
1132	21F20	楕円形	階段状	C	1				30	24	23			礫	
1133	21F23	円形	半円状	F		1	3		19	17	8				
1134	21F18	楕円形	弧状	F					21	17	2				
1135	21F17	円形	台形状	F		1	3		20	17	12				
1136	21F20,22F16	隅丸方形	階段状	C		1		1	28	26	22				＜SD392
1137	21F15	円形	階段状	F		2		2	28	27	24			柱根	
1138	21F20	円形	台形状	B					26	26	14				＞SD579
1139	21F25	楕円形	階段状	F		2	3		32	26	40				
1140	21F25	円形	U字状	F		2	3	2	28	27	49	3°	N0°	柱根(丸材)	
1142	21F14	円形	半円状	F		2	2		34	31	15				＞SD525
1143	21F19・20	円形	階段状	B		2	2	1	35	31	32				
1144	21F24	円形	半円状	F		1	3		31	30	20				
1145	21F19	楕円形	半円状	F					17	12	6				
1146	21F19	円形	台形状	F					16	14	8				
1147	21F19	円形	弧状	B					13	12	4				
1148	21F18・19	隅丸方形	半円状	F		2	2		23	22	14				
1149	21F18・19	円形	台形状	F		2	3		23	22	20				
1150	21F13・14	円形	台形状	B					16	15	10				
1151	21F13	楕円形	半円状	F					(27)	(18)	(7)			柱根か	
1152	21F25,21G5	円形	半円状	B					25	22	12				＞SD579
1154	21G5	長楕円形	半円状	F		1	3	2	52	33	22			礎盤(板)	＞SD579
1155	21F25	円形	階段状	F		2	3		13	13	6				
1156	22F21	楕円形	階段状	B					(46)	34	26				＞SD392
1157	16F25	円形	U字状	F		1	2	1	11	11	29				
1159	16G1		台形状	B							40				＞SD289
1160	16F16	円形	U字状	A					11	9	12				＜SD289
1163	21F15	楕円形	台形状	B					23	18	12				
1165	21F15	円形	半円状	B		2	3		25	21	17				
1166	24D12・17	円形	半円状	A					24	22	11				
1167	24E1	円形	階段状	B		1	2		38	32	28				
1168	24E6・7	円形	階段状	F		1	2		30	28	18				
1169	24A24,24B4	円形	漏斗状	F		2	3		26	26	36				

杭

遺構No.	グリッド	杭傾斜		出土遺物	他遺構との重複関係
		角度	方向		
910	13G5	8°	N30° W	杭(丸材)	
911	13G5	0°	N75° E	杭(丸材)	
912	13G5	25°	N63° E	杭(丸材)	
934	16B8	10°	N60° E	杭(丸材)	
935	21B10	6°	N0°	杭(丸材)	
936	21B10	10°	N0°	杭(丸材)	
937	21B10	5°	N0°	杭(丸材)	

遺構No.	グリッド	杭傾斜		出土遺物	他遺構との重複関係
		角度	方向		
938	22B6	0°	N41° W	杭(丸材)	
939	22B6	0°	N17° E	杭(丸材)	
940	22B6	0°	N0°	杭(丸材)	
941	21B5	10°	N159° W	杭(丸材)	
942	20B7	9°	N0°	杭(丸材)	
1087	15F20	25°	N126° E	杭(割材)	
1158	16F25	0°	N0°	杭(丸材)	

田屋道遺跡 II　遺物観察表(1)
土器・陶磁器

遺物観察表の(　)は、土器・陶磁器の口径は推定値、他は残存値である
【須恵器胎土分類】　胎土A：胎土粗く、石英・長石・金雲母を多く含む　胎土B：胎土精良、白色粒子を多く含む
胎土C：胎土精良、石英・長石の小粒子を少量含む

No.	遺構名	出土地点	出土層位	時期	種別	器種	調整等	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	備　考
1	P1038	18F17	1層	Ⅳ～Ⅴ期	珠洲焼	擂鉢		(1.5)			暗灰	SB37　内面卸し目1単位７条以上
2	SE1004	19F18	1･5層	Ⅳ期	珠洲焼	壺Ｔ種	ロクロ成形　外面タタキ　内面あて具	(10.2)	(21.6)		暗灰	
3	SE1090	20F16	9層	Ⅰ～Ⅱ期	珠洲焼	壺Ｔ種	外面タタキ　内面あて具	(6.0)			暗灰	
4	SE1090	20F16	5層	13C代	青磁	椀	ロクロ成形	(3.5)			緑灰	鎬蓮弁文
5	SE1110	20F18	3層	Ⅳ期以前	珠洲焼	壺Ｔ種	外面タタキ　内面あて具	(5.6)			暗灰	
6	SE1110	20F18	3層	Ⅱ～Ⅲ期	珠洲焼	擂鉢	ロクロ成形	(3.7)			灰	
7	SK1141	21F14	1層		須恵器	横瓶	外面タタキ　内面同心円あて具	(1.4)			灰	
8	SD42	13G1	1層	Ⅴ～Ⅵ期	須恵器	無台杯	ロクロ成形	(2.5)	(12.7)		灰	胎土B
9	SD139	12B1	1層	Ⅰ期	珠洲焼	甕	ロクロ成形　外面タタキ　内面あて具	(6.5)			褐	
10	SD237	14G5	2層		須恵器	横瓶	ロクロ成形　外面タタキ　内面あて具	(6.7)			灰	胎土A
11	SD237	14F20	2層	Ⅲ～Ⅳ期	珠洲焼	擂鉢	ロクロ成形	(4.2)			灰	内面卸し目1単位10条以上
12	SD286	15F23	3層	8C前半	須恵器	杯蓋	ロクロ成形	(1.6)	(15.7)		灰	胎土A
13	SD286	15F14	1層	13C後半～14C	土師質土器	皿	ロクロ成形ヘラ切り　内外面ナデ	(1.4)		(9.8)	暗褐	
14	SD289	16B5	1層		須恵器	横瓶	外面カキメ　内面同心円あて具	(18.2)			暗灰	胎土A
15	SD525	21F24	2層	Ⅱ～Ⅲ期	珠洲焼	擂鉢	ロクロ成形　内面ナデ	(3.8)	(30.8)		明褐	
16	SD525	21F14	4層	Ⅲ期	珠洲焼	擂鉢	ロクロ成形	(9.4)			明褐	内面卸し目1単位12条
17	SD525	21F14	3層	12C末～13C	青磁	椀	ロクロ成形	(3.1)			暗緑灰	
18	SD579	21F20	2層	Ⅴ期	珠洲焼	壺Ｔ種	外面タタキ　内面あて具	(4.2)			灰	
19	SD838	24B23	2層		土師器	長甕	内外面ハケメ	(3.5)			褐	
20	SD1171	24D2	1層	鎌倉後期	青磁	椀	ロクロ成形　内外面施釉	(3.6)			緑灰	鎬蓮弁文
21	SD1171	24D2	1層	鎌倉後期	青磁	椀	ロクロ成形　内外面施釉	(5.4)	(17.1)		暗緑灰	鎬蓮弁文
22	SX1095	20F14	4層	Ⅲ期	珠洲焼	擂鉢	ロクロ成形	(4.9)	(37.0)		暗灰	内面卸し目1単位14条
23	SX1095	20F19	1層	Ⅲ期	珠洲焼	擂鉢	ロクロ成形	(3.0)			暗灰	内面卸し目1単位6条以上
24	P1074	19F21	1層	10C後半か	土師器	皿	内外面ナデ	(0.7)		(8.4)	明褐	
25		14F12	Ⅲb層		須恵器	横瓶	ロクロ成形　外面カキメ･タタキ 内面あて具	(7.5)			灰	胎土A
26		19B10	Ⅱb層		須恵器	横瓶	ロクロ成形　外面カキメ･タタキ 内面同心円あて具	(21.0)			灰	胎土A
27		18B13	Ⅱb層		須恵器	大甕	外面タタキ　内面ナデ　輪積み痕	(7.7)			灰	
28		6D16	Ⅲb層		土師器	長甕	外面ハケメ　内面ナデ	(5.4)		9.0	黒	
29		16G2	Ⅱb層		土師器	長甕	内外面ハケメ	(4.2)			褐	
30		12F25	Ⅲb層	13C後半～14C	瓷器系	甕	内面ナデ	(4.6)			暗灰	
31		14G5	Ⅲb層	Ⅲ期	珠洲焼	擂鉢	ロクロ成形	(6.5)			灰	内面卸し目1単位8条
32		8A18	Ⅱb層	Ⅲ期	珠洲焼	擂鉢	ロクロ成形	(3.1)			灰	内面卸し目1単位9条
33		18B13	Ⅱb層	17C	陶器	椀	内外面施釉	(3.6)		(4.6)	暗褐	唐津

木製品 (1)

No.	遺構名	出土地点	出土層位	種　別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	遺存状況	樹　種	木取り	備　考
34	P1064	18F18	3層	礎盤(板)	16.0	15.0	3.1		ケヤキ	柾目	SB37　椀粗型か
35	P1068	17F20	2層	礎盤(板)	24.5	8.9	2.1		クリ	割材	SB37
36	P1068	17F20	2層	礎盤(板)	24.0	9.9	2.2		クリ	割材	SB37　放射性炭素年代測定試料　一部炭化
37	P1070	18F17	3層	礎盤(板)	23.1	(3.3)	1.3		クリ	割材	SB37
38	P1071	18F18	1層	礎盤(板)	(27.6)	7.0	4.4		クリ	半割材	SB37　放射性炭素年代測定試料
39	P1072	18F20	3層	礎盤(板)	24.1	12.0	3.9		クリ	割材	SB37
40	P1036	18F22	2層	礎盤(板)	(14.0)	6.3	1.8		モクレン属	追柾	SB38
41	P1036	18F22	2層	礎盤(板)	15.0	5.7	1.9		モクレン属	追柾	SB38
42	P1026	18F18	2層	礎盤(板)	27.5	12.8	2.1		モクレン属	柾目	SB39
43	P1026	18F18	2層	礎盤(板)	29.0	14.1	3.1		モクレン属	柾目	SB39　一部炭化
44	P1040	18F16	1層	礎盤(板)	25.7	14.2	2.0		モクレン属	追柾	SB39　放射性炭素年代測定試料　一部炭化
45	P1050	17F20	1層	礎盤(板)	(20.7)	8.6	3.1		クリ	板目	SB39
46	P1053	17F25	2層	礎盤(板)	14.0	10.8	4.2		カツラ	割材	SB39　放射性炭素年代測定試料
47	P991	19F18	1層	柱根	37.0	6.2	6.9		クリ	丸材	SB40
48	P1164	16F13	1層	柱根	28.0	9.6	8.5		サクラ属	丸材	SB41
49	P1020	18F19	2層	礎盤(板)	41.0	5.6	3.1				ピット列1　一部炭化
50	P1039	18F16	2層	礎盤(板)	29.8	6.2	5.8				ピット列1
51	SE1004	19F18	6層	箸状木製品	(3.8)	0.5	0.5	上端欠損		柾目	
52	SE1004	19F18	7層	箸状木製品	(4.1)	0.5	0.5	両端欠損		柾目	
53	SE1004	19F18	6層	箸状木製品	(6.0)	0.7	0.4	両端欠損		柾目	
54	SE1004	19F18	6層	箸状木製品	(9.1)	0.6	0.4	上端欠損		柾目	
55	SE1004	19F18	7層	箸状木製品	(9.3)	0.4	0.5	上端欠損		柾目	
56	SE1004	19F18	6層	箸状木製品	(13.3)	0.3	0.3	両端欠損		柾目	
57	SE1004	19F18	7層	曲物蓋	(20.5)	20.6	1.7	一部欠損	ケヤキ	柾目	中央部に円形の孔を有する
58	SE1004	19F18	7層	杭状木製品	50.2	4.8	5.0		クリ	丸材	
59	SE1004	19F13	7層	棒状木製品	19.3	1.1	1.1		ウツギ属	丸材	管状　切断痕あり
60	SE1004	19F18	7層	棒状木製品	21.5	3.4	2.4			丸材	炭化後樹皮を削る　両端切断痕あり
61	SE1004	19F18	6層	棒状木製品	32.7	2.4	2.0		アサダ	割材	
62	SE1004	19F18	7層	棒状木製品	52.5	1.8	1.8			丸材	切断痕あり
63	SE1004	19F18	7層	棒状木製品	57.2	1.4	1.6			丸材	切断痕あり
64	SE1004	19F18	7層	棒状木製品	110.0	2.1	2.1				切断痕あり

田屋道遺跡 II 遺物観察表(2)

木製品 (2)

No.93「出土層位」覧は検出層位

No.	遺構名	出土地点	出土層位	種 別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	遺存状況	樹 種	木取り	備 考
65	SE1004	19F18	7層	板材	(10.6)	(3.9)	0.7		タカノツメ	柾目	
66	SE1004	19F18	6層	板材	(9.3)	(10.6)	1.1		クリ	柾目	
67	SE1090	20F16	9層	箸状木製品	(14.4)	0.7	0.6	上端欠損		柾目	
68	SE1090	20F16	6層	漆塗椀	現高(1.9)		底径6.7	上半欠損	ケヤキ	柾目	高台底面を除き内外面に黒漆塗り
69	SE1090	20F16	9層	下駄	23.1	10.1	11.0	前歯欠損	ケヤキ	板目	連歯式高歯下駄
70	SE1090	20F16	6層	曲物底板	(25.8)	(5.3)	1.2		スギ	柾目	
71	SE1090	20F16	9層	曲物蓋	21.1	20.5	1.2		ケヤキ	柾目	中央部に長方形の孔を有する
72	SE1090	20F16	9層	棒状木製品	(73.9)	3.3	3.5			丸材	
73	SE1090	20F16	9層	棒状木製品	(85.5)	2.9	3.0			丸材	
74	SE1090	20F16	9層	棒状木製品	(24.0)	2.0	1.0		ウツギ属	半割材	
75	SE1110	20F18	7層	箸状木製品	(14.4)	0.6	0.5			柾目	
76	SE1110	20F18	7層	板材	36.2	10.1	5.6		カツラ	割材	柱材の可能性あり
77	SD2	9F17	5層	曲物側板	11.8	2.8	0.6		スギ	柾目	木釘あり
78	SD2	9G1	5層	棒状木製品	(22.6)	1.7	1.7	上部欠損		丸材	一部腐食
79	SX1095	20F19	10層	鍬状木製品	24.9	7.8	2.7		ケヤキ	柾目	一部炭化
80	SX1095	20F14	7層	板状木製品	35.7	5.1	1.5		ケヤキ	柾目	
81	SX1095	20F14	7層	棒状木製品	(48.2)	2.0	1.8				
82	SX1095	20F14	7層	柱状木製品	64.2	15.3	12.6		クリ	丸材	
83	P901	9G9	1層	柱根	85.4	10.2	11.2		ハンノキ亜属	丸材	樹皮残る
84	P902	11G5	2層	礎板	17.2	7.3	2.9			板目	
85	P985	19F12	1層	柱根	38.0	10.7	10.6		クリ	丸材	
86	P1003	19F13	1層	柱根	19.2	7.3	(4.9)	芯部腐食	クリ	半割材	上端炭化
87	P1057	15F17	1層	柱根	35.8	9.7	6.9		クリ	丸材	
88	P1058	15F12	1層	柱根	39.4	6.7	3.6		ヌルデ	丸材	
89	P1131	21F15	1層	柱根	43.6	11.8	9.3		クリ	丸材	枘穴あり　放射性炭素年代測定試料
90	P1140	21F25	1層	柱根	51.3	13.8	12.0		クリ	丸材	
91	P1154	21G5	3層	礎板	(12.6)	(2.9)	(1.5)		クリ	割材	
92	P1154	21G5	3層	礎板	(13.2)	(4.6)	(1.8)		クリ	割材	
93	杭1087	15F20	Ⅲb層	杭	45.5	4.1	2.5		クリ	割材	

石製品

No.	遺構名	出土地点	出土層位	種 別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備 考
94	SK920	12G3	10層	礫	28.6	20.1	8.8	6500	花崗岩	
95	SX1095	20F14	6･7･9層	礫	28.4	19.3	13.9	6400	花崗岩	スス付着
96	SX1095	20F19	10層	礫	17.2	10.6	5.7	1500	花崗岩	スス付着多量

宮の越遺跡 II 遺構観察表
杭

遺構No.	グリッド	杭傾斜		出土遺物	他遺構との重複関係
		角度	方向		
10	6D23	0°	鉛直	杭(丸材)	
11	6D22	22°	N36° W	杭(丸材)	
12	6D23	0°	鉛直	杭(丸材)	
13	6D7	0°	鉛直	杭(丸材)	

遺構No.	グリッド	杭傾斜		出土遺物	他遺構との重複関係
		角度	方向		
14	5D20	45°	N27° E	杭(丸材)	
15	5D12	10°	N50° W	杭(割材)	
16	7D6	10°	N76° E	杭(丸材)	

宮の越遺跡 II 遺物観察表
土器・陶磁器

遺物観察表の( )は、土器・陶磁器の口径は推定値、他は残存値である
【須恵器胎土分類】 胎土A：胎土粗く、石英・長石・金雲母を多く含む　胎土B：胎土精良、白色粒子を多く含む
胎土C：胎土精良、石英・長石の小粒子を少量含む

No.	遺構名	出土地点	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整・文様等	色調	時期	備　考
1		5C23,6D7	Ⅲ層	須恵器	無台杯	13.2	9.5	3.6	ロクロ成形　ヘラ切り後ナデ調整 内面「×」ヘラ記号	灰	Ⅳ期	口縁部重ね焼き痕　胎土A
2		6D11,16	Ⅲ層	須恵器	無台杯	13.2	9.0	3.8	ロクロ成形　ヘラ切り	灰白	Ⅳ～Ⅴ期	ロクロ右回転　胎土A
3		5D12	Ⅲ層	須恵器	無台杯	12.7	9.0	3.1	ロクロ成形　ヘラ切り	灰	Ⅴ期	ロクロ左回転　胎土B
4		6D12	Ⅲ層	須恵器	無台杯	11.8		(2.4)	ロクロ成形	灰		胎土A
5		5D10	Ⅲ層	須恵器	無台杯	(13.5)		(3.2)	ロクロ成形	灰	Ⅳ～Ⅴ期	口縁部重ね焼痕　胎土A
6		5D4	Ⅲ層	須恵器	無台杯	(12.3)		(3.2)	ロクロ成形	灰	Ⅳ～Ⅴ期	胎土C
7		6D11・12・19	Ⅲ層	須恵器	無台杯	13.2	9.5	3.5	ロクロ成形　ヘラ切り	灰白	Ⅳ～Ⅴ期	ロクロ右回転　胎土A
8		6D2	Ⅲ層	須恵器	無台杯	(13.2)	(9.8)	(3.0)	ロクロ成形	灰	Ⅳ～Ⅴ期	外面自然釉　胎土A
9		5D5	Ⅲ層	須恵器	無台杯	(12.4)		(2.4)	ロクロ成形	灰		胎土C
10		6D18	Ⅲ層	須恵器	無台杯		(7.2)	(1.0)	ロクロ成形　糸切り	灰オリーブ		
11		5C25,5D2, 6C21	Ⅲ層	須恵器	無台杯		(7.4)	(2.0)	ロクロ成形	灰		胎土A
12		7D16	Ⅲ層	須恵器	無台杯		(7.2)	(1.4)	ロクロ成形　糸切り	灰オリーブ		
13		5C25,6C21	Ⅲ層	須恵器	有台杯	11.5	7.3	4.4	ロクロ成形　ヘラ切り後ナデ調整	灰	Ⅴ期	胎土A
14		6D14・25, 7D16	Ⅲ層	須恵器	大甕	26.4		(18.8)	外面カキメ　平行タタキ 内面同心円あて具	灰白		頸から肩部にかけて自然釉が被る
15		5C24	Ⅲ層	須恵器	横瓶			(6.2)	外面平行タタキ　内面同心円あて具	灰	Ⅴ期	外面自然釉を被る　胎土A
16		5D8	Ⅲ層	土師器	小甕	(11.4)		(4.2)	口縁ヨコナデ　外面ヘラケズリ	灰オリーブ		
17		6C22,6D1・ 7・9・12・13	Ⅲ層	土師器	小甕	14.8		(10.2)	ロクロ成形　内外面カキメ	灰オリーブ		頸部にスス付着 内面口縁炭化物付着
18		7C21・6D10	Ⅲ層	土師器	小甕			(4.2)	内外面ハケメ　非ロクロ成形	灰オリーブ		
19		7C21・6D3	Ⅲ層	土師器	小甕		(8.4)	(6.4)	内外面ハケメ　非ロクロ成形	灰オリーブ		外面底部木葉痕
20		5D8	Ⅲ層	土師器	小甕			(7.2)	内面ヘラナデ　非ロクロ成形	灰オリーブ		
21		5D8	Ⅲ層	土師器	小甕		(8.1)	(3.2)	内外面ケズリ　非ロクロ成形	灰オリーブ		
22		5D8	Ⅲ層	土師器	小甕			(4.8)	内面ナデ　外面ハケメ 非ロクロ成形	灰オリーブ		

被熱礫

No.	遺構名	出土地点	出土層位	種　別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　材	備　考
23		5C25	Ⅲ層	礫	13.6	12.9	7.2	1400	アプライト	スス付着

木製品

No.	遺構名	出土地点	出土層位	種　別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	遺存状況	樹　種	木取り	備　考
24		6D4	Ⅲ層	棒状木製品	12.5	0.9	0.6			割材	
25		6D4	Ⅲ層	棒状木製品	12.5	1.0	0.6			割材	
26		6D4	Ⅲ層	棒状木製品	5.8	0.6	0.6	両端欠損		割材	
27			Ⅲ層	棒状木製品	8.8	0.7	0.6			割材	試掘2Tより出土
28			Ⅲ層	棒状木製品	11.2	0.7	0.6			割材	試掘2Tより出土
29		6C24	Ⅲ層	棒状木製品	30.6	0.6	0.7	下端欠損		割材	
30		6D8	Ⅲ層	箱物底板	15.5	5.4	1.4			柾目	釘穴2個
31		6D3	Ⅲ層	板状木製品	18.8	2.2	1.5			柾目	
32			Ⅲ層	箱物底板	29.0	8.9	0.7			板目	または折敷か　試掘2Tより出土
33		6C23	Ⅲ層	板材	11.7	6.5	0.7			板目	
34	杭10	6D23	Ⅳ層	杭	50.8	7.2	6.5	上端欠損		丸材	
35	杭11	6D22	Ⅲ層	杭	24.4	2.8	2.7	上端欠損		丸材	
36	杭12	6D23	Ⅳ層	杭	29.3	3.9	3.4		ハンノキ亜属	丸材	
37	杭13	6D7	Ⅲ層	杭	29.7	1.6	1.5			丸材	
38	杭14	5D20	Ⅳ層	杭	20.8	4.0	2.9			丸材	
39	杭15	5D12	Ⅲ層	杭	30.0	2.4	1.0			割材(板材)	
40	杭16	7D6	Ⅳ層	杭	94.5	3.5	3.5			丸材	
41			Ⅲ層	杭	28.4	2.7	2.0			割材	試掘2Tより出土

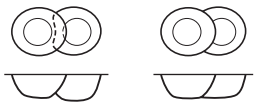
図　　版

凡例

1　遺構図で使用したスクリーントーンは以下のとおりである。

硬化面範囲　焼土範囲　黒色土範囲
炭化物範囲　粘土範囲　柱根・礎盤・杭・横木

2　重複した遺構の表現は以下のとおりである。



3　遺物出土状況図で使用したスクリーントーンは以下のとおりである。

石器・礫

4　遺物種類の略号及び記号は以下のとおりである。

土器・珠洲焼・陶磁器等 (P) ●　石製品・石器・剝片 (S) ○　礫 (R) ▲
木製品 (W) △　金属製品・銭貨 (K) ■　種子 □

5　土器実測図で使用したスクリーントーンは以下のとおりである。

炭化物付着範囲　黒漆

6　石器実測図で使用したスクリーントーンは以下のとおりである。

スス　磨痕　光沢　敲打痕

7　石器実測図で使用した使用痕・スス付着の表記は以下のとおりである。

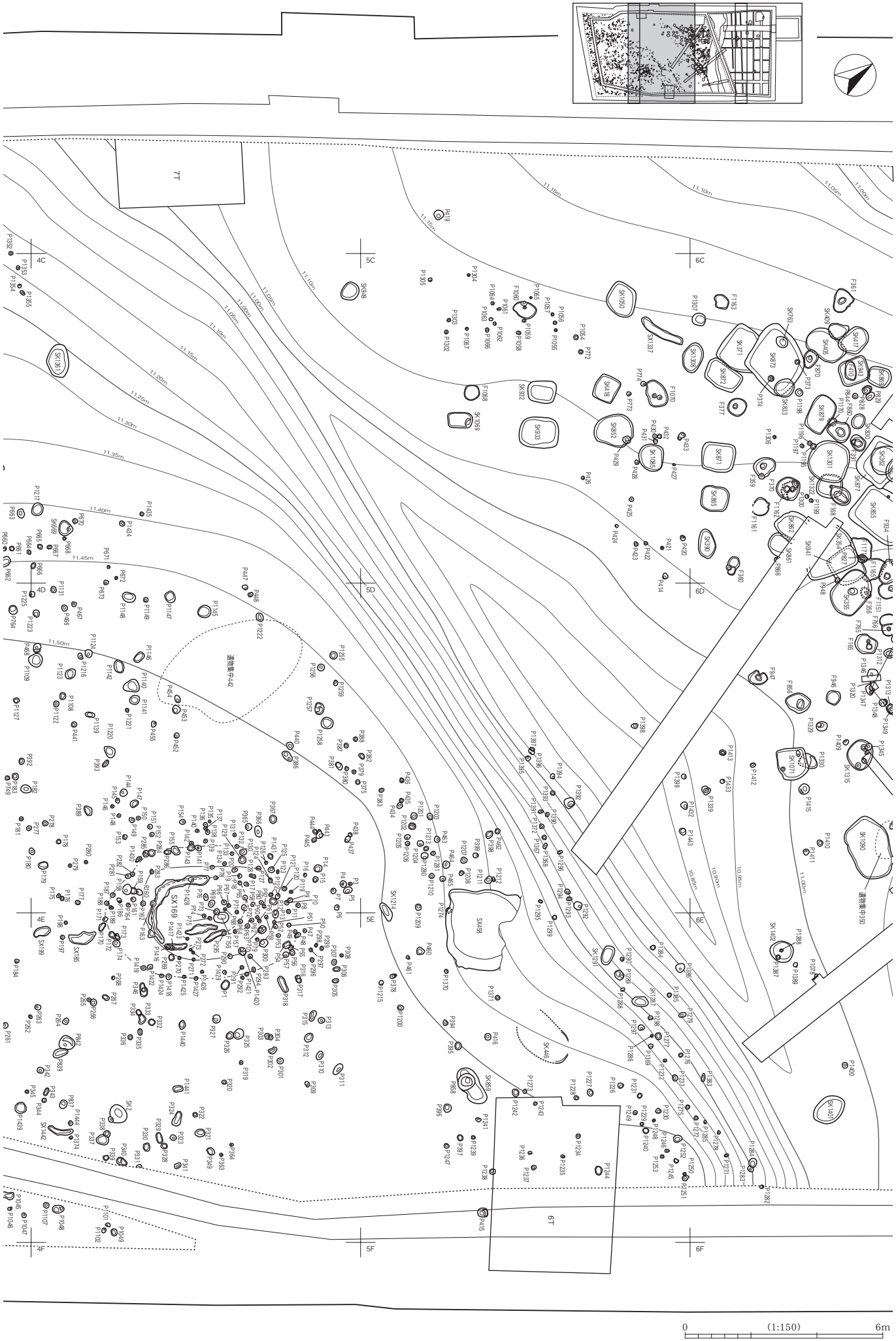
8　木製品実測図で使用したスクリーントーンは以下のとおりである。

炭化範囲　黒漆

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
A
B
C
D
E
F
11.50m
11.25m
11.00m
11.05m
11.10m
11.15m
10.85m
10.90m
10.95m
11.20m
11.30m
11.35m
11.40m
0
(1:300)
10m

7T
2C
3C
4C
2D
3D
4D
2E
3E
4E
2F
3F
4F
11.00m
11.05m
11.10m
11.15m
11.20m
11.25m
11.30m
11.35m
11.40m
11.45m
11.50m
0
(1:150)
6m

谷地遺跡縄文時代　遺構分割図（2）

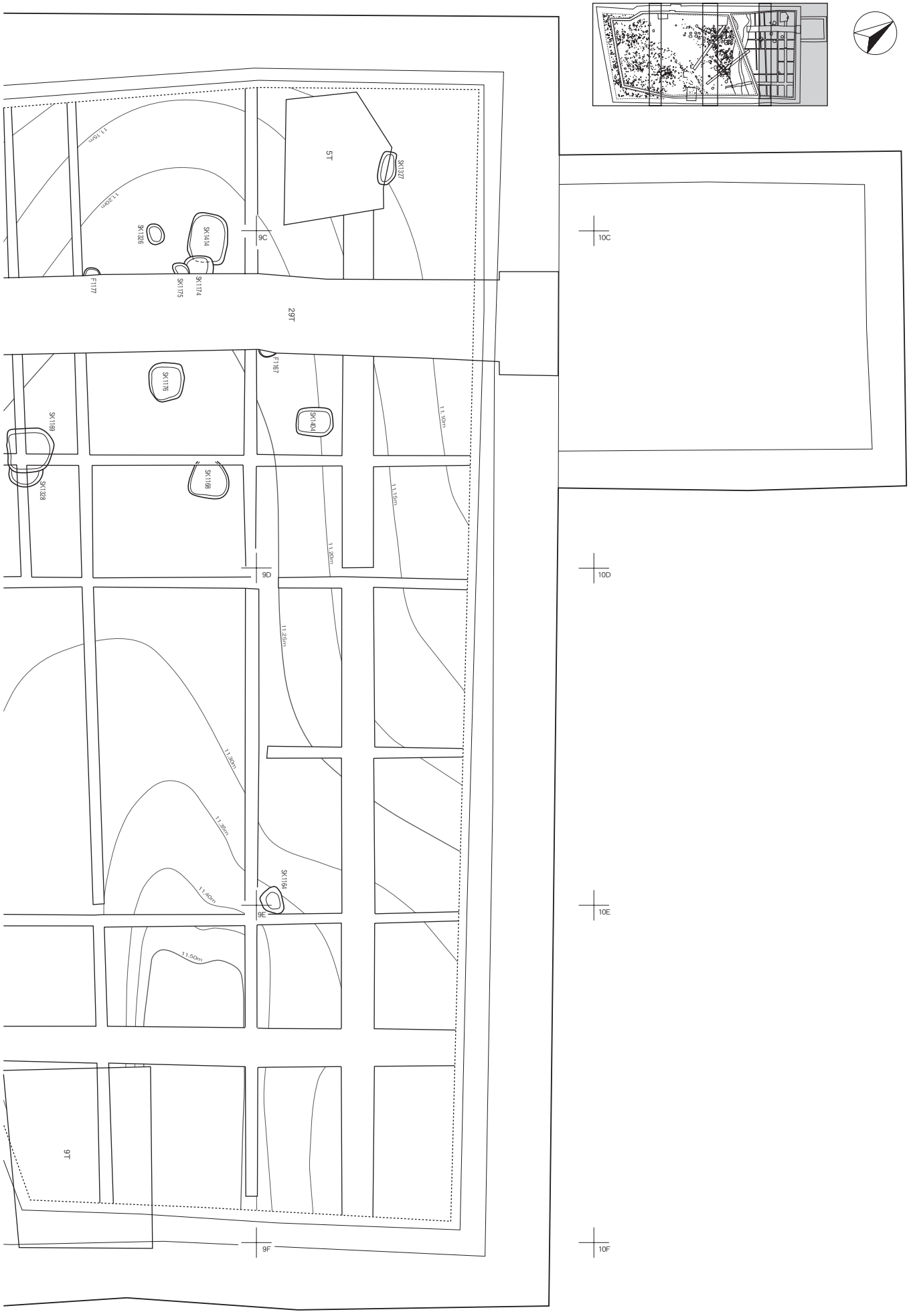


谷地遺跡縄文時代　遺構分割図（3）

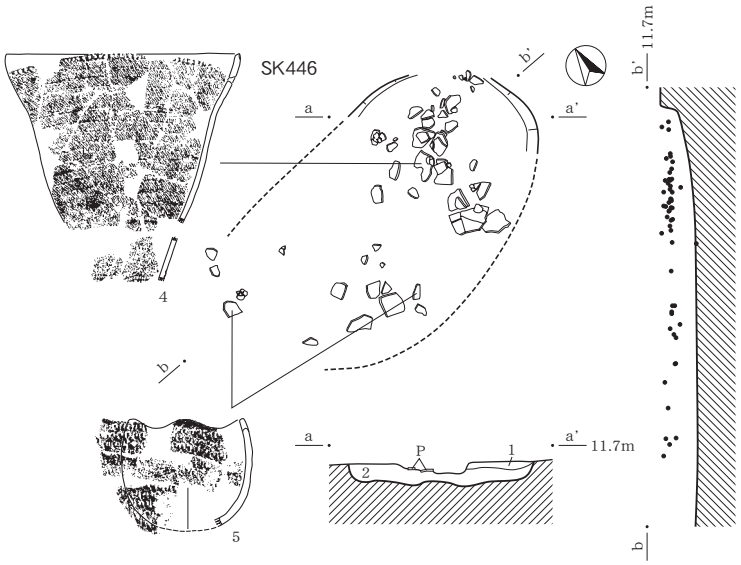
図 版 4

図 版 5

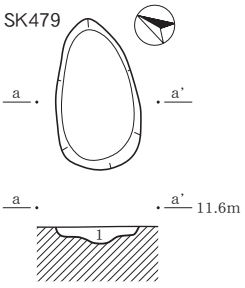
谷地遺跡縄文時代　遺構分割図（4）



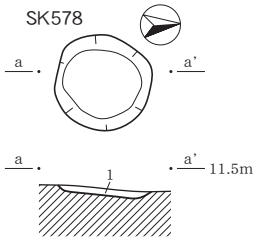
0　(1:150)　6m



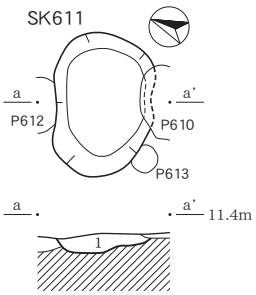
SK446
1. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト、礫を含む、しまり中、粘性やや強。
2. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性やや強。



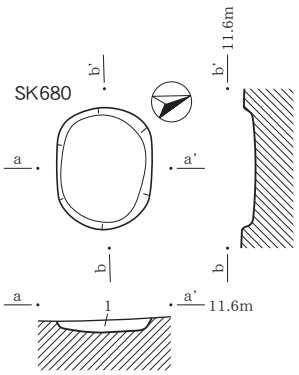
SK479
1. 7.5YR4/3 褐色粘質土、しまり弱、粘性中。



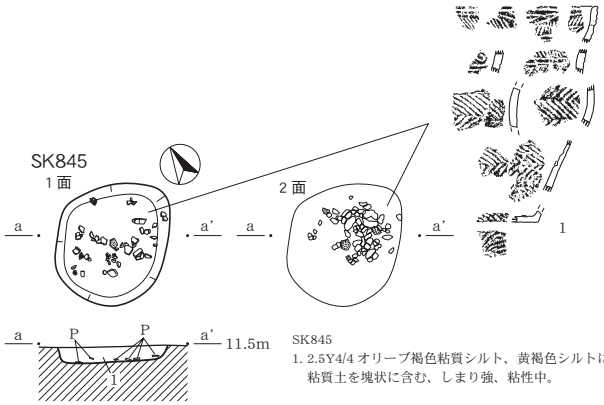
SK578
1. 7.5YR4/3 褐色粘質土、しまり弱、粘性中。



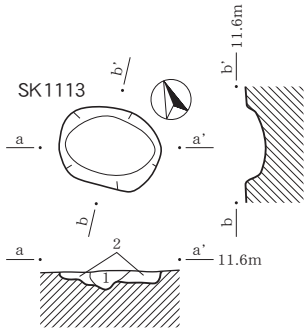
SK611
1. 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土、黄灰色粘土を塊状に多量含む、しまり中、粘性中。



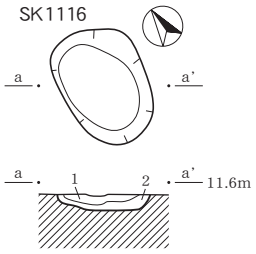
SK680
1. 7.5YR4/3 褐色粘質土、しまり弱、粘性中。



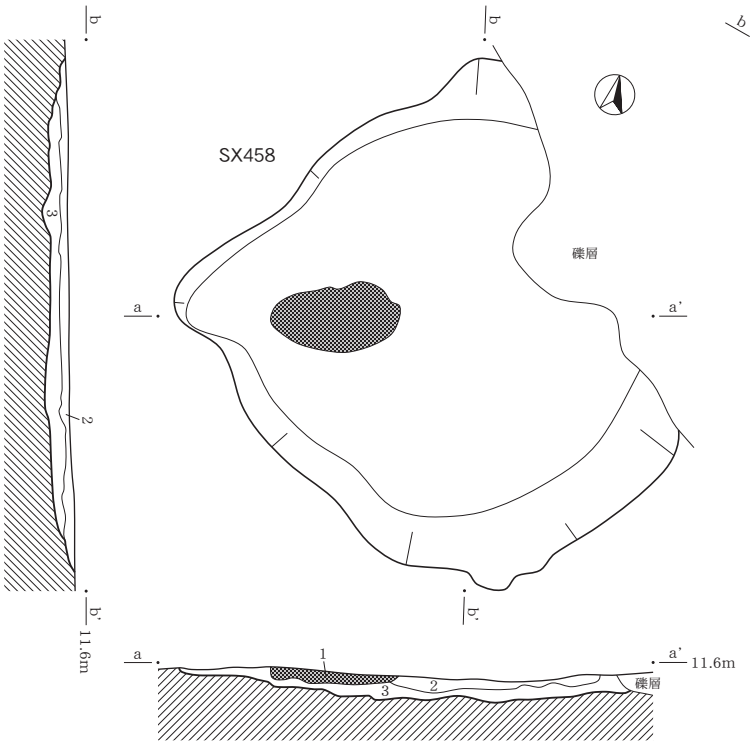
SK845
1. 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質シルト、黄褐色シルトに粘質土を塊状に含む、しまり強、粘性中。



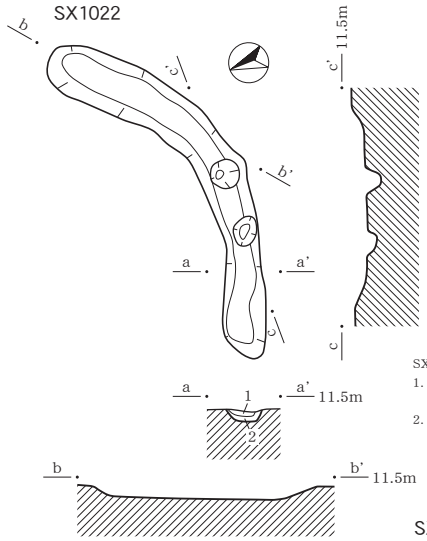
SK1113
1. 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト、2 層土を少量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR5/6 黄褐色砂質シルト、しまり強、粘性中。



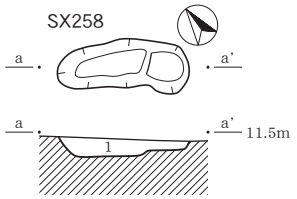
SK1116
1. 5YR3/2 暗赤褐色粘質シルト、黄褐色シルトを少量含む、しまり強、粘性強。
2. 5YR4/2 灰褐色砂質シルト、黄褐色シルトを中量含む、しまり中、粘性中。



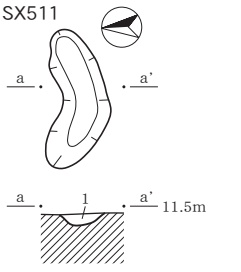
SX458
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、焼土と炭化物と鉄分を含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR2/2 黒褐色粘質土、鉄分を含む、しまり中、粘性中。
3. 10YR2/1 黒色粘質土、鉄分を含む、しまり中、粘性中。



SX1022
1. 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性強。
2. 10YR4/6 褐色砂質シルト、しまり中、粘性中。

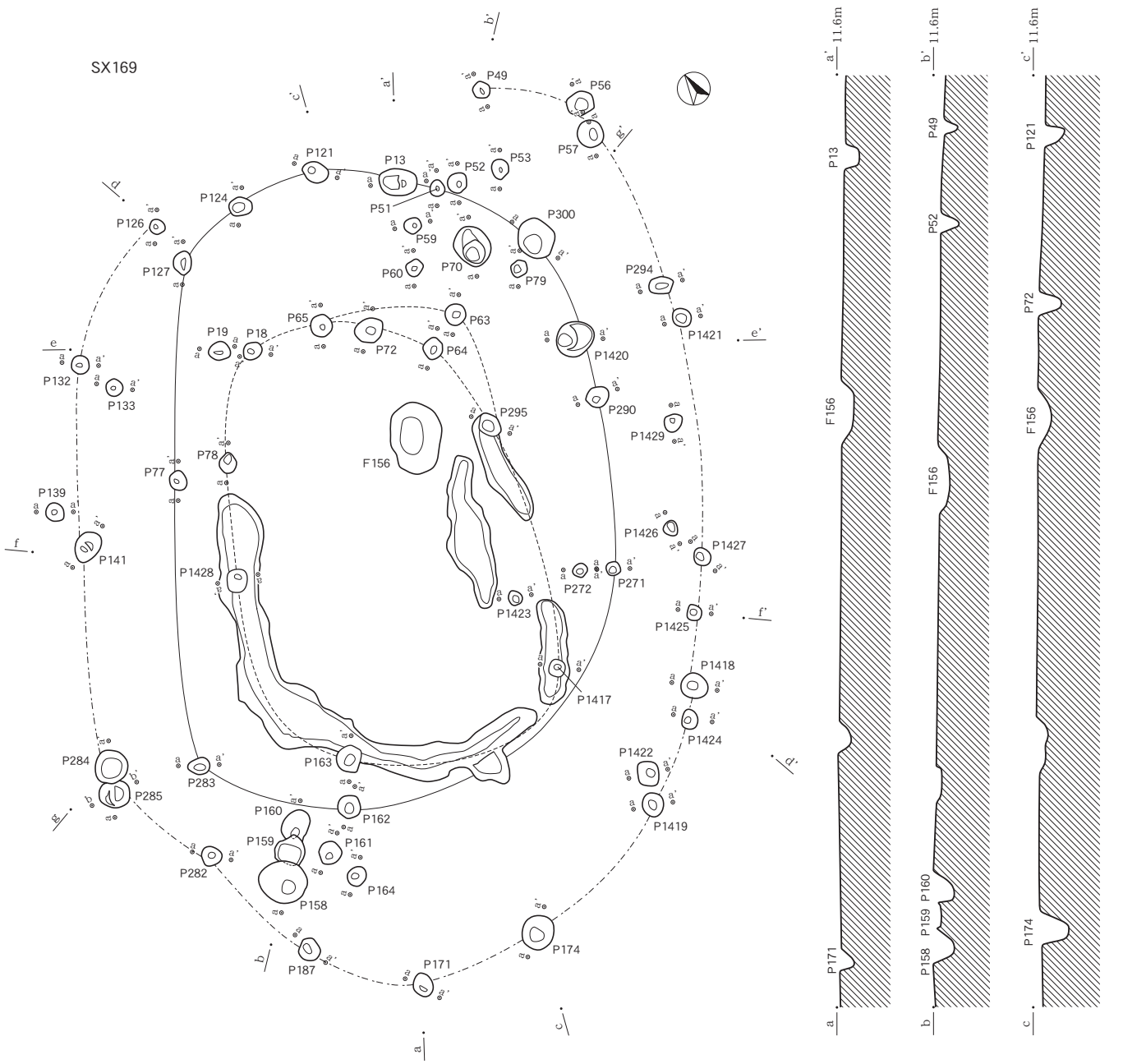


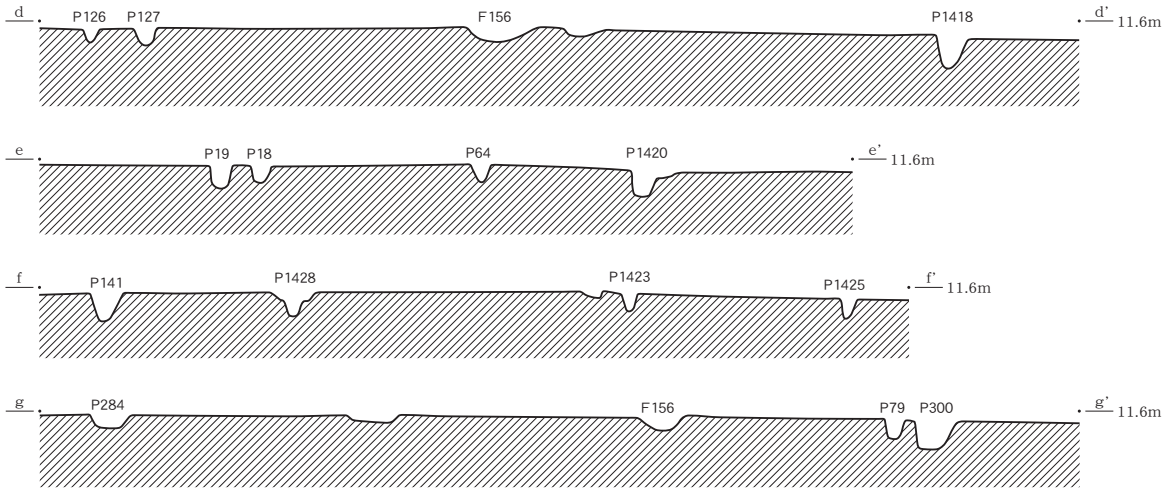
SX258
1. 7.5YR4/3 褐色粘質土、しまり弱、粘性中。

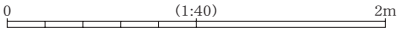


SX511
1. 7.5YR4/3 褐色粘質土、しまり弱、粘性中。

0　(1:40)　2m

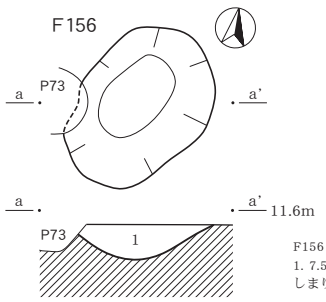

SX169
P49
P56
P57
P121
P13
P52
P53
P51
P124
P126
P127
P300
P59
P70
P60
P79
P294
P1421
P65
P63
P19
P18
P72
P64
P1420
P132
P133
P290
P295
P1429
F156
P78
P77
P139
P141
P1426
P1427
P1428
P272
P271
P1423
P1425
P1418
P1417
P1424
P284
P163
P1422
P283
P285
P160
P162
P1419
P159
P161
P282
P164
P158
P174
P187
P171
a
a'
11.6m
P13
F156
P171
b
b'
P49
P52
F156
P158
P159
P160
c
c'
P121
P72
F156
P174


d
P126
P127
F156
P1418
d'
11.6m
e
P19
P18
P64
P1420
e'
11.6m
f
P141
P1428
P1423
P1425
f'
11.6m
g
P284
F156
P79
P300
g'
11.6m

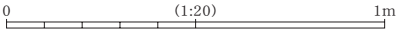

0
(1:40)
2m

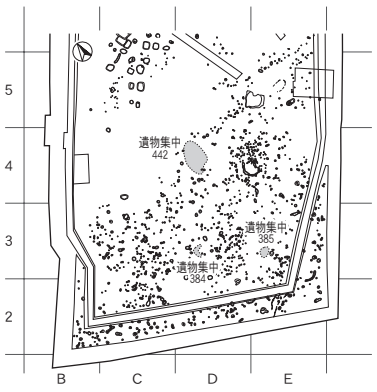
SX169

P13・18・19・49・51～53・56・57・59・60・63～65・70・72・77～79・121・124・126・127・132・133・139・141・158～164・171・174・187・271・272・282～285・290・294・295・300・1417～1429
1. 7.5YR4/3 褐色粘質土、しまり弱、粘性中。



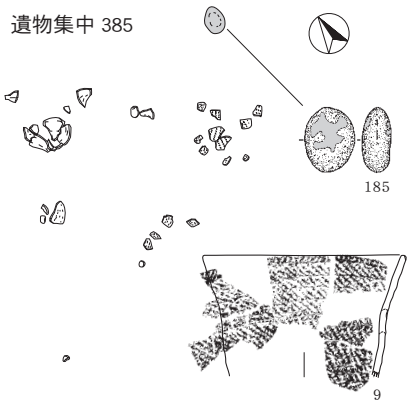
F156
1. 7.5YR4/3 褐色粘質土、炭化物を少量含む、しまり弱、粘性中。



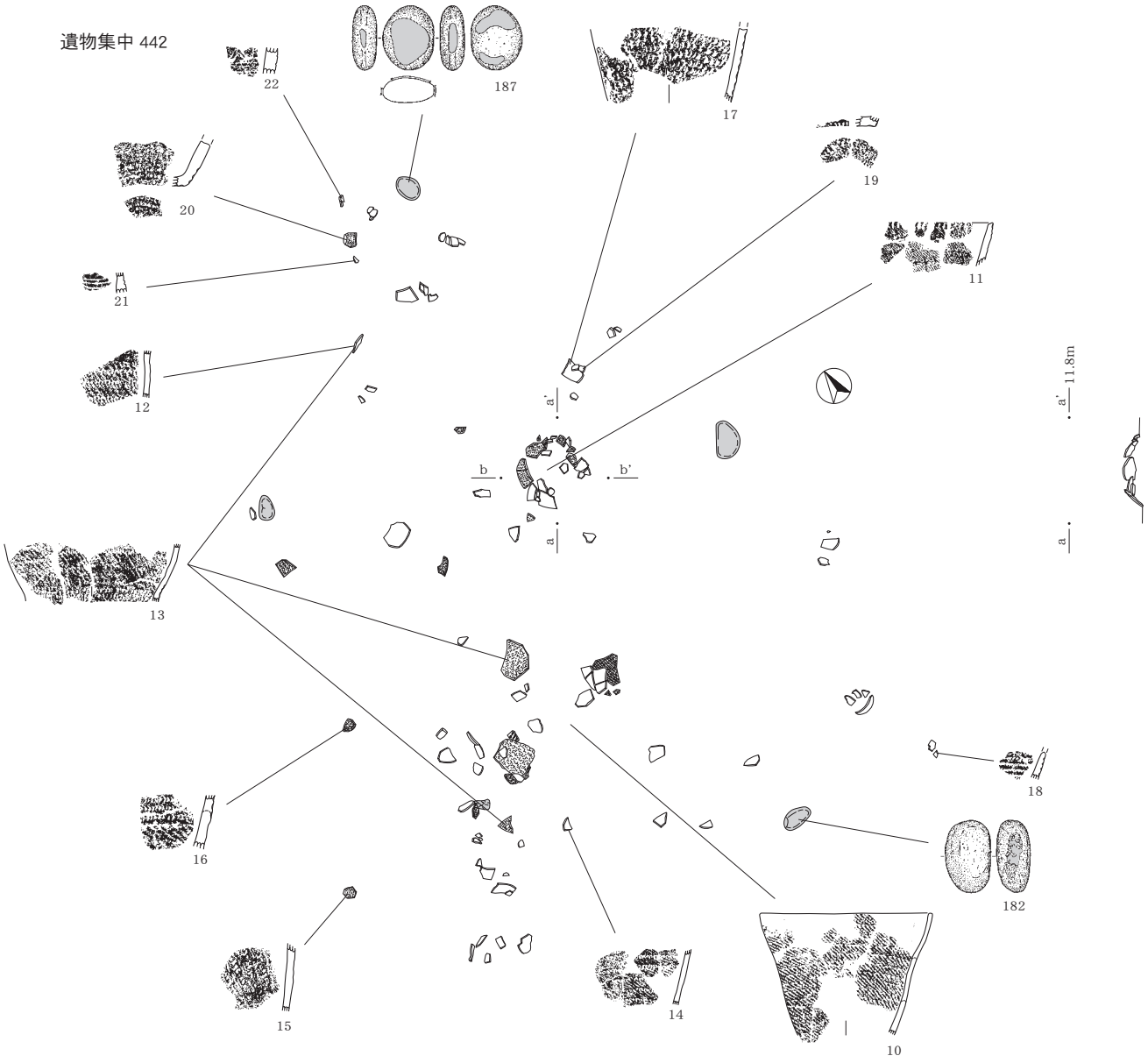


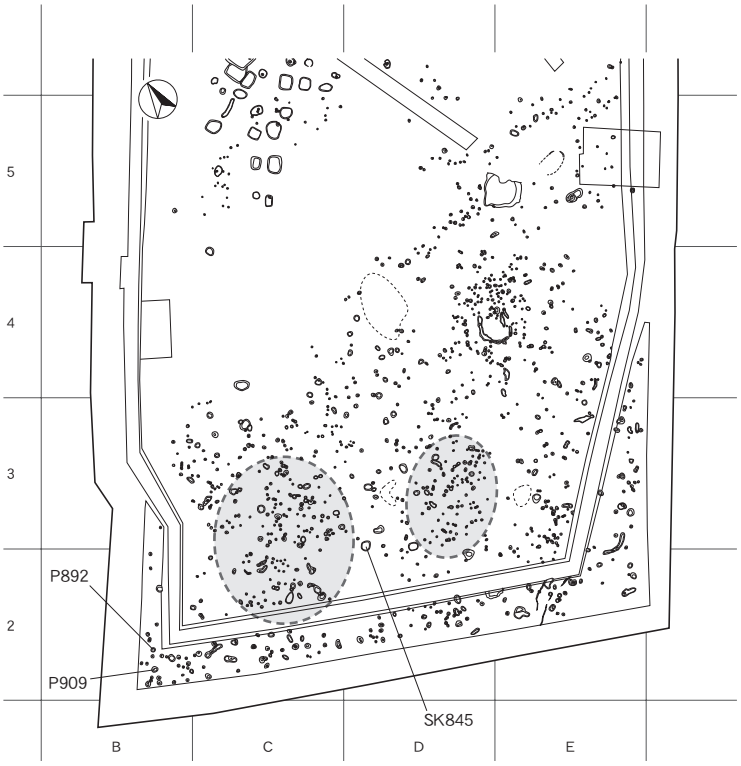
遺物集中 384

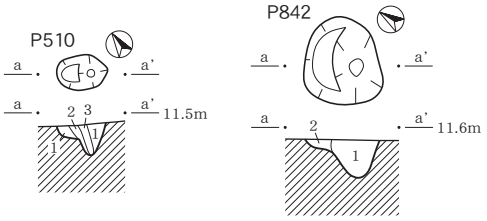
遺物集中 385



遺物集中 442

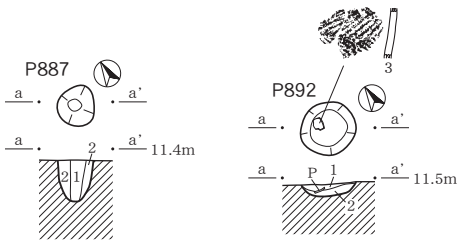






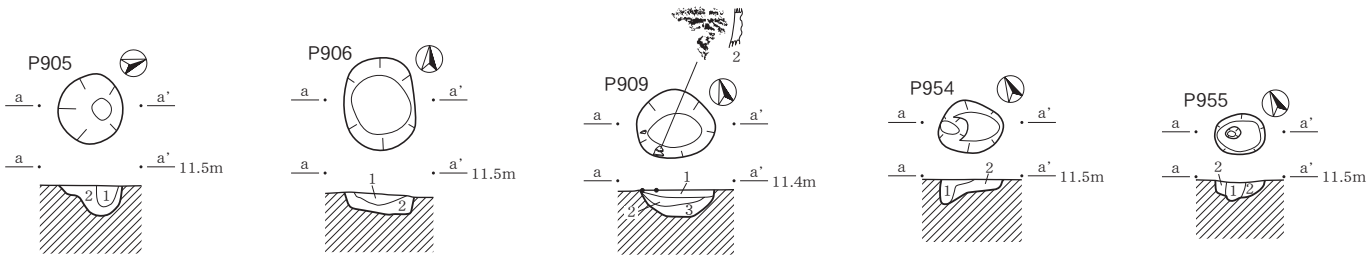
P510
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土、Ⅷa層土を塊状に含む、しまり弱、粘性中。
2. 5Y5/3 灰オリーブ色砂質シルト、しまり強、粘性弱。
3. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト質土、しまり弱、粘性強。

P842
1. 5YR3/2 黒褐色砂質シルト、小礫を少量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR5/6 黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中。



P887
1. 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に多量含む、しまり中、粘性強。
2. 10YR4/4 褐色砂質シルト、しまり強、粘性強。

P892
1. 7.5YR3/2 黒褐色粘質シルト、しまり強、粘性強。
2. 10YR5/6 黄褐色粘質シルト、しまり強、粘性強。



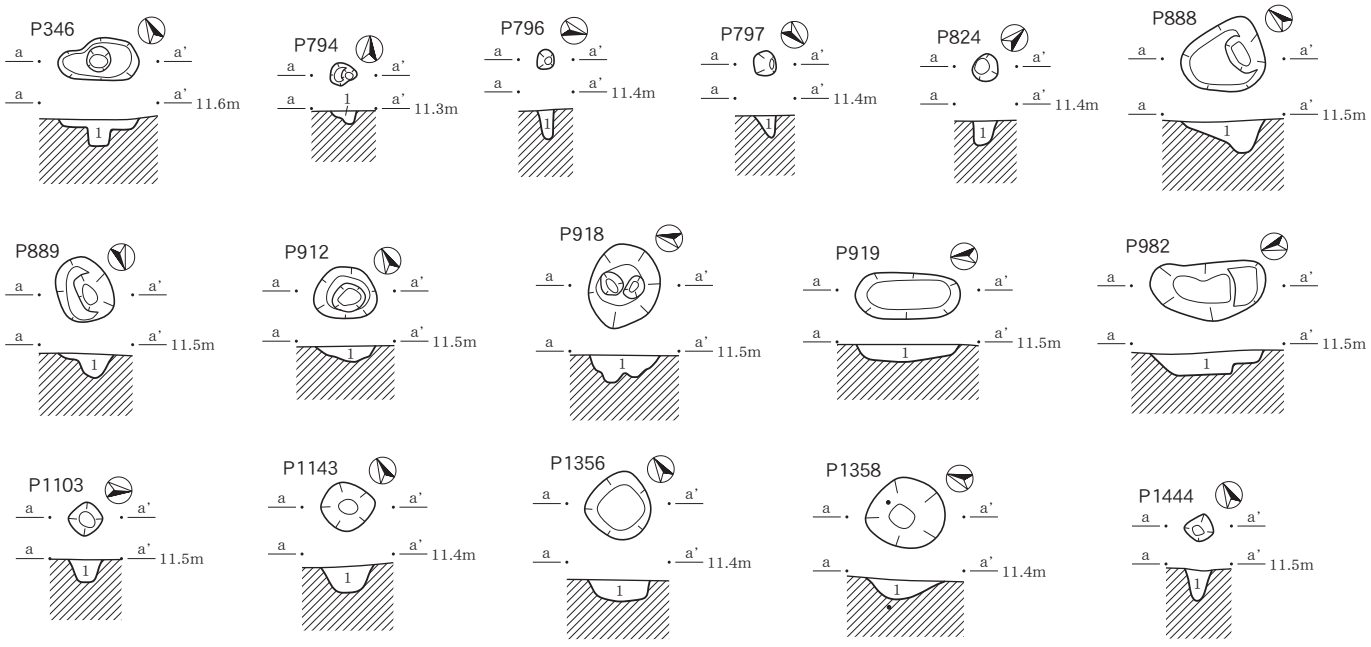
P905
1. 5YR3/2 暗赤褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に少量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR5/6 黄褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に多量含む、しまり強、粘性強。

P906
1. 7.5YR4/1 褐灰色砂質シルト、しまり中、粘性中。
2. 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト、礫を少量含む、しまり強、粘性強。

P909
1. 5YR4/3 にぶい赤褐色砂質シルト、しまり中、粘性強。
2. 5YR5/3 にぶい赤褐色砂質シルト、しまり中、粘性強。
3. 5YR5/3 にぶい赤褐色砂質シルト、砂微量含む、しまり中、粘性弱。

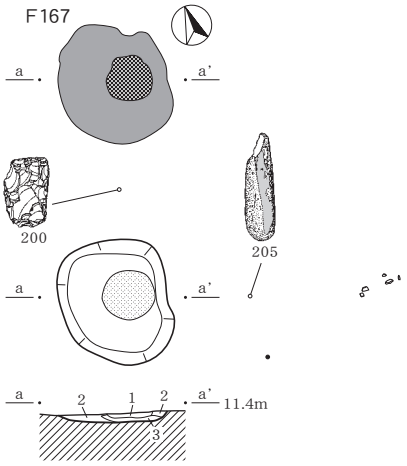
P954
1. 5YR5/3 にぶい赤褐色砂質シルト、しまり中、粘性強。
2. 7.5YR6/2 灰褐色砂質シルト、しまり中、粘性中。

P955
1. 5YR5/2 灰褐色砂質シルト、黄褐色シルトを中量含む、しまり中、粘性中。
2. 5YR6/2 灰褐色砂質シルト、黄褐色シルトを多量含む、しまり中、粘性強。

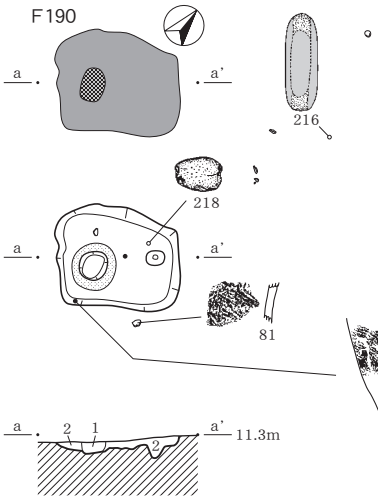


P346・794・796・797・824・888・889・912・918・919・982・1103・1143・1356・1358・1444
1. 7.5YR4/3 褐色粘質土、しまり弱、粘性中。

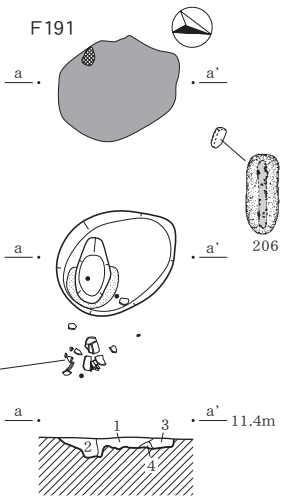
0　(1:40)　2m



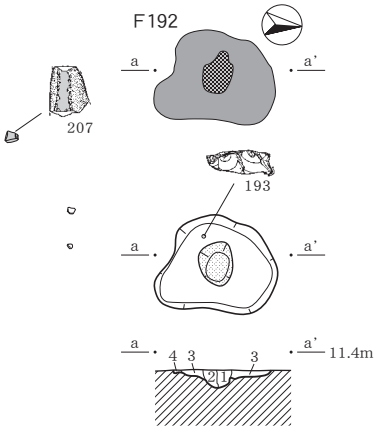
F167
1. 5YR4/3 にぶい赤褐色砂質シルト、焼土を含む、しまり弱、粘性弱。
2. 7.5YR2/1 黒色土、炭化物層、しまり弱、粘性弱。
3. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質シルト、炭化物を含む、しまり弱、粘性弱。

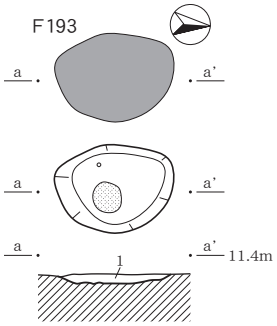


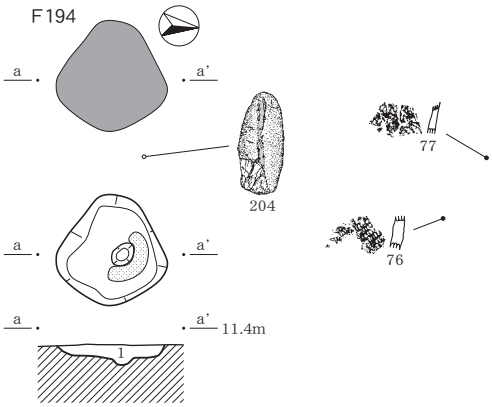
F190
1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、2 層土を塊状に含む、灰・焼土を含む、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト、焼土を含む、しまり強、粘性弱。



F191
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト、灰・焼土・炭化物を含む、しまり中、粘性中。
2. 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト、1 層土を塊状に含む、灰を含む、しまり弱、粘性中。
3. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、1 層土を塊状に含む、焼土・炭化物を含む、しまり弱、粘性中。
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト、しまり強、粘性中。



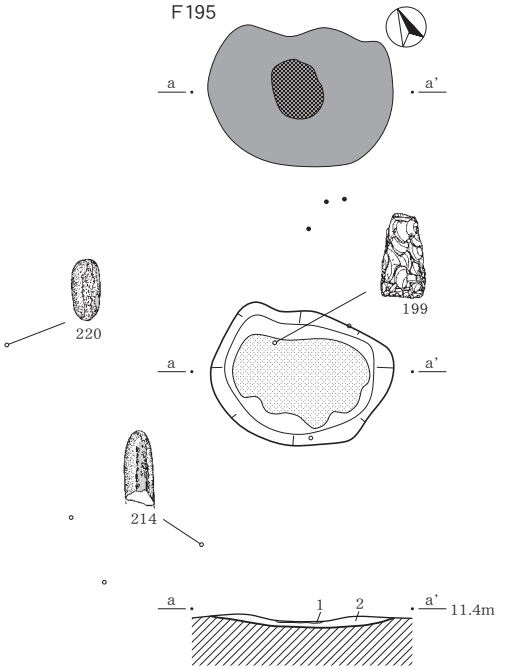


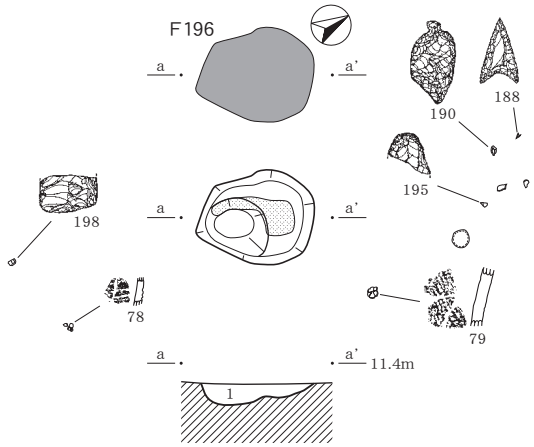


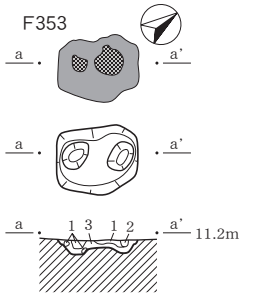
F192
1. 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト、3 層土を塊状に含む、灰・焼土・炭化物を含む、しまり中、粘性弱。
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト、3 層土を塊状に含む、灰を多量含む、しまり中、粘性弱。
3. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト、灰・焼土・炭化物を含む、しまり中、粘性中。
4. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、炭化物を中量含む、しまり中、粘性強。

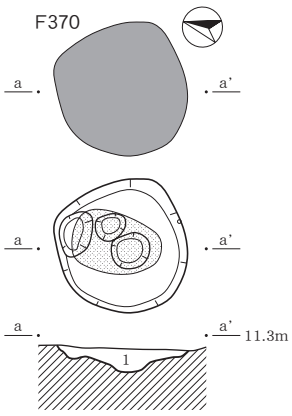
F193
1. 7.5YR2/2 黒褐色シルト質粘土、焼土を少量含む、しまり中、粘性中。

F194
1. 7.5YR2/2 黒褐色シルト質粘土、焼土を塊状に少量含む、炭化物を多量含む、しまり中、粘性強。









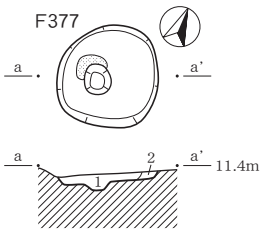
F195
1. 5YR4/3 にぶい赤褐色砂質シルト、焼土を含む、しまり弱、粘性弱。
2. 5YR2/1 黒色土、炭化物層、しまり弱、粘性弱。

F196
1. 7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト、褐灰色粘土を塊状に含む、焼土・炭化物を含む、しまり中、粘性中。

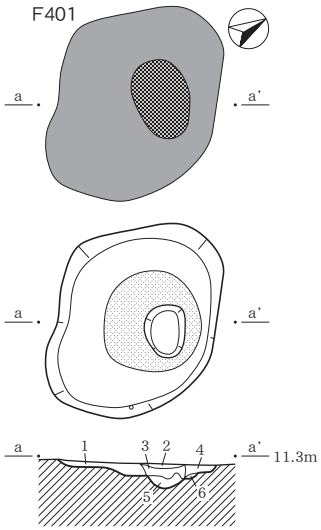
F353
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト、焼土を含む、しまり中、粘性中。
2. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト、灰を含む、しまり弱、粘性弱。
3. 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト、1 層土を塊状に含む、炭化物を含む、しまり強、粘性弱。

F370
1. 7.5YR3/1 黒褐色シルト質粘土、炭化物を含む、しまり中、粘性中。

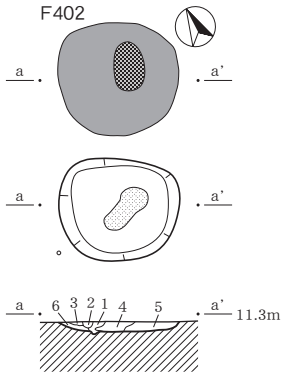
0　(1:40)　2m



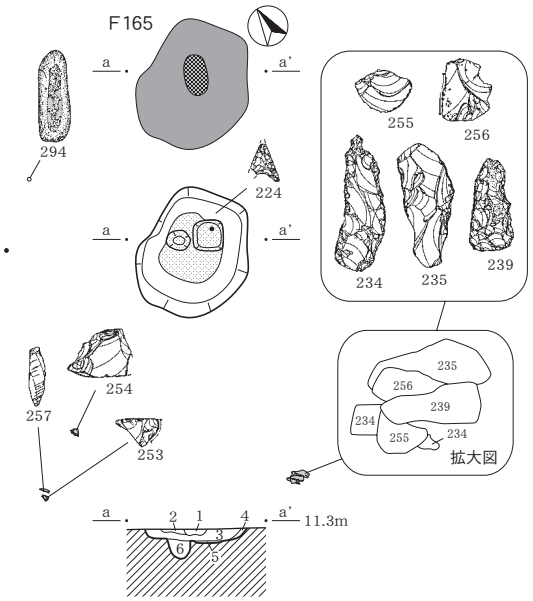
F377
1. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト、炭化物を多量含む、しまり中、粘性弱。
2. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト、炭化物を少量含む、しまり中、粘性弱。



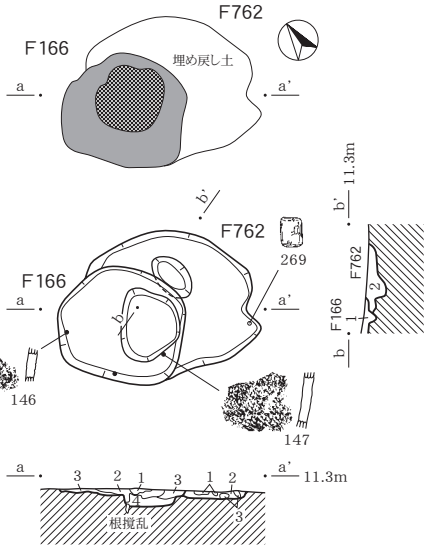
F401
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト、炭化物を含む、しまり中、粘性中。
2. 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト、灰と焼土を含む、しまり中、粘性中。
3. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、焼土と炭化物を含む、しまり弱、粘性弱。
4. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト、炭化物を含む、しまり中、粘性中。
5. 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト、しまり弱、粘性中。
6. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、炭化物を少量含む、しまり中、粘性中。



F402
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト、炭化物を含む、しまり中、粘性中。
2. 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト、炭化物を含む、しまり中、粘性中。
3. 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト、炭化物を含む、しまり中、粘性中。
4. 2.5Y7/2 灰黄色砂質シルト、焼土を含む、しまり弱、粘性なし。
5. 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト、炭化物を含む、しまり中、粘性弱。
6. 2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト、炭化物を含む、しまり中、粘性弱。

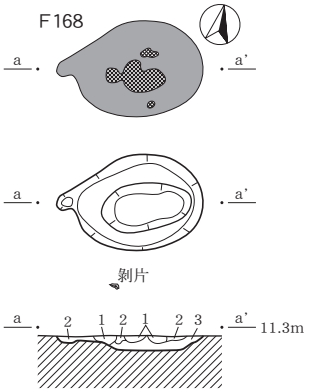


F165
1. 5YR4/3 にぶい赤褐色砂質シルト、焼土を含む、しまり弱、粘性弱。
2. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト、炭化物を含む、しまり弱、粘性中。
3. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト、炭化物を微量含む、しまり弱、粘性中。
4. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、炭化物を少量含む、しまり弱、粘性中。
5. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、炭化物を含む、しまり弱、粘性中。
6. 10YR7/2 にぶい黄橙色粘質シルト、灰と焼土を含む、しまり中、粘性中。

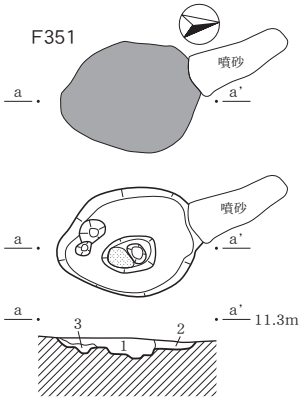


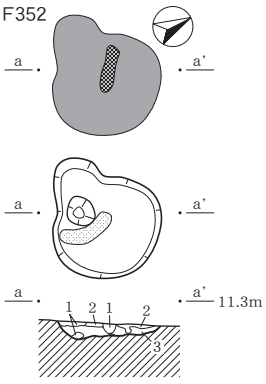
F166
1. 5YR5/4 にぶい赤褐色粘質シルト、薄く焼土が広がる、しまり強、粘性弱。
2. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト、上位に灰・焼土・炭化物を含む、しまり強、粘性弱。
3. 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト、炭化物を含む、しまり強、粘性弱。
4. 2.5Y4/2 明灰黄色粘質シルト、2 層土を塊状に含む、灰を含む、しまり中、粘性弱。

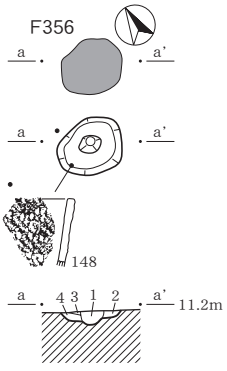
F762
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト、しまり強、粘性中。
2. 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト、1 層土とⅧb 層土を塊状に含む、灰・焼土・炭化物を含む、しまり中、粘性中。
3. 2.5Y7/1 灰白色粘質シルト、しまり弱、粘性中。

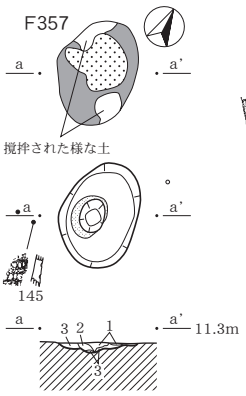


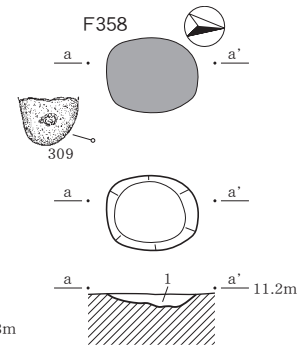
F168
1. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト、焼土と炭化物を多量含む、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト、しまり中、粘性中。
3. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。











F358
1. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト、炭化物を多量含む、しまり弱、粘性中。

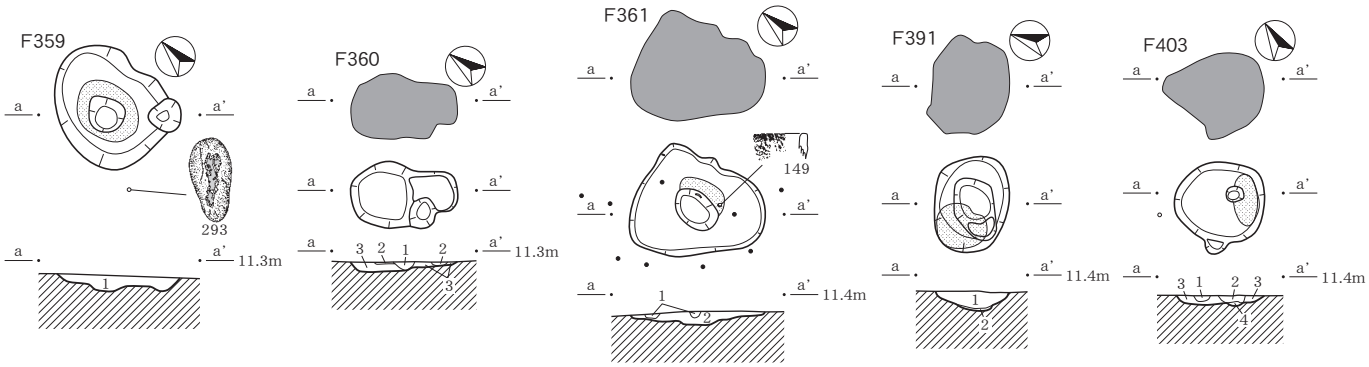
F351
1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、黒褐色粘土を塊状に含む、灰・焼土・炭化物を含む、しまり中、粘性中。
2. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、炭化物を含む、しまり強、粘性弱。
3. 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト、炭化物を含む、しまり中、粘性中。

F352
1. 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト、焼土・炭化物を含む、しまり強、粘性中。
2. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、1 層土を塊状に含む、焼土を含む、しまり中、粘性中。
3. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、炭化物を含む、しまり中、粘性弱。

F356
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト、しまり中、粘性中。
2. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、しまり中、粘性中。
3. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、しまり弱、粘性中。
4. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。

F357
1. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト、炭化物を多量含む、しまり中、粘性弱。
2. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト、炭化物を少量含む、しまり弱、粘性弱。
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト、炭化物を少量含む、しまり弱、粘性弱。

0　(1:40)　2m



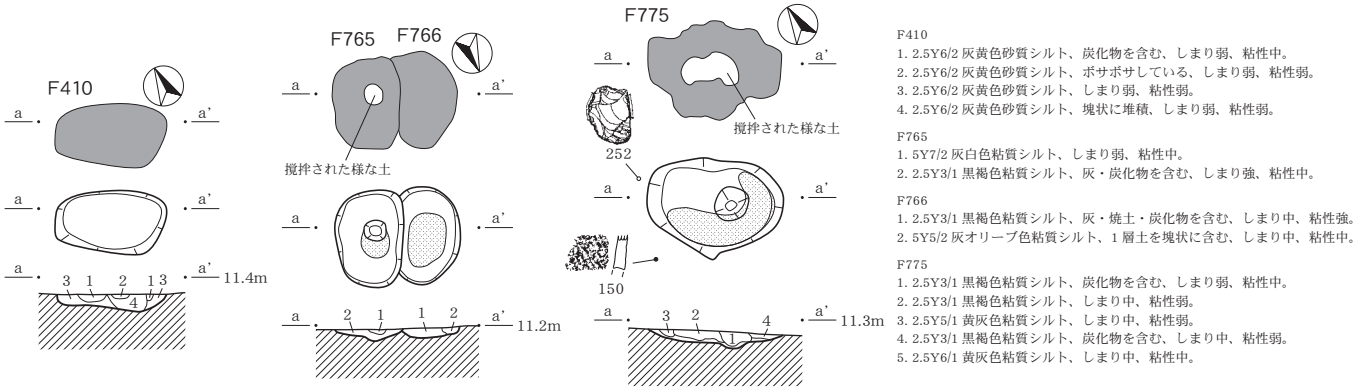
F359
1. 7.5YR3/1 黒褐色シルト質粘土、黄褐色粘土を塊状に多量含む、焼土・炭化物を含む、しまり中、粘性弱。

F360
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土、炭化物を多量含む、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土、炭化物を少量含む、しまり弱、粘性中。
3. 2.5Y4/2 暗黄灰色粘質土、炭化物を少量含む、しまり弱、粘性中。

F361
1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、炭化物を微量含む、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト、しまり弱、粘性中。

F391
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土、炭化物を多量含む、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y5/2 暗黄灰色粘質土、しまり弱、粘性強。

F403
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト、炭化物を多量含む、しまり中、粘性中。
2. 2.5Y7/3 浅黄色砂質シルト、炭化物を少量含む、しまり中、粘性弱。
3. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。

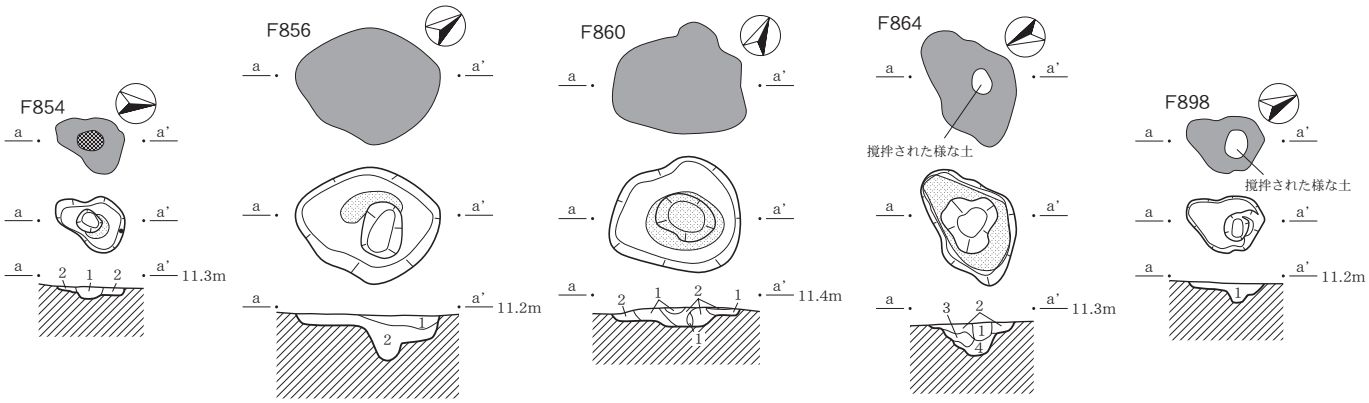


F410
1. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、炭化物を含む、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、ボサボサしている、しまり弱、粘性弱。
3. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。
4. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、塊状に堆積、しまり弱、粘性弱。

F765
1. 5Y7/2 灰白色粘質シルト、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト、灰・炭化物を含む、しまり強、粘性中。

F766
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト、灰・焼土・炭化物を含む、しまり中、粘性強。
2. 2.5Y5/2 灰オリーブ色粘質シルト、1 層土を塊状に含む、しまり中、粘性中。

F775
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト、炭化物を含む、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト、しまり中、粘性弱。
3. 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト、しまり中、粘性弱。
4. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト、炭化物を含む、しまり中、粘性弱。
5. 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト、しまり中、粘性中。



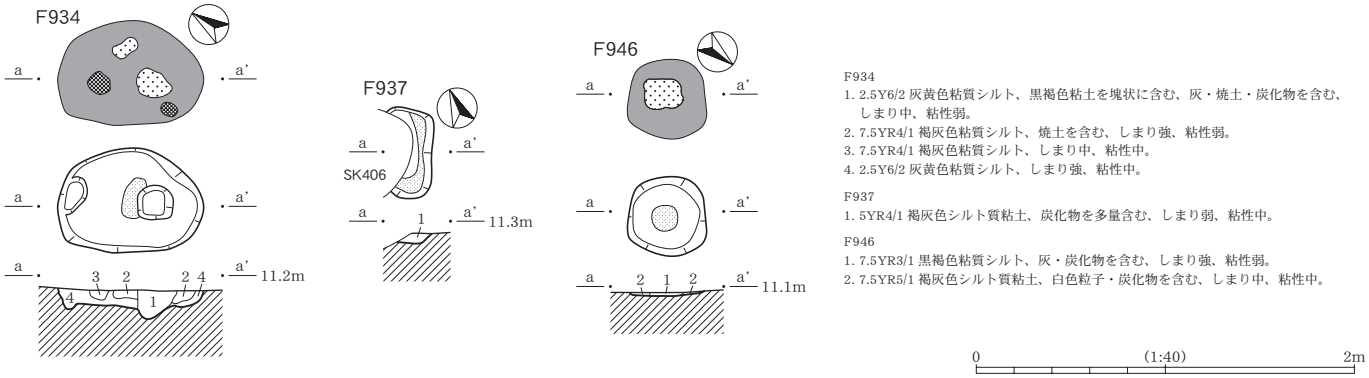
F854
1. 7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト、灰・焼土・炭化物を含む、しまり弱、粘性中。
2. 7.5YR6/1 褐灰色粘質シルト、炭化物を斑状に含む、しまり中、粘性強。

F856
1. 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト、炭化物を微量含む、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト、浅黄色粘土を塊状に含む、炭化物を中量含む、しまり中、粘性強。

F860
1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土、炭化物を少量含む、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土、炭化物を多量含む、しまり弱、粘性中。

F864
1. 2.5Y8/2 灰白色粘質シルト、炭化物を微量含む、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト、灰・炭化物を少量含む、しまり強、粘性弱。
3. 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルト、しまり中、粘性中。
4. 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト、Ⅷb 層土を塊状に含む、しまり弱、粘性中。

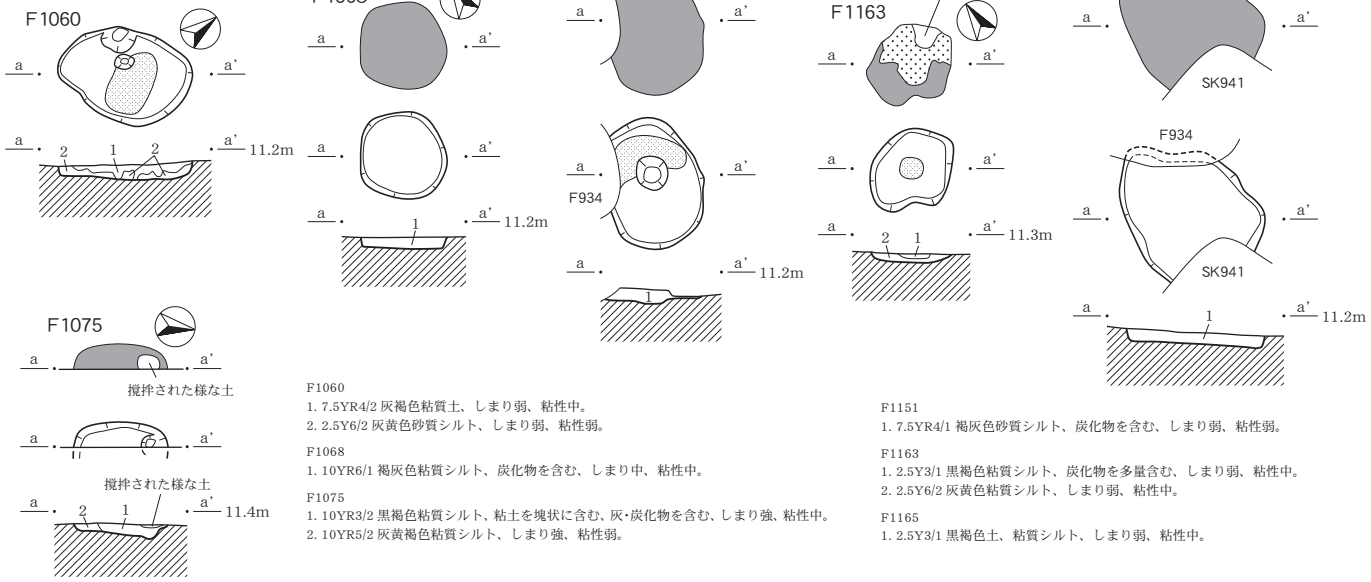
F898
1. 10YR5/1 褐灰色シルト質粘土、灰白色粘土を塊状に含む、炭化物を含む、しまり中、粘性中。



F934
1. 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト、黒褐色粘土を塊状に含む、灰・焼土・炭化物を含む、しまり中、粘性弱。
2. 7.5YR4/1 褐灰色粘質シルト、焼土を含む、しまり強、粘性弱。
3. 7.5YR4/1 褐灰色粘質シルト、しまり中、粘性中。
4. 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト、しまり強、粘性中。

F937
1. 5YR4/1 褐灰色シルト質粘土、炭化物を多量含む、しまり弱、粘性中。

F946
1. 7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト、灰・炭化物を含む、しまり強、粘性弱。
2. 7.5YR5/1 褐灰色シルト質粘土、白色粒子・炭化物を含む、しまり中、粘性中。



F1060
1. 7.5YR4/2 灰褐色粘質土、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。

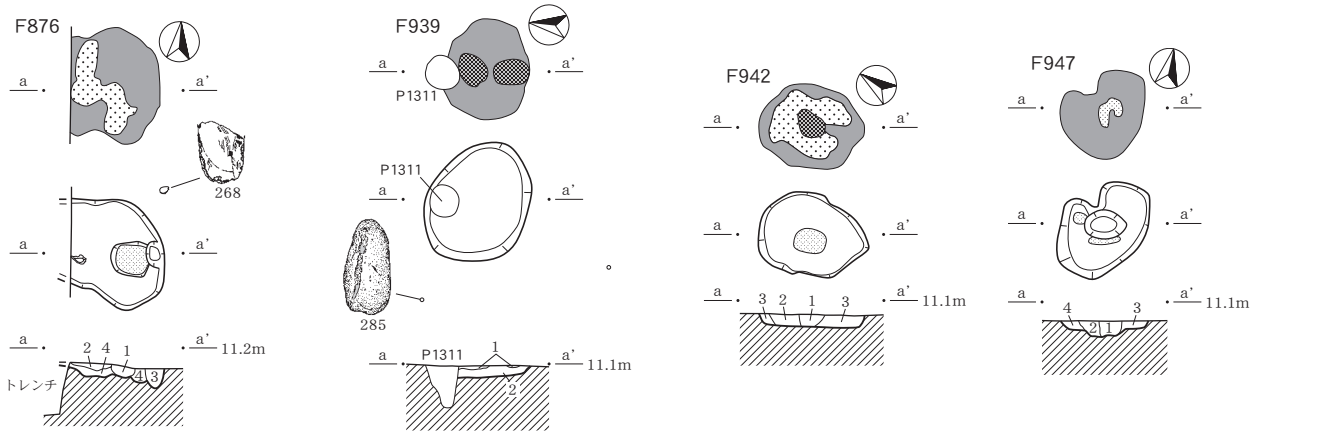
F1068
1. 10YR6/1 褐灰色粘質シルト、炭化物を含む、しまり中、粘性中。

F1075
1. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト、粘土を塊状に含む、灰･炭化物を含む、しまり強、粘性中。
2. 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト、しまり強、粘性弱。

F1151
1. 7.5YR4/1 褐灰色砂質シルト、炭化物を含む、しまり弱、粘性弱。

F1163
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト、炭化物を多量含む、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト、しまり弱、粘性中。

F1165
1. 2.5Y3/1 黒褐色土、粘質シルト、しまり弱、粘性中。

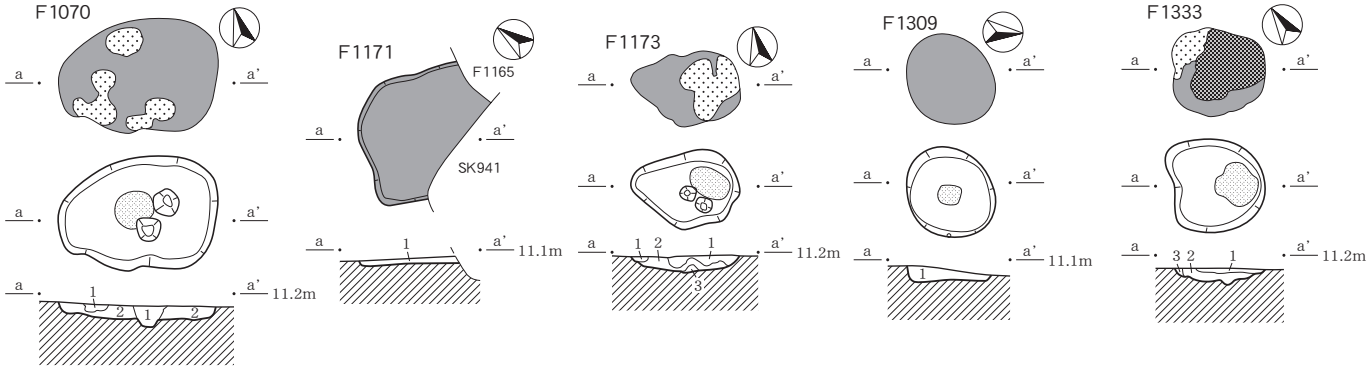


F876
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質シルト、灰・炭化物を含む、しまり強、粘性弱。
3. 5Y5/2 灰オリーブ色粘質シルト、炭化物を含む、しまり強、粘性中。
4. 5Y6/1 灰色砂質シルト、1 層土を塊状に含む、しまり弱、粘性中。

F939
1. 7.5YR3/1 黒褐色シルト質粘土、灰・焼土を含む、しまり強、粘性中。
2. 2.5Y6/1 黄灰色シルト質粘土、炭化物を斑状に含む、しまり中、粘性中。

F942
1. 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト、黒褐色土を塊状に含む、焼土を含む、しまり弱、粘性強。
2. 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト、Ⅸ層土を塊状に含む、灰・炭化物を含む、しまり中、粘性中。
3. 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト、黒褐色粘土を塊状に含む、炭化物を含む、しまり中、粘性弱。

F947
1. 2.5Y8/1 灰白色シルト質粘土、黒褐色粘土を塊状に含む、灰を含む、しまり弱、粘性強。
2. 2.5Y5/1 黄灰色シルト質粘土、黒褐色粘土を塊状に含む、灰・炭化物を含む、しまり中、粘性弱。
3. 2.5Y3/1 黒褐色シルト質粘土、灰と炭化物を含む、しまり中、粘性中。
4. 2.5Y7/1 灰白色シルト質粘土、炭化物を斑状に含む、しまり弱、粘性強。



F1070
1. 7.5YR4/2 灰褐色粘質シルト、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト、しまり中、粘性弱。

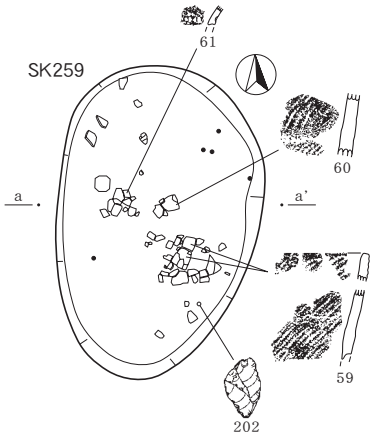
F1171
1. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、炭化物を含む、しまり中、粘性弱。

F1173
1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土、炭化物を多量含む、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、しまり中、粘性弱。
3. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、ボサボサしている、しまり弱、粘性弱。

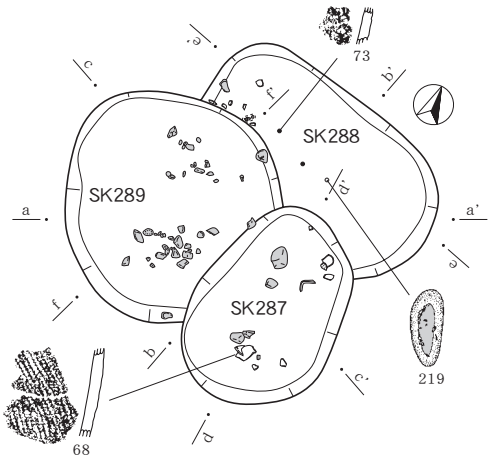
F1309
1. 10YR6/1 褐灰色シルト質粘土、炭化物を含む、しまり中、粘性強。

F1333
1. 5Y6/2 灰オリーブ色粘質シルト、φ 1.0cm ほどの礫・焼土・炭化物を含む、しまり中、粘性中。
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質シルト、炭化物を含む、しまり強、粘性中。
3. 5Y5/2 灰オリーブ色粘質シルト、炭化物を含む、しまり中、粘性中。

0　(1:40)　2m



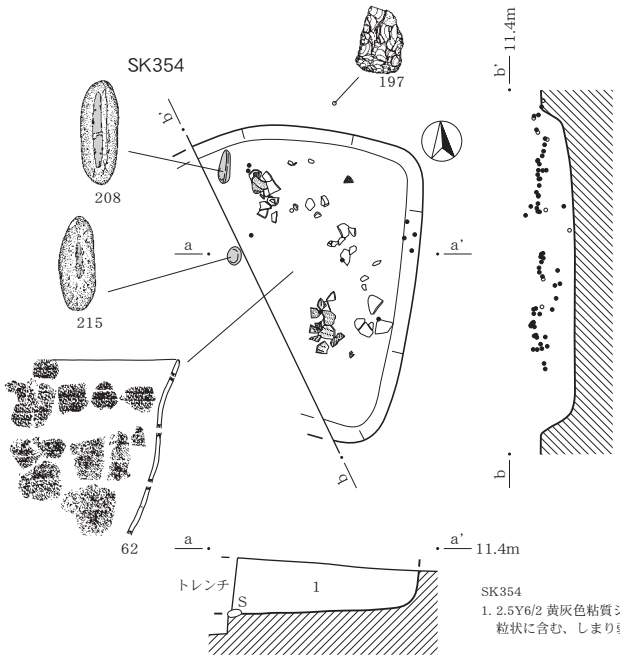
SK259
1. 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト、しまり弱、粘性中。



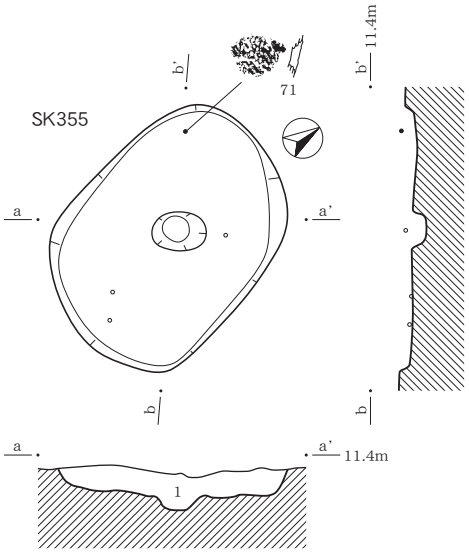
SK287
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土、炭化物を多量含む、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土、φ 3.0 ～ 5.0cm の礫を多量含む、しまり弱、粘性弱。
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト質土、しまり弱、粘性中。

SK288
1. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルト、しまり弱、粘性中。

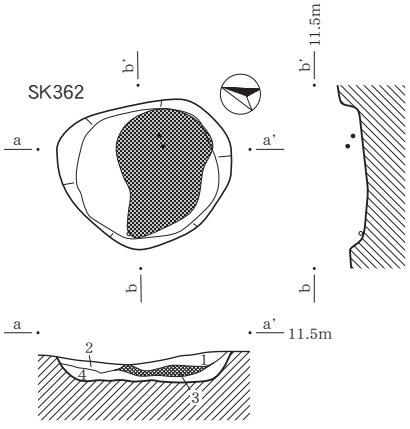
SK289
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土、（Ⅷa 層土）、炭化物を多量含む、しまり弱、粘性弱。
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土、φ 1.0 ～ 2.0cm の礫を含む、しまりなし、粘性なし。
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト質土、しまり弱、粘性弱。



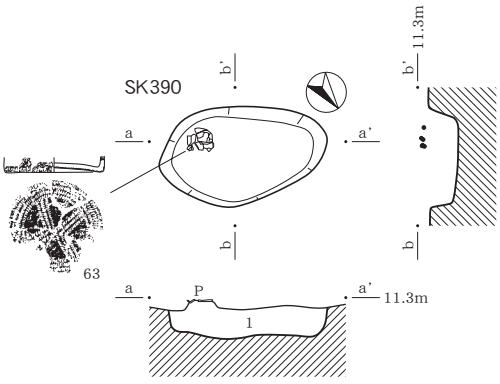
SK354
1. 2.5Y6/2 黄灰色粘質シルト、炭化物を粒状に含む、しまり弱、粘性中。



SK355
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土、炭化物を含む、しまり弱、粘性中。

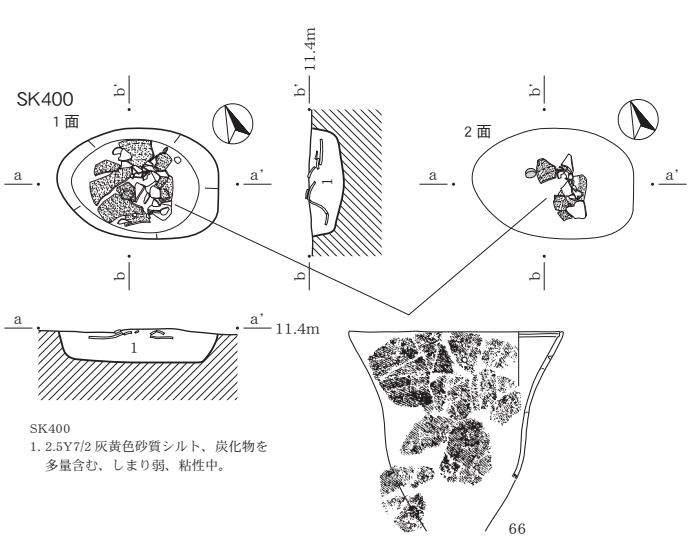


SK362
1. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質シルト、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト、しまり弱、粘性中。
3. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト、焼土と炭化物を多量含む、しまり弱、粘性弱。
4. 2.5Y6/1 黄灰色シルト質粘土、しまり弱、粘性中。

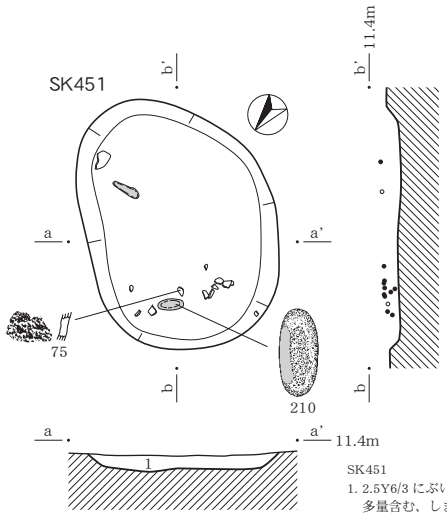


SK390
1. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質粘土、炭化物を多量含む、しまり中、粘性中。

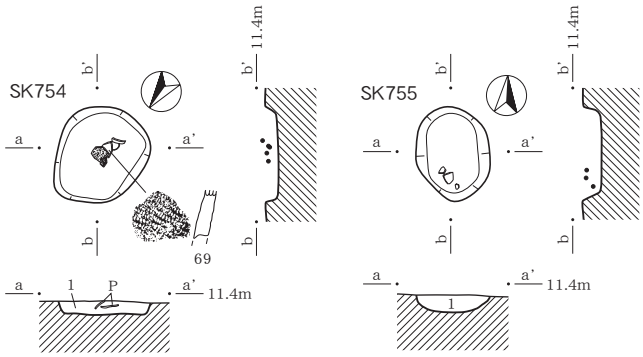
0　(1:40)　2m



SK400
1. 2.5Y7/2 灰黄色砂質シルト、炭化物を多量含む、しまり弱、粘性中。

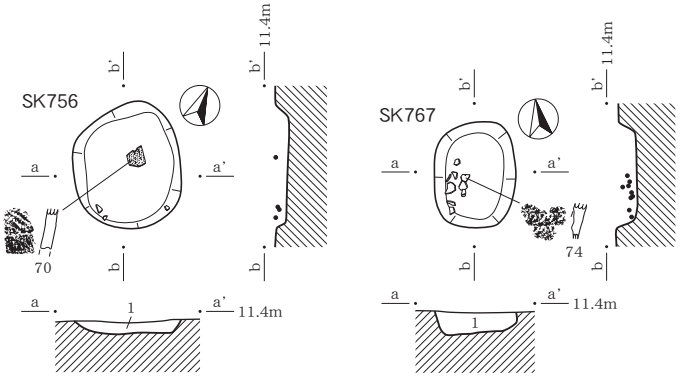


SK451
1. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質シルト、炭化物を多量含む、しまり弱、粘性弱。



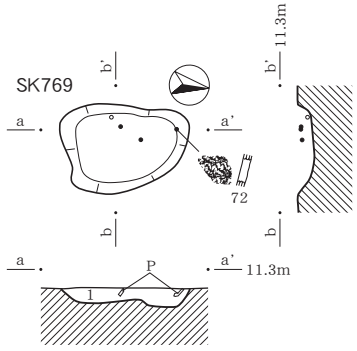
SK754
1. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質シルト、φ 0.5 ～ 1.0cm の炭化物を多量含む、しまり弱、粘性弱。

SK755
1. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質シルト、φ 0.5 ～ 1.0cm の炭化物を多量含む、しまり弱、粘性弱。

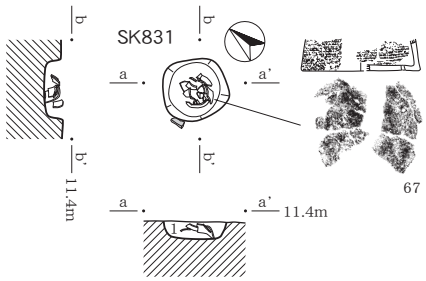


SK756
1. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質シルト、φ 0.5 ～ 1.0cm の炭化物を多量含む、しまり弱、粘性弱。

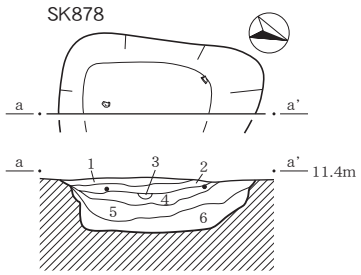
SK767
1. 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト、φ 0.5 ～ 1.0cm の炭化物を含む、しまり弱、粘性中。



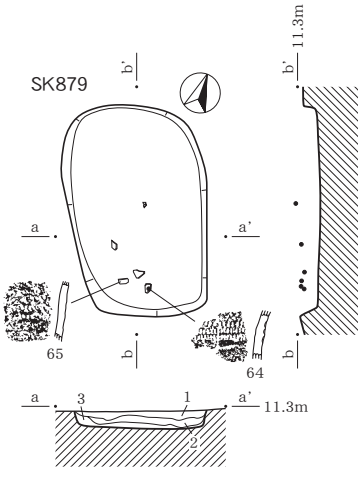
SK769
1. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質粘土、浅黄色シルトを塊状に含む、炭化物を含む、しまり中、粘性強。



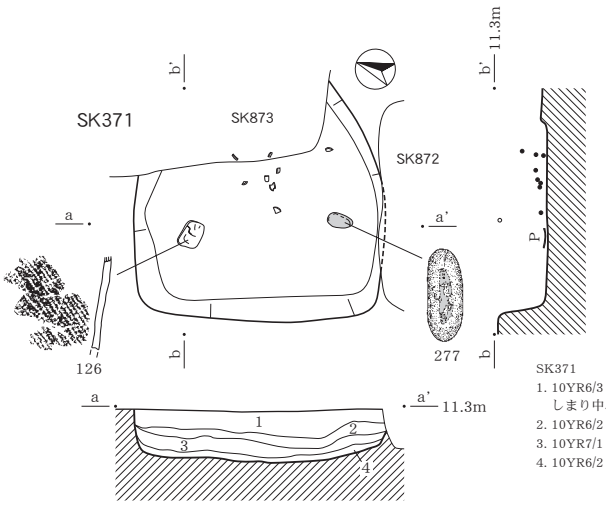
SK831
1. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質シルト、炭化物を多量含む、しまり弱、粘性弱。



SK878
1. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。
2. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト、炭化物を含む、しまり弱、粘性弱。
3. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。
4. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト、炭化物層、しまり弱、粘性中。
5. 2.5Y7/2 灰黄色砂質シルト、炭化物を少量含む、しまり弱、粘性弱。
6. 2.5Y7/1 灰白色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。

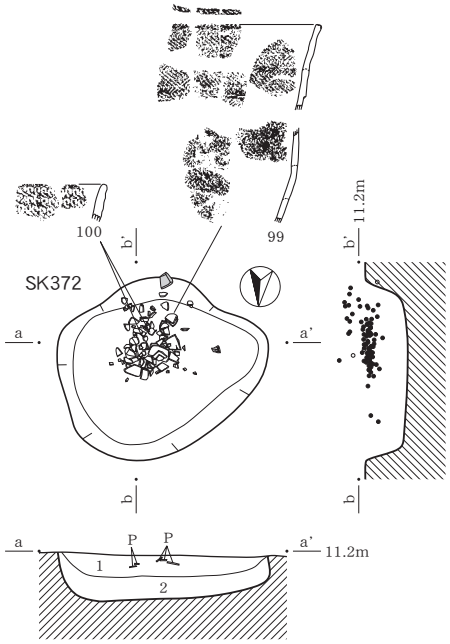


SK879
1. 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト、しまり中、粘性中。
2. 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。
3. 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト、しまり中、粘性中。

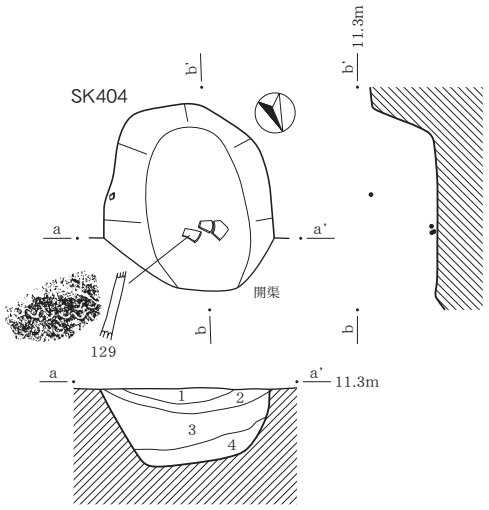


SK371
1. 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質シルト、炭化物を少量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。
3. 10YR7/1 灰白色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。
4. 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。

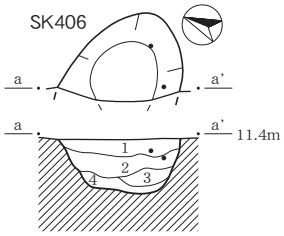
0　(1:40)　2m



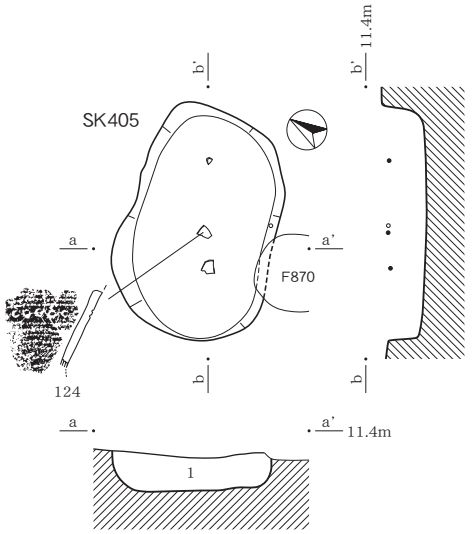
SK372
1. 10YR3/4 暗褐色粘質シルト、灰黄色粘土を塊状に含む、しまり中、粘性中。
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト、炭化物を微量含む、しまり弱、粘性中。



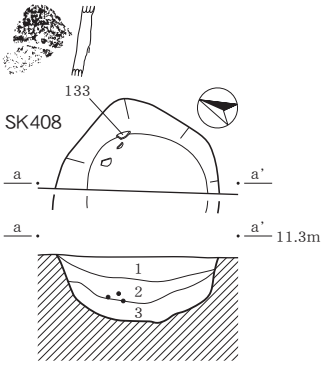
SK404
1. 5Y5/1 灰色砂質シルト、しまり中、粘性弱。
2. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト、炭化物・焼土を微量含む、しまり中、粘性弱。
3. 5Y6/1 灰色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。
4. 7.5Y5/1 灰色砂質シルト、砂を少量含む、しまり弱、粘性弱。



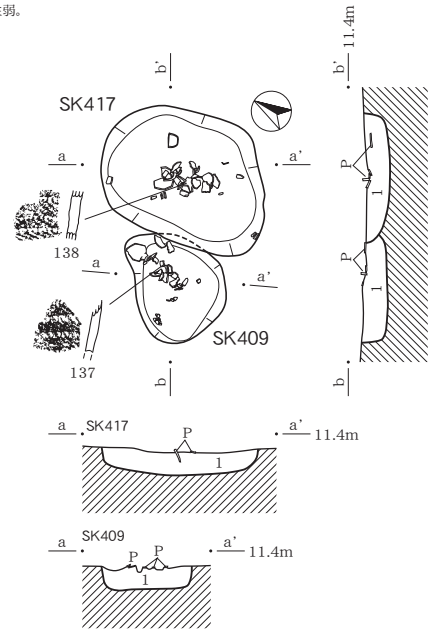
SK406
1. 2.5Y7/1 灰白色粘質シルト、炭化物を少量含む、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、Ⅷa 層土を含む、炭化物を多量含む、しまり弱、粘性弱。
3. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、しまり中、粘性弱。
4. 2.5Y7/2 灰黄色砂質シルト、しまり中、粘性弱。



SK405
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト、しまり弱、粘性中。

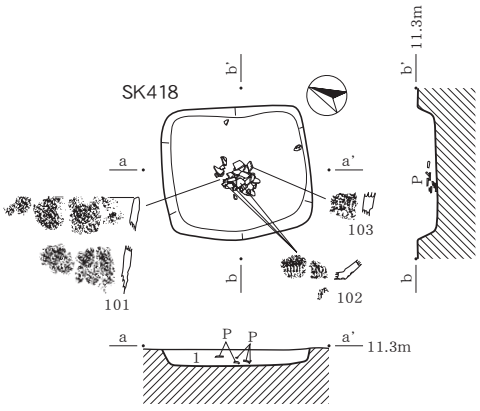


SK408
1. 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。
2. 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト、炭化物を少量含む、しまり弱、粘性中。
3. 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト、しまり弱、粘性中。

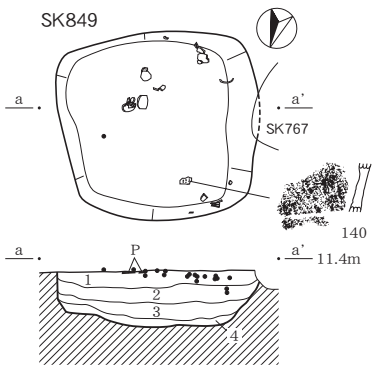


SK409
1. 2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト、炭化物を少量含む、しまり弱、粘性中。

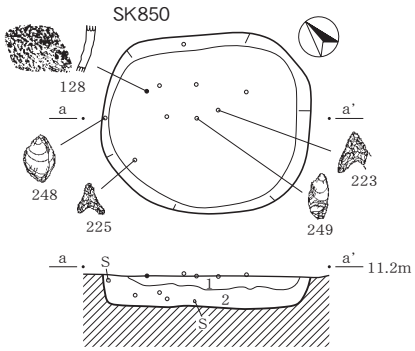
SK417
1. 2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト、しまり弱、粘性中。



SK418
1. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質粘土、炭化物を少量含む、しまり弱、粘性弱。

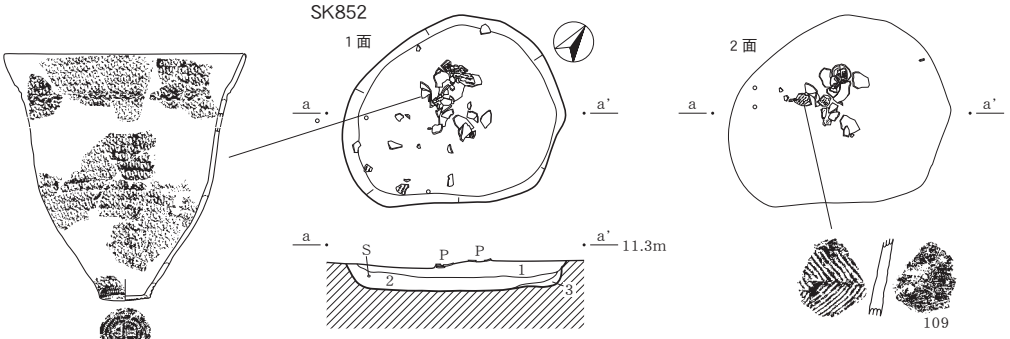


SK849
1. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、炭化物を多量含む、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。
3. 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト、しまり弱、粘性中。
4. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、やや暗い色調、微細な炭化物を少量含む、しまり弱、粘性中。

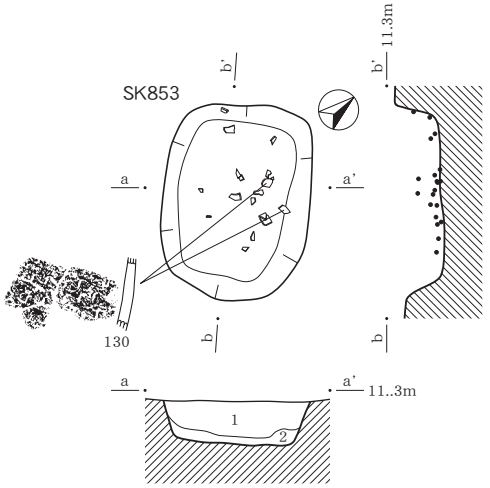


SK850
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土、しまり中、粘性中。
2. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト質粘土、炭化物を微量含む、Ⅷb 層土ブロックを含む、しまり弱、粘性中。

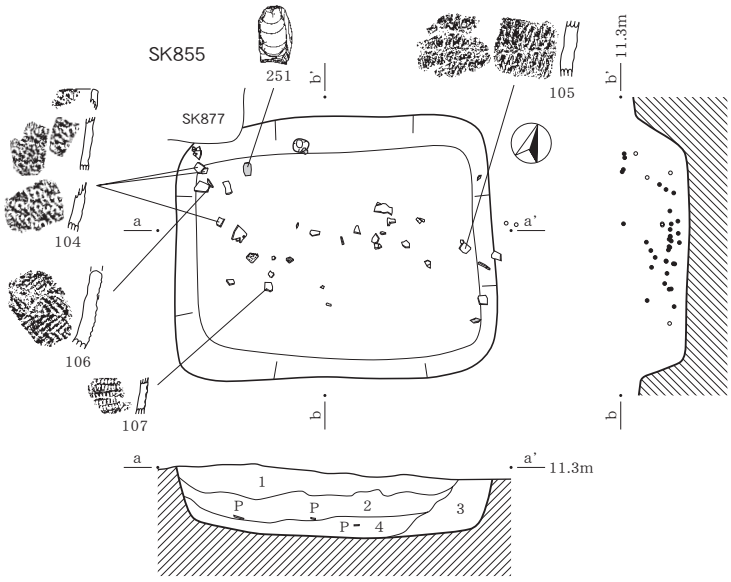
0　(1:40)　2m



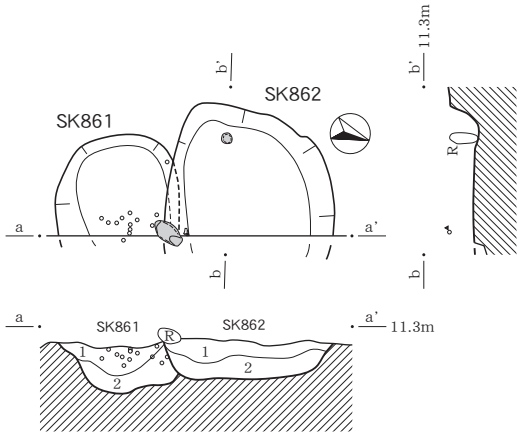
SK852
1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、灰黄色粘土を塊状に微量含む、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y4/1 黄灰色シルト質粘土、暗灰黄色粘土を塊状に少量含む、しまり弱、粘性強。
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト質粘土、しまり弱、粘性中。



SK853
1. 2.5Y7/2 灰黄色シルト質砂、しまり弱、粘性弱。
2. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質砂、しまり弱、粘性中。

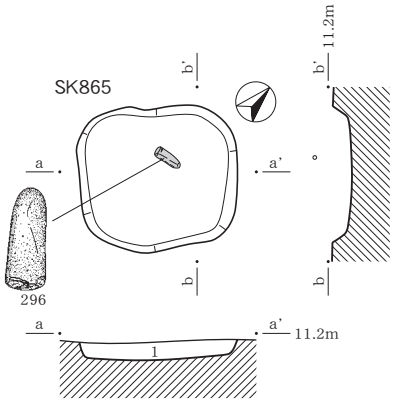


SK855
1. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土、しまり弱、粘性中。
2. 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質シルト、しまり中、粘性中。
3. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、しまり中、粘性弱。
4. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。

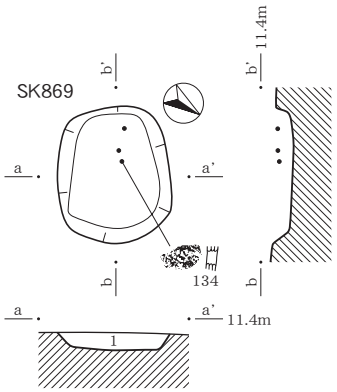


SK861
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト、珪藻質泥岩の砕片を多量含む、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト、しまり弱、粘性弱。

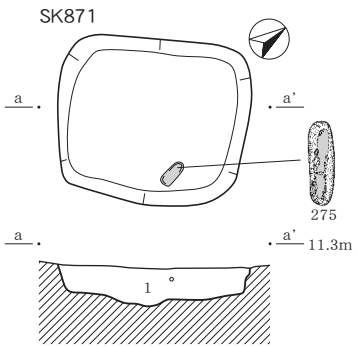
SK862
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト、炭化物を少量含む、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト、1 層土を塊状に含む、しまり弱、粘性弱。

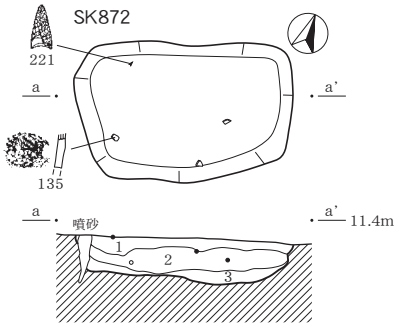


SK865
1. 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト、炭化物を少量含む、しまり弱、粘性中。



SK869
1. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、炭化物を少量含む、しまり中、粘性弱。

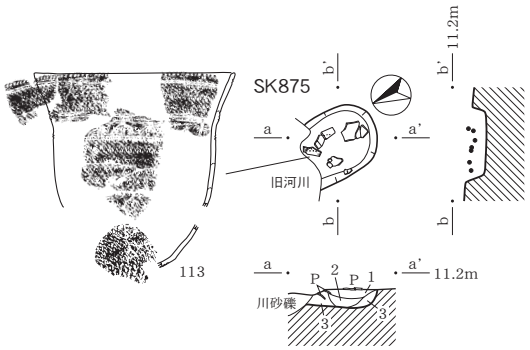




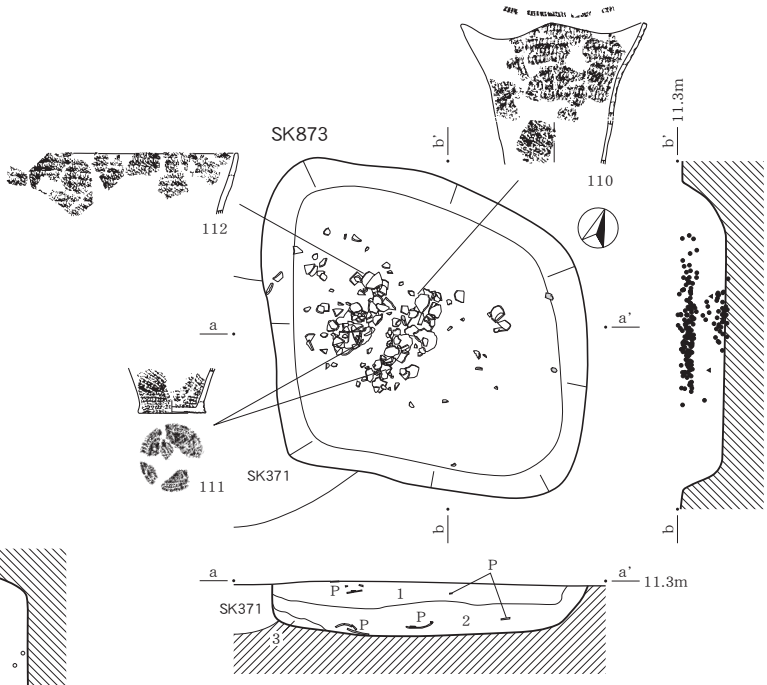
SK871
1. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、φ 0.5cm ほどの炭化物を少量含む、しまり中、粘性弱。

SK872
1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、炭化物を粒状に含む、しまり中、粘性中。
2. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。
3. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト、炭化物を粒状に含む、しまり弱、粘性中。

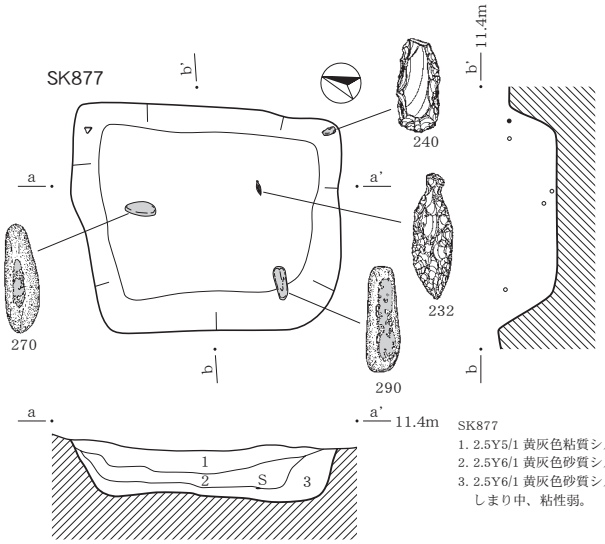
0　(1:40)　2m



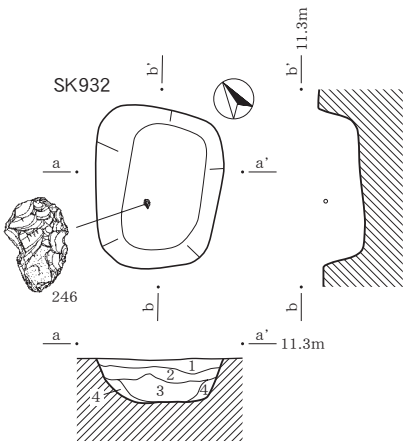
SK875
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト、川砂を含む、しまり中、粘性中。
2. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、しまり弱、粘性中。
3. 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト、しまり中、粘性強。



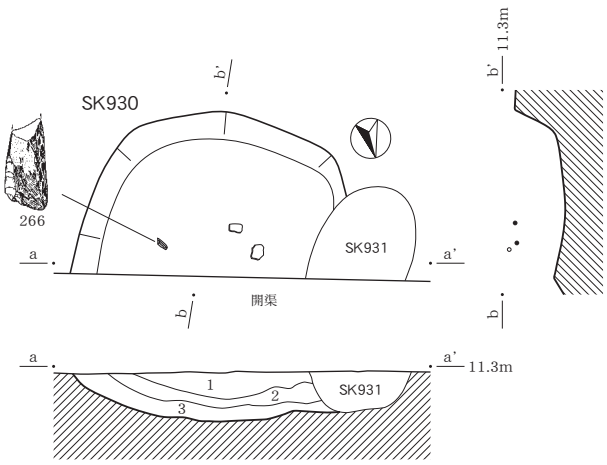
SK873
1. 2.5Y6/2 黄灰色砂質シルト、しまり中、粘性弱。
2. 2.5Y6/2 黄灰色砂質シルト、炭化物を多量含む、しまり弱、粘性弱。
3. 2.5Y5/2 黄灰色砂質シルト、しまり弱、粘性中。



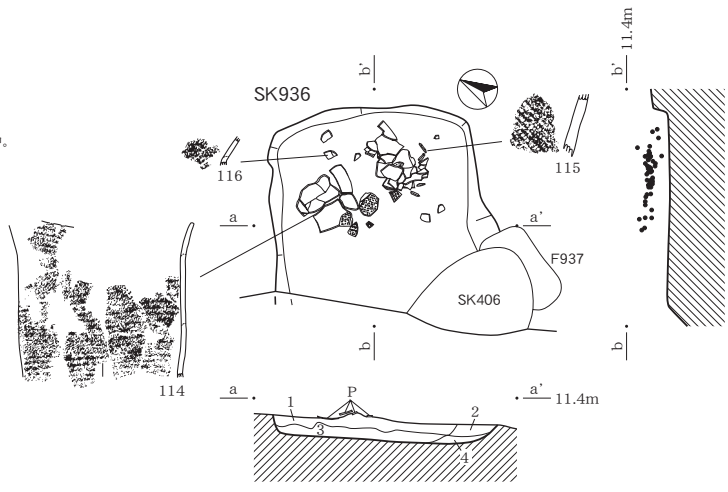
SK877
1. 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト、しまり中、粘性弱。
3. 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト、炭化物を少量含む、しまり中、粘性弱。



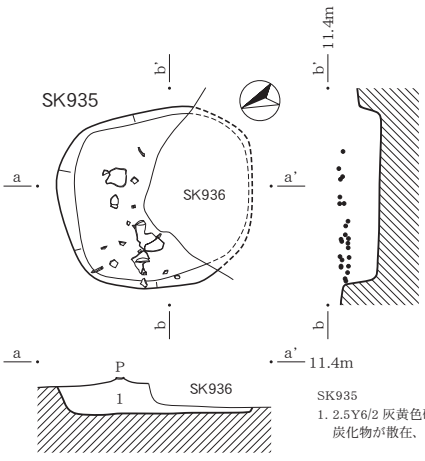
SK932
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト、炭化物を含む、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト、しまりなし、粘性中。
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト、しまり弱、粘性中。



SK930
1. 2.5Y7/1 灰白色砂質シルト、φ 0.5cm ほどのポツポツした炭化物を多量含む、しまり弱、粘性弱。
2. 2.5Y7/1 灰白色砂質シルト、φ 0.5cm ほどのポツポツした炭化物を多量含む、しまりなし、粘性中。
3. 2.5Y7/1 灰白色砂質シルト、しまり中、粘性なし。

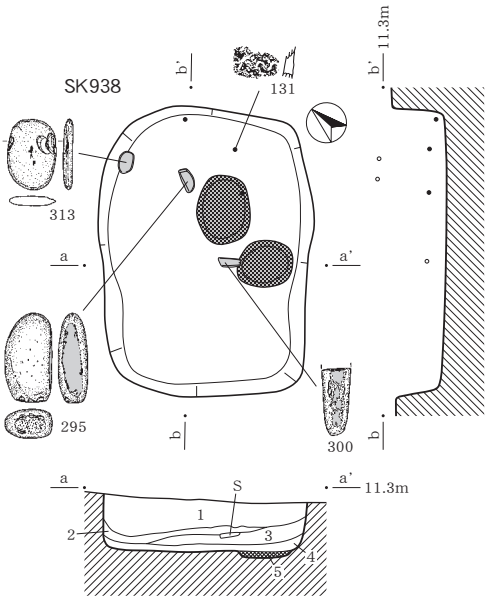


SK936
1. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、炭化物を含む、しまり中、粘性弱。
2. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト、炭化物を多量含む、しまり中、粘性弱。
3. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。
4. 2.5Y7/1 灰白色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。

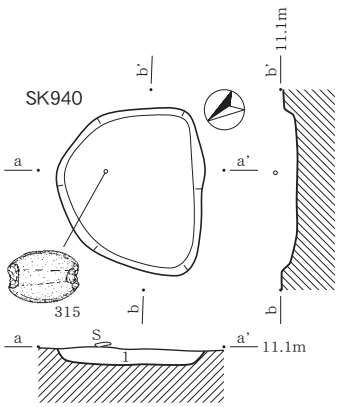


SK935
1. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、土器検出面で炭化物が散在、しまり中、粘性弱。

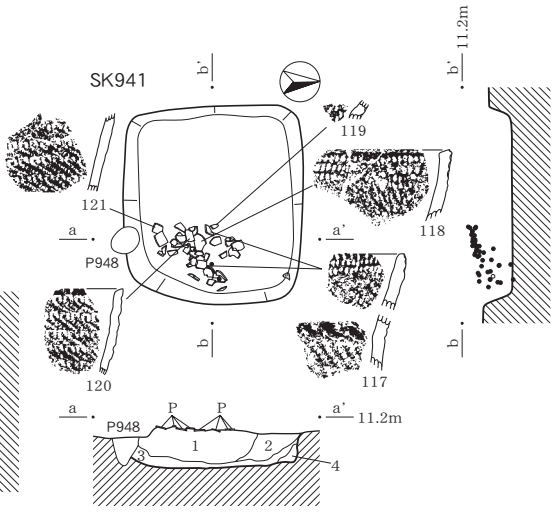
0　(1:40)　2m



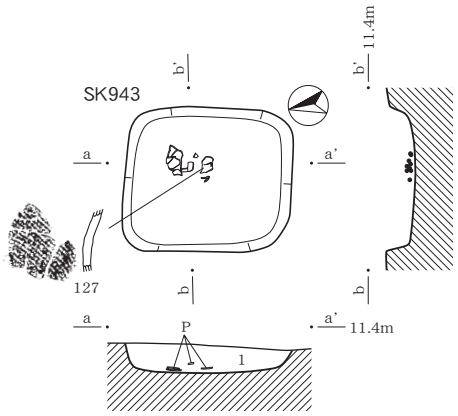
SK938
1. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、しまり中、粘性弱。
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト、しまり弱、粘性中。
3. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、炭化物を含む、しまり弱、粘性中。
4. 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト、しまり弱、粘性中。
5. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト、焼土を含む、しまり弱、粘性中。



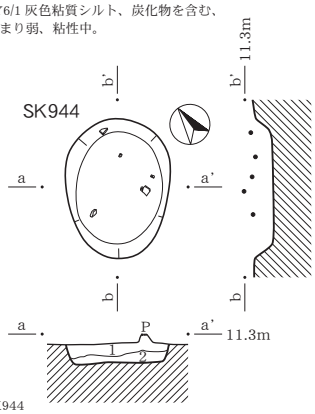
SK940
1. 5Y6/1 灰色粘質シルト、炭化物を含む、しまり弱、粘性中。



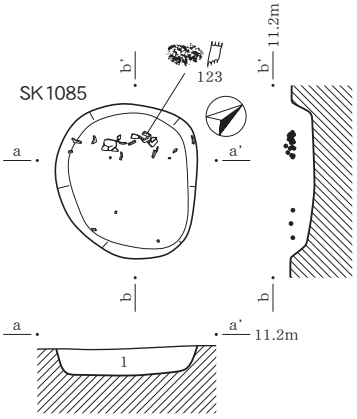
SK941
1. 7.5YR7/1 明褐灰色粘質シルト、しまり中、粘性弱。
2. 7.5YR5/1 褐灰色粘質シルト、灰白色粘土を塊状に含む、炭化物を含む、しまり弱、粘性中。
3. 7.5YR7/1 明褐灰色粘質シルト、しまり弱、粘性中。
4. 7.5YR4/1 褐灰色シルト質粘土、炭化物を含む、しまり弱、粘性強。



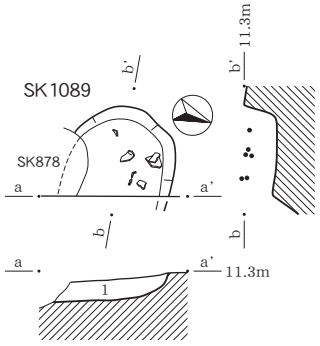
SK943
1. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。



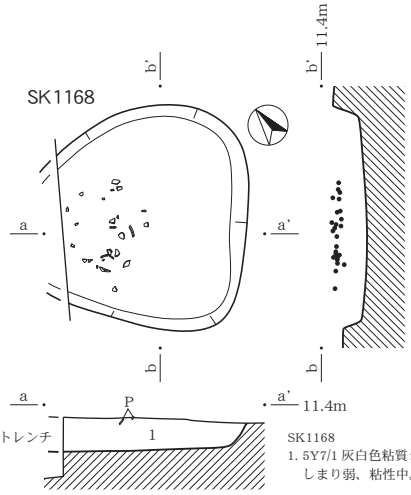
SK944
1. 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト、φ 0.5 ～ 1.0cm の炭化物を含む、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、しまり中、粘性弱。



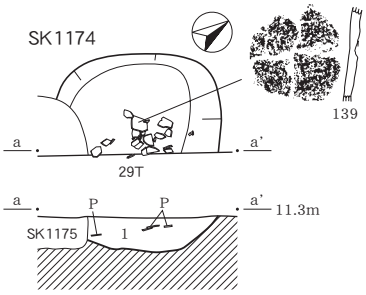
SK1085
1. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、炭化物を少量含む、しまり弱、粘性中。



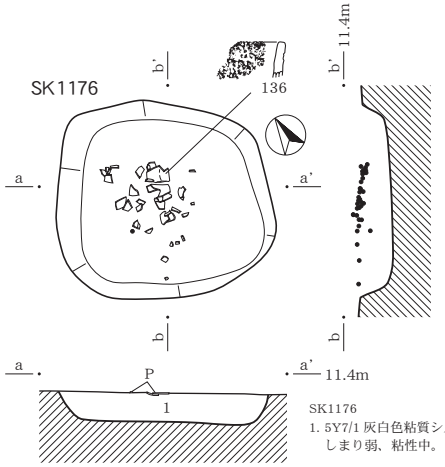
SK1089
1. 2.5Y7/1 灰白色粘質シルト、φ 0.5cm ほどの炭化物を含む、しまり弱、粘性中。



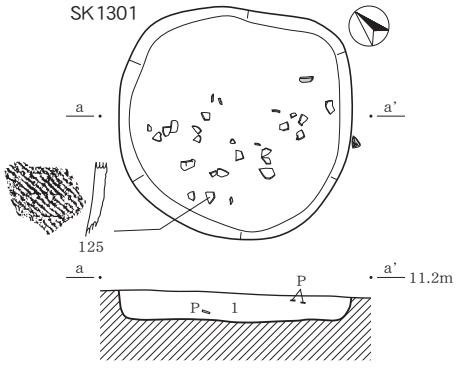
SK1168
1. 5Y7/1 灰白色粘質シルト、しまり弱、粘性中。



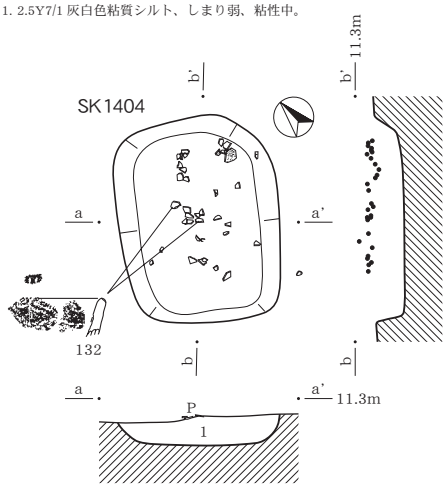
SK1174
1. 2.5Y7/1 灰白色粘質シルト、しまり弱、粘性中。



SK1176
1. 5Y7/1 灰白色粘質シルト、しまり弱、粘性中。

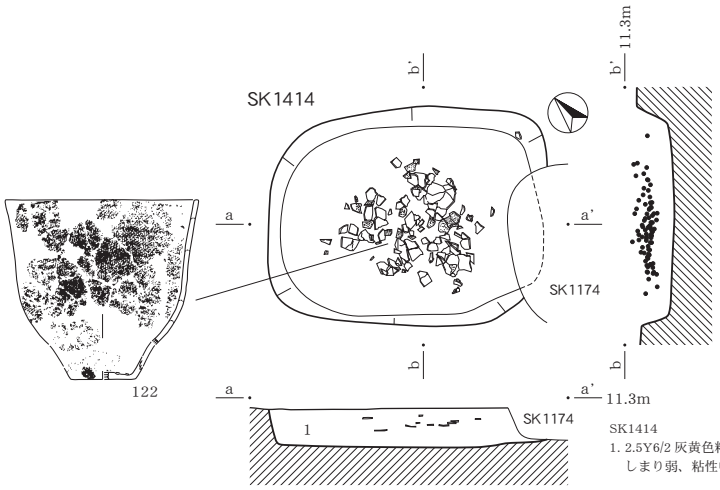


SK1301
1. 7.5Y7/1 灰白色砂質シルト、しまり中、粘性弱。

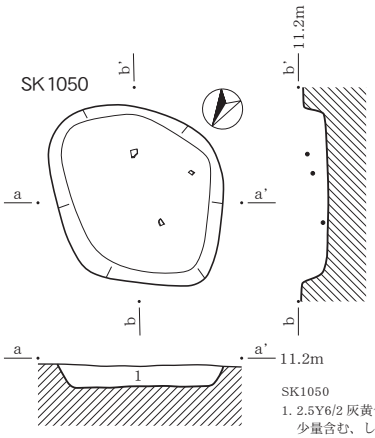


SK1404
1. 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト、しまり弱、粘性中。

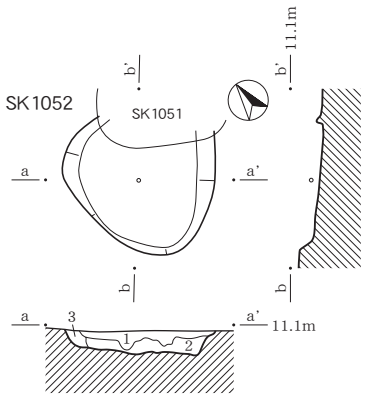
0　(1:40)　2m



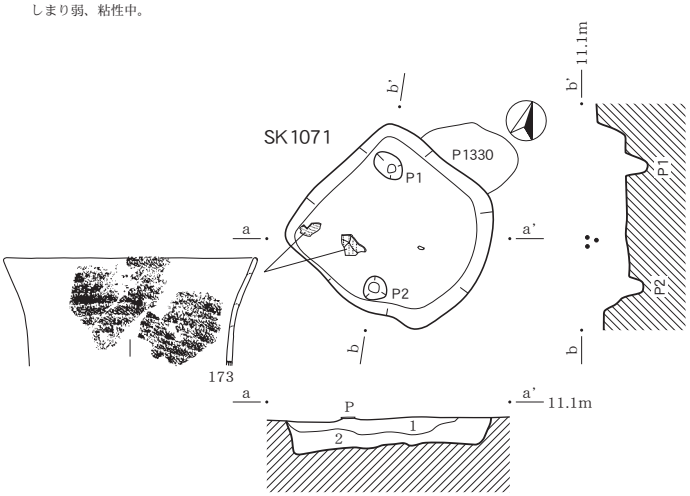
SK1414
1. 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト、しまり弱、粘性中。



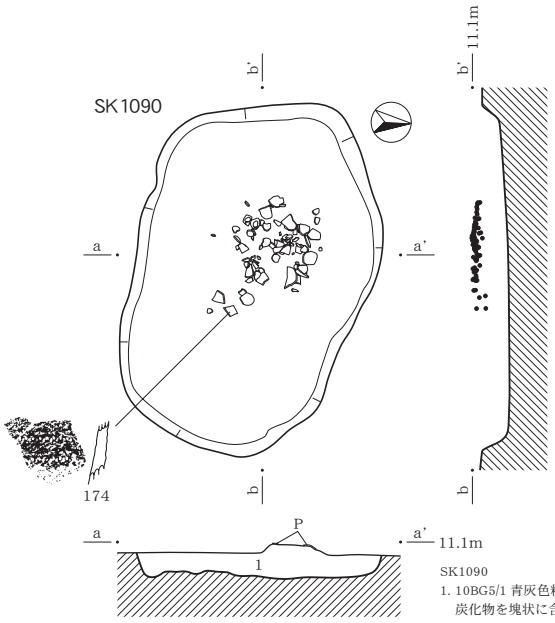
SK1050
1. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト、炭化物を少量含む、しまり弱、粘性弱。



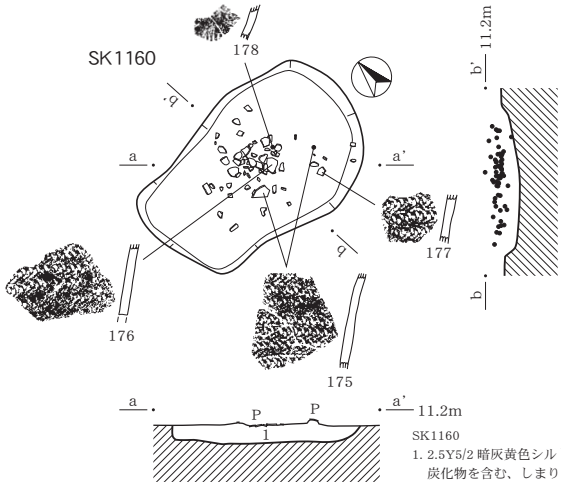
SK1052
1. 5Y6/1 灰色粘質シルト、焼土を塊状に含む、しまり弱、粘性中。
2. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト、Ⅸ層土を塊状に含む、しまり強、粘性中。
3. 7.5Y5/1 灰色砂質シルト、しまり中、粘性弱。



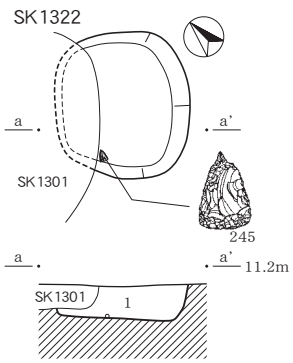
SK1071
1. 2.5Y3/3 暗オリーブ色粘質シルト、炭化物を含む、しまり中、粘性弱。
2. 10BG5/1 青灰色粘質シルト、炭化物を含む、しまり弱、粘性中。



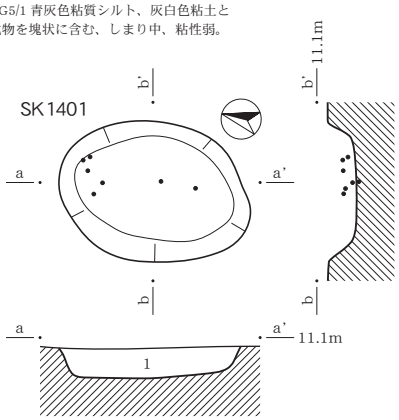
SK1090
1. 10BG5/1 青灰色粘質シルト、灰白色粘土と炭化物を塊状に含む、しまり中、粘性弱。



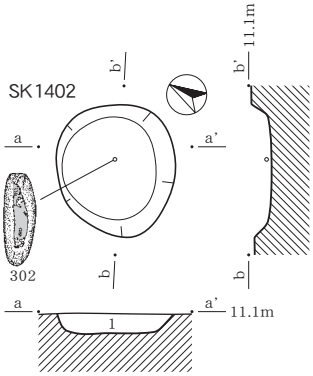
SK1160
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト質粘土、炭化物を含む、しまり中、粘性弱。



SK1322
1. 7.5Y7/1 灰白色砂質シルト、炭化物を含む、しまり中、粘性弱。

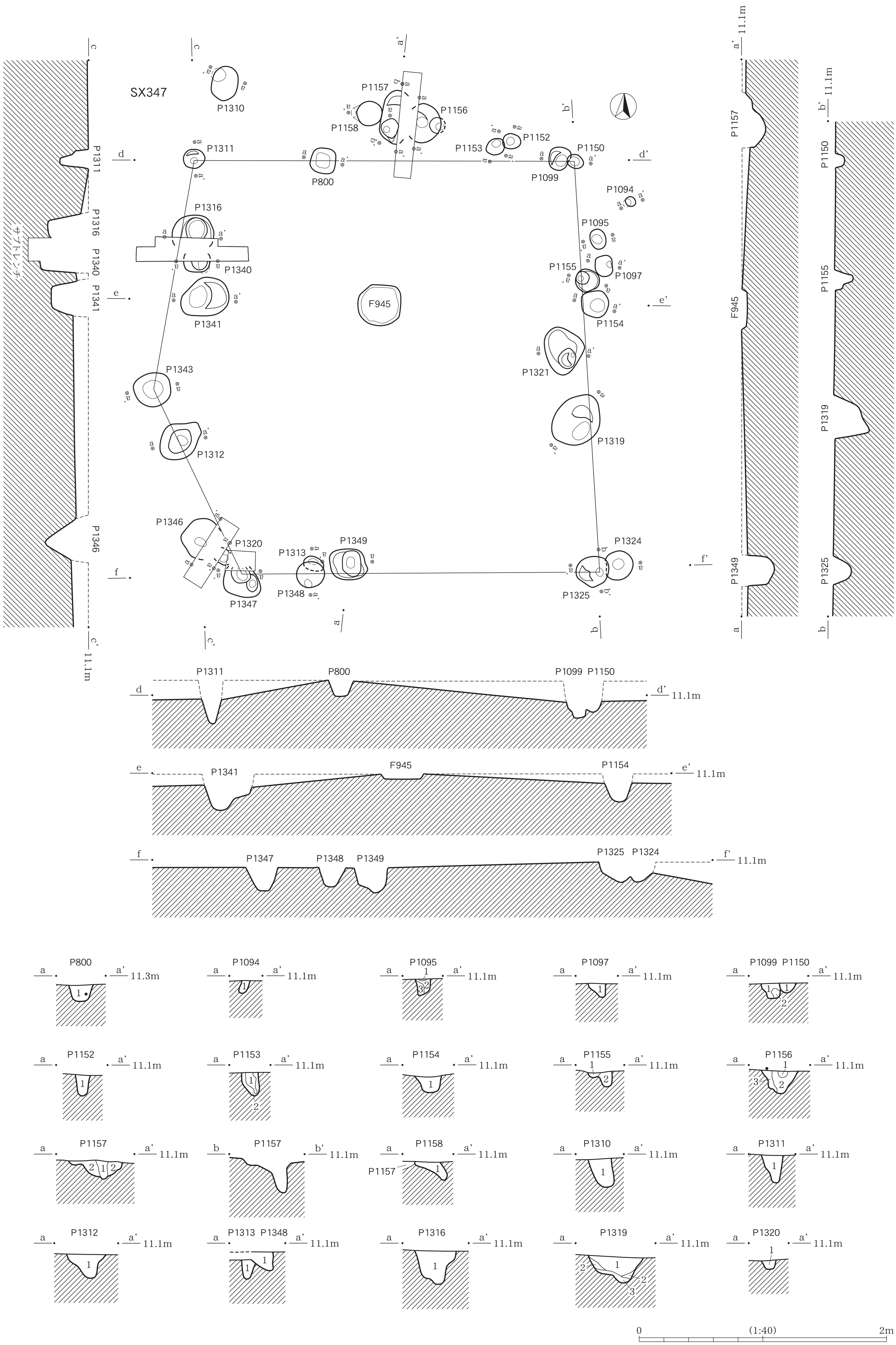


SK1401
1. 5Y6/2 灰オリーブ色粘質シルト、炭化物を少量含む、しまり中、粘性中。

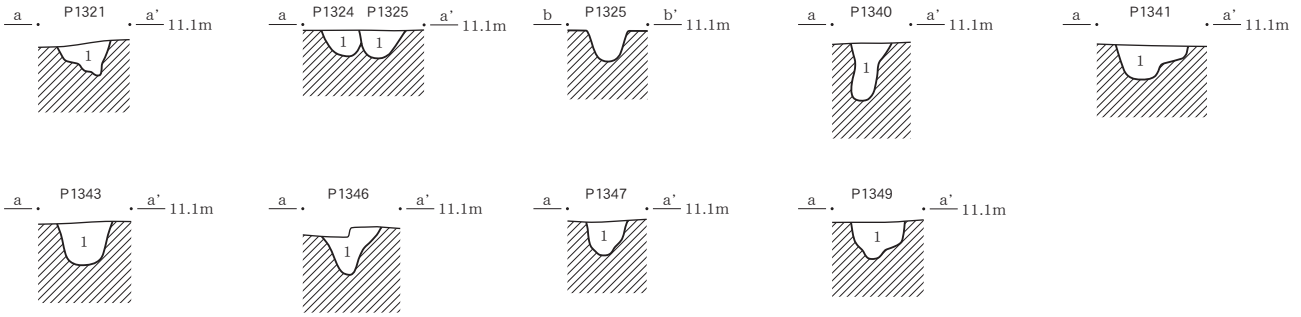


SK1402
1. 5Y6/1 灰色粘質シルト、炭化物を微量含む、しまり弱、粘性中。

0　(1:40)　2m


SX347
P1310
P1157
P1156
P1158
P1311
P800
P1153
P1152
P1150
P1099
P1094
P1316
P1095
P1340
P1155
P1097
P1341
F945
P1154
サブトレンチ
P1321
P1343
P1319
P1312
P1346
P1320
P1313
P1349
P1324
P1348
P1347
P1325
11.1m
P1099 P1150
P1341
P1154
P1347
P1348
P1349
P1325 P1324
P800
P1094
P1095
P1097
P1152
P1153
P1154
P1155
P1156
P1157
P1158
P1310
P1311
P1312
P1313 P1348
P1316
P1319
P1320
11.3m
0
(1:40)
2m

SX347



P800・1094・1154・1310・1312・1316・1320・1321・1324・1325・1340・1341・1343・1346・1347・1349
1. 7.5YR4/3 褐色粘質土、しまり弱、粘性中。

P1095
1. 7.5YR4/2 灰褐色粘質シルト、炭化物を含む、しまり弱、粘性強。
2. 7.5YR8/1 灰白色粘質シルト、しまり中、粘性強。
3. 7.5YR4/2 灰褐色粘質シルト、炭化物を含む、しまり弱、粘性強。

P1097
1. 5Y5/1 灰色シルト質粘土、しまり弱、粘性中。

P1099
1. 7.5YR6/1 褐灰色シルト質粘土、しまり弱、粘性強。
2. 10BG6/1 青灰色シルト質粘土、しまり弱、粘性強。

P1150
1. 7.5YR6/1 褐灰色シルト質粘土、炭化物を含む、しまり弱、粘性強。

P1152
1. 5Y5/1 灰色シルト質粘土、しまり弱、粘性中。

P1153
1. 7.5YR8/1 灰白色シルト質粘土、しまり弱、粘性強。
2. 7.5YR6/1 褐灰色シルト質粘土、しまり弱、粘性強。

P1155
1. 7.5YR4/2 灰褐色シルト質粘土、炭化物を含む、しまり弱、粘性強。
2. 7.5YR6/1 褐灰色シルト質粘土、炭化物を含む、しまり弱、粘性強。

P1156
1. 7.5YR8/1 灰白色シルト質粘土、しまり弱、粘性強。
2. 7.5YR4/2 灰褐色シルト質粘土、炭化物を含む、しまり弱、粘性強。
3. 7.5YR6/1 褐灰色シルト質粘土、灰白色粘土を塊状に含む、しまり弱、粘性強。

P1157
1. 7.5YR8/1 灰白色シルト質粘土、炭化物を含む、しまり弱、粘性中。
2. 7.5YR6/1 褐灰色シルト質粘土、炭化物を含む、しまり弱、粘性中。

P1158
1. 7.5YR6/1 褐灰色シルト質粘土、炭化物を含む、しまり弱、粘性強。

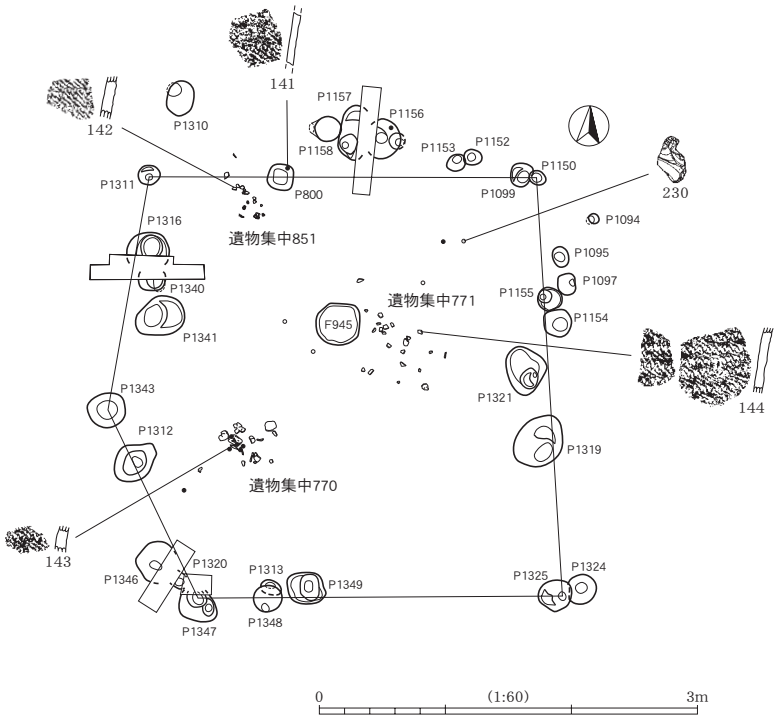
P1311
1. 7.5YR5/1 褐灰色シルト質粘土、Ⅸ層土を塊状に含む、炭化物を含む、しまり弱、粘性強。

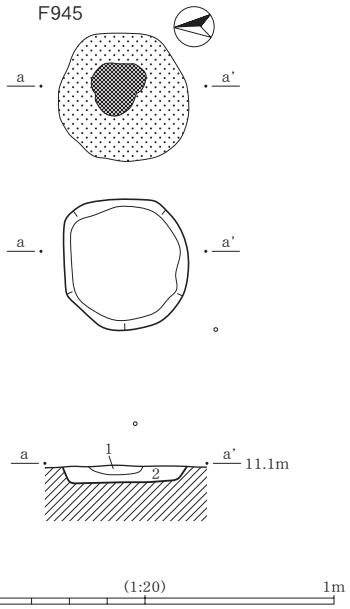
P1313
1. 7.5YR4/2 灰褐色シルト質粘土、しまり弱、粘性強。

P1319
1. 7.5YR6/2 灰褐色シルト質粘土、炭化物を含む、しまり弱、粘性強。
2. 10BG6/1 青灰色シルト質粘土、1 層土を含む、しまり弱、粘性中。
3. 7.5YR6/1 褐灰色シルト質粘土、Ⅸ層土を塊状に含む、しまり中、粘性中。

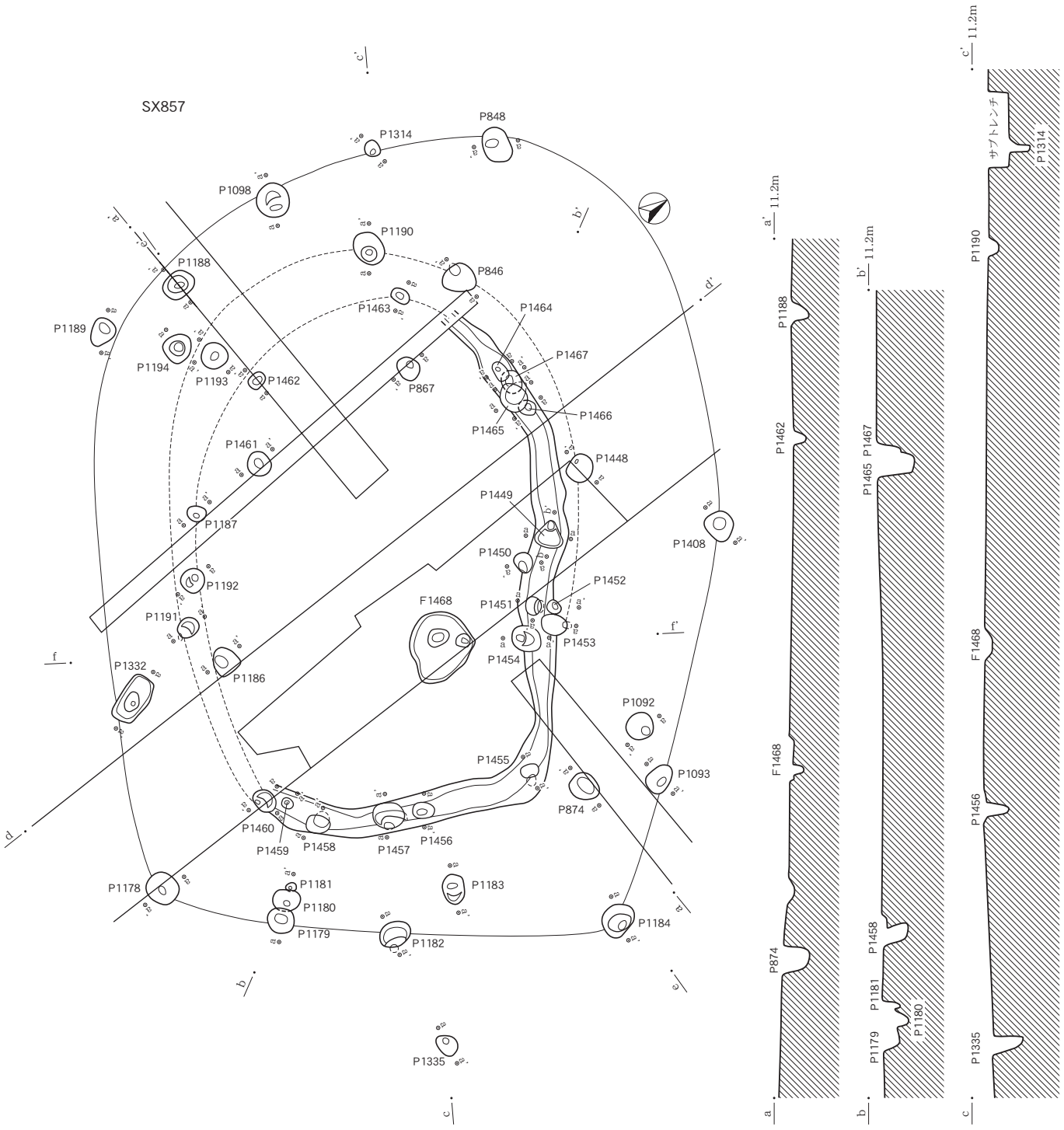
P1348
1. 7.5YR4/2 灰褐色シルト質粘土、φ 1.0cm ほどの炭化物を含む、しまり弱、粘性強。

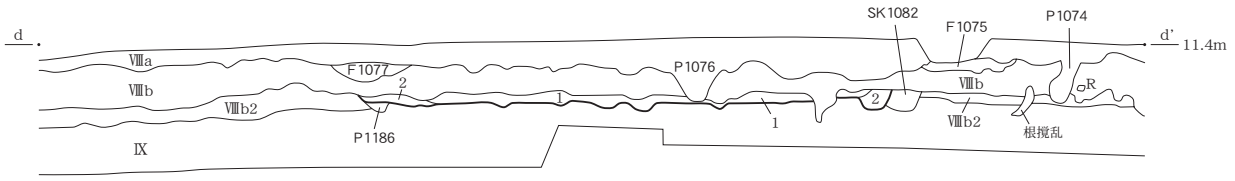
遺物出土状況

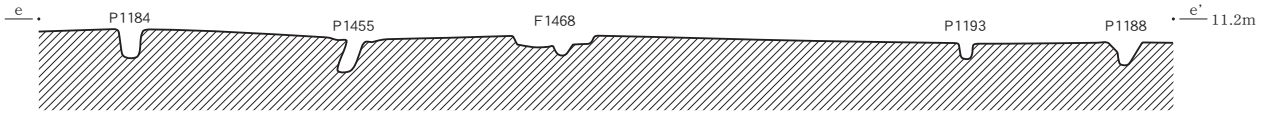


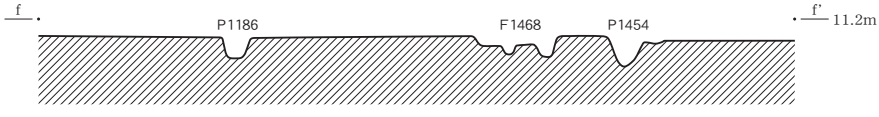


F945
1. 2.5Y8/1 灰白色シルト質粘土、焼土を含む、しまり中、粘性中。
2. 7.5YR5/1 褐灰色シルト質粘土、黒褐色粘土を塊状に含む、
炭化物を含む、しまり中、粘性中。





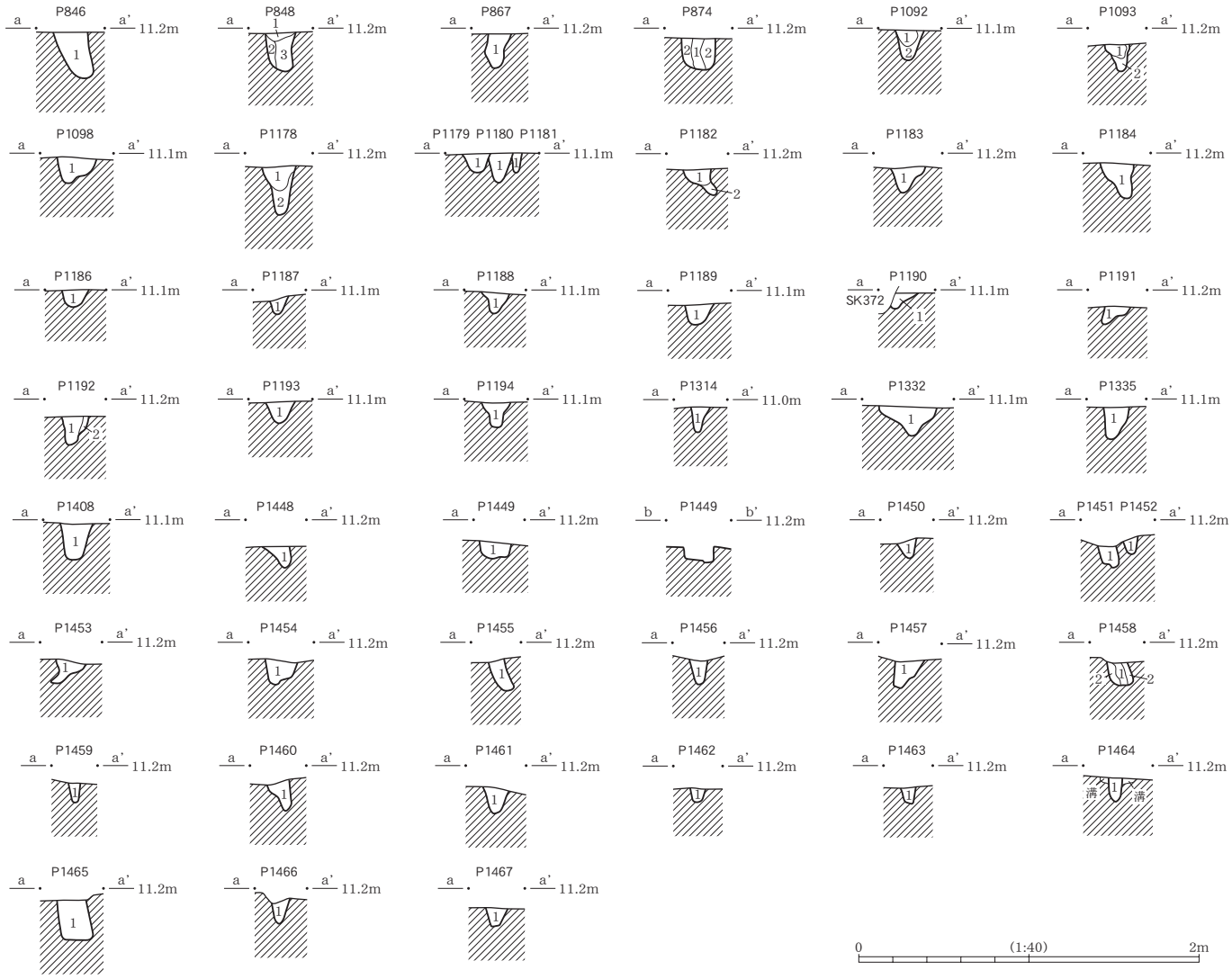




SX857
1. 7.5Y6/2 灰オリーブ色シルト質粘土、炭化物を含む、しまり強、粘性中。
2. 5YR4/1 褐灰色シルト質粘土、しまり中、粘性中。

0　(1:40)　2m

SX857



P867・1098・1179 ～ 1181・1183・1184・1186 ～ 1191・1193・1194・1314・1332・1335・1408・1448 ～ 1457・1459 ～ 1467
1. 7.5YR6/1 褐灰色シルト質粘土、しまり弱、粘性強。

P413
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土、Ⅷa 層土を塊状に含む、炭化物を微量含む、しまり弱、粘性中。

P846
1. 7.5YR5/1 褐灰色粘質シルト、炭化物を含む、しまり中、粘性強。

P848
1. 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質シルト、炭化物を少量含む、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質シルト、炭化物を微量含む、しまり中、粘性中。
3. 7.5Y5/2 灰オリーブ色シルト質粘土、炭化物を少量含む、しまり弱、粘性強。

P874
1. 2.5Y7/1 灰白色粘質シルト、しまり中、粘性中。
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト、しまり弱、粘性中。

P1092
1. 7.5YR6/1 褐灰色シルト質粘土、しまり弱、粘性強。
2. 7.5YR6/1 褐灰色シルト質粘土、しまり弱、粘性中。

P1093
1. 7.5YR8/1 灰白色シルト質粘土、しまり弱、粘性強。
2. 7.5YR6/1 褐灰色シルト質粘土、しまり弱、粘性強。

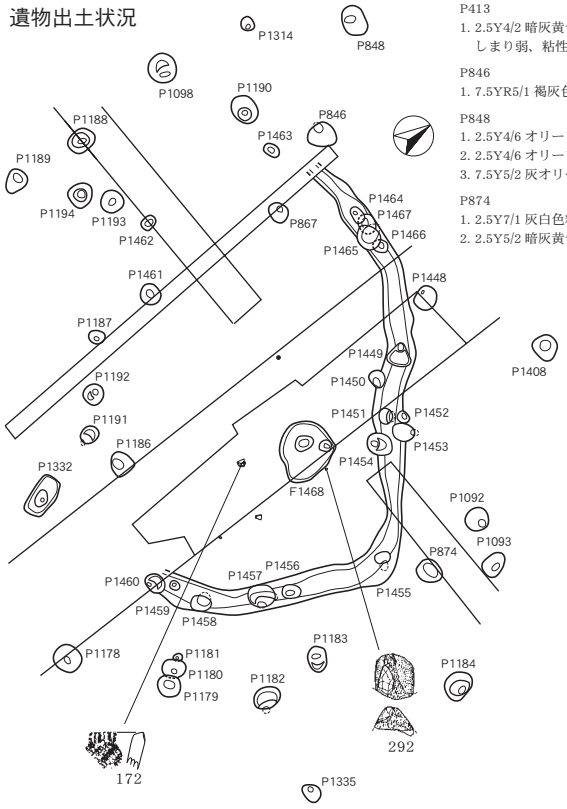
P1178
1. 7.5YR5/2 灰褐色シルト質粘土、炭化物を含む、しまり中、粘性中。
2. 7.5YR6/1 褐灰色シルト質粘土、しまり弱、粘性強。

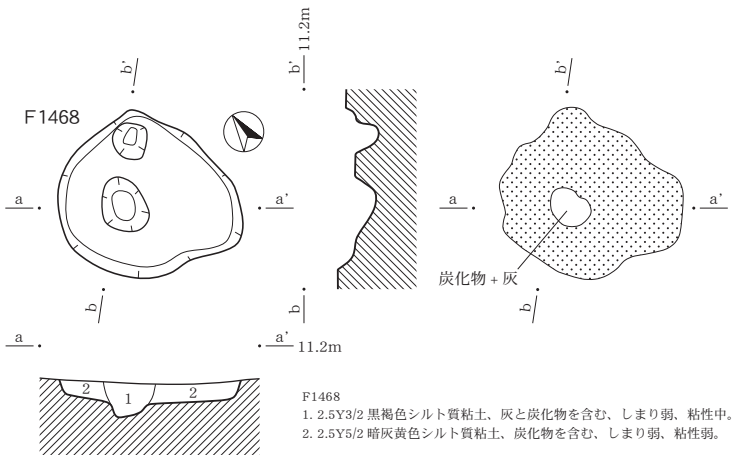
P1182
1. 7.5YR5/2 灰褐色シルト質粘土、炭化物を含む、しまり中、粘性中。
2. 7.5YR6/1 褐灰色シルト質粘土、しまり弱、粘性強。

P1192
1. 7.5YR6/1 褐灰色シルト質粘土、しまり弱、粘性強。
2. 7.5YR5/2 灰褐色シルト質粘土、炭化物を含む、しまり中、粘性中。

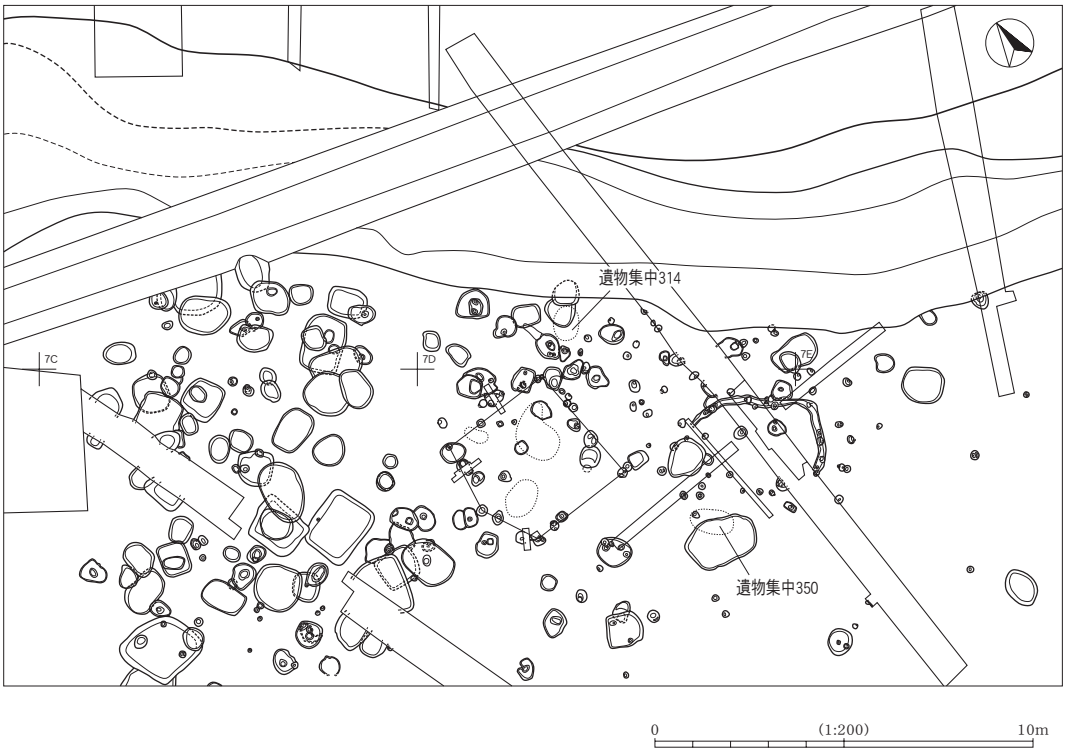
P1458
1. 2.5Y8/1 灰白色シルト質粘土、しまり弱、粘性強。
2. 7.5YR6/1 褐灰色シルト質粘土、しまり弱、粘性中。

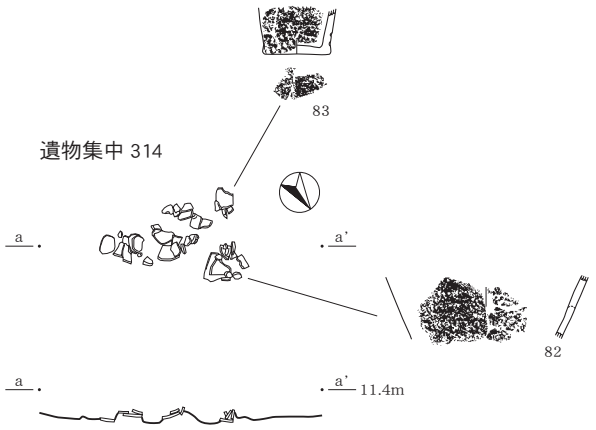
遺物出土状況

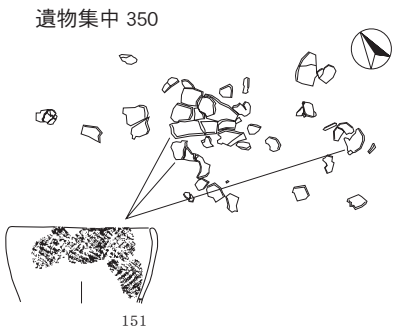


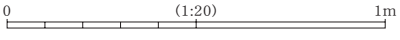


F1468
1. 2.5Y3/2 黒褐色シルト質粘土、灰と炭化物を含む、しまり弱、粘性中。
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト質粘土、炭化物を含む、しまり弱、粘性弱。

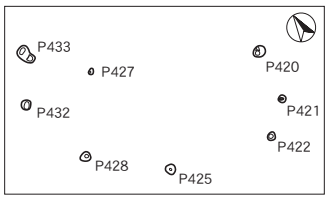

遺物集中314
遺物集中350
7C
7D
7E
0
(1:200)
10m

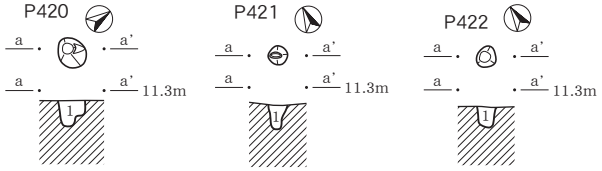

遺物集中 314
83
82
a
a'
a
a'
11.4m


遺物集中 350
151


0
(1:20)
1m

Ⅷa層 a群ピット

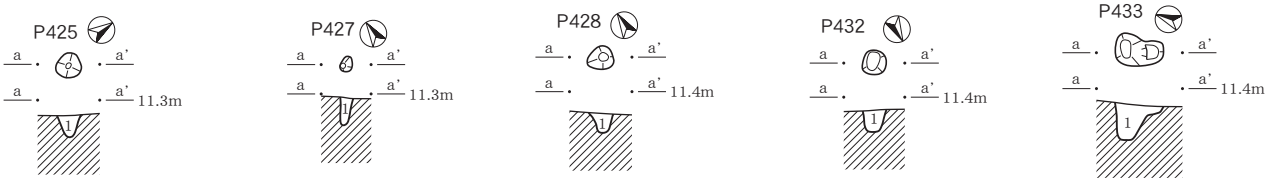




P420
1. 2.5Y3/1 黒褐色シルト質粘土、Ⅷa層土を塊状に含む、しまり中、粘性中。

P421
1. 2.5Y3/1 黒褐色シルト質粘土、Ⅷa層土を塊状に含む、しまり中、粘性中。

P422
1. 2.5Y4/1 黄灰色シルト質粘土、Ⅷa層土を少量含む、しまり強、粘性中。



P425
1. 2.5Y4/1 黄灰色シルト質粘土、Ⅷa層土を塊状に含む、しまり弱、粘性中。

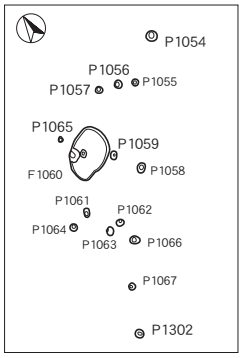
P427
1. 2.5Y4/1 黄灰色シルト質粘土、Ⅷa層土を塊状に含む、しまり弱、粘性弱。

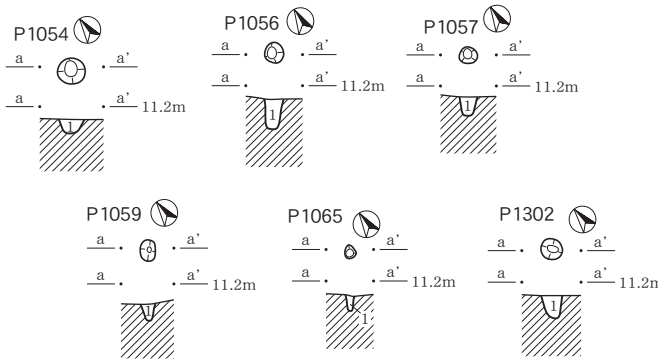
P428
1. 2.5Y4/1 黄灰色シルト質粘土、Ⅷa層土を塊状に含む、しまり弱、粘性中。

P432
1. 2.5Y4/1 黄灰色シルト質粘土、Ⅷa層土を塊状に多量含む、しまり弱、粘性中。

P433
1. 2.5Y4/1 黄灰色シルト質粘土、Ⅷa層土を塊状に多量含む、炭化物を微量含む、しまり弱、粘性中。

Ⅷb層 b群ピット





P1054
1. 7.5YR4/3 褐色粘質土、しまり弱、粘性中。

P1056
1. 7.5YR4/3 褐色粘質土、しまり弱、粘性中。

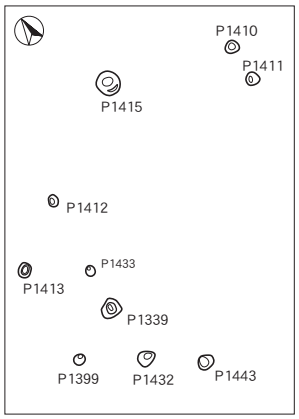
P1057
1. 7.5YR4/3 褐色粘質土、しまり弱、粘性中。

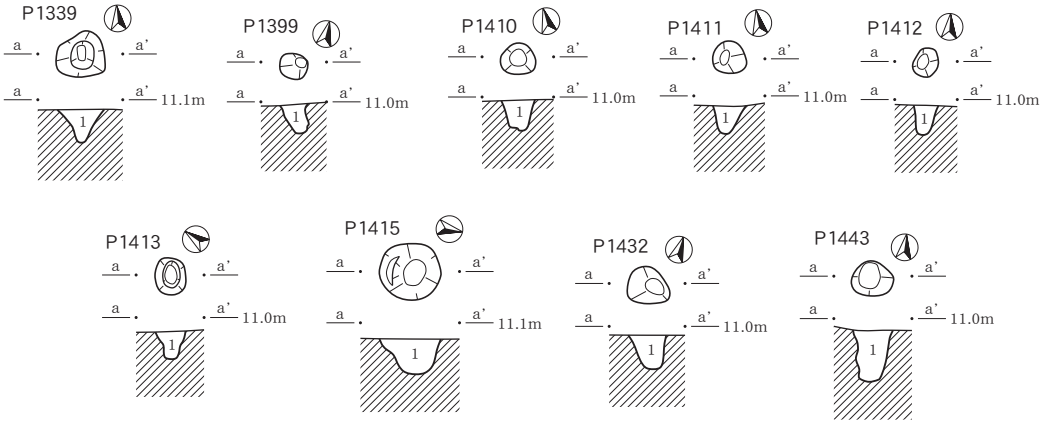
P1059
1. 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト、しまり弱、粘性中。

P1065
1. 7.5YR4/3 褐色粘質土、しまり弱、粘性中。

P1302
1. 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト、しまり弱、粘性中。

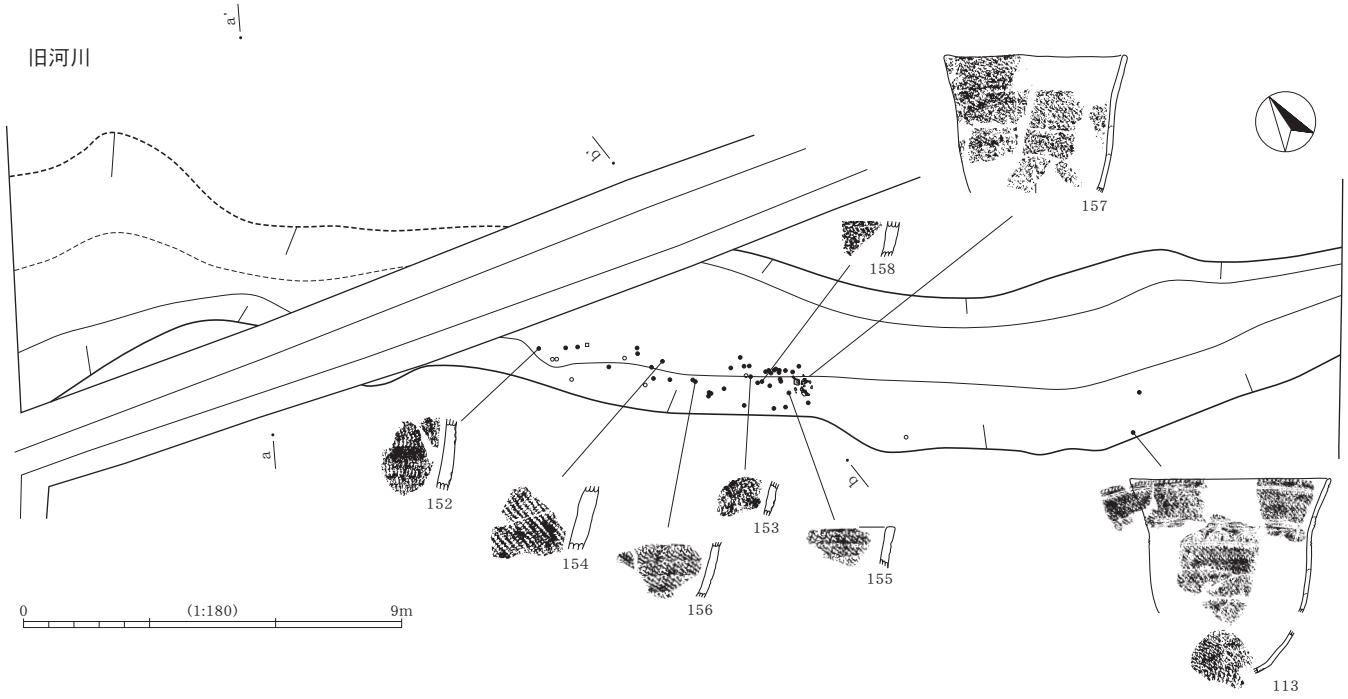
Ⅷb2層 c群ピット

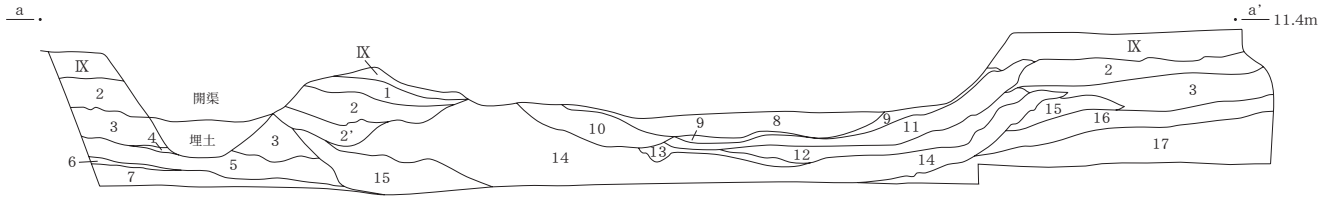


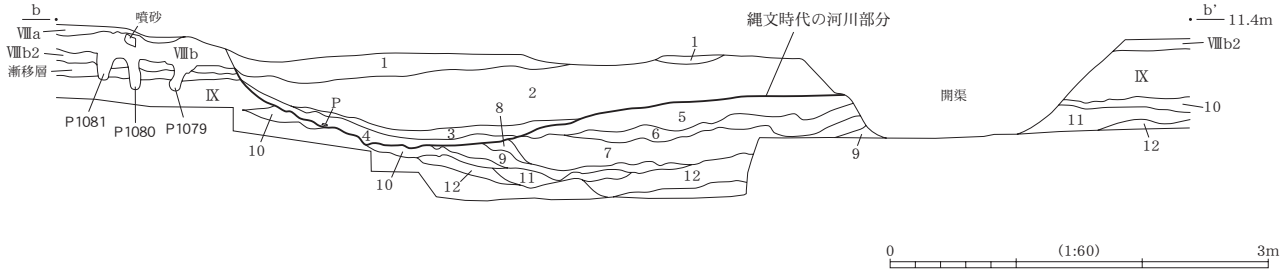


P1339・1399・1410 ～ 1413・1415・1432・1443
1. 7.5YR4/3 褐色粘質土、しまり弱、粘性中。

0　(1:40)　2m





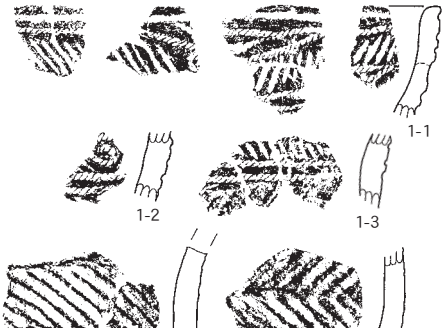


旧河川セクション a - a'
1. N7/ 灰白色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。
2. N6/ 灰色砂質シルト、しまり弱、粘性弱。
2'. N6/ 灰色砂質シルト、炭化物を微量含む、しまり弱、粘性弱。
3. N6/ 灰色砂質シルト、しまり弱、粘性中。
4. N5/ 灰色砂質シルト、腐植分を含む、しまり弱、粘性中。
5. N5/ 灰色砂質シルト、砂を多量含む、しまり弱、粘性弱。
6. N5/ 灰色砂質シルト、腐植分を含む、しまり弱、粘性中。
7. N4/ 灰色砂質シルト、砂礫を含む、しまり弱、粘性弱。
8. N6/ 灰色砂礫層、しまり弱、粘性なし。
9. N4/ 灰色砂質シルト、腐植土を含む、しまり弱、粘性中。
10. N4/ 灰色層、腐植分を含む、しまり弱、粘性中。
11. N5/ 灰色砂質シルト、しまり弱、粘性なし。
12. N4/ 灰色砂質シルト、腐植土を含む、しまり弱、粘性中。
13. N5/ 灰色粘質シルト、砂と腐植土を含む、しまり弱、粘性弱。
14. N4/ 灰色粘質シルト、粘土と腐植土を互層に含む、しまり弱、粘性弱。
15. N4/ 灰色粘質シルト、しまり弱、粘性中。
16. N4/ 灰色粘質シルト、しまり弱、粘性中。
17. N4/ 灰色粘質シルト、しまり弱、粘性中。

旧河川セクション b - b'
1. 2.5Y6/2 灰黄色砂礫層、φ 2.0 ～ 3.0cm の亜円礫主体、しまり弱、粘性なし。
2. 10BG4/1 暗青灰色砂礫層、φ 1.0cm ほどの円礫主体、しまり弱、粘性なし。
3. 5B3/1 暗青灰色シルト質粘土、腐植土をラミナ状に含む、しまり弱、粘性強。
4. 5B6/1 青灰色シルト質粘土、土器片を含む、しまり中、粘性強。（Ⅷb 層相当）
5. 5Y7/3 浅黄色砂層、シルト質粘土と腐植土をラミナ状に含む、しまり弱、粘性中。
6. 5Y5/1 灰色シルト質粘土、植物遺体を少量含む、しまり弱、粘性中。
7. 5Y5/2 灰オリーブ色砂層、シルト質粘土と腐植土をラミナ状に含む、しまり弱、粘性中。
8. 5Y6/1 灰色シルト質粘土、川砂と植物遺体を少量含む、しまり中、粘性強。
9. 5Y6/1 灰色シルト質粘土、砂と腐植土をラミナ状に含む、しまり中、粘性強。
10. 5Y6/1 灰色シルト質粘土、青灰色粘土を含む、しまり中、粘性強。
11. 5Y6/4 オリーブ黄色砂礫層、しまり中、粘性弱。
12. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト質粘土、川砂をラミナ状に含む、しまり中、粘性中。

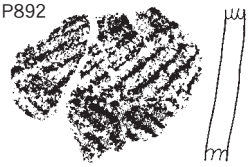
南側調査区（Ⅷ層）出土土器

SK845

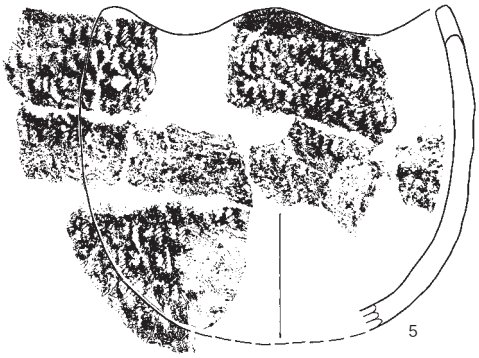


P909

P892

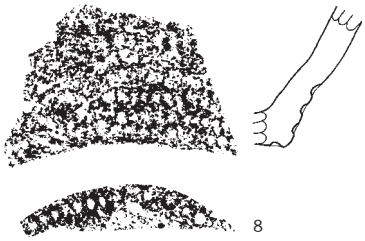


SK446（4・5）

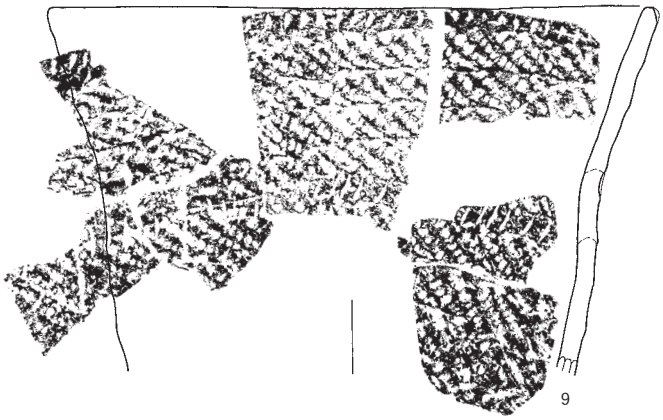


P348

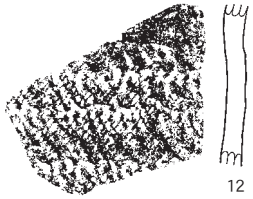
遺物集中 384（7・8）

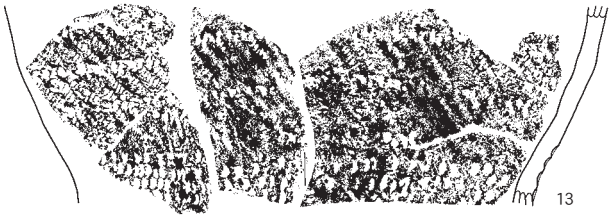


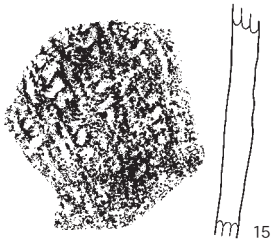
遺物集中 385

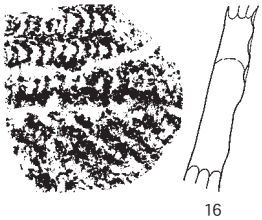


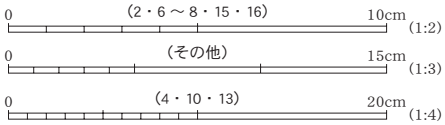
遺物集中 442（10 ～ 16）



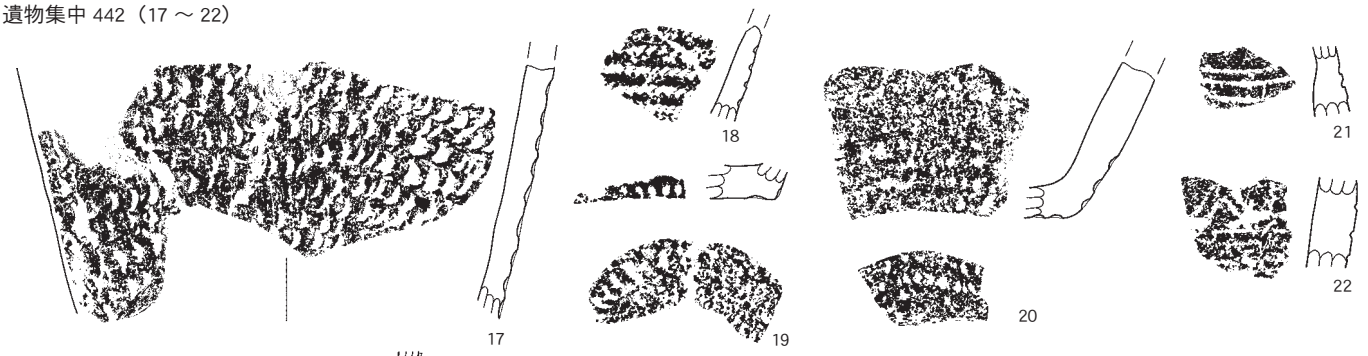




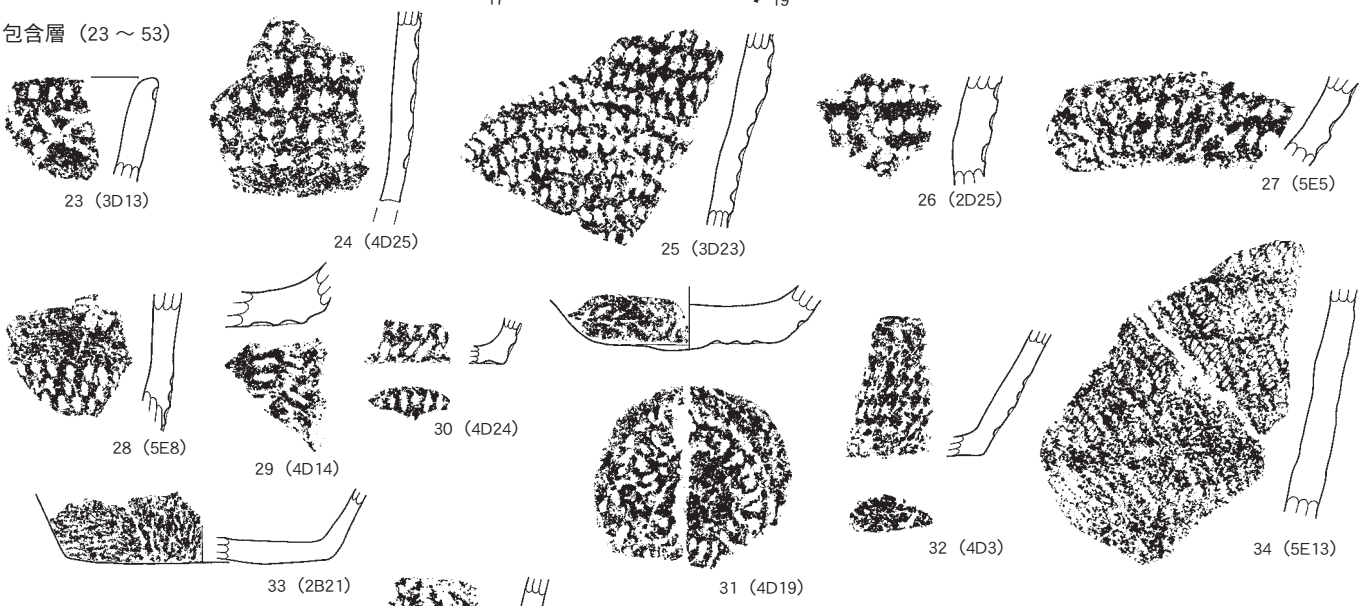


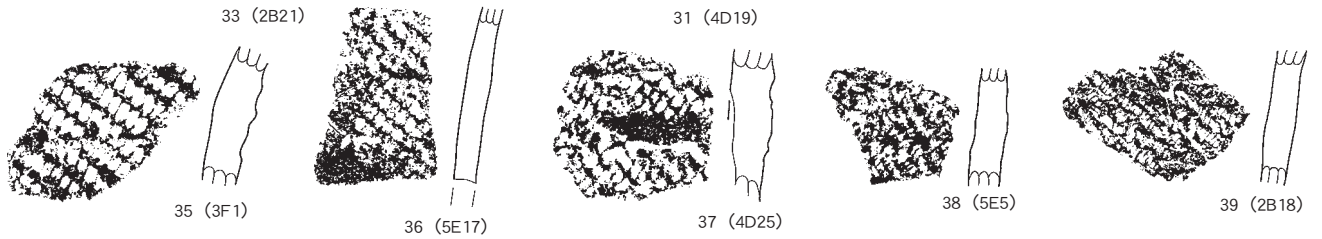


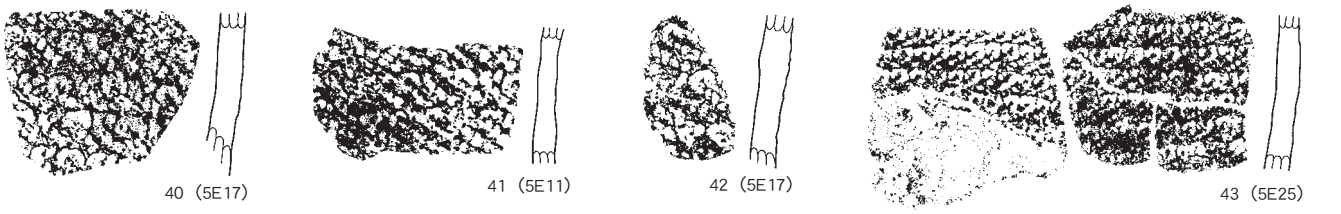
遺物集中 442（17 ～ 22）

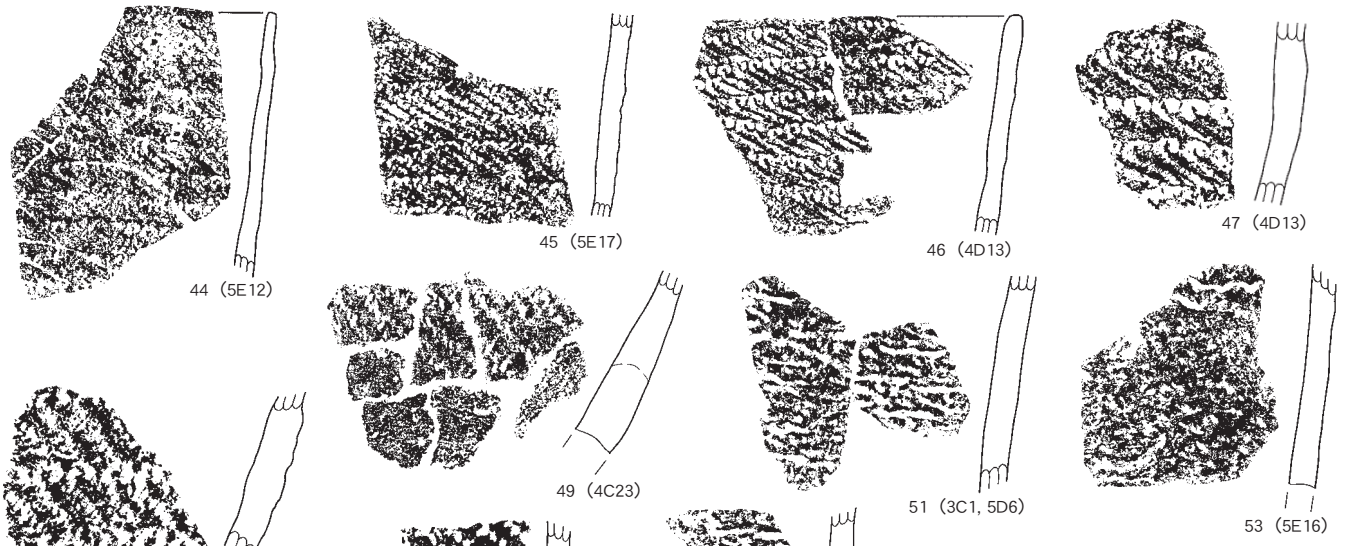


包含層（23 ～ 53）









試掘トレンチ

6T

54

7T（55 ～ 58）

55

56

57

58

北側調査区（Ⅷa 層）出土土器

SK259（59 ～ 61）

59-1

59-2

60

61

SK354

62

SK390

63

SK879（64・65）

64

65

SK400

66

SK831

67

SK287

68

SK754

69

SK756

70

SK355

71

SK769

72

SK288

73

SK767

74

78（6D15）

79（7D6）

SK451

75

包含層（76 ～ 79）

76（7D21）

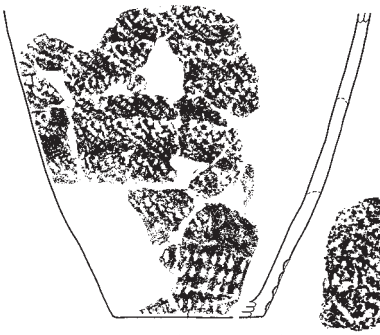
77（7D21）

0　（その他）　10cm　(1:2)

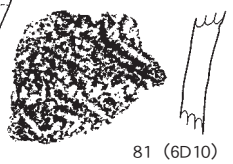
0　（54・63・67）　15cm　(1:3)

0　（62・66）　20cm　(1:4)

包含層（80・81）

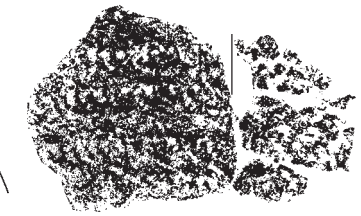


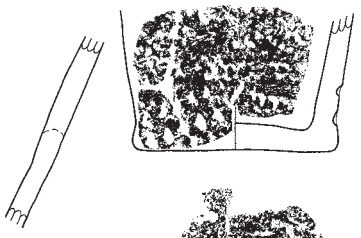
80（6D10・7D11）



81（6D10）

遺物集中 314（82・83）





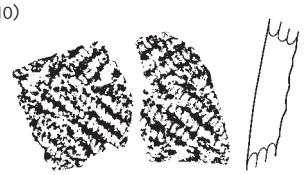
82

83

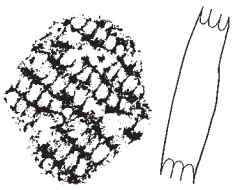
包含層（84 ～ 98）

84（6D24）

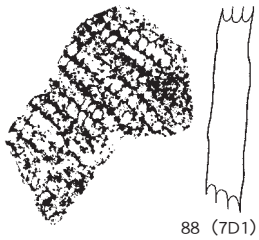
85（5D10）



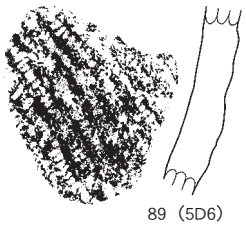
86（6C16）



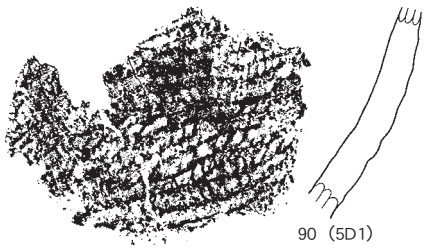
87（5D6）



88（7D1）



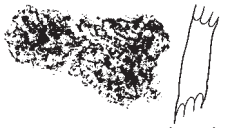
89（5D6）



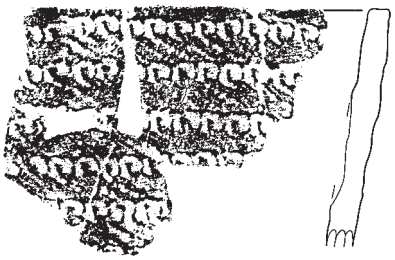
90（5D1）

91（6D19）

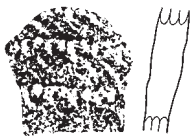
92（6D19）



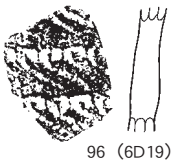
93（6D19）



94（6E19）

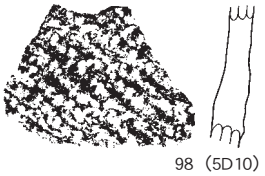


95（6D19）



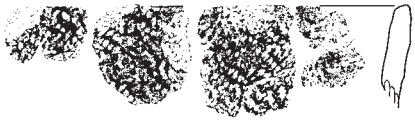
96（6D19）

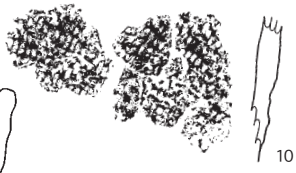
97（6D19）



98（5D10）

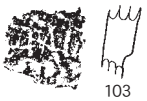
SK418（101 ～ 103）





101

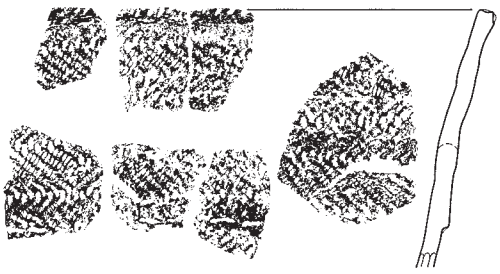
102



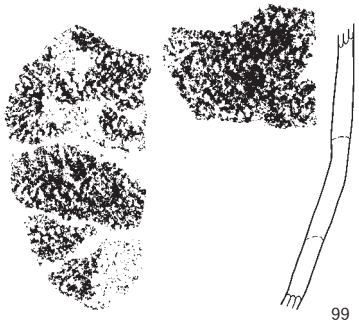
103

北側調査区（Ⅷb 層）出土土器

SK372（99・100）



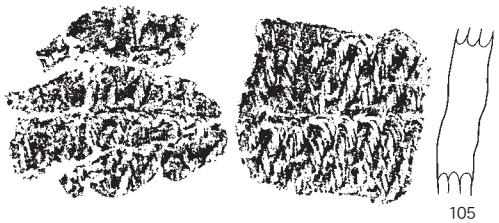
100



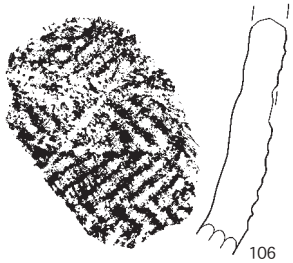
99

SK855（104 ～ 107）

104

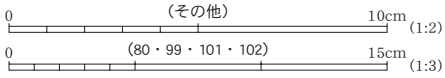


105



106

107



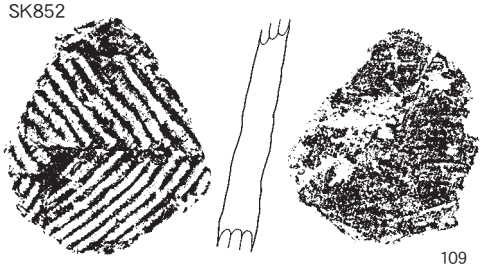
0　（その他）　10cm　(1:2)

0　（80・99・101・102）　15cm　(1:3)

SK852、P764、包含層（108）

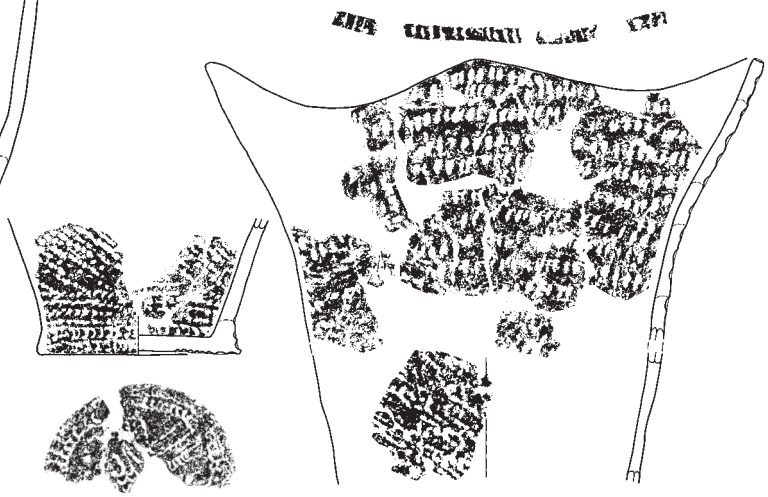
108

SK852



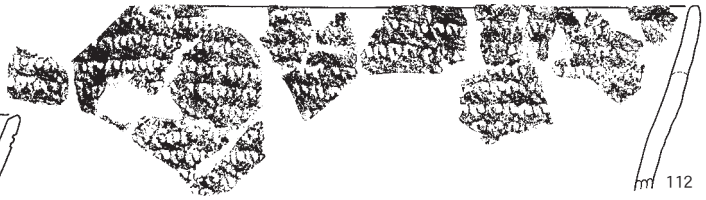
109

SK873（110 ～ 112）



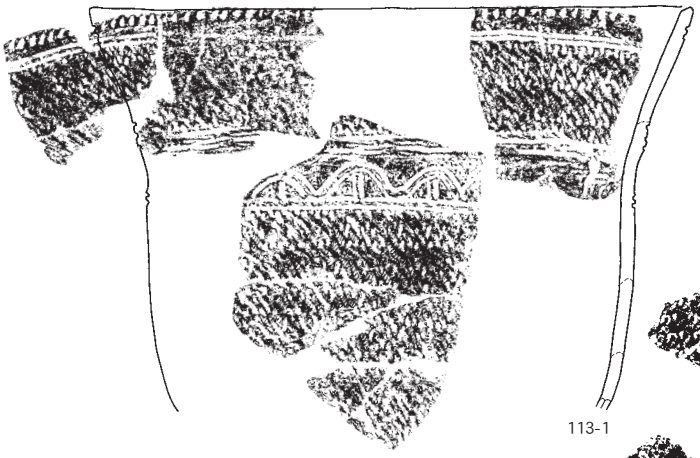
110

111



112

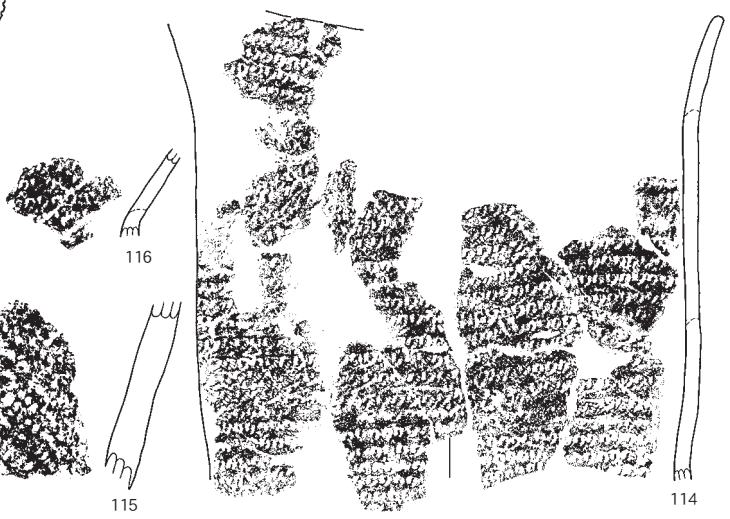
SK875、旧河川 4 層（113）



113-1

113-2

SK936（114 ～ 116）

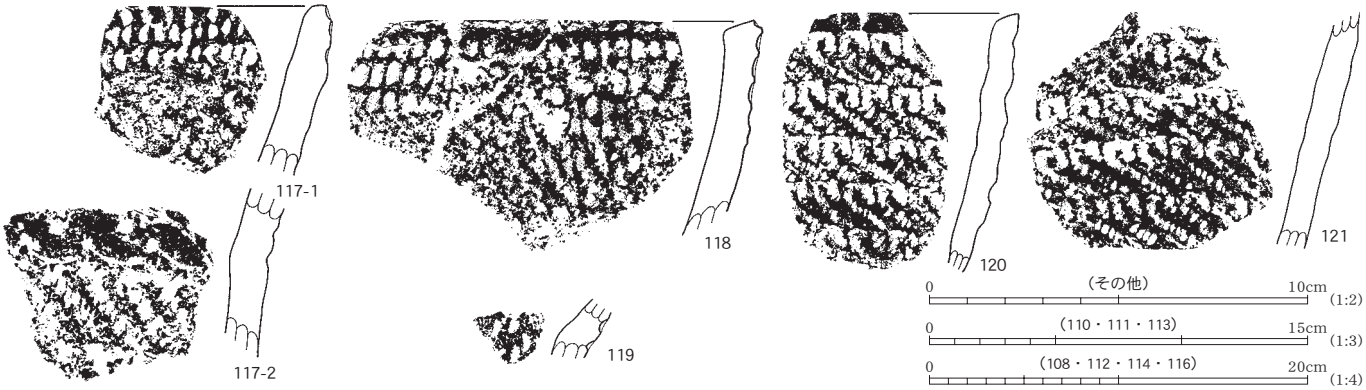


114

116

115

SK941（117 ～ 121）



117-1

117-2

118

119

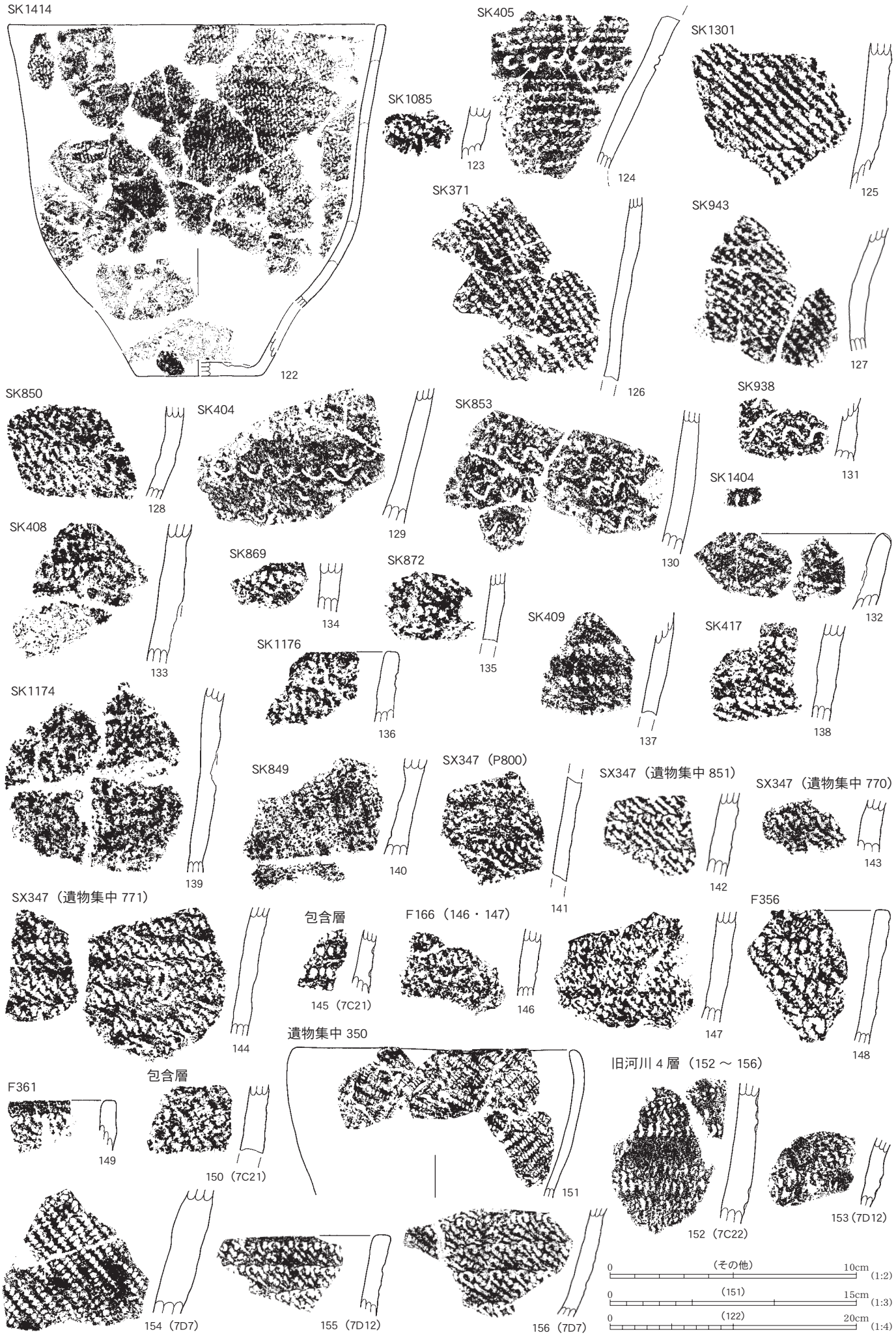
120

121

0　（その他）　10cm　(1:2)

0　（110・111・113）　15cm　(1:3)

0　（108・112・114・116）　20cm　(1:4)


SK1414
122
SK405
123
124
SK1085
SK1301
125
SK371
126
SK943
127
SK850
128
SK404
129
SK853
130
SK938
131
SK1404
SK408
133
SK869
134
SK872
135
132
SK409
137
SK417
138
SK1176
136
SK1174
139
SK849
140
SX347（P800）
141
SX347（遺物集中 851）
142
SX347（遺物集中 770）
143
SX347（遺物集中 771）
144
包含層
145（7C21）
F166（146・147）
146
147
F356
148
遺物集中 350
151
旧河川 4 層（152 ～ 156）
F361
149
包含層
150（7C21）
152（7C22）
153（7D12）
154（7D7）
155（7D12）
156（7D7）
0
（その他）
10cm
(1:2)
0
（151）
15cm
(1:3)
0
（122）
20cm
(1:4)

旧河川 4 層（157・158）

157（7D12）

158（7D12）

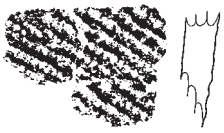
包含層（159 ～ 171）

159（5C1）

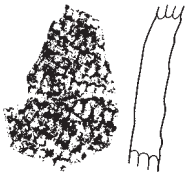
160（6D10）

161（6E18）

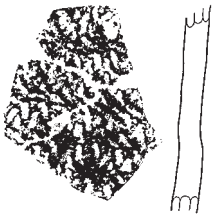
162（6D13）



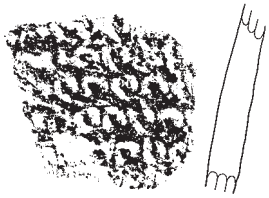
163（6D1）



164（6C4）



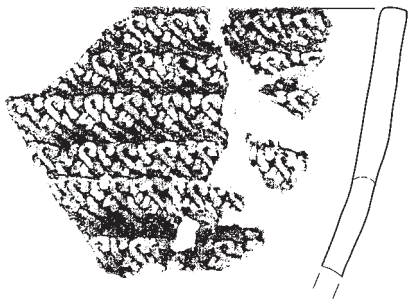
165（6D3）



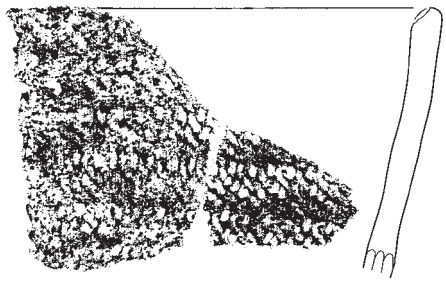
166（6C19）

167（6E9）

168（7C11）



169（7D11）

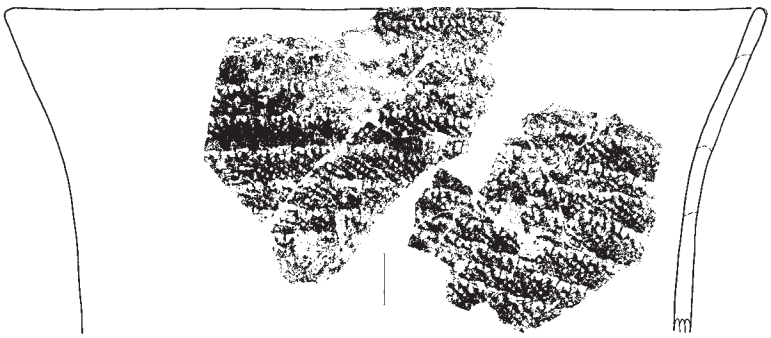


170（7D11）

171（7D12）

北側調査区（Ⅷb2 層）出土土器

SK1071

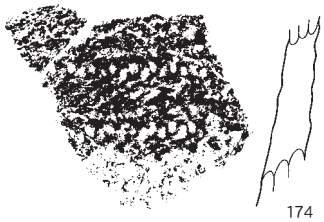


173

SX857

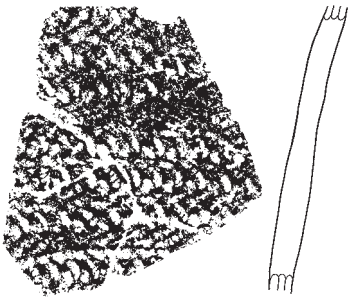
172

SK1090

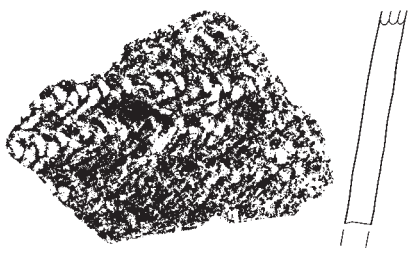


174

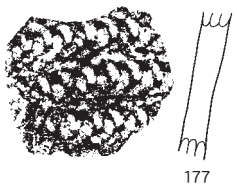
SK1160（175 ～ 178）



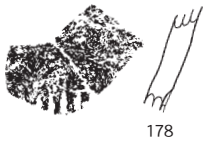
175



176



177



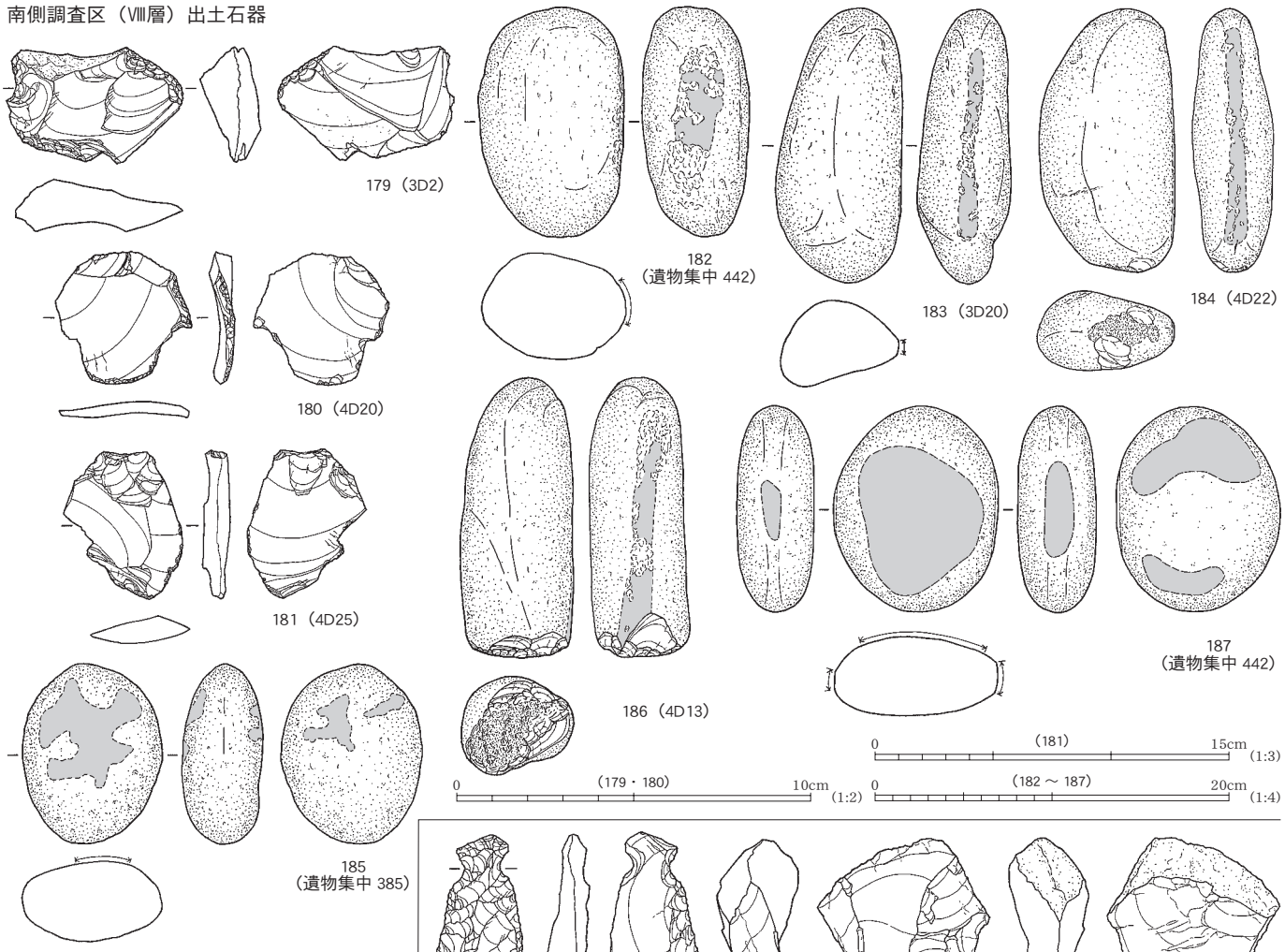
178

0　（その他）　10cm　(1:2)

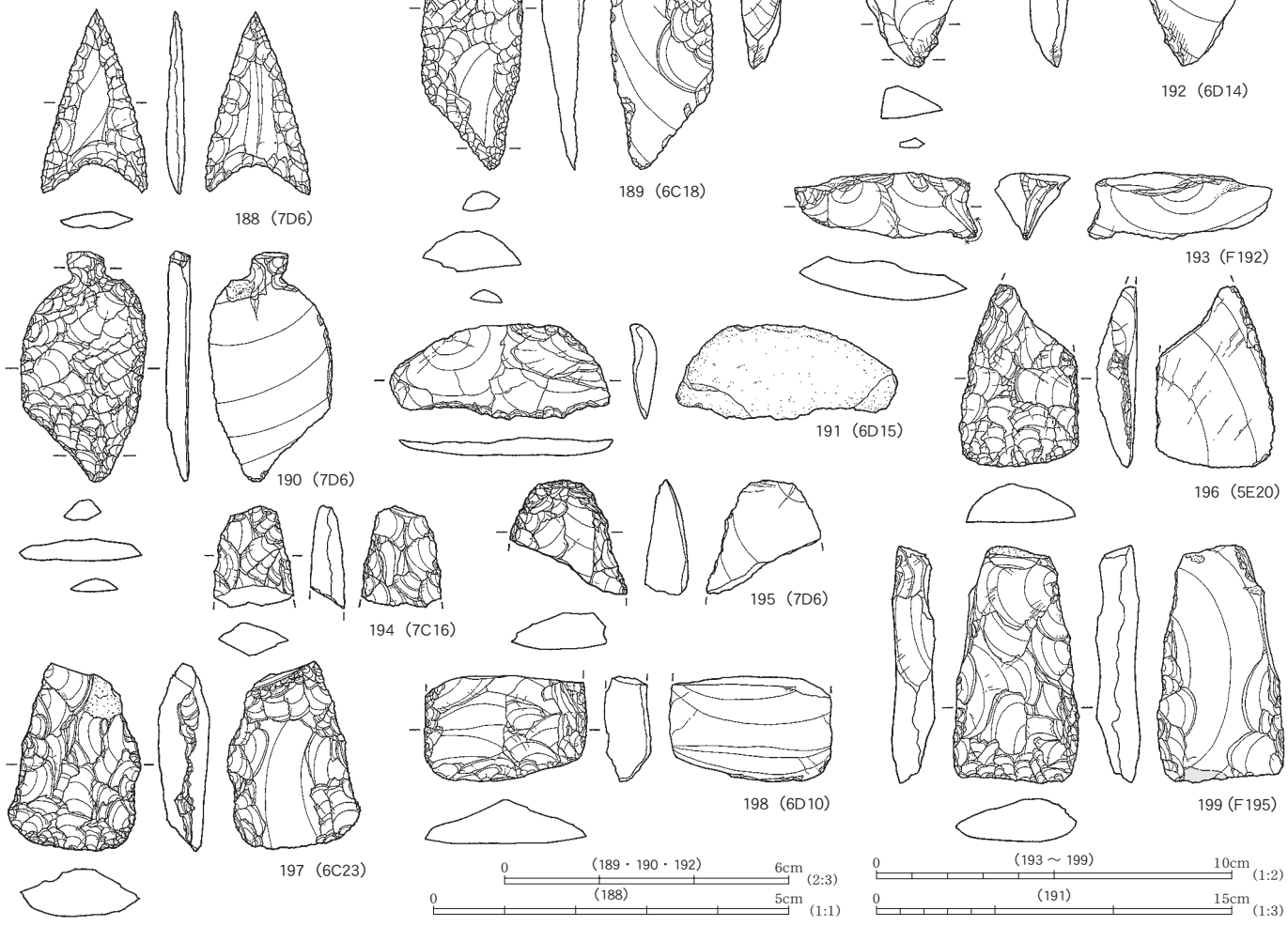
0　（162・173）　15cm　(1:3)

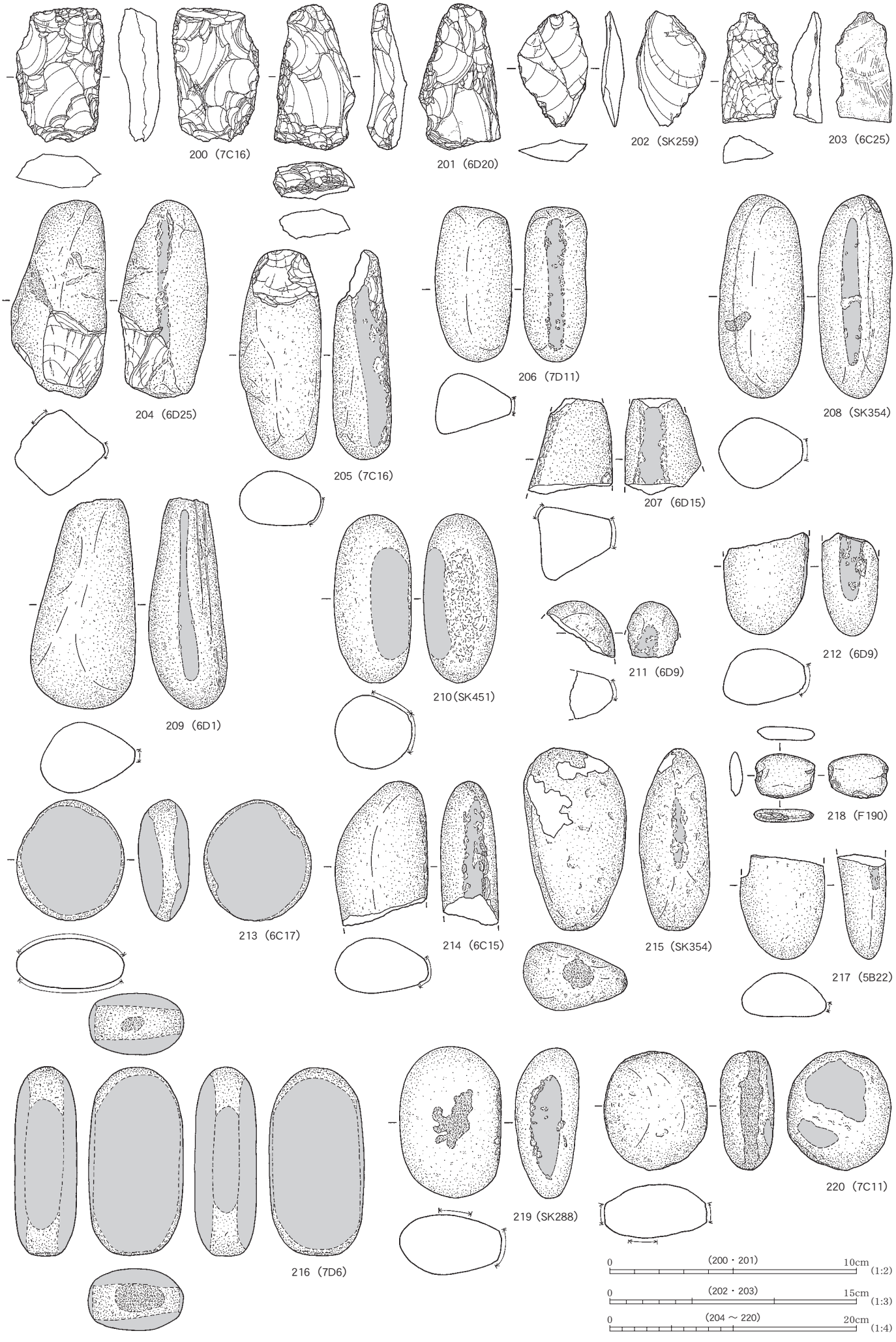
0　（157）　20cm　(1:4)

南側調査区（Ⅷ層）出土石器

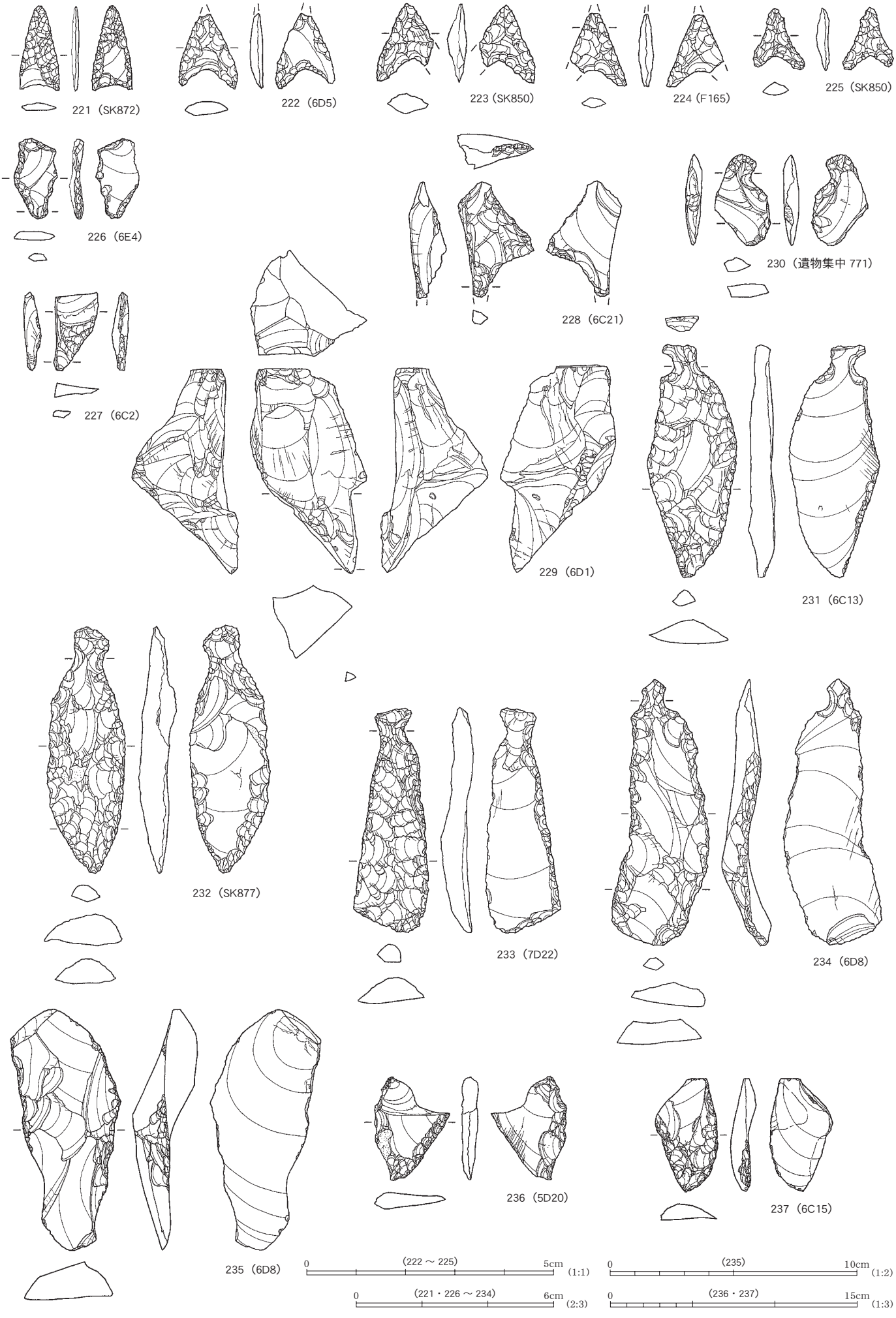


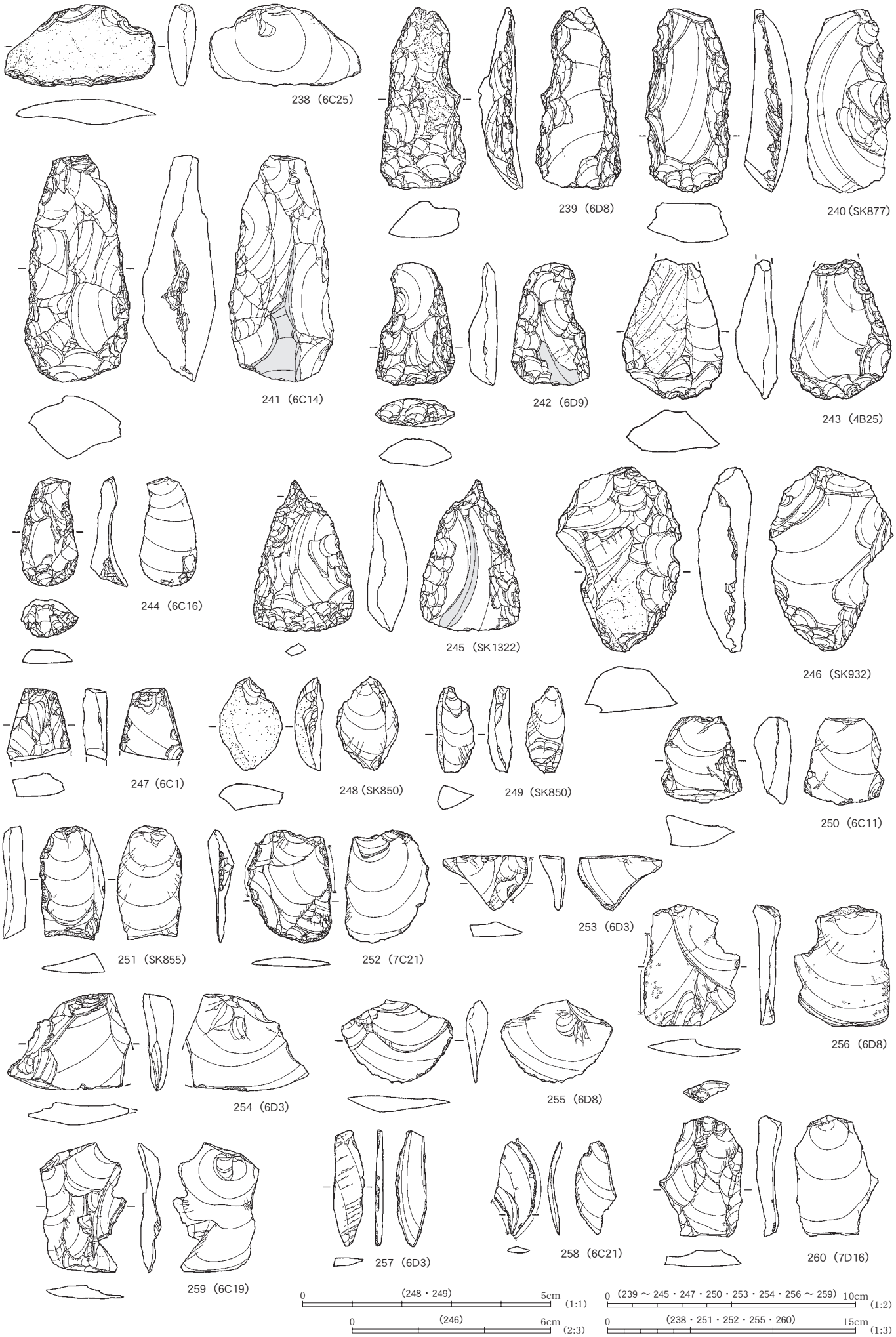
北側調査区（Ⅷ a 層）出土石器

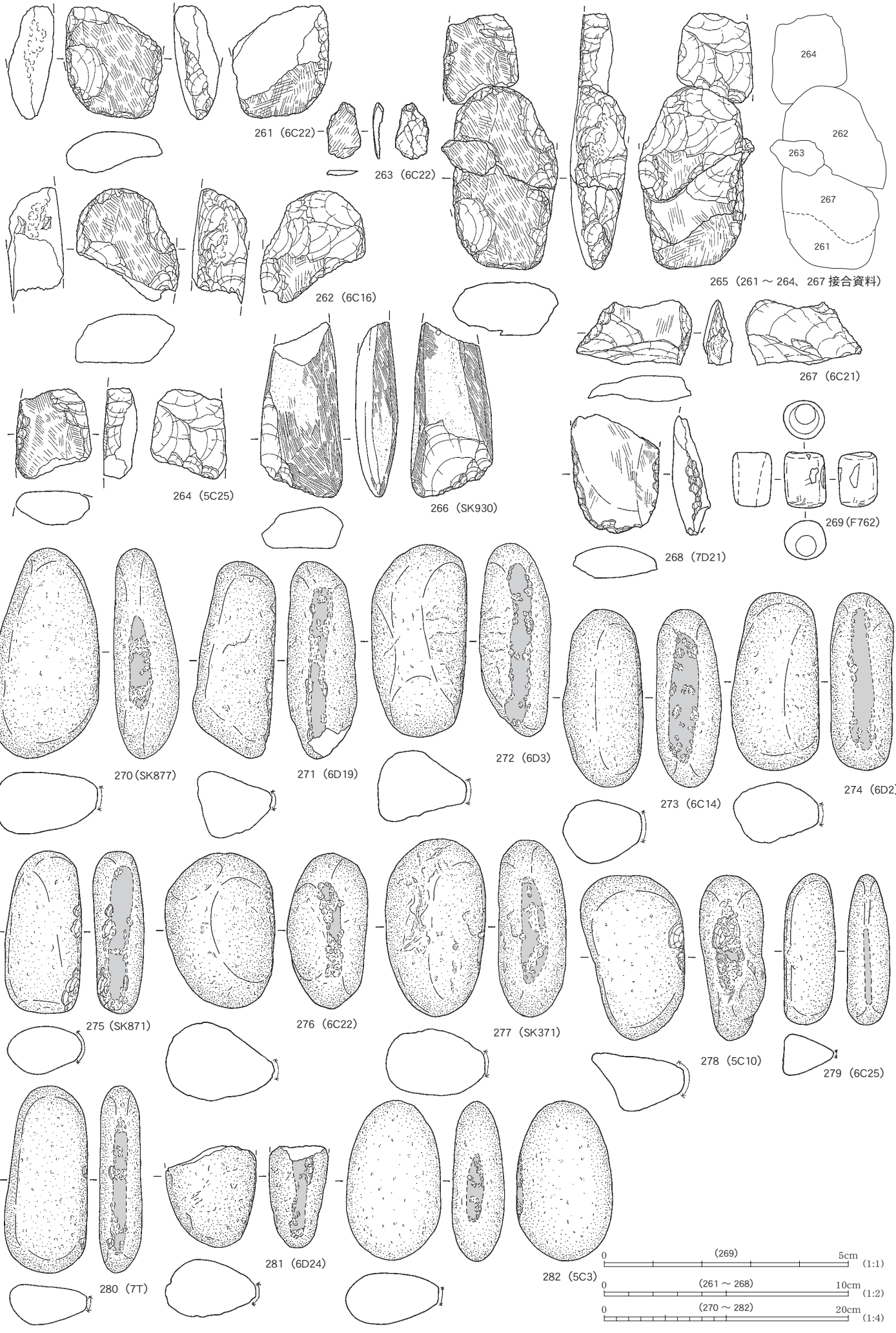


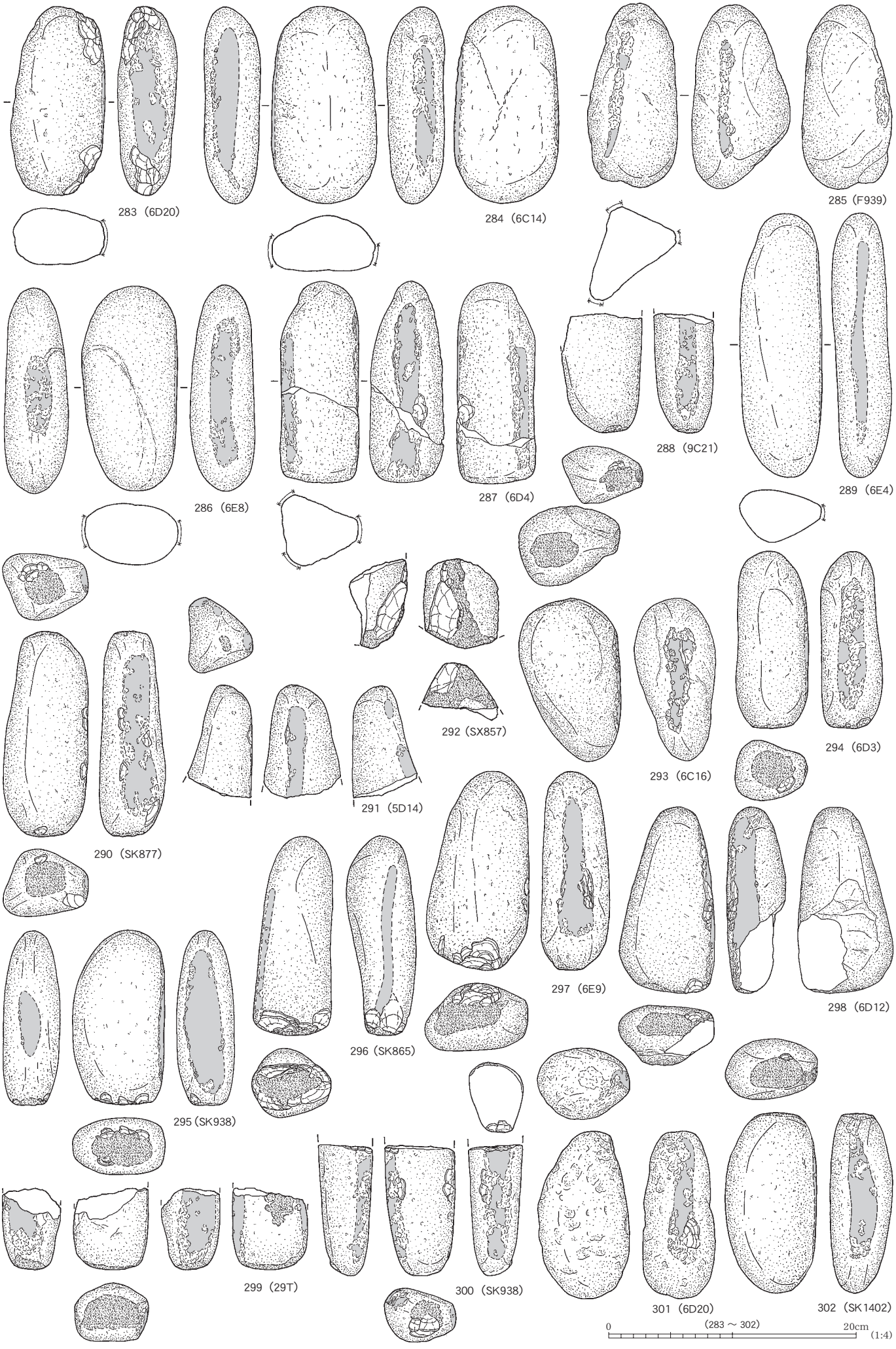

200（7C16）
201（6D20）
202（SK259）
203（6C25）
204（6D25）
205（7C16）
206（7D11）
207（6D15）
208（SK354）
209（6D1）
210（SK451）
211（6D9）
212（6D9）
213（6C17）
214（6C15）
215（SK354）
217（5B22）
218（F190）
216（7D6）
219（SK288）
220（7C11）
0 (200・201) 10cm (1:2)
0 (202・203) 15cm (1:3)
0 (204 ～ 220) 20cm (1:4)

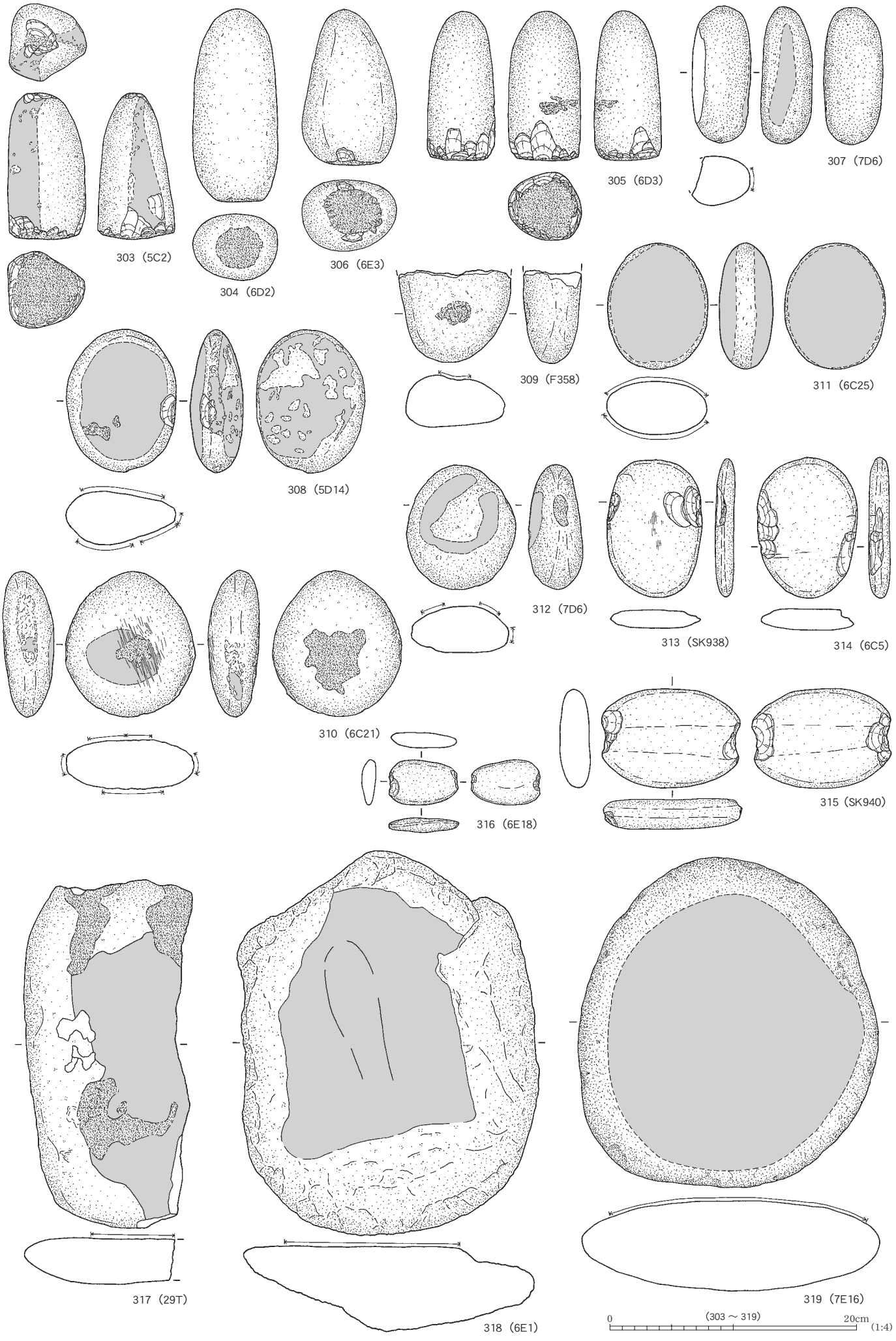
北側調査区（Ⅷb・Ⅷb2 層）出土石器

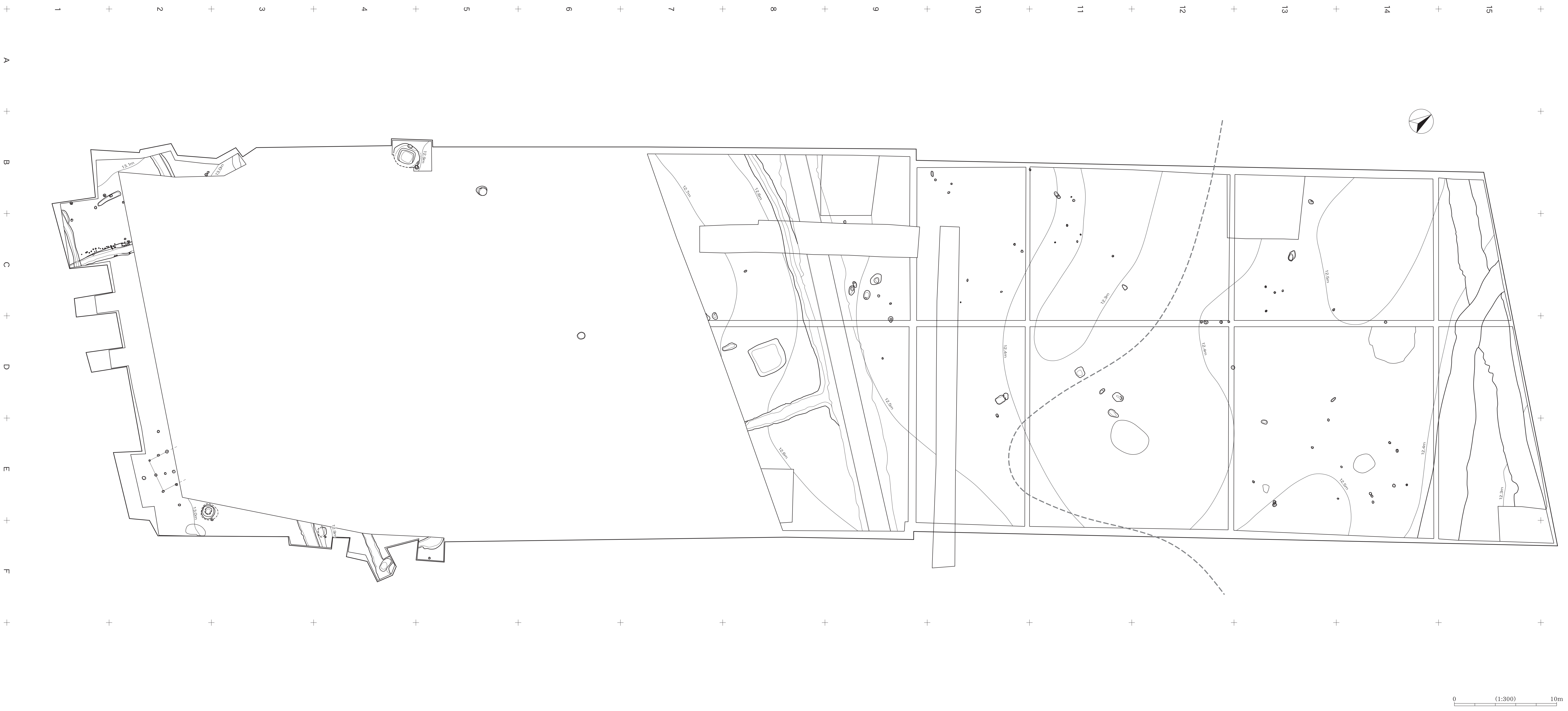


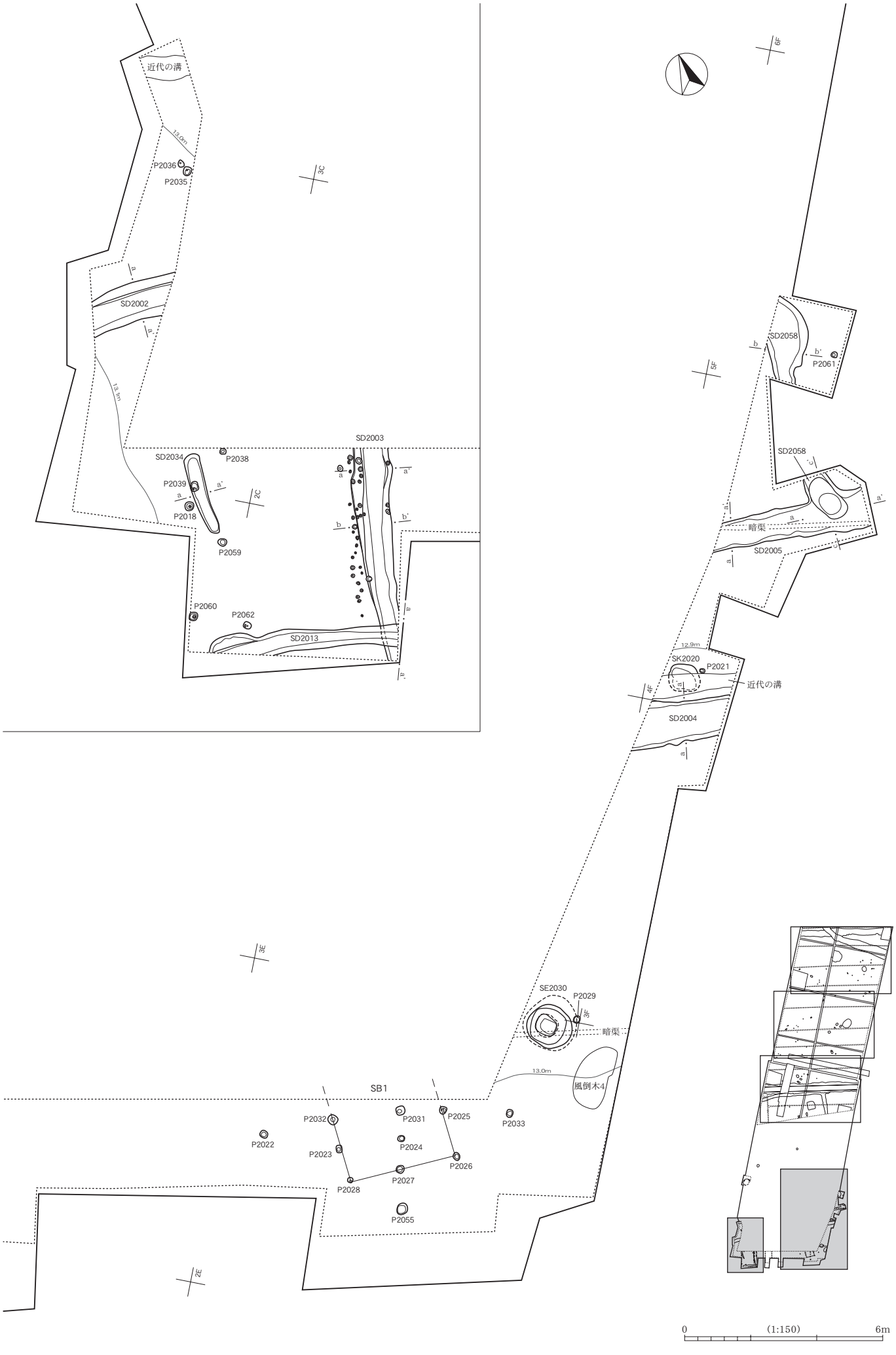

238（6C25）
239（6D8）
240（SK877）
241（6C14）
242（6D9）
243（4B25）
244（6C16）
245（SK1322）
246（SK932）
247（6C1）
248（SK850）
249（SK850）
250（6C11）
251（SK855）
252（7C21）
253（6D3）
254（6D3）
255（6D8）
256（6D8）
257（6D3）
258（6C21）
259（6C19）
260（7D16）
0 (248・249) 5cm (1:1)
0 (239～245・247・250・253・254・256～259) 10cm (1:2)
0 (246) 6cm (2:3)
0 (238・251・252・255・260) 15cm (1:3)


261（6C22）
263（6C22）
264
262
263
267
261
265（261 ～ 264、267 接合資料）
262（6C16）
267（6C21）
264（5C25）
266（SK930）
269（F762）
268（7D21）
270（SK877）
271（6D19）
272（6D3）
273（6C14）
274（6D2）
275（SK871）
276（6C22）
277（SK371）
278（5C10）
279（6C25）
280（7T）
281（6D24）
282（5C3）
0 (269) 5cm (1:1)
0 (261 ～ 268) 10cm (1:2)
0 (270 ～ 282) 20cm (1:4)

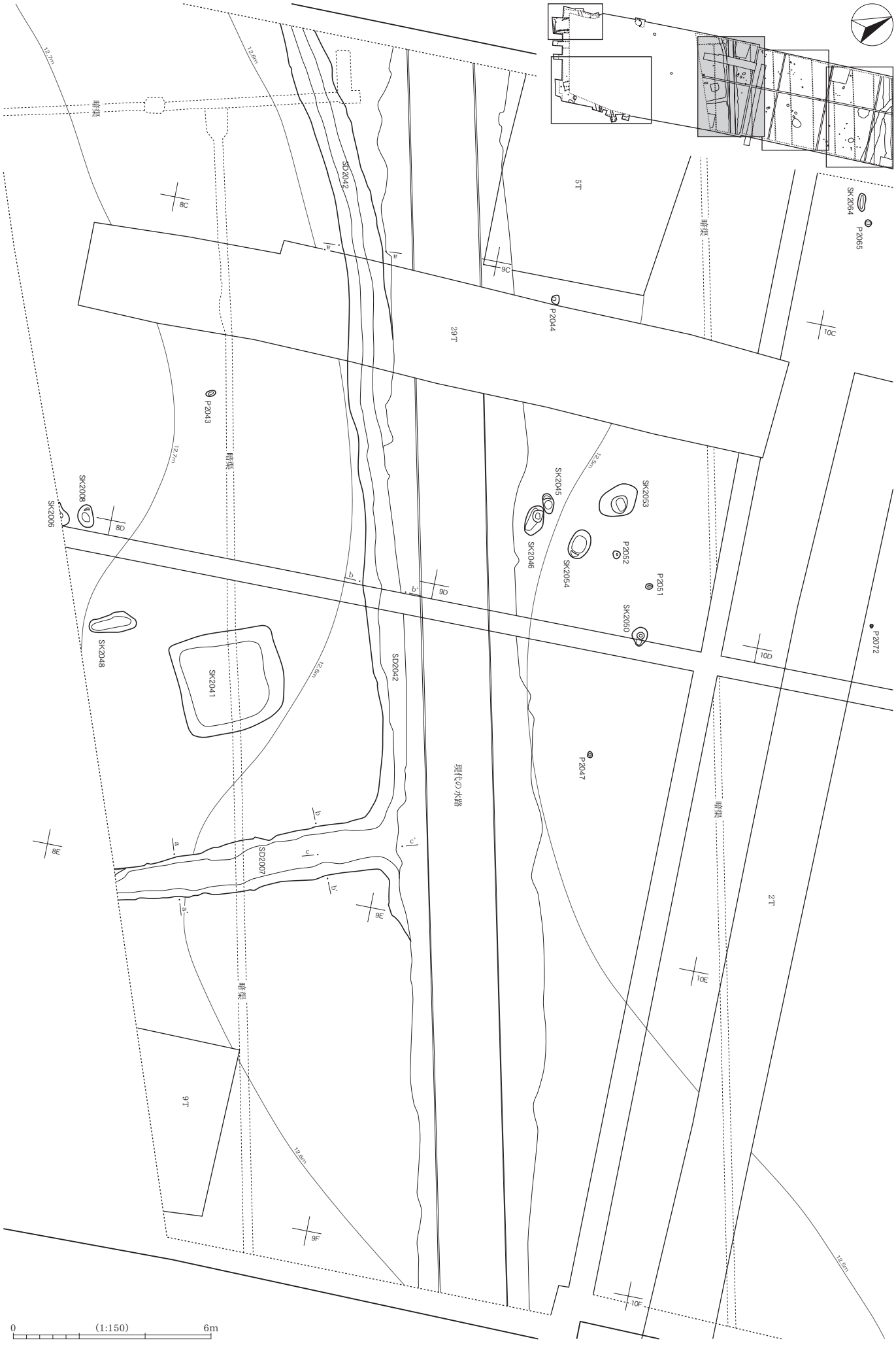

283（6D20）
284（6C14）
285（F939）
286（6E8）
287（6D4）
288（9C21）
289（6E4）
290（SK877）
291（5D14）
292（SX857）
293（6C16）
294（6D3）
295（SK938）
296（SK865）
297（6E9）
298（6D12）
299（29T）
300（SK938）
301（6D20）
302（SK1402）
0
（283 ～ 302）
20cm
（1:4）


303（5C2）
304（6D2）
306（6E3）
305（6D3）
307（7D6）
309（F358）
311（6C25）
308（5D14）
312（7D6）
313（SK938）
314（6C5）
310（6C21）
316（6E18）
315（SK940）
317（29T）
318（6E1）
319（7E16）
0
（303 ～ 319）
20cm
（1:4）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
A
B
C
D
E
F
0
(1:300)
10m


近代の溝
13.0m
P2036
P2035
3C
SD2002
13.1m
SD2003
SD2034
P2038
P2039
2C
P2018
P2059
P2060
P2062
SD2013
6F
5F
SD2058
P2061
暗渠
SD2005
12.9m
SK2020
P2021
近代の溝
4F
SD2004
3E
SE2030
P2029
3F
暗渠
13.0m
風倒木4
SB1
P2032
P2031
P2025
P2033
P2022
P2024
P2023
P2026
P2027
P2028
P2055
2E
0
(1:150)
6m

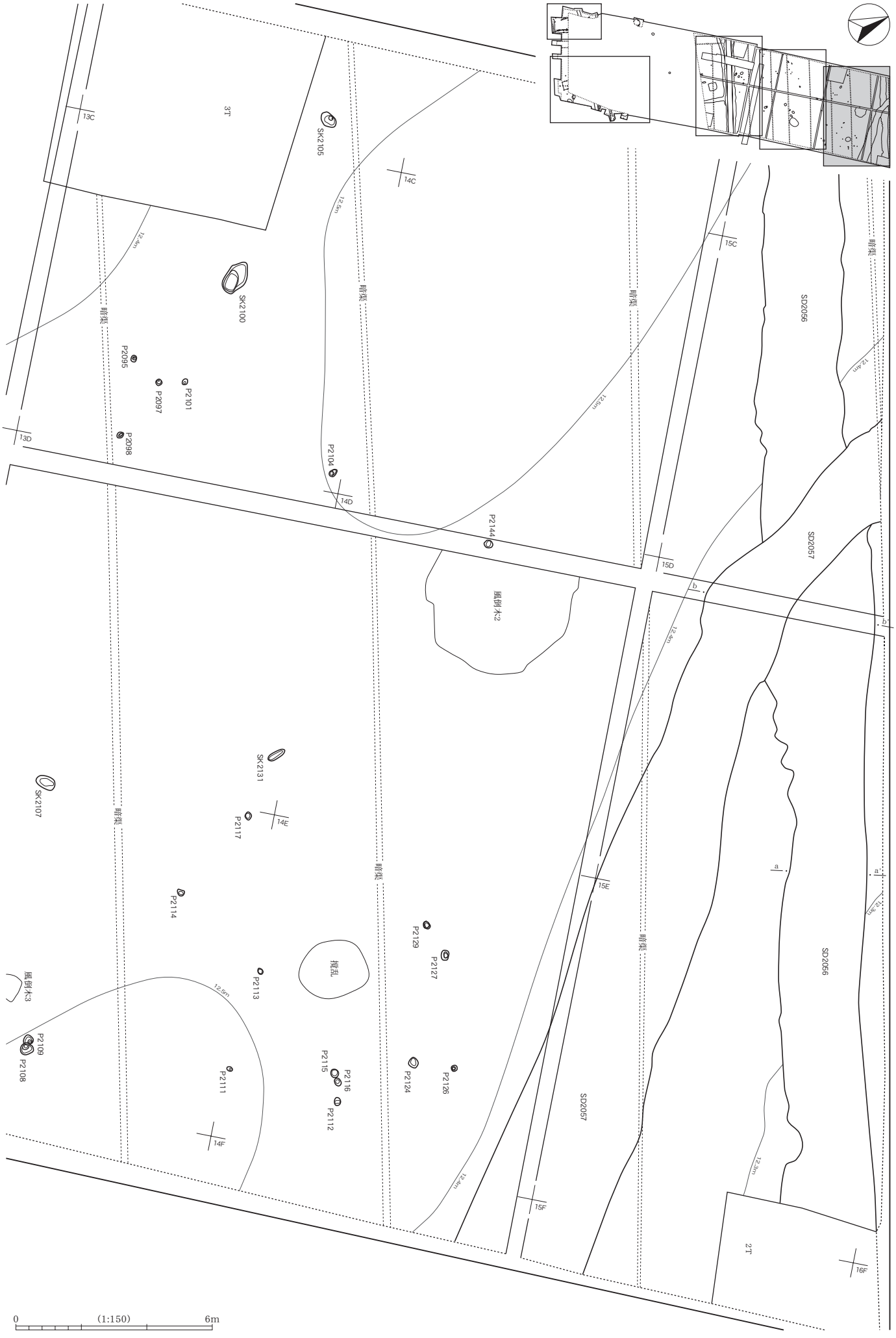
谷地遺跡中世　遺構分割図（2）

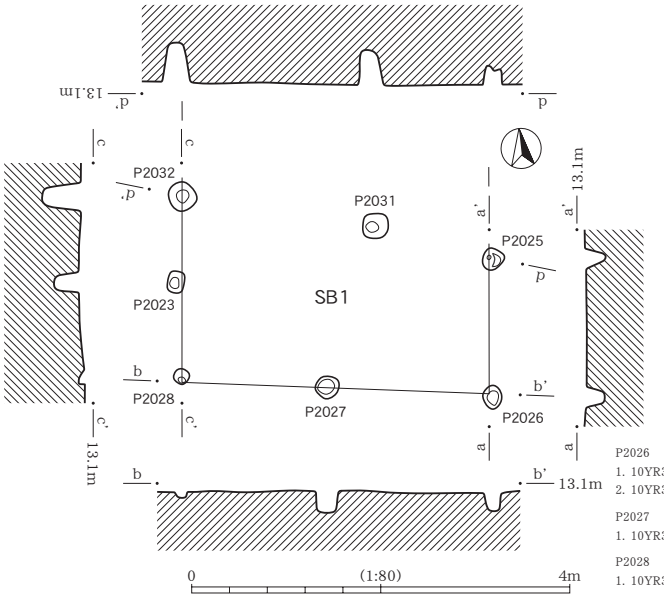


SK2064
P2065
P2068
P2066
P2122
P2081
SK2080
P2082
P2084
P2089
P2083
P2085
P2069
P2070
P2071
P2072
P2075
P2087
SK2086
P2136
P2137
P2138
P2139
SK2079
SK2078
P2077
SK2093
SK2094
SK2133
SK2134
風倒木1
P2141
P2110
風倒木3
P2109
P2108
暗渠
11C
11D
11E
11F
12C
12D
12E
12F
13D
13E
13F
2T
12.4m
12.5m
0
(1:150)
6m

図 版 47

谷地遺跡中世　遺構分割図（4）





P2023
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、φ 0.3 ～ 4.0cm の黄褐色シルトを塊状に中量含む、しまり弱、粘性中。
2. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、φ 0.3 ～ 4.0cm の黄褐色シルトを塊状に多量含む、しまり中、粘性中。

P2025
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に中量含む、しまり中、粘性強。
2. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黄褐色シルトを斑状に少量含む、しまり弱、粘性中。

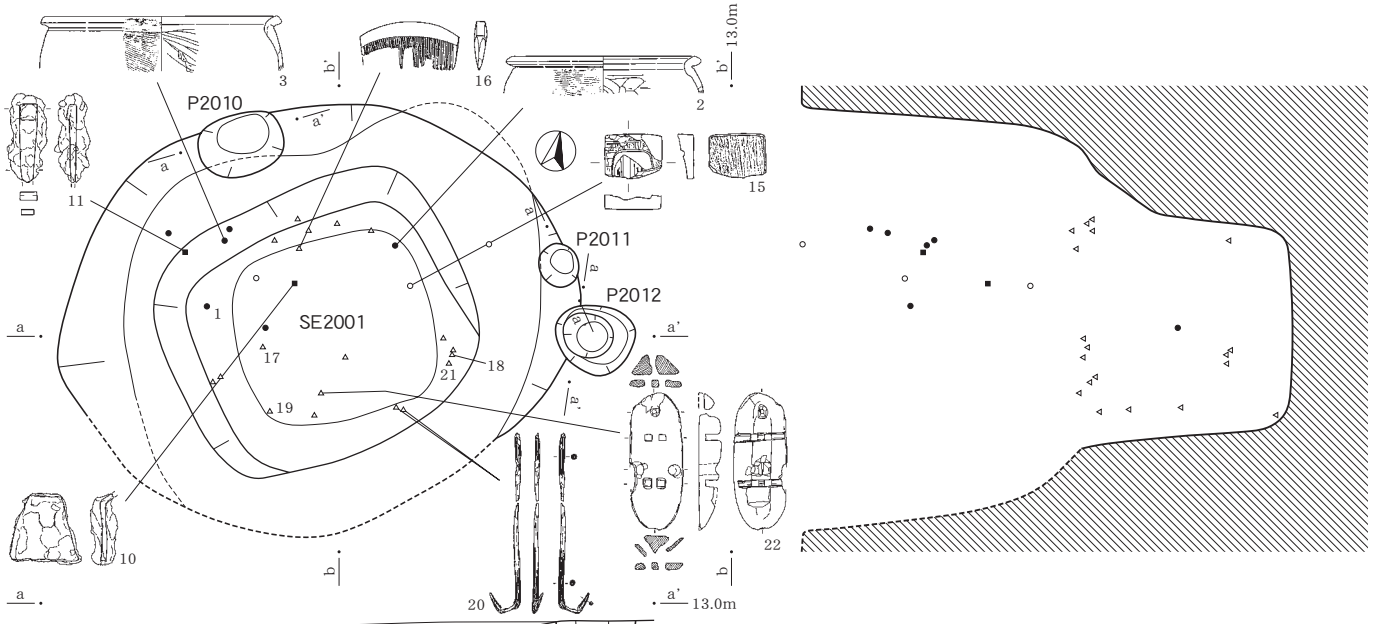
P2026
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、φ 1.0cm ほどの黄褐色シルトを塊状に少量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、φ 2.0cm ほどの黄褐色シルトを塊状に中量含む、しまり弱、粘性中。

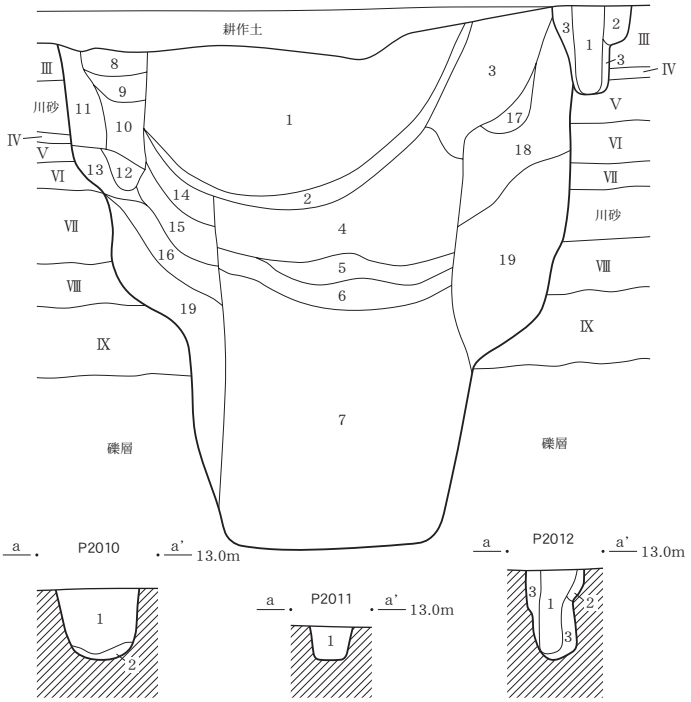
P2027
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に中量含む、しまり中、粘性強。

P2028
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に中量含む、しまり中、粘性強。

P2031
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、φ 0.5cm ほどの黄褐色シルトを塊状に少量含む、φ 0.2 ～ 0.5cm の礫を少量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、φ 0.3cm ほどの黄褐色シルトを塊状に少量含む、しまり中、粘性中。

P2032
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に中量含む、しまり中、粘性中。



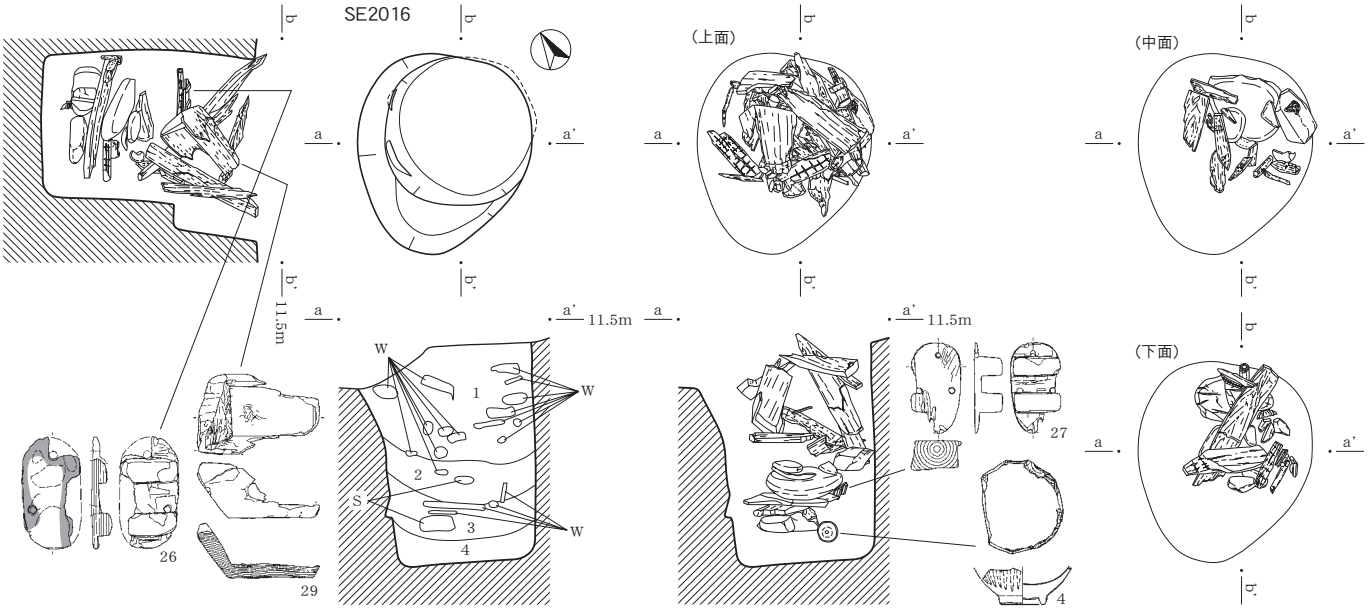


SE2001
1. 10YR3/1 黒褐色土、埋め戻し土、φ 1.0 ～ 2.0cm の礫を含む、しまりなし、粘性なし。
2. 10YR3/1 黒褐色土、埋め戻し土、炭化物を多量含む、しまりなし、粘性なし。
3. 10YR3/2 黒褐色土、埋め戻し土、しまりなし、粘性なし。
4. 10YR3/1 黒褐色土、埋め戻し土、Ⅳ層土を含む、しまりなし、粘性なし。
5. 10YR2/1 黒色粘質土、埋め戻し土、しまり弱、粘性強。
6. 10YR2/1 黒色粘質土、埋め戻し土、炭化物を含む、しまり弱、粘性強。
7. 10YR2/1 黒色粘質土、埋め戻し土、腐植物層、しまりなし、粘性中。
8. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土、掘形埋土、しまりなし、粘性中。
9. 5Y7/4 浅黄色粘質シルト、掘形埋土、Ⅲ層土を塊状に含む、しまりなし、粘性中。
10. 5Y7/4 浅黄色粘質シルト、掘形埋土、黒色土を含む、しまりなし、粘性中。
11. 5Y7/4 浅黄色粘質シルト、掘形埋土、黒色土＋砂質土＋Ⅲ層土、しまりなし、粘性中。
12. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト、掘形埋土、Ⅲ層土を少量含む、しまりなし、粘性やや強。
13. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト、掘形埋土、Ⅲ層土＋砂質土＋Ⅲ層土、しまりなし、粘性中。
14. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト、掘形埋土、Ⅲ層土を塊状に極微量含む、しまりなし、粘性中。
15. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト、掘形埋土、Ⅲ層土を塊状に微量含む、しまりなし、粘性やや強。
16. 2.5Y5/4 黄褐色粘質シルト、掘形埋土、Ⅲ層土に黒色土を含む、しまりなし、粘性中。
17. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト、掘形埋土、Ⅲ層土を斑状に少量含む、しまりなし、粘性中。
18. 2.5Y5/4 黄褐色粘質シルト、掘形埋土、Ⅲ層土を斑状に少量含む、しまりなし、粘性やや強。
19. 5Y5/3 灰オリーブ色粘質シルト、掘形埋土、砂質土＋Ⅲ層土＋Ⅳ層土＋Ⅷ層土、しまりなし、粘性中。

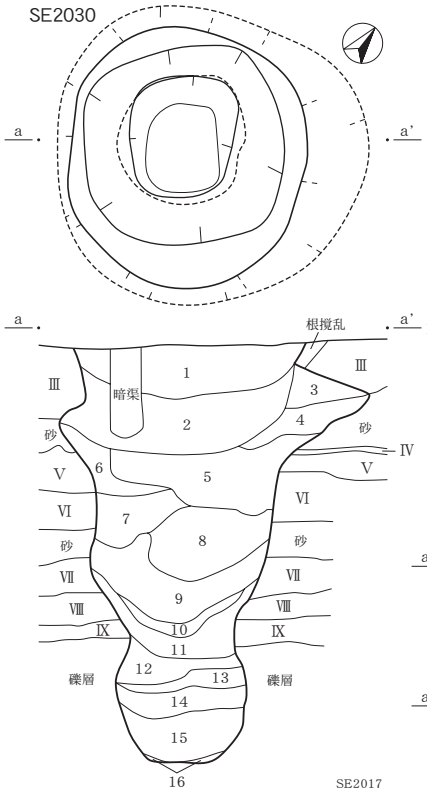
P2010
1. 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト、黒褐色シルトを斑状に少量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト、黒褐色シルトを斑状に少量含む、しまり弱、粘性弱。

P2011
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黄褐色シルトを斑状に少量含む、しまり中、粘性中。

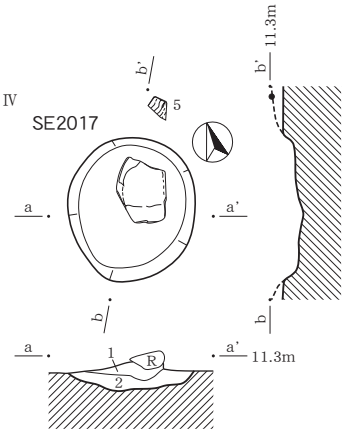
P2012
1. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に微量含む、しまり中、粘性やや強。
2. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に中量含む、しまり中、粘性中。
3. 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト、黒褐色シルトを塊状に少量含む、しまり中、粘性中。



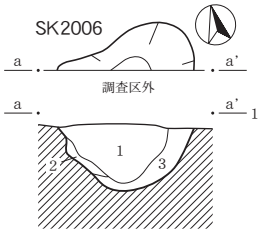
SE2016
1. 10YR4/1 褐灰色粘質土、黄褐色粘質土と暗褐色粘質土を塊状に少量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR2/1 黒色粘質土、腐植物を少量含む、焼けた木製品を多量含む、しまり弱、粘性やや強。
3. 10YR2/1 黒色粘質土、頭大の被熱礫を含む、腐植物を少量含む、焼けた木製品を中量含む、しまり弱、粘性やや強。
4. 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土、腐植物を中量含む、しまり弱、粘性やや強。

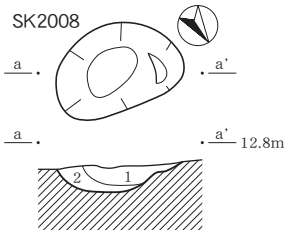


SE2030
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黄褐色土を塊状に少量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、φ 1.0cm ほどの黄褐色シルトを塊状に微量含む、しまり中、粘性強。
3. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、φ 1.0cm ほどの黄褐色シルトを塊状に少量含む、しまり弱、粘性中。
4. 2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト、Ⅲ層地山崩落土、しまり中、粘性中。
5. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、φ 0.5 ～ 3.0cm の黄褐色シルトをラミナ状に中量含む、しまり中、粘性中。
6. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、φ 0.5cm ほどの黄褐色シルトを塊状に中量含む、しまり弱、粘性弱。
7. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、φ 0.1 ～ 0.8cm の黄褐色シルトを塊状に少量含む、しまり中、粘性中。
8. 10YR2/3 黒褐色砂質シルト、φ 0.1 ～ 0.3cm の黄褐色シルトを塊状に少量含む、しまり弱、粘性中。
9. 2.5Y6/6 明黄褐色砂質シルト、φ 0.3 ～ 1.0cm の黒褐色土を塊状に中量含む、しまり弱、粘性中。
10. 10YR2/2 黒褐色粘質シルト、砂質土を微量含む、φ 1.0 ～ 2.0cm の円礫を少量含む、しまり弱、粘性強。
11. 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト、粘質シルトをラミナ状に含む、φ 0.5cm ほどの円礫を少量含む、しまり弱、粘性弱。
12. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黄褐色粘質土を塊状に含む、しまり弱、粘性中。
13. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土、しまり弱、粘性弱。
14. 5PB4/1 暗青灰色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に中量含む、小礫を少量含む、しまり中、粘性中。
15. 5PB4/1 暗青灰色砂質シルト、黄褐色シルトを微量含む、しまり弱、粘性弱。
16. 5PB4/1 暗青灰色粘質土、しまり中、粘性強。



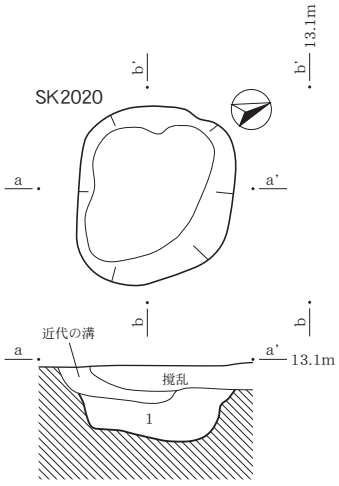
SE2017
1. 7.5Y2/1 黒色粘質土、φ 0.2 ～ 0.3cm の礫を少量含む、しまり弱、粘性強。
2. 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘質土、しまり弱、粘性強。



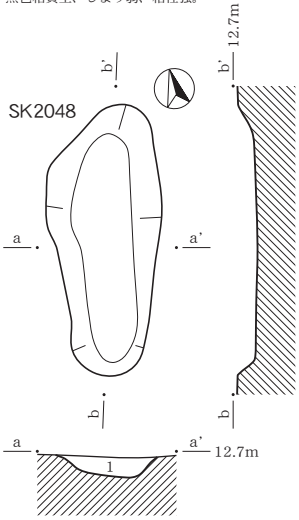


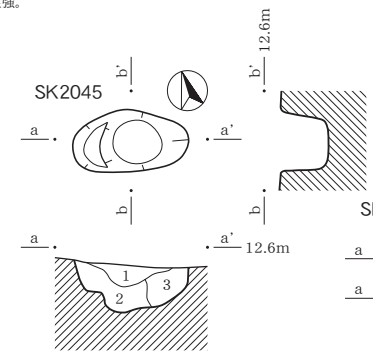
SK2006
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、鉄分を少量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト、青灰色シルトを斑状に少量含む、しまり中、粘性中。
3. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト、青灰色シルトを斑状に微量含む、しまり中、粘性中。

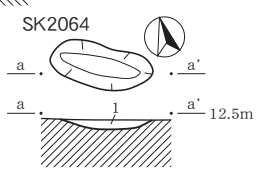
SK2008
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黒色シルトを塊状に中量含む、白色粒子を少量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、白色粒子を少量含む、しまり中、粘性中。



SK2020
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に中量含む、しまり中、粘性中。





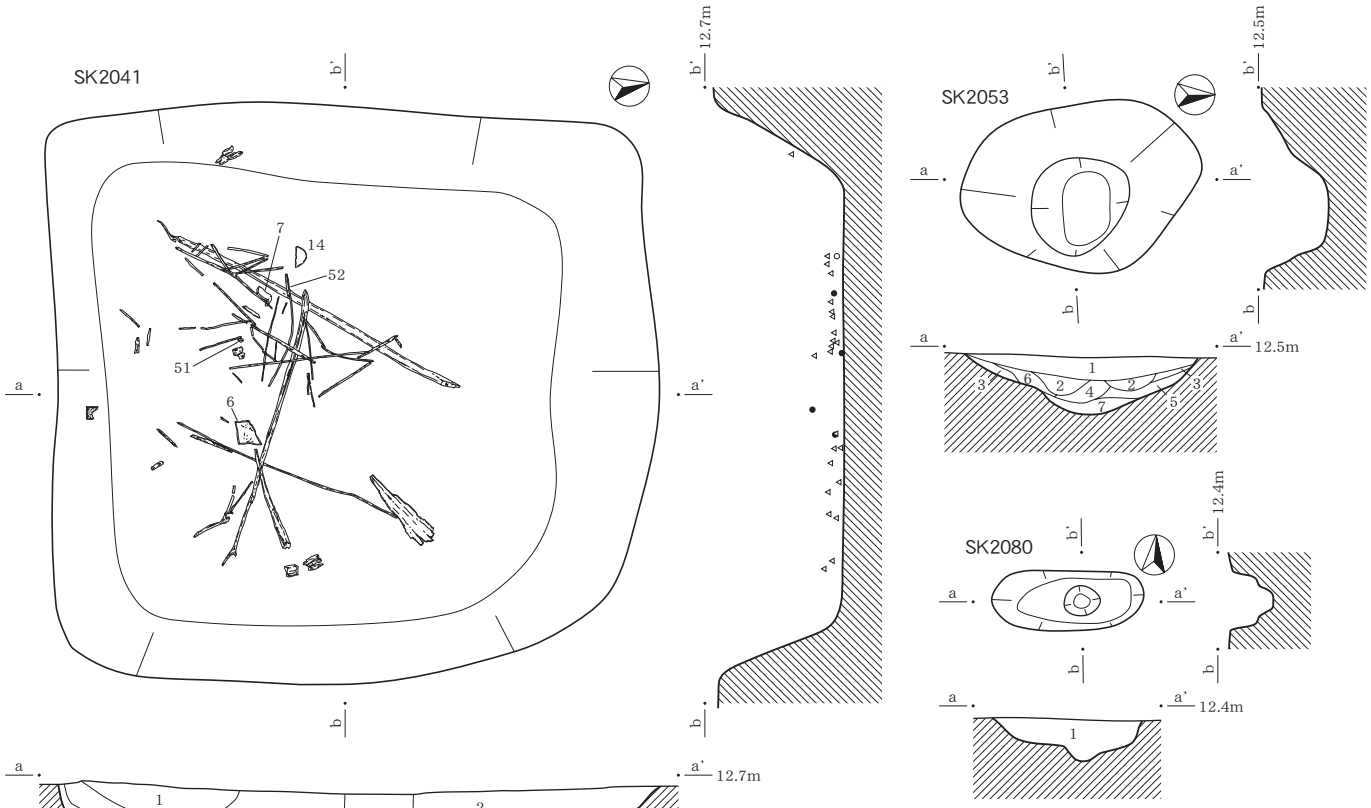


SK2045
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、鉄分を微量含む、しまり中、粘性やや強。
2. 10YR3/3 暗褐色粘質シルト、青灰色シルトを斑状に少量含む、しまり中、粘性やや強。
3. 5B6/1 青灰色粘質シルト、暗褐色シルトを中量含む、鉄分を少量含む、しまり中、粘性やや強。

SK2048
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黒色シルトを塊状に微量含む、しまり中、粘性中。

SK2064
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト、青灰色粘質土を塊状に少量含む、鉄分を少量含む、しまり中、粘性やや強。

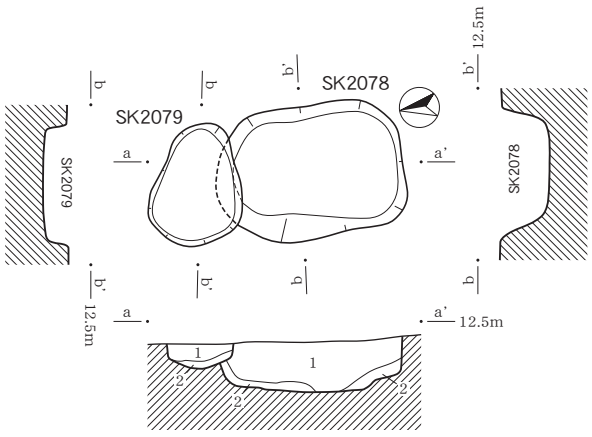
0　(1:40)　2m

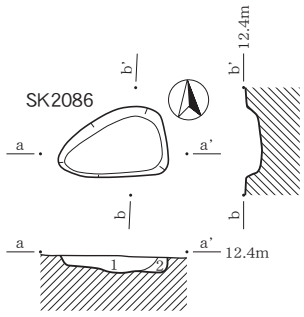


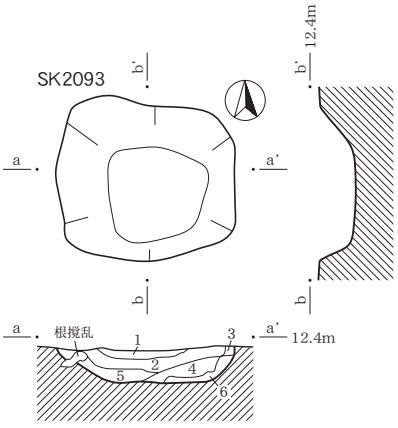
SK2041
1. 10YR7/1 灰白色砂質シルト、黒色シルトを塊状に中量含む、白色粒子を少量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト、灰白色シルトを塊状に中量含む、白色粒子を少量含む、しまり中、粘性中。
3. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト、灰白色シルトを塊状に多量含む、しまり中、粘性中。
4. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト、鉄分を少量含む、しまり中、粘性中。
5. 10YR7/1 灰白色砂質土、黒褐色シルトを塊状に微量含む、しまりやや弱、粘性中。
6. 10YR2/1 黒色粘質シルト、青灰色シルトを塊状に微量含む、しまり中、粘性強。
7. 10YR7/1 灰白色砂質シルト、黒褐色シルトを塊状に中量含む、しまり中、粘性中。
8. 7.5YR2/1 黒色粘質シルト、青灰色シルトを塊状に中量含む、しまり中、粘性やや強。
9. 10YR7/1 灰白色砂質シルト、黒褐色シルトを塊状に少量含む、しまり中、粘性中。
10. 10YR7/1 灰白色粘質シルト、黒褐色シルトを塊状に中量含む、しまり中、粘性強。
11. 7.5YR2/1 黒色粘質シルト、青灰色シルトを斑状に少量含む、しまり中、粘性やや強。

SK2053
1. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト、青灰色シルトを塊状に微量含む、白色粒子を少量含む、鉄分を微量含む、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト、青灰色シルトを斑状に少量含む、白色粒子を微量含む、しまりやや強、粘性やや強。
3. 5Y5/2 灰オリーブ色粘質シルト、黒褐色シルトを斑状に少量含む、しまり中、粘性やや強。
4. 5Y4/1 灰色粘質シルト、黒褐色シルトを塊状に少量含む、しまり中、粘性やや強。
5. 5Y5/2 灰オリーブ色粘質シルト、黒褐色シルトを斑状に少量含む、しまり中、粘性やや強。
6. 10YR2/1 黒色粘質シルト、青灰色シルトを斑状に微量含む、しまり中、粘性やや強。
7. 5B6/1 青灰色粘質シルト、黒褐色シルトを斑状に少量含む、しまり中、粘性やや強。

SK2080
1. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト、青灰色シルトを塊状に少量含む、炭化物を少量含む、鉄分を中量含む、しまり中、粘性やや強。



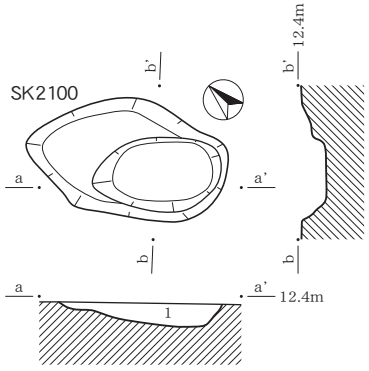


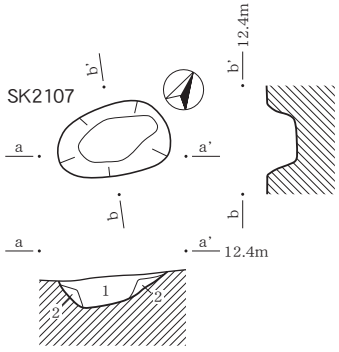


SK2078
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト、青灰色シルトを塊状に微量含む、礫を少量含む、白色粒子を中量含む、鉄分を微量含む、しまりやや強、粘性やや強。
2. 5B5/1 青灰色粘質シルト、黒褐色シルトを斑状に少量含む、しまりやや強、粘性やや強。

SK2079
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト、青灰色シルトを塊状に微量含む、白色粒子を中量含む、しまりやや強、粘性やや強。
2. 5B5/1 青灰色粘質シルト、黒褐色シルトを斑状に中量含む、しまりやや強、粘性やや強。

SK2086
1. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト、青灰色シルトを塊状に中量含む、鉄分を少量含む、しまり強、粘性強。
2. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト、青灰色シルトを斑状に中量含む、しまり強、粘性強。



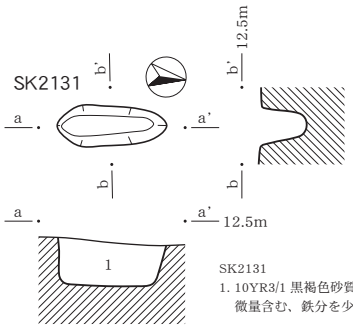


SK2093
1. 5B6/1 青灰色粘質シルト、黒褐色シルトを塊状に微量含む、しまり中、粘性強。
2. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト、黒色シルトを斑状に少量含む、しまり中、粘性強。
3. 5B6/1 青灰色粘質シルト、黒褐色シルトを斑状に中量含む、しまり中、粘性強。
4. 10YR2/1 黒色粘質シルト、砂質土と白色粒子を極微量含む、φ 0.5cm ほどの青灰色シルトを塊状に微量含む、鉄分を微量含む、しまり中、粘性強。
5. 5B6/1 青灰色粘質シルト、黒褐色シルトを斑状に中量含む、しまり中、粘性強。
6. 5B6/1 青灰色粘質シルト、黒褐色シルトを斑状に少量含む、しまり中、粘性強。

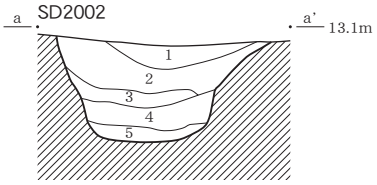
SK2100
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性やや弱。

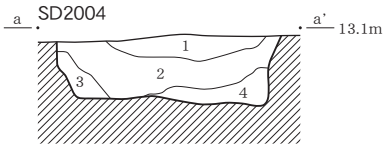
SK2107
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト、しまりやや弱、粘性やや強。
2. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト、しまり弱、粘性弱。

0　(1:40)　2m



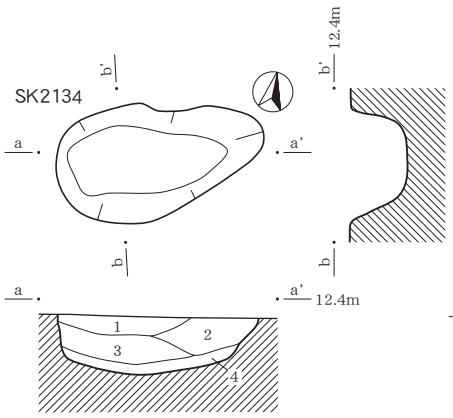
SK2131
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、青灰色シルトを塊状に微量含む、鉄分を少量含む、しまり中、粘性中。

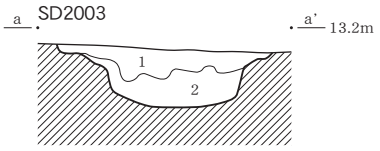


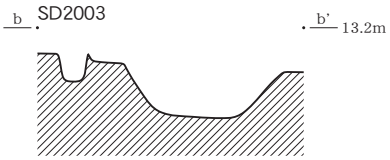


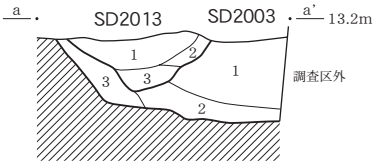
SD2002
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、青灰色土と黄褐色土を塊状に少量含む、しまり弱、粘性弱。
2. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、1 層より細かい黄褐色土を塊状に中量含む、しまり弱、粘性弱。
3. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黄褐色土を縞状に微量含む、しまり弱、粘性弱。
4. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黄褐色土を縞状に中量含む、しまり弱、粘性中。
5. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黄褐色土を少量含む、φ 0.2 ～ 0.5cm の礫を含む、しまり弱、粘性弱。

SD2004
1. 5YR3/1 黒褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に中量含む、しまり中、粘性中。
2. 7.5YR2/1 黒色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に少量含む、炭化物を粒状に少量含む、しまり中、粘性中。
3. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に中量含む、しまり中、粘性強。
4.10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に多量含む、しまり弱、粘性強。





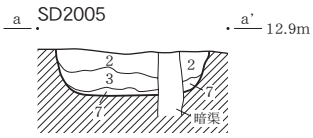


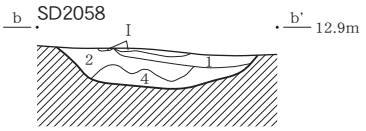


SD2003
1. 10YR2/1 黒色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に微量含む、しまり中、粘性強。
2. 10YR2/3 黒褐色粘質シルト、黄褐色シルトを塊状に中量含む、しまり中、粘性強。
3. 2.5Y5/4 黄褐色砂質シルト、黒褐色土を斑状に中量含む、しまり中、粘性強。

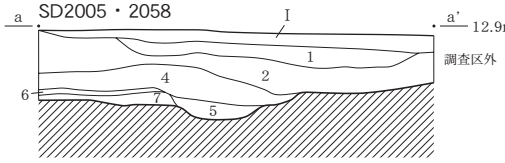
SD2013
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に微量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に微量含む、しまり中、粘性中。
3. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に少量含む、しまり弱、粘性強。

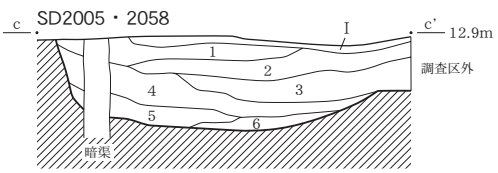
SK2134
1. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト、砂質土を少量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト、砂質土を微量含む、しまり中、粘性中。
3. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト、青灰色シルトを斑状に少量含む、しまり中、粘性中。
4. 5B6/1 青灰色粘質シルト、黒褐色シルトを斑状に少量含む、しまり中、粘性やや強。

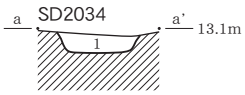




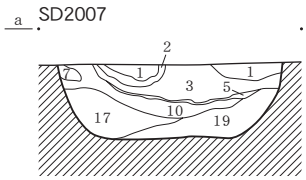
SD2005 SD2058(同一の溝の為、土層説明は共通)
1. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト、黄褐色土を塊状に少量含む、しまり強、粘性中。
2. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト、黄褐色土を塊状に中量含む、しまり強、粘性中。
3. 10YR2/3 黒褐色砂質シルト、黄褐色土を塊状に少量含む、しまり中、粘性中。
4. 10YR2/3 黒褐色砂質シルト、黄褐色土を塊状に微量含む、しまり中、粘性中。
5. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト、黄褐色土を塊状に中量含む、しまり中、粘性弱。
6. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト、黄褐色土を塊状に中量含む、しまり中、粘性弱。
7. 10YR6/8 明黄褐色砂質土、鉄分を多量含む、しまり弱、粘性なし。

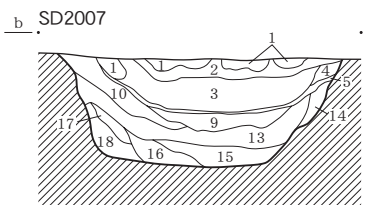


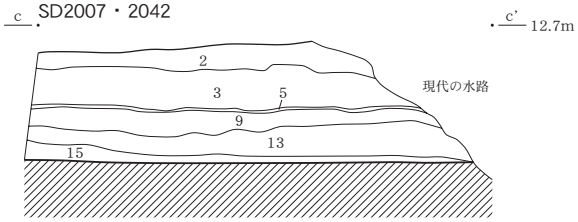


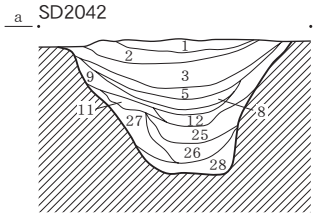


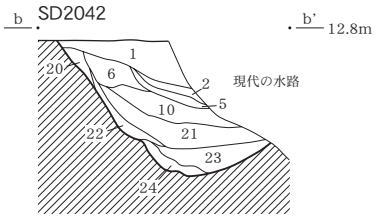
SD2034
1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に少量含む、しまりやや弱、粘性やや強。





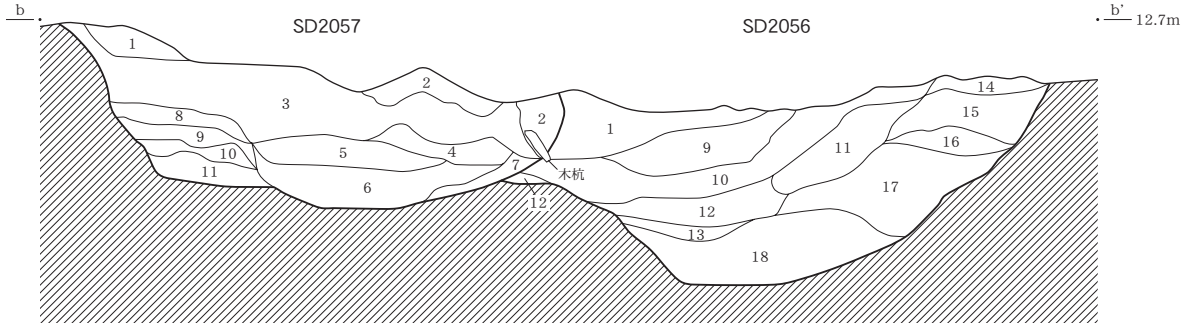


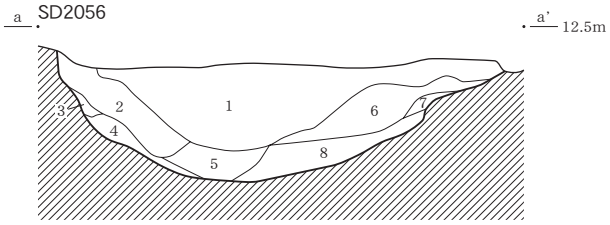




SD2007 SD2042 (同一の溝の為、土層説明は共通)
1. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト、白色粒子と礫を少量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR6/2 灰褐色粘質シルト、炭化物を微量含む、しまりやや強、粘性やや強。
3. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、砂質土を微量含む、しまりやや強、粘性やや強。
4. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、白色粒子を少量含む、しまり中、粘性やや強。
5. 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト、砂質土を微量含む、しまり中、粘性やや強。
6. 10YR3/2 黒褐色粘質土、小礫を少量含む、しまりやや強、粘性やや強。
7. 10YR6/2 灰黄褐色粘質土、地山崩落土主体、しまりやや強、粘性強。
8. 5PB4/1 暗青灰色粘質土、炭化物を微量含む、しまり中、粘性やや強。
9. 10YR2/1 黒色砂質シルト、しまり中、粘性中。
10. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、青灰色粘質土を斑状に少量含む、しまり中、粘性やや強。
11. 10YR3/1 黒褐色粘質土、青灰色粘質土を塊状に微量含む、しまりやや弱、粘性中。
12. 10YR4/1 褐灰色粘質土、青灰色粘質土を塊状に微量含む、しまり中、粘性やや強。
13. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト、白色粒子を微量含む、しまり中、粘性やや強。
14. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト、しまりやや強、粘性やや強。
15. 10YR2/2 黒褐色粘質土、砂質土と炭化物を微量含む、しまり中、粘性中。
16. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト、灰褐色粘質土を斑状に少量含む、炭化物を微量含む、しまり中、粘性中。
17. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト、青灰色粘質土を斑状に微量含む、小礫を少量含む、しまり中、粘性中。
18. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト、青灰色粘質土を斑状に少量含む、小礫を微量含む、しまり弱、粘性弱。
19. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト、小礫を少量含む、炭化物を微量含む、しまり中、粘性やや強。
20. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、小礫を少量含む、しまり中、粘性中。
21. 10YR4/1 褐灰色粘質土、砂質土を微量含む、しまりやや強、粘性やや強。
22. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト、小礫を中量含む、しまりやや弱、粘性中。
23. 10YR3/2 黒褐色砂質土、青灰色粘質土を塊状に微量含む、小礫を微量含む、しまり中、粘性中。
24. 10YR5/1 褐灰色砂質土、小礫を多量含む、しまり弱、粘性弱。
25. 10YR4/1 褐灰色粘質土、青灰色粘質土を塊状に中量含む、しまり中、粘性やや強。
26. 10YR4/1 褐灰色粘質土、青灰色粘質土を塊状に少量含む、しまり中、粘性やや強。
27. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト、青灰色粘質土を塊状に少量含む、しまり中、粘性やや強。
28. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土、砂質土を微量含む、しまり中、粘性やや強。

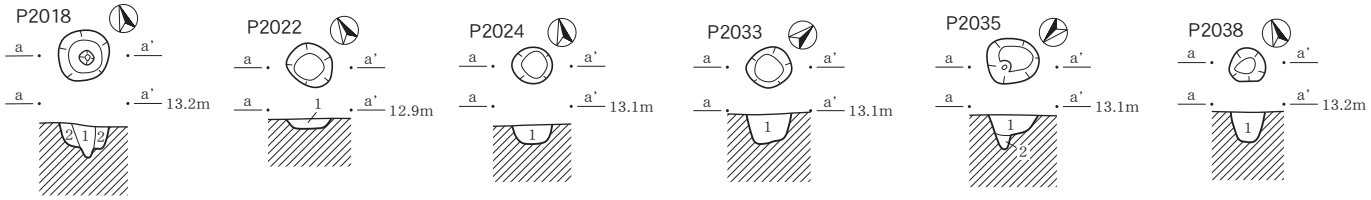
0　(1:40)　2m





SD2056
1. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト、黒褐色シルトと青灰色シルトを塊状に少量含む、しまりやや弱、粘性やや弱。
2. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト、粘質土と鉄分と木片を微量含む、しまりやや強、粘性やや強。
3. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト、青灰色シルトを多量含む、しまりやや強、粘性やや強。
4. 5Y2/2 オリーブ黒色砂質シルト、青灰色シルトを多量含む、しまりやや強、粘性やや強。
5. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト、しまりやや弱、粘性強。
6. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト、腐植物を微量含む、しまり中、粘性やや強。
7. 5Y2/2 オリーブ黒色砂質シルト、腐植物と木片を少量含む、しまりやや弱、粘性中。
8. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト、砂質土を帯状に中量含む、腐植物と木片を少量含む、しまりやや弱、粘性中。
9. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト、青灰色粘質土を斑状に微量含む、しまり中、粘性中。
10. 10YR6/1 褐灰色粘質シルト、砂質土と白色粒子を微量含む、しまり中、粘性中。
11. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト、砂質土と白色粒子を微量含む、しまり中、粘性中。
12. 5Y2/2 オリーブ黒色粘質シルト、青灰色粘質土を斑状に微量含む、しまり中、粘性中。
13. 10YR5/1 褐灰色砂質土、青灰色粘質土を斑状に少量含む、しまり弱、粘性やや弱。
14. 10YR6/1 褐灰色砂質シルト、しまりやや強、粘性中。
15. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト、しまり中、粘性中。
16. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト、しまり中、粘性中。
17. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト、青灰色粘質土を斑状に少量含む、しまり中、粘性中。
18. 5Y2/2 オリーブ黒色粘質シルト、褐灰色粘質土を斑状に中量含む、青灰色粘質土を斑状に少量含む、しまり中、粘性やや強。

SD2057
1. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト、灰褐色粘質土を斑状に少量含む、白色粒子を少量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト、灰褐色粘質土を斑状に少量含む、白色粒子を少量含む、しまり中、粘性中。
3. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト、黒褐色粘質土を斑状に微量含む、白色粒子を微量含む、しまり中、粘性中。
4. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト、砂質土を微量含む、しまり中、粘性やや強。
5. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト、砂質土と腐植物を微量含む、しまり中、粘性やや強。
6. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト、青灰色粘質土を斑状に微量含む、腐植物を少量含む、しまり中、粘性やや強。
7. 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト、砂質土を微量含む、黒褐色粘質土を斑状に少量含む、しまり中、粘性やや強。
8. 10YR2/1 黒色粘質シルト、砂質土と白色粒子を微量含む、しまり中、粘性中。
9. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト、砂質土を斑状に少量含む、しまりやや弱、粘性やや弱。
10. 5B6/1 青灰色粘質シルト、砂質土を微量含む、しまり中、粘性やや強。
11. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト、青灰色粘質土を斑状に微量含む、しまり中、粘性やや強。



P2018
1.7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト、φ 0.2cm ほどの炭化物を微量含む、しまり中、粘性中。
2.10YR3/2 黒褐色砂質シルト、φ 0.5 ～ 2.0cm の黄褐色シルトを塊状に中量含む、しまり中、粘性中。

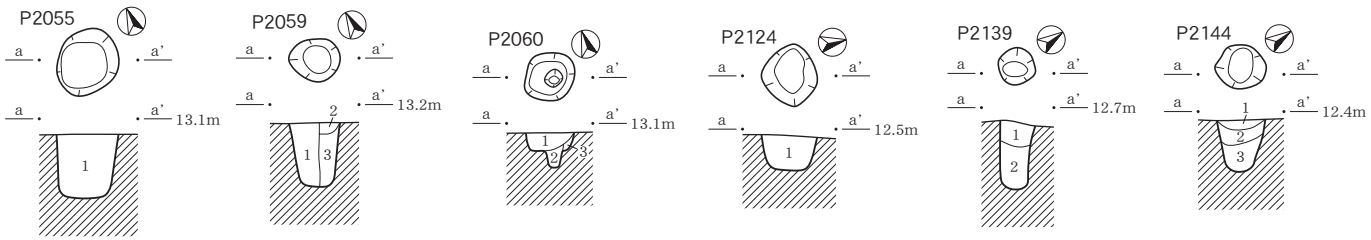
P2022
1.10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に少量含む、しまり中、粘性中。

P2024
1.10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に多量含む、しまり中、粘性中。

P2033
1.10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に少量含む、しまり中、粘性強。

P2035
1.10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に中量含む、しまり中、粘性中。
2.2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト、黒褐色シルトを斑状に微量含む、しまり弱、粘性中。

P2038
1.10YR3/2 黒褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に中量含む、しまり中、粘性中。



P2055
1.10YR3/1 黒褐色砂質シルト、黄褐色シルトを塊状に中量含む、しまり中、粘性中。

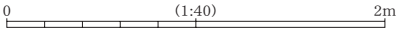
P2059
1.10YR3/2 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性中。
2.10YR3/2 黒褐色砂質シルト、φ 0.2 ～ 1.0cm の黄褐色シルトを中量含む、しまり弱、粘性中。
3.10YR3/1 黒褐色砂質シルト、φ 0.2cm ほどの黄褐色シルトを少量含む、しまり中、粘性中。

P2060
1.10YR3/2 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性中。
2.10YR3/3 暗褐色砂質シルト、φ 0.3cm ほどの黄褐色シルトを少量含む、しまり弱、粘性中。
3.10YR3/1 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性中。

P2124
1.10YR3/1 黒褐色砂質シルト、白色粒子を微量含む、鉄分を中量含む、しまりやや弱、粘性中。

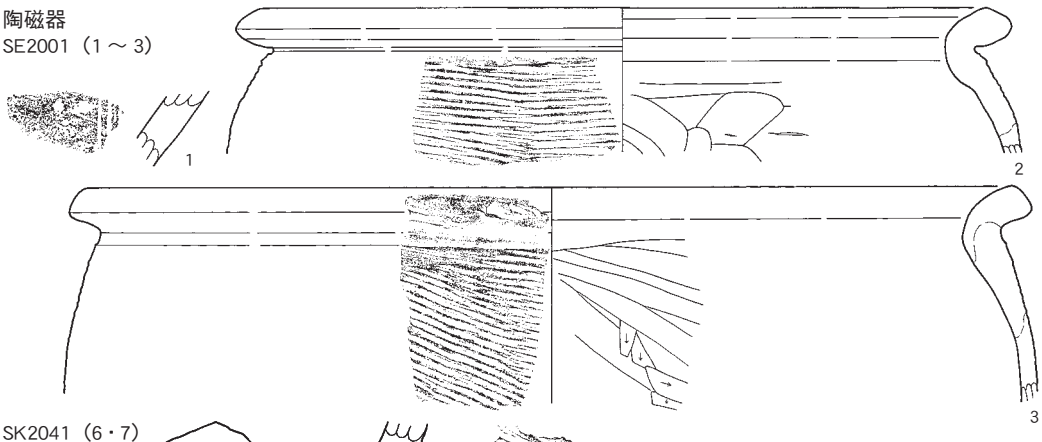
P2139
1.10YR3/2 黒褐色粘質シルト、鉄分を中量含む、白色粒子を微量含む、しまり中、粘性中。
2.10YR3/2 黒褐色砂質シルト、鉄分を中量含む、しまりやや弱、粘性中。

P2144
1.10YR3/2 黒褐色砂質シルト、黒褐色砂質シルトを中量含む、しまりやや弱、粘性中。
2.10YR4/1 褐灰色砂質シルト、黒褐色砂質シルトを塊状に中量含む、しまり中、粘性中。
3.2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト、黒褐色砂質シルトを塊状に微量含む、しまり弱、粘性弱。

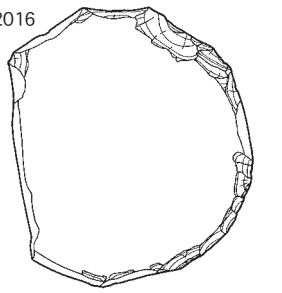


谷地遺跡中世　遺物実測図（1）

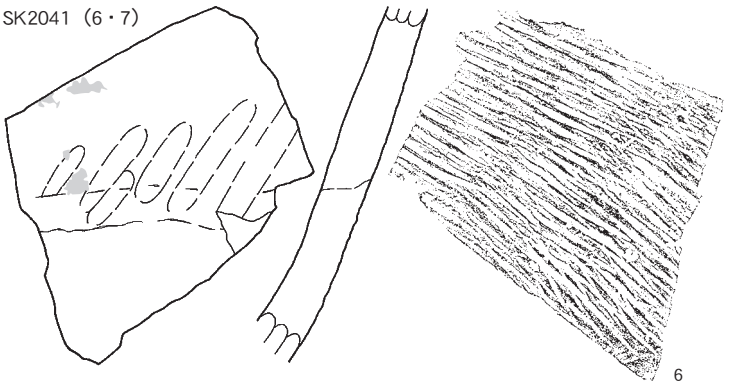
陶磁器
SE2001（1 ～ 3）



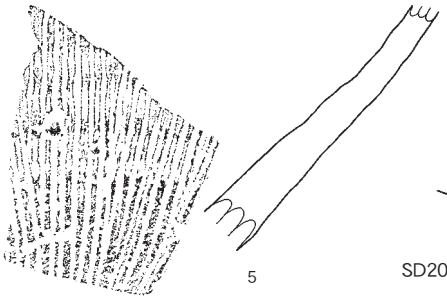
SE2016



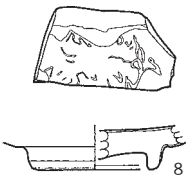
SK2041（6・7）



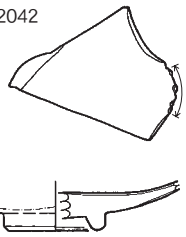
SE2017

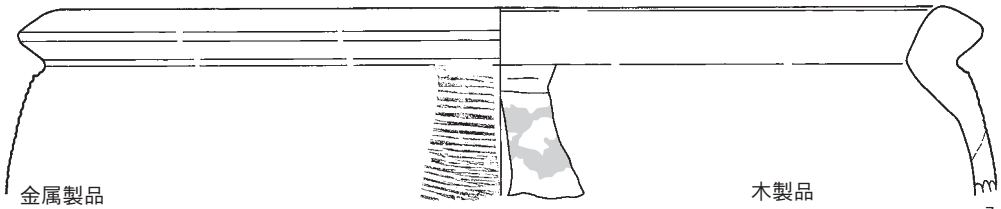


SD2005

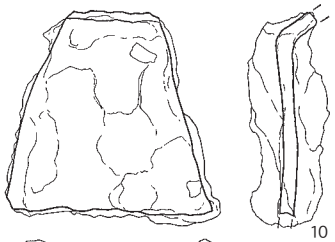


SD2042



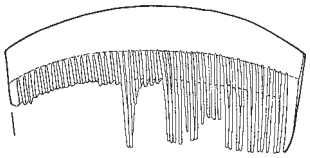


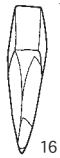
金属製品
SE2001（10・11）



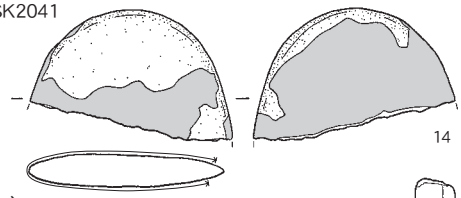
銭貨
3T

木製品
SE2001（16 ～ 21）

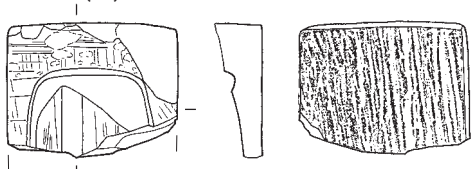




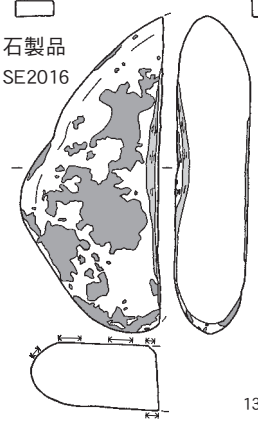
SK2041

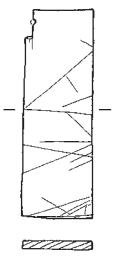


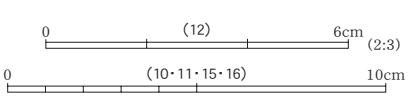
SE2001（15）

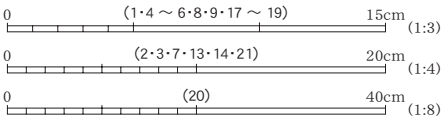


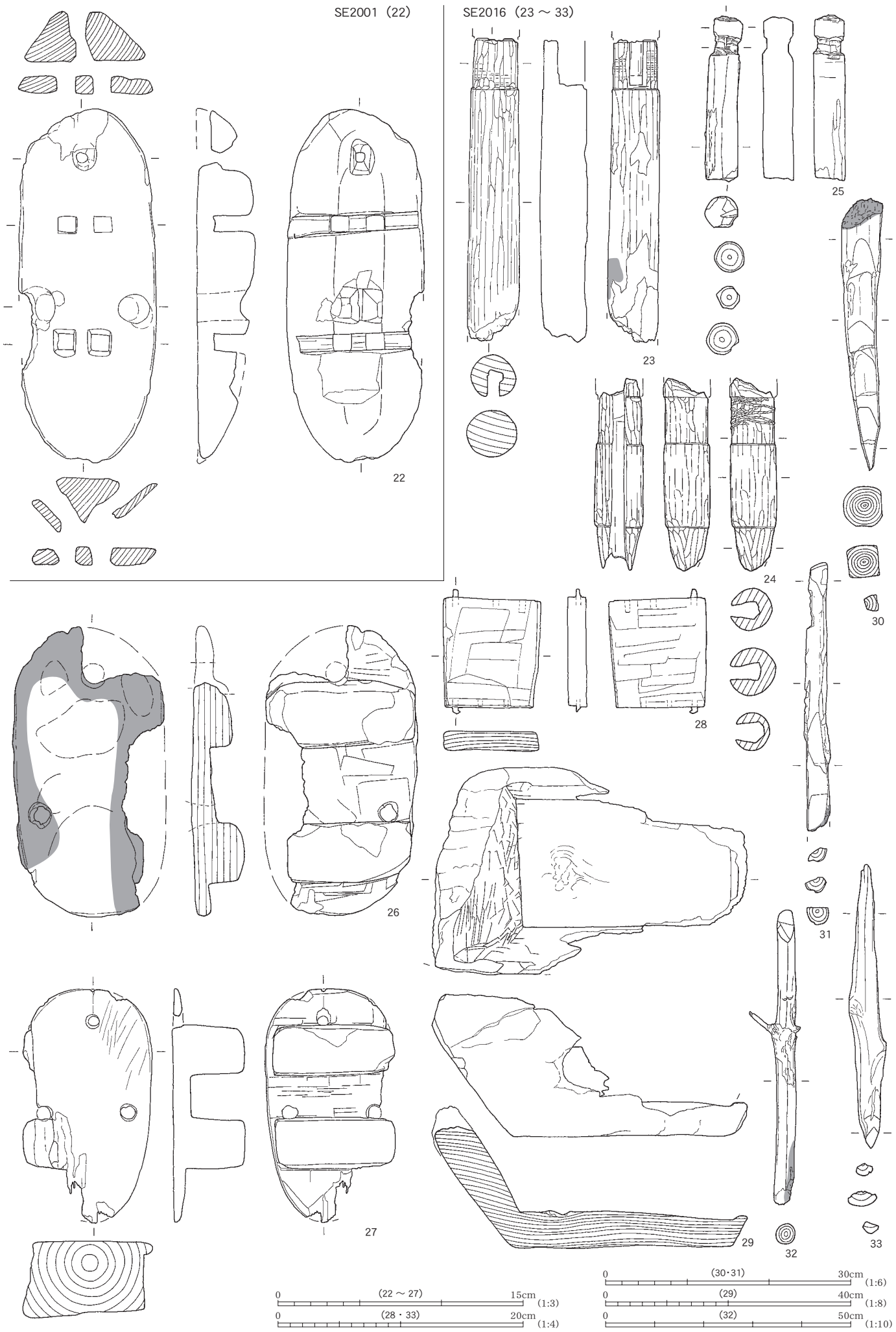
石製品
SE2016



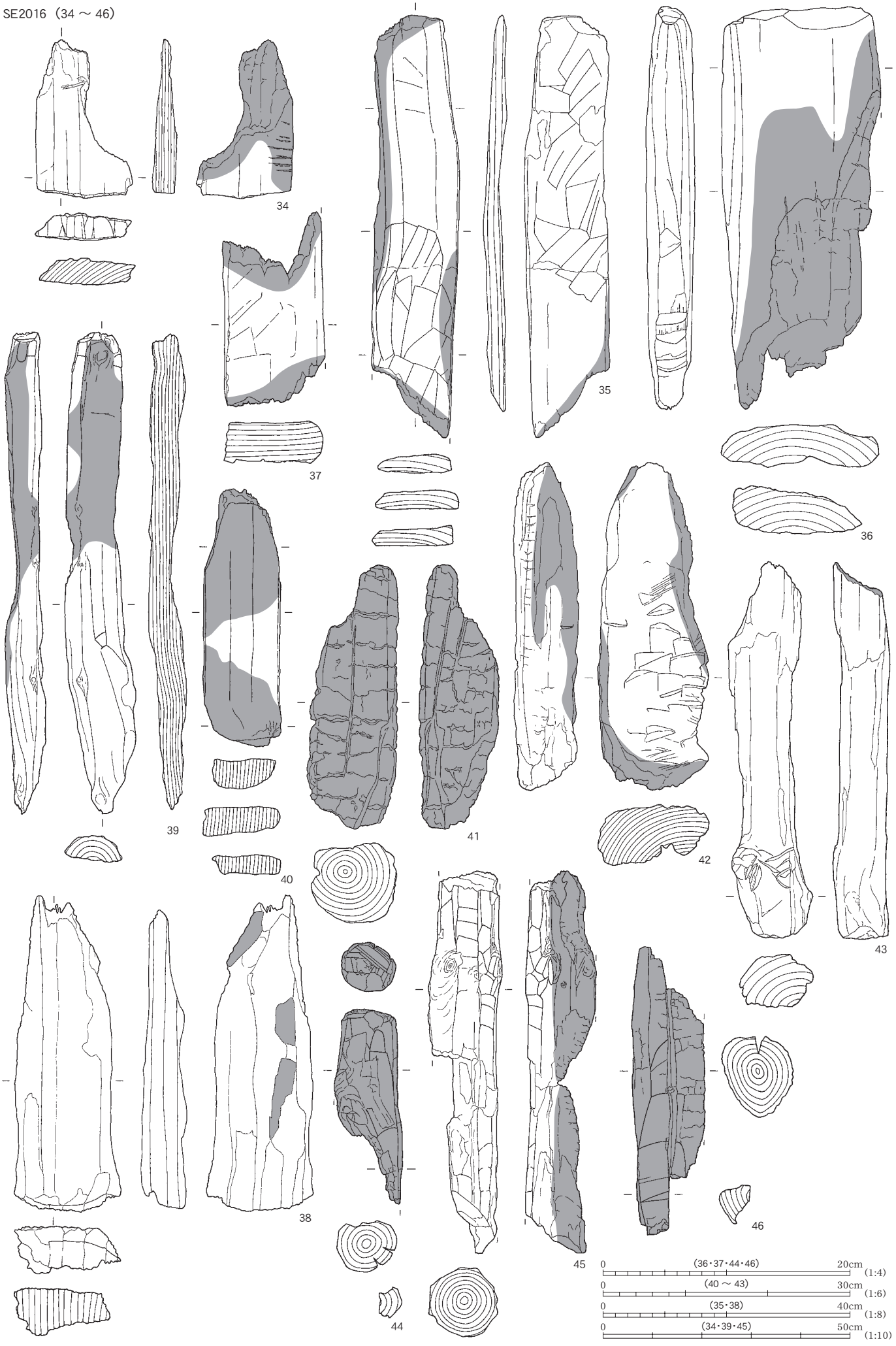


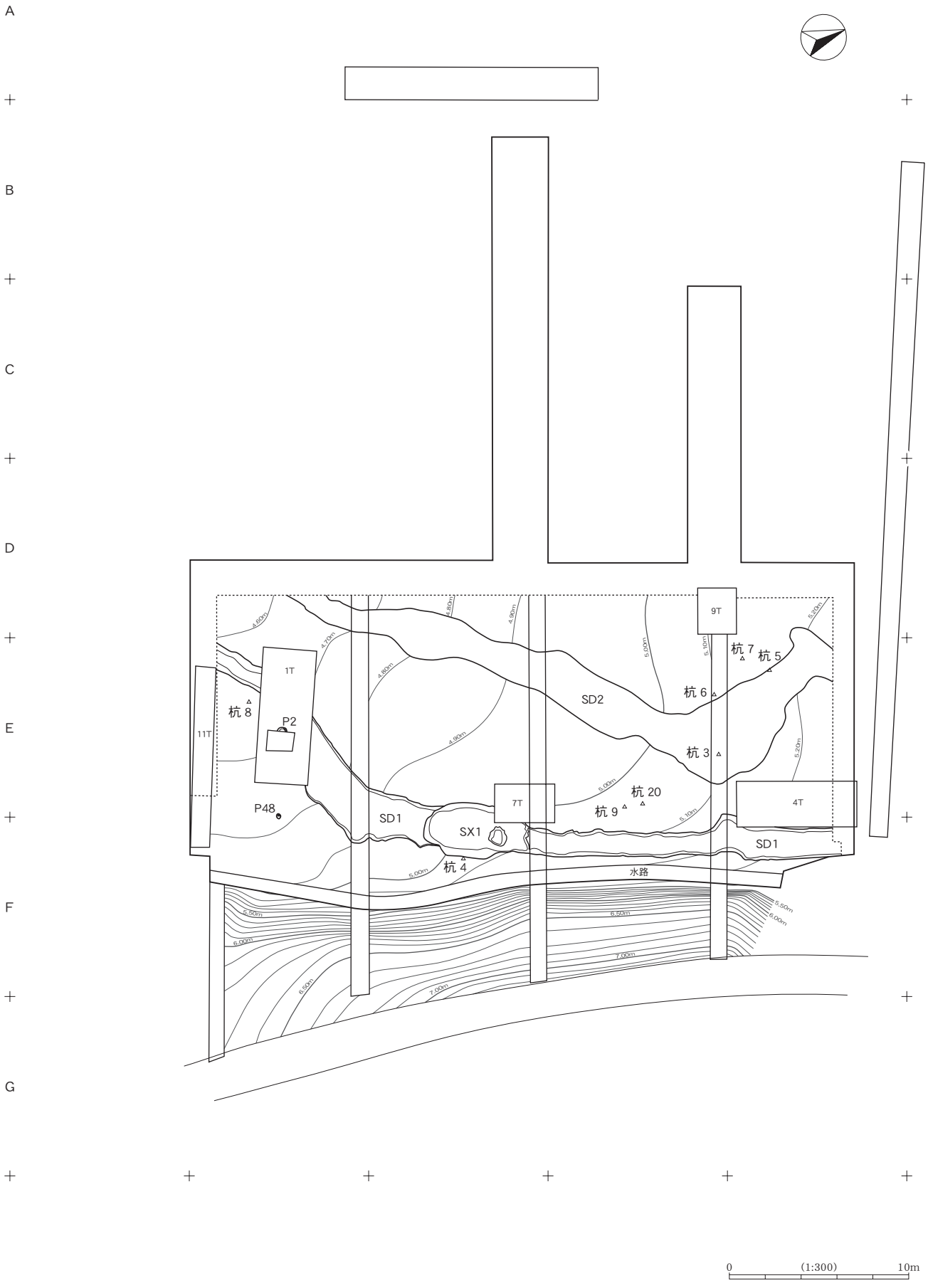




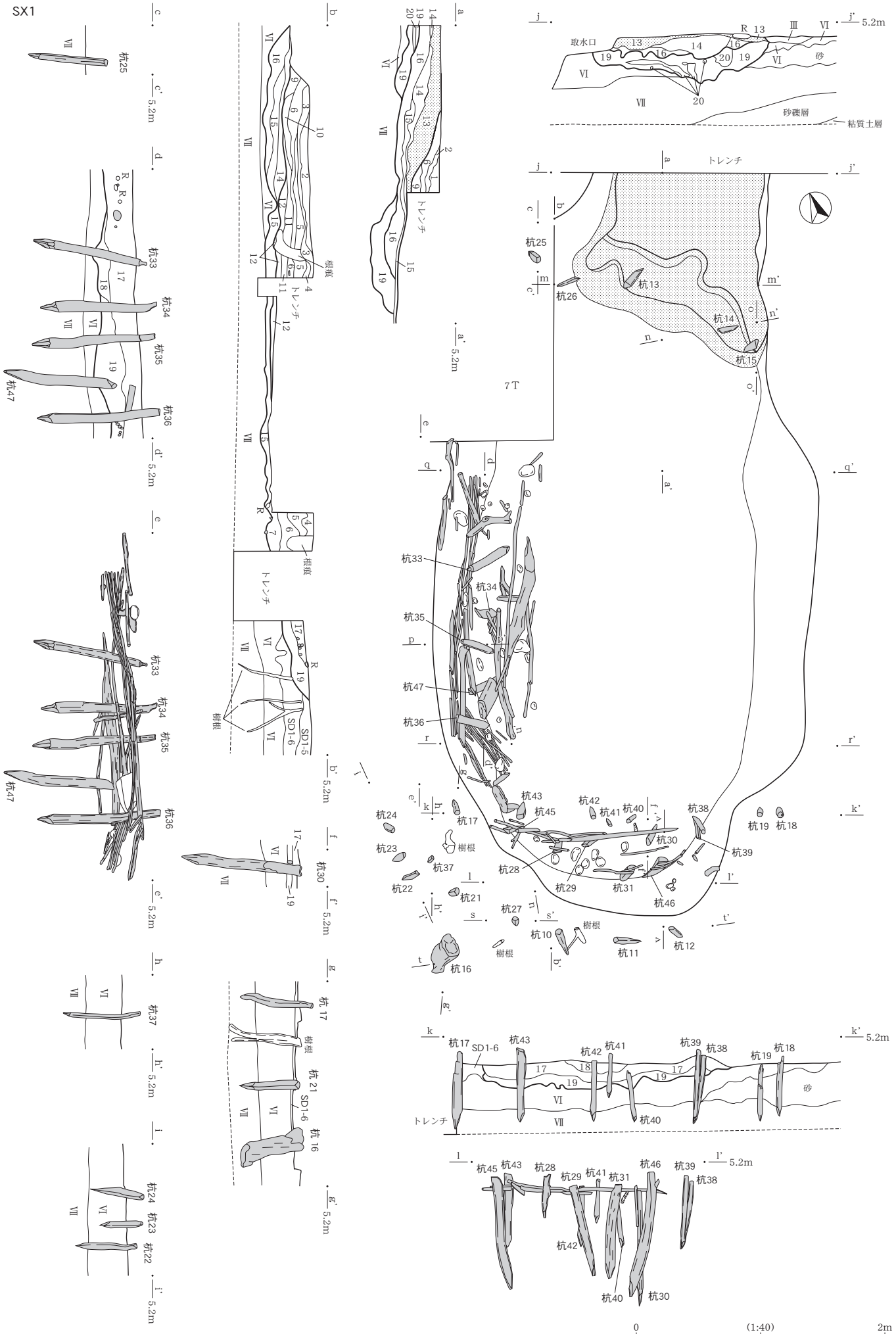

SE2001（22）
SE2016（23 ～ 33）
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
0 (22 ～ 27) 15cm (1:3)
0 (28・33) 20cm (1:4)
0 (30・31) 30cm (1:6)
0 (29) 40cm (1:8)
0 (32) 50cm (1:10)

SE2016（34 ～ 46）

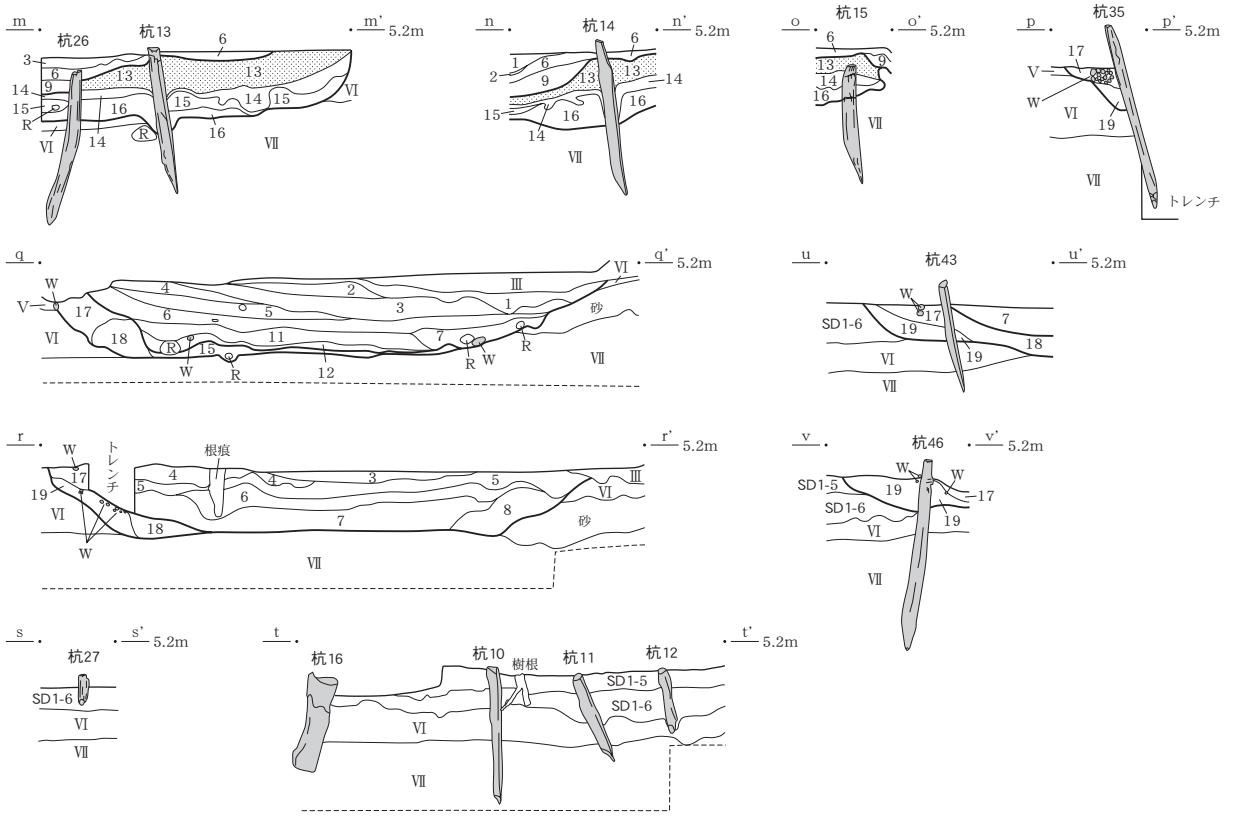

34
35
36
37
39
40
41
42
43
38
44
45
46
0 (36・37・44・46) 20cm (1:4)
0 (40 ～ 43) 30cm (1:6)
0 (35・38) 40cm (1:8)
0 (34・39・45) 50cm (1:10)


1
2
3
4
5
A
B
C
D
E
F
G
9T
1T
11T
7T
4T
杭 8
P2
P48
杭 7
杭 5
杭 6
杭 3
杭 20
杭 9
杭 4
SD1
SD2
SX1
水路
4.60m
4.70m
4.80m
4.90m
5.00m
5.10m
5.20m
6.00m
6.50m
7.00m
0
(1:300)
10m

八太郎遺跡　遺構個別図（1）

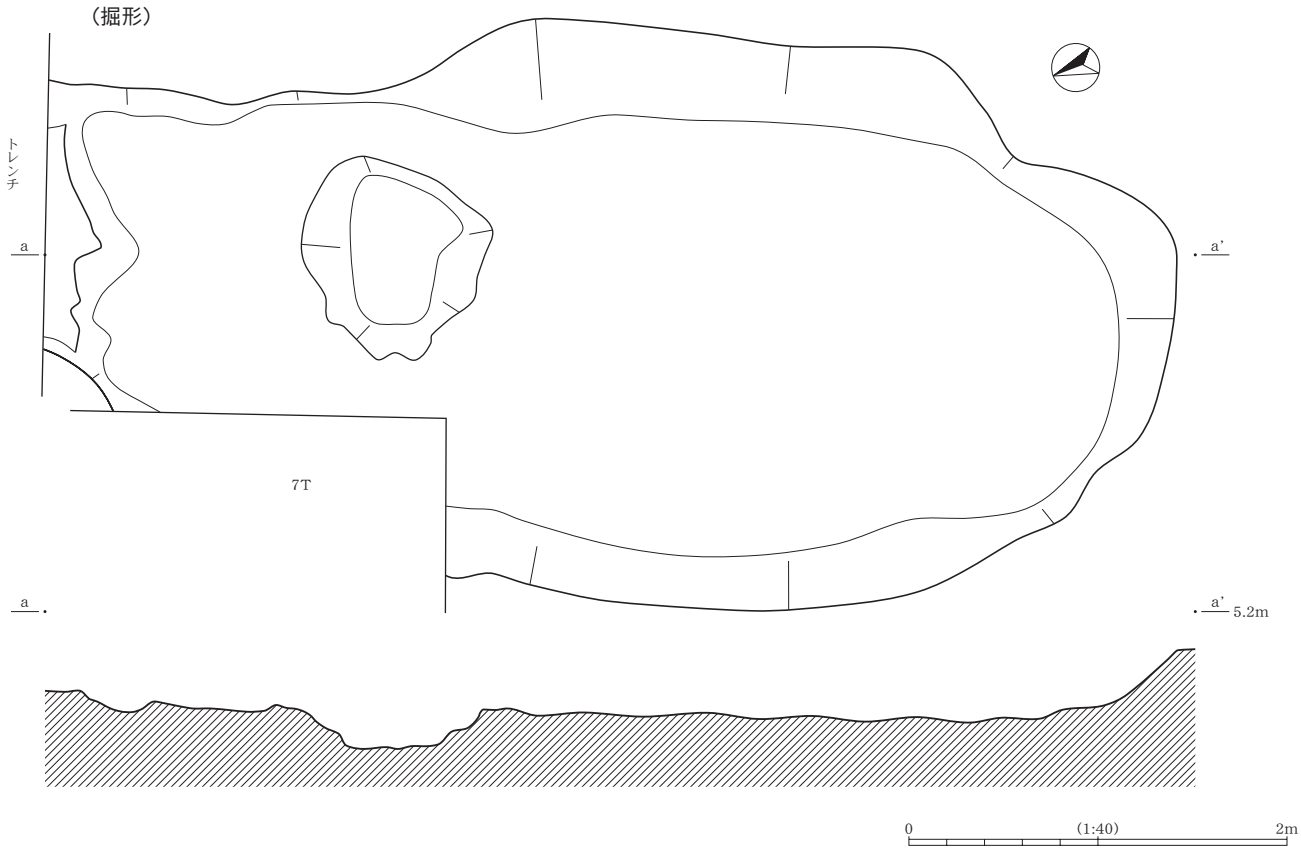


SX1



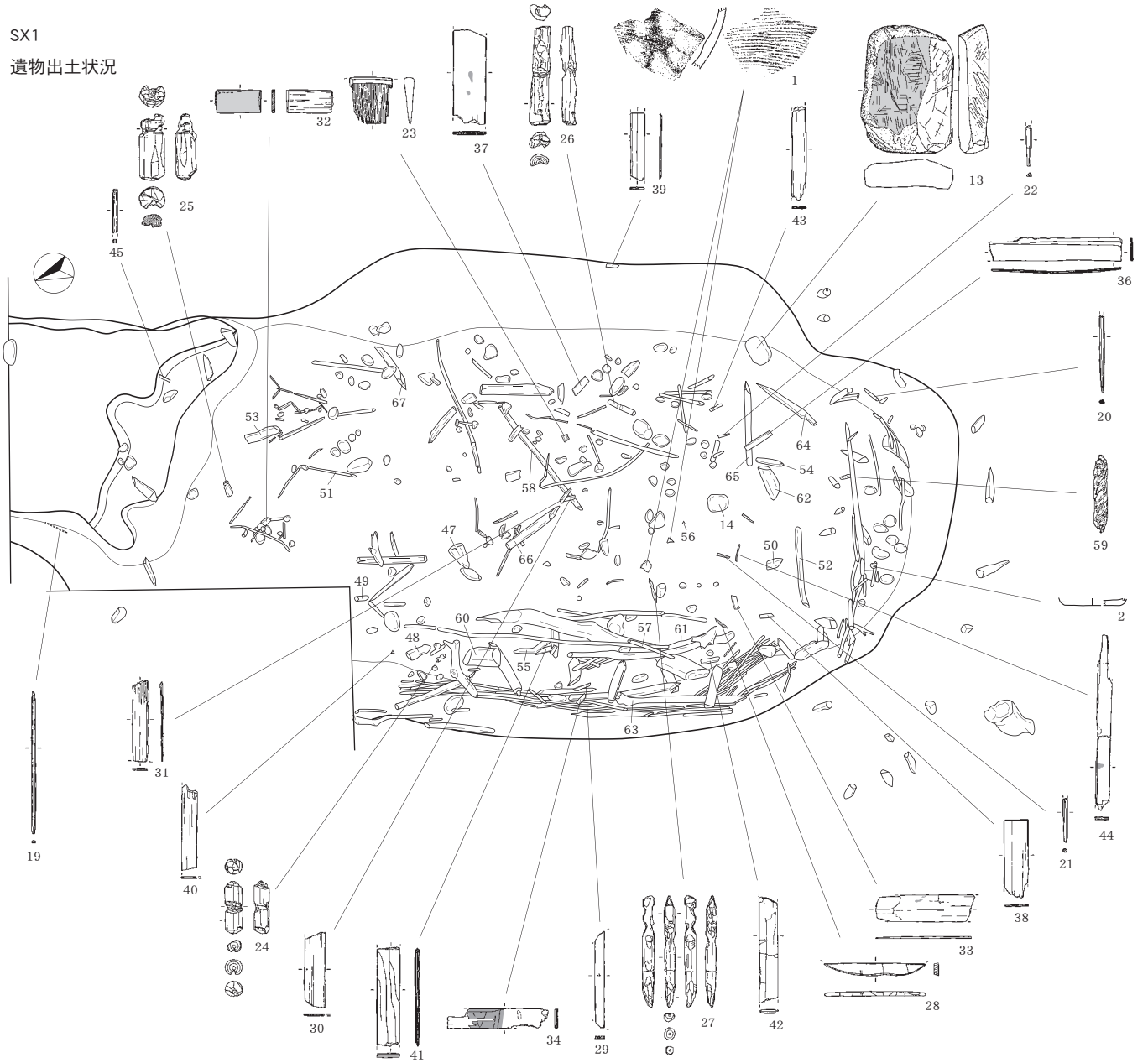
SX1

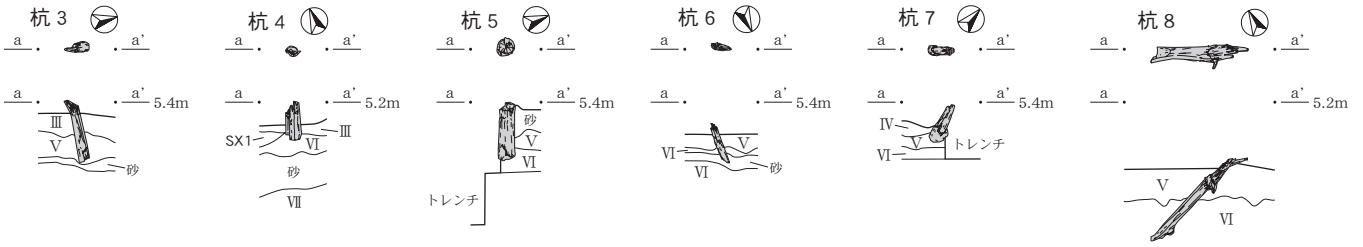
1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト質土、青灰色粘質土を塊状に多量含む、しまり強、粘性弱。
2. 2.5Y5/3 黄褐色砂、白色細粒砂主体、しまり弱、粘性弱。
3. 2.5Y3/1 黒褐色シルト質粘土、青灰色粘質土を塊状に少量含む、腐植物と炭化物を少量含む、しまり強、粘性中。
4. 2.5Y5/3 黄褐色砂、シルト質粘土をラミナ状に含む、しまり強、粘性弱。
5. 2.5Y3/2 黒褐色シルト質粘土、白色細粒砂をラミナ状に含む、腐植物と炭化物を少量含む、しまり中、粘性中。
6. 2.5Y3/2 黒褐色シルト質粘土、均質な堆積、しまり中、粘性中。
7. 2.5Y3/1 黒褐色シルト質粘土、φ 1.0 ～ 3.0cm の青灰色粘質土を塊状に含む、砂礫と腐植物を中量含む、しまり中、粘性強。
8. 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト質粘土、7 層土を塊状に含む、しまり中、粘性強。
9. 2.5Y3/1 黒褐色土、6 層土に青灰色粘質土を塊状に多量含む、しまり強、粘性弱。
10. 2.5Y3/2 黒褐色土、6 層土に青灰色粘質土を塊状に少量含む、しまり強、粘性弱。
11. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂、14 層砂を主体、シルト質土をラミナ状に含む、しまり中、粘性弱。
12. 5Y3/2 オリーブ黒色シルト質土、14 層砂を少量含む、しまり弱、粘性中。
13. 10BG6/1 青灰色粘質土、基盤層粘質土ブロック盛土層、シルト質土を塊状に含む、しまり強、粘性中。
14. 2.5Y4/1 黄灰色砂、白色粗粒砂主体、しまり中、粘性弱。
15. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト、シルト質土を斑状に多量含む、腐植物を含む、しまり中、粘性弱。
16. 2.5Y3/2 オリーブ黒色シルト質土、14 層砂を含む、φ 1.0cm ほどの青灰色粘質土を塊状に少量含む、腐植物を中量含む、しまり中、粘性弱。
17. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト質土、白色細粒砂を含む、腐植物と炭化物含む、しまり強、粘性弱。
18. 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土、白色細粒砂とⅥ層土を塊状に含む、炭化物を少量含む、しまり強、粘性中。
19. 2.5Y4/2 暗灰黄色土、砂とシルト質土を塊状に含む、しまり強、粘性中。
20. 2.5GY6/1 オリーブ灰色土、Ⅵ層土ブロックを主体、19 層土を含む、しまり強、粘性中。

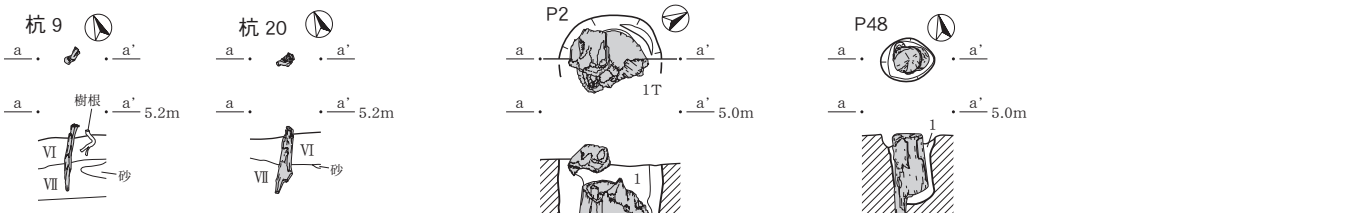


SX1

遺物出土状況





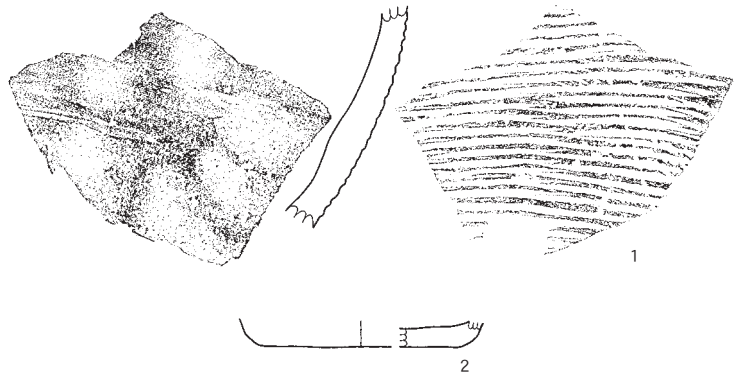


P48
1. 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト質粘土、
炭化物を微量含む、しまり中、粘性強。

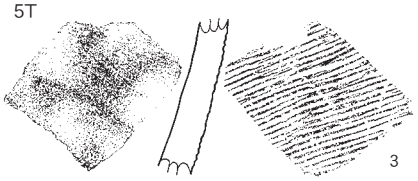
P2
1. 10YR3/2 黒褐色腐植層、しまり弱、粘性中。
2. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト質粘土、Ⅵ層土主体、
しまり中、粘性強。

0　(1:40)　2m

SX1（1・2）

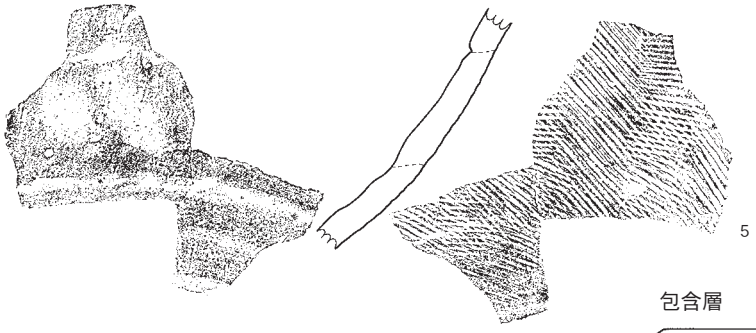


5T



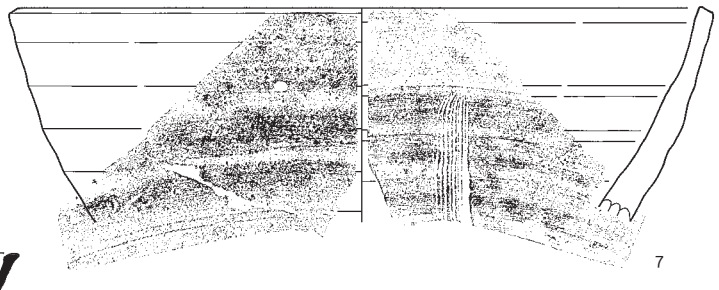
11T

6T・包含層



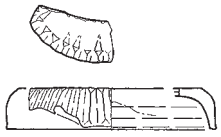
6T

包含層



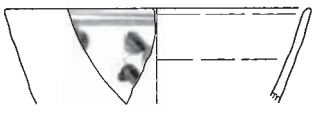
4T・包含層

表採

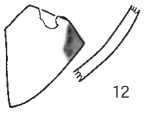


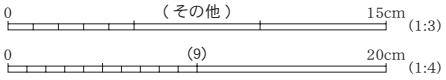
表採

包含層

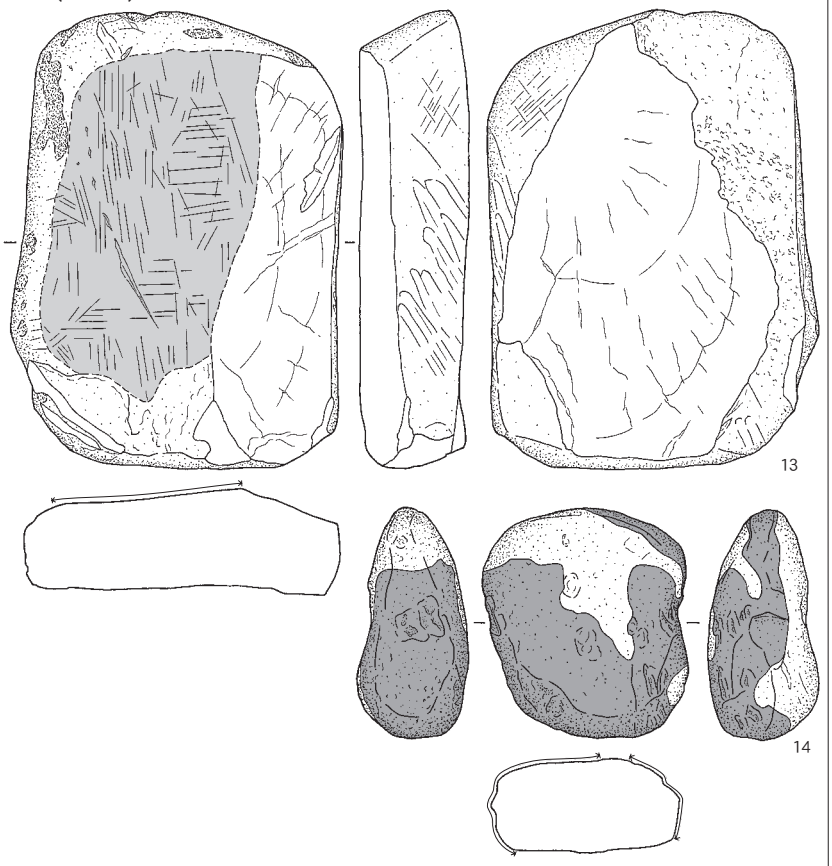


包含層

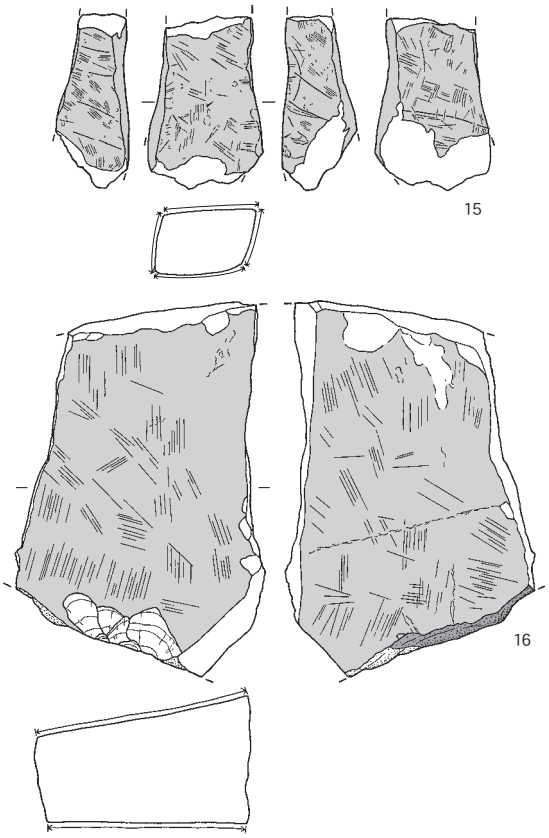




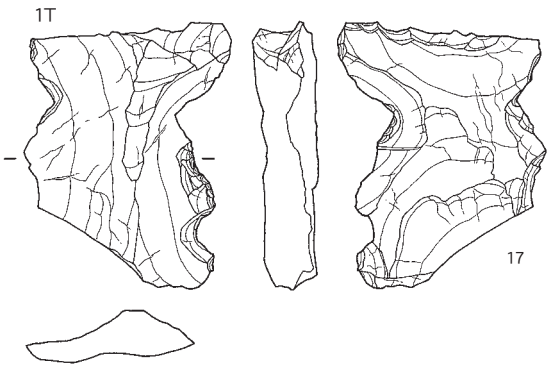
SX1（13・14）



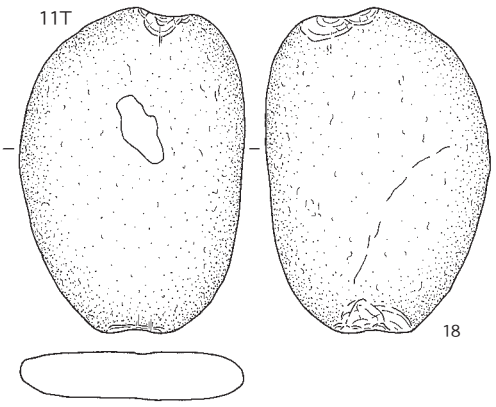
包含層（15・16）



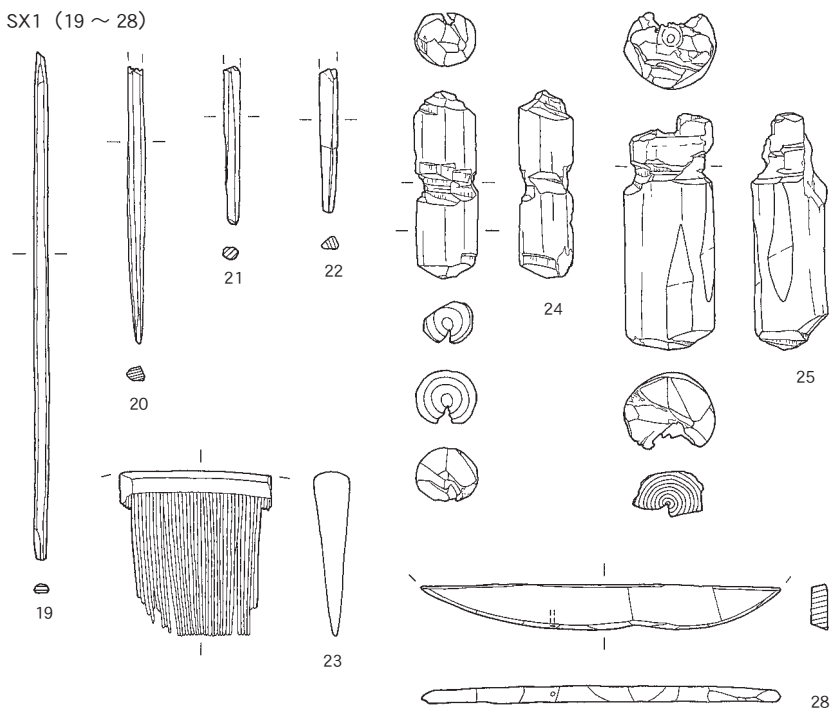
1T

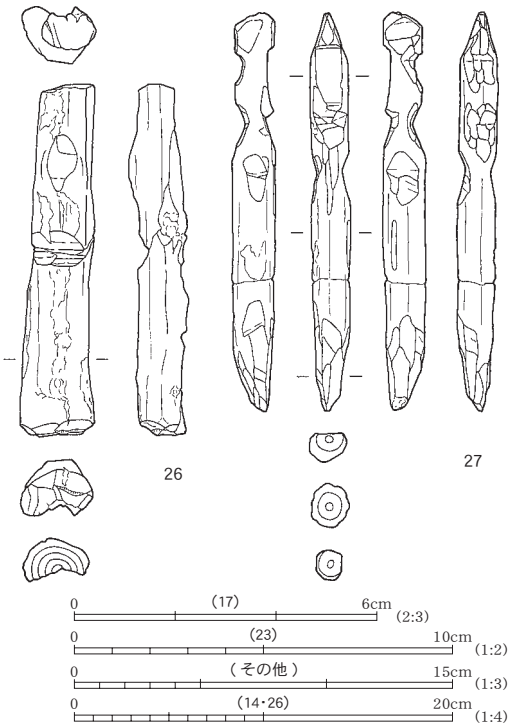


11T

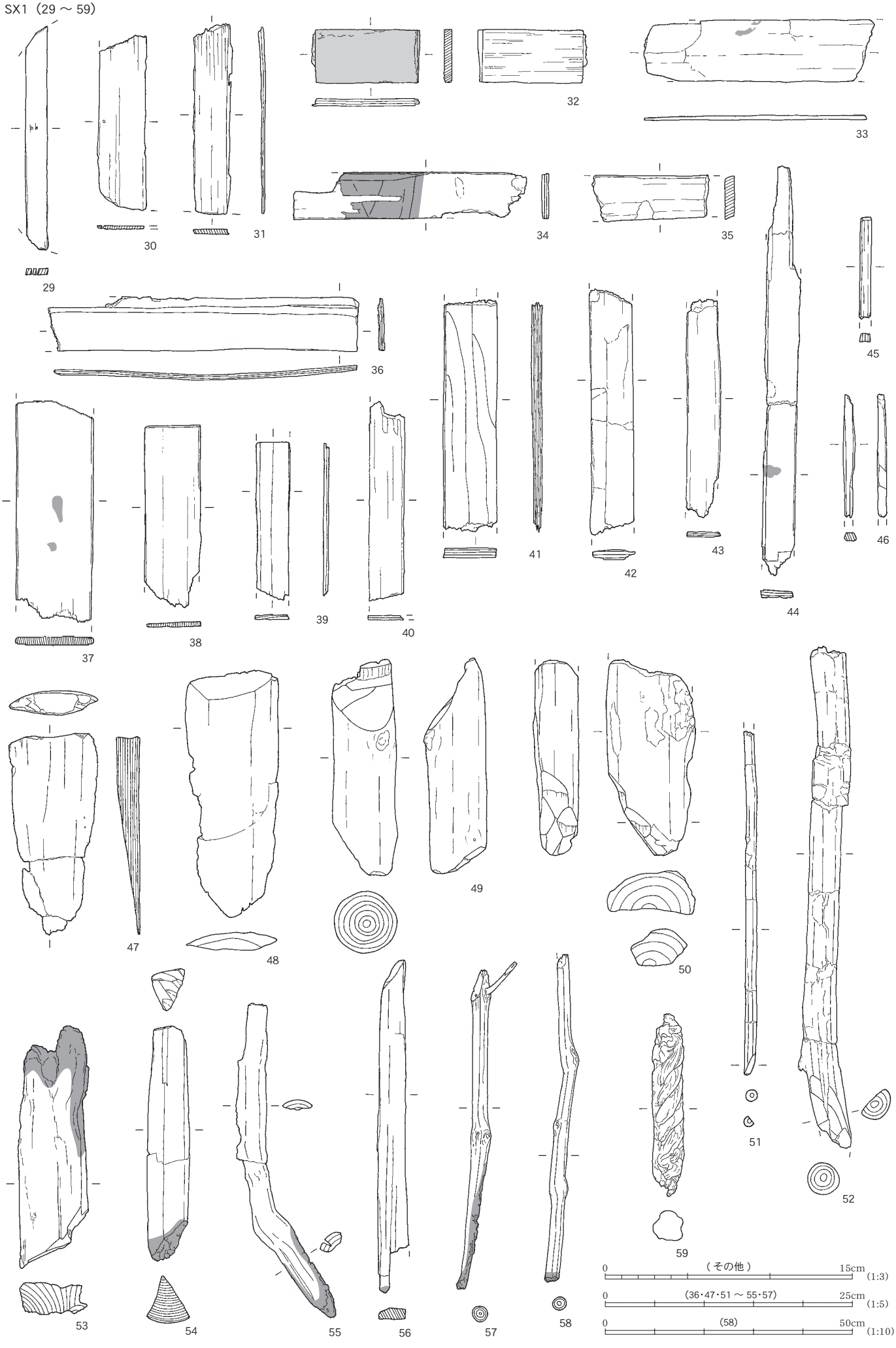


SX1（19 ～ 28）

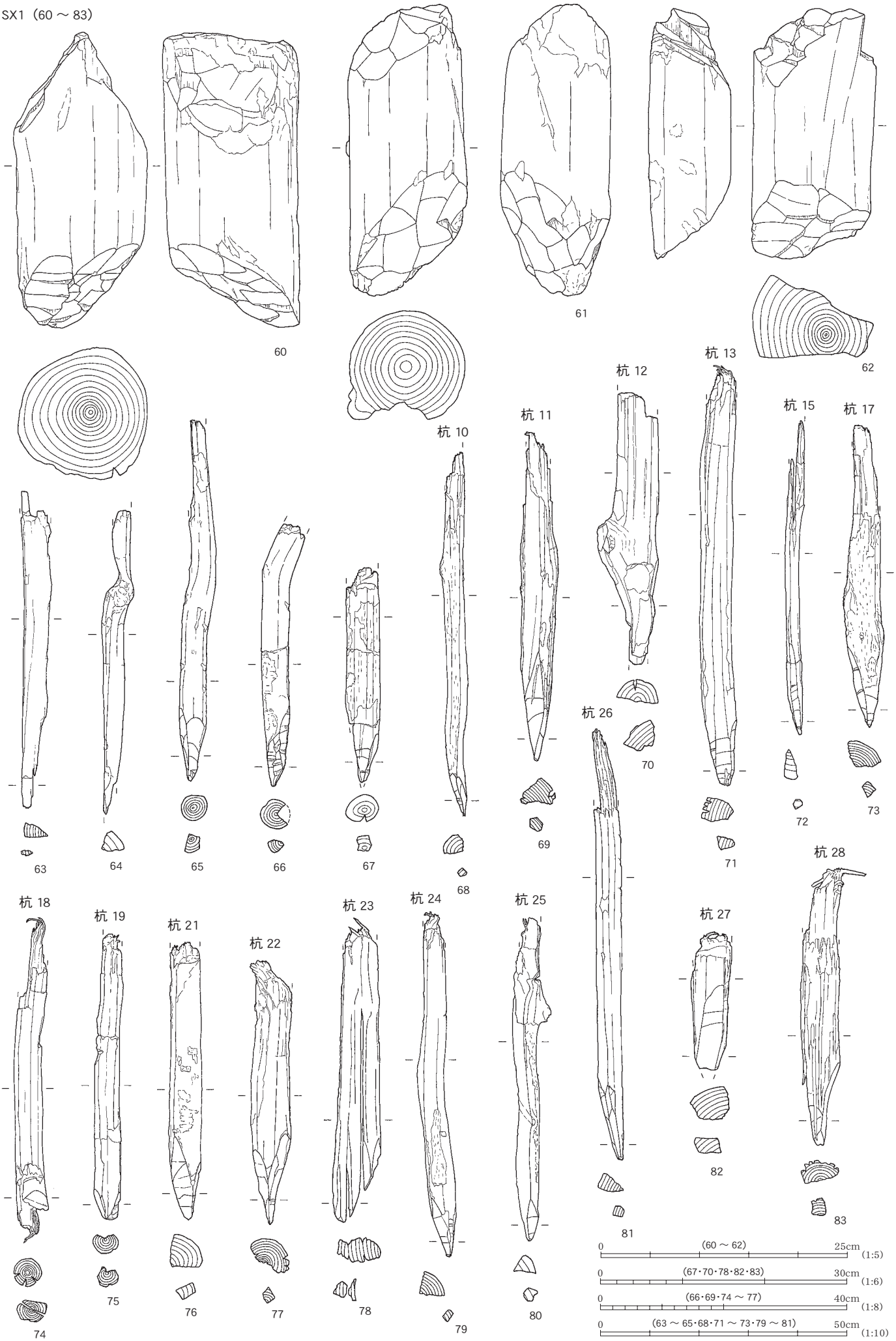




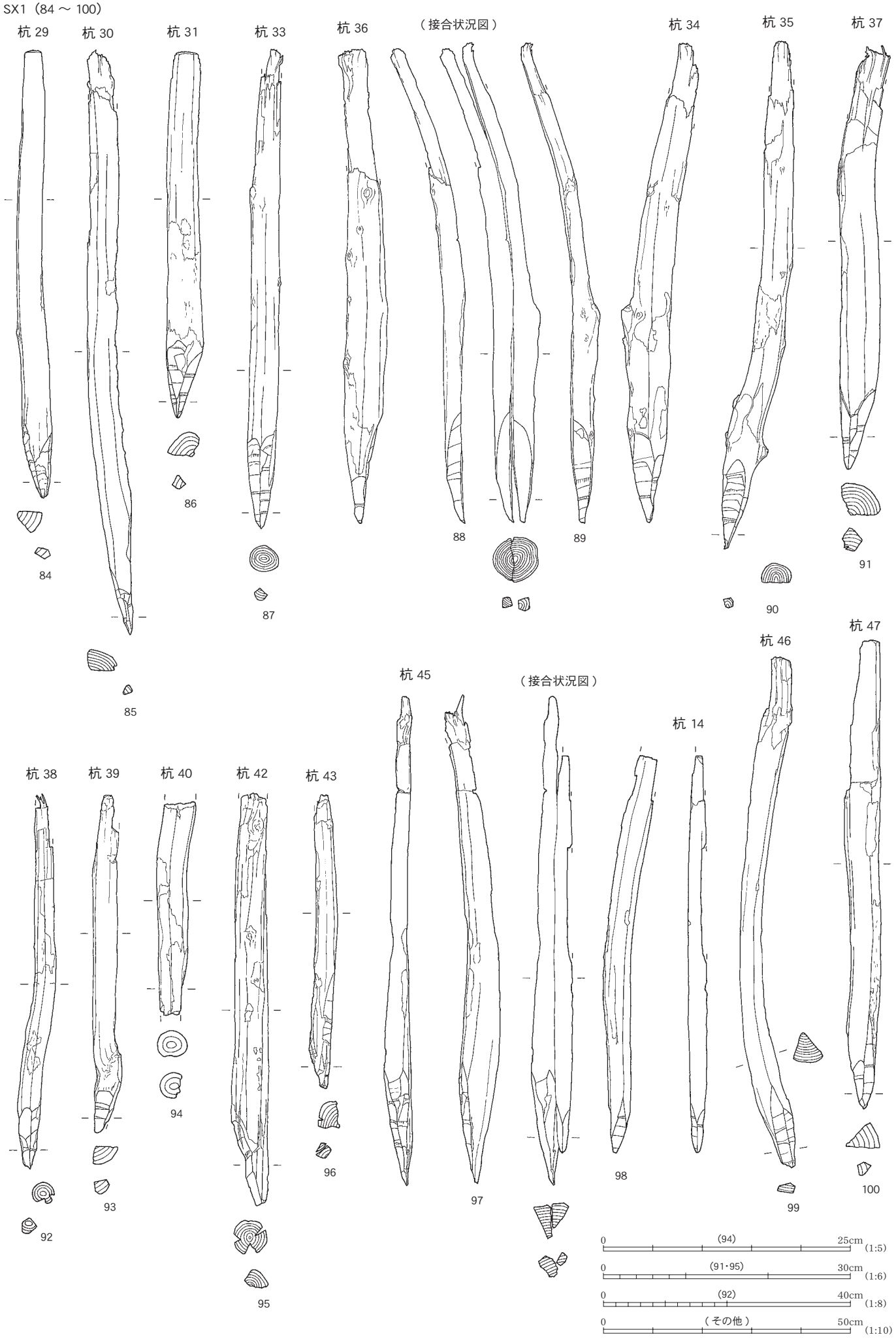
SX1（29 ～ 59）

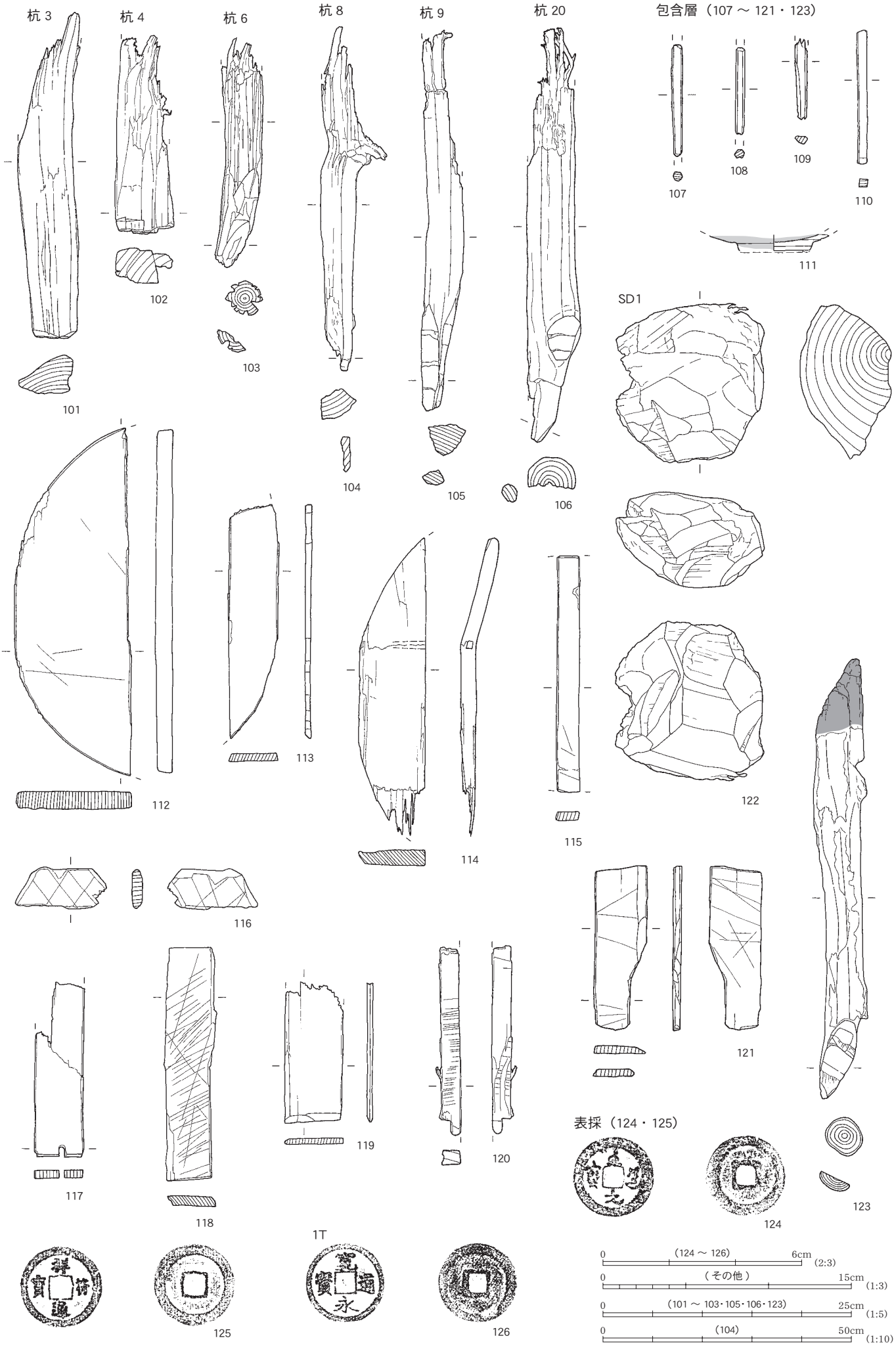

29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
0 （その他） 15cm (1:3)
0 (36・47・51 ～ 55・57) 25cm (1:5)
0 (58) 50cm (1:10)

SX1（60 ～ 83）


60
61
62
杭 10
杭 11
杭 12
杭 13
杭 15
杭 17
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
杭 18
杭 19
杭 21
杭 22
杭 23
杭 24
杭 25
杭 26
杭 27
杭 28
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
0 (60 ～ 62) 25cm (1:5)
0 (67・70・78・82・83) 30cm (1:6)
0 (66・69・74 ～ 77) 40cm (1:8)
0 (63 ～ 65・68・71 ～ 73・79 ～ 81) 50cm (1:10)

SX1（84 ～ 100）


杭 29
杭 30
杭 31
杭 33
杭 36
（接合状況図）
杭 34
杭 35
杭 37
84
85
86
87
88
89
90
91
杭 38
杭 39
杭 40
杭 42
杭 43
杭 45
（接合状況図）
杭 14
杭 46
杭 47
92
93
94
95
96
97
98
99
100
0 (94) 25cm (1:5)
0 (91・95) 30cm (1:6)
0 (92) 40cm (1:8)
0 （その他） 50cm (1:10)

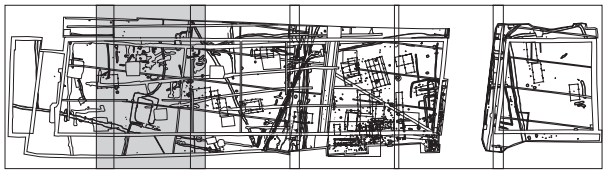

杭 3
杭 4
杭 6
杭 8
杭 9
杭 20
包含層（107 ～ 121・123）
SD1
表採（124・125）
1T
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
0 (124 ～ 126) 6cm (2:3)
0 (その他) 15cm (1:3)
0 (101 ～ 103・105・106・123) 25cm (1:5)
0 (104) 50cm (1:10)

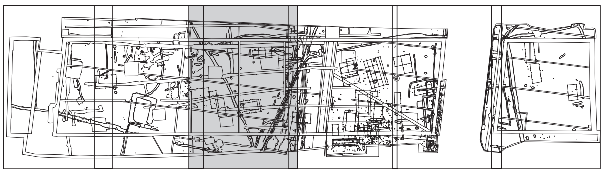
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
A
B
C
D
E
F
G

0　(1:500)　20m

5B
6B
7B
8B
5C
6C
7C
8C
5D
6D
7D
8D
5E
6E
7E
8E
5F
6F
7F
8F
5G
6G
7G
8G
P926
SK922
SE33
SK31
P28
SD50
P65
SD30
82T
SD68
P77
P3
P78
P90
P92
SD72
P104
P101
P102
P48
P49
SX32
SK23
SD8
SX9
P18
P916
SD1
SD2
SB1
SK339
SD40
SD24
SX19
SY25
84T
0
(1:250)
10m

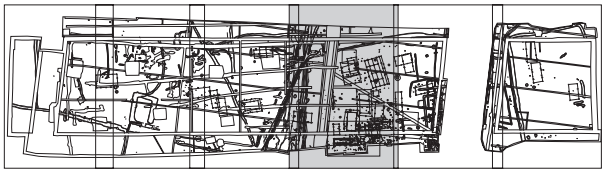
田屋道遺跡Ⅱ　遺構分割図（2）

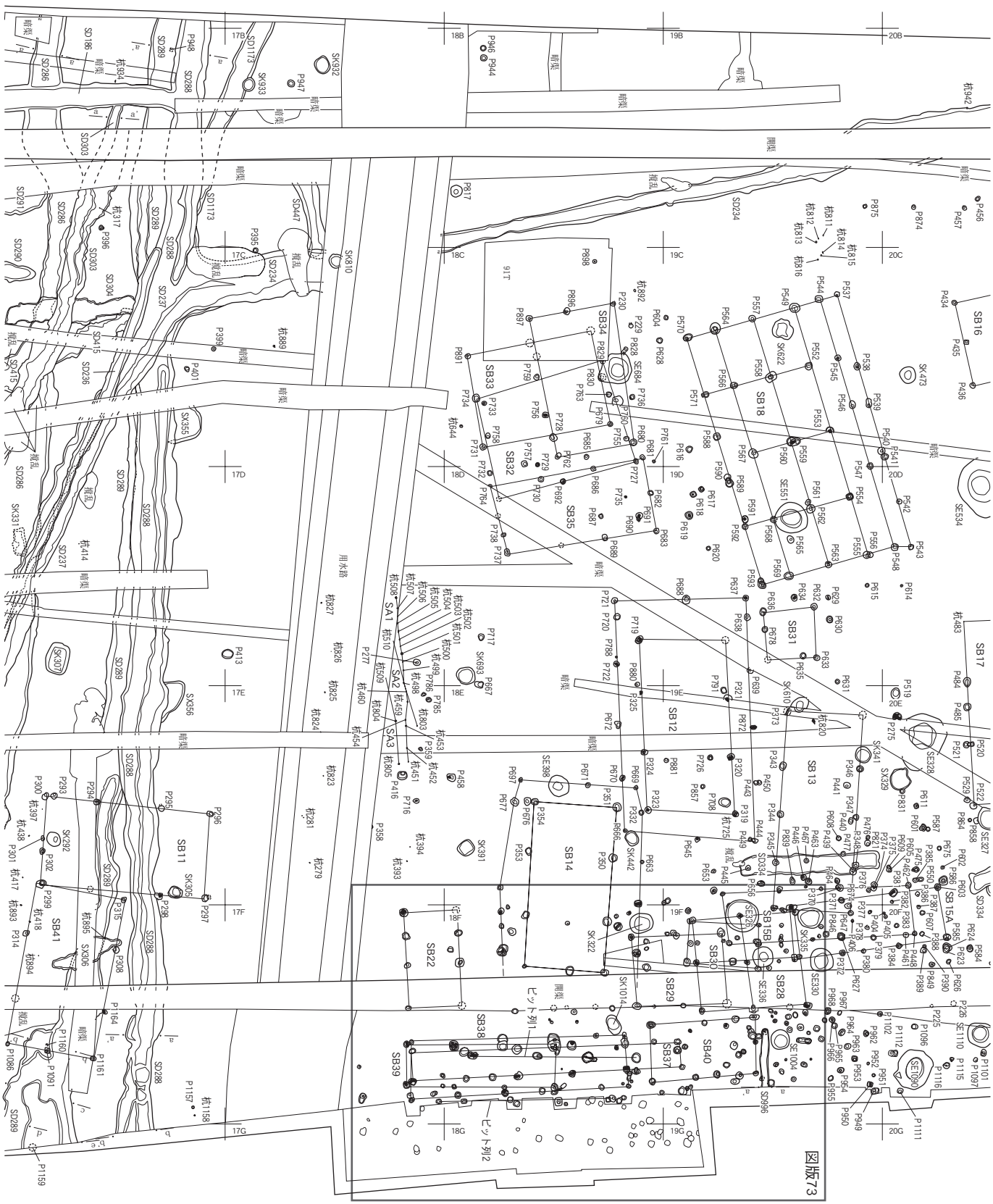




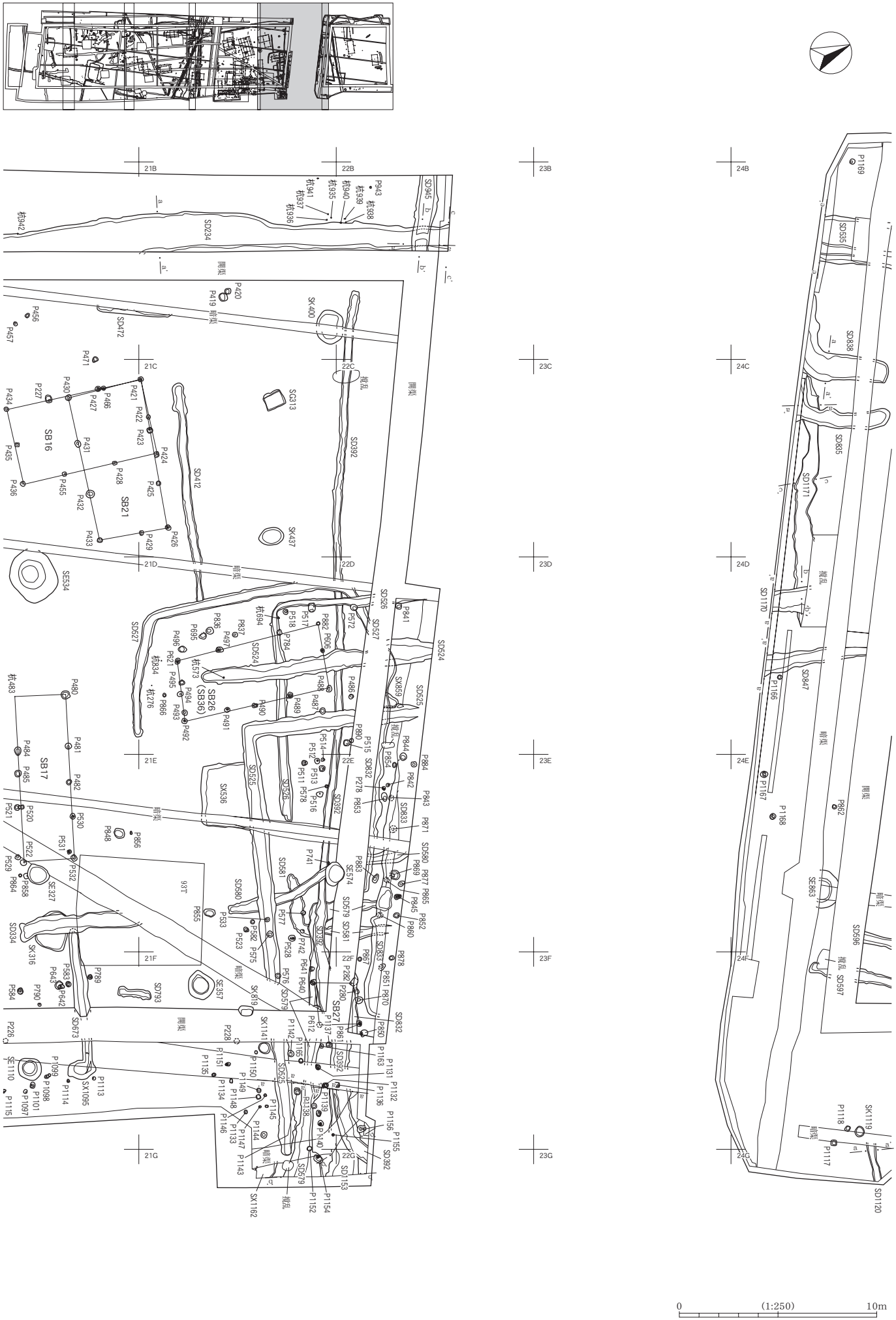
12B
13B
14B
15B
16B
12C
13C
14C
15C
16C
12D
13D
14D
15D
16D
12E
13E
14E
15E
16E
12F
13F
14F
15F
16F
12G
13G
14G
15G
16G
SD139
SD140
SD186
SD286
SD259
SD96
SD126
SD121
SE97
SE118
SX232
SD175
SK253
SK256
SK255
SD258
SB10
86T
87T
88T
SD290
SD291
SD303
SD304
SD415
SD237
SD236
SD252
SD238
SD289
SK331
SK307
SK292
SK285
SB41
SX306
SX173
SB4
SB5 (SB6)
SB7 (SB8)
SB9
SE105
SE181
SK180
SD36
SD42
SK920
P284
杭254
杭414
杭888
杭156
杭309
杭310
杭311
杭312
杭479
杭397
杭438
杭417
杭893
杭418
杭894
杭1087
杭910
杭911
杭912
撹乱
暗渠
開渠

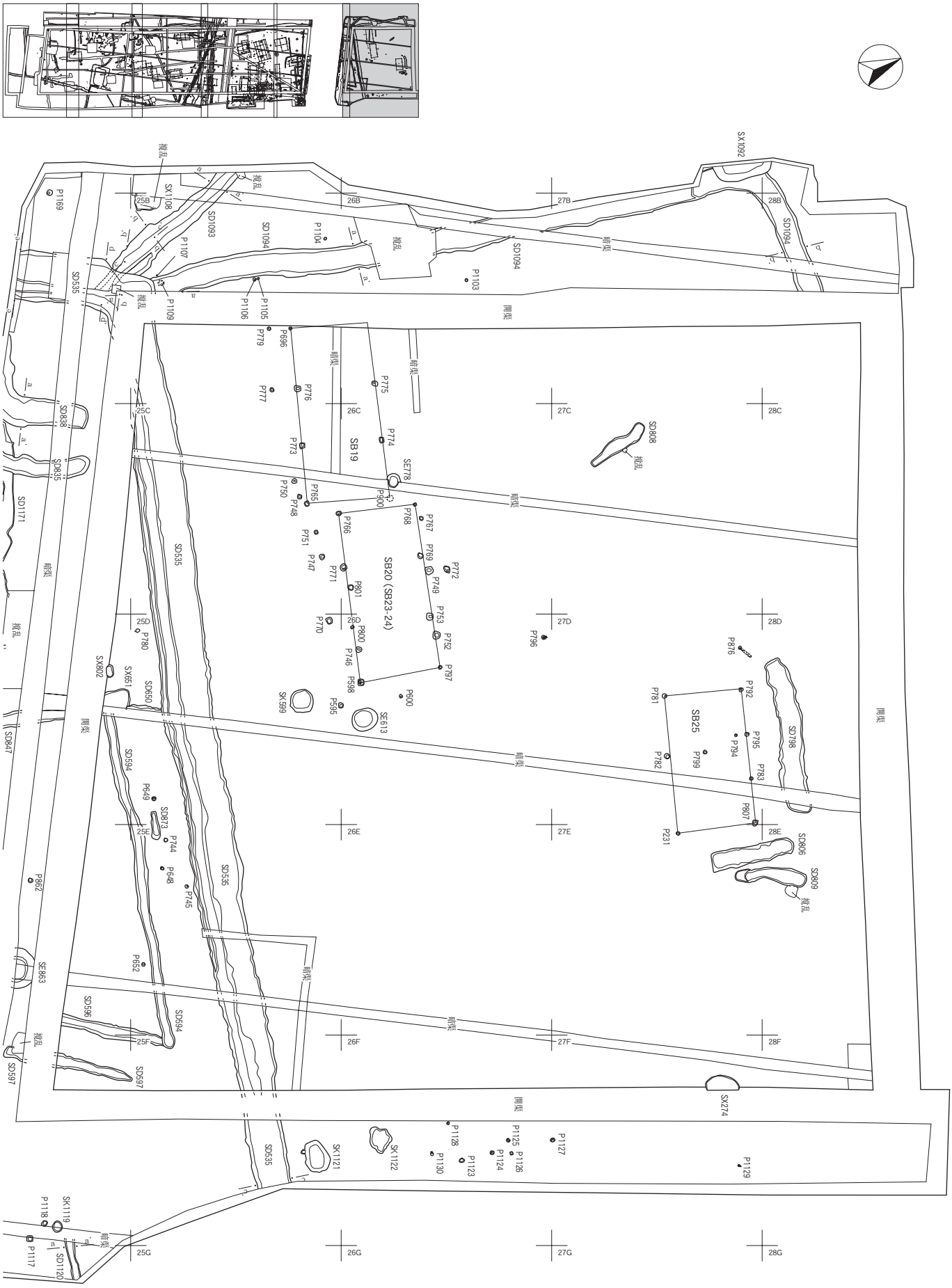
0　(1:250)　10m

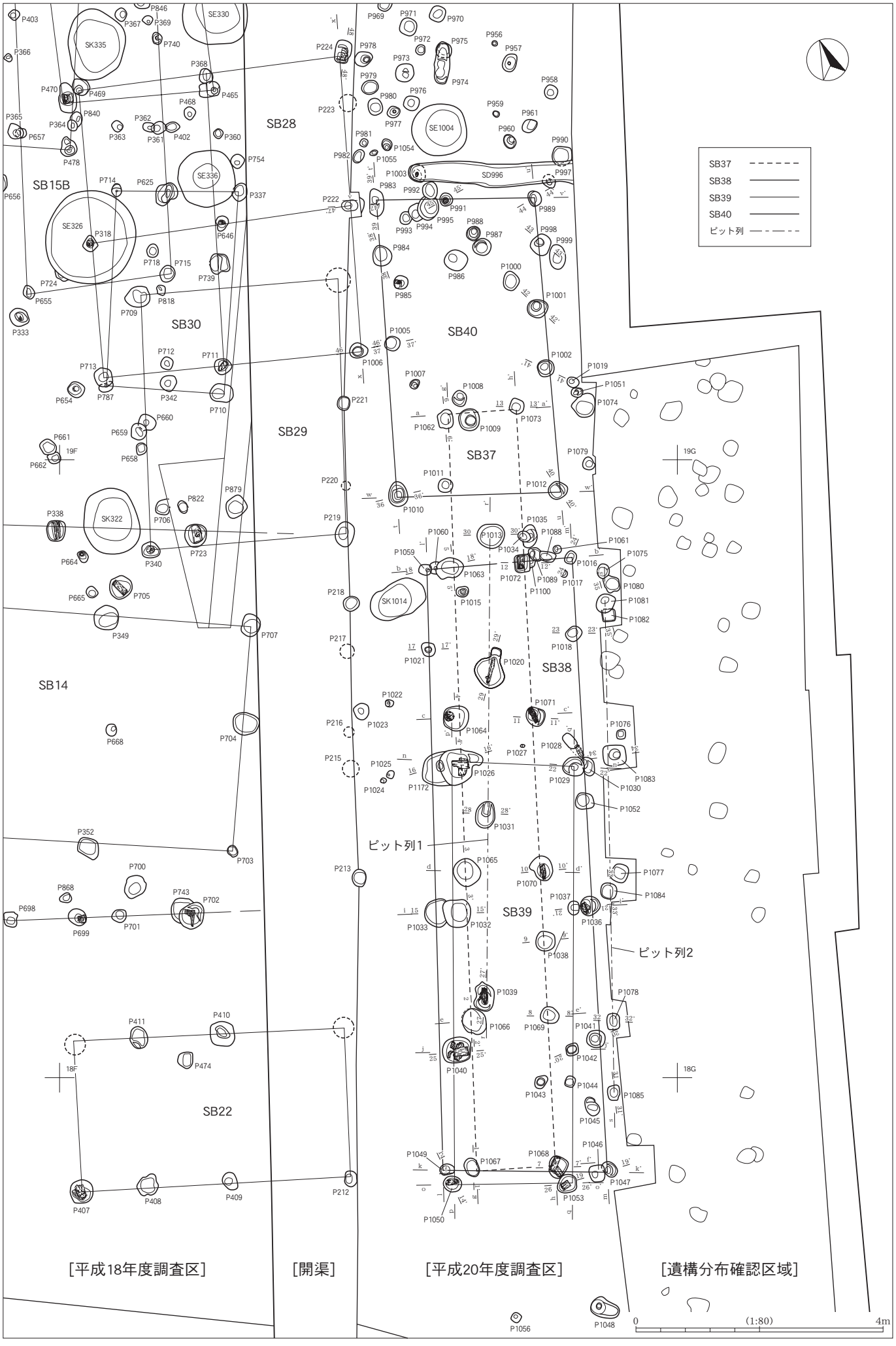



SB11
SB12
SB13
SB14
SB15A
SB15B
SB16
SB17
SB18
SB22
SB28
SB29
SB30
SB31
SB32
SB33
SB34
SB35
SB37
SB38
SB39
SB40
SB41
SA1
SA2
SA3
SD234
SD1173
SD447
SD303
SD304
SD288
SD289
SD290
SD291
SD286
SD237
SD236
SD415
SD334
SD335
SD336
SD996
SK307
SK322
SK335
SK341
SK442
SK610
SK622
SK693
SK1014
SE534
SE551
SE1004
SE1090
SE1110
SX329
SX355
SX356
SX431
ピット列1
ピット列2
用水路
攪乱
畦畔
17B
17C
17D
17E
17F
17G
18B
18C
18D
18E
18F
18G
19B
19C
19D
19E
19F
19G
20B
20C
20D
20E
20F
20G
図版73

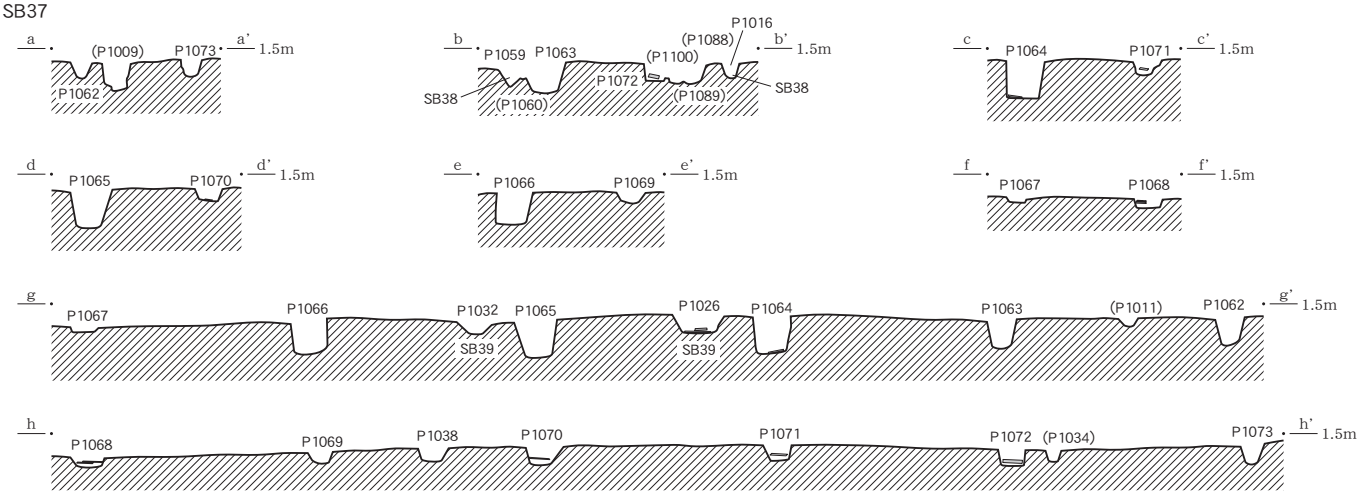
0　(1:250)　10m


21B
22B
23B
24B
21C
22C
23C
24C
21D
22D
23D
24D
21E
22E
23E
24E
21F
22F
23F
24F
21G
22G
23G
24G
SB16
SB17
SB21
SB26
(SB36)
SB27
SD234
SD392
SD412
SD524
SD525
SD526
SD527
SD579
SD580
SD581
SD673
SD793
SD832
SD833
SD835
SD838
SD847
SD945
SD1120
SD1153
SD1170
SD1171
SE327
SE357
SE534
SE574
SE863
SK400
SK437
SK819
SK1141
SK1162
SK1119
SX316
SX536
SX859
SX1095
SG313
93T
0
(1:250)
10m

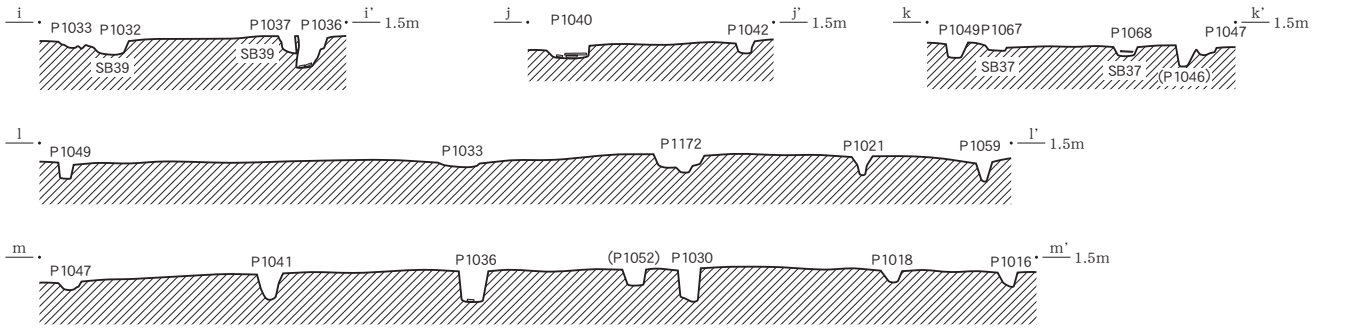

SB19
SB20 (SB23-24)
SB25
SX1092
SX1108
SD1093
SD1094
SD535
SD808
SD798
SD806
SD809
SD1171
SD838
SD835
SD847
SD594
SD873
SD596
SD597
SD1120
SX802
SX651
SD650
SE778
SE613
SK599
SK1121
SK1122
SK1119
SX274
SE863
25B
26B
27B
28B
25C
26C
27C
28C
25D
26D
27D
28D
25E
26E
27E
28E
25F
26F
27F
28F
25G
26G
27G
28G
0
(1:250)
10m


SB37
SB38
SB39
SB40
ピット列
SB28
SB15B
SB30
SB29
SB40
SB37
SB38
SB14
SB39
SB22
ピット列1
ピット列2
SE330
SE1004
SE336
SE326
SD996
SK335
SK322
SK1014
19F
19G
18F
18G
0
(1:80)
4m
[平成18年度調査区]
[開渠]
[平成20年度調査区]
[遺構分布確認区域]

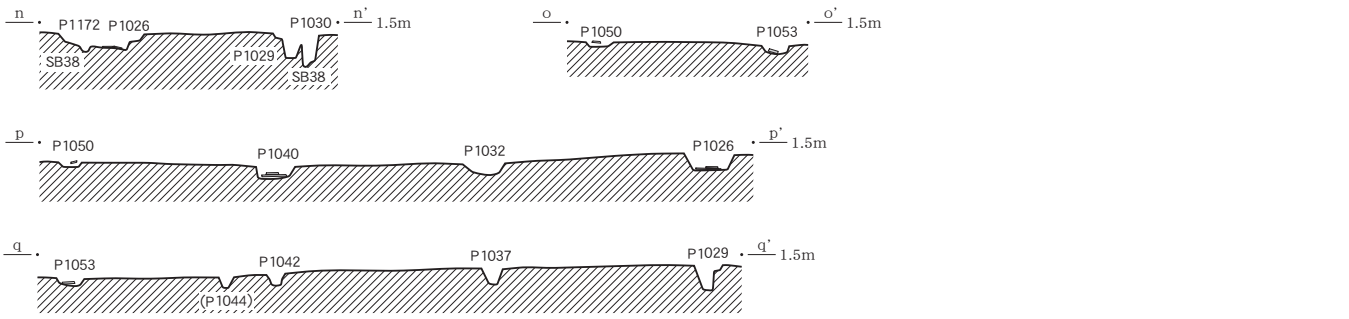
SB37



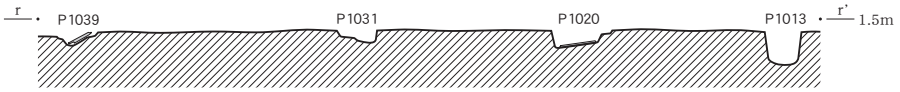
SB38



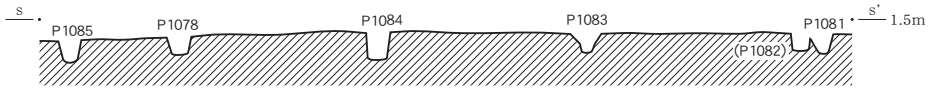
SB39



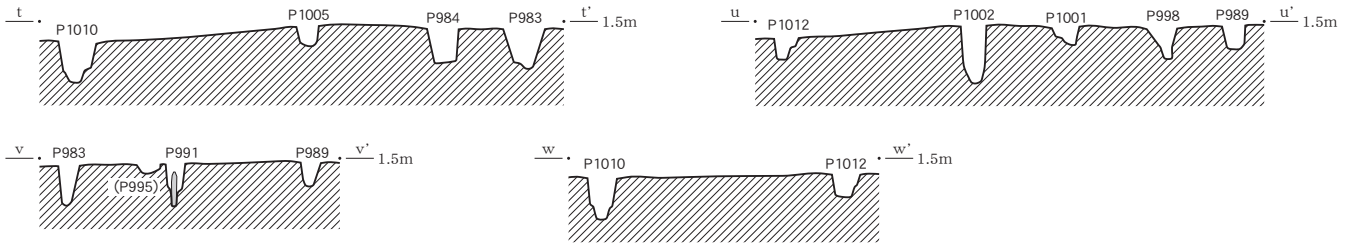
ピット列 1



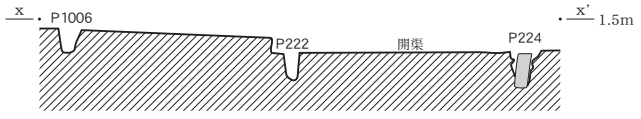
ピット列 2

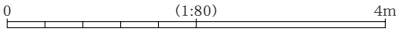


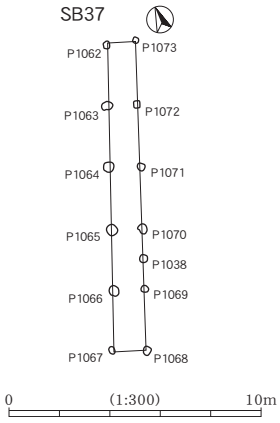
SB40

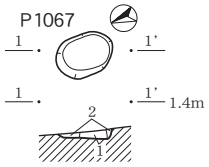


SB28

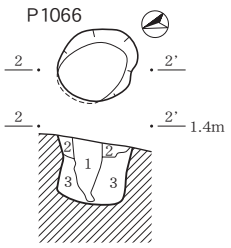


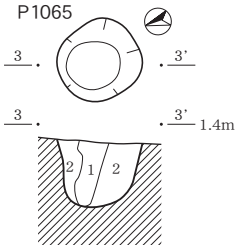






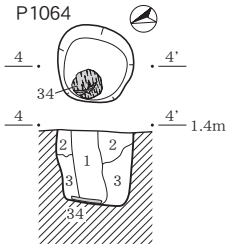
P1067
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

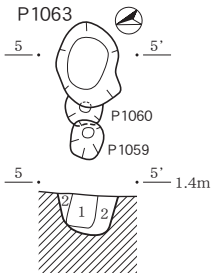


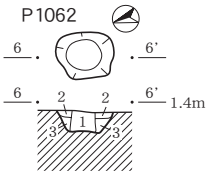


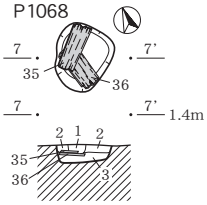
P1066
1. 10YR2/1 黒色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性やや強。
3. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

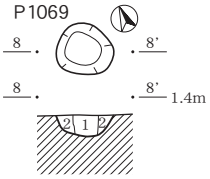
P1065
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。











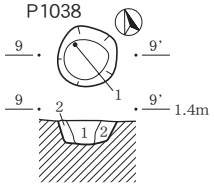
P1064
1. 10YR2/1 黒色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

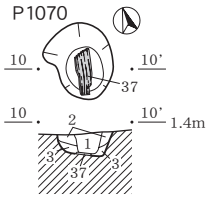
P1063
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

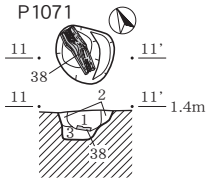
P1062
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

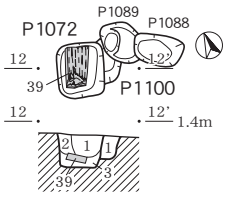
P1068
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

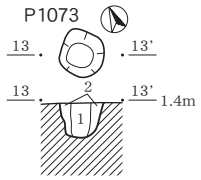
P1069
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。











P1038
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

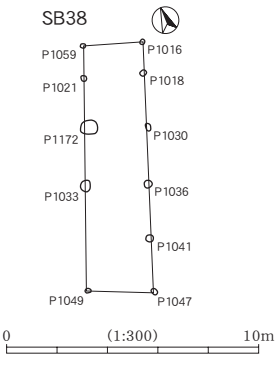
P1070
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

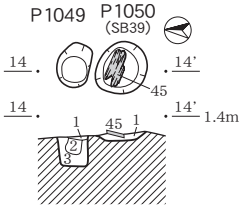
P1071
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

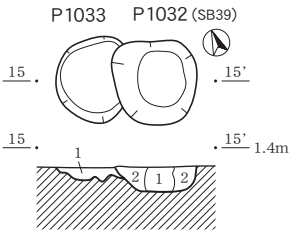
P1072
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。

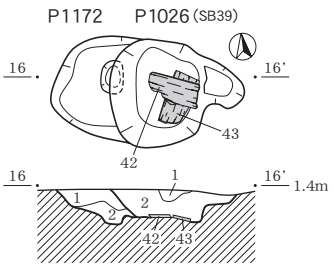
P1100
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。

P1073
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。









P1049
1. 10YR2/1 黒色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

P1050 (SB39)
1. 10YR2/1 黒色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性やや強。

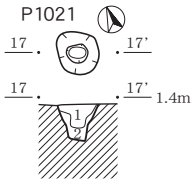
P1032 (SB39)
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

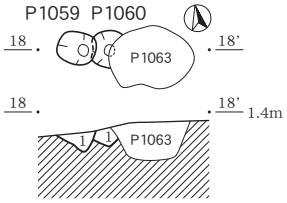
P1033
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性中。

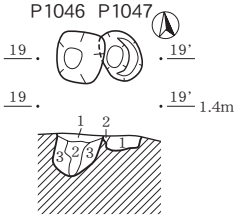
P1026 (SB39)
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

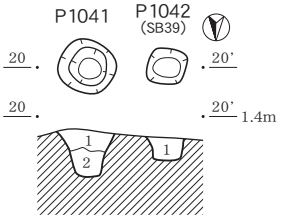
P1172
1. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR2/1 黒色粘質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性やや強。

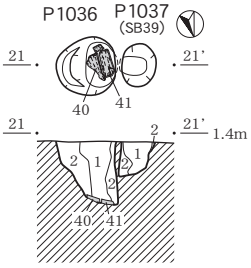
0　(1:40)　2m











P1021
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

P1059
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性中。

P1060
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性中。

P1046
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

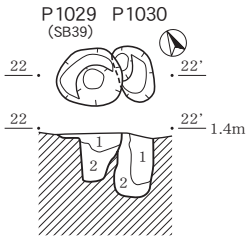
P1047
1. 10YR3/2 黒褐色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性中。

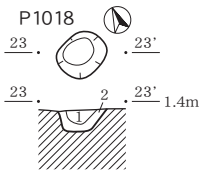
P1041
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

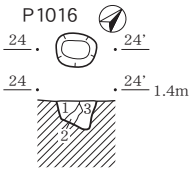
P1042 (SB39)
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

P1036
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR5/2 灰黄褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

P1037 (SB39)
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、φ 0.5cm ほどの炭化物を少量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。





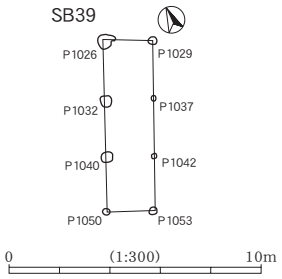


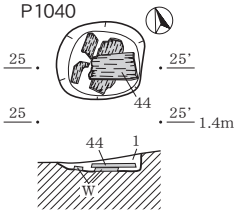
P1029 (SB39)
1. 10YR2/1 黒色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

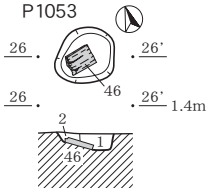
P1030
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

P1018
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、φ 0.5cm ほどの炭化物を少量含む、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性中。

P1016
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR5/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性中。

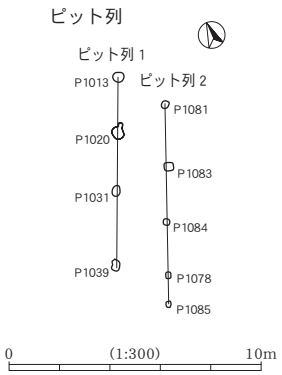


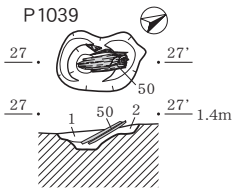


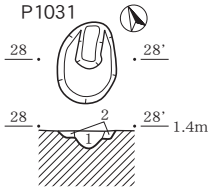


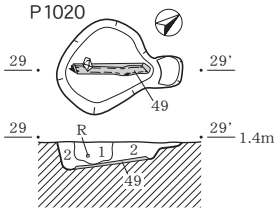
P1040
1. 10YR2/1 黒色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

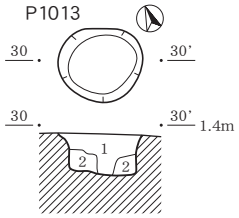
P1053
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

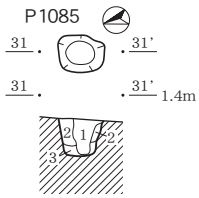


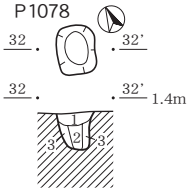












P1039
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

P1031
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

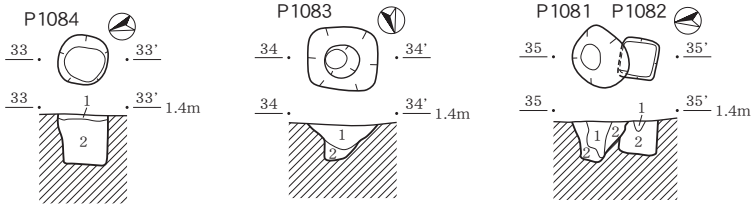
P1020
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

P1013
1. 10YR2/1 黒色粘質土、炭化物を多量含む、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

P1085
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR2/1 黒色シルト質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。

P1078
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR2/1 黒色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。

0　(1:40)　2m

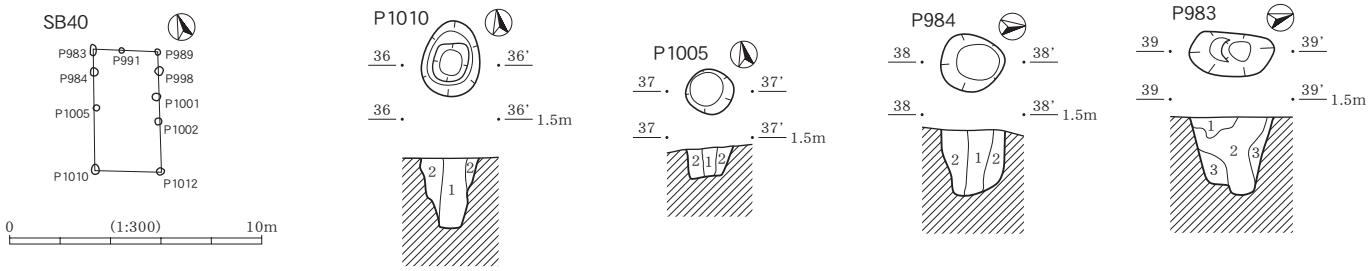


P1084
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

P1083
1. 10YR3/2 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

P1081
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

P1082
1. 10YR2/1 黒色シルト質土、φ 0.5cm ほどの炭化物を少量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

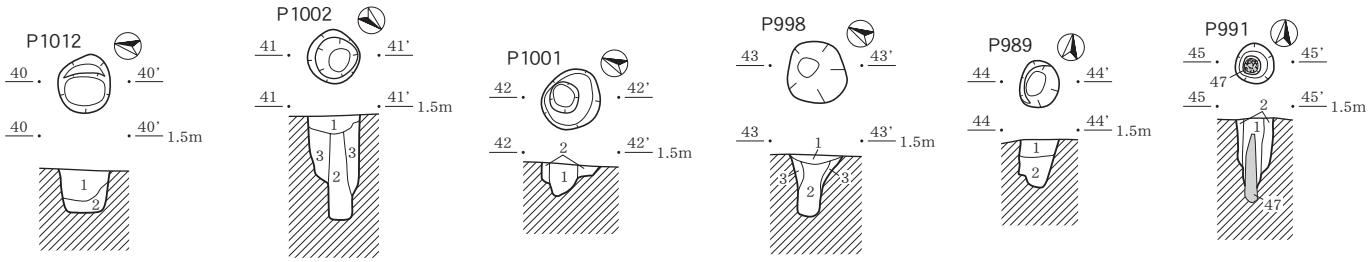


P1010
1. 10YR2/1 黒色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

P1005
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

P984
1. 10YR2/1 黒色シルト質土、φ 1.0cm ほどの炭化物を多量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

P983
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。



P1012
1. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、黒褐色土を含む、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR5/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

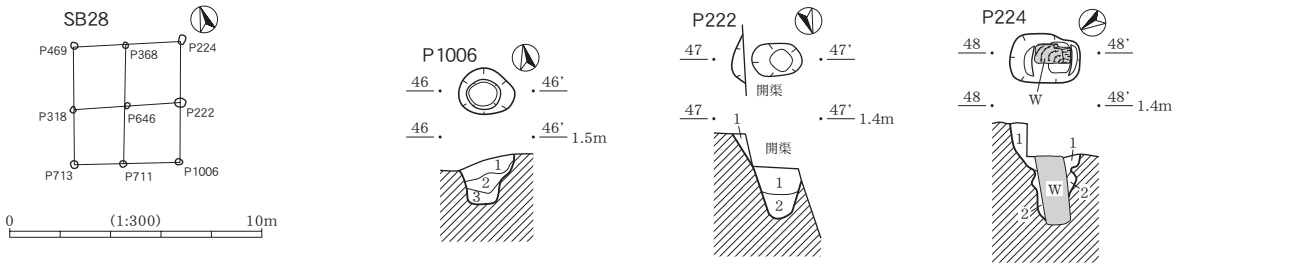
P1002
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR2/1 黒色粘質土、φ 0.5cm ほどの炭化物を少量含む、しまりやや強、粘性やや強。
3. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性やや強。

P1001
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

P998
1. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

P989
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR2/1 黒色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。

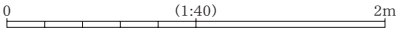
P991
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性中。

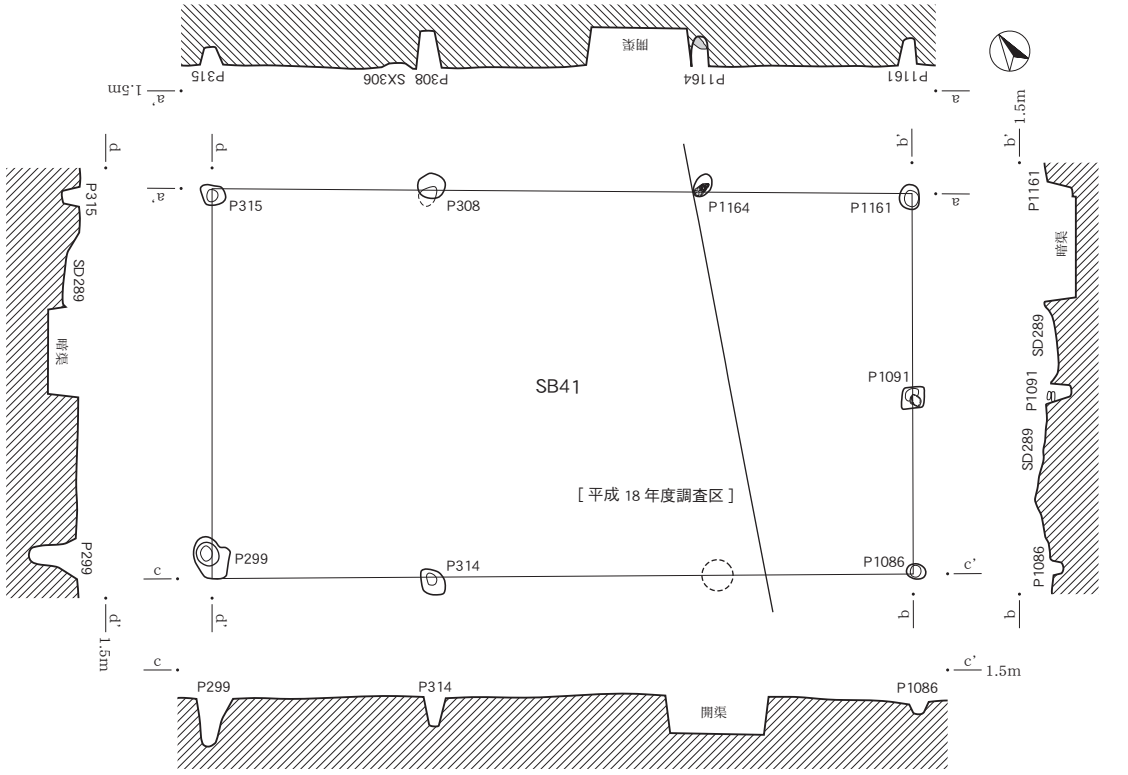


P1006
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR5/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

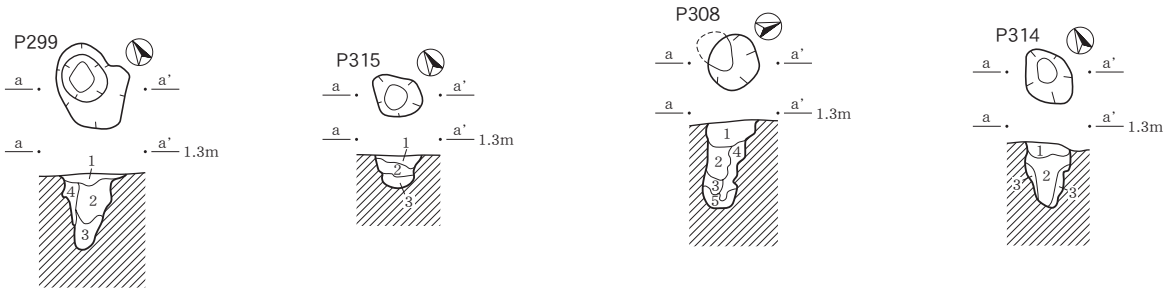
P222
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。
（H18 年度 1 層に対応）

P224
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。（H18 年度 1 層に対応）
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。





0　(1:80)　4m

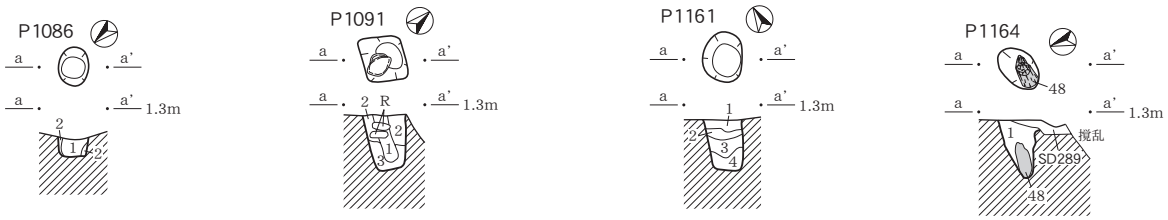


P299
1. 10YR3/2 黒褐色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に含む、しまり中、粘性中。
3. 10YR3/1 黒褐色粘質土、φ 0.2cm ほどの赤色粒を微量含む、しまり中、粘性中。
4. 10YR5/1 褐灰色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に含む、しまり中、粘性中。

P315
1. 10YR3/2 黒褐色粘質土、φ 0.5cm ほどの赤色粒を少量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR3/1 黒褐色粘質土、φ 0.5cm ほどの赤色粒を少量含む、しまり中、粘性中。
3. 10YR2/1 黒色粘質土、しまり中、粘性中。

P308
1. 7.5YR3/1 黒褐色粘質土、鉄分を筋状に含む、しまり中、粘性中。
2. 7.5YR2/2 黒褐色粘質土、しまり中、粘性中。
3. 7.5YR3/2 黒褐色粘質土、しまり中、粘性中。
4. 10YR4/1 褐灰色粘質土、しまり中、粘性中。
5. 10YR3/2 黒褐色粘質土、しまり中、粘性中。

P314
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、鉄分を筋状に含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に含む、しまり中、粘性中。
3. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に含む、しまり中、粘性中。



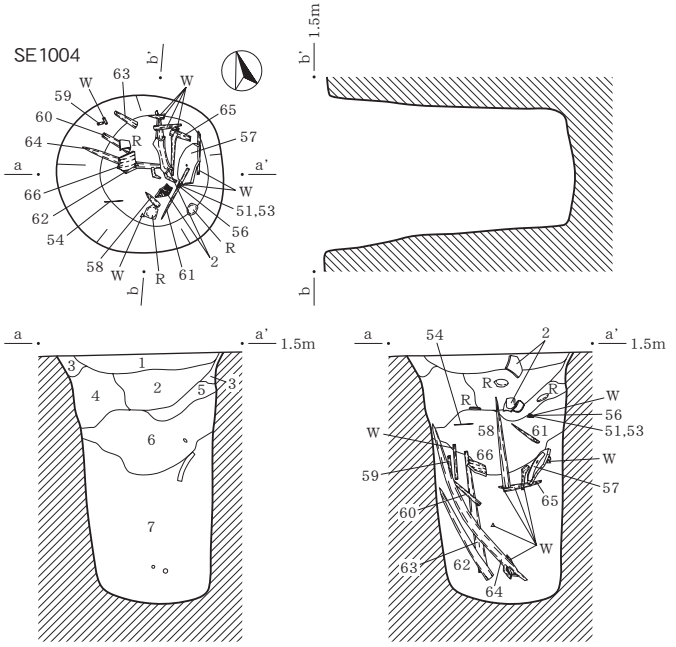
P1086
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。

P1091
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR3/2 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。

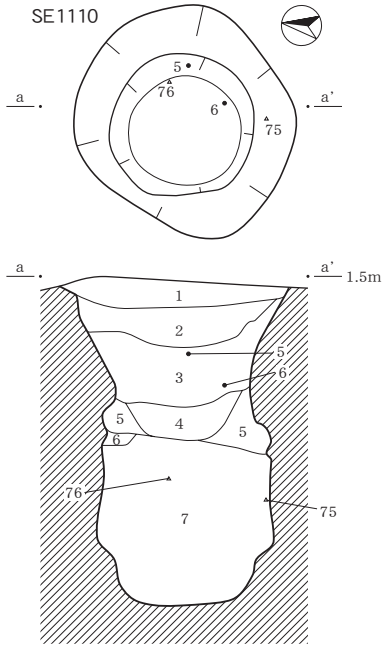
P1161
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR3/2 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR2/1 黒色粘質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。
4. 10YR4/1 褐灰色粘質土、しまりやや強、粘性中。

P1164
1. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。

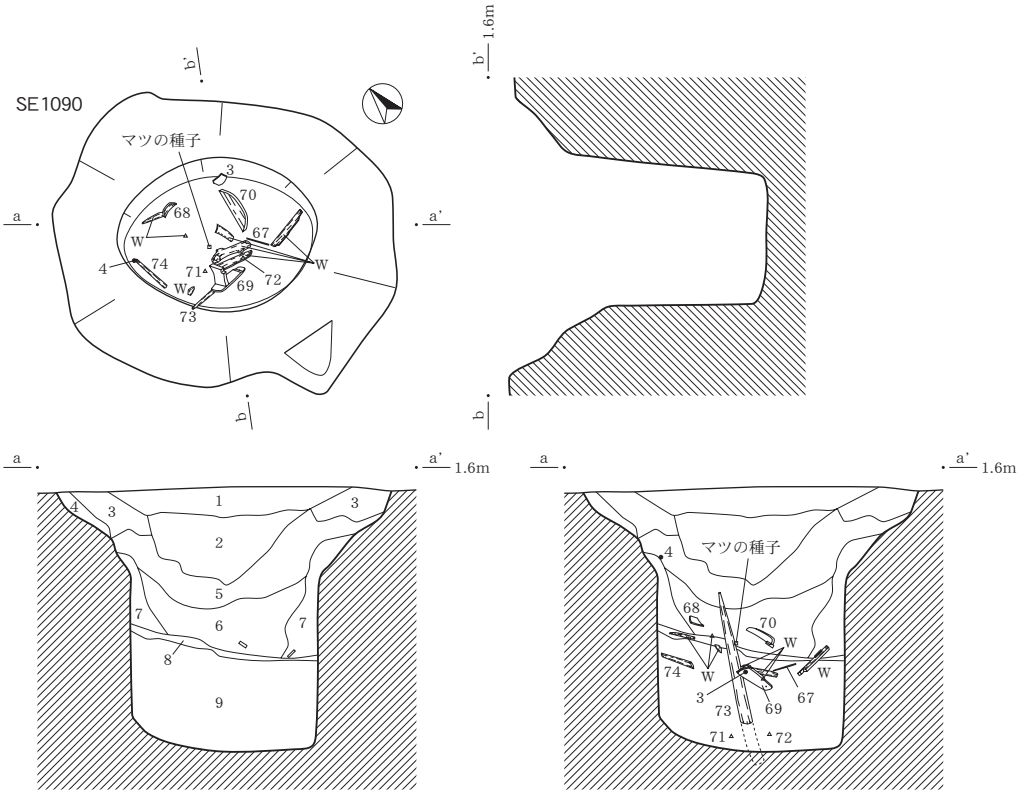
0　(1:40)　2m



SE1004
1. 10YR3/2 黒褐色シルト質土、しまり強、粘性中。
2. 10YR2/1 黒色粘質土、φ 0.5cm ほどの炭化物（イネ科の種子）を少量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR2/2 黒褐色粘質土、Ⅲ b 層土を少量含む、φ 0.1cm ほどの炭化物（イネ科の種子）を少量含む、しまりやや強、粘性中。
4. 10YR1.7/1 黒色粘質土、φ 0.1cm ほどの炭化物（イネ科の種子）を多量含む、しまりやや強、粘性中。
5. 10YR3/1 黒褐色粘質土、10Y4/1 φ 0.1cm ほどの炭化物（イネ科の種子）を少量含む、しまり やや強、粘性中。
6. 10YR1.7/1 黒色粘質土、10Y4/1 灰色粘土を塊状に含む、φ 0.1cm ほどの炭化物（イネ科の種子）を多量含む、しまり中、粘性中。
7. 10YR1.7/1 黒色粘質土、炭化物（イネ科の種子）を多量含む、しまり中、粘性強。

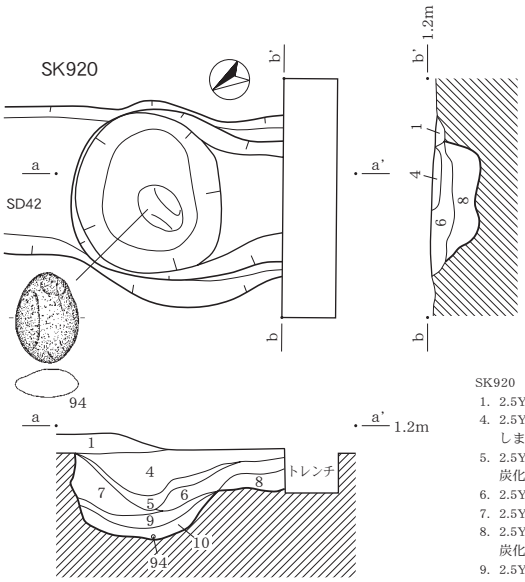


SE1110
1. 10YR3/2 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR2/1 黒色シルト質土、φ 0.5cm ほどの炭化物を少量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
4. 10YR2/1 黒色シルト質土、ワラ・木くずを含む、しまりやや強、粘性中。
5. 10YR2/1 黒色粘質土、Ⅲ b 層土を少量含む、しまりやや強、粘性やや強。
6. 10YR4/1 褐灰色砂、砂崩落土。
7. 10YR2/1 黒色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。



SE1090
1. 10YR3/2 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR2/1 黒色粘質土、φ 0.3 ～ 0.5cm の炭化物を少量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR3/2 黒褐色シルト質土、Ⅲ b 層土を多量含む、砂を多量含む、しまりやや強、粘性中。
4. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
5. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土、砂を多量含む、しまりやや強、粘性やや強。
6. 10YR3/1 黒褐色粘質土、砂を少量含む、しまりやや強、粘性やや強。
7. 10YR2/1 黒色粘質土、φ 0.3 ～ 0.5cm の炭化物を少量含む、しまりやや強、粘性やや強。
8. 10YR3/1 黒褐色粘質土、モミガラを多量含む。
9. 10YR2/1 黒色粘質土、しまり中、粘性やや強。

0　(1:40)　2m

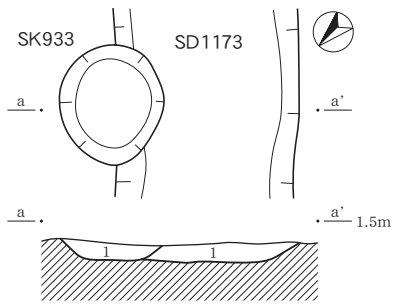


SK920
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土、しまり強、粘性強。
4. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土、Ⅲb層土と白色ブロックを塊状に含む、しまり中、粘性中。
5. 2.5Y6/1 黄灰色粘質土、Ⅲb層土を塊状に含む、φ 0.2cm ほどの炭化物を少量含む、しまり中、粘性中。
6. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土、Ⅲb層土を塊状に含む、しまり中、粘性中。
7. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土、しまり中、粘性中。
8. 2.5Y3/2 黒褐色粘質土、Ⅲb層土を塊状に含む、φ 0.3 ～ 0.5cm の炭化物を少量含む、しまり中、粘性中。
9. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土、Ⅲb層土を塊状に含む、しまり中、粘性中。
10. 2.5Y2/1 黒色粘質土、しまり中、粘性やや強。

SK922
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲb層土を含む、φ 0.5cm ほどの赤色粒を微量含む、しまり中、粘性やや強。

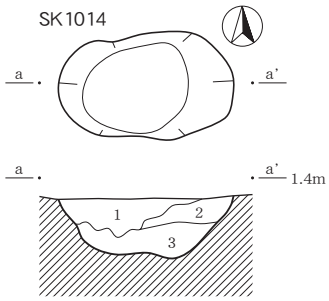
SK929
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲb層土を塊状に含む、φ 0.5cm ほどの赤色粒を少量含む、しまり中、粘性中。

SK932
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲb層土を塊状に含む、φ 0.5cm ほどの赤色粒を微量含む、しまり中、粘性中。

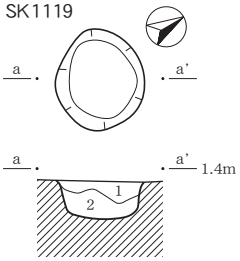


SK933
1. 10YR6/1 褐灰色粘質土、φ 0.5cm ほどの赤色粒を少量含む、しまり中、粘性やや弱。

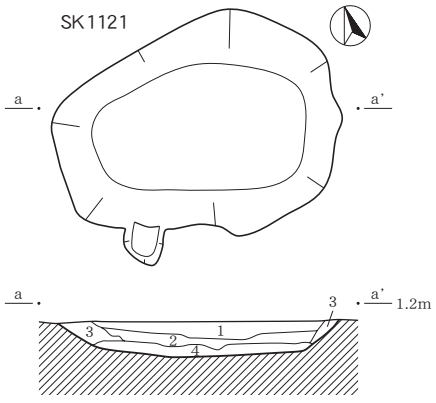
SD1173
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。



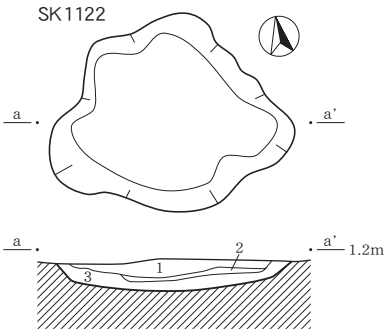
SK1014
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲb層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR3/2 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR3/1 黒褐色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。



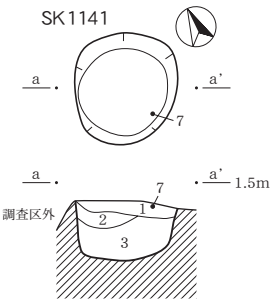
SK1119
1. 10YR3/2 黒褐色シルト質土、Ⅲb層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、しまりやや強、粘性中。



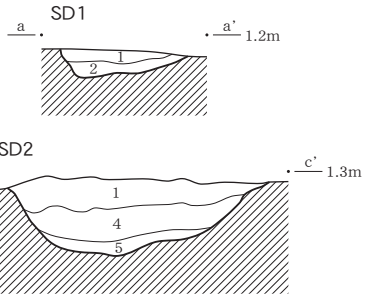
SK1121
1. 10YR3/2 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲb層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。
4. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、しまりやや強、粘性中。

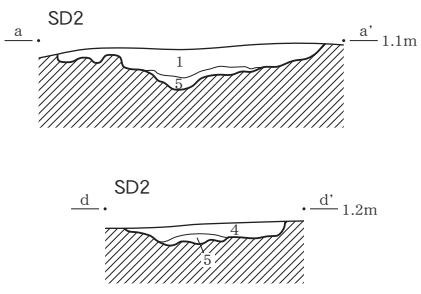


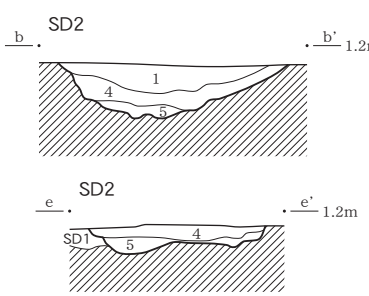
SK1122
1. 10YR2/1 黒色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR5/1 褐灰色シルト質土、Ⅲb層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。



SK1141
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、φ 0.3 ～ 0.5cm の炭化物を全体に含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土、Ⅲb層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR2/1 黒色シルト質土、Ⅲb層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。



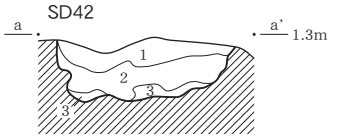


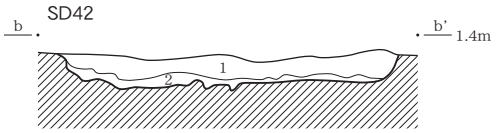


SD1
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土、φ 0.5cm ほどの赤色粒を含む、しまりやや弱、粘性中。
2. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土、φ 0.5cm ほどの赤色粒を含む、しまりやや弱、粘性中。

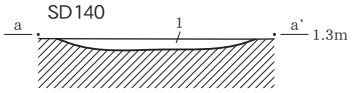
SD2
1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土、微細な炭化物を含む、しまり強、粘性強。
4. 2.5Y3/2 黒褐色粘質土、5Y6/2 灰オリーブ色のシルト質粘土を塊状に含む、しまり中、粘性中。
5. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土、しまり中、粘性中。

0　(1:40)　2m

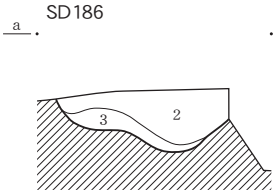


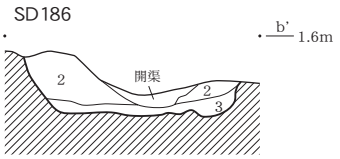


SD42
1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土、しまり強、粘性強。
2. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土、しまり強、粘性強。
3. 10YR4/1 褐灰色粘質土、φ 3.0cm ほどのⅢｂ層土を塊状に含む、φ 0.1cm ほどの炭化物を微量含む、しまり弱、粘性やや弱。

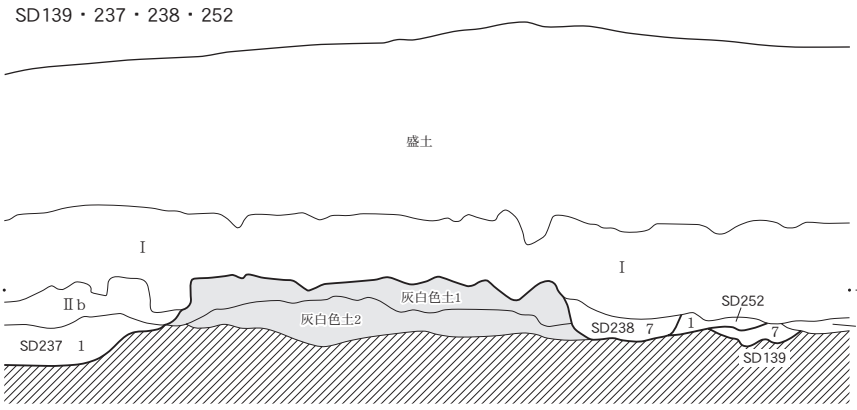


SD140
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に含む、しまり中、粘性中。

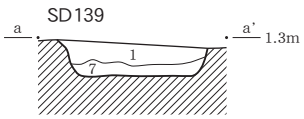


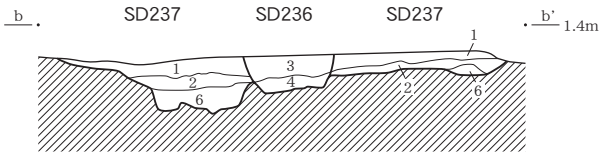


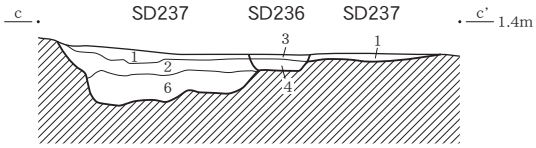
SD186
2. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に含む、φ 0.5cm ほどの赤色粒を微量含む、しまり強、粘性やや強。
3. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土、Ⅱｂ層土を塊状に含む、φ 0.5cm ほどの赤色粒を微量含む、しまりやや強、粘性中。



灰白色土 1. 10YR6/1 褐灰色粘質土、Ⅱｂ層土を少量含む、しまり中、粘性中。
灰白色土 2. 10YR7/1 灰白色粘質土、しまり中、粘性中。







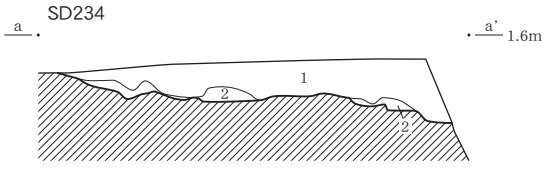
SD139
1. 10YR3/1 粘質土、Ⅲｂ層土と炭化物を微量含む、しまり強、粘性やや弱。
7. 5Y6/2 灰オリーブ色シルト質土、褐灰色土を含む、しまり中、粘性弱。

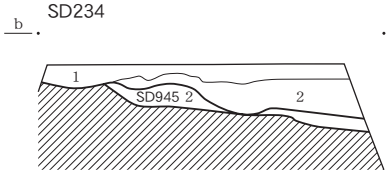
SD236
3. 10YR4/1 褐灰色粘質土、しまりやや強、粘性強。
4. 10YR3/1 黒褐色粘質土、しまりやや強、粘性強。

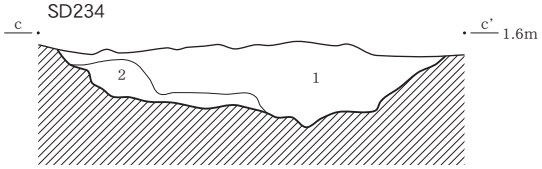
SD237
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR3/2 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。
6. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性やや強。

SD238
7. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲｂ層土を斑状に多量含む、しまりやや弱、粘性やや強。

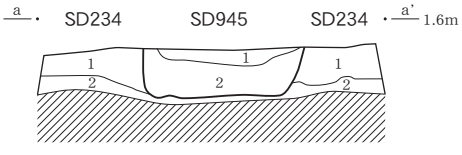
SD252
1. 10YR4/1 褐灰色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。



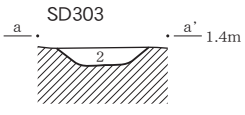


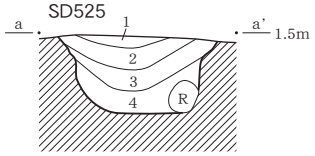


SD234
1. 10YR4/1 褐灰色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に含む、φ 0.5cm ほどの炭化物と赤色粒を微量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR6/1 褐灰色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に含む、しまり中、粘性やや弱。



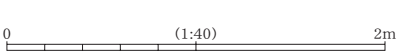
SD945
1. 10YR4/1 褐灰色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に含む、砂を多量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR5/1 褐灰色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に含む、しまり中、粘性中。

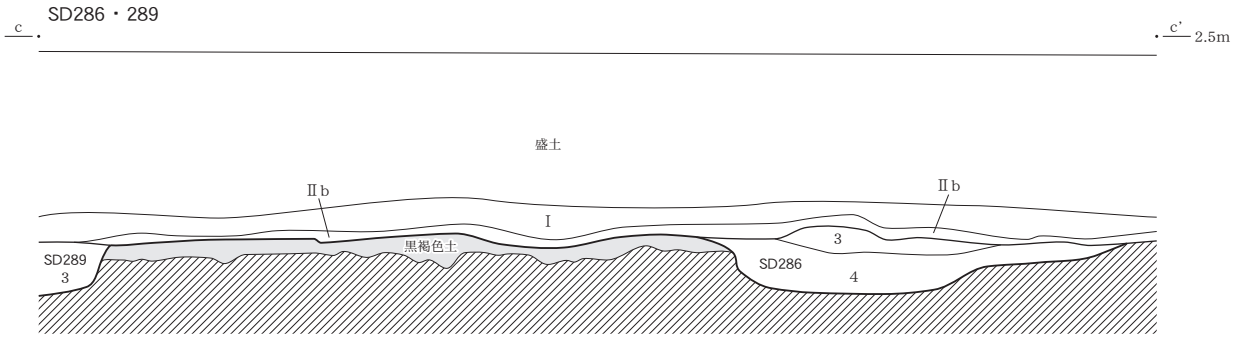




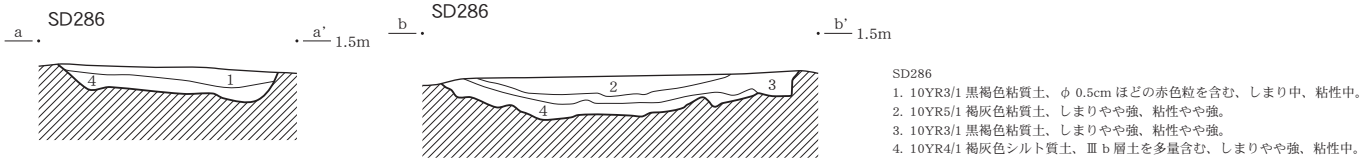
SD303
2. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に含む、炭化物を 微量含む、φ 0.5cm ほどの赤色粒を少量含む、しまり中、粘性中。

SD525
1. 10YR3/2 黒褐色シルト質土、φ 0.5cm ほどの炭化物を少量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を少量含む、φ 0.5cm ほどの炭化物を少量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR2/1 黒色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
4. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性やや強。

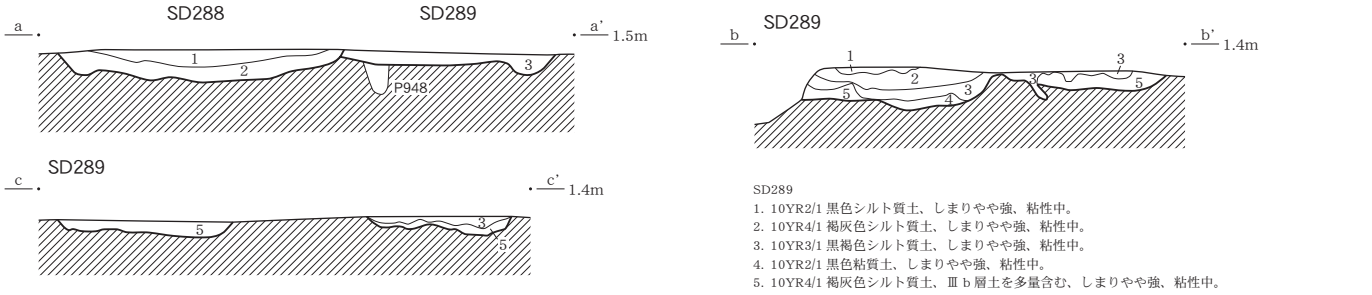




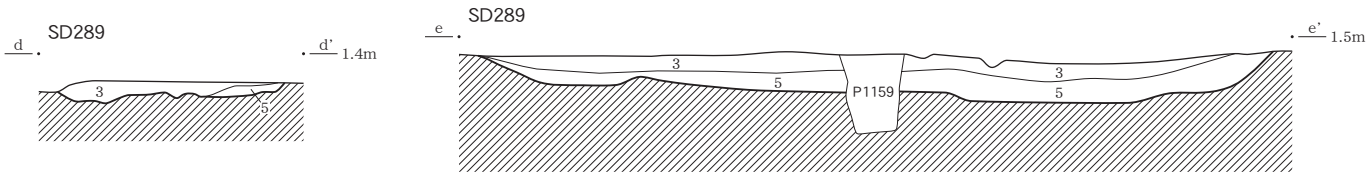
黒褐色土 . 10YR3/1 粘質土、Ⅲ b 層土を多量含む、しまり中、粘性中。

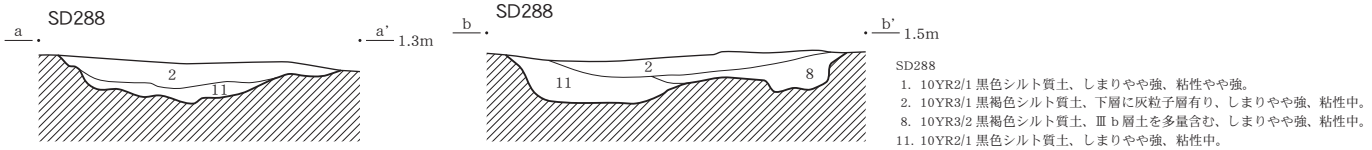


SD286
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、φ 0.5cm ほどの赤色粒を含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR5/1 褐灰色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
3. 10YR3/1 黒褐色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
4. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲ b 層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

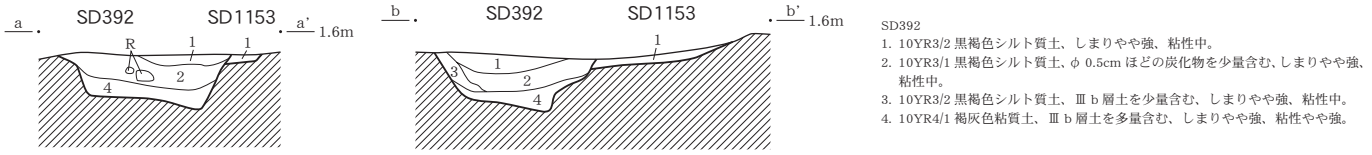


SD289
1. 10YR2/1 黒色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
4. 10YR2/1 黒色粘質土、しまりやや強、粘性中。
5. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲ b 層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

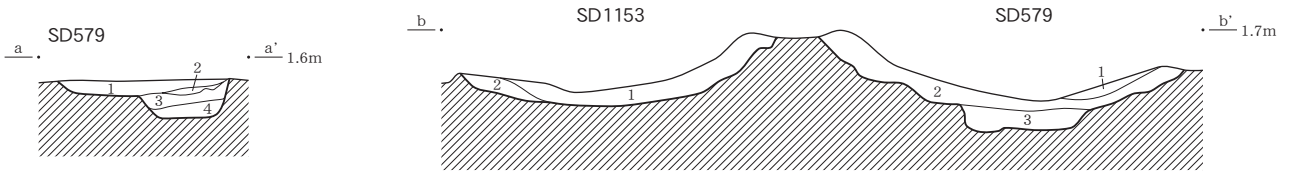




SD288
1. 10YR2/1 黒色シルト質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、下層に灰粒子層有り、しまりやや強、粘性中。
8. 10YR3/2 黒褐色シルト質土、Ⅲ b 層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。
11. 10YR2/1 黒色シルト質土、しまりやや強、粘性中。

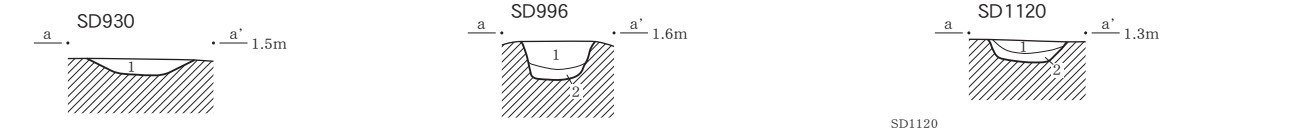


SD392
1. 10YR3/2 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、φ 0.5cm ほどの炭化物を少量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR3/2 黒褐色シルト質土、Ⅲ b 層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。
4. 10YR4/1 褐灰色粘質土、Ⅲ b 層土を多量含む、しまりやや強、粘性やや強。



SD579
1. 10YR3/2 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR2/1 黒色粘質土、Ⅲ b 層土を少量含む、しまりやや強、粘性やや強。
4. 10YR2/1 黒色粘質土、Ⅲ b 層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

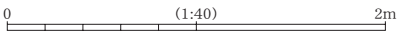
SD1153
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲ b 層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲ b 層土を塊状に含む、しまりやや強、粘性中。

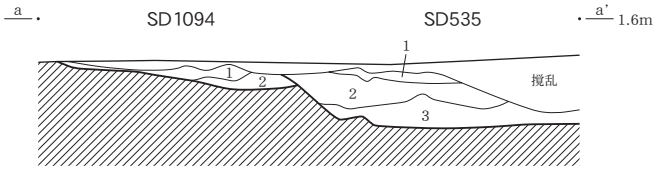


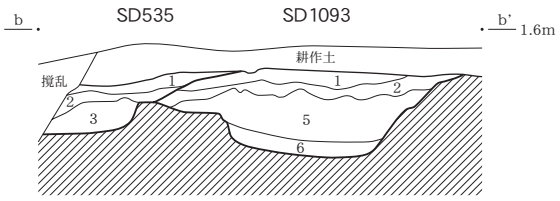
SD930
1. 10YR3/2 黒褐色粘質土、Ⅲ b 層土を塊状に含む、φ 0.5cm ほどの赤色粒を少量含む、しまり中、粘性中。

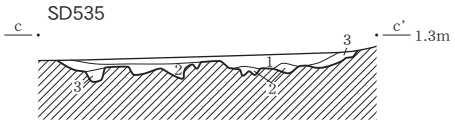
SD996
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、φ 0.5cm ほどの炭化物を少量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR3/2 黒褐色シルト質土、Ⅲ b 層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。

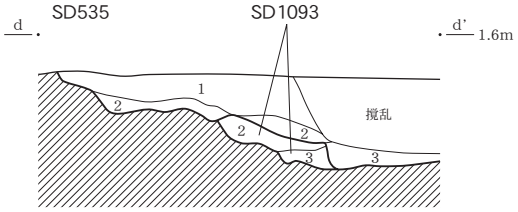
SD1120
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲ b 層土を少量含む、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR5/1 褐灰色シルト質土、Ⅲ b 層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

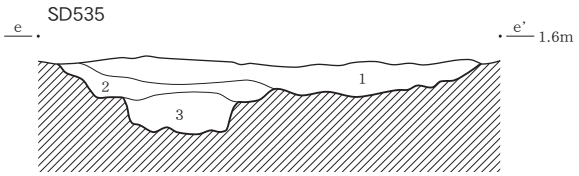


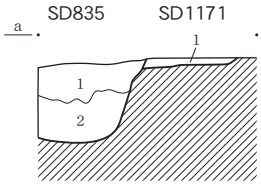


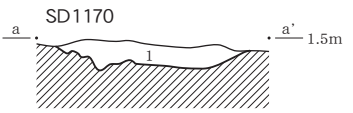








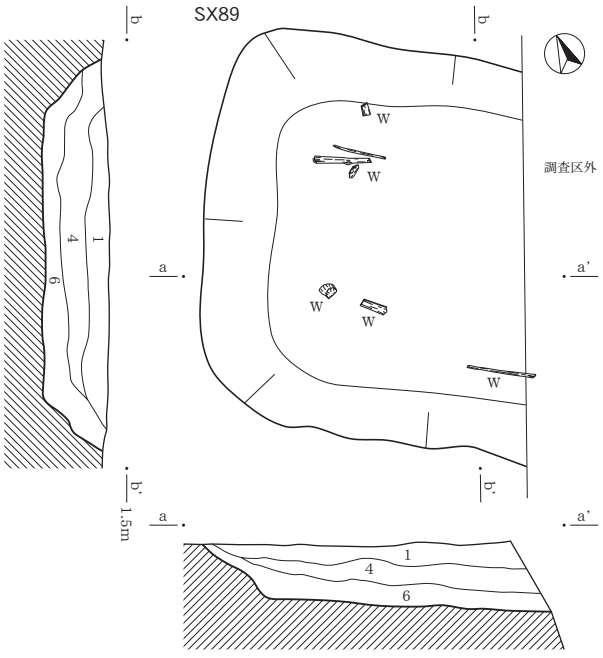


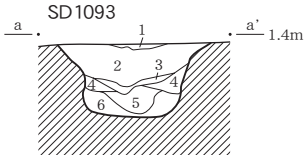


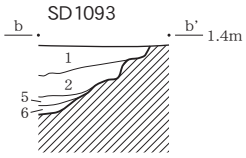
SD835
1. 10YR4/1 褐灰色粘質土、Ⅱb層土を塊状に含む、しまりやや弱、粘性やや弱。
2. 10YR5/1 褐灰色シルト質土、しまりやや弱、粘性やや弱。

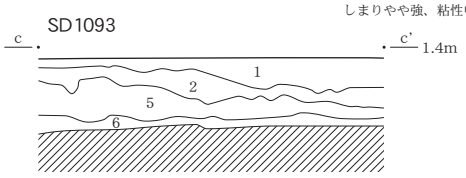
SD1170
1. 10YR4/1 褐灰色粘質土、Ⅲb層土を塊状に含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲb層土を塊状に含む、しまり中、粘性中。

SD1171
1. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲb層土を塊状に含む、しまり中、粘性中。

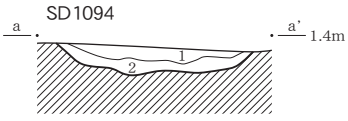


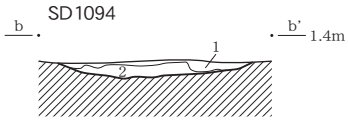






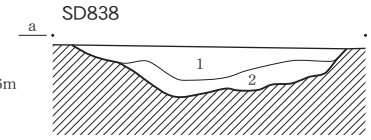
SD1093
1. 10YR3/2 黒褐色粘質土、Ⅲb層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR3/2 黒褐色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
3. 10YR4/1 褐灰色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
4. 10YR3/2 黒褐色粘質土、Ⅲb層土を少量含む、しまりやや強、粘性やや強。
5. 10YR3/1 黒褐色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
6. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲb層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。



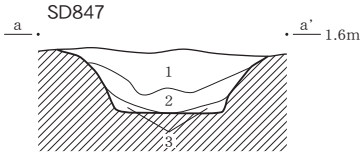


SD1094
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲb層土を少量含む、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲb層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

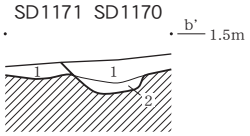
SD535
1. 10YR3/2 黒褐色シルト質土、Ⅲb層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲb層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲb層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

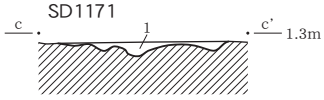


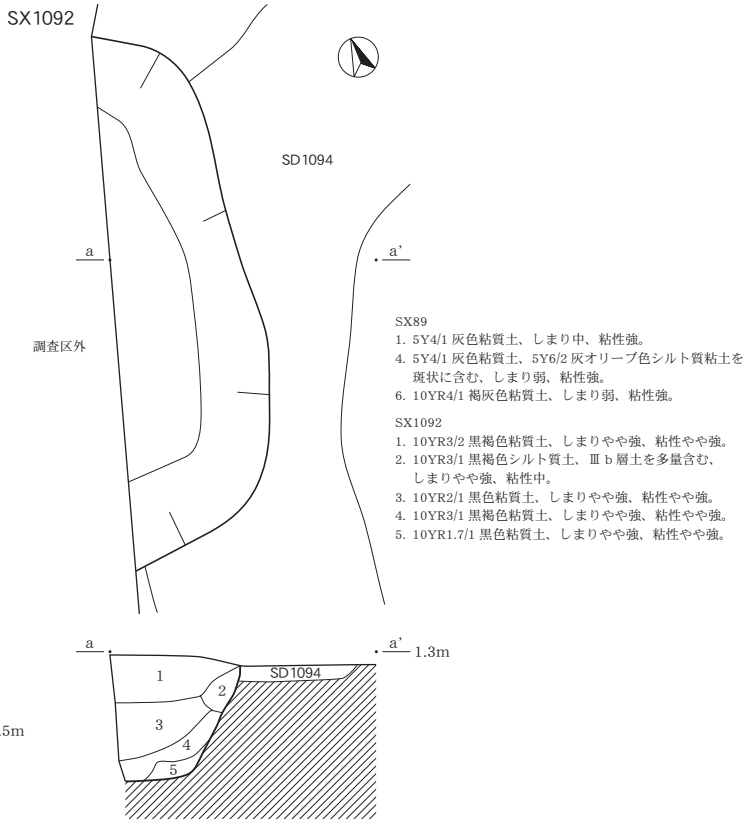
SD838
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲb層土を塊状に含む、φ 0.2cm ほどの炭化物を微量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR3/2 黒褐色粘質土、しまり弱、粘性強。



SD847
1. 10YR6/2 灰黄褐色粘質土、しまり中、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色粘質土、Ⅲb層土を塊状に含む、しまり中、粘性中。
3. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲb層土を塊状に含む、φ 0.5cm ほどの炭化物を微量含む、しまり中、粘性中。



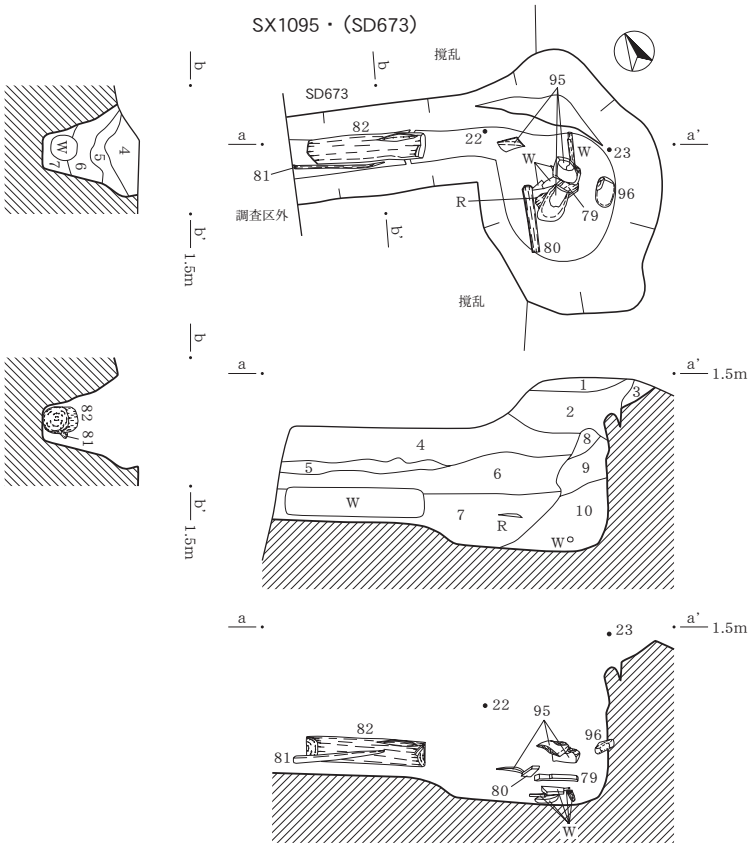




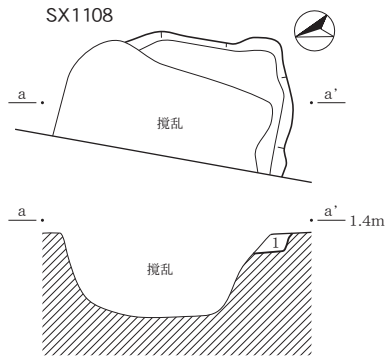
SX89
1. 5Y4/1 灰色粘質土、しまり中、粘性強。
4. 5Y4/1 灰色粘質土、5Y6/2 灰オリーブ色シルト質粘土を斑状に含む、しまり弱、粘性強。
6. 10YR4/1 褐灰色粘質土、しまり弱、粘性強。

SX1092
1. 10YR3/2 黒褐色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲb層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR2/1 黒色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
4. 10YR3/1 黒褐色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
5. 10YR1.7/1 黒色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。

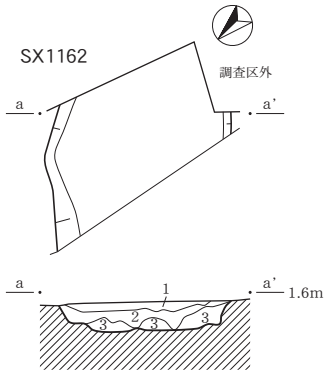
0　(1:40)　2m



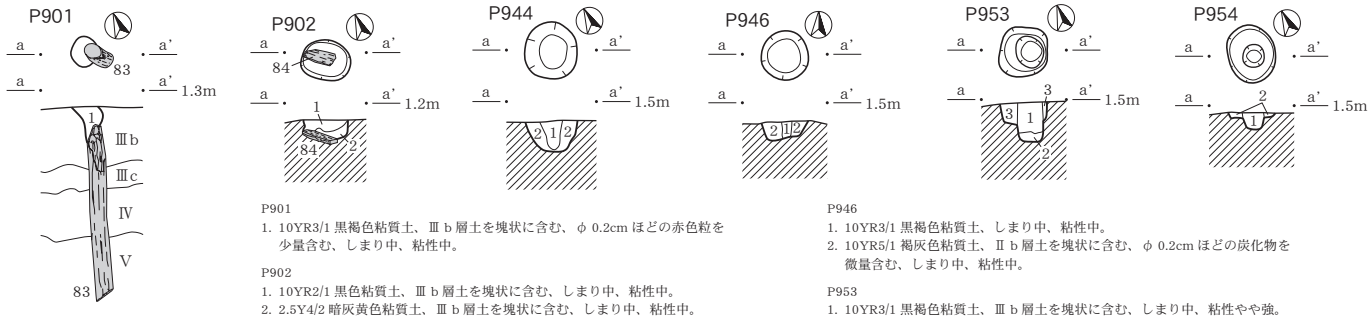
SX1095
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、φ 0.3cm ほどの炭化物を少量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR3/2 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。
4. 10YR2/1 黒色粘質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性やや強。
5. 10YR1.7/1 黒色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
6. 10YR2/1 黒色粘質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性やや強。
7. 10YR2/1 黒色粘質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性やや強。
8. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
9. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
10. 10YR2/1 黒色粘質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性やや強。



SX1108
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。



SX1162
1. 10YR3/2 黒褐色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR2/1 黒色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
3. 10YR4/1 褐灰色粘質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。



P901
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に含む、φ 0.2cm ほどの赤色粒を少量含む、しまり中、粘性中。

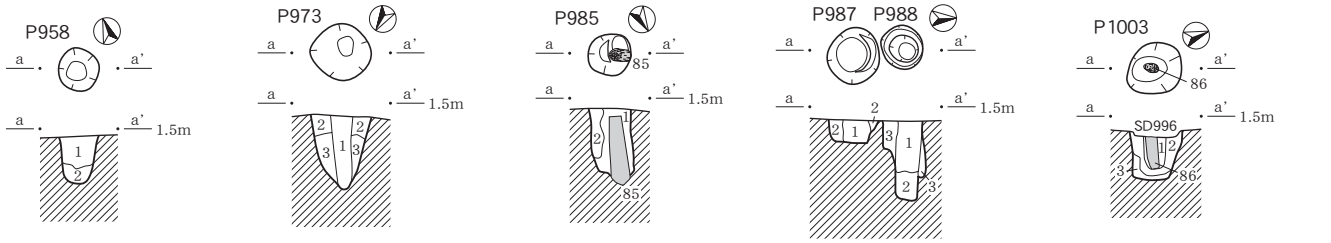
P902
1. 10YR2/1 黒色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に含む、しまり中、粘性中。
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に含む、しまり中、粘性中。

P944
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、φ 0.5cm ほどの赤色粒を少量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に含む、しまり中、粘性中。

P946
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、しまり中、粘性中。
2. 10YR5/1 褐灰色粘質土、Ⅱｂ層土を塊状に含む、φ 0.2cm ほどの炭化物を微量含む、しまり中、粘性中。

P953
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に含む、しまり中、粘性やや強。
2. 10YR2/1 黒色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまり中、粘性中。
3. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまり中、粘性中。

P954
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。



P958
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、φ 0.5cm ほどの炭化物を少量含む、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性やや強。

P973
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

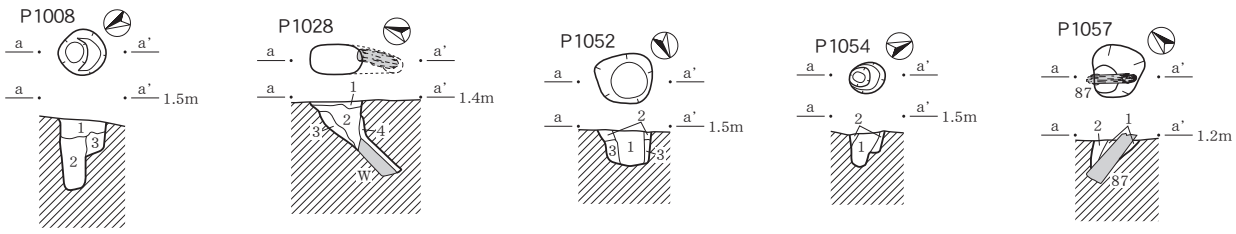
P985
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR3/2 黒褐色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。

P987
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR3/2 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性中。

P988
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR2/1 黒色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性やや強。
3. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

P1003
1. 10YR2/1 黒色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR5/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

0　(1:40)　2m



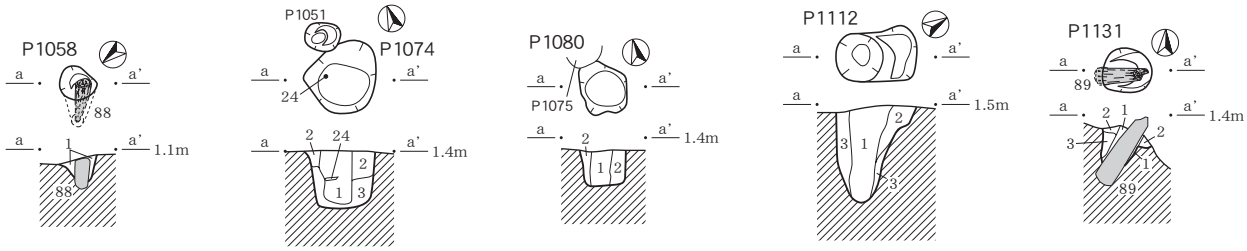
P1008
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR2/1 黒色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性やや強。
3. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

P1028
1. 10YR2/1 黒色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。
4. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。

P1052
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR5/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

P1054
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。

P1057
1. 10YR2/1 黒色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に多量含む、しまりやや強、粘性中。



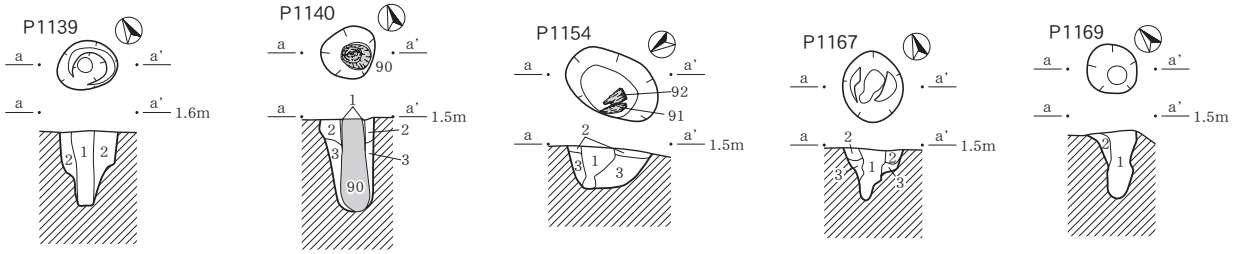
P1058
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を塊状に少量含む、しまりやや強、粘性中。

P1074
1. 10YR2/1 黒色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性やや強。
3. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

P1080
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

P1112
1. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を少量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

P1131
1. 10YR2/1 黒色粘質土、しまりやや強、粘性やや強。
2. 10YR3/1 黒褐色粘質土、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性やや強。



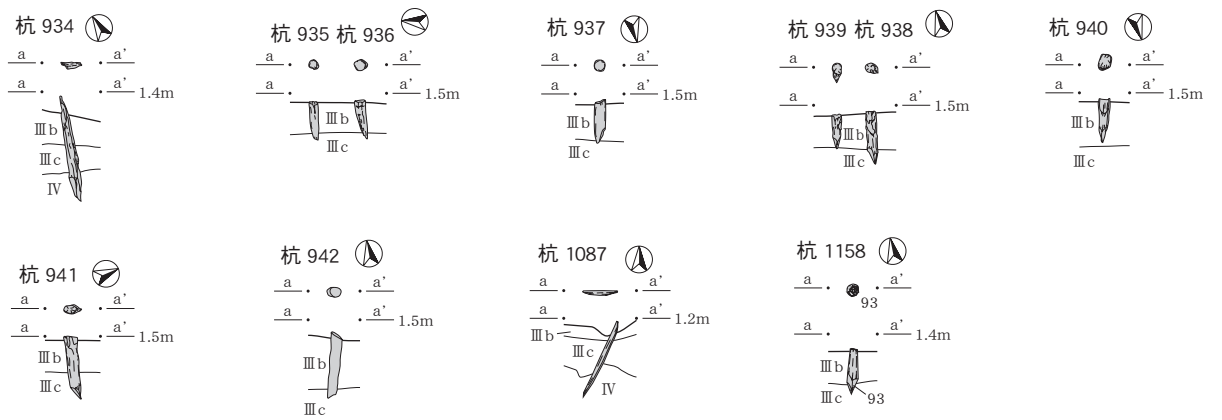
P1139
1. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、φ 0.5cm ほどの炭化物を少量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

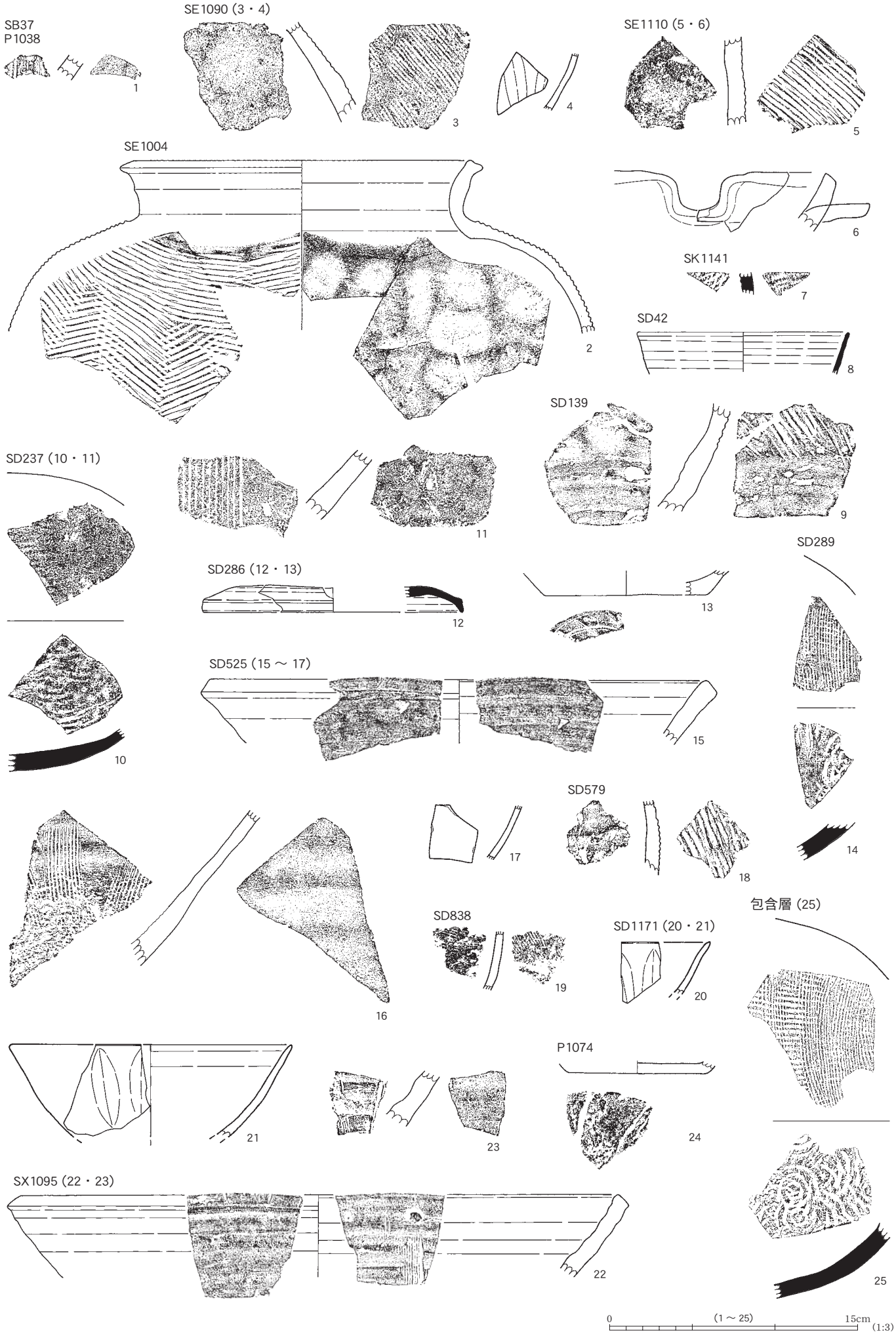
P1140
1. 10YR2/1 黒色粘質土、しまり中、粘性中。
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

P1154
1. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、φ 0.5cm ほどの炭化物を少量含む、しまりやや強、粘性中。
2. 10YR3/2 黒褐色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。
3. 10YR4/1 褐灰色シルト質土、Ⅲｂ層土を多量含む、しまりやや強、粘性中。

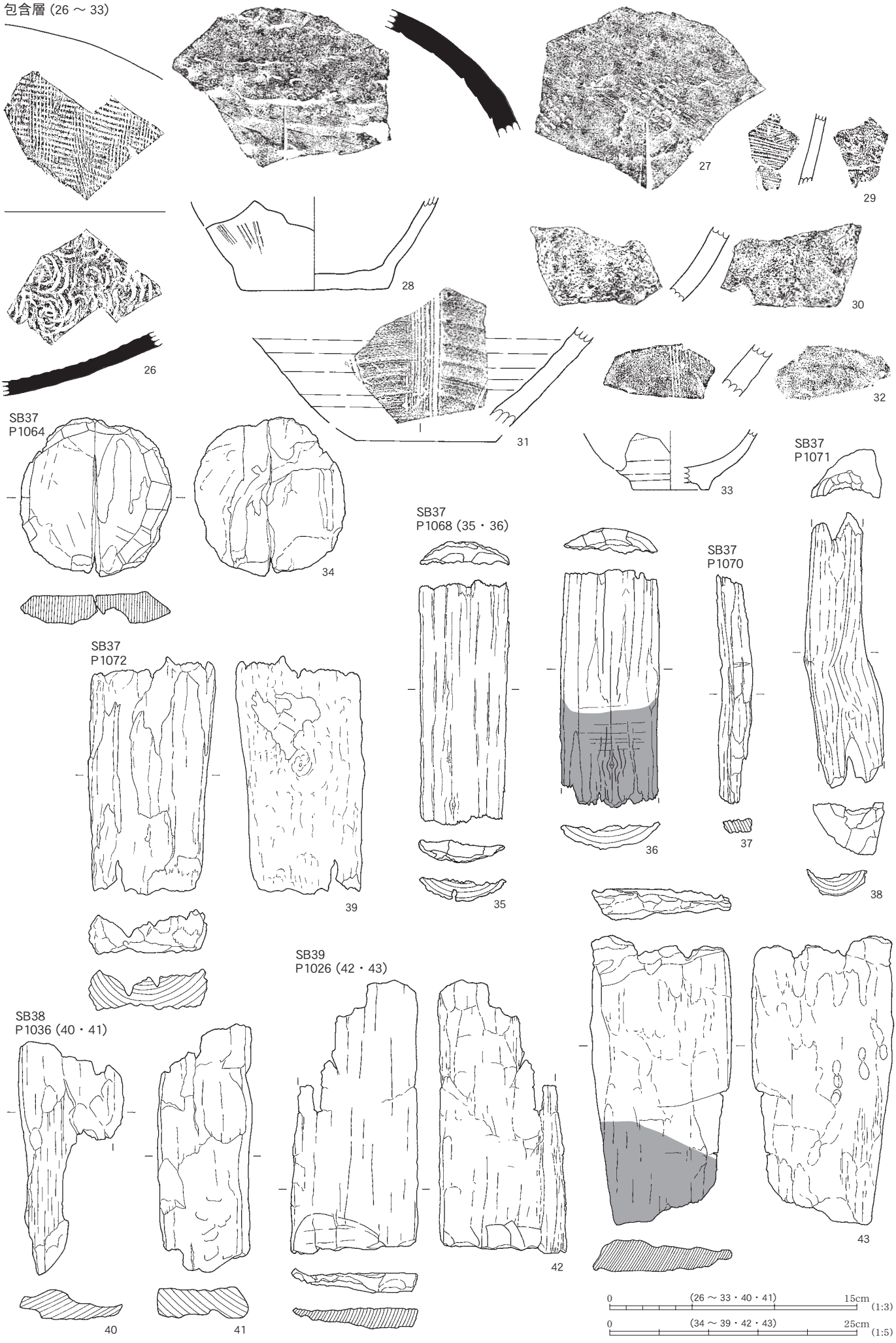
P1167
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に含む、φ 0.2cm ほどの赤色粒を少量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR4/1 褐灰色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に含む、しまり中、粘性中。
3. 10YR6/1 褐灰色粘質土、しまり中、粘性中。

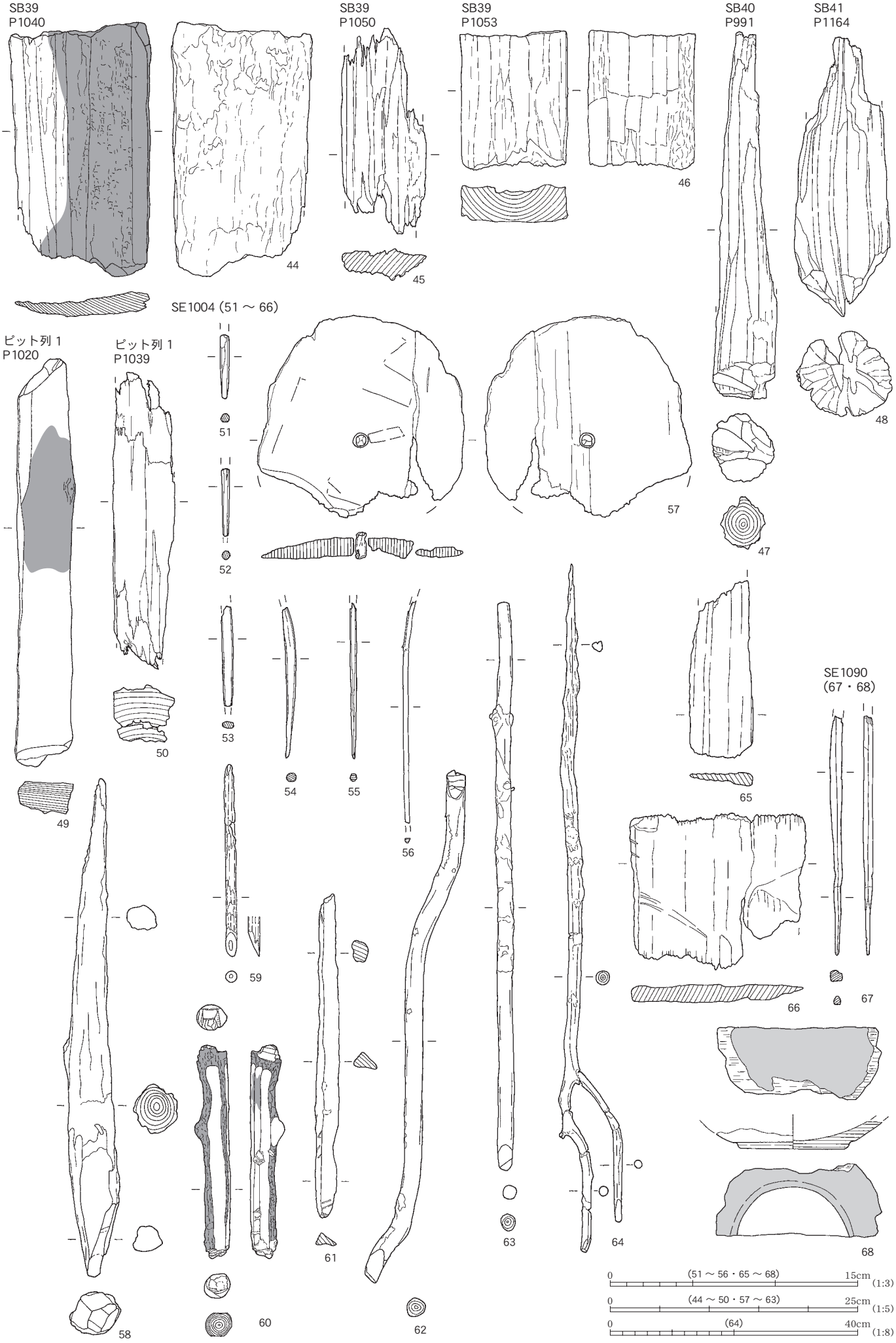
P1169
1. 10YR4/1 褐灰色粘質土、Ⅲｂ層土を塊状に含む、φ 0.5cm ほどの赤色粒を少量含む、しまり中、粘性中。
2. 10YR5/1 褐灰色粘質土、Ⅱｂ層土を塊状に含む、φ 0.5cm ほどの赤色粒を微量含む、しまり中、粘性中。

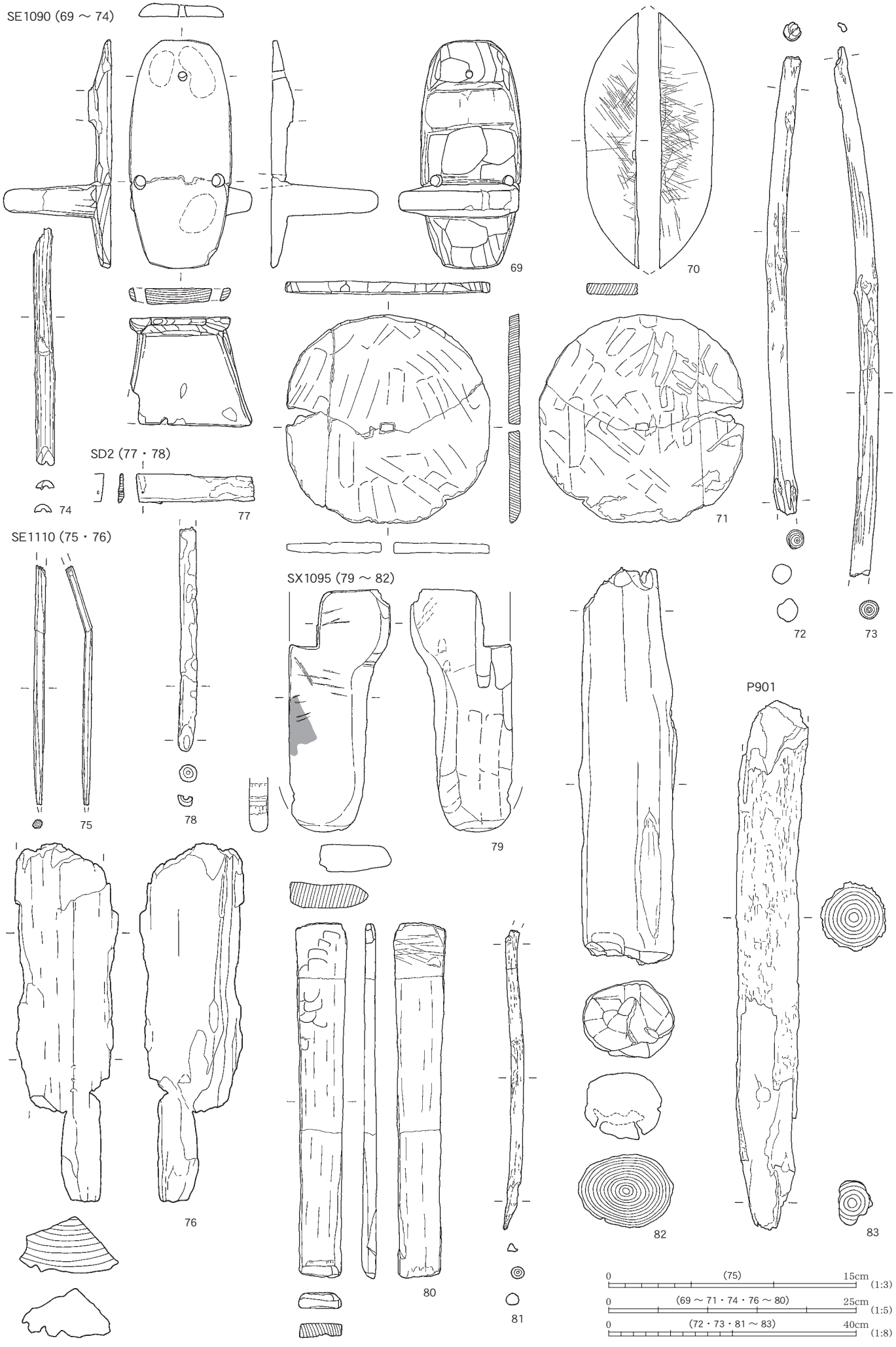


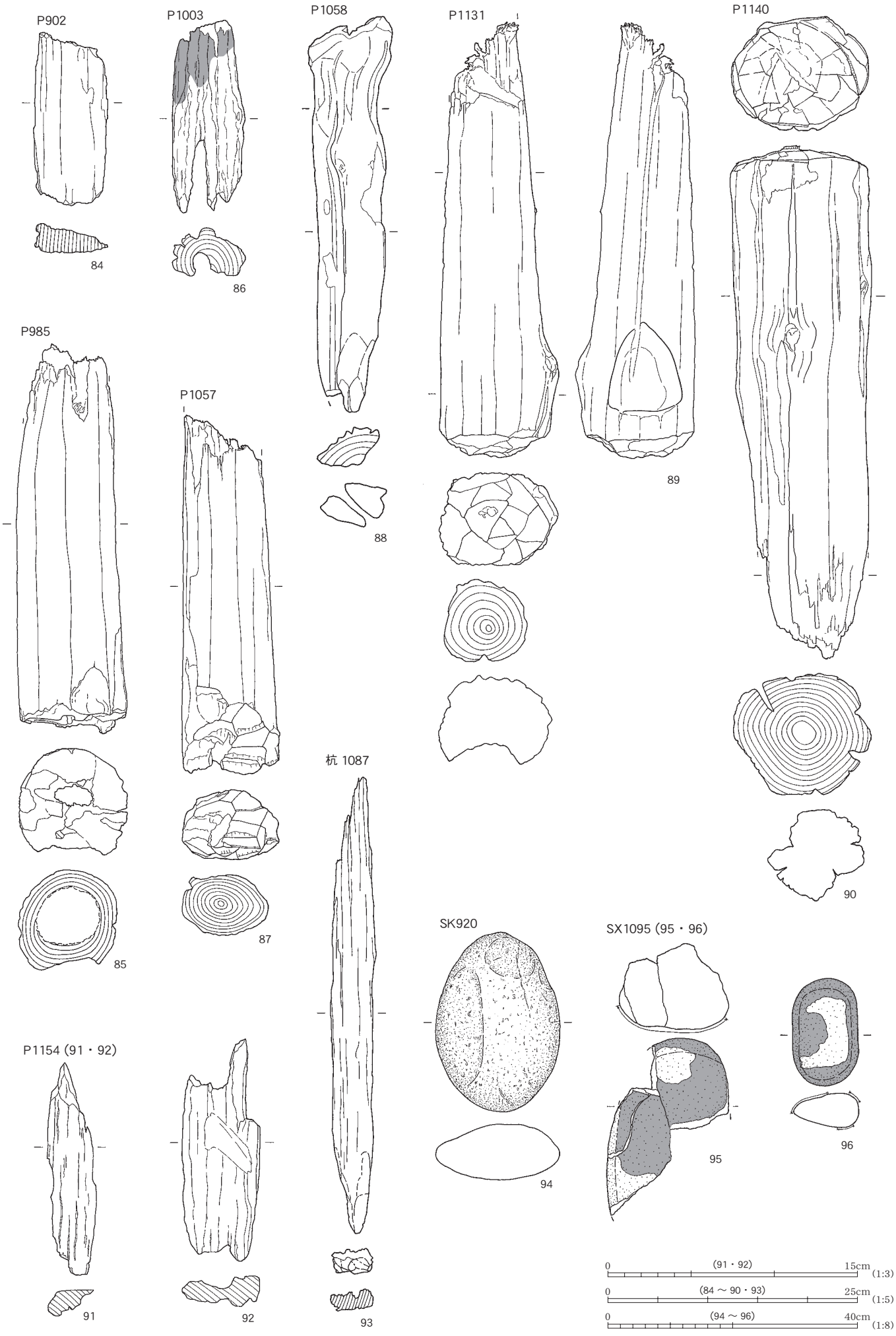

SB37
P1038
1
SE1090（3・4）
3
4
SE1110（5・6）
5
SE1004
2
6
SK1141
7
SD42
8
SD139
9
SD237（10・11）
11
10
SD286（12・13）
12
13
SD289
SD525（15 ～ 17）
15
14
SD579
17
18
16
SD838
19
SD1171（20・21）
20
包含層（25）
21
23
P1074
24
SX1095（22・23）
22
25
0
（1 ～ 25）
15cm
(1:3)

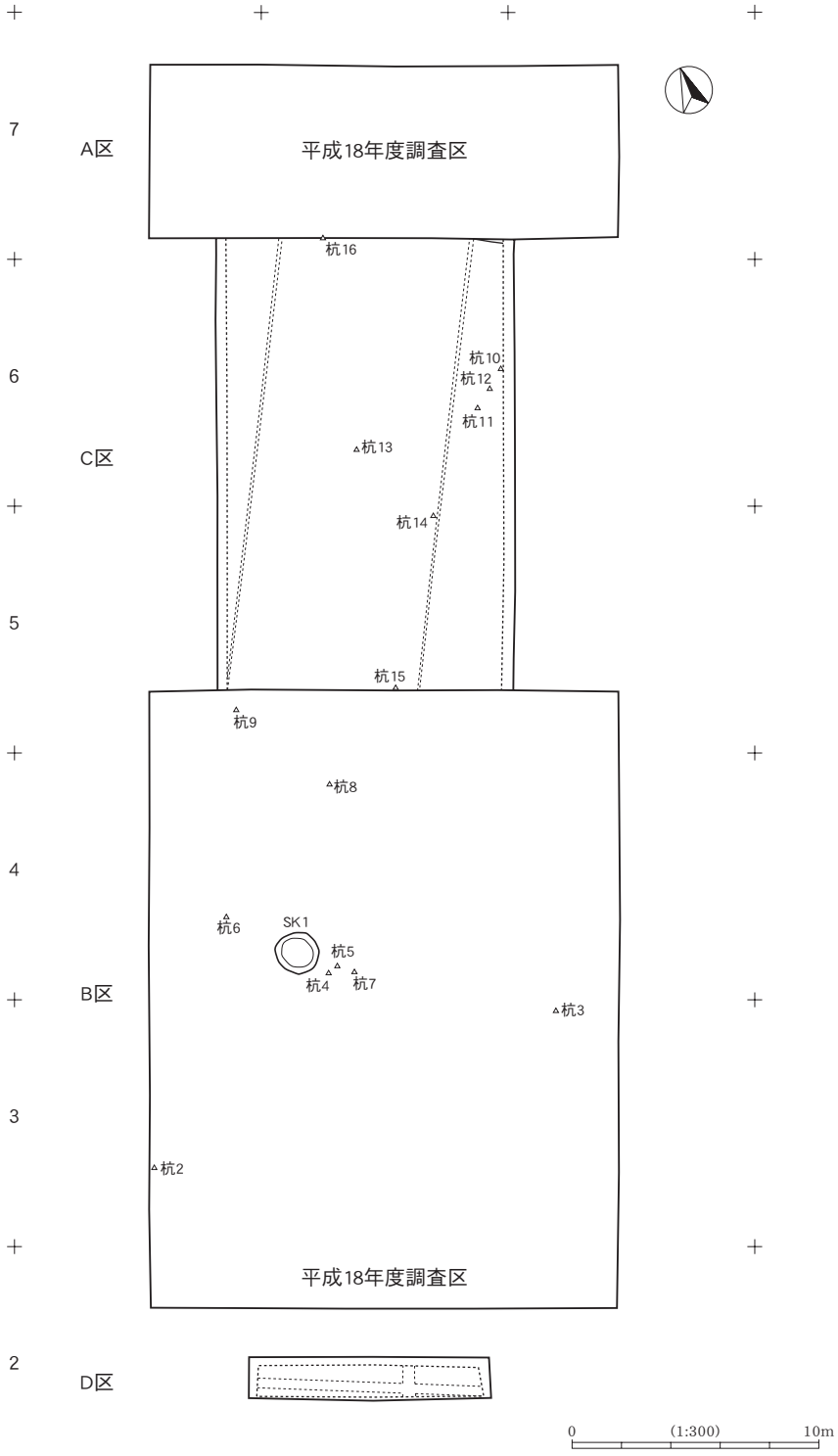
包含層 (26 ～ 33)

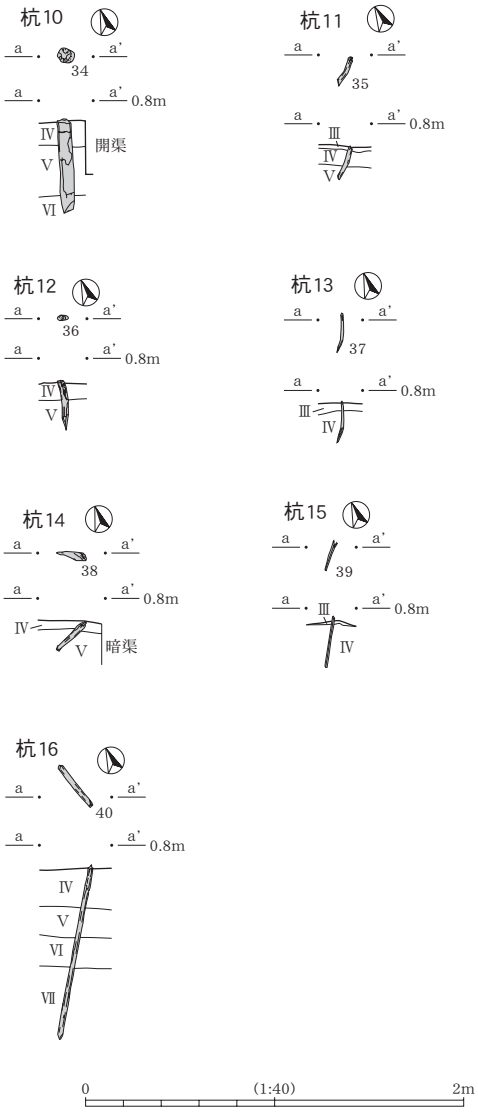

26
27
28
29
30
31
32
33
SB37
P1064
34
SB37
P1068 (35・36)
35
36
SB37
P1070
37
SB37
P1071
38
SB37
P1072
39
SB38
P1036 (40・41)
40
41
SB39
P1026 (42・43)
42
43
0 (26 ～ 33・40・41) 15cm (1:3)
0 (34 ～ 39・42・43) 25cm (1:5)


SB39
P1040
SB39
P1050
SB39
P1053
SB40
P991
SB41
P1164
SE1004（51 ～ 66）
ピット列 1
P1020
ピット列 1
P1039
SE1090
（67・68）
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
0 (51 ～ 56・65 ～ 68) 15cm (1:3)
0 (44 ～ 50・57 ～ 63) 25cm (1:5)
0 (64) 40cm (1:8)

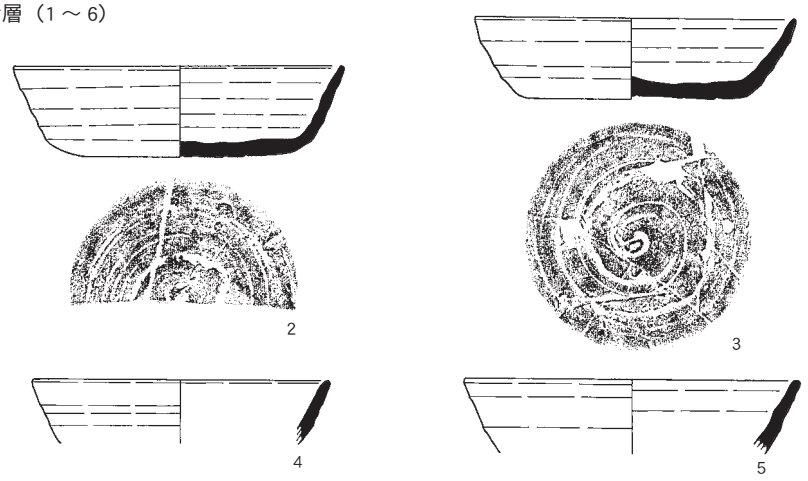

SE1090 (69 ～ 74)
69
70
71
72
73
74
SD2 (77・78)
77
SE1110 (75・76)
75
78
SX1095 (79 ～ 82)
79
P901
76
80
81
82
83
0 (75) 15cm (1:3)
0 (69 ～ 71・74・76 ～ 80) 25cm (1:5)
0 (72・73・81 ～ 83) 40cm (1:8)

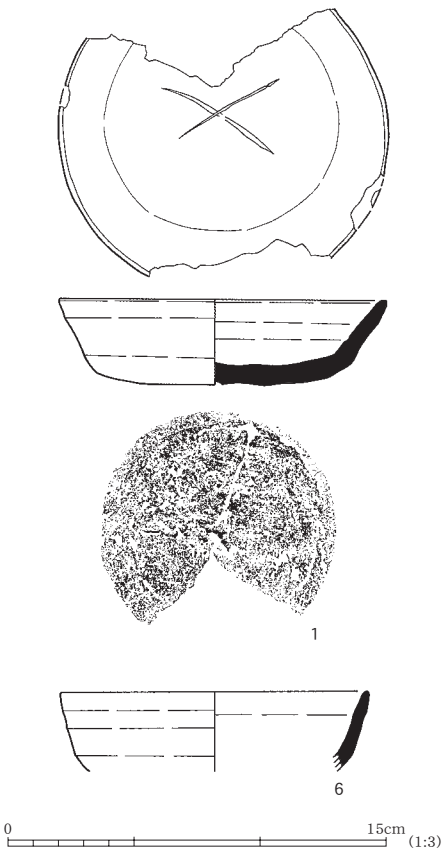

P902
84
P1003
86
P1058
88
P1131
89
P1140
90
P985
85
P1057
87
杭 1087
93
SK920
94
SX1095 (95・96)
95
96
P1154 (91・92)
91
92
0 (91・92) 15cm (1:3)
0 (84 ～ 90・93) 25cm (1:5)
0 (94 ～ 96) 40cm (1:8)

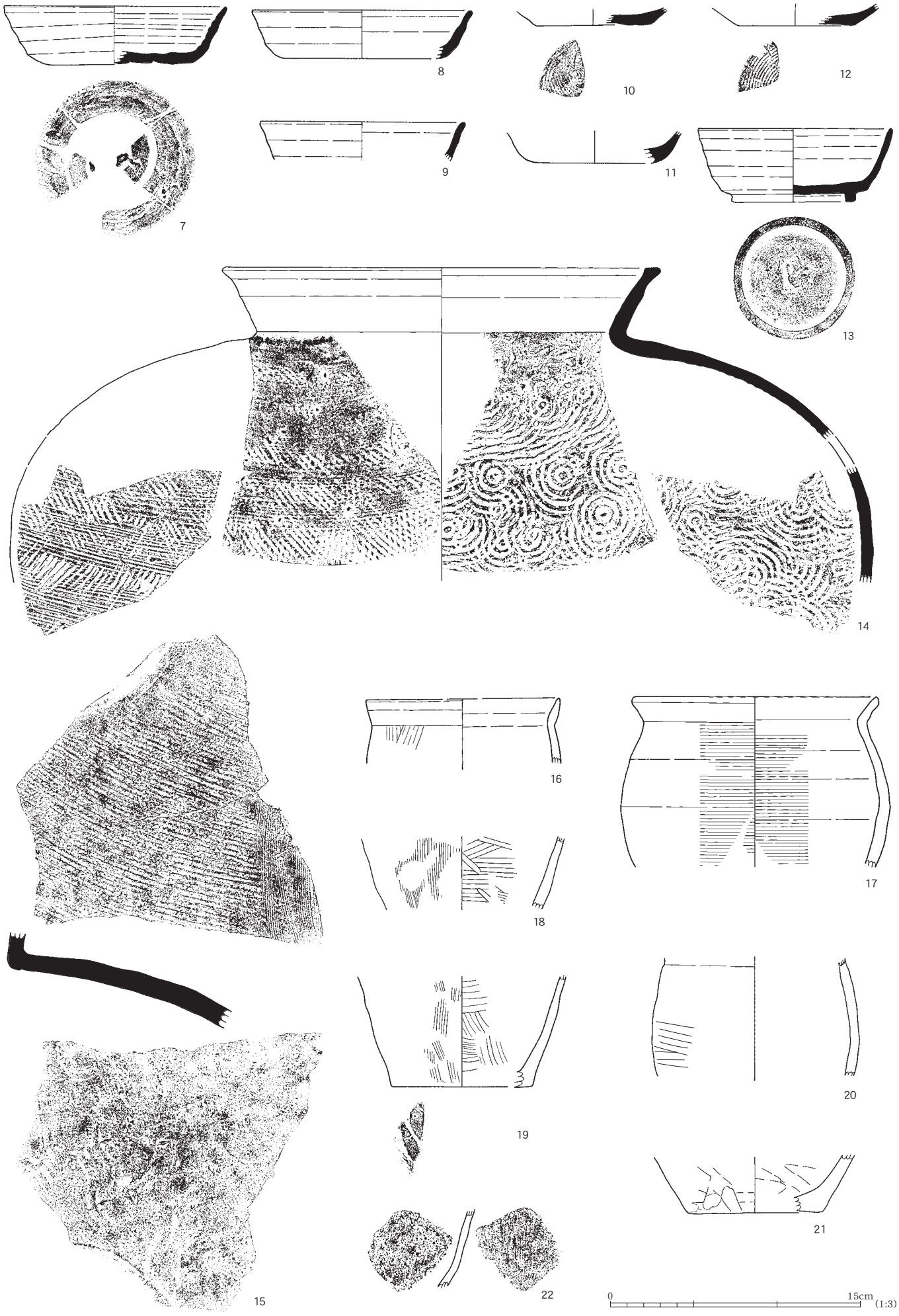

A区
B区
C区
D区
平成18年度調査区
平成18年度調査区
杭16
杭10
杭12
杭11
杭13
杭14
杭15
杭9
杭8
杭6
SK1
杭5
杭4
杭7
杭3
杭2
0
(1:300)
10m
C
D
E


杭10
34
開渠
杭11
35
杭12
36
杭13
37
杭14
38
暗渠
杭15
39
杭16
40
0.8m
0
(1:40)
2m

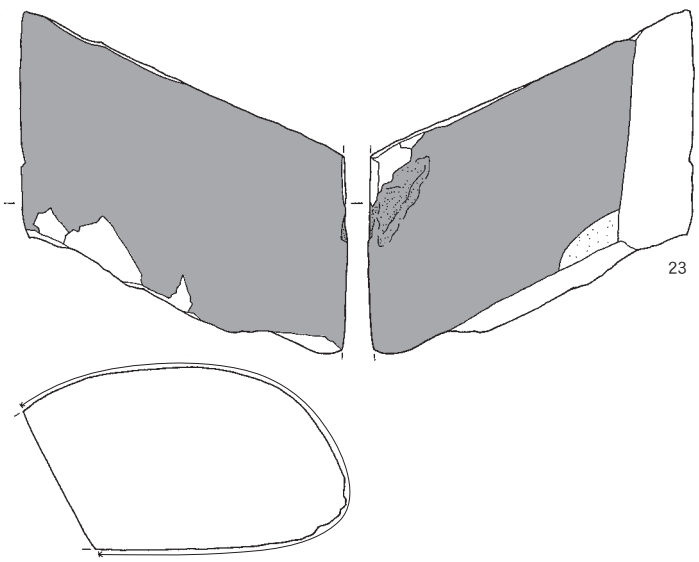
包含層（1 ～ 6）


2
3
4
5

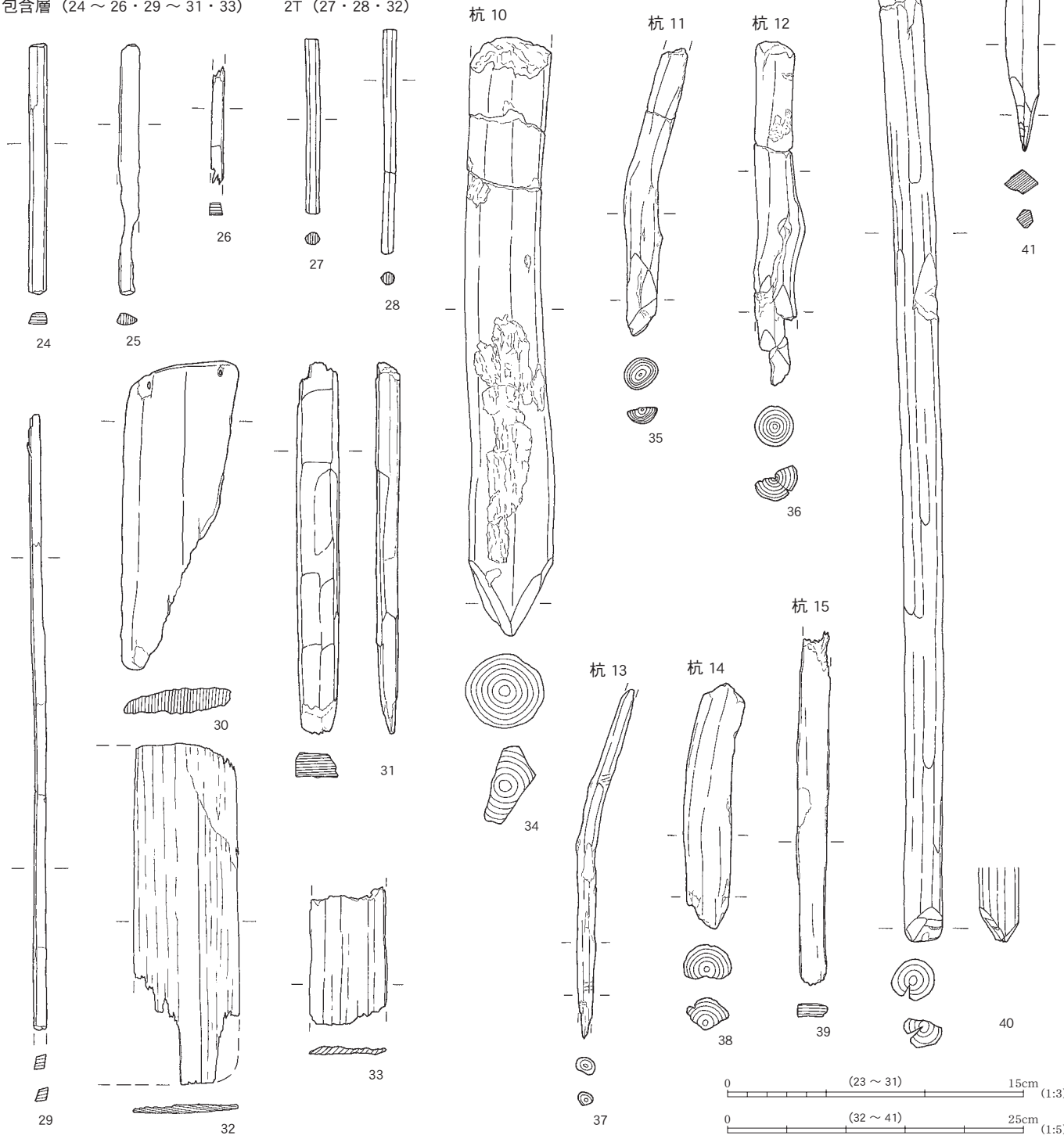

1
6
0
15cm
(1:3)


7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
0
15cm
(1:3)

包含層（23）



包含層（24 ～ 26・29 ～ 31・33）　2T（27・28・32）



調査区全景 1（縄文上位面・中世面）

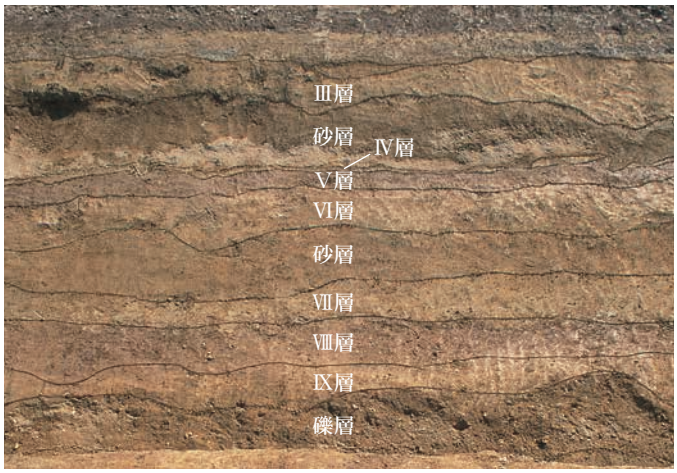
（合成写真　旧河川の北側と南側は撮影時期が異なる）

調査区全景 2（縄文下位面）

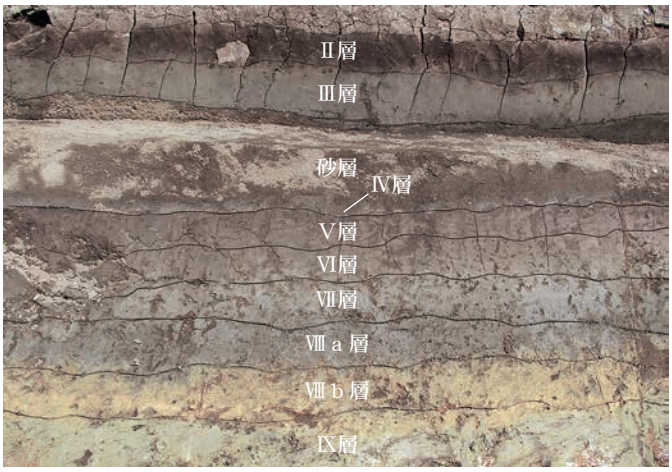
調査区全景（東から）

調査区全景（南から）

縄文時代調査区（東から）



調査区南壁（2D グリッド）セクション（北から）

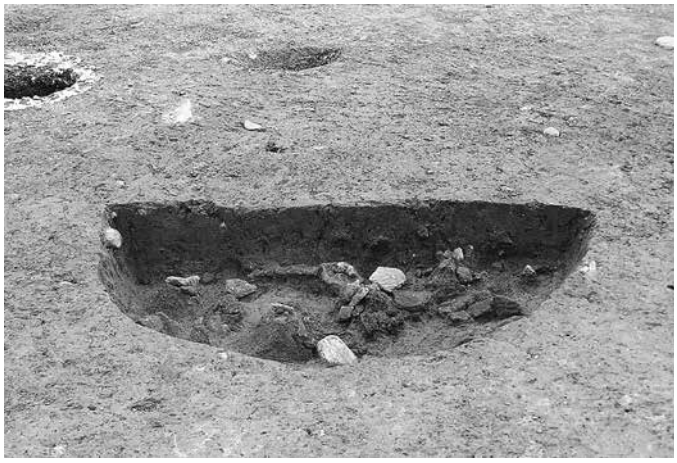


調査区北壁（9D グリッド）セクション（南から）

SK446 セクション（南から）

SK446 遺物出土状況（東から）

SK446 完掘（東から）

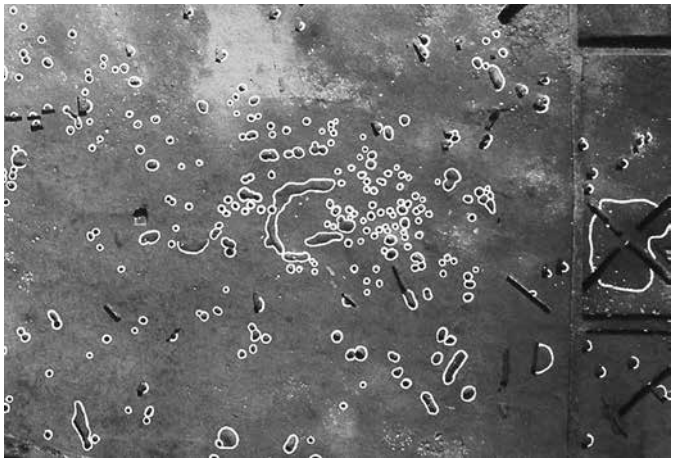


SK845 セクション（南から）

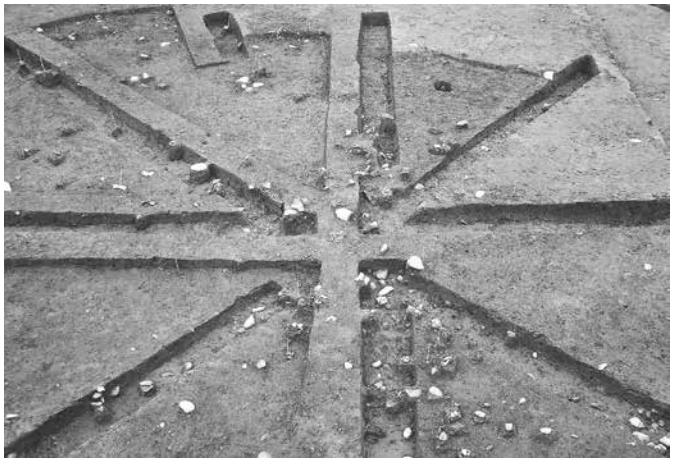
SK845 遺物出土状況（南から）

SK845 完掘（南から）

SX169 溝部分セクション（南から）

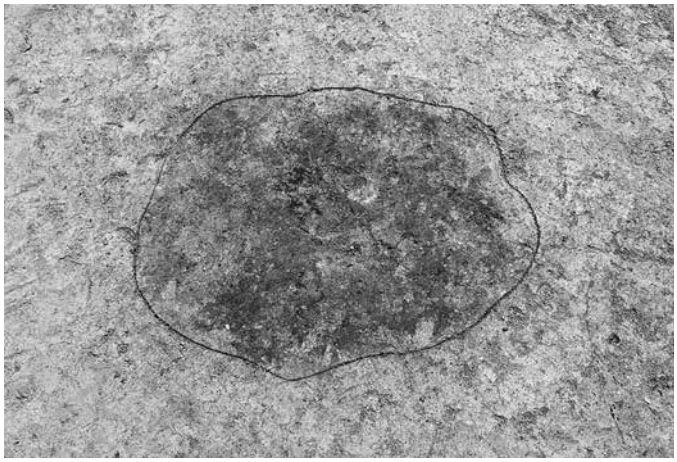


SX169 完掘（東から）

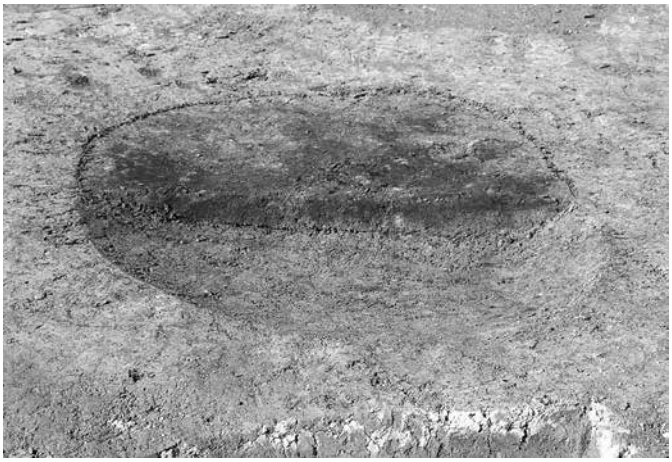


遺物集中 442 出土状況（北から）

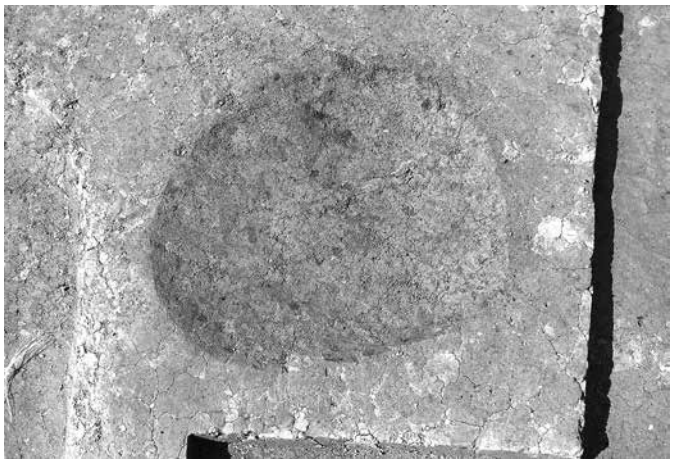
遺物集中 442 出土状況（北から）



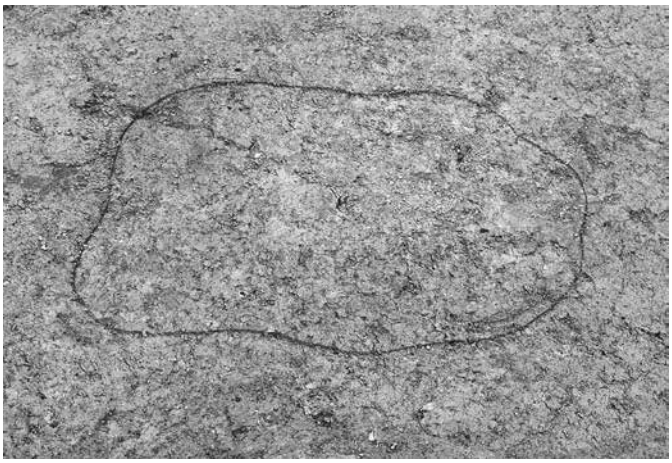
F167 検出状況（西から）



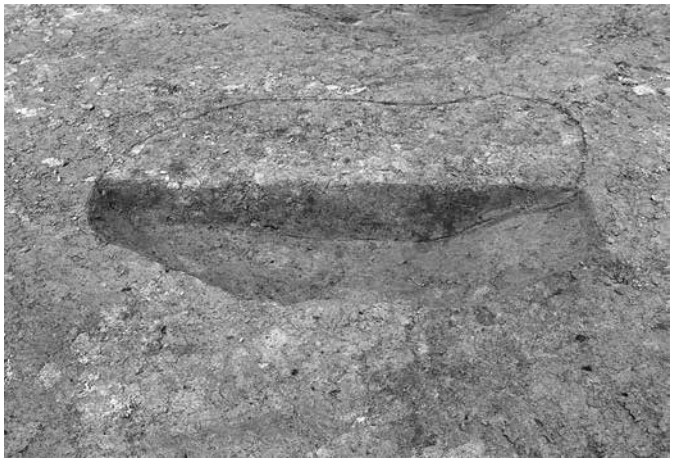
F167 セクション（南から）



F167 完掘（東から）

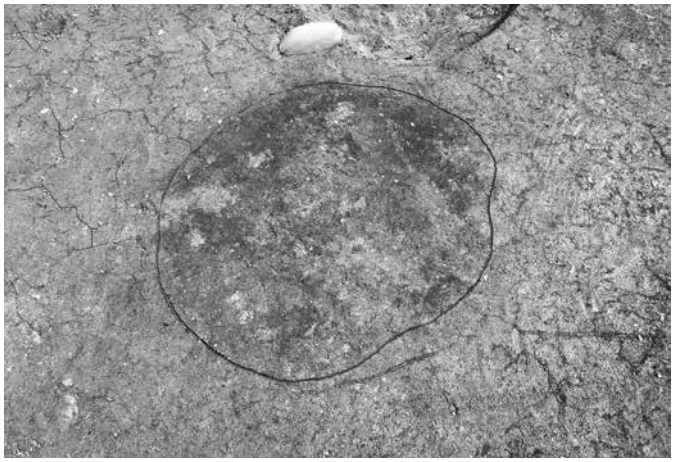


F196 検出状況（西から）

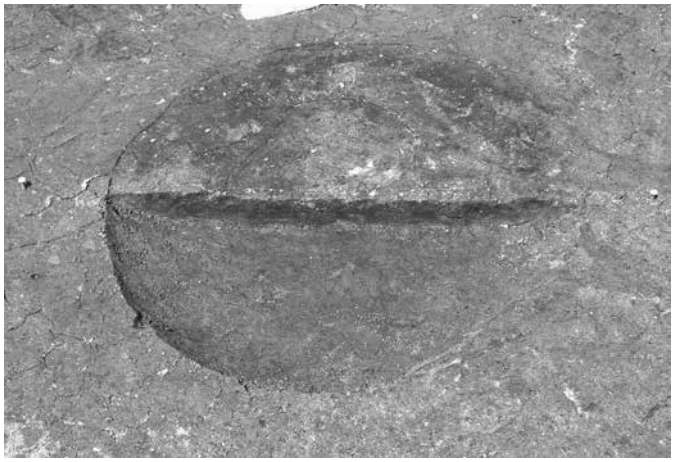


F196 セクション（東から）

F196 遺物出土状況（東から）

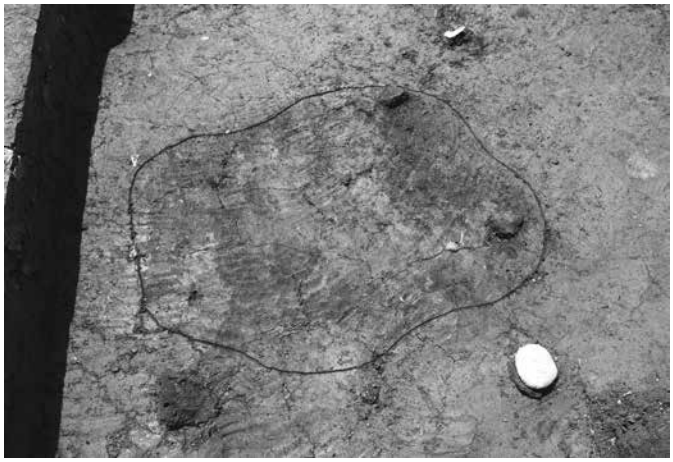


F165 検出状況（南から）



F165 セクション（南から）

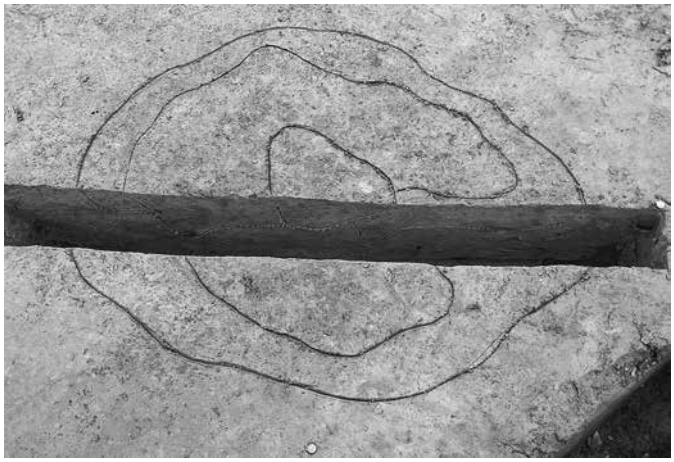
F165 完掘（南から）



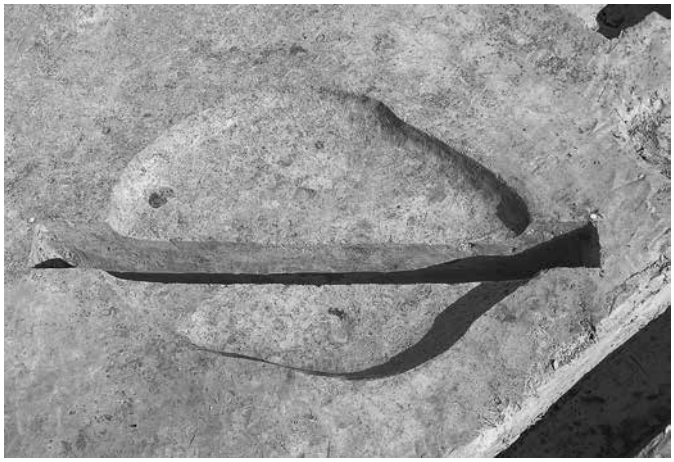
F168 検出状況（南から）

F168 セクション（南から）

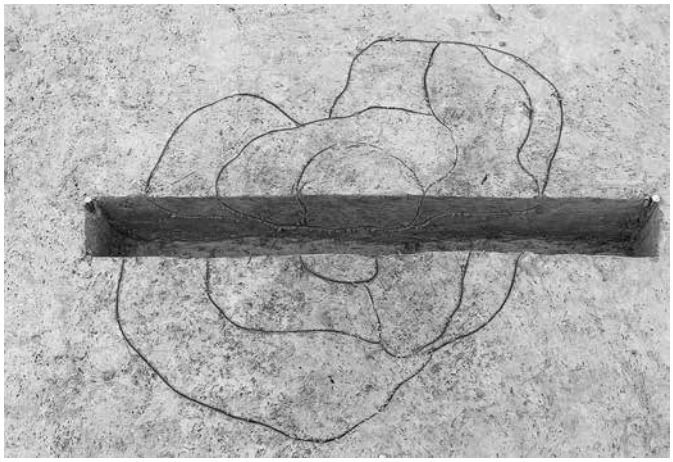
F168 完掘（南から）



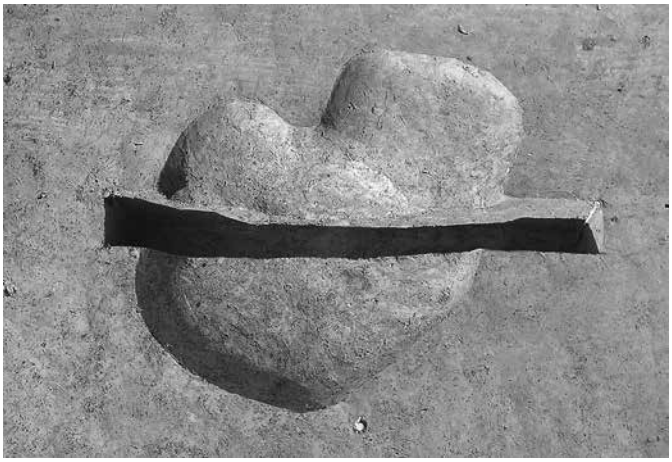
F942 セクション（西から）



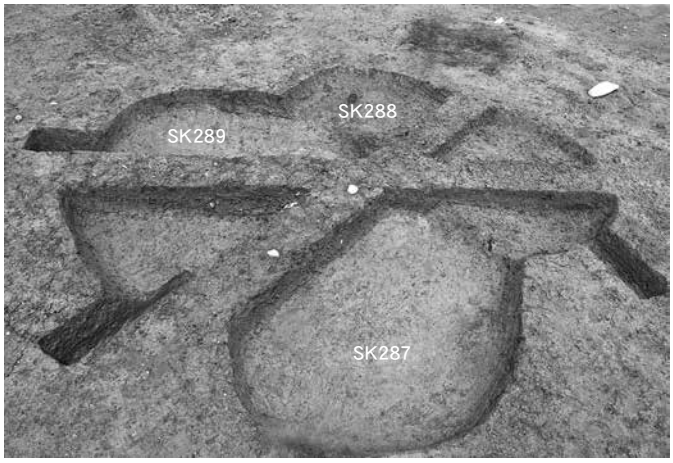
F942 完掘（西から）



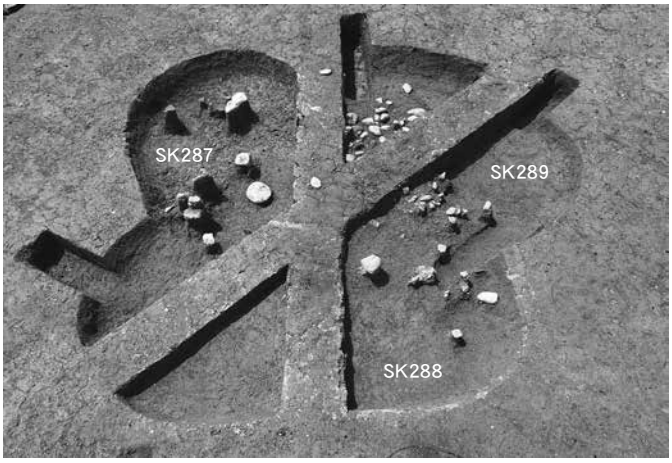
F947 セクション（南から）



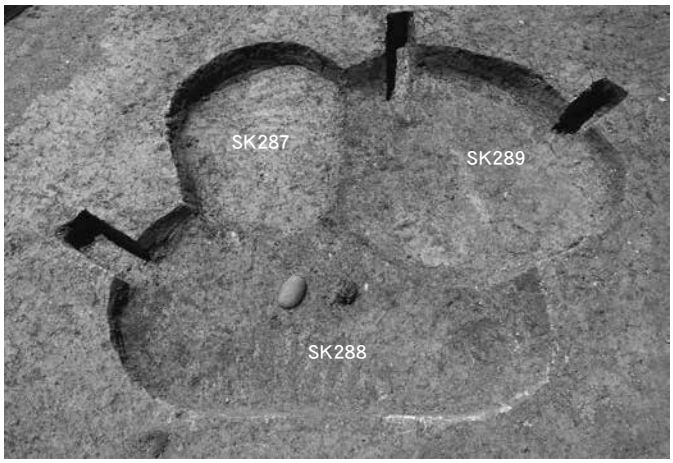
F947 完掘（南から）



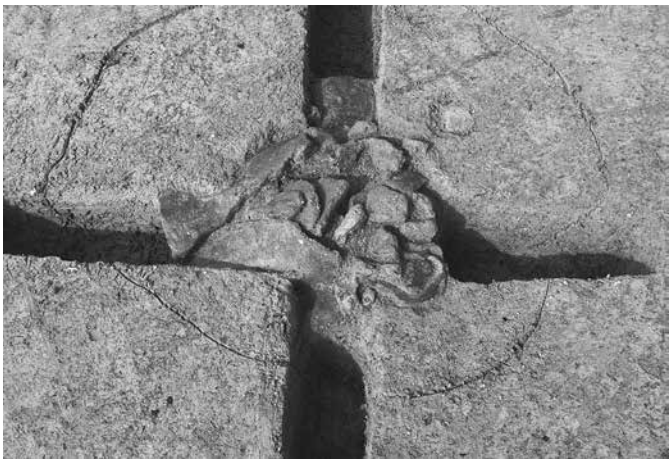
SK287 ～ 289 セクション（南から）



SK287 ～ 289 遺物出土状況（北から）



SK287 ～ 289 完掘（北から）



SK400 セクション（南から）

SK400 遺物出土状況（東から）

SK400 完掘（北から）

SK831 セクション（南から）

SK831 遺物出土状況（西から）

SK831 完掘（東から）

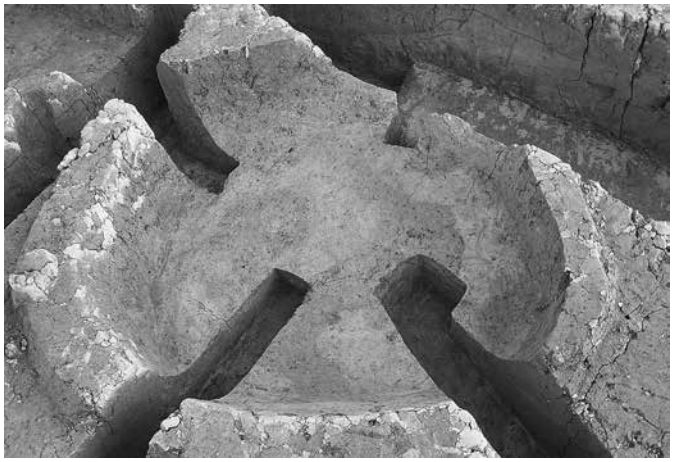
SK371 セクション（西から）

SK371 遺物出土状況（北から）

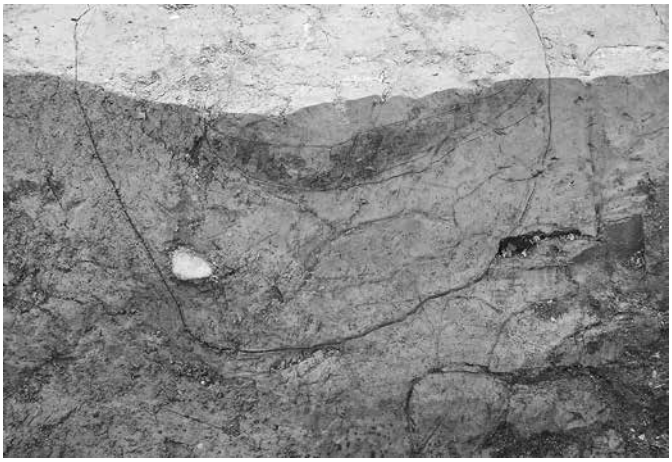
SK371 完掘（北から）

SK372 セクション（北から）

SK372 遺物出土状況（西から）



SK372 完掘（西から）

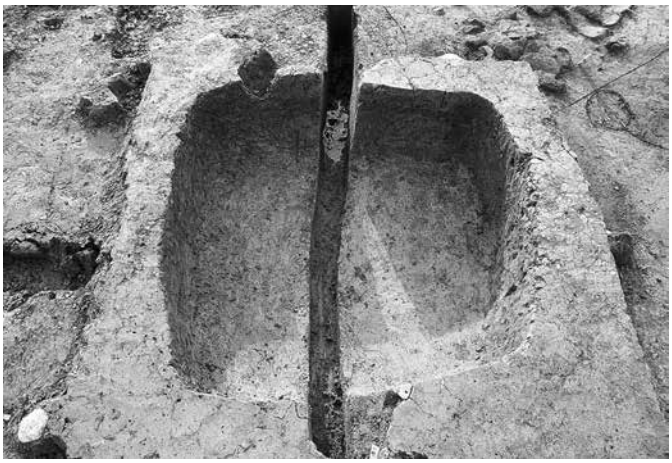


SK404 セクション（北から）

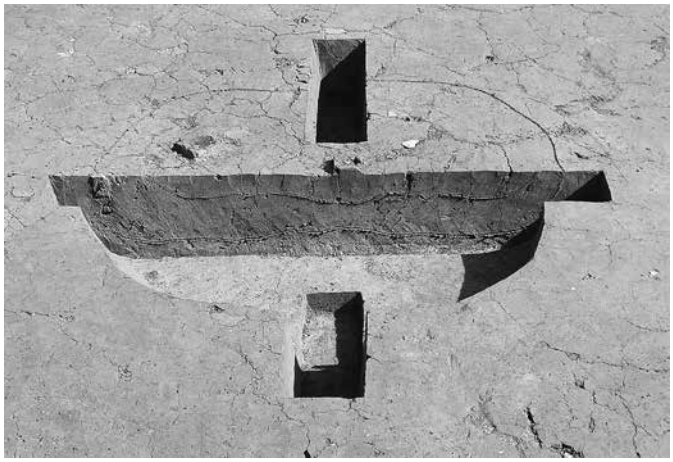
SK404 遺物出土状況（東から）

SK849 セクション（北から）

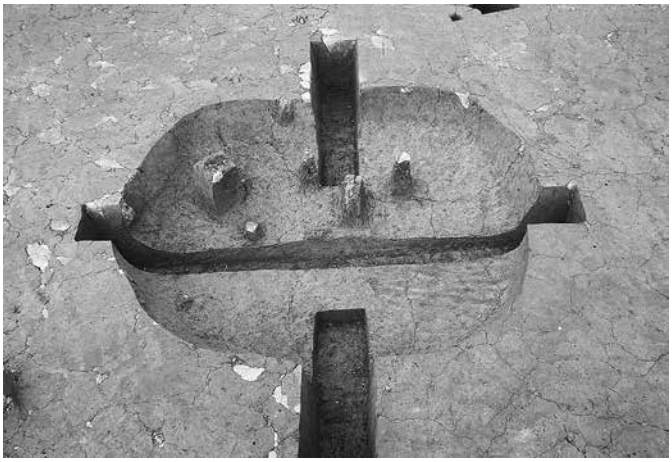
SK849 遺物出土状況（東から）



SK849 完掘（東から）



SK850 セクション（南から）



SK850 遺物出土状況（南から）

SK852 セクション（南から）

SK852 遺物出土状況（東から）

SK861 セクション（東から）

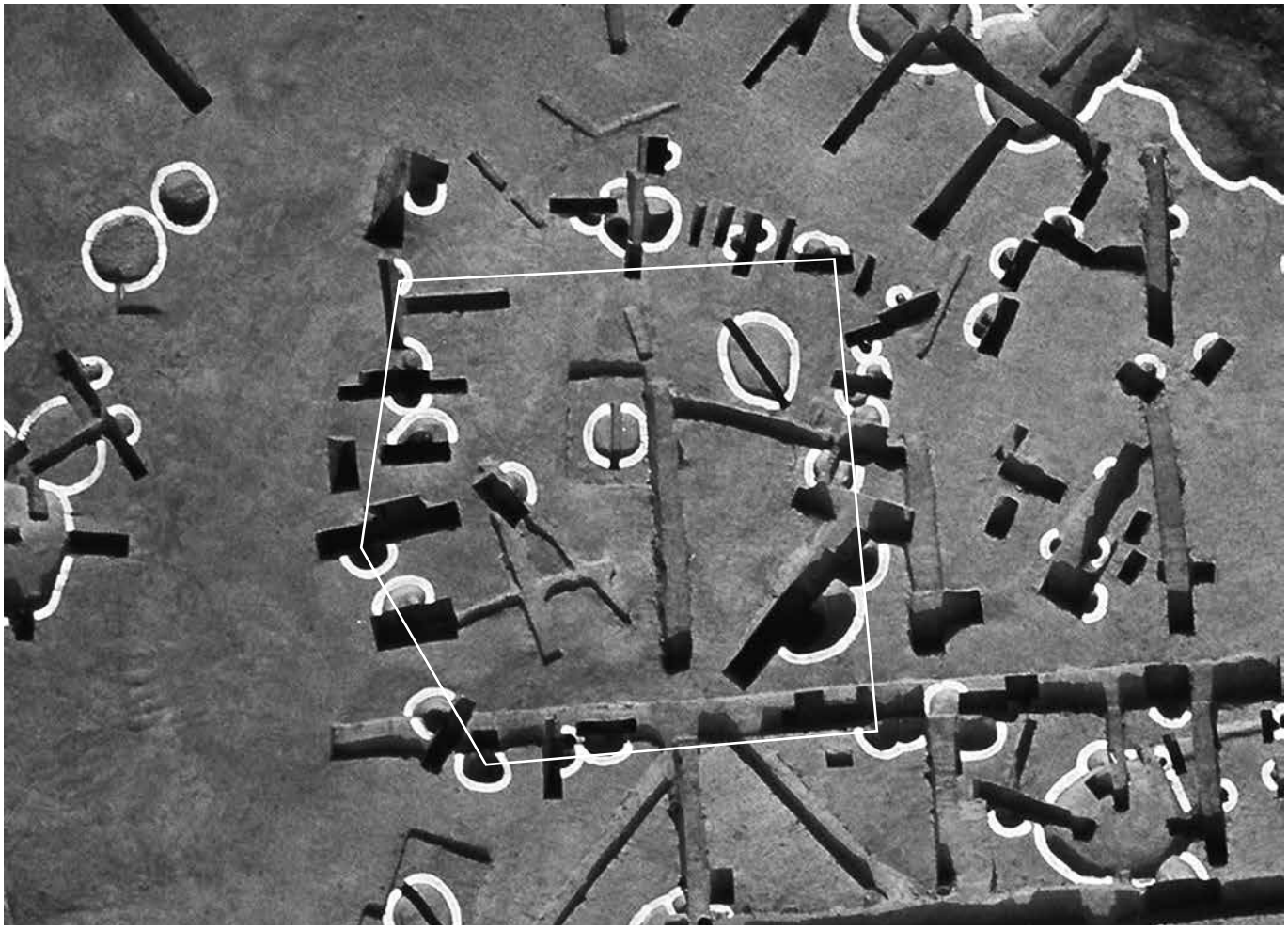
SK861 遺物出土状況（北から）

SK873 セクション（南から）

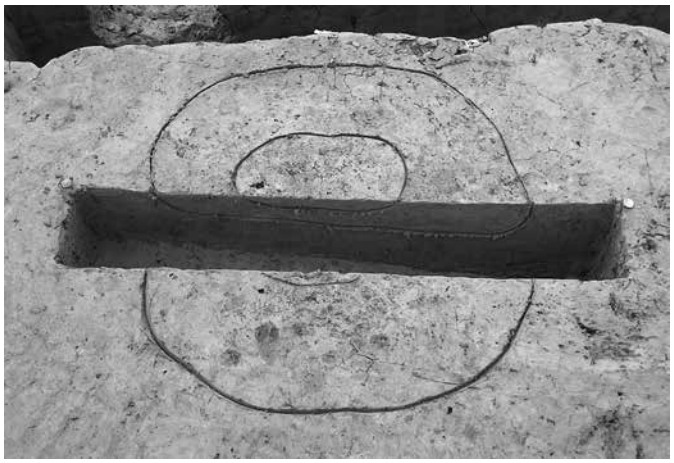
SK873 完掘（西から）

SK875 遺物出土状況（西から）

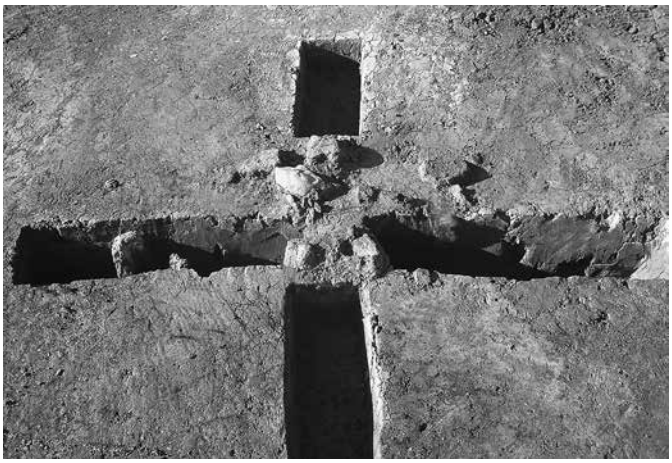
SK875 完掘（西から）



SX347 完掘



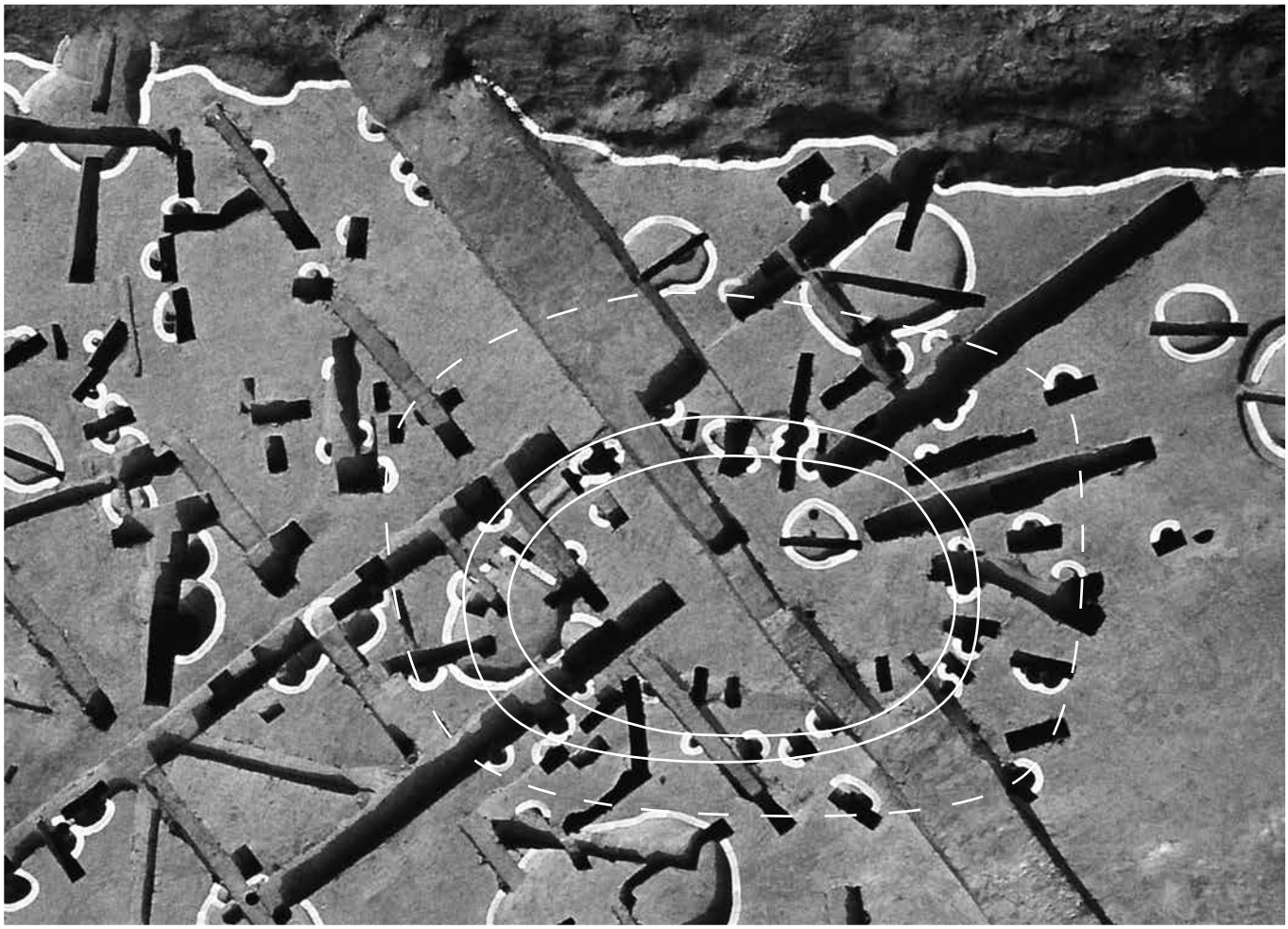
F945 セクション（西から）



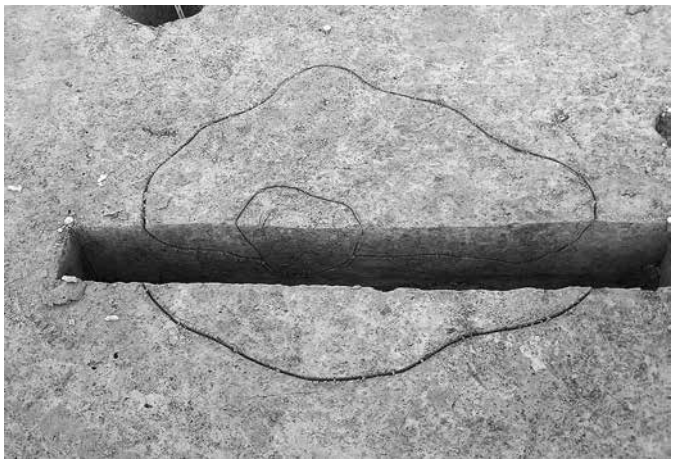
遺物集中 770 遺物出土状況（南から）

遺物集中 771 遺物出土状況（南から）

遺物集中 851 遺物出土状況（南から）

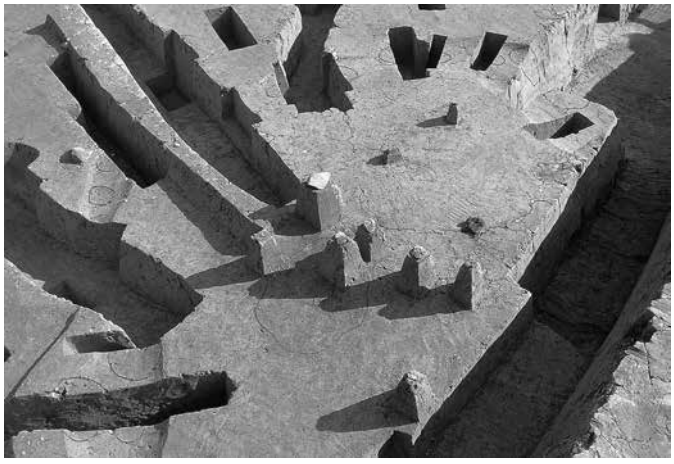


SX857 完掘

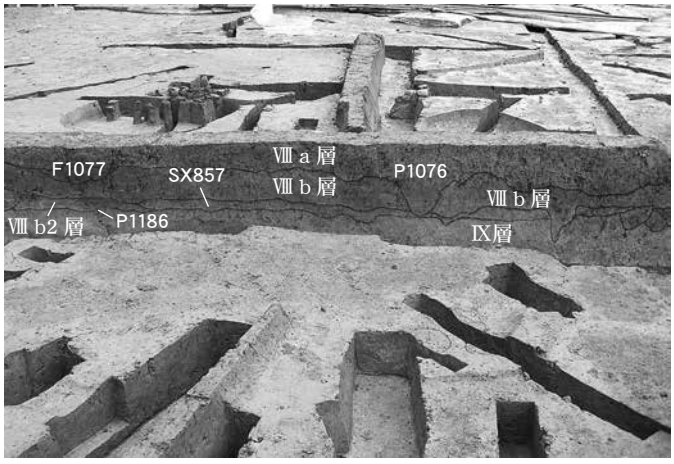


F1468 セクション（南から）

F1468 完掘（西から）



SX857 遺物出土状況（北から）



SX857 南北セクション（東から）

旧河川 a セクション南端（東から）

旧河川 a セクション中央（東から）

旧河川 a セクション北端（東から）

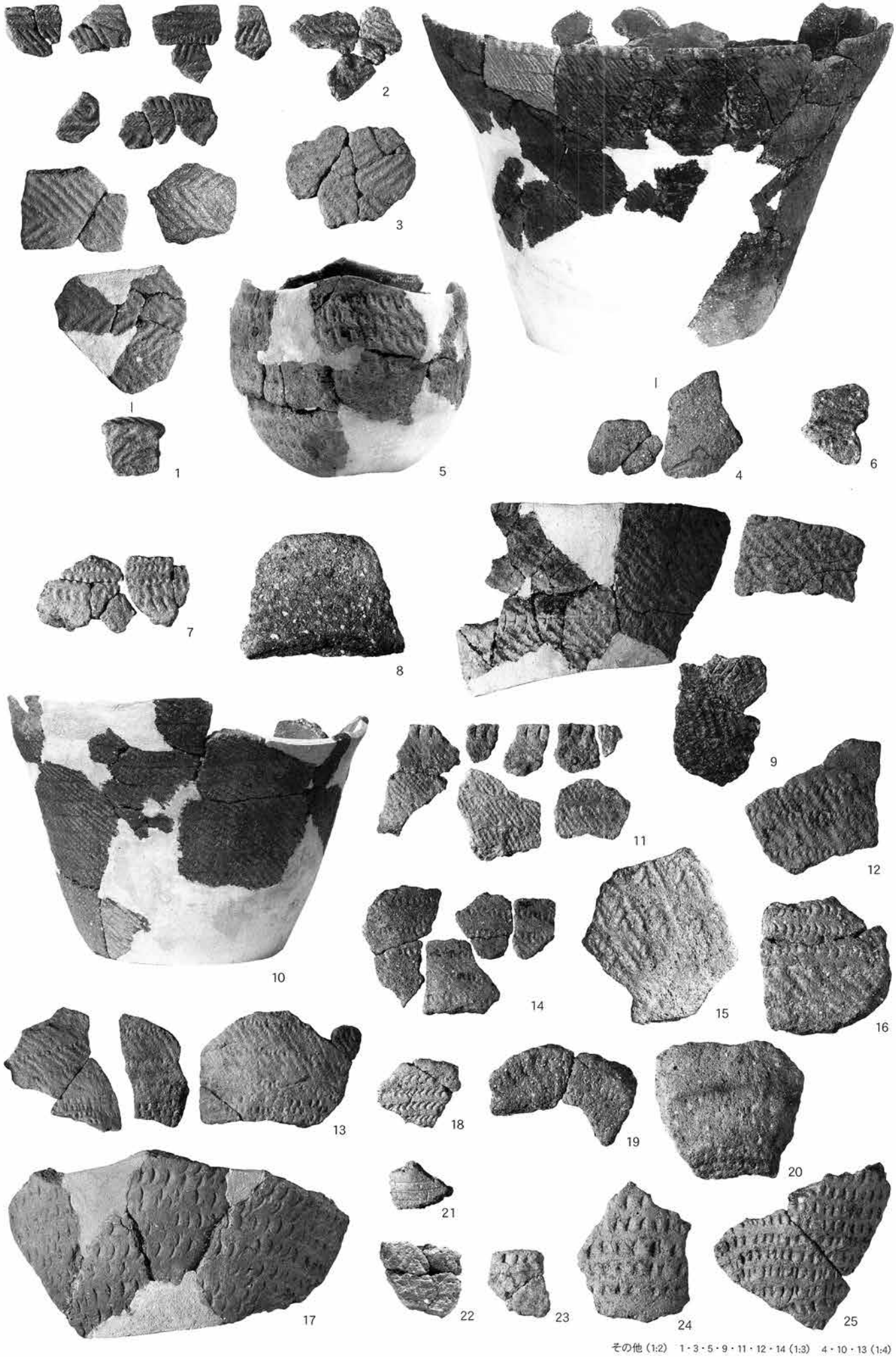
旧河川 b セクション中央（東から）

旧河川 b セクション南側遺物出土状況（東から）

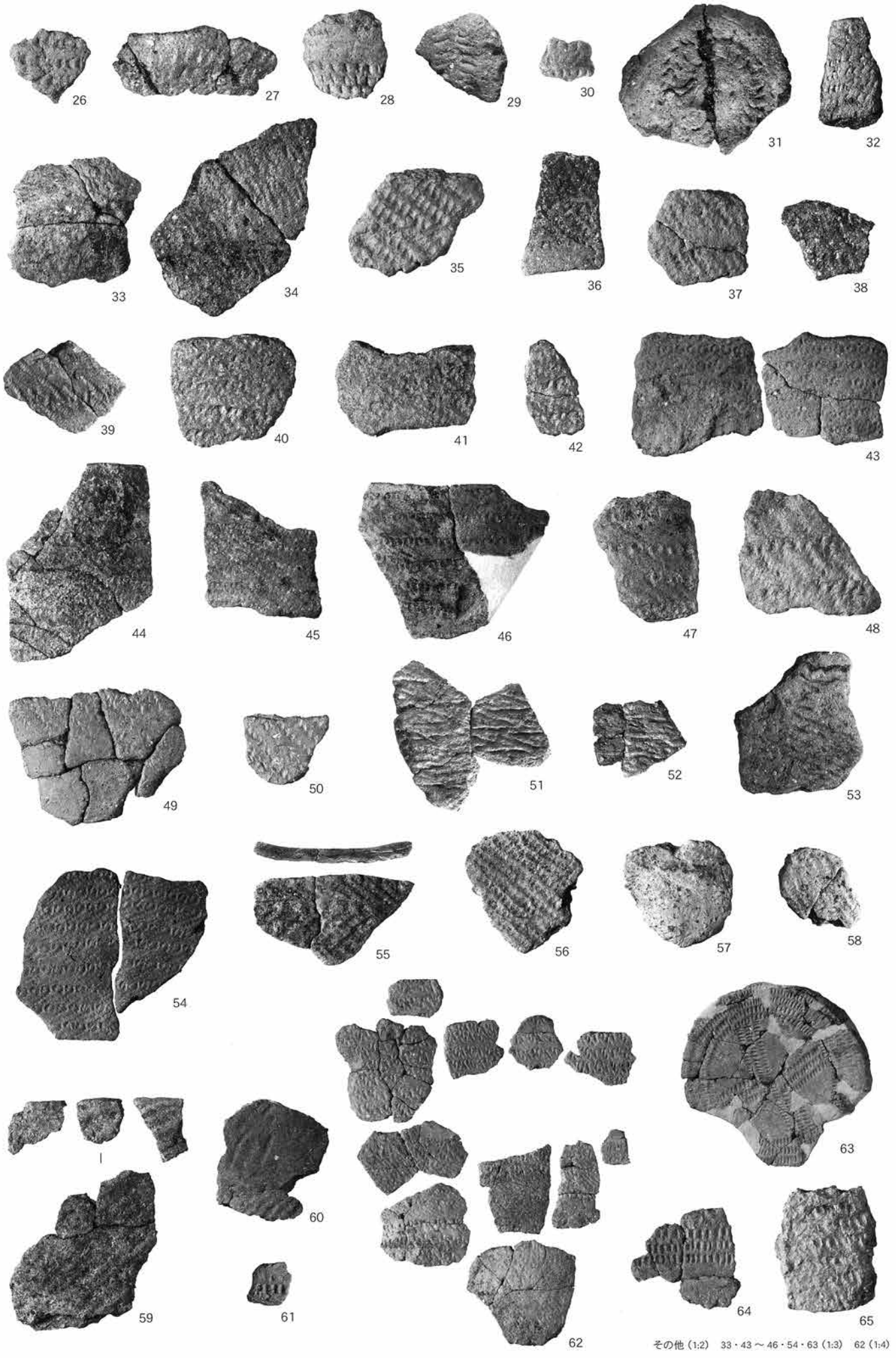
旧河川遺物出土状況（東から）

旧河川流木出土状況（東から）

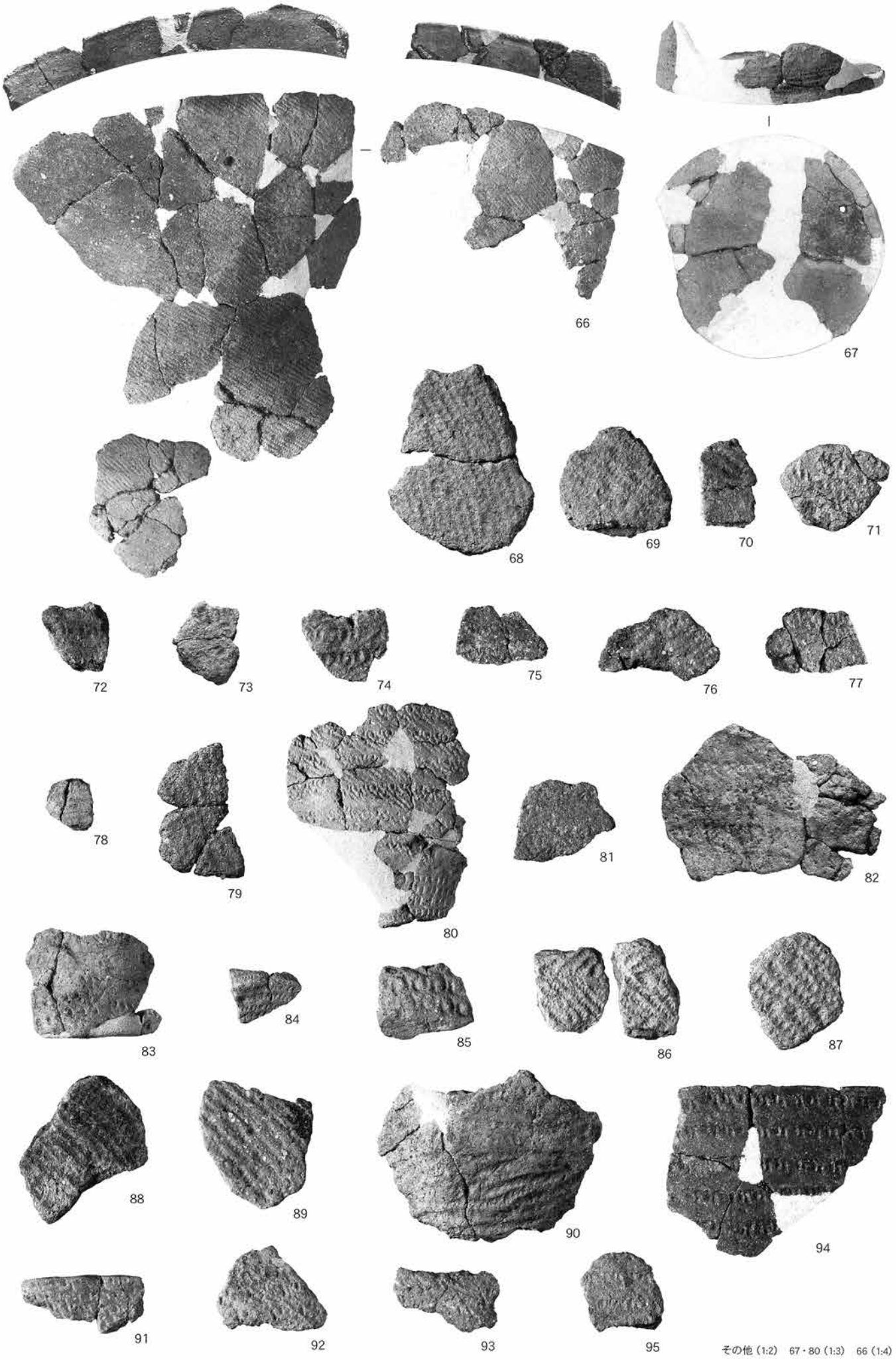
旧河川完掘（東から）



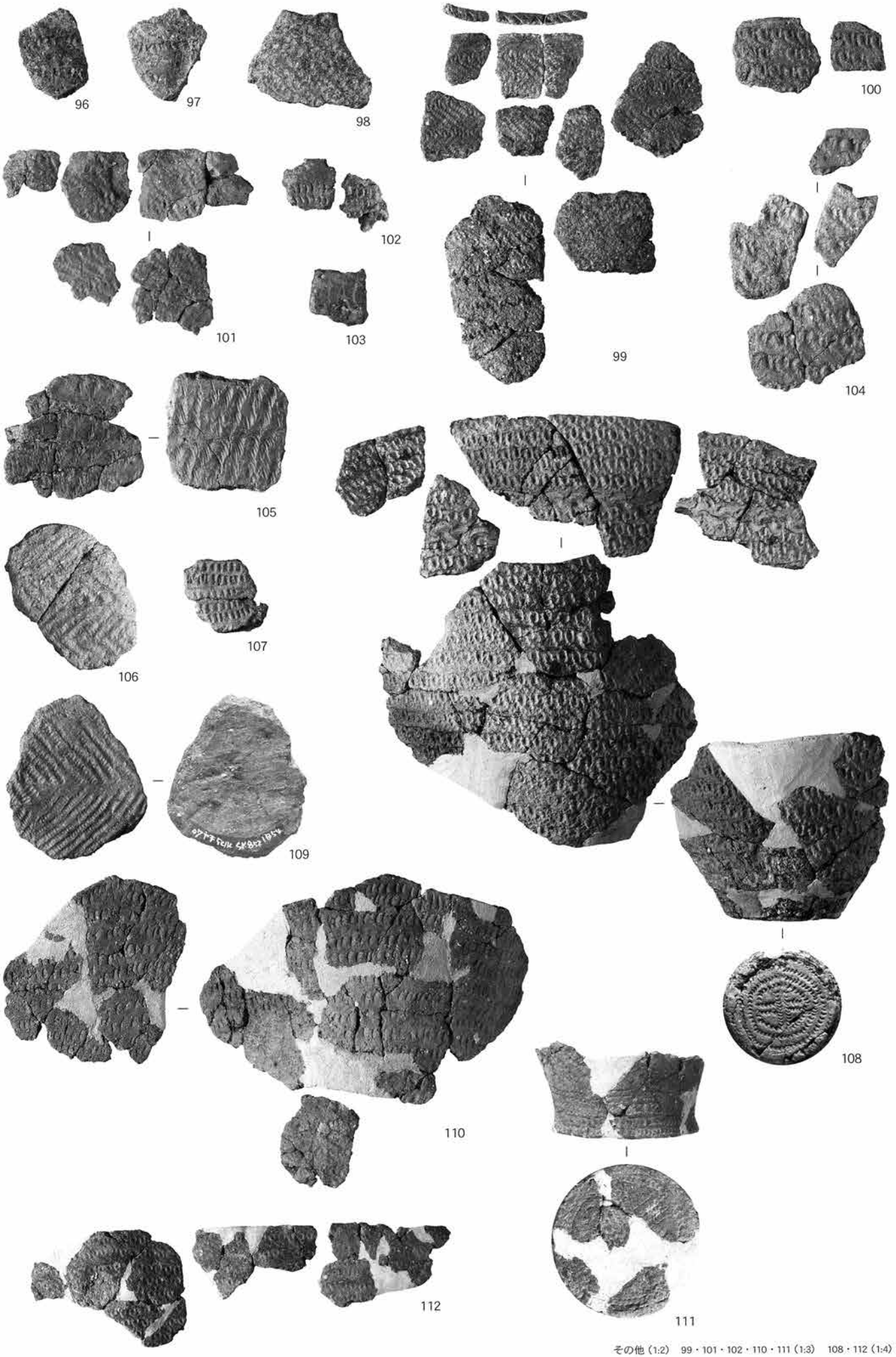
その他（1:2）　1・3・5・9・11・12・14（1:3）　4・10・13（1:4）



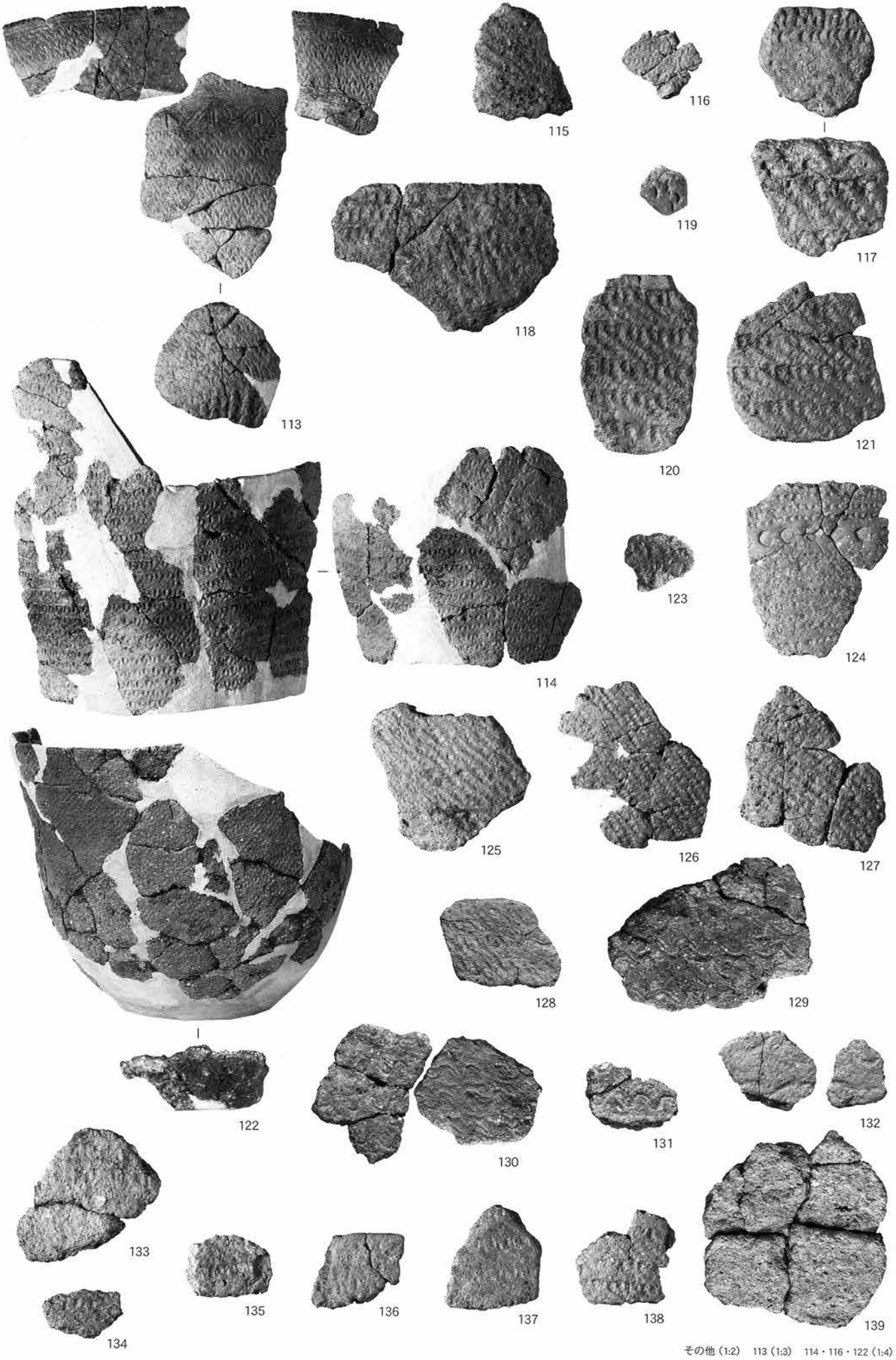
その他（1:2）　33・43 ～ 46・54・63（1:3）　62（1:4）



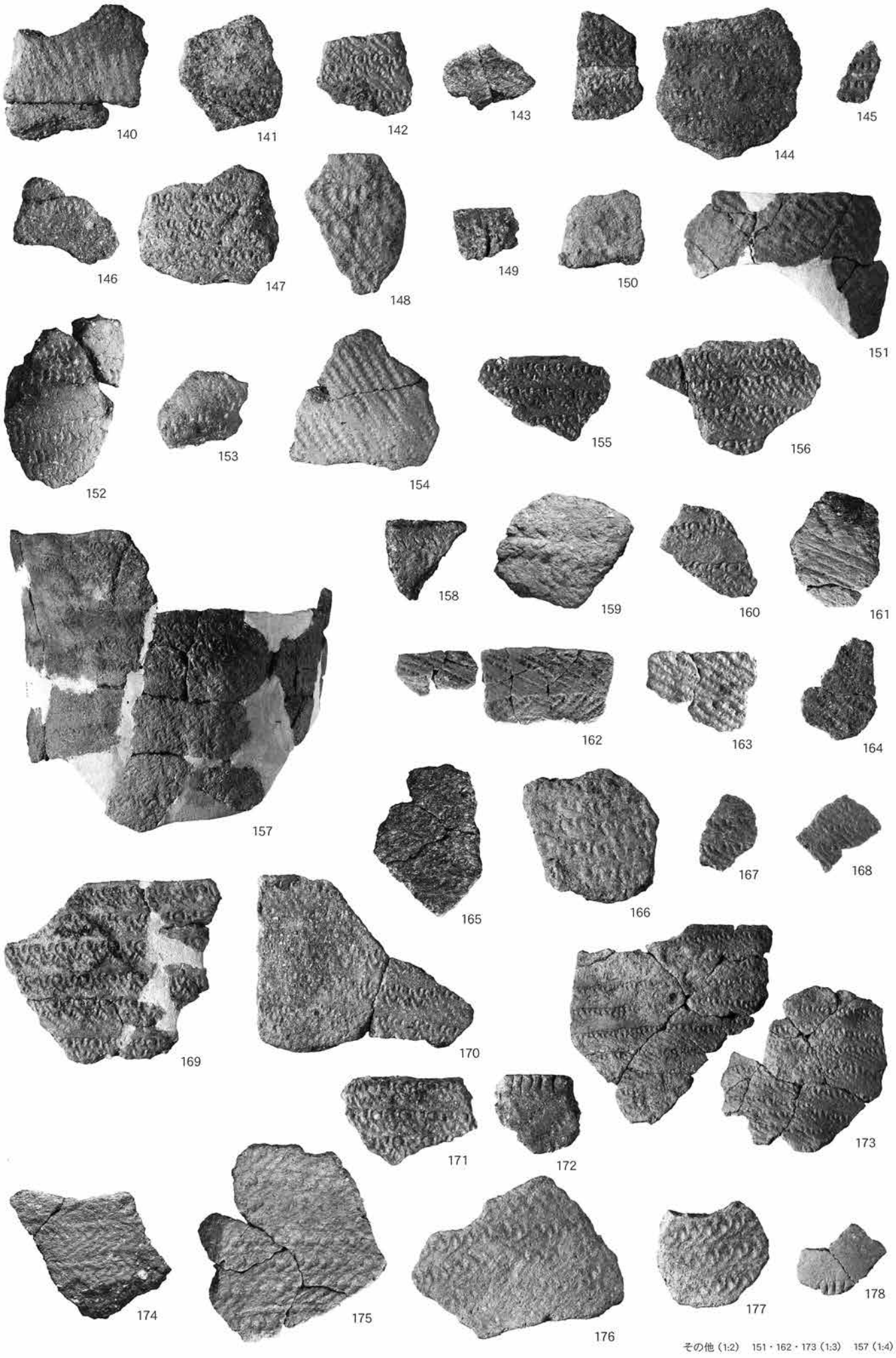
その他（1:2）　67・80（1:3）　66（1:4）



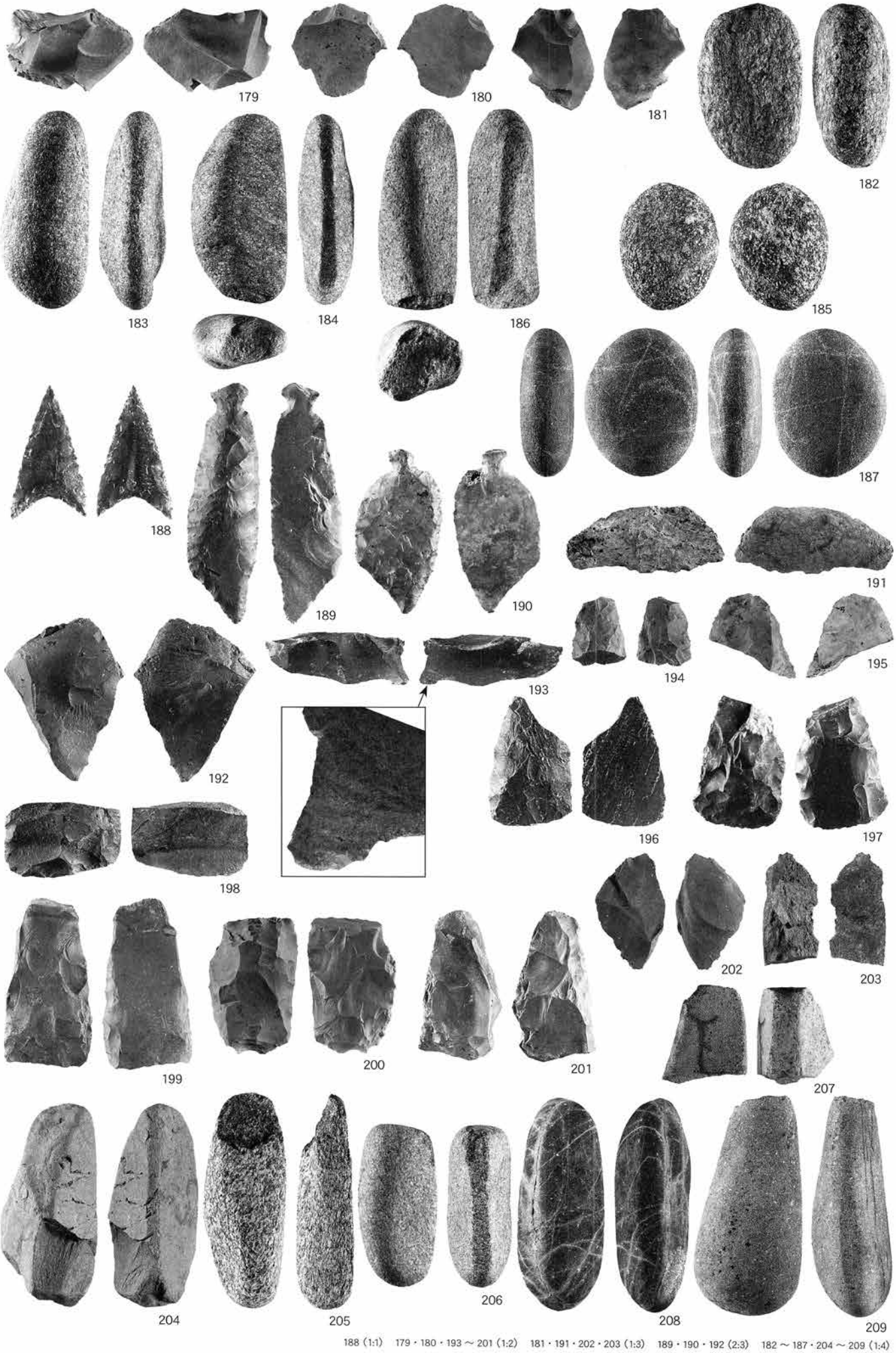
その他（1:2）　99・101・102・110・111（1:3）　108・112（1:4）



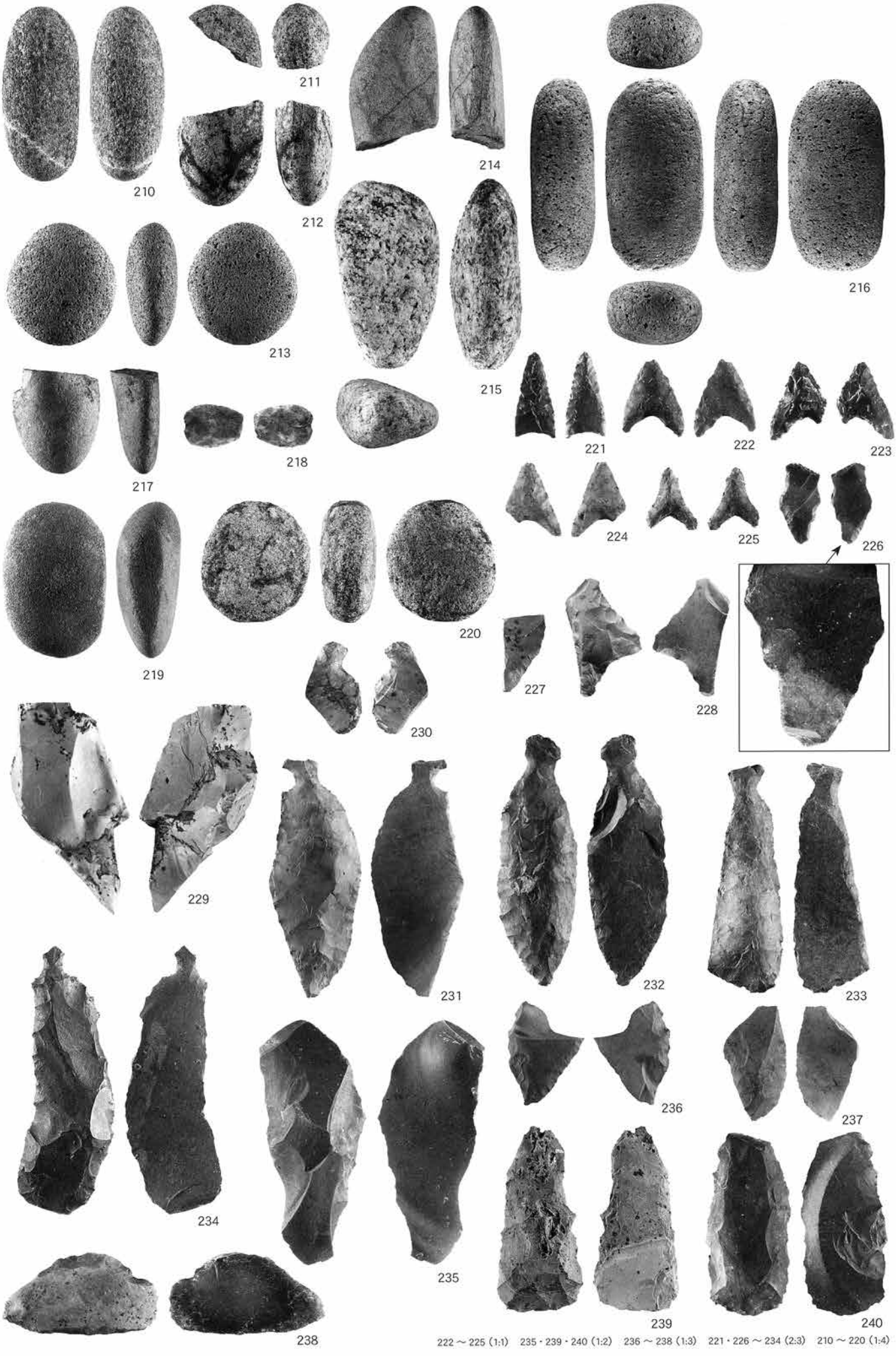
その他（1:2）　113（1:3）　114・116・122（1:4）



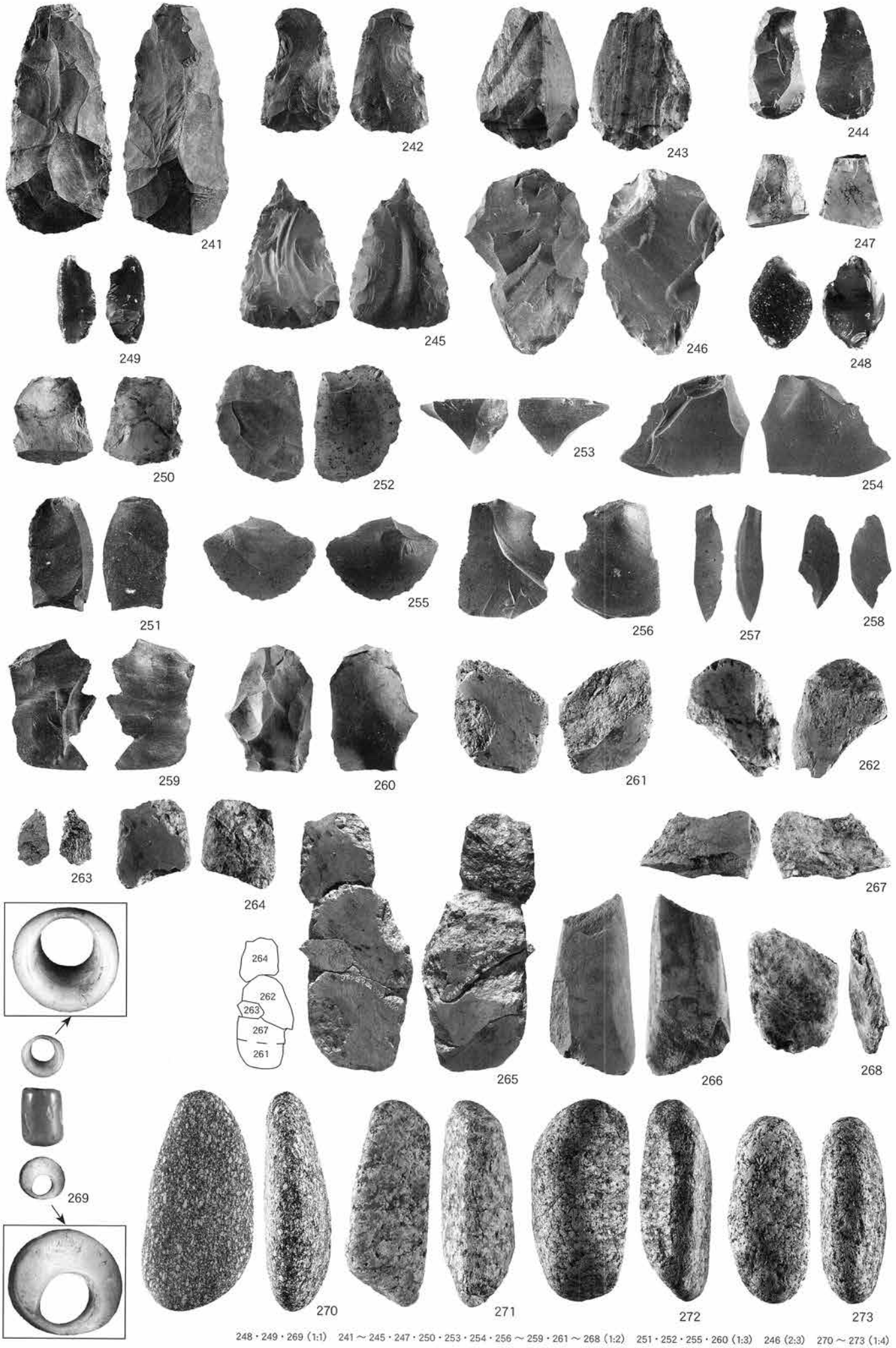
その他（1:2）　151・162・173（1:3）　157（1:4）



188 (1:1)　179・180・193 ～ 201 (1:2)　181・191・202・203 (1:3)　189・190・192 (2:3)　182 ～ 187・204 ～ 209 (1:4)



222 ～ 225 (1:1)　235・239・240 (1:2)　236 ～ 238 (1:3)　221・226 ～ 234 (2:3)　210 ～ 220 (1:4)



248・249・269（1:1）　241～245・247・250・253・254・256～259・261～268（1:2）　251・252・255・260（1:3）　246（2:3）　270～273（1:4）

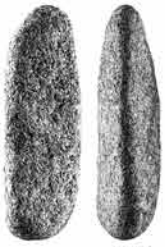
274

275

276

277

278


279

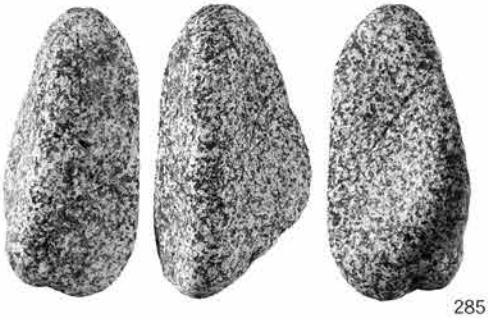
280

281

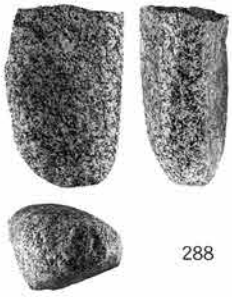
282

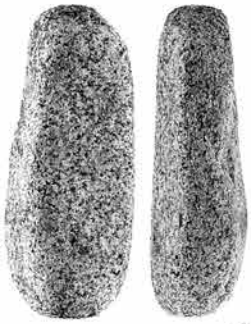
283

284

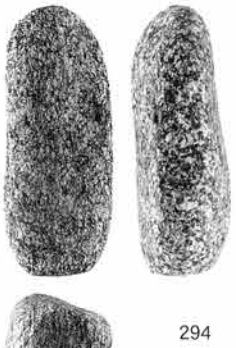

285

286

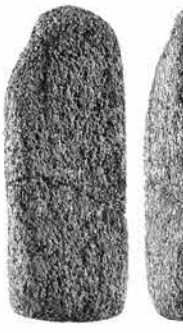

288

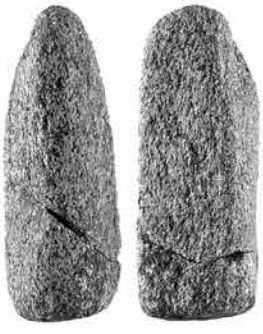


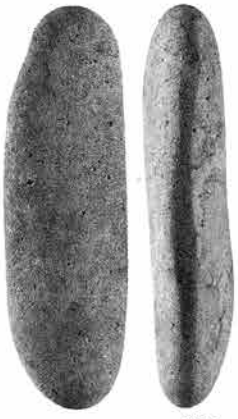
292


294

299



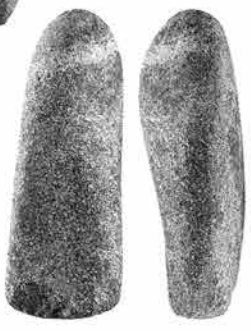

287


289

293

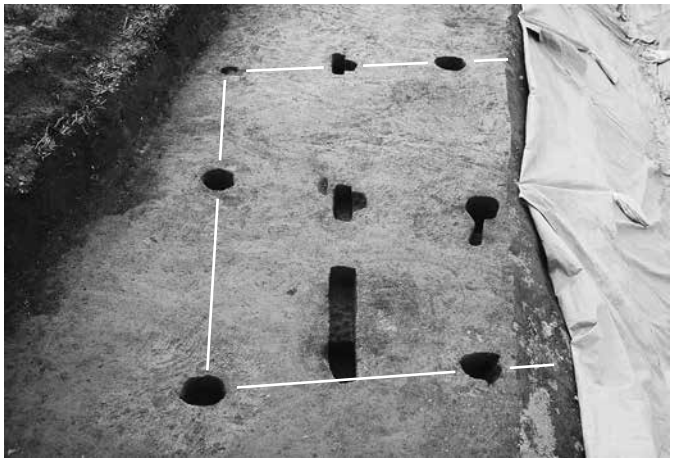
291

295


296

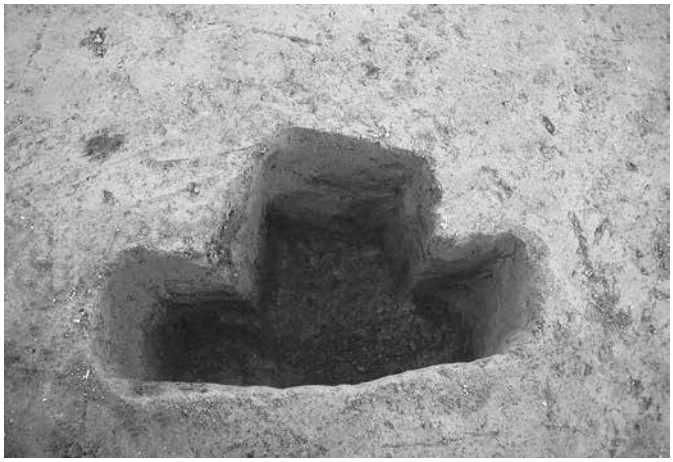
274 ～ 296・299 (1:4)

297・298・300 ～ 319（1:4）



SB1 全景（東から）

SB1（P2023）セクション（南から）

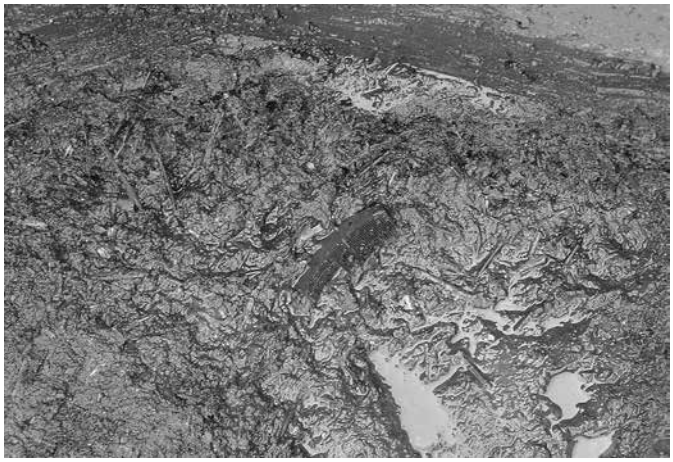


SB1（P2023）完掘（南から）

SE2001 検出状況（北から）

SE2001 セクション（南から）

SE2001 鉤状木製品出土状況（東から）



SE2001 櫛出土状況（東から）

SE2001 完掘（西から）

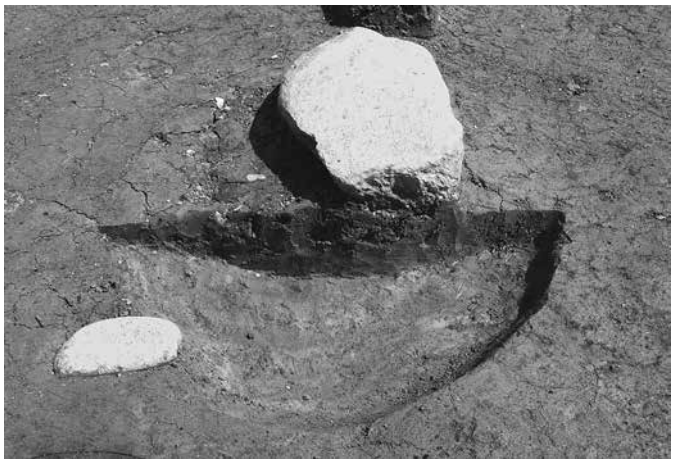
SE2016 遺物出土状況（南から）

SE2016 下駄出土状況（東から）

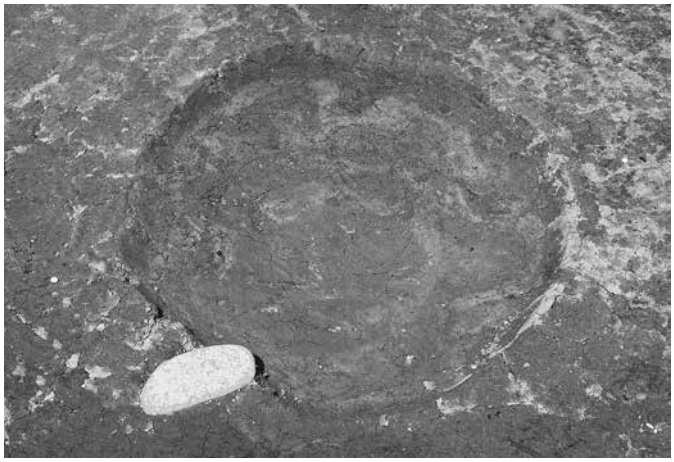
SE2016 遺物出土状況（東から）

SE2016 青磁出土状況（北から）

SE2016 完掘（東から）



SE2017 セクション（南から）



SE2017 完掘（南から）

SE2030 上層セクション（東から）

SE2030 下層セクション（東から）

SK2041 セクション（東から）

SK2041 遺物出土状況（北から）

SK2041 遺物出土状況（東から）

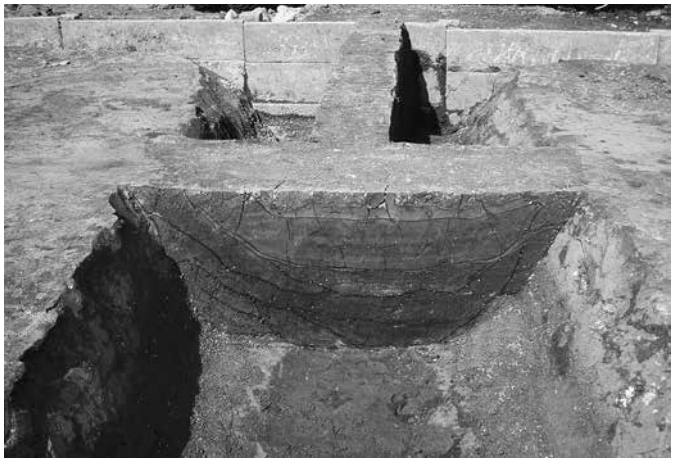
SD2002 セクション（西から）

SD2003 セクション（南から）

SD2004 セクション（東から）

SD2004 完掘（東から）

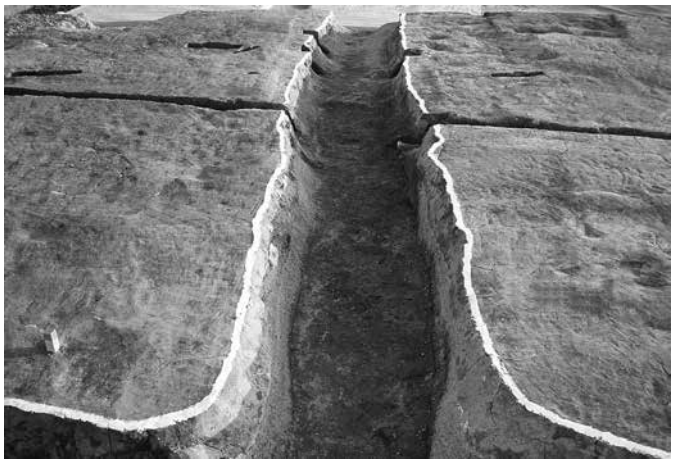
SD2005・2058 c セクション（東から）



SD2007 b セクション（南から）

SD2042 b セクション（東から）

SD2042 白磁出土状況（東から）

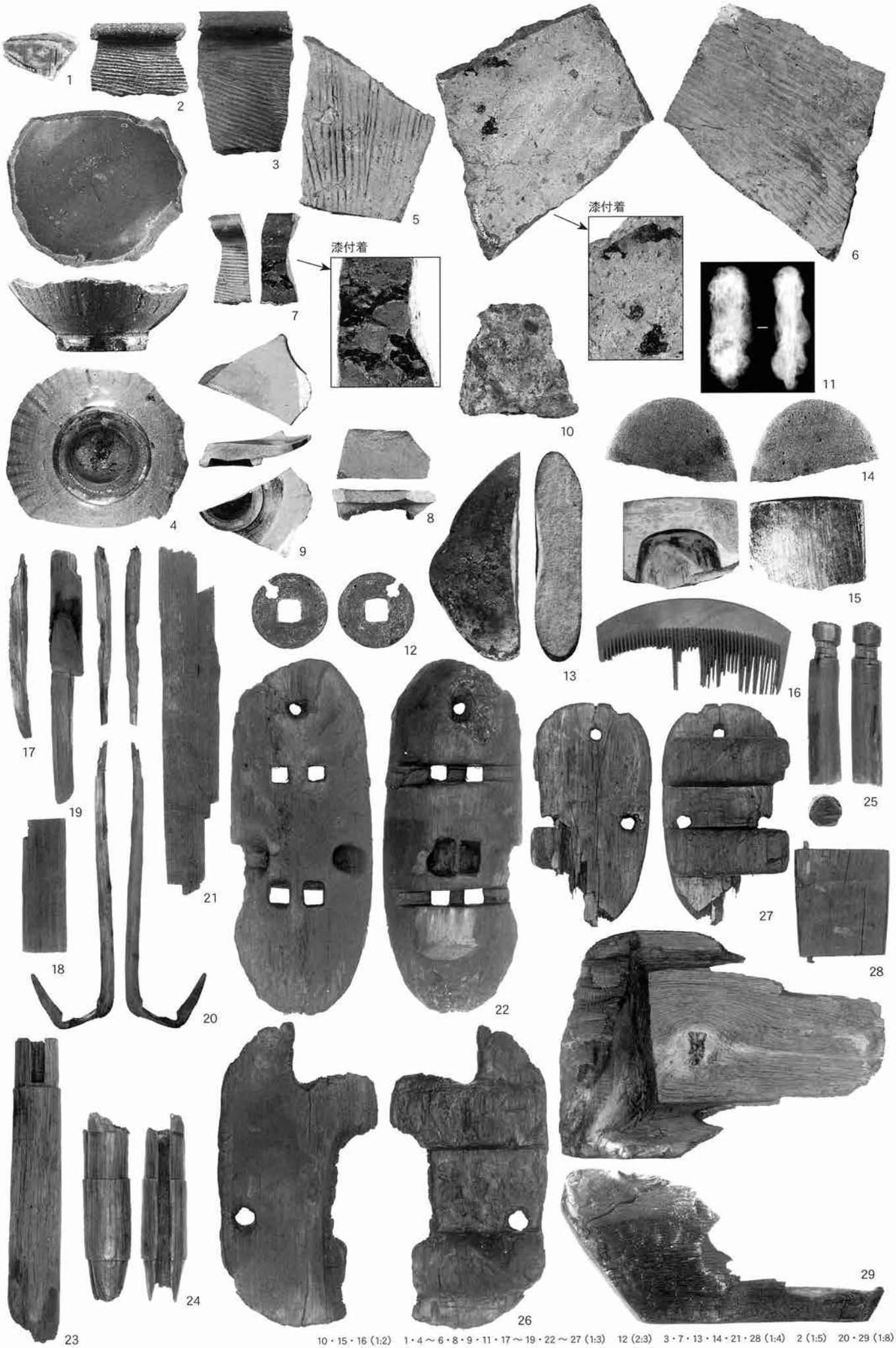


SD2007 完掘（北から）

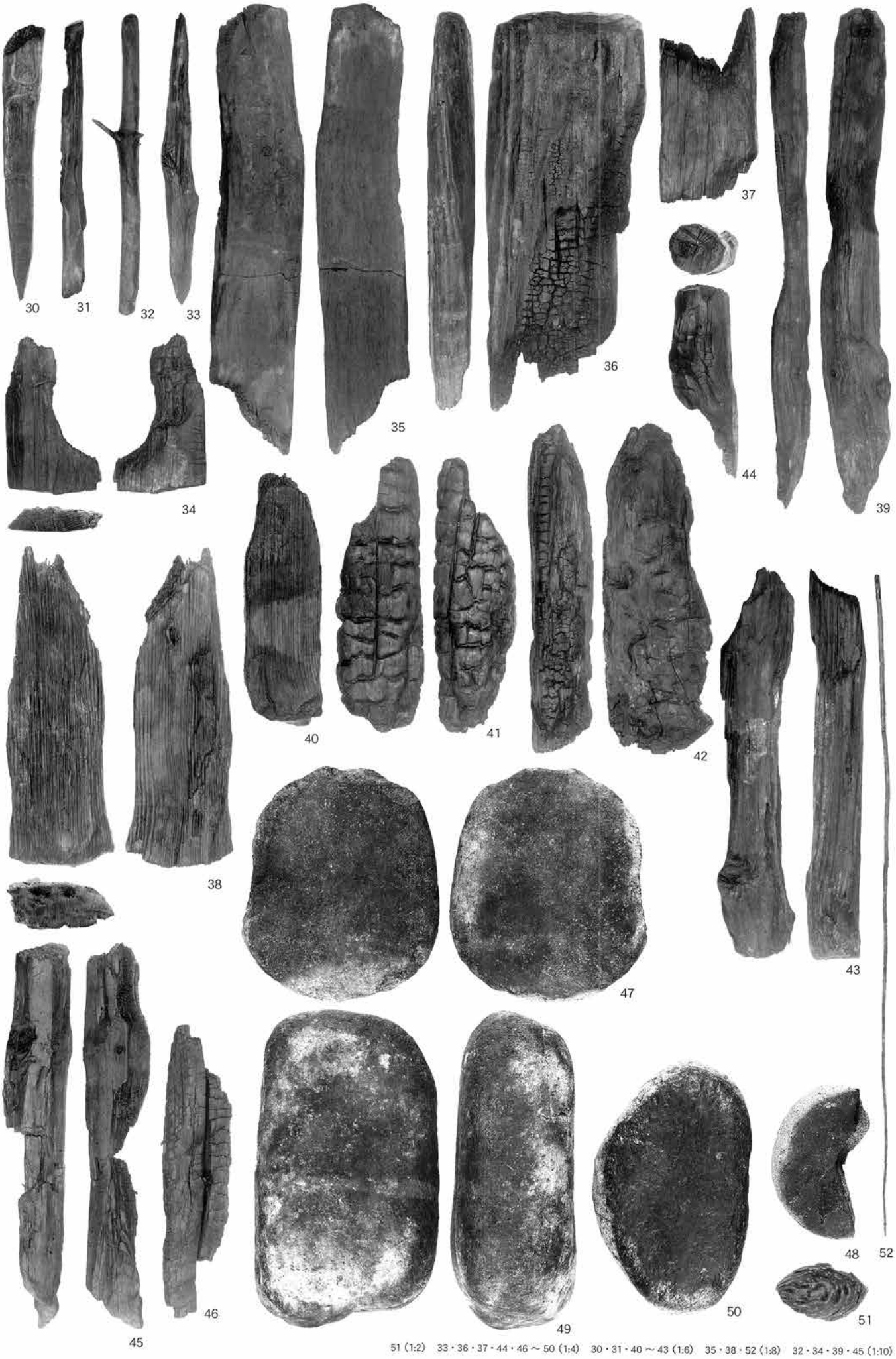
SD2007・2042 完掘（東から）

SD2013 完掘（東から）

SD2034 完掘（南から）



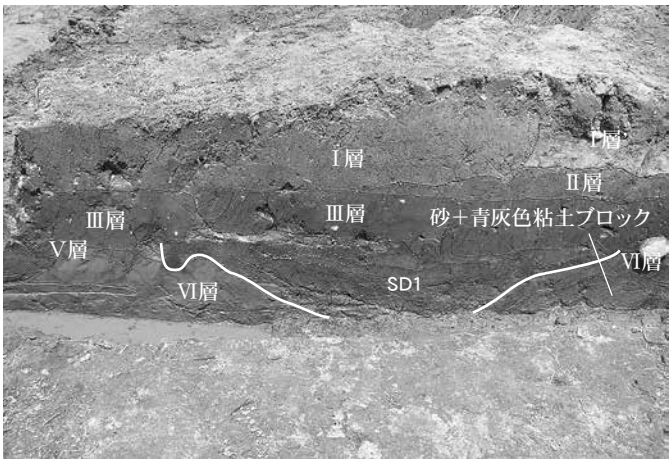
10・15・16（1:2）　1・4～6・8・9・11・17～19・22～27（1:3）　12（2:3）　3・7・13・14・21・28（1:4）　2（1:5）　20・29（1:8）



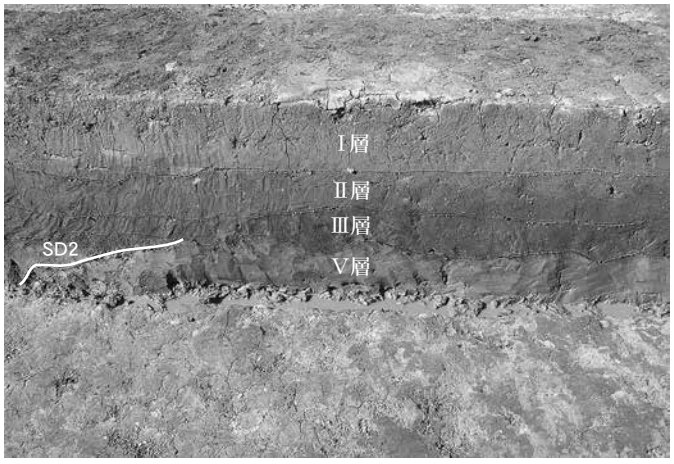
51 (1:2)　33・36・37・44・46 ～ 50 (1:4)　30・31・40 ～ 43 (1:6)　35・38・52 (1:8)　32・34・39・45 (1:10)

調査区全景（北から）

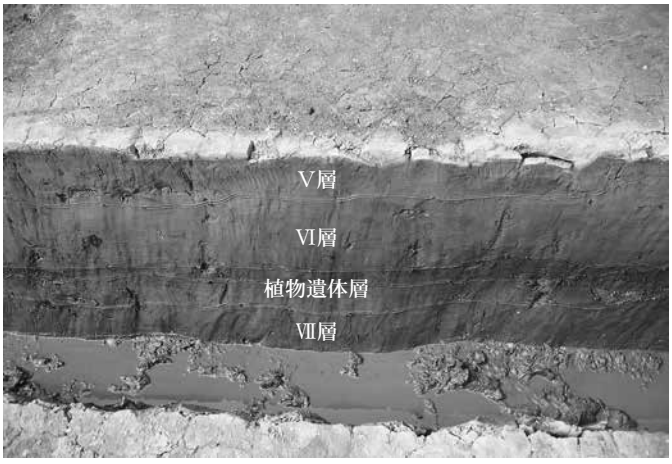
調査区と周辺の地形（北から）



4 ライントレンチ上部セクション①（南から）



4 ライントレンチ上部セクション②（南から）



4 ライントレンチ下部セクション（南から）

SX1 遺物出土状況（南から）

SX1 遺物出土状況（東から）

SX1 西側杭列（東から）

SX1 杭列 L 字部①（北東から）

SX1 杭列 L 字部②（南西から）

SX1 k セクション杭列①（北から）

SX1 k セクション杭列②（北から）

SX1 q セクション①（南から）

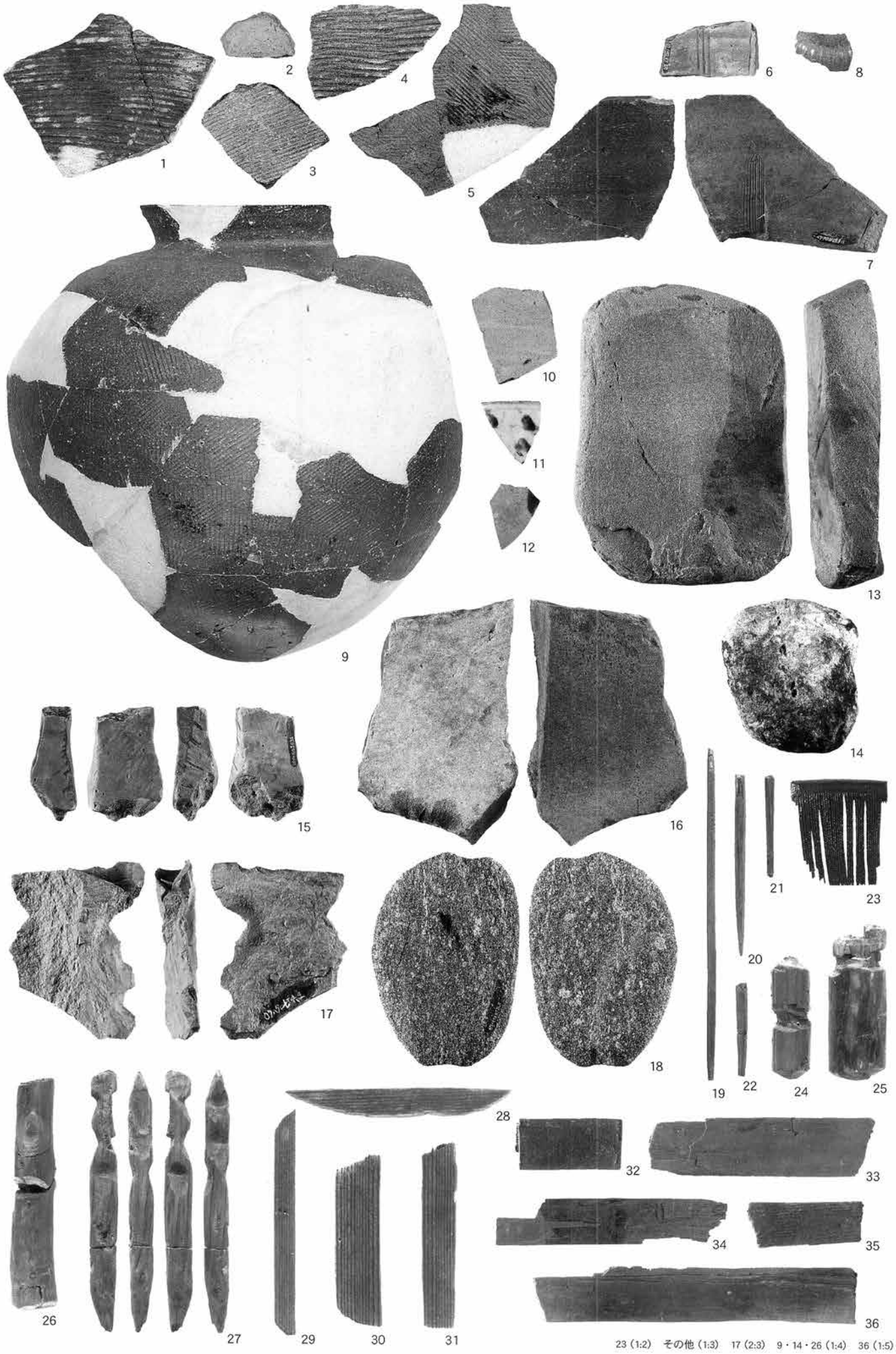
SX1 q セクション②（南から）

SX1 取水部 m セクション（南から）

SX1 完掘（南から）

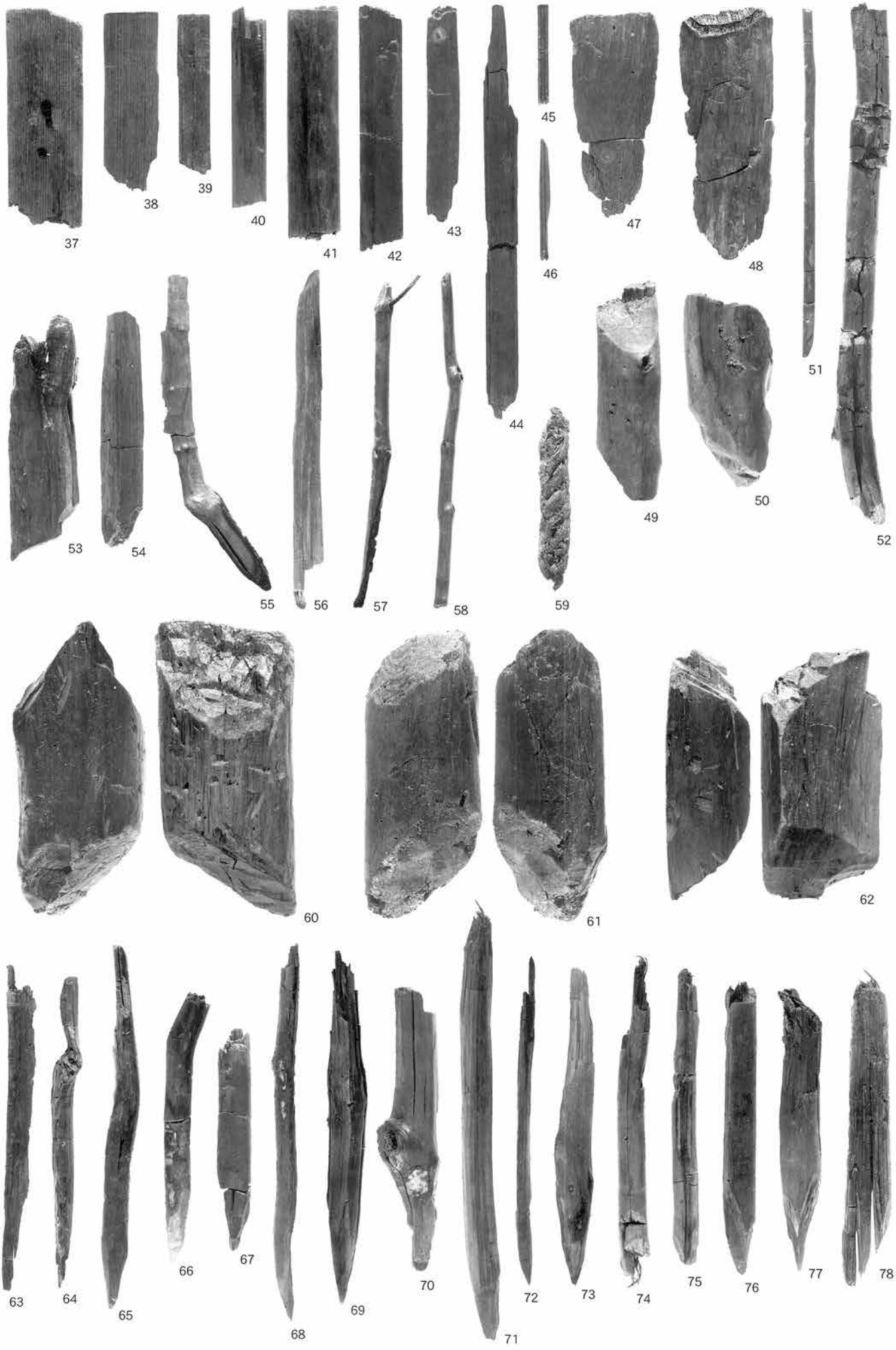
P2 セクション（東から）

P48 セクション（南から）



23 (1:2)　その他 (1:3)　17 (2:3)　9・14・26 (1:4)　36 (1:5)

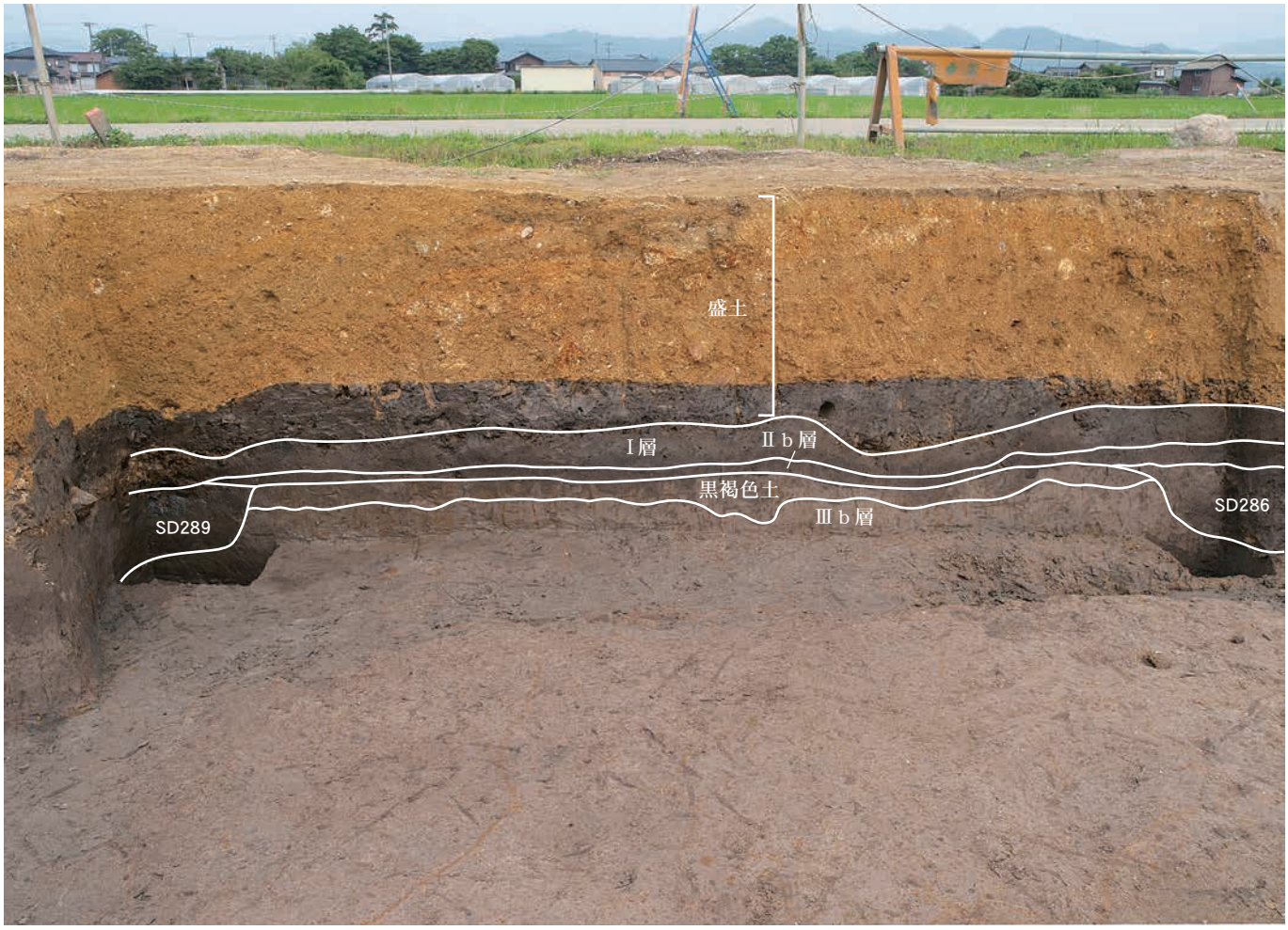
107～122（1:3）　124～126（2:3）　94・101～103・105・106・123（1:5）　82・83・91・95（1:6）　92（1:8）　79～81・84～90・93・96～100・104（1:10）



その他（1:3）　47・51～55・57・60～62（1:5）　67・70・78（1:6）　66・69・74～77（1:8）　58・63～65・68・71～73（1:10）

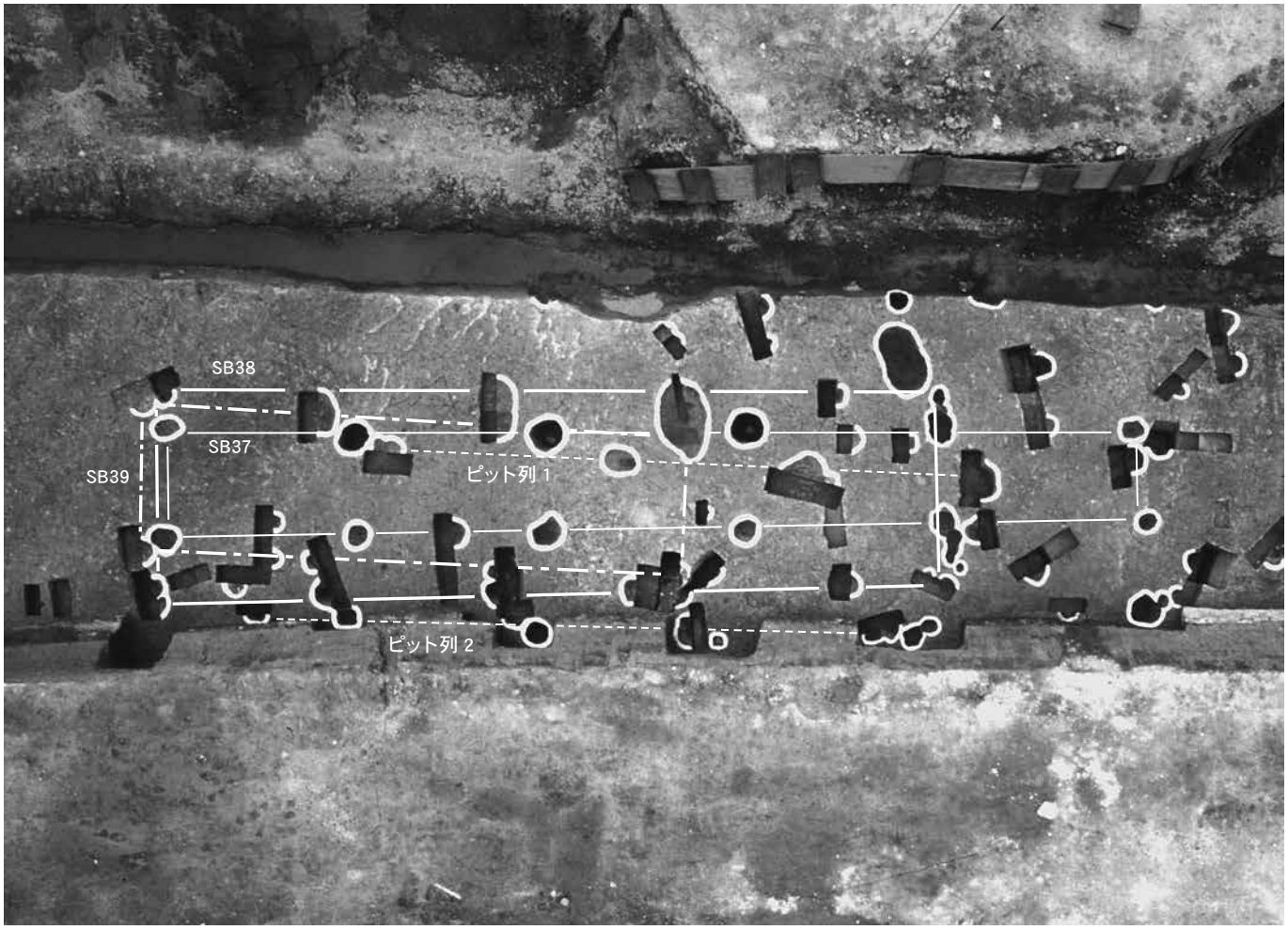
（合成写真　平成 18~20 年度調査区を合成）

調査区全景

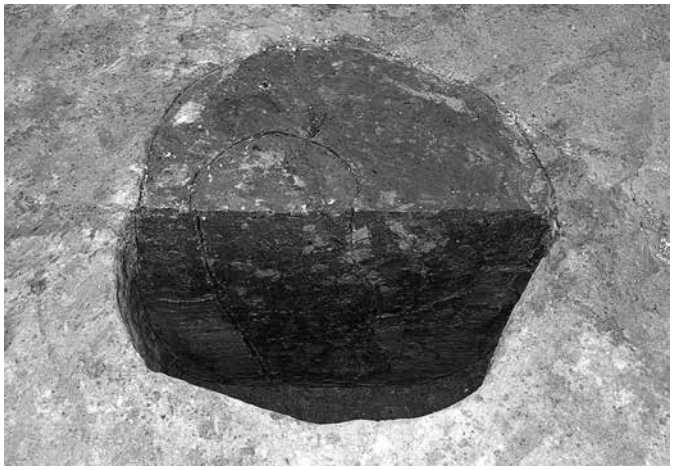


調査区東壁（15・16G グリッド）セクション（西から）

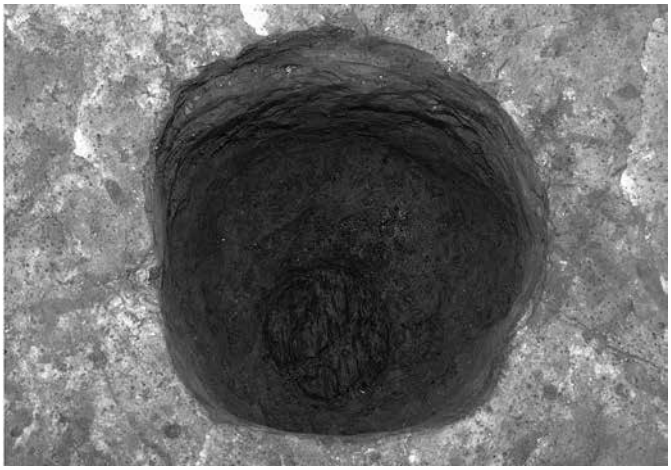
SB37 ～ 39 検出状況（南から）



SB37 ～ 39・ピット列完掘



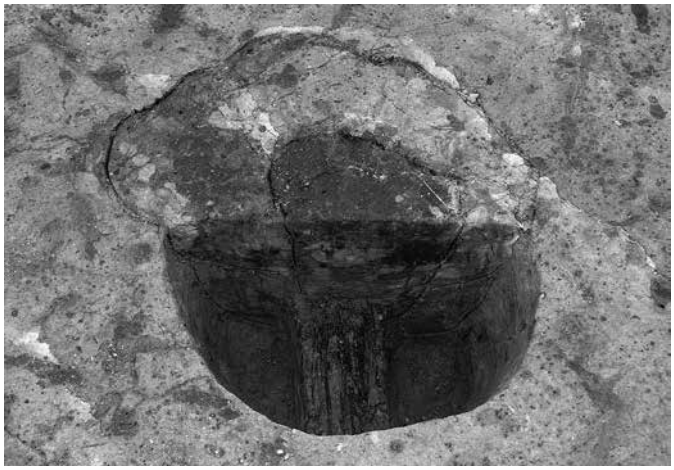
SB37（P1064）セクション（西から）



SB37（P1064）礎盤（板）出土状況（西から）

SB37（P1068）セクション（南から）

SB37（P1068 左）、SB39（P1053 右）礎盤（板）出土状況（西から）



SB37（P1070）セクション（南から）

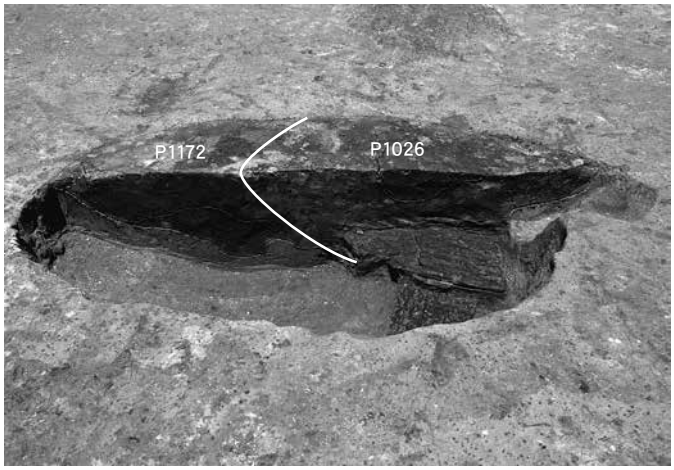
SB37（P1070）礎盤（板）出土状況（南から）

SB37（P1071）セクション（南から）

SB37（P1071）礎盤（板）出土状況（南から）

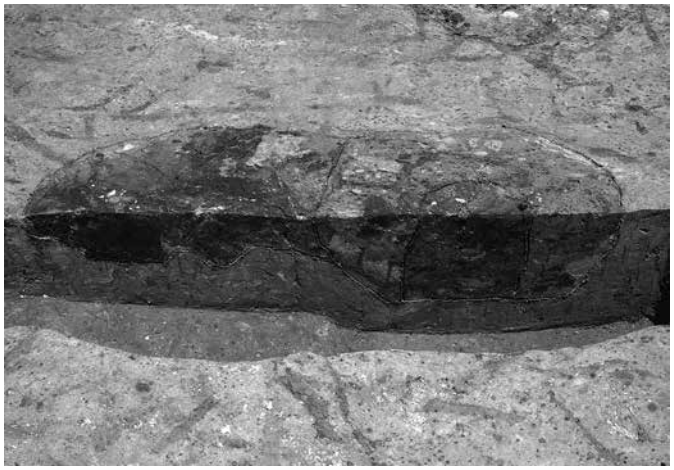
SB37（P1072）セクション（南から）

SB37（P1072）礎盤（板）出土状況（南から）



SB38（P1172 左）、SB39（P1026 右）セクション（南から）

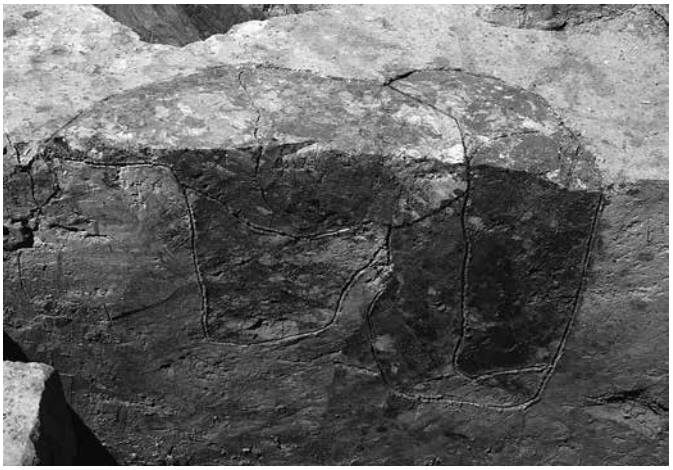
SB38（P1172 左）、SB39（P1026 右）礎盤（板）出土状況（南から）



SB38（P1033 左）、SB39（P1032 右）セクション（南から）

SB38（P1036 左）、SB39（P1037 右）セクション（北から）

SB38（P1036 左）礎盤（板）出土状況、SB39（P1037 右）完掘（北から）



SB38（P1030 右）、SB39（P1029 左）セクション（南から）

SB38（P1030 右）、SB39（P1029 左）完掘（南から）

SB39（P1040）セクション（南から）

SB39（P1040）礎盤（板）出土状況（南から）

SB38（P1049 左）、SB39（P1050 右）セクション（西から）

SB40 完掘（南から）

SB40（P984）セクション（東から）

SB40（P991）セクション（南から）

SB40（P998 左）、P999 右セクション（西から）

SB40（P1002）セクション（北から）

SB41 完掘（西から）

SB41（P1091）セクション（東から）

SB41（P1091）完掘（東から）

SB41（P1164）セクション（西から）

SB41（P1164）柱根出土状況（西から）

ピット列1（P1020）セクション（東から）

ピット列1（P1020）礎盤（板）出土状況（東から）

ピット列1（P1039）セクション（東から）

ピット列1（P1039）礎盤（板）出土状況（東から）

ピット列2（P1083）セクション（北から）

ピット列2（P1083）完掘（北から）

SE1004 セクション（南から）

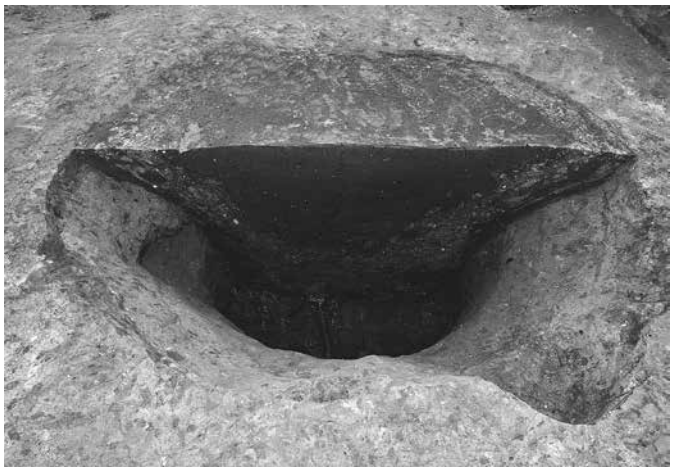
SE1004 杭状木製品出土状況（南から）

SE1004 上層遺物出土状況（南から）

SE1004 中層遺物出土状況（南から）

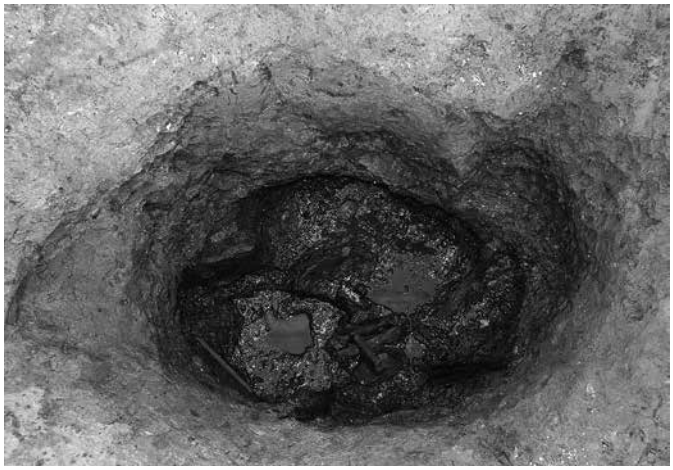
SE1004下層遺物出土状況（東から）

SE1004 完掘（南から）



SE1090 上部セクション（南から）

SE1090 植物層（８層）検出状況（南から）



SE1090 遺物出土状況（南から）

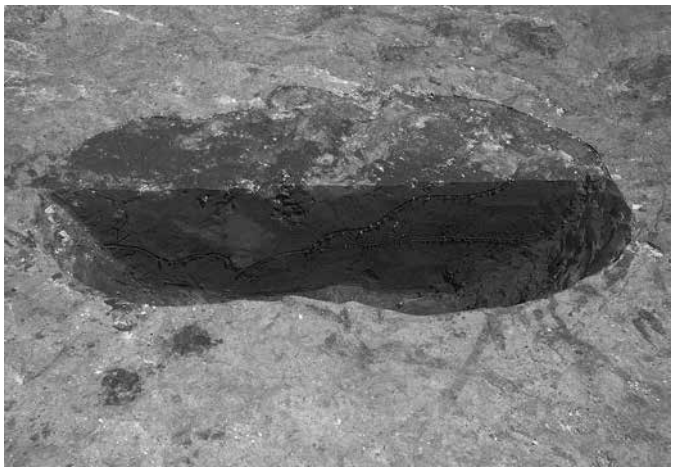
SE1090 完掘（北から）

SE1110 セクション（西から）

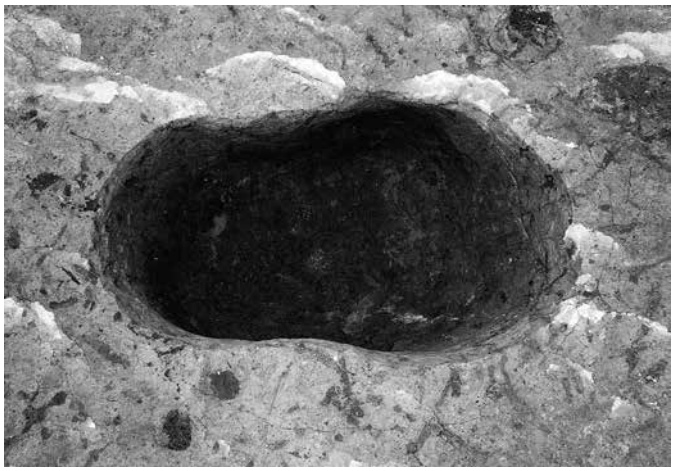
SE1110 完掘（西から）

SK920 セクション（西から）

SK920 遺物出土状況（西から）



SK1014 セクション（南から）



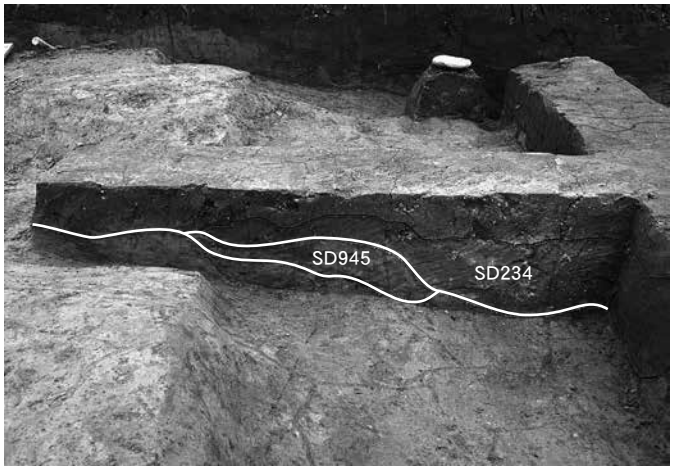
SK1014 完掘（南から）

SK1141 セクション（南から）

SK1141 完掘（南から）

SD186 a セクション（南から）

SD186 完掘（南から）



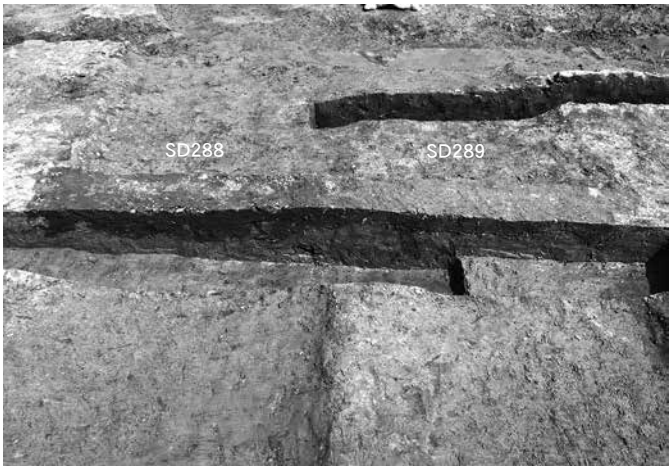
SD234・945 セクション（南から）

SD234 c セクション（南から）

SD234 完掘（南から）

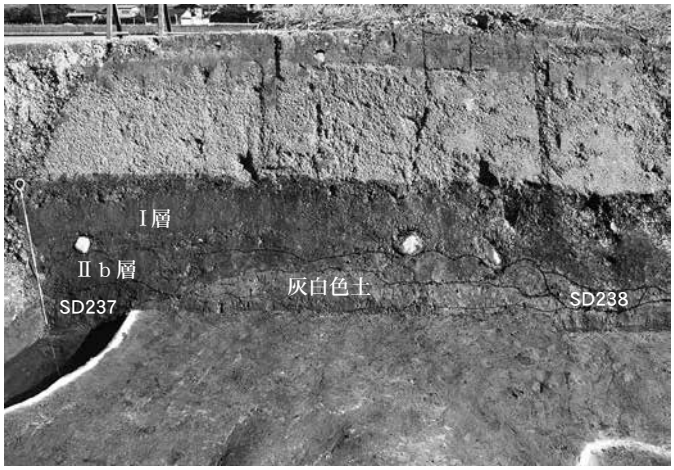
SD945 完掘（東から）

SD289（16G グリッド）セクション（西から）

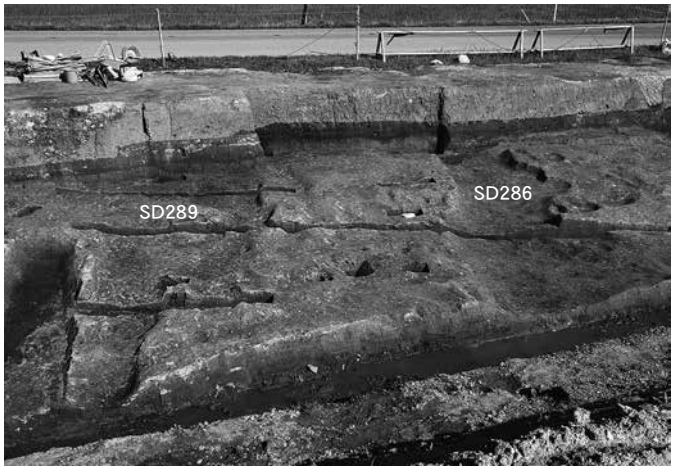


SD288・289（16B グリッド）セクション（西から）

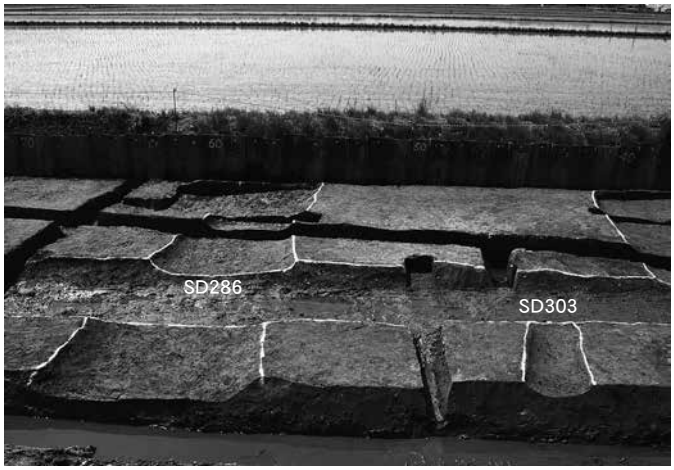
SD236・237（14・15G グリッド）c セクション（西から）



調査区東壁（14G グリッド）セクション（西から）

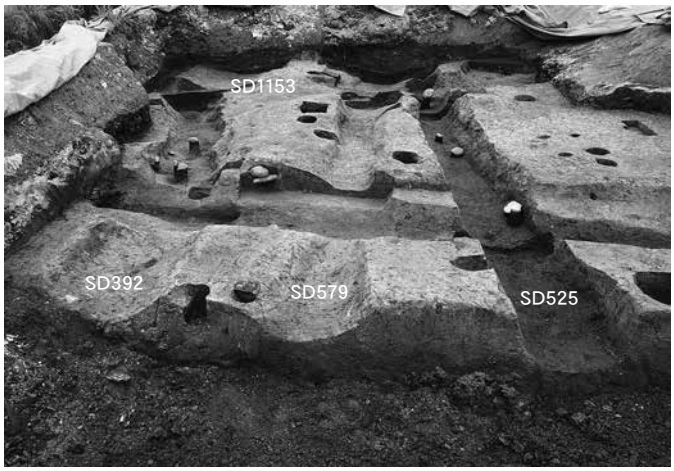


SD289・286（15・16F グリッド）完掘（西から）

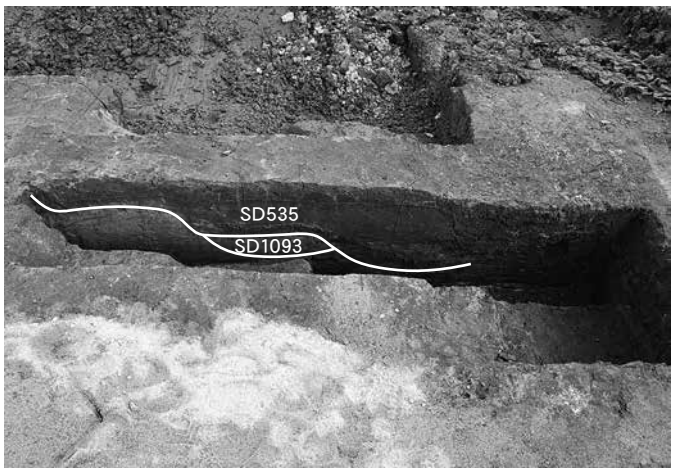


SD286・303（16A・B グリッド）完掘（東から）

SD288・289・1173（16・17B グリッド）完掘（東から）

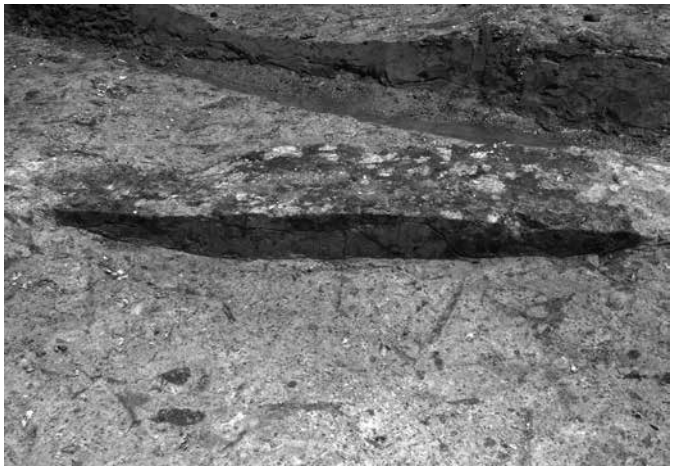


21F グリッド溝群（西から）



SD535・1093 d セクション（南から）

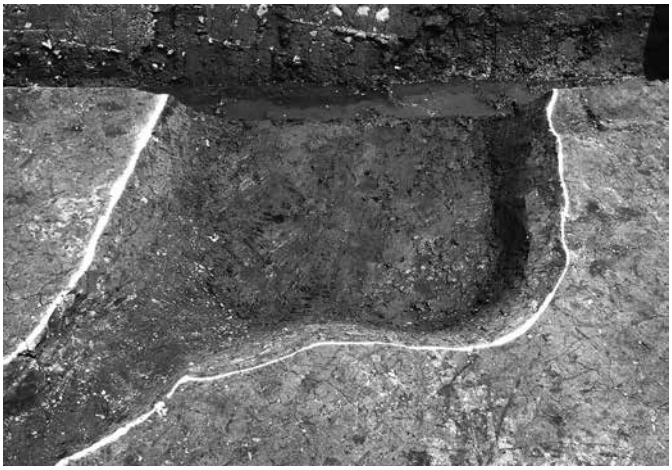
SD535 完掘



SD1094 b セクション（西から）

SD1094 完掘（南から）

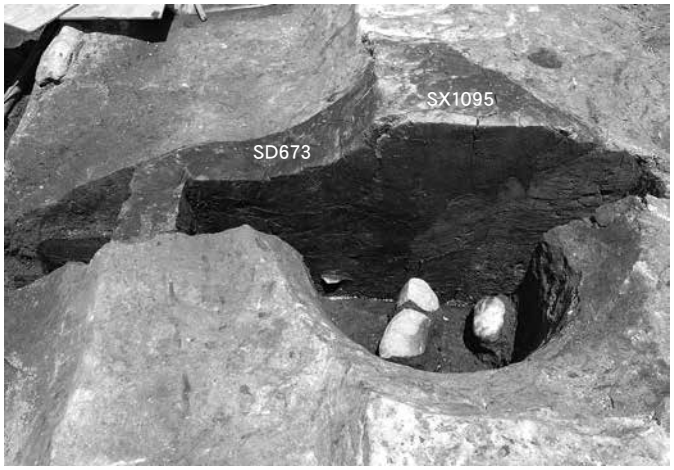
SX89 b セクション（西から）



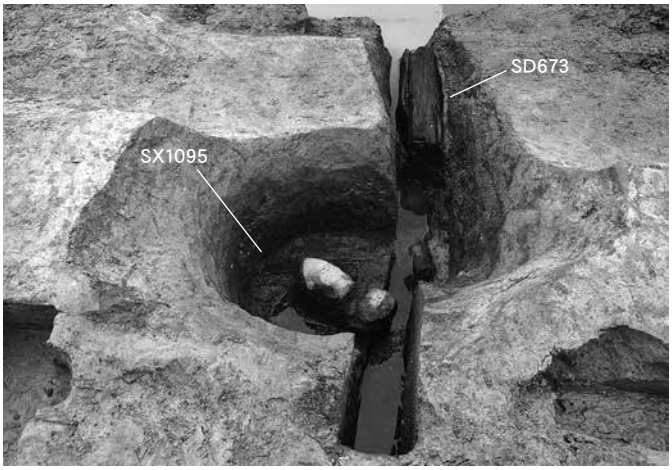
SX89 完掘（西から）

SX1092 セクション（南から）

SX1092 完掘（東から）



SX1095・SD673 セクション（南から）



SX1095・SD673 遺物出土状況（東から）

SX1095 木製品出土状況（東から）

SX1095 完掘（東から）

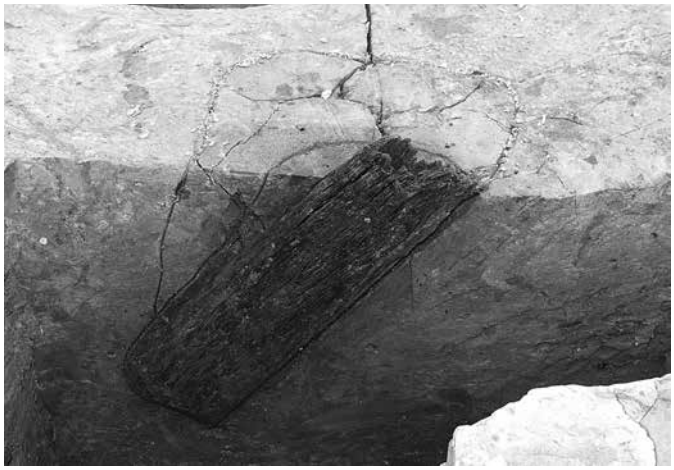
SB28（P224）セクション（西から）

P901 セクション（南から）

P902 セクション（南から）

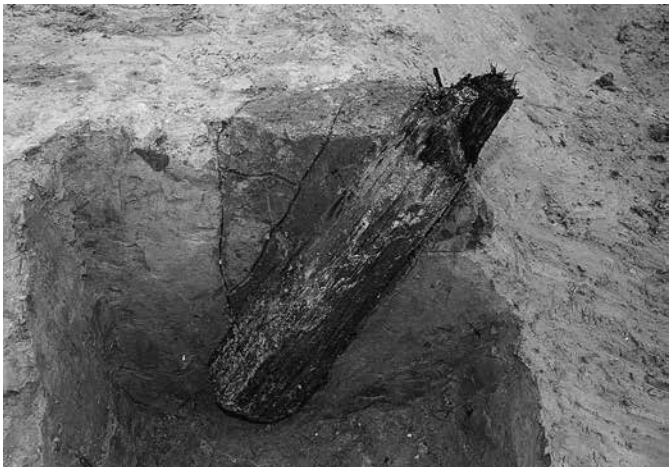
P985 セクション（北から）

P985 完掘（北から）



P1057 セクション（南から）

P1058 セクション（西から）



P1131 セクション（南から）

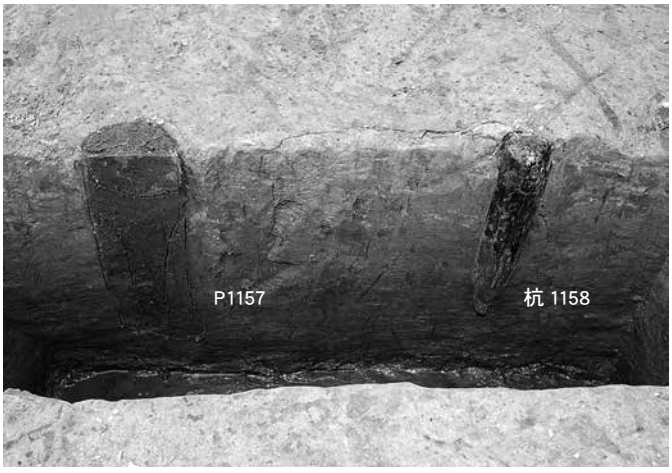
P1140 セクション（南から）

P1140 完掘（南から）

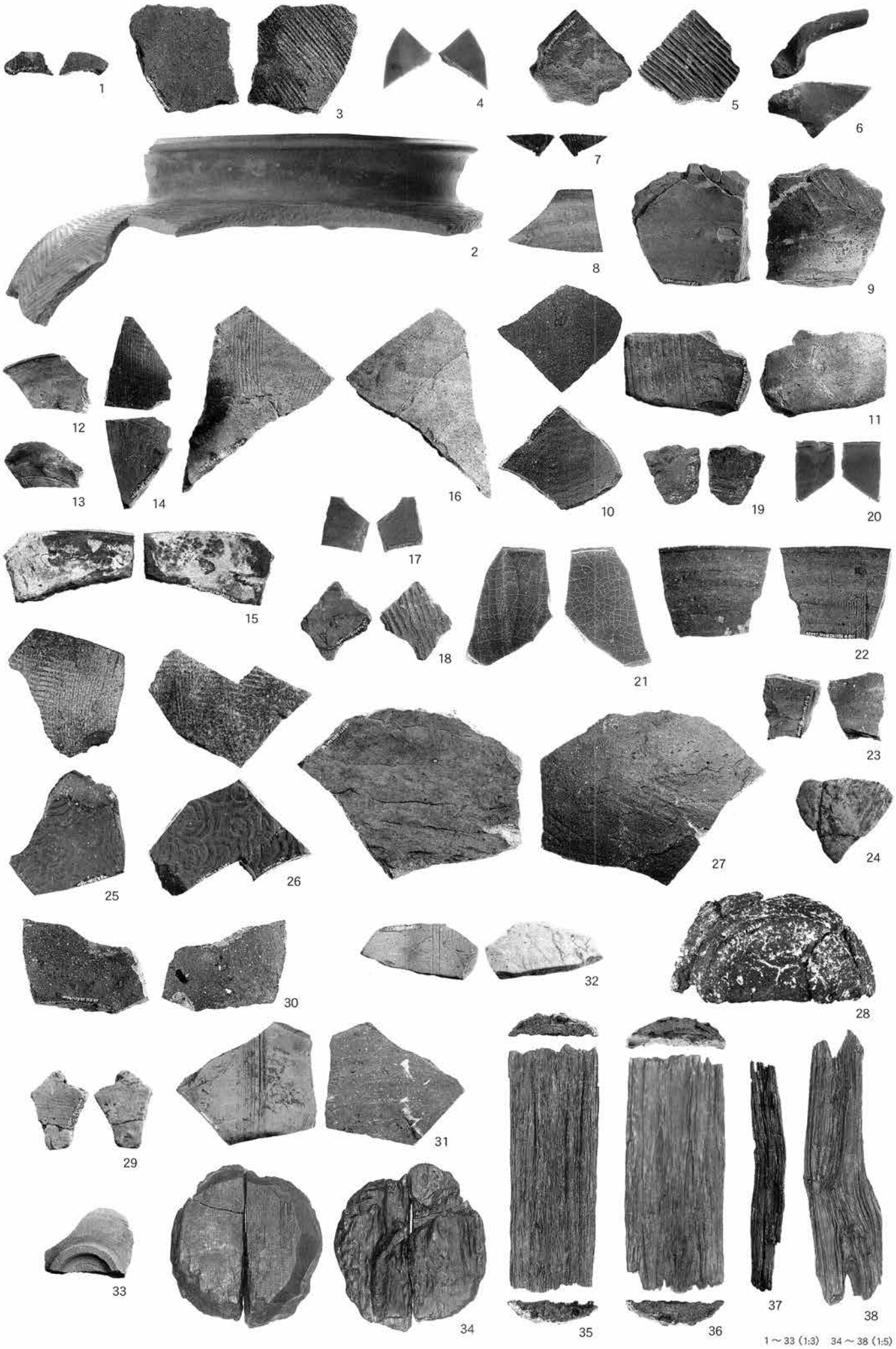
P1154 セクション（西から）

P1154 遺物出土状況（南から）

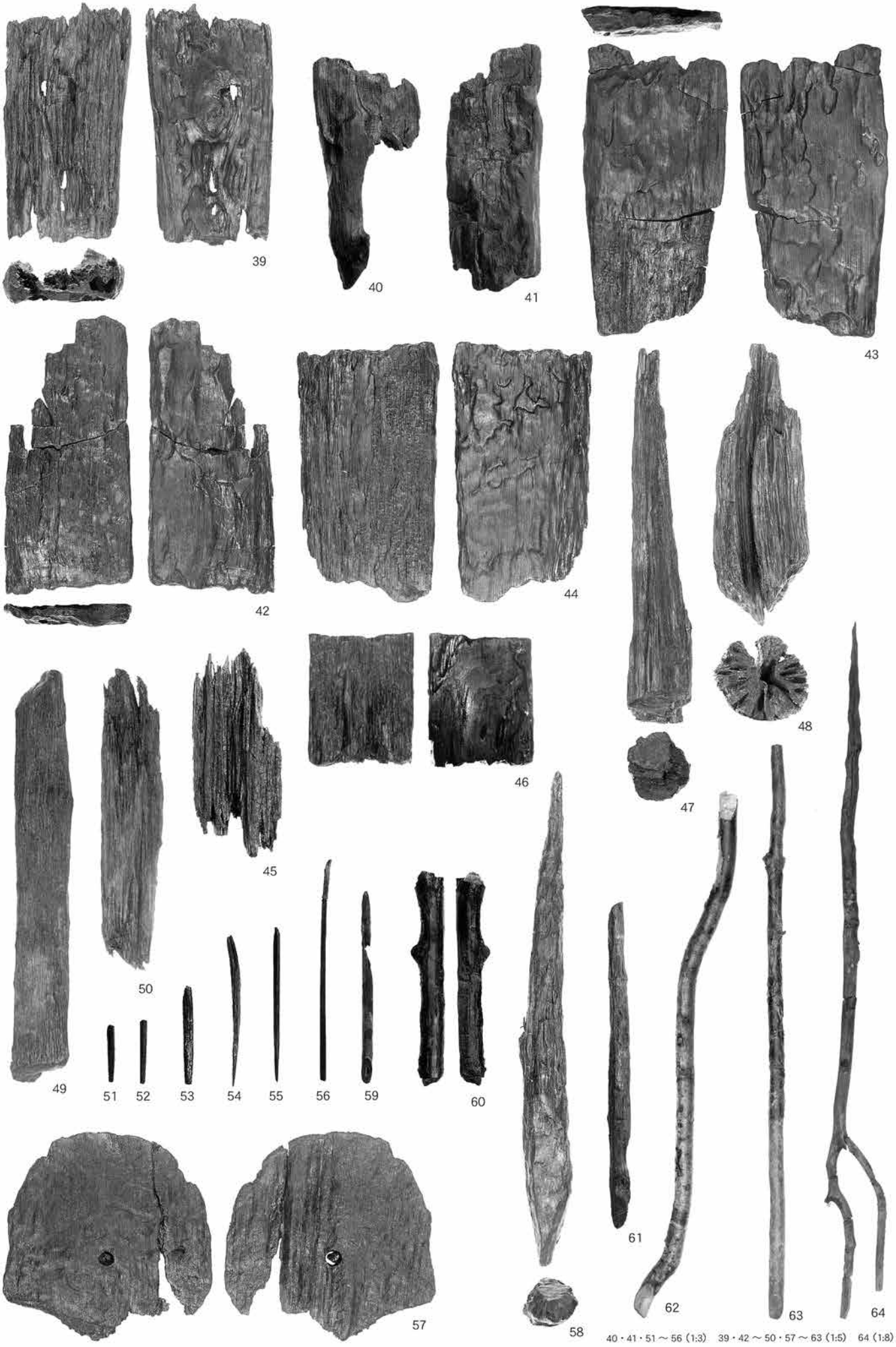
杭 1087 出土状況（南から）



P1157 セクション、杭 1158 出土状況（南から）



1～33 (1:3)　34～38 (1:5)

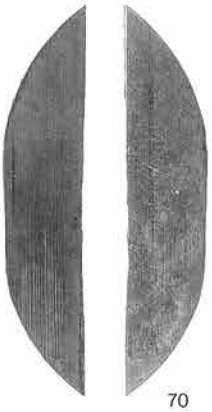


40・41・51～56（1:3）　39・42～50・57～63（1:5）　64（1:8）

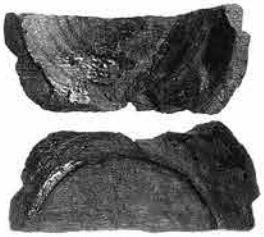
65

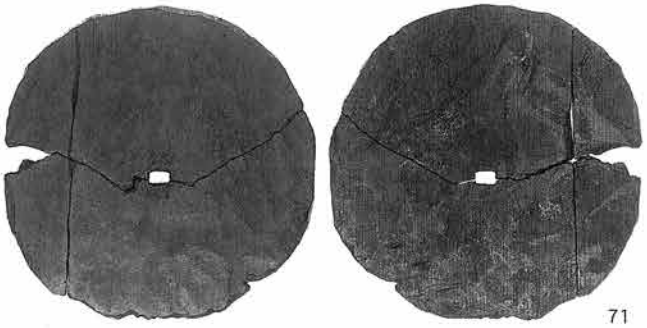
66

69


70

67


68


71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

65 ～ 68・75（1:3）　69 ～ 71・74・76 ～ 80（1:5）　72・73・81・82（1:8）

83

84

85

86

87

88

89

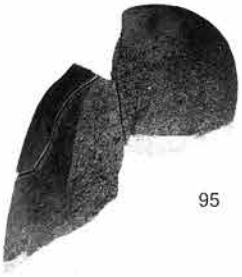
90

91

92

93

94

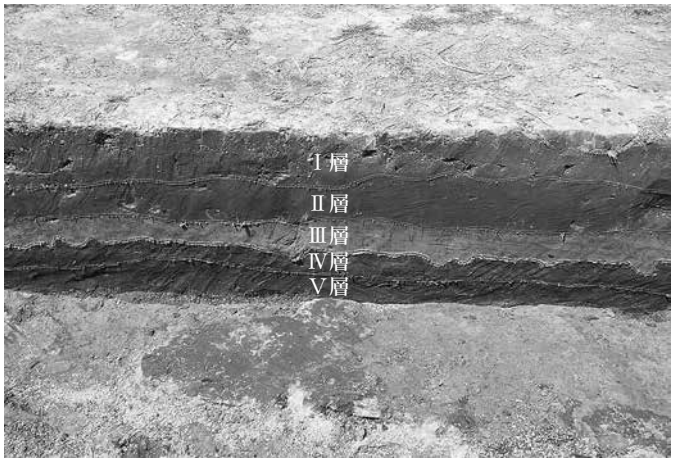

95

96

91・92（1:3）　84 ～ 90・93（1:5）　83・94 ～ 96（1:8）

C 区Ⅲ層面終了状況（北から）

D 区終了状況（東から）



西壁（5C グリッド）セクション（東から）

黒色土サンプル採取位置（2E グリッド）土層（西から）

杭 10 出土状況（南から）

杭 11 出土状況（南から）

杭 12 出土状況（南から）

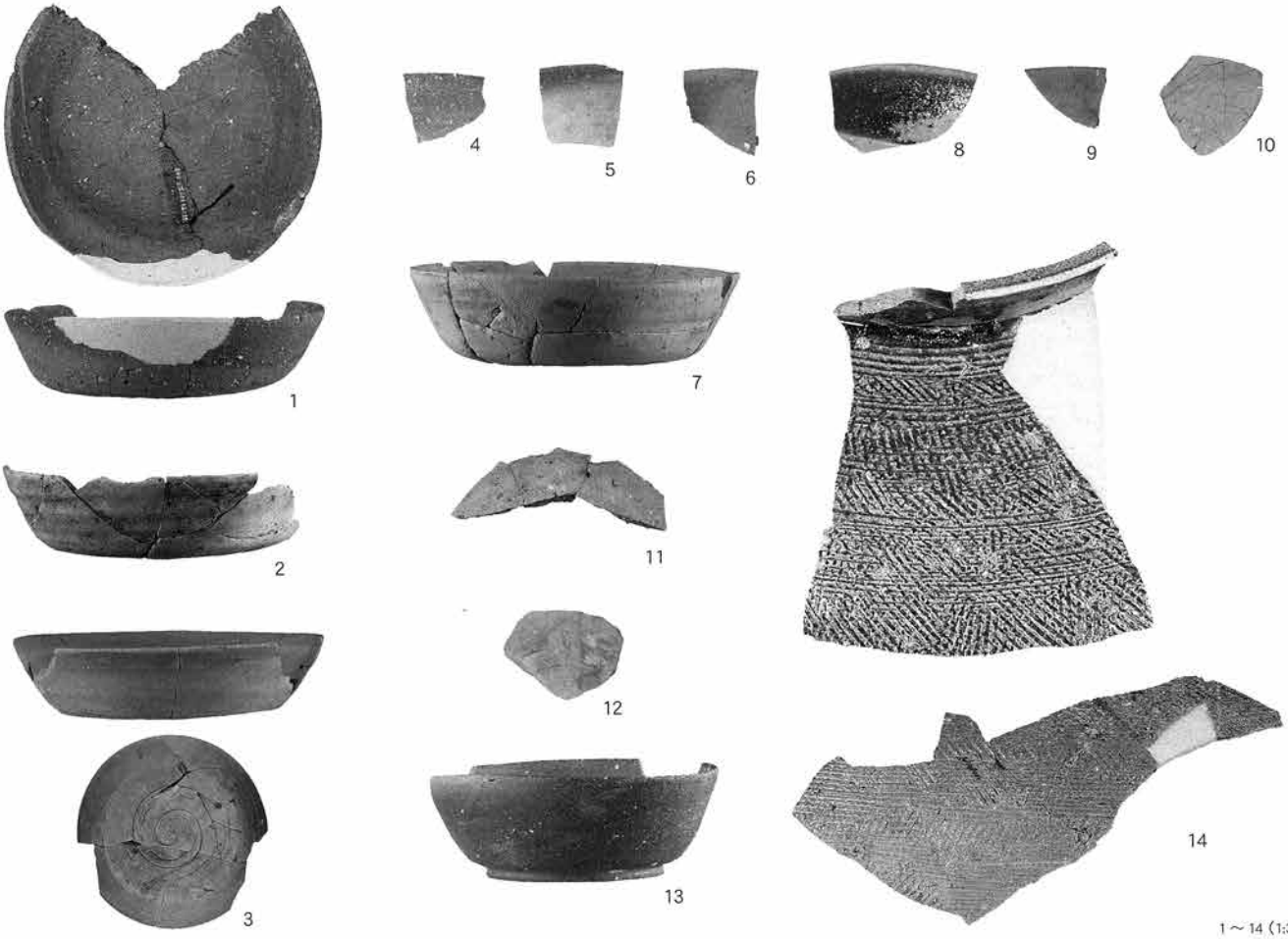
杭 13 出土状況（南から）

杭 14 出土状況（南から）

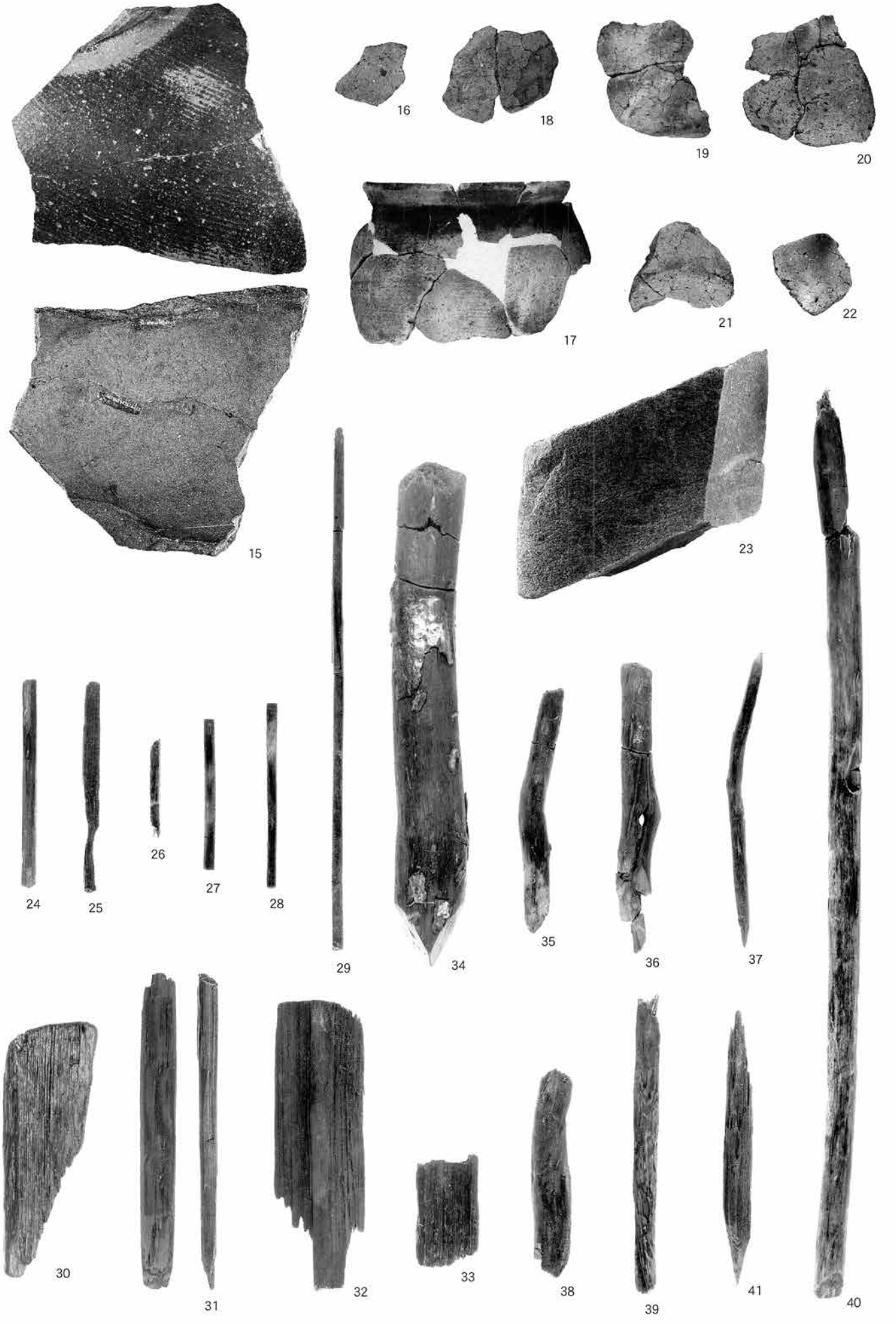
杭 15 出土状況（南から）

杭 16 出土状況（南から）

作業風景（西から）



1 ～ 14（1:3）



15 ～ 31 (1:3)　32 ～ 41 (1:5)

報告書抄録

ふりがな	やちいせき　はちたろういせき　たやみちいせきに　みやのこしいせきに
書名	谷地遺跡　八太郎遺跡　田屋道遺跡Ⅱ　宮の越遺跡Ⅱ
副書名	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書
巻次	ⅩⅩⅨ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第193集
編著者名	大島秀俊　藤田亮一　高階敏昭　北村　淳　伊比博和（株式会社シン技術コンサル文化財調査部） 酒井英男　菅頭明日香（富山大学理工学研究部）　秋山真好（株式会社 ノガミ）　高濱信行（新潟大学災害復興科学センター） 千葉博俊　伊藤良永　斉藤崇人　馬場健司　松元美由紀　高橋　敦　辻本裕也（パリノ・サーヴェイ株式会社） 鈴木俊成（財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団）
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社シン技術コンサル
所在地	〒956-0845　新潟県新潟市秋葉区金津93番地1　TEL0250（25）3981（財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団） 〒955-0845　新潟県三条市西本成寺1-35-4　TEL0256（36）5032（株式会社シン技術コンサル）
発行年月日	西暦2010（平成22）年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
やちいせき 谷地遺跡	にいがたけんむらかみし 新潟県村上市 てんじんおかあざやち 天神岡字谷地 ほか	152129	118	38度 14分 2秒	139度 30分 39秒	20070601～ 20071207（縄文） 20070824～ 20071107（中世）	2,670㎡（縄文） 3,107㎡（中世）	日本海沿岸東北自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
谷地遺跡	集落	縄文時代 （前期初頭～中葉）	屋外炉66基（性格不明遺構の炉3基を含む）、土坑117基、性格不明遺構25基（住居の可能性がある遺構3基を含む）、遺物集中8か所（性格不明遺構に属するもの3基を含む）、ピット1,241基（性格不明遺構に付属するピット137基を含む）	縄文土器（花積下層式～根小屋式）、石器（石鏃・石錐・石匙・筌状石器・両極石器・不定形石器・磨製石斧・玉類・磨石類・石錘・石皿類）	縄文面と中世面の調査を行う
		中世（15世紀）	掘立柱建物1棟、井戸4基、土坑23基、溝11条、ピット72基（掘立柱建物の柱穴以外のピットは65基）	珠洲焼、瓦質土器、青磁、白磁、金属製品（鉄鍋、鉄釘）、銭貨、石製品（硯、砥石）、木製品（鉤状木製品、下駄、梳櫛など）	

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
はちたろういせき 八太郎遺跡	にいがたけんむらかみし 新潟県村上市 かみすけぶちあざはちたろう 上助淵字八太郎 640ほか	152129	427	38度 12分 6秒	139度 28分 34秒	20070419～ 20070621	880㎡	日本海沿岸東北自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八太郎遺跡	水場遺構	古代～中世	水場遺構1基、ピット2基、打ち込み杭43本（水場遺構以外の杭は8本）	須恵器、肥前系磁器、土師質土器、珠洲焼、青磁、白磁、石製品（砥石、不定形石器、石錘）、銭貨、木製品（箸状木製品、人形、コモヅチなど）	

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
たやみちいせきに 田屋道遺跡Ⅱ	にいがたけんむらかみし 新潟県村上市 ここのかいちあざどうだ 九日市字堂田 1459ほか	152129	322	38度 10分 17秒	139度 27分 15秒	20070926～ 20071030（19年度） 20080417～ 20081030（20年度）	1,066㎡ （19年度） 1,772㎡ （20年度）	日本海沿岸東北自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田屋道遺跡Ⅱ	集落	古代～中世	掘立柱建物6棟（平成18年度調査延長分を含む）、ピット列2条、井戸3基、土坑10基、溝33条（平成18年度調査延長分23条を含む）、性格不明遺構5基（平成18年度調査延長分3基を含む）、ピット232基（掘立柱建物・ピット列分56基を含む）、杭14本	須恵器、土師器、瓷器系陶器、青磁、陶器、木製品（箸・棒状木製品、下駄など）	平成19年度及び20年度に調査を行う

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
みやのこしいせきに 宮の越遺跡Ⅱ	にいがたけんむらかみし 新潟県村上市 しんいいだあざみやのこし 新飯田字宮ノ越 14ほか	152129	218	38度 10分 48秒	139度 27分 31秒	20070402～ 20070511	243㎡	日本海沿岸東北自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮の越遺跡Ⅱ	集落	古代	打ち込み杭7本	須恵器、土師器	

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第193集
日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸⅨ
谷地遺跡 八太郎遺跡 田屋道遺跡Ⅱ 宮の越遺跡Ⅱ

平成22年3月30日印刷
平成22年3月31日発行

発　　行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市中央区新光町4番地1
電話　025(285)5511
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新潟市秋葉区金津93番地1
電話　0250(25)3981
FAX　0250(25)3986

印刷・製本　細谷印刷有限会社
〒372-0031
群馬県伊勢崎市今泉町2丁目939番地5
電話　0270(25)0193

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第193集『谷地遺跡 八太郎遺跡 田屋道遺跡Ⅱ 宮の越遺跡Ⅱ』正誤表

頁	位置	誤	正
抄録	谷地遺跡　北緯	３８度１４分０２秒	３８度１４分１４秒
抄録	谷地遺跡　東経	１３９度３０分３９秒	１３９度３０分２９秒
抄録	八太郎遺跡　北緯	３８度１２分０６秒	３８度１２分２０秒
抄録	八太郎遺跡　東経	１３９度２８分３４秒	１３９度２８分１９秒
抄録	田屋道遺跡　北緯	３８度１０分１７秒	３８度１０分２７秒
抄録	田屋道遺跡　東経	１３９度２７分１５秒	１３９度２７分０３秒
抄録	宮の越遺跡　北緯	３８度１０分４８秒	３８度１０分５８秒
抄録	宮の越遺跡　東経	１３９度２７分２０秒	１３９度２７分３１秒